

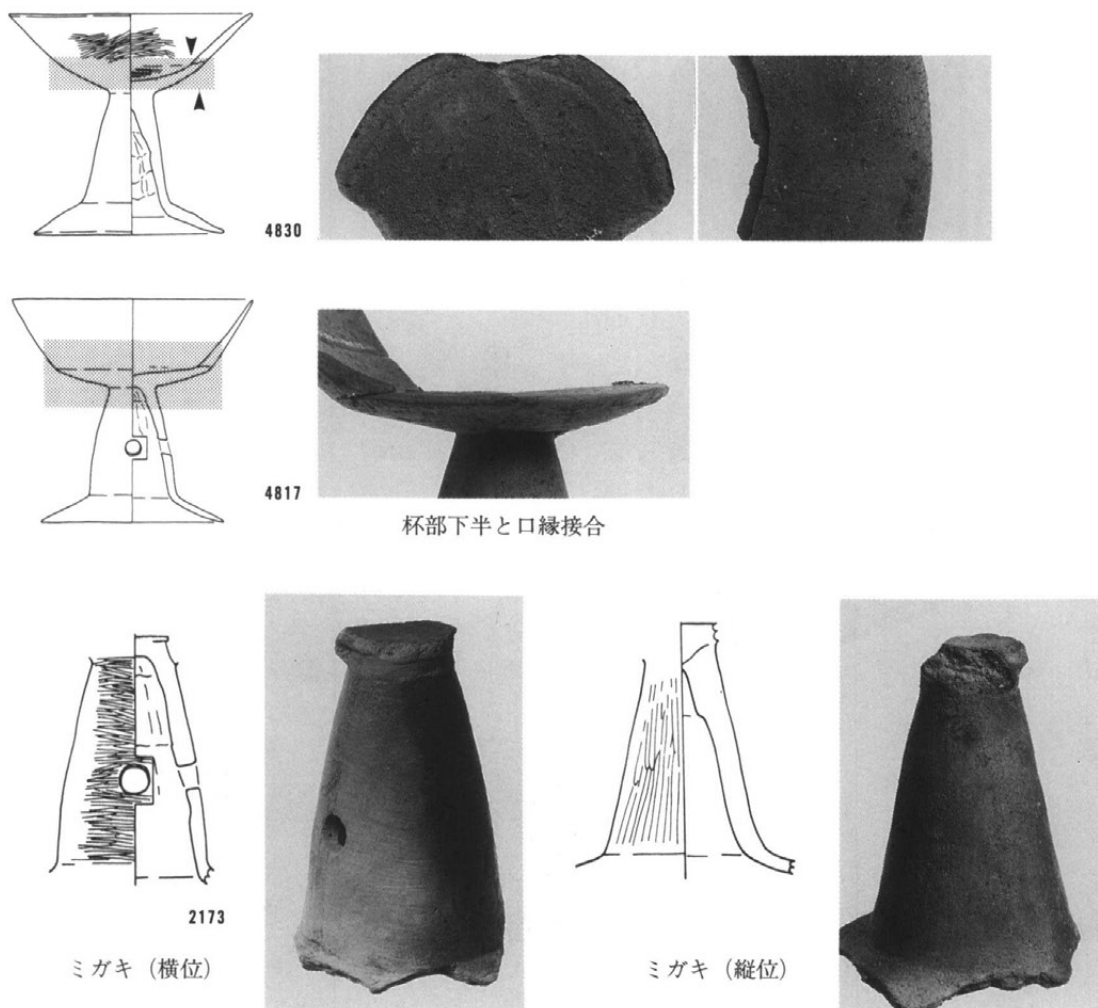
杯部は下半部に口縁部をのせて接合され、そのために屈曲部が作られている。この接合技法が一般的な技法であるが、口縁部を側面に付加して接合する高杯も僅かにある(1533・4833)。これらの技法は壺A類(二重口縁壺)の口縁接合技法と共通する。

器面への最終整形は、遺存状況が必ずしも良好でないため不明な土器が多数あるが、ミガキが基本となる。杯部へのミガキは横・縦・斜め方向もしくは不統一方向であり、脚部は横位もしくは縦位の2者に区分される。脚部横位のミガキは縦位のミガキに比べ緻密である。この横位のミガキを施した高杯は全体の約4.5%と極めて少なく色調が赤褐色となり、高杯のなかでも精製品として認識される。ただし器種においては杯部A・B・D類、脚部ア・イ・ウ類にみられ形態的な制約は窺われず、また出土遺構においてもSK1046に4点と多いほかは縦位ミガキと共伴しており偏在している状況はない。

C 脚部穿孔(第179図)

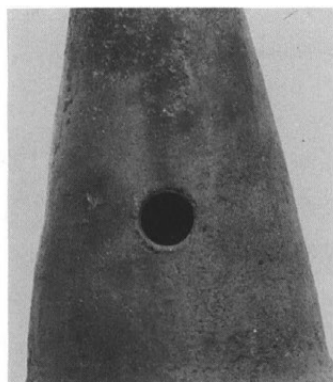
高杯脚部への穿孔は26点出土した。孔径は0.4~1.2cmの円形で貫通する孔と未貫通孔があり、単孔と複数孔がある。内訳は1孔で貫通する穿孔が17点で孔径1.0cm前後が15点(0122・2172・2173・2610・2829・3144・3460・3480・3481・4809・4817・5085・5090・6010・6012)孔径0.4cm前後が2点(3459・0326)、複数孔では4孔が2点(3143・6009)、5孔が1点(3145)、2孔以上で欠損により不明が1点(3479)の合計4点、未貫通孔が5点(1431・1746・3549・5142・5143)である。穿孔高杯の器種は杯部・脚部とも多様である。

穿孔が焼成以前に行われた高杯は2点(5085・2173)で、未貫通穿孔も含め大半の穿孔は焼成後に行わ

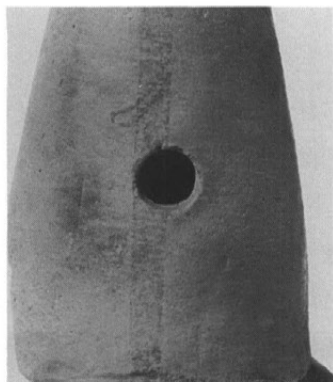


第178図 高杯成形・整形技法

焼成前貫通穿孔

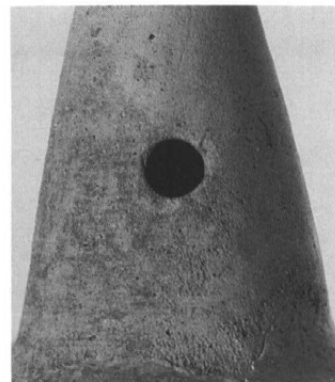


5085



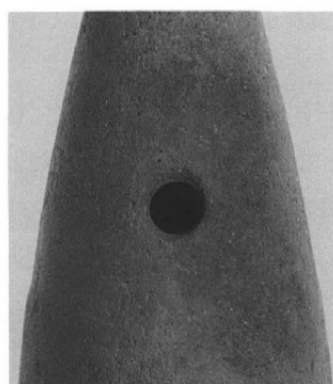
2173

焼成後貫通穿孔



0122

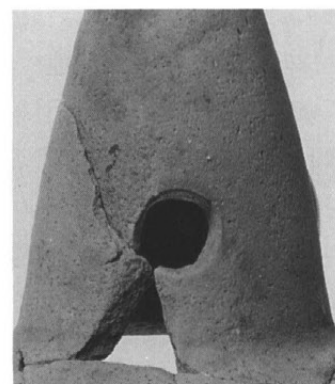
焼成後貫通穿孔



4809



3479



3460



3481

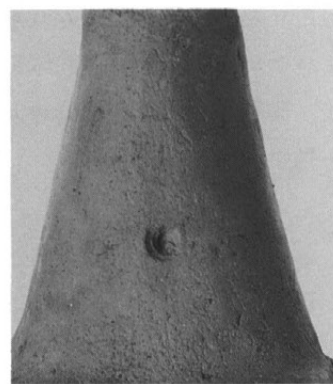


3145

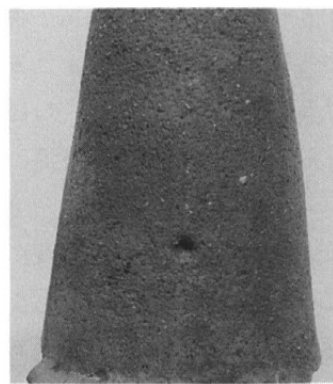


3479

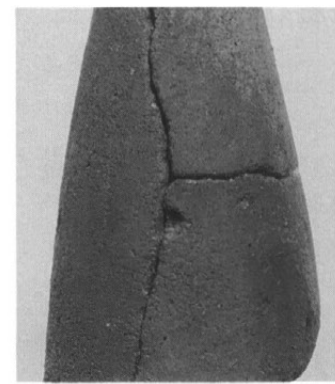
未貫通穿孔（焼成後）



1428



5143



5142

第179図 高杯脚部への穿孔

れている。穿孔は装飾とされるが、出土遺構に偏在は認められず、特定の器種への装飾でないため焼成後に穿孔した意味は不明である。

エ 小型丸底土器（以下小型丸底とする）（180図）

小型丸底は口径が器の最大径となり、口径が器高を上回る長さ（口径>器高）で、球形もしくは扁平球形の小型胴部から屈曲して長い口縁部が内傾して開く形態の土器を指す。口径が器高を上回る器類には鉢形土器と中・小型甕D・E類があるが、器高と口径が約10cm以下の容量、口縁長が器高の1/3（口縁長×3>器高）以上の比率を占める口縁の長い形態を本器類とした。小型丸底は本来精製容器として位置付けられるものであるが、本遺跡出土資料には横方向の緻密なミガキを施した精製品と内外面ハケ整形した個体や底部付近にケズリを顕著に残す粗製品が約5割ある（ただし器壁表面が剥落し整形の詳細が不明となる個体が大半を占める）。また左右非対称の歪んだ器形や口縁部と胴部の屈曲部が弱く鉢形に近似する形態となる粗雑品も定量あり、整形ばかりでなく器形においても粗製品がある。本器類は小型で比較的欠損しにくい器形・成形であることから、遺存状況がよくS D 1016内出土土器では、壺・高杯とほぼ同量出土した（全体では12%を占める）。また他の器類に比べ完存率が高かった。

器種分類は口縁長と胴部長（胴部器高）との比率、胴部最大径と器高の比率を観点とし、この分類に胴部微細形態を観点として大きく7種類に区分した。また胴部の屈曲が不明瞭となる器形や歪みが大きい器形は粗製形態として分類した。口縁部は内湾気味に開く形態が基本となり、端部は尖鋭もしくは尖鋭気味に丸くなる形態である。底部形態は名称化されている「丸底」が基本であり、胴部形態によって楕円に近い扁平平底、凹み底、水平平底などの「平底」があるが、「丸底」化の多様な形態と理解し分類し区分しなかった。

容量と器種との関係では器高8cm前後を境とし8cm以上の中型形態（M）と8cm以下の小型形態とに微妙な形態差がある。中型形態は鉢B類と壺D類と近似する形態もあり本器類の分類ではこの形態をG類として細分した。

A 器種分類（第180図）

小型丸底A類（長口縁壺形態）

口縁長が胴部長より長い（口縁長>胴部長）壺（埴）形態。胴径が小さい小型の胴部で、口縁長が胴長の2倍に及ぶ形態もあり本器種は口縁部が突出して大きい縦長の壺形態である。屈曲部から底部に達する形態によって細分される。

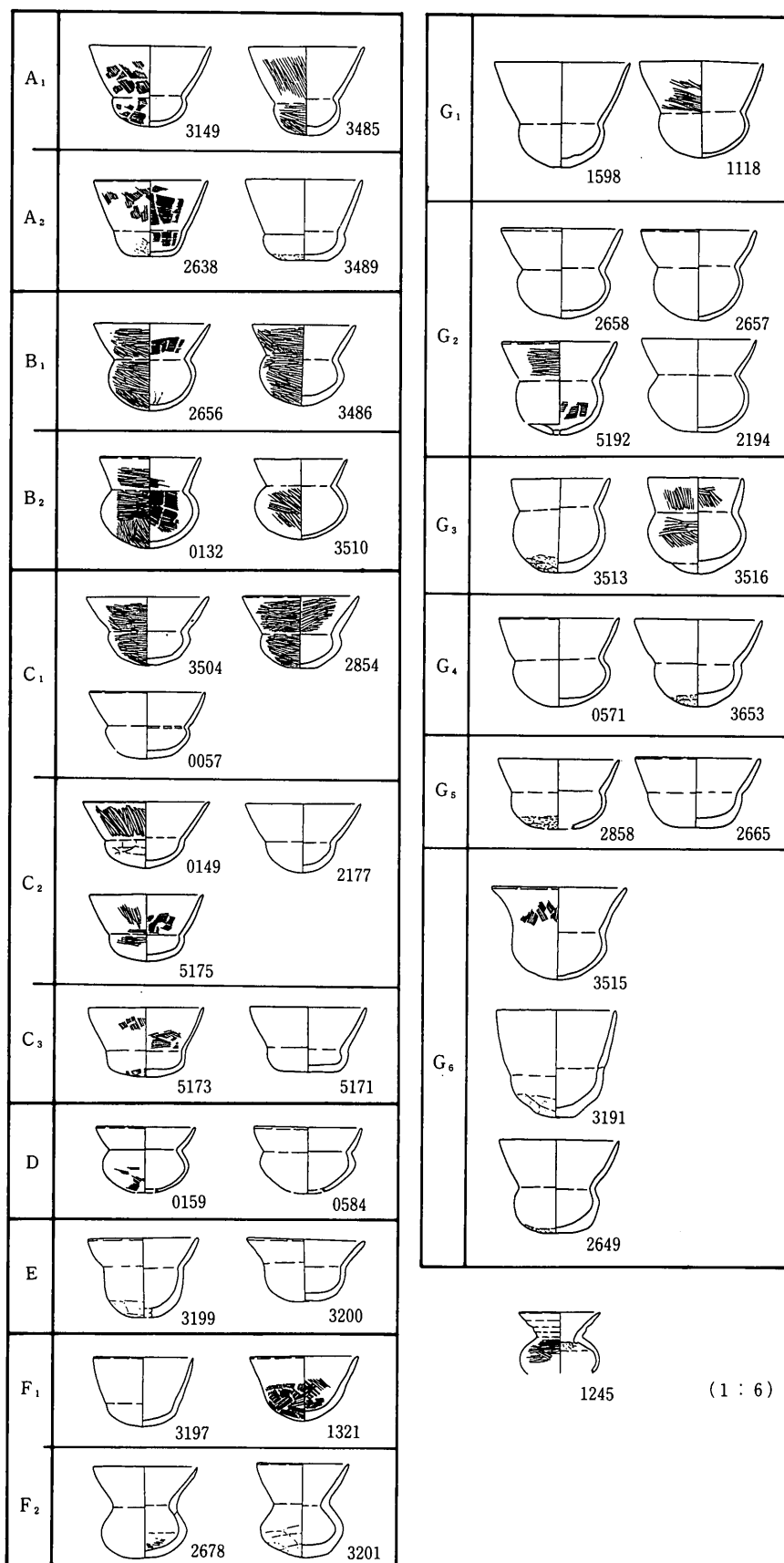
A 1 類 胴部と口縁部の屈曲が強く、胴部上半が外側に膨らみ湾曲して底部に達する形態。胴部形状は底部が湾曲する球形もしくは楕円形となる。器壁は全体的に薄い個体が主体であるが、底部を肥厚させた個体も定量ある。整形は斜位方向のミガキとハケで底部にケズリが残るものがある。

A 2 類 底面が広く屈曲部に緩く湾曲する形態。胴部形状は扁平の楕円形となり隅丸の長方形に近似する。外面整形はミガキとハケがあり底部にはケズリが残る。内面はハケが底面まである個体もあり、内面湾曲は小さい。器壁は厚薄の両者がある。口径10cm前後、器高8cm前後の比較的大型となる形態が定量あり、これらには底部が肥厚し外面にケズリを残す個体がある。

小型丸底B類（壺形態）

口縁長が胴部長とほぼ同一もしくは僅かに短い（口縁長≤胴部長）壺形態。胴径と器高が近似した値となる。器高の中位に屈曲部があり口縁長と胴部長がほぼ1：1となる形態（B 1 類）とやや口縁長が短形の形態となる。底部は尖り気味に丸底となる形態と凹み底が少量ある。緻密な横ミガキが最も多く残された器種であり、精製品が多い器種である。

B 1 類 器高の中位で口縁部と胴部が区分される均整のとれた形態である。口縁はやや内湾する形態と



第180図 小型丸底土器器種分類

外傾する形態がある。器壁が薄くミガキが施された精製品が主体であるが、底部を肥厚させた形態やケズリを残す個体も少量ある。

- B 2 類 口径と胴部最大径がほぼ同一となる（口径 \approx 胴部最大径）形態。口縁長は器高の1/3程度を占める。口縁部は直立する形態と外傾する形態があり、胴部はほぼ球形となる。整形はミガキが主体となる個体とケズリを主体とする個体がある。

小型丸底C類（鉢形態）

胴径が器高を上回る長さとなる（胴部最大径 $>$ 器高）鉢形態。口縁長が胴部長と同一もしくはやや長く（口縁長 \geq 胴部長）、小型丸底A・B類の口縁が大きく開く器高の低い形態と捉えられる。胴部形態は胴部長の長短によって微妙な違いがあるが3種類に細分される。

- C 1 類 胴部と口縁部の屈曲が強く、胴部上半が外側に膨らみ湾曲して底部に達する形態。胴部長が屈曲部径のほぼ1/2（胴部長 $\times 2 \approx$ 屈曲部径）となり小型の球形となる。横ミガキを施す個体が複数あり、器壁の薄い精製品が主体である。
- C 2 類 胴部と口縁部の屈曲が強いが、胴部上半が膨らまず湾曲して底部に達する形態。屈曲部からの内面形態は半球形もしくは楕円形となる。器壁の薄い個体が主体となる。
- C 3 類 底面が広く屈曲部に緩く湾曲する形態。胴部形状は胴部長が短く屈曲部径が比較的大きい扁平の楕円形となる。器壁は薄いハケ整形となるか器壁が厚くケズリを残す粗製品である。

小型丸底D類（鉢形態）

胴径が器高を上回る長さとなる（胴部最大径 $>$ 器高）鉢形態。口縁長が胴長に比べ短い形態で、器高の1/3程度の長さとなる形態を含む。胴部形状は胴部中位もしくは上位に最大径がある球形、楕円形となる。整形は横ミガキが施される個体が僅かにあるが、ハケ、ケズリが基本となる。

小型丸底E類（鉢形態）

器の最大径となる口縁が短く開き、屈曲部から胴部が膨らまずに底部に達する形態。器壁は厚くケズリが残る粗製形。口縁部形態は内湾、外傾があり、全体形状は縦長と横長がある。

小型丸底F類（粗製形態）

器形に著しい歪みがある個体や器壁の厚さが不統一となる個体など、成形上粗製となる形態を一括した

- F 1 類 口縁部と胴部の屈曲が不明瞭で、縦長の鉢形態になる。
- F 2 類 口縁部と胴部の屈曲は明瞭であり、口縁長が長く開く形態である。胴部形態は下脹れの算盤玉に似た形状となり、器壁の厚薄が一定しない。整形はケズリとナデでミガキを施さない。

小型丸底G類（中型形態）

器高がほぼ8 cm以上で、小型丸底とした器類では大型品である。本器種の容量を境とし鉢、壺に分離される。出土割合は多くはないが口縁部形態では上記A～Fの器種分類に相当する形態があり、G 1 類からG 3 類は胴部径より器高が長い壺形態、G 4・G 5 類は器高より胴部径が長い鉢形態、G 6 類は粗製形態の6種類に区分される。胴部形態は一様に球形もしくは楕円形であり、整形もミガキ、ハケと底部へのケズリが見られる。

- G 1 類 A 1 類に準じる形態で口縁長の長い壺形態。
- G 2 類 B 1 類に準じる形態で口縁長と胴部長の比がほぼ1 : 1の壺形態。
- G 3 類 B 2 類に準じる形態で口縁長が短くやや直立気味に内湾する口縁形態となる。
- G 4 類 C 1 類に準じる形態。
- G 5 類 C 2 ないしはC 3 類に準じる形態。
- G 6 類 E・F 類の粗製大型形態。

その他の器種

1245は底部を欠損するため全形は不明であるが、口径と胴部径がほぼ同一、口縁長が胴部長よりやや短い小型丸底B類に近い形態となる。胴部は球形で口縁部接合部内面に突出部が残り、口縁に3段の稜線がある。本遺跡出土の小型丸底の胴部成形は鉢器形からナデやハケによって外に押し広げる技法もしくは粘土をくり抜く技法によって半球形を形作る個体が主体を占める。これに対し1245は口縁部接合が明瞭に確認され小型壺と同一の技法となる。

オ 器台形土器（以下小型器台・器台と呼称する）

本址出土の器台は器高12cm以下の小型器台に属し、円錐形の脚部に逆円錐形もしくは湾曲する浅い皿形の受部が接合する。成形の違いから、薄い器壁に緻密なミガキを顕著に残す精製小型器台と器壁が厚くケズリと指頭痕を顕著に残す粗製器台に区分され、両者には明らかな用途差がある。また全ての器種において受部と脚部の接合が中空となる（貫通する）形態（I類）と中実となる（貫通孔のない）形態（II類）がある。器台は小型丸底の出土量に比べて少なく、完存率も低かった。器種分類は受部・脚部の形態、受部長と器高の比率を観点として7種類に細分したが、特殊な形態となる器台が6点ある。

A 器種分類（第181図）

器台A類（受部椀状の精製小型器台）

口径の小さい椀状の受部で、受部長に比べ脚部長が長く（受部長 \times 2<脚部長）小型器台としては高脚となる形態。口縁端部は尖鋭気味となるものがあるが丸く仕上げられている。脚部は直線形状もしくは外反して開き内湾形態の脚部はない。整形は縦位・斜位のミガキが基本であるが1217にのみ緻密な横ミガキが施されている。口縁部形態によって椀状のまま外傾するA1類と端部を強く曲げて外反させるA2類に分類される。脚部に穿孔を有するものもある（2868・5301）。中実と中空の2者がある。

器台B類（精製小型器台）

口径の小さい肥厚した受部で、受部長に比べ脚部長が長い形態。口縁は内湾気味に端部が撮み上げられ尖鋭形状となる。脚部は直線形状で開く形態が基本であるが、1149のみ内湾脚である。整形は縦位・斜位のミガキが基本である。脚部に穿孔を有するものもある（1299）。中実と中空の2者がある。直線形状で開く肥厚した中実脚は本器種に限定される。また器壁は比較的厚い。

器台C類（精製小型器台）

口径が器高より長く（口縁径>器高）、受部が浅い鉢形となる形態。口縁部は内湾気味に外傾する形態（C1類）と外反する形態（C2類）がある。本器種は脚部側面に受部を接合する技法（後述する①技法）に限定される。脚部は接合部がやや肥厚し直線形状もしくは外反して開く形態であり内湾形態はない。

器台D類（精製「X」字形器台）

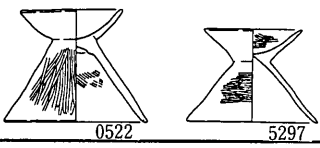

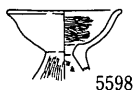
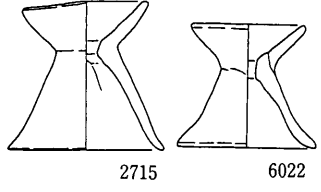
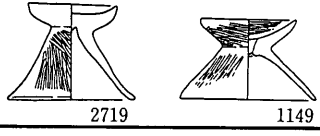
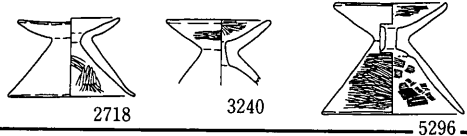
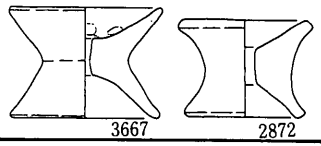



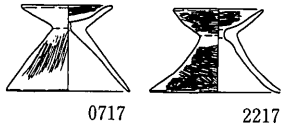
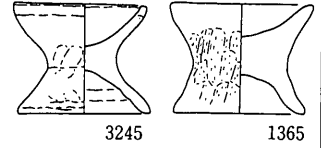

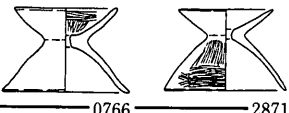
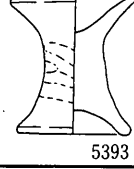
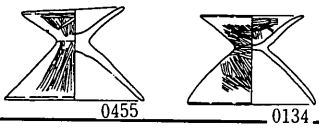
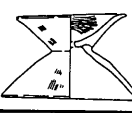
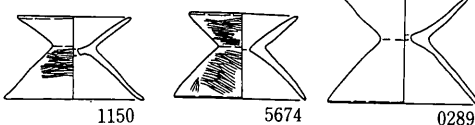
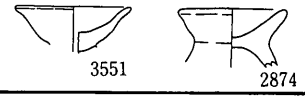
口径、受部長とも長く（口縁径>器高、受部長 \times 2>脚部長）、口径が脚端部径、受部長が脚部長と近似した値となる形態もある。扁平に広がる円錐形の脚部に大きく開く逆円錐形の受部が接合する形態で所謂「X」字形器台である。口縁端部はやや尖り気味に丸く、脚部は直線形状で開く形態と内湾して脚端部が尖る形態があるが、接合部内側を内湾させる形態が基本である。整形は横位・縦位のミガキがあり小型器台のなかでは際立って精製された器種で、横ミガキを施した内湾脚は本器種に限定される。中実と中空の2者があるが中空器台が圧倒的に多い。受部の形態によって3種類に細分される。

D1類 受部が内湾する形態。

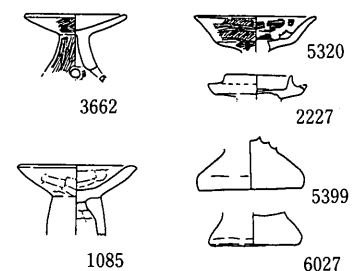
D2類 受部が接合部からやや内湾し口縁端部が強く外反する形態。

D3類 口径が脚部径に近似し受部が直線形状で開く形態。

器台E類（粗製器台）

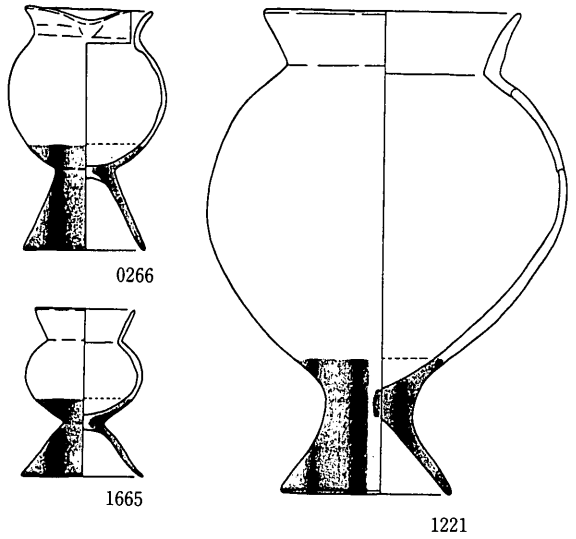
	I (中実)	II (中空)	
A ₁			E
A ₂			
B			
C ₁			F
C ₂			
D ₁			
D ₂			G
D ₃			

その他の器種



(1 : 6)

第181図 器台形土器器種分類



湾形の受部に高い脚部が接合する縦長の形態。器台A類と同一形態で、A類の粗製品と認識される。中空器台のみある。

器台F類（粗製器台）

口径と脚端部径がほぼ同一であり、口径が器高より長い横に広い形態が基本であるが縦長形態が1点（5393ある。器台D類と同一形態で、「X」字形小型器台の粗製とされる。粗製器台の大半は本器種になる。整形は内外面にケズリと指頭痕、輪積み痕を顕著に残す。D類と同様に口縁部形態に内湾、外反、外傾の3種類があり、端部には平坦に面取りされたものがある。また脚部形態も内湾形態がある。5393は縦長の形態であるが本器種に含めた。中実と中空の2者がある。

器台G類（粗製器台）

受部のみの資料であるため全容は不明であるが、受部が浅い皿形の形態。受部は器台B・C類と同一形態で、この2器種の粗製品と認識される。

その他の器種

小型器台には上記器種分類に該当しない器台が精製小型器台3点と粗製器台が3点ある。いずれも脚部もしくは受部を欠損するため全容は不明である。3662は受部は浅い皿形の形態となり口縁端部が平坦に面取りされている。脚部には穿孔があり穿孔部を境に屈曲して開く形態が想定される。5320は受部が屈曲し稜を残す有稜受部形態となる。受部内面には直立すると思われる口縁が付加される。2227は口縁端部が欠損しているため形態は不明であるが、口縁部が扁平な皿形態で外面屈曲し、内面に口縁が二重に付加された形態となり、5320に極めて近似した形態となることが予想される。1085・5399・6027は粗製の器台で1085は湾形の受部に直立する脚部が接合する形態、5399・6027は中空部のない粘土円盤の脚部である。

B 受部と脚部の接合技法（第182図）

器台の成形は高杯における杯部と脚部の接合同様に受部と脚部の2段成形による。受部と脚部の接合技法も高杯同様に分類され付加接合と充填接合の2者があるが、大半は付加接合である。付加接合には①筒状の脚部に側面から受部を接合する技法と②椀状の受部に底面から脚部を接合する技法の2種類がある。①技法は器台A・C類と粗製器台E類にのみあり、ほかの器種は全て②技法であった。中空器台には中空部が比較的長い貫通孔となる形態と「く」の字状の屈曲する形態がある。この違いは②技法の接合部内面の成形による違いであり、後者は受部突出部を脚部内面に折り返している。

充填接合は中実器台のみに用いられる技法であるが、器台B類にのみあり、2719や1149は受部内面から充填した粘土が脚部に突出している。

C 用途

前項の壺・甕の器種分類ですでに触れたが、本址からは台付壺と台付甕が少量出土している。これらの器種の脚部接合部は厚く、脚台部を除去してもそれぞれの器種として存在する。脚台部を器台に想定すると壺形態の0266には器台A類、1665には器台D類、甕形態の1221・2823には器台F類、3074には器台E類となる。つまり精製小型器台には小型壺、粗製器台には甕が結合し使用されたことになる。また粗製器台には燃焼・炭化痕が顕著に残る資料があり煮沸用具にかかわる用途とされる。

カ 鉢形土器（以下鉢と呼称する）

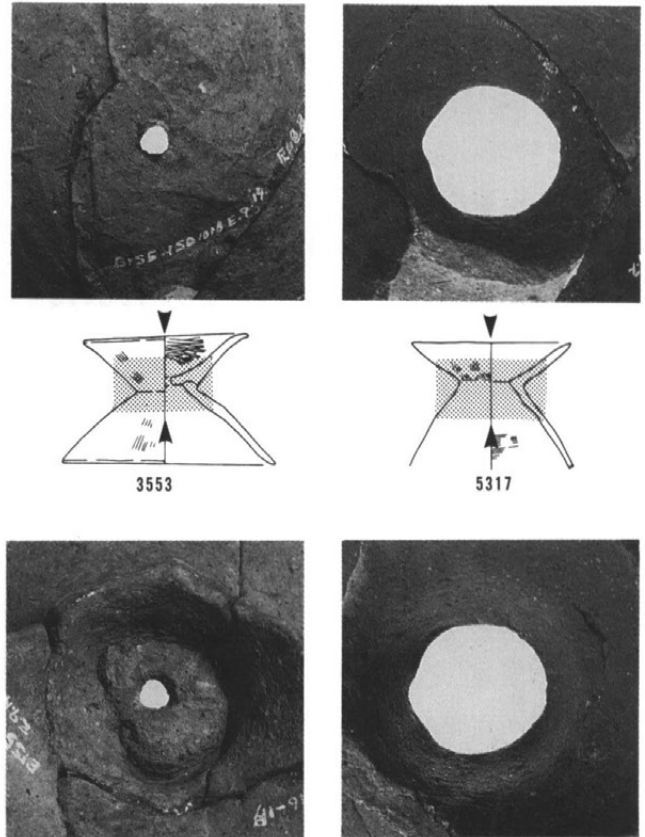
器の最大径が口縁部にあり口径が器高より長く、上部に大きく開く形態。口縁部が屈曲外反する小型丸底の大型形態も含まれるが、口径10cm以上で器高を大きく上回る長さ（器高×2<器高）を本器類とした。器種は口縁部と底部の形態を観点として分類し、口縁部が屈曲する形態、底部から外傾・内湾してそのまま上部に開く形態、底部に穿孔をもつ形態の大きく3種類に区分された。しかしこの3器種は形態的特長から異なる用途が想定されるもので同一器類として扱うことに問題も含まれる。3器種を基本として口径

と口縁形態から細分した。大型鉢は口縁部が屈曲する形態のみであったため特殊な器種として区分した。鉢とした器類のうち大型屈曲鉢(A類)と有孔鉢(G類)を除いた小型・中型の鉢の出土量は極端に少なく、粗製もしくは本遺跡の主体となる時期を前後する時期の器種とされるものである。

A 器種分類

鉢A類 (大型屈曲鉢) (第183図)

口径16cm以上の大型鉢(L)と20cm以上の超大型鉢(LL)がある。これらは全て胴屈曲部から口縁部が開く小型丸底の超大型形態である。最大口径の鉢は5936で34cm、最大器高の鉢は5402で欠損するものの20cmを上回る。器高と口径の比率、口縁の屈曲外反度と胴部形態によって5種類に細分した。底部形態は平底が主体であるが扁平な丸底もある。整形は横位・斜位のミガキを内外面に施したもの多いが、ハケ、ケズリもある。



第182図 器台、受部と脚部の接合

A 1類 胴部と口縁部の屈曲が明瞭で、口縁

が長く開く形態。やや縦長の深鉢形態(器高>口径×1/2)となる。口縁部は外傾・外反・内湾形態があり、口縁端部は尖鋭気味に丸く仕上げられた形態のほか内面・上面に面取りをする形態がある。胴部の微細形態では胴上部が強く張りだす形態と張りだしが弱く口縁屈曲部から湾曲して底部に達する形態がある。底部まで残存する資料は7点でこのうち1点(5406)のみ丸底であった。

A 2類 胴部と口縁部の屈曲が不明瞭で、上部へ開く形状のまま口縁が弱く屈曲する形態。縦長の深鉢形態(器高>口径×1/2)となる。

A 3類 胴部と口縁部の屈曲が明瞭で、口縁が短く外反・外傾する形態。口縁部はやや肥厚され端部は尖鋭気味に丸い。完存する資料がないため器形の詳細は不明であるが縦長の深鉢形態が想定される。整形はミガキ、ハケとともにケズリが施されている。

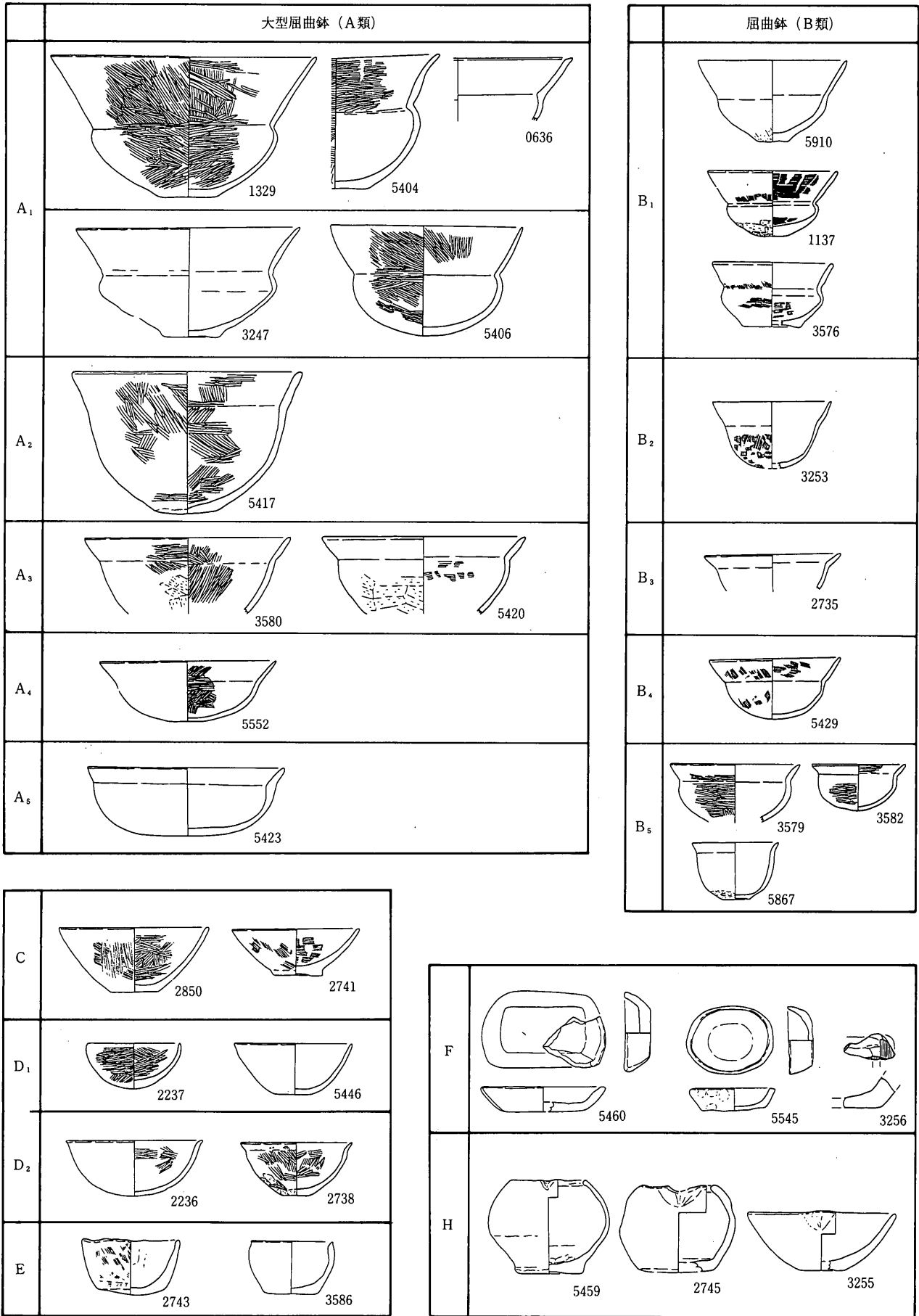
A 4類 胴部と口縁部の屈曲が明瞭で、扁平に湾曲した胴部に口縁が開く形態。口径に比べて器高が低い浅鉢形態となる。本器種とした個体は僅かに4点で、完存する個体は5552の1点である。このため不明な点もあるが、緻密なミガキを施し、器壁の薄い精製品と認識される。

A 5類 胴部と口縁部の屈曲が明瞭で、椀形の胴部に肥厚した口縁が短く開く形態。浅鉢形態である。5423 1点の出土であり、本遺跡の主体となる時期から後続する形態である。

鉢B類 (屈曲鉢)

口径12cm前後で、鉢A類と小型丸底の中間の容量となる。細分は鉢A類の中型形態として、鉢A類に準じる分類となる。本器種とした鉢は28点で、口径の区分をしなければ小型丸底に含まれる器種もある。

B 1類 屈曲が明瞭で、口縁が長く外傾して開く形態。やや縦長の深鉢形態となり、鉢A 1類と同一形態となる。底部形態は平底となる。整形はハケを主体としている。



(1:6)

第183図 鉢形土器器種分類

- B 2 類 屈曲が不明瞭で、口縁が外傾して開く形態。縦長の深鉢形態となり、鉢A 2 類と同一形態となる。底部形態は丸底で、整形はハケを主体としている。
- B 3 類 屈曲が明瞭で、口縁が短く水平気味に開く形態。A 3 類と近似した形態となる。
- B 4 類 屈曲が明瞭で、扁平に湾曲した胴部に口縁が長く開く形態。A 4 類と近似した形態となるが、口縁が内湾し、平底となる形態がある。
- B 5 類 胴部上半が膨らみ口縁部で屈曲し外反もしくは直立する形態。口縁長の短い扁平な丸底形態である。整形はミガキが基本となり、底部付近にケズリを残すものがある。本器種と甕C 1 類Mとは微妙な分類となる。

鉢C類（平底鉢）

平底形態で上部へ内湾気味に開く浅鉢形態。底部は輪台と粘土板から成形する凹み底と水平底の2者がある。整形はハケとミガキでありケズリ痕を残すものはない。本器種は10点に満たない出土であり、形態と整形は、本遺跡の主体となる時期以前の鉢に近似する。

鉢D類（碗形鉢）

半球形の湾曲する形態。「碗坏」と呼称される坏と同形態である。扁平な丸底が基本となるが小径となる平底もある。口縁端部は尖鋭もしくは尖鋭気味に丸くなる形態（D 1 類）とナデにより強く外反する形態（D 2 類）がある。D 1 類が器壁が厚く、D 2 類は器壁が薄いものが多い。整形はミガキ、ハケがあり底部付近にはケズリが残る個体がある。D 2 類は本遺跡の主体となる時期から後続する形態で、S Q 2016とS D 1016の一部からのみの出土である。

鉢E類（粗製鉢）

口径が底径よりやや長い程度で、広い底部から弱く外傾して上部へ開く形態。器高6 cm以下、口径10 cm以下の小型品で、ハケ、ケズリを残す粗製品であり、底部付近に残されたケズリは小型丸底と共通する技法である。口縁端部は尖鋭形態となり、ナデによって強く外反する形態もある。本器種とされる鉢は僅かに6点（2743・3250・3585・3586・5867・5879）である。

鉢F類（扁平粗製鉢）

平面形が長楕円、隅丸長方形となり、器高が5 cm程度の扁平な形態である。3526・5460・5545の僅か3点の出土であり、粗製である。本器種は木製容器（槽・盤類）の模造品とされ、土器の器形そのものに系譜がない。

鉢G類（有孔鉢）（第184・186図）

底部に1カ所穿孔がある形態。小径となる底部から上部へ大きく開く浅い形態が基本となる。口縁形態によって3種類に細分され、3器種それぞれに横に広い浅鉢形態（器高<口径×1/2 I類）とやや縦に長い深鉢形態（器高>口径×1/2 II類）がある。底部形態は平底と丸底の2者がある。整形はミガキを主体とするものとハケを主体とするものがあり内・外面とも同一の整形である。

- G 1 類 口縁が単純口縁となる形態。肥厚した底部から内湾気味に口縁部が開く。口縁端部は尖鋭もしくは内外面に微妙に撮み曲げられる形態がある。浅鉢形態と深鉢形態、平底と丸底がある。1577は形態上本器種に含まれるが穿孔が小さく浅い器形であることから鉢C類に帰属させた。
- G 2 類 口縁端部の外面折り返しもしくは粘土帯の貼り付けにより複合口縁となる形態。小さい底部から内湾もしくは直線形状で口縁部が開く。口縁が外傾し端部が丸く仕上げられた形態（G 2 a類）、内湾して尖鋭気味となる形態（G 2 b類）、上面が平坦となる形態（G 2 c類）がある。複合口縁となる折り返された外面には指頭痕が顕著に残る。浅鉢形態と深鉢形態、平底と丸底がある。鉢G類の中で最も多く3/4は本器種であった。

G3類 口縁端部を内側へ折り返し複合口縁となる形態。底部から内湾気味に口縁部が開く形態と底部は欠損するが本器種に含まれる5495にみる強く内湾形態がある。口縁端部の形態はG2類に準じる。浅鉢形態のみの出土である。

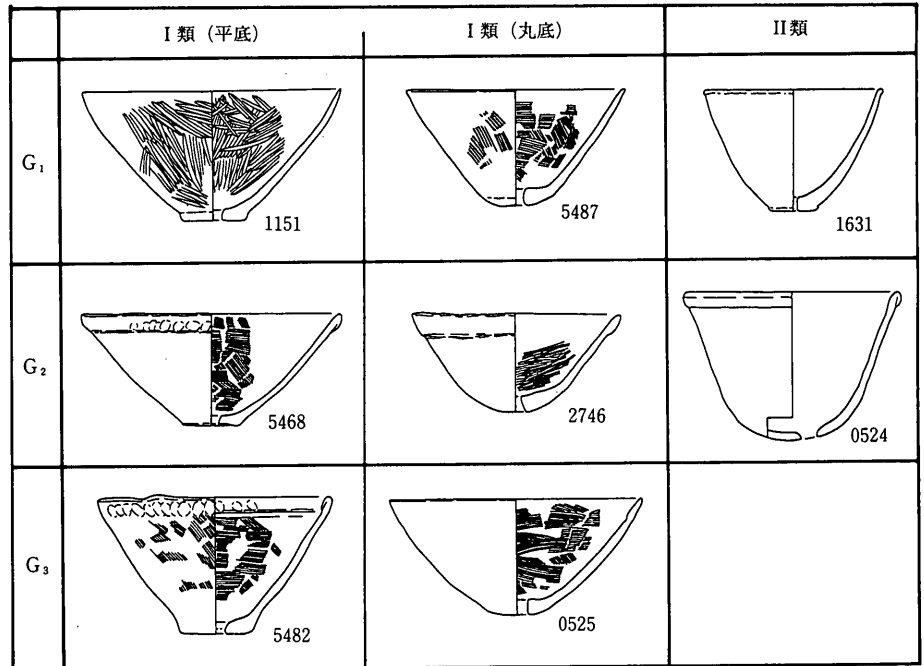
鉢H類 (片口鉢)

口縁部の一カ所に窪みもしくは尖り気味の突出がある形態。出土土器全般に歪みのある器形が多いため本器種に含める器形か否か曖昧なものもあるが2745・3255・5459の3点が出土した。2745・5459は内湾形態で、3255は鉢C類の形態である。

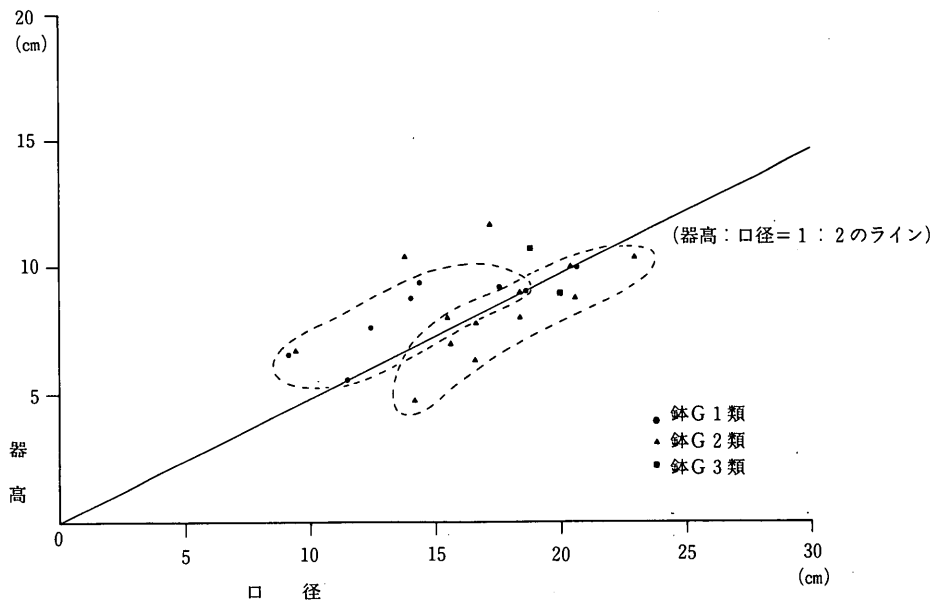
B 鉢G類の容量 (第185図)

鉢G類 (有孔鉢) は口縁形態から3種類に分類された。この3種類には口縁形態とともに口径と器高の比率に傾向として形態差が認められた。

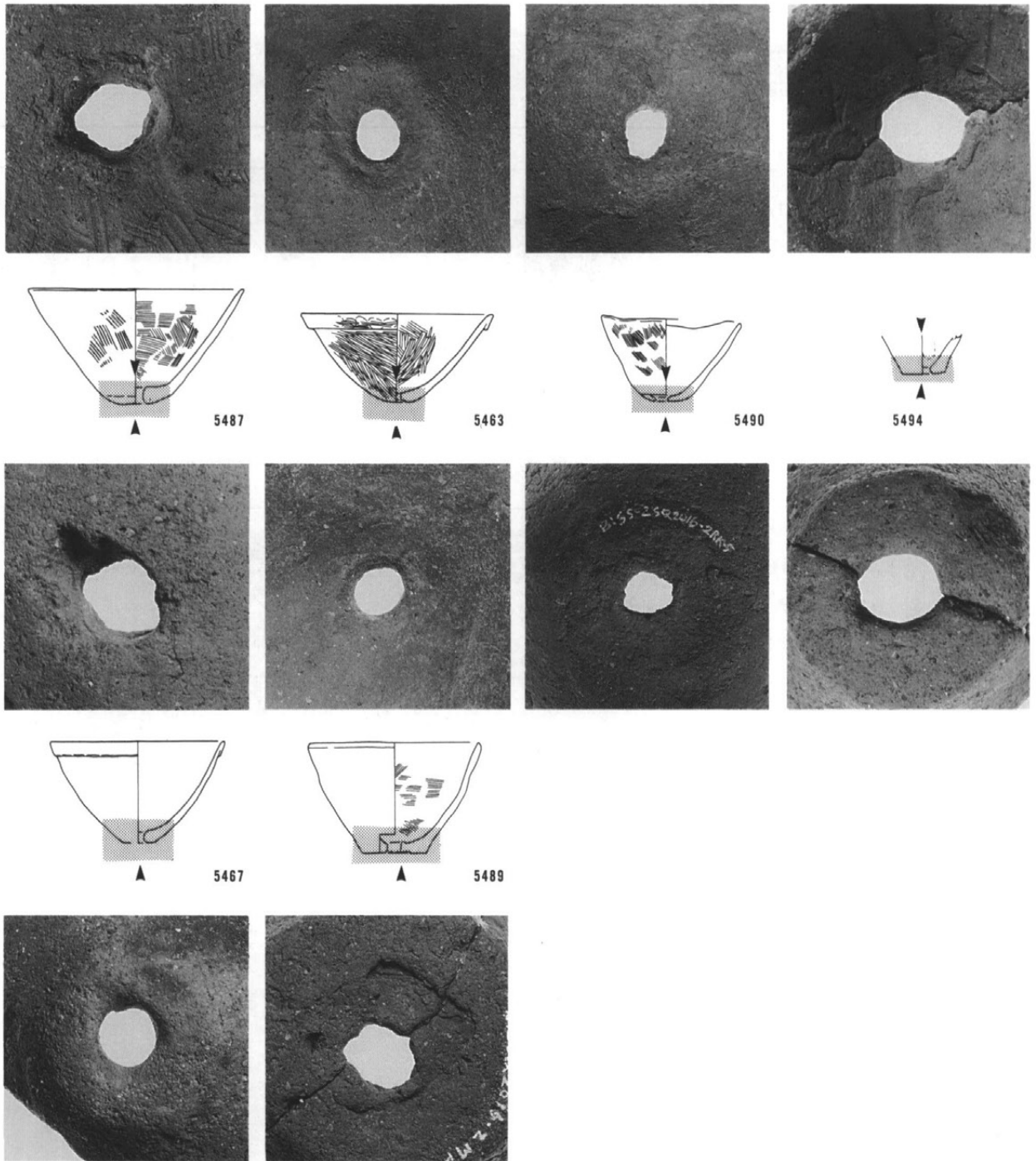
G1類は口径に対し器高が1:2を上回る比率となる深い形態で、G2類は口径に対し器高が1:2を下回る浅い形態が主体を占める。ただしG2類でも口径:器高が1:2を上回るのは複合口縁の折り返しが弱い形態かもしくは平底形態である。G3類は計測可能な個体が2点と少ないため不明であるが、平底形態が1:2を上回っている。G1類は弥生時代後期から継続する形態で、G2・3類は新器種に位置付けられる形態であるが、本遺跡での共存は単に口縁形態だけでなく全体形状による用途差として認識される。つまりG1類とG2・3類平底が比較的深い鉢の形態としてあり、G2・3類丸底の浅い鉢形態がそれとは異なった用いられ方をしたと考えられる。有孔鉢の用途が甕と共に用いる煮沸具であるとすれば、それは甕の形態変化に連動した変化といえる。



第184図 鉢G類器種分類



第185図 有孔鉢 (G類) 容量分布



第186図 有孔鉢の底部穿孔

4 善光寺平南部域の古墳前期土器編年（付図）

県内古墳時代前期の土器編年に関しては、県内全域を扱った笹沢浩（笹沢1988）と花岡弘（花岡1991）、宇賀神誠二（1988）、宇賀神・青木一男（青木一1993）などの論攷があり、北信及び善光寺平に所在する遺跡の出土土器を中心に扱ったものとしては、青木和明（青木和1987、1990）、千野弘（1993）、青木一男（青木一1989）、森嶋稔（森嶋1996）などの論攷がある。笹沢をはじめとする一連の編年案は弥生後期以来の在来土器様式の型式変化からは成立しない器類・器種の出現に画期を設定し、在来様式の漸移的な型式変化と新器種の影響による在地土器の型式変化に転換期を見いだしている。つまり土器組成のなかの一部の器類・器種を抽出し時期区分する方法がとられている。これに対し青木和（青木和1987・1990）、千野（1993）は、高杯・甕の特定器類の型式変化から時期区分を試み、本地域の編年研究に欠落している特定器種分類における型式変遷を軸に時間幅を組み立てるという方向性がうたげられている。ただし器種分類に未だ検討の余地があり、今後の課題である。また須恵器を対象とした論攷としては、全県を概観した西山克巳（1988）、北・東信の出土資料を扱った木下亘（1992）、長野市浅川扇状地遺跡群出土資料を扱った飯島哲也（1993）の報文などが上げられる。これらは須恵器に見る地域・集落などの特性研究や須恵器生産地の実年代に対照させる上で成果を上げている。

笹沢は長野県史で古墳時代の土器を5期11段階に設定した（以後笹沢編年とする）。I期は外来系土器による在地様式の弥生土器の解体、II期は畿内系の布留式土器の出現する段階、III期は布留式土器新段階、IV期は小型丸底の消滅や黒色土器の出現、須恵器模倣坏など坏・椀類の増加、在地生産須恵器の開始の段階、V期を金属器模倣土器の出現と須恵器食膳具の成立段階とした。このうち本項にかかわるI～III期及びIV期前半についての細分の要点をまとめ、II期からIII期に関しては指標となった遺跡、遺構を列挙する。I期古段階として小型器台とS字状口縁台付甕（以下S字甕とする）の出現を指標とし、I期新段階は在地系壺・甕類の減少と北陸系甕の増加、畿内系甕の広がり、S字甕B・C類の出現を指標としている。II期は小型丸底土器の出現をもって古段階〈長野市小島境1・2・6住、同1・4号方形周溝墓、飯田市恒川B溝15・A溝1・溝2・5住〉とし、S字甕の肩部施文の省略化をもって新段階〈北佐久郡望月町後沖4・11・16住、大町市借馬13・24・25・30・57住、茅野市下蟹河原、岡谷市新井南2住、伊那市堂垣外、更埴市灰塚1住、同五輪堂14住、同南沖〉として区分されているが各器種の変化の根拠は不明瞭である。III期は3段階に設定し古段階は壺形小型丸底土器と畿内系屈折脚高杯の出現と屈曲口縁鉢の存在〈長野市下宇木B、同駒沢新町3号祭祀、更埴市城ノ内7・10・15・18・住、飯田市恒川B10・A4住〉、中段階は小型丸底土器と屈折脚高杯の盛行とS字甕、小型器台の消滅、大型甕と短口縁屈曲鉢の出現〈長野市駒沢新町1号祭祀、松本市白神場12、飯田市清水方形周溝墓IV〉新段階は確実に初期須恵器を共伴し、短口縁屈曲鉢の盛行〈飯山市照丘1号方形周溝墓、長野市牟礼バイパスB14〉をそれぞれ指標としている。IV期は土師器では黒色土器の出現、有段口縁壺の消滅、椀状杯部の高杯の盛行などを指標として須恵器では陶邑編年TK208～47型式（以下TK・とのみ記す）を搬出した段階を古段階としている。

今のところ本地域を含めた長野県の土器編年は、在来の形態から系譜の追えない器種の出現に画期を求め、複数器類・器種を対象としての型式変化から編年を組み立てざるをえず、年代的な根拠は須恵器研究に依拠している。本節では先学の成果をもとに善光寺平南部域に限定した遺跡出土資料を扱い、大溝区画特殊遺構群出土土器群の編年上の位置を検討することとする。

弥生後期善光寺平の土器様相は、千曲川流域に広く分布域をもつ箱清水式土器で、赤色塗彩の壺・鉢・高杯、櫛描文様が施文された甕を特長とする。この在来土器様式に外来系土器が流入する時期は後期前半からである（註2）が特定地域から単一遺跡への搬入・模倣といった状況であり、在来系土器様式全体を

変革するに至っていない。在来様式の器種全体が変化する時期は後期末で、千曲川下流域の中野周辺に複数地域からの外来系土器群の多量出土として現れる。本地域は下流域の状況に後続する時期に北陸・東海地域を本貫とする土器が複数遺跡から一定量出土する。善光寺平南部域は在来様式に固執していた感がある(註3)。在来系本来の器形が型式変化していくなかでも、壺・甕への簡描文様の施文や壺・高杯・小型器台への赤色塗彩は持続している。本項では在来様式が一掃され土器組成が全て解体した段階を古墳時代第Ⅰ期と呼称した。以下に時期、段階の概要を述べる。

第Ⅰ期 1段階は五輪堂遺跡3・14住(更埴市教委1982・86)、篠ノ井遺跡聖川堤防地点SB70(長野市教委1991)、同遺跡群SB7508・SB7654(県埋文センター1997)、2段階は灰塚H1号(更埴市教委1970)、篠ノ井遺跡群SB7654を該当させた。第Ⅰ期は在来の器類・器種が全て解体し新様式へ変革した段階と位置づけることができる。その主たる要因は東海西部系の土器群の移動であり、小型開脚高杯・小型器台に代表される祭式土器の出現である。壺A類は二重口縁上段部がやや垂下する形態であり、球胴形となる。壺B類には簡描文の施文(4)、胴下半に緩い稜線を残すもの(5・6)ものがある。高杯は小型開脚高杯と杯半円碗型の高杯があり、小型丸底は鉢形態に近い不定型である。甕は「く」の字甕で口縁長が長く、胴部上半が膨らむ倒卵球形が特長となる。1段階と2段階の区分は口縁屈折鉢(75・76)の出現と小型開脚高杯、小型丸底の形態変化を指標とした。灰塚H1住の出土資料に関してはその一括性に疑問が残るむきもあり高杯61は先行する可能性がある。周辺遺跡の出土資料では大町市中城原遺跡36住(大町市教委1992)、上田市林之郷遺跡E16住(上田市教委1991)、長野市柳田遺跡YD3区5住(長野市教委1993)が同時期と認識される

第Ⅱ期 1段階は篠ノ井遺跡群SB7254・SB725、2段階は篠ノ井遺跡群SC6001・SK6202・SB6307、3段階は篠ノ井遺跡聖川堤防地点SB118、篠ノ井遺跡群SB7420・SK6406を該当させた。第Ⅱ期は壺A類の多様化と壺D類(小型壺)の定型化、屈折脚高杯の出現、X字器台の出現、小型丸底の定型化と盛行を特長とする。この段階は畿内系土器群の組成によって土器群が成立し、土器祭式ばかりでなく祭祀形態そのものが変化している。

第Ⅲ期 1段階は屋代清水遺跡4・8住(更埴市教委1992)、生仁遺跡31住(更埴市教委1989)、2段階は屋代清水遺跡5住、3段階は屋代清水遺跡15住の出土資料を該当させた。第Ⅲ段階は須恵器出現以降の時期が想定され、高杯形態の多様化、小型丸底土器の形態変化が特長となる。

第Ⅰ期とそれ以前、第Ⅰ期と第Ⅱ期、第Ⅱ期と第Ⅲ期を区分した器種は高杯・小型丸底など祭式にかかる土器であり土器形態を変革させた要因は祭祀形態の違いと認識される。本遺跡出土土器の第Ⅱ期2～3段階は畿内編年(寺沢1988)の布留2式後半から3式、東海編年(赤塚1994ほか)廻間Ⅲ式後半から松河戸式前半に該当する。また須恵器の編年から実年代を探ると陶邑TK73とそれ以前の4世紀後半から5世紀前半の時期が与えられる。

本遺跡水田域出土土器は第Ⅰ期から第Ⅲ期1段階までの時期が該当する。また本遺跡周辺にある特殊(祭祀)遺構は篠ノ井遺跡群市営塩崎体育館地点(以下篠ノ井体育館地点)、石川条里遺跡併下地点(以下併下地点)、生仁遺跡1号祭祀遺構が上げられ(第2章参照)、これらには本特殊遺構群と同一組成となる土器群や石釧などが出土した廃棄土坑などが検出されている遺跡である。この3遺跡から出土した土器は時間幅をもつ集合資料であるが、本遺跡との祭祀比較資料としておよその時期を検討すること、篠ノ井体育館地点は本遺跡直前、石川条里遺跡併下地点は本遺跡直後そして生仁遺跡1号祭祀は更に後続する位置づけがなされる。篠ノ井遺跡群市営体育館地点には二重口縁壺の有段部下が垂下する壺、端部が平坦に面取られた形態が含まれ、小型器台も受部に稜線を残す形態であり第Ⅰ期の様相が見られるが、屈折脚高杯と小型丸底の存在から第Ⅰ期2段階から第Ⅱ期1段階となる。石川条里遺跡併下地点は口縁が短く内面屈曲の弱い二重口縁壺、長胴化傾向甕、杯部が深く口縁端部が強く外反する高杯や屈折脚とならない「ハ」

の字に大きく開く脚部、不整形小型丸底から第III期の様相が強く見られることから主体は第III期1段階に位置づけられる。生仁1号祭祀遺構は小型丸底土器の欠落と内面黒色処理した鉢（坏）の存在から第III期3段階に位置づく。

註

- 註1 『機能とは、あるものがもつ固有の役割、はたらきであり、用途とはそれらの使い道とか用いどころという意味である。』（岡村道雄：1985 「機能論」岩波講座日本考古学1 研究の方法）機能と用途は用語の意味として分離せずに使われている。土器の場合、固有の役割とは実用的な面では容器である（＝用途）が、特殊空間のなかでは使用される目的によって容器の意味付けが異なるものであり、機能とは特殊空間のなかで用いられる役割とし用語を分離した。
- 註2 後期前半は北陸地域の法仏式に比定される土器群が長野市本村東沖遺跡、坂城町塚田遺跡などで出土し、東海地域の登呂式に比定される土器群が茅野市家下遺跡から出土している。後期前半～中葉の外来系土器の移動は、単一地域から単一遺跡への搬入もしくは模倣と認識される。
- 註3 千曲川流域下流域である中野市周辺の遺跡（安源寺遺跡など）からはS字甕A類が比較的多く出土するのに対し本地域では未だA類の出土がなく、S字甕B類以降の東海西部系の土器移動が顕著となっている。

引用・参考文献

- 青木和明 : 1987『土口將軍塚古墳出土土師器の編年的位置』「長野県史跡 土口將軍塚古墳」長野市・更
長野市教育委員会
- 青木和明 : 1990『古墳時代前期の土器体育館地点出土土器の位置付け』「篠ノ井遺跡群III」長野市教育委
員会
- 青木一男 : 1989『土器にみる森將軍塚古墳出現の前後—千曲川中流域の研究と今後の課題—』長野県埋
藏文化財センター紀要3
- 青木一男 : 1993『土器様相変化の素描』（4世紀を中心とした土器編年表作成…宇賀神誠二）長野県考
古学会誌69・70
- 飯島哲也 : 1993『本村東沖遺跡出土の須恵器について』 「本村東沖遺跡」長野市教育 委員会
上田市教育委員会：1991『林之郷・八千原 林之郷遺跡ほか緊急発掘調査報告書』
- 宇賀神誠二：1988『長野県における古墳時代前期の地域的動向』 長野県埋藏文化財センター紀要2
- 宇野隆夫 : 1996『木製食器と土製食器—弥生変革と中世変革』第39回埋藏文化財研究集会「古代の木製
食器 第I分冊」埋藏文化財研究集会編
- 大町市教育委員会：1992『中城原 松本平北部の弥生～古墳時代拠点遺跡の調査』
- 小田木治太郎 : 1995『甕形土器の容量—弥生形・庄内形・布留形』 西谷真治先生古稀記念論文集
- 加納俊介 : 1991『東海系土器の移動から見た東日本の後期弥生土器 基調報告』「第8回東海埋藏文化財
研究会」東海埋藏文化財研究会編
- 木下 亘 : 1992『長野県下出土の古式須恵器概観』「史跡森將軍塚古墳」更埴市教育委員会
更埴市教育委員会：1961『城内 一信濃千曲河岸の土師器集落の研究』
- 更埴市教育委員会：1982『更埴市粟佐遺跡群五輪堂遺跡II 長野県屋代南高等学校地点発掘調査報告書』
- 更埴市教育委員会：1986『更埴市粟佐遺跡群五輪堂遺跡III』
- 更埴市教育委員会：1970『下条・灰塚 長野県更埴市の古代集落遺跡発掘調査報告』

第3章 遺物

更埴市教育委員会：1989『生仁遺跡Ⅲ 県営雨宮地区湛水防除事業に伴う発掘調査報告書』

更埴市教育委員会：1992『屋代清水遺跡 県立歴史館建設に伴う発掘調査報告書』

坂城町教育委員会：1995『南条遺跡群 塚田遺跡Ⅱ』

(財)長野県埋蔵文化財センター：1997『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書16—長野市内その4-篠ノ井遺跡群』

笹沢 浩 : 1988『4 古代の土器 (2)古墳時代の土器』 「長野県史考古資料編 全1巻遺構・遺物」
長野県史刊行会

関根孝夫 : 1994『胴部に小孔のある壺』 「日本と世界の考古学—現代考古学の展開—」岩崎卓也先生退官
記念論文集

田嶋明人 : 1996『木製食器と土製食器—弥生変革と中世変革』第39回埋蔵文化財研究集会「古代の木製
食器 第Ⅰ分冊」

埋蔵文化財研究集会編

長野市教育委員会：1990『篠ノ井遺跡群Ⅲ—中部電力北信坂城線鉄塔地点・長野市営塩崎体育館地点—』

長野市教育委員会：1991『石川条里遺跡 (6) 篠ノ井西部地区県営圃場整備事業にともなう埋蔵文化財
発掘調査報告書』

長野市教育委員会：1992『篠ノ井遺跡群 (4) 聖川堤防地点』

千野 弘 : 1993『本村東沖遺跡における古墳時代中期以降の土師器編年について』 「浅川扇状地遺跡群
本村東沖遺跡」長野市教育委員会

西山克己 : 1988『信濃国で須恵器が用いられ始めた頃』 「信濃」第40巻 第4号

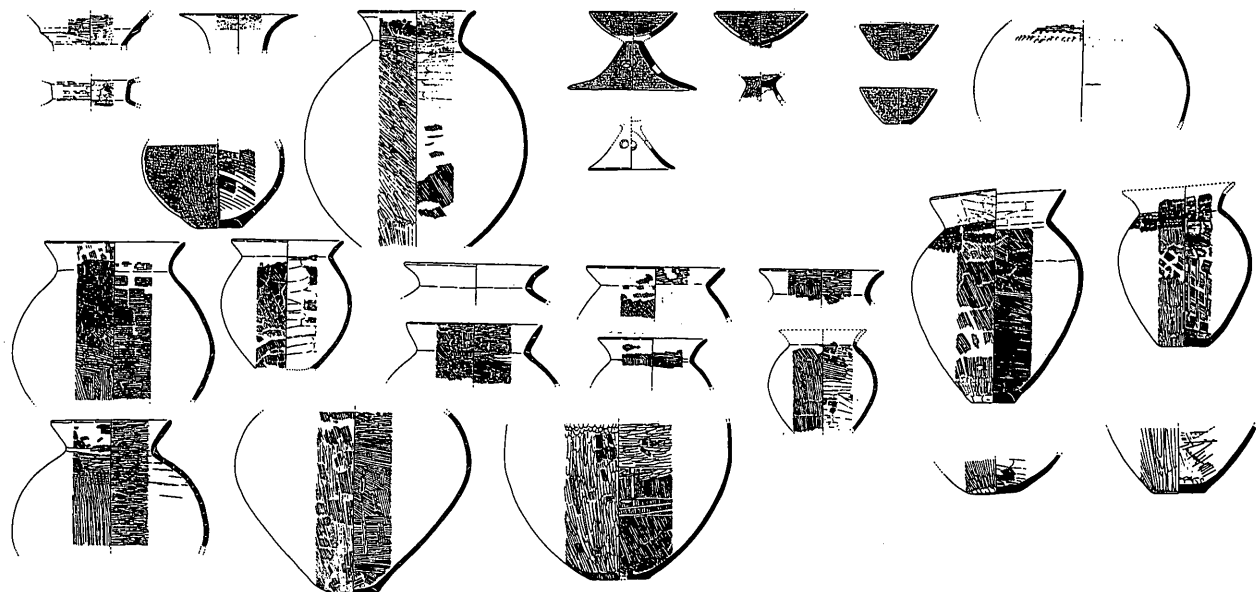
花岡 弘 : 1991『土師器の編年中部高地』 「古墳時代の研究 6 土師器と須恵器」 雄山閣

松本 完 : 1986『土器の機能 (1) ・諸機能の素描』 「古代」第81号 早稲田大学考古学会編 氏は
「土器の容器」としての機能を実用的機能とし、他に伝達の機能を加え土器をメディアの一
部という解釈をしている。

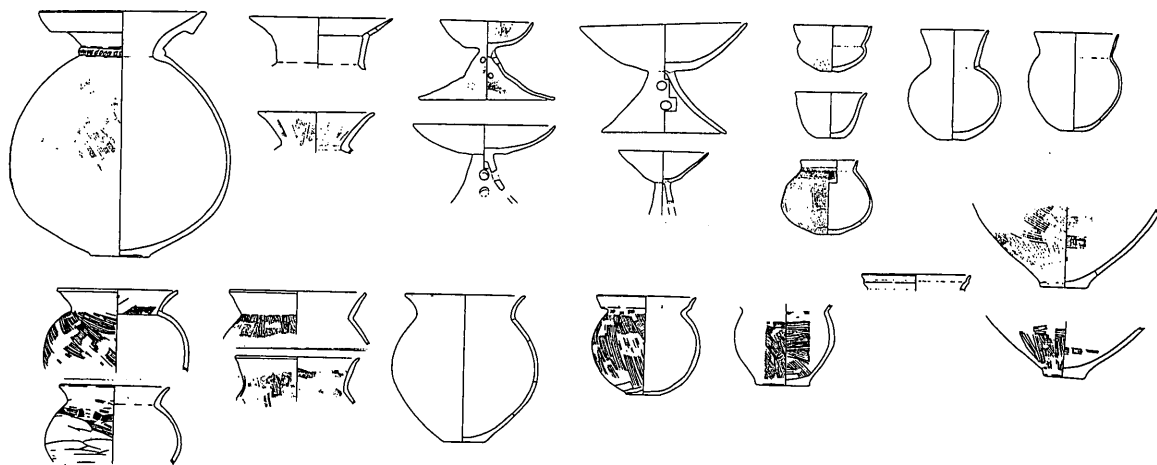
松本市教育委員会：1989『松本市向畑遺跡Ⅱ ほ場整備に伴う緊急発掘調査報告書』

松本市教育委員会：1993『松本市岡田町遺跡—緊急発掘調査報告書—』

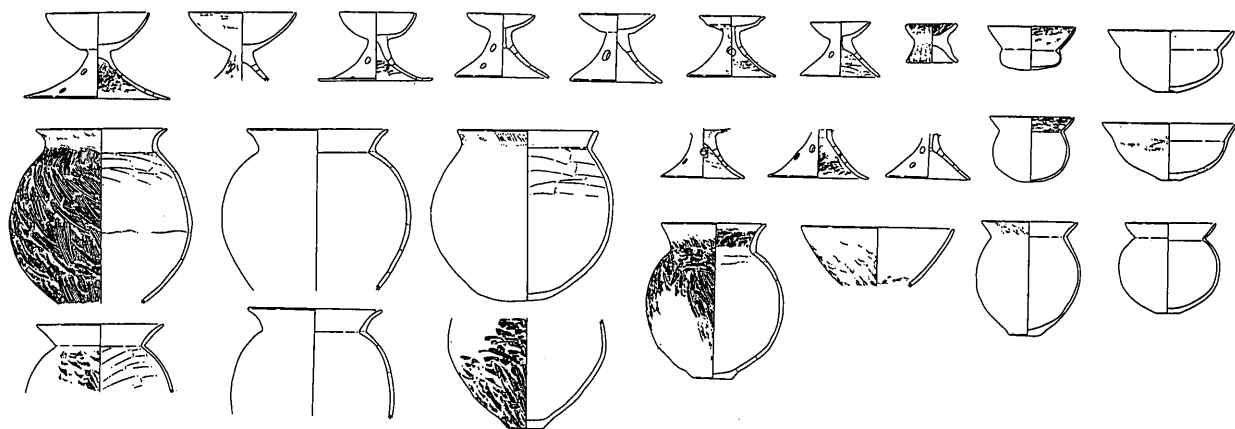
※本項では本遺跡出土土器に関する編年的検討を十分に論及することができなかった。善光寺平南部編年
を含め別稿を用意しているので、詳細は今後に譲ることとする。



大町市中城原遺跡36住



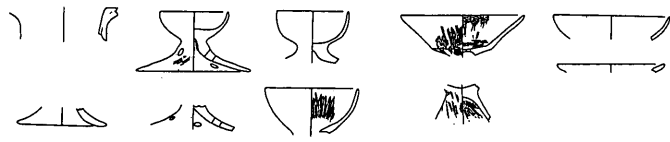
上田市林之郷遺跡E16住



長野市柳田遺跡YD3区5住

第187図 周辺地域の遺跡出土I期土器群

(1:10)

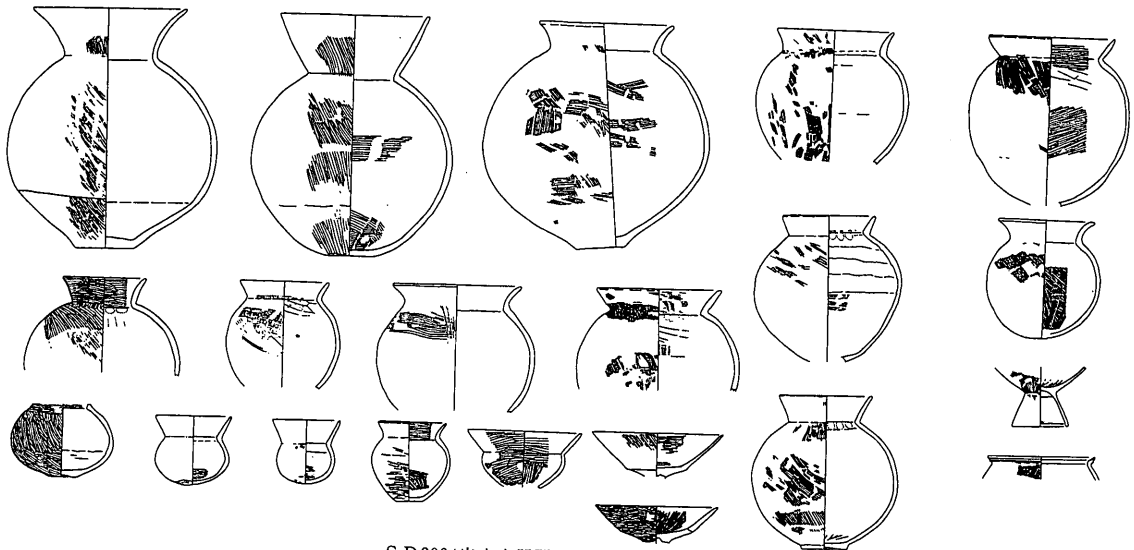


松本市向畑遺跡1住

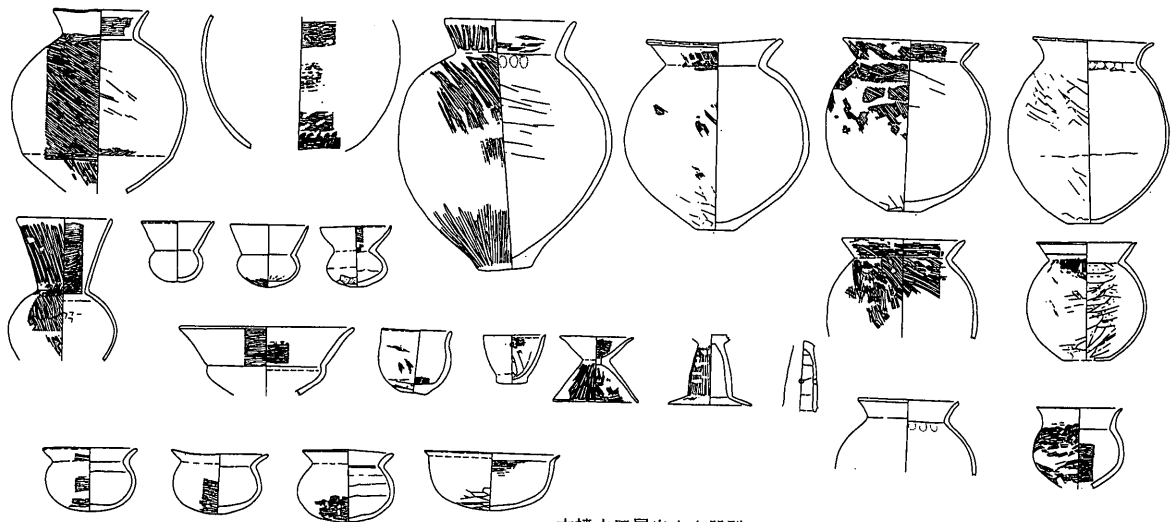


松本市岡田町遺跡S B203

第188図 周辺地域の遺跡出土II期1段階の土器群 (1:10)



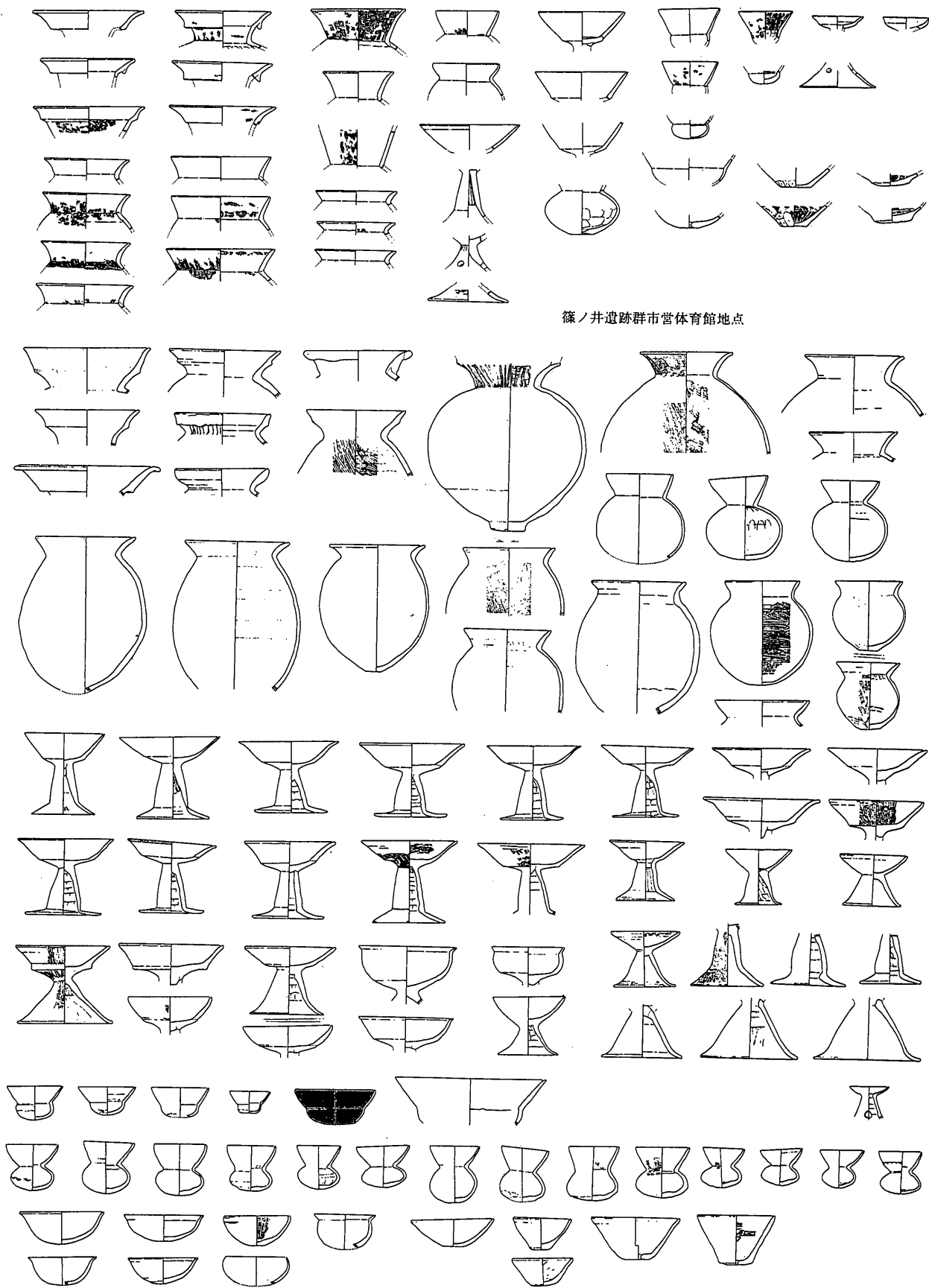
S D 3004出土土器群



古墳水田層出土土器群

第189図 水田域出土古墳時代土器

(1:10)

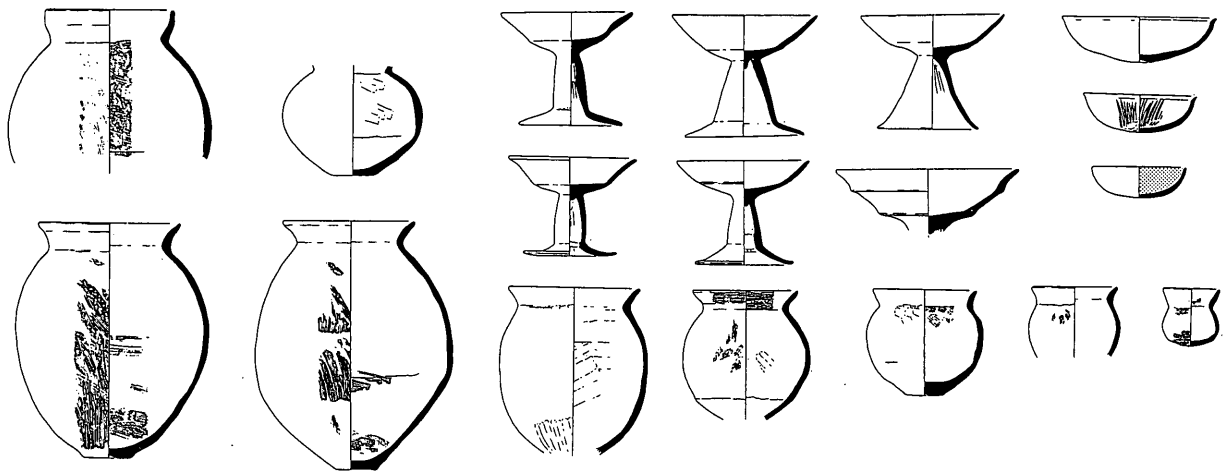


篠ノ井遺跡群市営体育館地点

石川条理遺跡耕下地点

第190図 隣接する祭祀関連遺跡出土主要土器群 1

(1 : 10)



更埴市生仁遺跡1号祭礼

第191図 祭祀関連遺跡出土土器群2 (1:10)

第2節 石製腕飾類・玉類・銅鏃・銅鏡他

本遺跡からは多数の各種玉類、石製腕飾類、筒形石製品、紡錘車形石製品、銅鏃、銅鏡などが出土した。これらの遺物は材質・形態・性格とも多様ではあるが、古墳の副葬品に多々見られるように一種の威信財・宝器的な性格を具備した特殊品とみられ、本遺跡を特長づけるものである。そこで、これらの遺物をまとめて扱うことにした。その内訳は車輪石1、石釧4、筒形石製品? 1、紡錘車型石製品1、勾玉11、管玉18（大形2、中形15、細形1）、滑石製白玉112、粟玉1、ガラス小玉11、算盤玉1、銅鏃1、銅鏡1がある。さらにここで扱うのは適当ではないかもしれないが、ベンガラについても触れる。

出土した玉類や石製腕飾類の種類と量についてみると、全体出土点数は多いものの、単純に数えると滑石製の白玉が大部分を占めている。当地域内の集落遺跡とくらべて突出した量かどうかは、当該期の集落遺跡の様相が不明瞭で即断しがたい。しかし、車輪石・石釧・筒形石製品・紡錘車形石製品・大型管玉・ヒスイの丁字頭勾玉は当地域において出土が稀であることから本遺跡の特殊性を示す遺物とみられる。車輪石は江戸時代の古記録から、遺跡に近い川柳將軍塚古墳よりその可能性のあるものが出土したと指摘される（註1）が、現存していないため確認できるなかでは県内初出となる。また、石釧は須坂市鎧塚古墳で2点、本遺跡に近い長野市石川条里遺跡併下地点1点、千曲川対岸の更埴市生仁遺跡1点、丸子町鳥羽山洞穴1点の合計4遺跡で製品、丸子町社軍神遺跡で未製品が出土しているが、本遺跡例が最も古く、しかも出土量は1遺跡で最多である。県下の石釧出土分布はほぼ東北信に限定され、しかも製品出土遺跡は善光寺平南部に集中する。さらに、この地域では伝承・古記録を除くと古墳以外での出土例が多い特長があり、本遺跡も同様である。なお、滑石製白玉も比較的古い段階の出土例として注目され、現時点では本遺跡と近似するか若干後出すると思われる篠ノ井遺跡群（高速道路地点）や塩崎遺跡群（松節一小田井神社地点）などの集落遺跡と比べても出土量は多いようである。このように出土が限定的な特殊品が複数出土し、しかも出土遺構の年代が古い点は本遺跡の特殊性を物語ると思われる。

これらの石製品、玉類の材質についてみると、ヒスイ・緑色凝灰岩・ガラスといった前段階から見られる玉類と滑石・水晶・玉髓といった後出するとされる石材の玉類がみられるが、このなかで滑石（蛇紋岩）が最も多く、緑色凝灰岩がそれに次ぐ量であり、他の石材は少ない。石材別に玉の種類をみると緑色凝灰

岩は管玉と石製腕飾類・筒形石製品・紡錘車形石製品などの特殊品と管玉、滑石は白玉を主体として石釧・勾玉・棗玉、水晶は算盤玉、玉髓は勾玉、ヒスイは勾玉である。石材と玉の種類の関係のあり方をどのように評価できるかは明らかでないが、同種類の玉に異なる石材が複合するあり方と、ほぼ単一の石材で占められるあり方は確認できる。同一種類内で異なる石材が認められる場合に注目してみると、石釧は緑色凝灰岩製と滑石製の2者があり、滑石製は形態的には緑色凝灰岩製の石釧を模倣したように思われ、つくりが雑な感がある。製作地の違いを反映するのか、あるいは滑石製品が緑色凝灰岩製品の補完品として位置づくのだろうか。勾玉は滑石・ヒスイ・玉髓など多様な石材があるが、ヒスイ製は丁字頭、滑石製勾玉は小型が多い特長があり、勾玉の場合では装着方法の違いを反映している可能性がある。特にS K2827では白玉多数・水晶製算盤玉と小型滑石製勾玉が伴出しており、小型勾玉が他の小玉と組み合わせで使用された可能性がある。また、白玉の出土量は非常に多いことから滑石製品は大量消費を前提としていたか、あるいは普及版と捉えられる可能性がある。

なお、出土量が多い緑色凝灰岩製管玉・滑石製白玉には同じ石材内で色調や質感・サイズにバリエーションが認められる。これは遺跡内で散在的に出土している点に関連すると思われる、石釧や車輪石などについては明らかでないが、管玉・勾玉・小玉類は一括で搬入・使用されていたのではないことを示すと思われる。つまり、玉類は生産地でつづられて一括生産されているとすれば、質感・サイズが類似すると思われる、それが認められないことは別々に生産された玉類が搬入されていると思われる。しかし、つづられた状態での搬入の有無や、製作・入手契機の違い、遺跡に残された契機が何であったかは不明である。なお、同一地点や遺構内から複数の玉類が出土し、つづられていたと思われる玉もある。このことは遺跡内の出土の組み合わせとして後述する。

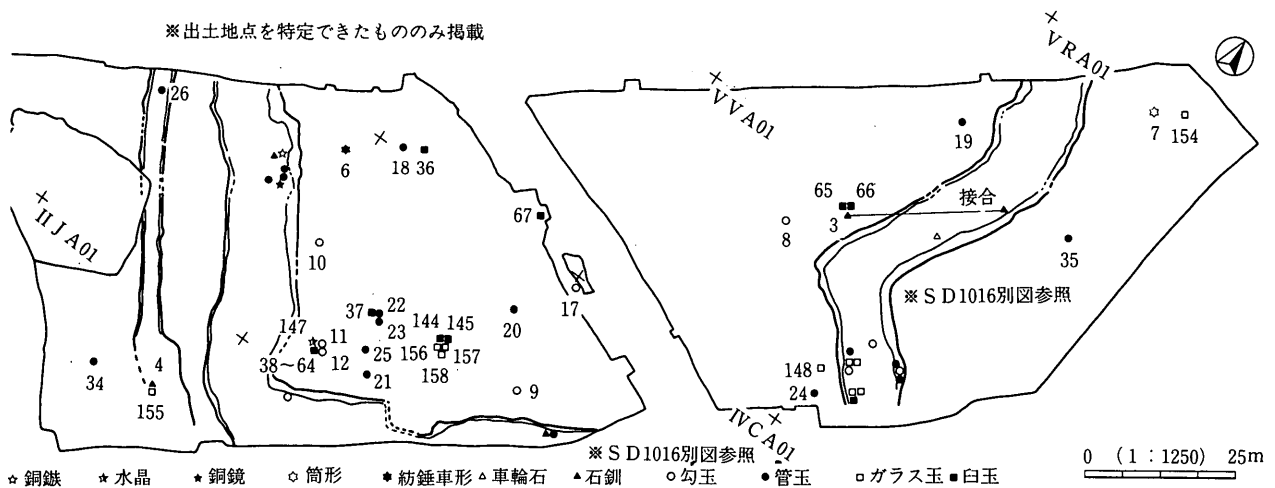
次に遺跡内での出土分布について触れておく。初年度調査において土坑埋土やS D1016埋土をふるいで選別していないことや、検出面で出土した玉もあることから、実際の玉類の数量は採取された数をはるかに上回る可能性が高い。しかし、2年目でふるい選別を行って採取されているのは滑石製の小玉類が中心であったことを考えれば、土坑内で見逃されたとしても小玉類が中心と思われる。このように均一条件で採取されたものではないが、確認できたもので分布をみると、遺跡内の各所で出土しながらも出土遺構種と分布に一定の傾向も看取される。

遺構ごとにみた場合に、土坑からは勾玉・管玉（大型品含む）・白玉・算盤玉・紡錘車形石製品、溝跡S D1007では管玉、S D1016では車輪石・石釧・銅鏃・銅鏡・管玉（大型品含む）・勾玉・白玉・ガラス小玉、S Q2016では管玉・白玉・ガラス小玉・筒形石製品、低地境S Q1004では石釧・ガラス小玉・管玉が出土し、検出面では丁字頭勾玉・滑石製白玉・滑石製棗玉・ガラス小玉が出土した。管玉・勾玉・白玉などは遺跡内の各所で出土しているが、石製腕飾類・筒形石製品はS D1016・S Q2016といった規模の大きな遺構で認められる偏りがある。もちろん、土坑出土しかない紡錘車形石製品、土坑出土品と接合した石釧のような遺物があるが、基本的に石製腕飾類・筒形石製品・銅鏃・銅鏡などは土坑には見られない遺物と判断できる。このように遺構の種類によって出土傾向が異なることから、これらの特殊品が種類ごとに廃棄・埋納される契機が異なっていたとみられる。特に土坑は遺跡全体に関わらないより個別的な契機で構築されていると看取されることから、管玉・勾玉・小玉類の入る契機（保有状況）もより個別的であると思われる。一方で、S D1016の石製腕飾類・銅鏃・銅鏡は後述するように遺跡全体に関わる行為に使用されたと思われる、その保有や管理のあり方がより高次の所産と捉えられる。また、2年目の調査で検出された古墳時代の土坑すべてについて埋土のふるい選別を行ったが、必ずしも玉類が検出されない土坑もあり、すべての土坑で玉類が出土するものでもないことが指摘できる。

遺跡全体で出土分布をみてみたい。玉類は遺跡内各所で出土しているものの、S D1016を含めた区画内

が圧倒的に多い。玉類を出土した土坑はS D1016の縁辺に多く、S D1016区画内の中央部から北東部では玉類の出土がほとんど見られない空白地となっている。また、S D1016区画内では南西部に多く認められ、また西側では線的に玉類を出土した土坑が配列するようにもみえる。なお、S D1016区画内南西部に集中して玉類が検出されているのは上述したようにその周辺の土坑埋土のふり選別を行ったために、より多数の小玉が採取できていることによると思われる。次にS D1016での出土分布では石製腕飾類・銅鏃・銅鏡の出土分布は特定地点に集中する興味深いことが知られた。すなわち、S D1016の西・東・南辺のそれぞれ中央付近で石釧と他の玉類、あるいは車輪石・銅鏡・銅鏃の集中出土が認められる。しかも、⑤-1区S D1016内の石釧出土地点はS D1016底面中央部で杭が検出されているようにS D1016区画内と外側をつなぐ橋脚(通路)部分に該当すると推測された。このことから、S D1016内で出土した石製腕飾類・銅鏃・銅鏡は無作為に廃棄されたものではなく、S D1016の区画する範囲を区切る意味での祭祀行為に伴って遺棄されたものであると考えられる。さらに、このことから石製腕飾類・銅鏃・銅鏡は遺跡全体に関わる統一的行为に使用されたより高次の管理品目であったと推測できると共に、S D1016内が特殊な空間として意識されていたことを示すと思われる。この石製腕飾類・銅鏃・銅鏡出土の各地点の様相についてみると、S D1016西辺中央にあたる⑤-1区では石釧・銅鏃・銅鏡・管玉と土器が周辺から出土し、S D1016南辺の中央にあたる⑧-1区では石釧と管玉、東辺の中央にあたる⑩-1では石釧と車輪石が出土した。いずれも石釧が含まれる点と石釧・車輪石・銅鏡はいずれも破損している共通点があるが、伴出する玉類などの組み合わせや量が異なる。この差異の意味は明らかでないが、祭式の内容にかかわる可能性もある。また、石釧・車輪石・銅鏡の破損の共通性からは、祭祀にあたっての意図的な破壊行為の存在が想定できる。この破壊行為は⑩-1区S D1016東辺と近くに位置するS K2878上部出土の石釧破片が接合していることから、S D1016の区画内側の出土地点に近い場所で行われ、そして、破壊行為の後にS D1016内に投げこまれたと思われる。しかし、この接合例を含めていずれの場合も完形品にはならないので、基本的に破壊する行為で発生した破片すべてをS D1016内へ遺棄するのではなく、残りの破片がどのように扱われたのかは不明である。

この破壊—遺棄の行われた時期については明らかにできなかったが、上限はS D1016底面直上の出土ではないので構築直後まで遡らず、下限は遺跡廃絶時までの間としかわからない。遺棄された時期を絞り込めそうな材料がいくつかあるが、いずれも断定までには至らなかった。まず、S D1016の出土土層位は、



第192図 特殊遺物出土分布 (数字は図の掲載番号)

遺棄された時にSD1016が滞水状態にあった場合には遺棄後に沈下する可能性があり直接遺棄された時期を示すか疑問が残る。さらに石釧を出土した層位は廃絶時と捉えた木材・炭化物包含層に覆われるが、滞水状態では木材は水に浮くため廃絶時そのままではなく、石釧遺棄時が遺跡廃絶時であった可能性も否定しきれない。また、SD1016西辺では石釧出土地点に近接して土器も出土したが、直接土器と関連すると言いきれない。同様に接合する破片が出土したSK2878をみても、土坑との関連の捉え方によっては大きく遺棄の時期の捉え方が変わるため、定点とは捉えがたい。すなわち、SK2878の上層から出土したことを重視すると、土坑と同時か埋没以後の遺跡存続時間内の所産であるが、一方で上部に重複する古代の坪境の溝によって混入したとすると必ずしも遺跡存続時間内とは断定できない。なお、⑧-1区で石釧と近接地点で出土した管玉は片側穿孔である。本遺跡内では1例のみであり、片側穿孔が後出的とするならば、石釧は遺跡廃絶時に近い可能性もある。

SD1016での上記以外の玉類出土分布では南東隅の⑩-1区で比較的多く検出された。ここは巨視的にみるとひとつのまとまりとも見られるが、細かくみると別れて出土しており、SD1016内側の岸に沿って南端からガラス小玉と白玉の集中、その北側に若干離れてガラス小玉と勾玉・管玉が散在的に検出され、SD1016外側では近接して管玉2点と勾玉、その北東に若干離れた地点で勾玉が出土している。これらの玉類は一括して出土したものではないため、本来つづられていたものではないと考えられるが、SD1016の他地点では散在的にしか検出されていないので、この場所が特異な出土状態を示す場所となっている。このような出土状態を示す背景については明らかでないが、SD1016の内側岸際と外側岸際に別れてそれぞれ集中する分布が見られることから、一方向からの遺棄ではないと思われ、この場所に対する何らかの意識によって両岸から遺棄されたか、投げこまれた可能性も想定できる。また、この場所に何らかの通路があったことによるものだろうか。

最後に遺跡内での玉類の組み合わせや出土状態について触れておきたい。古墳時代の玉類はその装着自体に社会的な意味合いが表現されていると考えられている。しかし、現段階において当地域での玉類の保有程度、玉類のつづられ方や種類の組み合わせの意味、使用方法、さらにそれを支えた生産・流通のあり方についてほとんど明らかにされていないため、当該期の周辺遺跡内での対比のなかで具体的な位置を明らかにすることはできない。しかも、本遺跡で見られる組み合わせに関しても、あくまでも出土遺構や出土地点の近似性からみた場合であり、必ずしも一連でつづられていた確証はない。そのため、確定的な様相とは見られないが、近似地点、あるいは同一遺構で出土した場合は何等かの関連があると仮定して出土状況から組み合わせについて検討してみる。遺跡内での出土状況から看取される組み合わせの可能性は管玉1、管玉2、勾玉1、勾玉1+管玉2、勾玉1+ガラス小玉1、小勾玉2+水晶紡錘型玉+滑石製白玉、ガラス小玉+滑石製白玉若干、複数滑石製白玉、滑石製白玉1、ガラス小玉1、(土製勾玉+滑石小玉)である。これを出土遺構種とSD1016の区画内外に区分してまとめると以下のようになる。

・SD1016区画内 (=検出面・土坑)

1 個体 勾玉1、管玉1、滑石製白玉1、紡錘車型石製品1、ガラス小玉1

同種複数個体 管玉2、複数滑石製白玉

多種複数個体 小勾玉2+水晶紡錘型玉+滑石製白玉、ガラス小玉+滑石製白玉+滑石製棗玉

・SD1016

1 個体 勾玉1、管玉1

同種複数個体 白玉?

多種複数個体 管玉4+石釧1+銅鏃+銅鏡、石釧+管玉1、石釧+車輪石?

ガラス小玉+勾玉、ガラス小玉+滑石製白玉、管玉2+勾玉1(すべて同一の可能性あり)

・SD1016外側

1個体 管玉1

同種複数個体 なし

多種複数個体 筒形石製品+ガラス小玉1 (+管玉1?)、ガラス小玉+石釧?

遺構の規模が大きい場合においては、どの程度の距離まで一括してよいかの判断が難しいため、ここで列挙したものが確実に組み合わせで使用された保証はない。例えば、SD1016東辺中央部で車輪石と石釧が出土したが、遺跡全体としてみれば両者はSD1016の東辺中央部で出土した関連する遺物と見られるが、同様の距離を⑩-1区SD1016南東部に当てはめた場合ではこの周辺で散在的に出土した勾玉、管玉、ガラス小玉、滑石製白玉すべてが一括として把握されてしまうことになる。ここでは玉類の種類によって捉え方が一貫していないところもあるが、特殊品を除く玉類はつづられる可能性を想定してより距離が近いものを組み合わせとして把握することにした。

このように感覚的にみている限界はあるが、管玉・勾玉(小型勾玉を除く)の場合は単体で出土する例が多く、複数の場合も2個を越える例はわずかである。一方で白玉・ガラス小玉の場合は複数で出土する例がいくつかみられる。このことは勾玉に多様な石材が見られることや、管玉も同種の石材ながら質感やサイズにバリエーションが多く、つづられていた玉類を使用したのではなく、別契機に単体として使用されていると推測される点と一致する。小玉類についてみると複数出土した例は小勾玉2+水晶算盤玉+滑石製白玉、ガラス小玉+滑石製白玉+棗玉、滑石製白玉のみの3種ある。これ以外に出土地点不明ながら同じ袋に取り上げられていた土製勾玉と白玉2点があるが、一括して出土したのか断定できないため除外した。もちろん、複数出土が認められた滑石製白玉の場合でもつづられていた確証はなく、しかもつづられたとしても首から下げる玉、足玉・手首にまく玉の別、装身具以外の貯蔵などの意味でつづられていたのか識別はわからない。以上の様相をまとめると、本遺跡では単独で出土する傾向が強い管玉・勾玉と複数で出土する例が多い小玉類にわけてみることができそうである。しかも、この両者が組み合わさって出土した例は少なく、少なくとも双方の玉類が遺構に入る契機や使用方法が異なる可能性がある。

周辺の前後する時期(5世紀代まで)の遺跡をみると、集落遺跡でも玉類が出土する例があり、特に土壙墓でも複数出土する例がある。集落内でも玉類を装着する人間がかなりいたことを示すと考えられるが、古墳・土壙墓すべてで同様に出土しているわけでもなく、すべての人間が玉類を保有していたとは考えにくい。なお、参考に玉類の組み合わせについて一定の関係が看取りやすい古墳と土壙墓の出土例を取り上げて玉類の比較をしてみる。まず、玉類の出土状態の組み合わせをみると、他種の玉類との関連が不明なものを含む単一種の例では勾玉のみ、管玉のみ、小玉のみがあり、2種の玉の組み合わせとみられる場合は勾玉・管玉、管玉・小玉、勾玉・小玉、3種の玉の組み合わせと見られる例は勾玉・管玉・小玉である。次にそれぞれの組み合わせ例をみていくと、まず単一種の玉で勾玉のみの場合は森將軍塚古墳の主体部例しかなく、本当に単独のものか判然としない。管玉の単独例は勾玉同様判然としないが、一方で複数の管玉が出土する例は篠ノ井遺跡群高速道路地点のSM7016の首周辺、森將軍塚古墳の主体部西部、森將軍塚古墳の3号石室の北小口周辺、森將軍塚古墳12号埴輪棺、大星山3号墳大2石槨と例が多い。小玉類では滑石製白玉複数、滑石製白玉とガラス小玉、コハク玉のみ、コハク玉とガラス小玉があり、滑石製白玉のみは森將軍塚古墳56号組合式箱形石棺、同3号埴輪棺、大星山古墳1号墳、2号墳がある。ガラス小玉は森將軍塚古墳50号組合式箱形石棺、ガラス小玉と滑石製白玉は大星山4号墳、コハク玉のみは篠ノ井遺跡群高速道路地点のSM7016の右手、ガラス小玉とコハク玉は同左手がある。次に2種の組み合わせが見られるものは勾玉・管玉が1例のみで篠ノ井遺跡群のSK45例、組み合わせとして見られるか詳細は不明であるが、勾玉とガラス小玉は大星3号墳第1石槨例、小型の滑石製勾玉と蛇紋岩製白玉例が篠ノ井

遺跡群の土壙墓SM7036、管玉と小玉は森將軍塚古墳3号石室の両手首部、4号埴輪棺で管玉とガラス小玉がある。3種みられる例は詳細な出土分布がわからないため、つづられた玉かどうか知られないが、篠ノ井遺跡群高速道路地点のSM7006のメノウ製勾玉と碧玉製管玉・ガラス小玉、森將軍塚古墳の31号組合式箱形石棺がある。

これらの玉類の組み合わせの違いの意味についてであるが、装着位置の違いによると思われる例には森將軍塚古墳3号石室、篠ノ井遺跡群高速道路地点の土壙墓SM7016の例がある。特に篠ノ井遺跡群SM7016では人骨が検出されており装着位置が推測できる。首周辺に碧玉製管玉12、右手首周辺にコハク小玉7、左手周辺にガラス小玉3とコハク小玉19である。森將軍塚3号石室例では骨は残存していないが、3地点に別れて出土しており、篠ノ井遺跡群例との比較から北小口周辺で出土した碧玉製管玉7が首、中央東の管玉6とガラス小玉22が左手、中央西の管玉3とガラス小玉2が右手にあたると思われる。この2例の時期差は明らかでないが、首周辺では管玉、手首には材質が異なるが小玉のみか、管玉が加わる例があると知られる。しかも、手首に巻かれる玉類の検出される場合では左右両者が認められ、いずれも左手のほうが量が多いようである。それ以外は首に装着、あるいは副葬品として装着されずに埋納された例があると思われるが、具体的に識別できなかった。

次に組み合わせの種類が時期差として見られる例として森將軍塚の一群と大星山古墳群例がある。前者は首長の埋葬後に関連する共同体構成員が継続的に墓を営んだと考えられており、時間的な推移と共に異なる階層の埋葬が含まれる可能性がある。それに対し、後者はほぼ同じ系統の者が埋葬されたと捉えられている。まず、類似階層が継続的に墓を営んだとされる大星山古墳群は3→1→4→2号墳の順とされる。必ずしも検出された玉が、本来副葬されていた全ての玉であると断定できないが、この順で玉類の組成をみると、3号墳第1石槨はヒスイ製の勾玉とガラス小玉、第2石槨は緑色凝灰岩製管玉があるものの、滑石製の白玉は含まれない。それに対して、1号墳以後は滑石製白玉が主体で、他の玉類は顕著でない。このことから滑石製白玉は後出的であるとする共に、3号墳とそれ以後で大きく玉類の組成が変化することが知られる。また、滑石製白玉の出現が柱状脚の高坪の出現時期とほぼ類似し、時期的にも本遺跡と近似する点は注意されよう。森將軍塚古墳群では主体部→2・3号石室→埴輪棺→組合式箱形石棺・小古墳への移行が知られる。このなかで、古段階の主体部→2・3号石室は必ずしも玉類の出土状態は良好ではないが、主体部ではヒスイ製勾玉の単独、西部で碧玉製の管玉複数があり、これ以外は出土地点が不明な滑石製白玉・管玉、さらに2号石室は遺存状態が悪く管玉1点、3号石室では上記のように装着場所を異にする玉の組み合わせが知られる。さらに、続く埴輪棺では碧玉製管玉複数、碧玉製管玉と滑石製白玉、滑石製白玉、31号組合式箱形石棺では石質不明の勾玉・碧玉製の管玉・土玉・ガラス小玉・滑石製白玉の組合せ、ガラス小玉のみ、滑石製白玉のみが見られる。森將軍塚古墳の場合でも主体部出土地点不明の白玉を除くと、ほぼ大星山古墳と同様に滑石製白玉は後出的であることが知られる。ただし、大星山古墳群との違いは小規模埋葬施設でもその数は減少傾向にあるものの、碧玉製管玉が継続して見られ、出土が断続的ながら勾玉も見られることである。

これ以外では組み合わせの違いの背景はわからなかった。それは遺存状態の善し悪しや出土地点の特定の可否に加えて、首飾りや手玉のような装着部位の違いが断定できないものがあつたり、玉の種類組み合わせに時期差・階層性・当地域内の微細な地域性（生産と流通状況）・副葬のされ方など多様な要因が関連すると思われるが、具体的にひとつひとつ紐解くことはできなかった。したがって、玉類の組み合わせの意味やあり方について本遺跡で知られたあり方を位置付ける十分な材料とはなしえなかったが、いくつか気づいた点を列挙しておくことにしたい。

本遺跡出土玉類・特殊品の特長を再確認しておく、ひとつに石製腕飾類などの特殊品が含まれる点で

あり、二つ目には玉類の出土数が多いと思われたものの、実際に数的な主体を占めているのが滑石製の玉類である点である。三つ目には勾玉・管玉と滑石製白玉の両者は出土地点や遺構を異にする傾向と共に、勾玉・管玉は単独・少数での出土が多く、後者の滑石製白玉類は複数出土が多い違いが見られる点があった。3番目に関連して古墳などの葬送関連遺跡・遺構出土品と玉類の組み合わせを比較してみると、共通してみられた玉類の組み合わせでは勾玉・管玉・白玉などの単独出土例と、複数の滑石製玉類の出土の2種がある。ただし、前者については古墳・土壙墓では遺跡・遺構の残り具合に左右されている可能性があり、本遺跡のような明らかな単独使用例とできるか疑問も残る。古墳でも少数、もしくは単独で使用、もしくは装着される場合があるとすれば、本遺跡のあり方は共通したあり方とみられることになる。もし、逆に古墳などでは通常単独で使用されないとするならば、本遺跡の場合ではつづられた玉の一部を外して使用されたか、あるいは宝器的に単独で使用される場合として使用方法の違いを示すことになると思われる。これらの点については現段階では即断はできない。滑石製玉類については小型の勾玉と白玉を出土した篠ノ井遺跡群のSM7036例が装着されたものとするならば、本遺跡のSK2827出土例は装着されるためのつづられた玉の組み合わせとも見られる。それ以外の滑石製白玉のつづりと捉えられるものは装着用のものか、宝器的に副葬されたものかが判然とせず、よくわからない。いずれにしろ、滑石製白玉と管玉・勾玉のあり方は本遺跡で異なったあり方を示すと思われたが、前者は古墳とは異なるあり方、後者は古墳と共通、もしくは装着するつづりが含まれる可能性があるとも考えられる。

本遺跡は年代的に大星山古墳群とほぼ重複する時期と思われ、滑石製白玉類が出現、増加してくる段階と考えられる。大星山古墳では滑石製白玉は柱状脚の高坏の出現とほぼ同時と思われ、滑石製の白玉の出現で副葬される玉の種類が変化していると捉えられた。しかし、森將軍塚古墳もこの滑石製白玉出現の時期を挟むものの、大星山古墳とは若干様相が異なり、森將軍塚古墳の周囲の小型埋葬施設では管玉が継続して出土している。本遺跡のあり方は森將軍塚古墳のあり方に近いが、前代から保有していた管・勾玉類と新規に出現した滑石製白玉が併用されたのか、両者が共存しているなかで使い分けされたのかは明らかでない。しかし、SD1016の南東部では比較的両者は近接して出土しているが、土坑では両者が共伴する例は少なく、使い分けされていた可能性もある。この滑石製白玉の出現の背景について言及できるだけの用意はないが、当地域では滑石性白玉の副葬例の増大、しかもその量が増加する副葬品の玉類の組成が変化する段階とみて間違いないだろう。上記に挙げたなかで年代に確定的でないものも含むが、滑石製の白玉が使用されない例としては勾玉（ヒスイ・碧玉・メノウ）と碧玉製管玉・ガラス製の小玉の組合せとなり、首飾りは碧玉製の勾玉+管玉、あるいはヒスイ製の勾玉+ガラス小玉（や碧玉製管玉?）、メノウ製の勾玉+碧玉製管玉+ガラス小玉?、碧玉製管玉のみ、手玉にはコハク玉のみ、あるいはコハク玉とガラス小玉、管玉+ガラス小玉の組合せが想定される。次に、滑石製白玉が加わる例としては滑石製白玉のみが最も多く、ここにガラス小玉が加わる例、滑石製小型勾玉+滑石製白玉、組合せの詳細は明らかでないが、材質不明勾玉+滑石・碧玉製管玉+滑石製白玉+ガラス小玉+（土玉?）、碧玉製管玉と滑石製白玉などの組合せが認められる。なお、滑石製以外の石材の玉が加わる例では森將軍塚主体部は滑石製白玉の数変わらずで出土地点が明らかでないので何ともいえないが、森將軍塚31号組合式箱形石棺では勾玉が不明石材、管玉には碧玉・滑石製、土玉、同4号埴輪棺では碧玉製管玉と滑石製白玉で、森將軍塚4号埴輪棺を除くと基本的に滑石製の他の種類の玉が加わる。これを単純にみると、滑石製白玉が加わると玉の種類は増加するように見えるが、実際には他の石材の管玉・勾玉が減少してしまっているようにも見える。しかも滑石製の白玉の量は前代までにくらべて増加しており、多量使用の傾向がみられてくることとは間違いないと思われる。ここにひとつ生産-流通のあり方の変化として認められるのかもしれない。もちろん、この様相は古墳時代を全体を通して位置付けされる必要があり、さらに滑石製白玉が出現した段階での埋葬施

設の数的な増加なども考慮しなくてはならないと思われる。いずれにしろ、滑石製の白玉類の出現は単純な玉の種類増加とはいえない、使用上の変化を含めた背景があったと思われる。

以下には特殊品を種類別に記述する。

註

註1 宮下健司 1979「長野県川柳將軍塚古墳をめぐる古文献」『信濃』31-9

参考文献

- 1 八丁鎧塚1・2号墳 1989『長野県史考古資料編 第1巻(2)』主要遺跡(東北信編)
- 2 石川条里遺跡くね下地点 1990『石川条里遺跡(6)』長野市教育委員会
- 3 生仁Ⅲ 1989『生仁遺跡Ⅲ』更埴市教育委員会
- 4 鳥羽山洞穴遺跡 1989『長野県史考古資料編 第1巻(2)』主要遺跡(東北信編)
- 5 社軍神 1980『三角-三角遺跡群(諏訪田遺跡・社軍神遺跡)緊急発掘調査概報』丸子町教育委員会
- 6 篠ノ井遺跡群聖川堤防地点 1992『篠ノ井遺跡群(4)』長野市教育委員会
高速道路地点 1997『篠ノ井遺跡群』
長野県教育委員会、(財)長野県埋蔵文化財センター
- 7 塩崎遺跡群松節一小田井神社地点 1986『塩崎遺跡群Ⅳ』長野市教育委員会
- 8 大星山古墳群 1996『大星山古墳群・北平1号墳』
長野県教育委員会、(財)長野県埋蔵文化財センター
- 9 森將軍塚古墳 1992『史跡 森將軍塚古墳』更埴市教育委員会

1. 車輪石(第419図、P L99)

⑩-1区SD1016で1点のみ出土した。薄い縞状の濃淡が認められる淡緑色の緑色凝灰岩製で、全体に黒・白色のこまかい粒子が含まれる。小破片のため全体形は窺いにくい、中心円に対し外縁部のカーブがややひらくので、外縁部は玉子型になると思われる。断面形は内側がやや浮いて内側面と底面が緩やかな丸味を帯びる三角に近い長台形を呈する。上面は外側へ開く幅広い凹面の連続する形状で、凹面の中央及び隣接する凹面の中間に1条の細い沈線が刻まれる。全体に丁寧なつくりで下面は比較的遺存状況が良好なもの、上面側は痛んでいる。なお、欠損部分は左側が下から、右側が上からの力が加わって割れていると思われる。本遺跡の車輪石は確認できる現時点では県内初出である。ただし、江戸時代に本遺跡にほど近い川柳將軍塚古墳から掘り出された器物のなかに、その可能性のあるものがあると指摘されている。現存していないため、確認はできない。

2. 石釧(第419図、P L99)

全部で4点ある。この内3点は上述したようにSD1016の各辺中央からそれぞれ出土し、図の4はSK2878から出土した破片と接合した。残り1点は⑦-2区のSD1016外側の低地境SQ1004から出土した。1は⑧-1区SD1016から出土した淡緑色の緑色凝灰岩製の石釧で約3/4ほど残存する。断面形は外側面上部が外傾し、下部外面は凹面状に面取りされた台形となる。外側面の上部に細い沈線が放射状に施され、蒲原氏の分類でII a類に該当する。内面の線状痕は下部で緩やかな弧状を呈し、上面はヨコ方向となっている。欠損部の観察から、破損に際しては内面から力が加わっているようである。2は⑤-1区SD1016から出土した淡緑色の緑色凝灰岩製の石釧である。全体の約1/4が遺存している。外側面上部は鋭角に外傾し、屈曲して下部は垂直となる台形の断面形を呈する。この外側面に2段の細かな沈線が放射状に施され、外側面の屈曲部にヨコ方向の沈線が1条施される。蒲原氏分類のI a類に比定される。内側面は左上がりの線状

痕が認められるが、全体的に丁寧に磨かれて線状痕はわずかに認められる。欠損部は判然としないが内側からの力が加わっているようである。3は⑦-2区のS D1016外の低地境S Q1004から出土し、1/5位の遺存である。2と同じ蒲原氏の分類でI a類である。形態的にも類似し、同一個体の可能性もあるが高さが異なるため別個体と考えた。淡緑色の緑色凝灰岩製で欠損部は外からの力が加わっていると観察できる。内側面は右上がりの線状痕がわずかに認められるが、全体的に丁寧に消されている。4は⑩-1区S D1016とS K2878出土品が接合したもので、全部で約1/2が遺存する。やや緑かった黒色の滑石製で断面は上面が平坦に近い台形を呈す。断面形の屈曲部は丸味を帯び、丁寧に磨かれて光沢がある。上面には細かい沈線が無数に施され、蒲原氏のII a類を意識して作られたと思われる。内側面、および外側面下部には幅広の金属器の調整痕と思われる加工痕がある。下面は比較的雑であるが、沈線が3条施されている。破損面は水平方向の石材自体の摂理が現れており、加力の方向は不明である。

参考文献

蒲原宏行 1987「石釧研究序説」『比較考古学試論』 雄山閣

3. 筒形石製品？（第419図、P L100）

S Q2016から1点出土した。調査時には土器と共に取り上げられたままであったが、整理段階で選別した。上部と2側面を欠損するが、残存部から推測すると中央に径9.5mmの穴が穿たれた裾広がりの円筒形になると思われる。底径は35mmである。褐色を呈する灰色味の強い緑色凝灰岩製で側面と底面は丁寧に磨かれ、穴は底面まで貫通していない。柄の下端まで孔が貫通していないことや、形態が筒形石製品に近似するため筒形石製品として扱った。その性格は不明であるが、これも石製腕飾類同様に意図的に破損された可能性がある。

4. 紡錘車形石製品（第419図、P L100）

S K1046から出土した。硬質で白色粒子を多く含む濃緑色の緑色凝灰岩製で全体的に丁寧な作りである。断面の形状はやや扁平で側面が2段になる台形を呈する。形状は紡錘車形であるが、玉杖の飾部分とされるものに類するものと思われる。S K1046では単独出土で、他に玉類は出土していない。

5. 勾玉（第419図、P L100）

全部で9点出土した。石質は検出面で出土した丁字頭勾玉がヒスイ、S K2444出土品が玉髓製で、残りはすべて滑石製である。他には土製模造具で扱った2点の土製勾玉がある。なお、滑石製には蛇紋岩質に近い淡緑色に白色が縞状に入るものが多数を占め、わずかに1点のみ黒色のものが認められる。サイズは全体的に小型が多く、特に蛇紋岩質の滑石製勾玉やヒスイ製勾玉は小型である。穿孔は玉髓製勾玉が片面穿孔の可能性があるが、他は両面穿孔である。

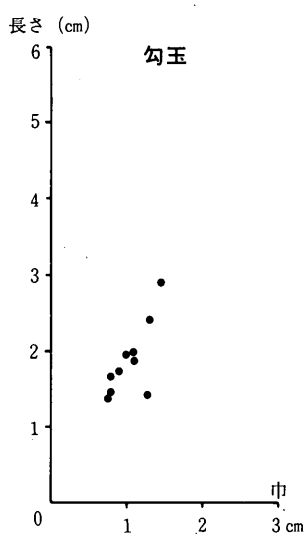
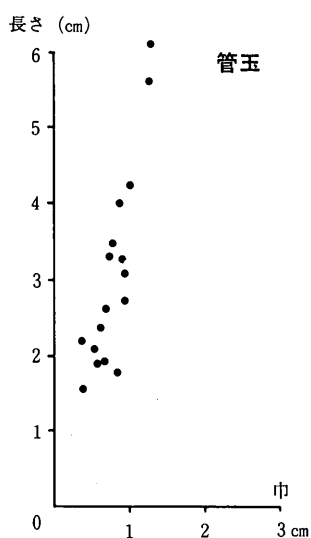
6. 管玉（第419・420図、P L100）

全部で18点出土し、すべて緑色凝灰岩製である。サイズは長さ5～6cmで直径15mm弱が2点、長さ3～4cm前後で直径が6～10mm前後が7点、長さ2cm前後で直径5～8mmが6点、長さ2cm前後で直径3～4mmが2点、長さ18mmで直径7mmが1点ある。色調は濃緑色を呈するものから淡緑色、黒色、灰色の強いものまで多様である。遺跡内で散在的に出土し、土坑から8点、S D1016から7点、S D1007から1点、S Q2016から1点、⑦-2区S D1016西側外の低地境から1点出土した。この内、複数出土例はS K2759で2点、

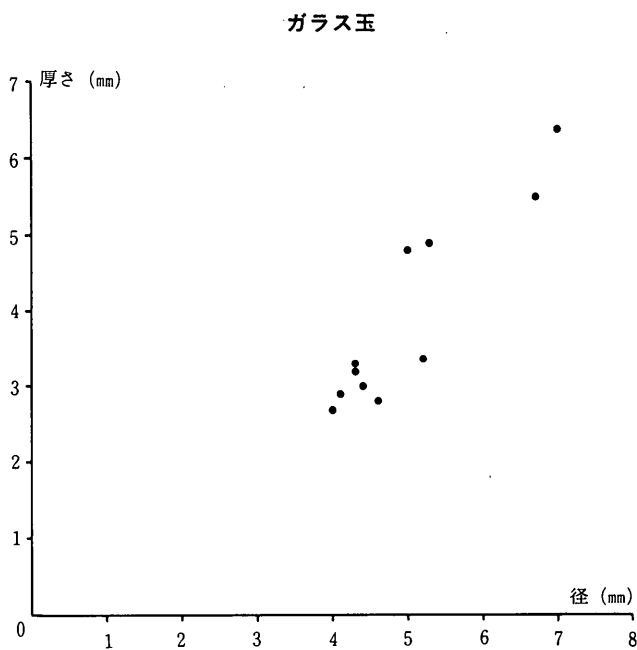
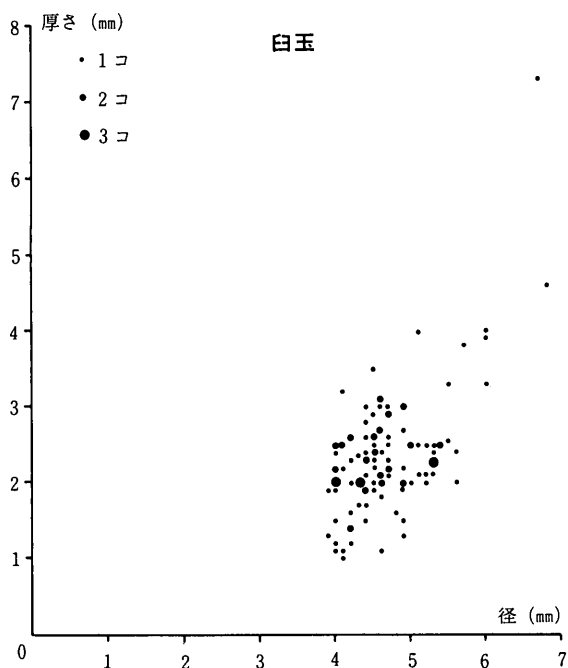
S D1016で⑤-1区の石釧・銅鏡出土地点にほど近い場所で計4点、⑩-1区南東部外側で近接して2点が出土した例がある。これ以外で、管玉は1点ながら他種の玉や石製品と近接して出土した例は、⑧-1区の石釧出土地点に近接して出土したのがあり、これ以外はほぼ単独の出土である。穿孔はほとんどが両面穿孔であるが、⑧-1区S D1016から出土した1点のみが片面穿孔である。遺跡周辺では本遺跡と同時期か若干遡る時期の所産と思われる篠ノ井遺跡群体育館地点S D1より片面穿孔の可能性のある管玉が検出されている(註)。また、S D1007、S Q2016出土のものは表面に煤状の付着物があるなど熱を受けていると観察され、S D1016から出土した大型の管玉は縦に半分欠損している。

註 篠ノ井遺跡群体育館地点 1990『篠ノ井遺跡群III』長野市教育委員会

7. 白玉 (第420・421図、P L101)



出土数をもっとも多い。滑石製で113点出土している。この内、1つの遺構から複数検出された例はS K2827から滑石小勾玉2点と水晶製算盤玉1点とあわせて27点、S D1016のVWE16グリッド付近で5点・12点・14点・44点の集中があり、S Q2020でガラス小玉3点・滑石製棗玉1点と滑石製1点が近接して出土している。また、土製勾玉1点と滑石小玉2点が1つの袋にまとめて取り上げられていたものがあるが、出土地点不明となっており、共伴したかは明らかでない。滑石製白玉の形状は稜があまり明瞭でないソロバン型、



第193図 各種玉類のサイズグラフ

もしくはタイコ型が主体である。整形は板状の原材を円筒形に整形・研磨し、さらに側面を斜目にする研磨を加えている。この側面を斜めにする研磨はフルイで選別した際についた擦痕もあり、研磨方向が識別しにくいものも多いが、ほとんどのものがタテ方向と思われる。さらに、既に指摘されているように側面の上下研磨が丁寧に行なわれた場合は稜の明瞭なソロバン玉になるが、手をぬいて僅かにしか行なわれなかった場合がタイコ型になるとすると、本遺跡例は手ぬきが始まる段階の所産も含まれると思われる。穿孔は1面の内孔が丁寧ながら反対の内孔周囲が欠損するものが認められるので、片側穿孔されていると推定される。

8. 棗玉 (第421図、P L101)

S Q2020からガラス小玉や滑石製白玉と近接して出土した。1点のみの出土である。石材は蛇紋岩質の滑石製で両側から穿孔される。ガラス小玉や滑石製白玉と近接して出土したが、つぶられて使用されていたものかは明らかでない。

9. ガラス小玉 (第421図、P L101)

全部で11点出土した。ほとんどがスカイブルーで、1点のみコバルトブルーが認められる。出土点数は少なく、遺跡全体に散在的にみついている。複数で検出された例としてはS Q2020、⑩-1区S D1016出土例があるのみで、それ以外はほぼ単独出土例である。なお、S Q2020・⑩-1区S D1016ともに近接して滑石製白玉が出土している。

10. 算盤玉 (第421図、P L101)

S K2827から1点のみ出土している。同じ土坑からは小型勾玉2点と滑石製の白玉27点が合わせて出土しており、これらの玉類と組み合わせで使われていた可能性がある。形状はソロバン型で石材は透明度のある水晶、整形は側面にタテ、ナナメの研磨が施され、胴部中位で明瞭な稜を形づくっている。穿孔は片面穿孔により、穿孔下側になったと思われる側の内孔周囲に欠落が認められる。

11. 銅鏡 (第422図、P L101)

1点のみ⑤-1区S D1016から出土した。銅鏡は外区が1/4程遺存する破片で、内区は欠損する。破片は一切遺跡内では確認できず、石釧同様に意図的に破壊されたものであろうか。径は推定9.6cmで、内行花文鏡の可能性はある。

12. 銅鏃 (第422図、P L101)

1点のみ⑤-1区S D1016から出土した。石釧・管玉・銅鏡の出土地点にほど近い、S D1016の内岸付近で出土した。出土状況は壺の底部破片の上に乗っていたが、遺棄された時点の状態なのかはわからない。形態はいわゆる柳葉形のもので、茎を欠損する。出土地点が石釧・管玉・銅鏡出土地点に近いのでこれらの遺物との関連が考えられるが、1点のみなのでどのような意味があったのかはわからない。

13. ベンガラ

S K2207の3層より塊で出土した。赤色の土塊で出土し、容器に入れられた状態ではなかった。成分の分析を行ったところベンガラであることが判明した。本遺跡唯一の出土品であるが、このベンガラが何に使われたのかは明らかでない。これも漆附着土器や鍛冶関連遺物と同様に何らかの器物生産にかかわる材

表1 玉類一覧

収納	出土遺構、取り上げ番号	玉種	色	石質	長さ (高) mm	幅(径) mm	上孔 mm	下孔 mm	頭幅 mm	重量 g	備考	図番号
09	S K2312	勾玉	白濁暗灰	緑色滑石岩	19.8	5.5	3.0	3.0	9.0	1.55	両側穿孔	- 8
10	S K2444 NO.1	勾玉	茶・白濁	玉髓	29.2	7.0	2.0	2.5	10.2	4.41	両側穿孔	- 9
11	S K2757	勾玉	白濁茶褐色	滑石	17.0	4.0	2.2	2.0	6.8	0.99	両側穿孔	- 10
12	㊟-1区 検出面	勾玉	白濁緑色	ヒスイ	20.0	8.5	3.5	3.0	8.5	3.72	両側穿孔	- 17
13	S D1016 ㊟-1区 NO.250 VWD11	勾玉	白濁暗灰	滑石	18.8	6.0	2.5	2.0	7.2	1.84	両側穿孔	- 13
14	S D1016 ㊟-1区 NO.59 VWC14	勾玉	白濁暗灰	滑石	14.5	4.0	2.0	2.0	6.5	0.70	両側穿孔	- 16
15	S D1016 ㊟-1区 NO.88 VVG12	勾玉	白濁暗灰	滑石	17.5	5.5	2.5	2.8	8.0	1.33	両側穿孔	- 15
16	S D1016 ㊟-2区 IVFG02	勾玉	黒色	滑石	24.2	7.0	2.0	1.8	10.0	3.40	両側穿孔	- 14
17	S D1016 ㊟-1区 IIEP08	管玉	濃緑色	緑色凝灰岩	54.0	13.2	4.2	4.0		(7.68)	両側穿孔 縦半分に破損	- 31
18	S K2828	管玉	淡灰緑色	緑色凝灰岩	59.8	13.6	5.2	5.0		22.40	両側穿孔	- 25
19	S K2027 2層	管玉	濃緑色	緑色凝灰岩	22.2	3.8	2.5	2.2		0.43	両側穿孔	- 18
20	S K2189	管玉	黒灰色	緑色凝灰岩	18.0	8.5	3.0	2.5		2.20	両側穿孔	- 20
21	S K2063 B	管玉	濃緑色	緑色凝灰岩	23.8	6.2	2.5	2.2		1.68	両側穿孔	- 19
22	S K2751	管玉	灰緑色	緑色凝灰岩	(9.1)	(7.2)	(2.4)	—		(0.23)	不明 破損小片 篩選別	- 21
23	S K2759	管玉	灰緑色	緑色凝灰岩	34.8	7.6	3.0	2.8		3.75	両側穿孔	- 23
24	S K2759	管玉	黒緑色	緑色凝灰岩	26.2	7.0	3.0	2.5		2.35	両側穿孔	- 22
25	S K2865	管玉	黒灰色	緑色凝灰岩	16.0	4.0	2.5	2.2		0.41	両側穿孔	- 24
26	S D1007 ㊟-1区 NO.206 IIED08	管玉	濃緑色	緑色凝灰岩	33.0	7.2	4.2	3.8		2.53	両側穿孔	- 26
27	S D1016 ㊟-1区 NO.1 IIEP08	管玉	濃緑色	緑色凝灰岩	19.0	5.8	3.0	2.2		1.09	両側穿孔	- 27
28	S D1016 ㊟-1区 NO.2 IIEP09	管玉	青緑灰色	緑色凝灰岩	32.8	9.0	3.5	3.2		5.04	両側穿孔	- 28
29	S D1016 ㊟-1区 NO.69 IIEO09	管玉	濃緑色	緑色凝灰岩	22.2	9.5	4.2	3.6		4.41	両側穿孔	- 29
30	S D1016 ㊟-1区 NO.87 VVG12	管玉	灰緑色	緑色凝灰岩	40.0	8.8	4.2	3.8		5.33	両側穿孔	- 30
31	S D1016 ㊟-1区 NO.365 VVB13	管玉	濃緑色	緑色凝灰岩	30.8	9.5	4.0	3.7		4.88	両側穿孔	- 32
32	S D1016 ㊟-1区東ベルト 内IVBE12-BG12	管玉	灰緑色	緑色凝灰岩	20.6	5.3	3.0	1.5		0.99	片側穿孔	- 31
33	低地S Q1004 ㊟-2区 IJL09	管玉	淡緑色	緑色凝灰岩	19.2	6.8	3.5	3.5		0.96	両側穿孔	- 33
34	S Q2016 ㊟-1区 VRL15	管玉	青緑灰色	緑色凝灰岩	42.2	10.0	4.5	3.8		6.90	両側穿孔 質悪い 被熱	- 34
35	S K2047	白玉	黒色	滑石	3.3	5.5	2.9	2.6		0.12	タイコ型 縦研 片側穿孔	- 35
36	S K2759	白玉	黒色	滑石	2.0	4.3	2.2	2.1		0.04	タイコ型 縦研 片側穿孔	- 37
37	S K2827カ	白玉	黒色	滑石	2.3	4.2	2.2	2.2		0.06	タイコ型 横研 片側穿孔	- 38
38	S K2827カ	白玉	黒灰色	滑石	2.4	4.0	2.2	2.1		0.05	タイコ型 縦研 片側穿孔	篩選別 - 39
39	S K2827カ	白玉	黒灰色	滑石	2.0	4.0	2.1	2.0		0.05	算盤玉形 縦研 片側穿孔	篩選別 - 40
40	S K2827カ	白玉	黒色	滑石	2.4	4.5	2.1	2.1		0.06	算盤玉形 縦研 片側穿孔	篩選別 - 41
41	S K2827カ	白玉	黒色	滑石	2.6	4.2	2.2	2.2		0.06	算盤玉形 縦研 片側穿孔	篩選別 - 42
42	S K2827カ	白玉	暗灰色	滑石	2.6	4.4	2.2	2.1		0.06	算盤玉形 縦研 片側穿孔	篩選別 - 43
43	S K2827カ	白玉	暗灰色	滑石	2.5	4.1	2.3	2.3		0.05	算盤玉形 縦研 片側穿孔	篩選別 - 44
44	S K2863	ガラス小玉	スカイブルー	ガラス	3.3	4.3	2.2	2.2		0.07		篩選別 - 150
45	S K2871	白玉	黒色	滑石	3.2	4.6	2.5	2.2		0.10	算盤玉形 縦研 片側穿孔	篩選別 - 65
46	S K2871	白玉	黒色	滑石	4.0	5.1	3.0	2.7		0.14	算盤玉形 縦研 片側穿孔	篩選別 - 66
47	S D1016	白玉	黒色	滑石	1.9	4.4	2.5	2.2		0.05	算盤玉形 縦研 片側穿孔	- 68
48	S D1016 ㊟-1区 NO.311 VWE16	白玉	暗緑灰色	滑石	2.9	4.7	2.0	2.0		0.09	算盤玉形 縦研 片側穿孔	- 69
49	S D1016 ㊟-1区 NO.311 VWE16	白玉	黒色	滑石	3.0	4.4	2.5	2.2		0.08	算盤玉形 縦研 片側穿孔	- 70
50	S D1016 ㊟-1区 NO.311 VWE16	白玉	黒色	滑石	2.2	4.7	2.2	2.0		0.06	タイコ形 縦研 片側穿孔	- 71
51	S D1016 ㊟-1区 NO.311 VWE16	白玉	暗緑灰色	滑石	2.5	5.4	2.0	1.9		0.11	タイコ形 縦研 片側穿孔	- 72
52	S D1016 ㊟-1区 NO.311 VWE16	白玉	暗緑灰色	滑石	2.1	5.1	1.9	1.9		0.07	タイコ形 縦研 片側穿孔	- 73
53	S D1016 ㊟-1区 NO.314 VWE16	白玉	暗青灰色	滑石	3.5	4.5	2.0	1.8		0.10	タイコ形 縦研 片側穿孔	- 74
54	S D1016 ㊟-1区 NO.314 VWE16	白玉	黒色	滑石	3.0	4.9	2.4	2.2		0.10	やや筒形 縦研 片側穿孔	- 75
55	S D1016 ㊟-1区 NO.314 VWE16	白玉	黒色	滑石	2.0	4.8	2.3	2.3		0.06	算盤玉形 縦研 片側穿孔	- 76
56	S D1016 ㊟-1区 NO.314 VWE16	白玉	暗緑灰色	滑石	2.5	4.5	2.0	1.9		0.07	算盤玉形 縦研 片側穿孔	- 77
57	S D1016 ㊟-1区 NO.314 VWE16	白玉	暗緑灰色	滑石	1.8	4.9	2.1	2.1		0.06	算盤玉形 縦研 片側穿孔	- 78
58	S D1016 ㊟-1区 NO.314 VWE16	白玉	黒色	滑石	2.0	4.3	2.0	2.0		0.05	算盤玉形 縦研 片側穿孔	- 79
59	S D1016 ㊟-1区 NO.314 VWE16	白玉	暗緑灰色	滑石	2.3	4.7	2.3	2.3		0.07	タイコ形 縦研 片側穿孔	- 80
60	S D1016 ㊟-1区 NO.314 VWE16	白玉	黒緑色	滑石	2.7	4.9	2.4	2.2		0.09	タイコ形 縦研 片側穿孔	- 81
61	S D1016 ㊟-1区 NO.314 VWE16	白玉	暗緑灰色	滑石	2.6	4.7	1.8	1.8		0.08	算盤玉形 縦研 片側穿孔	- 82
62	S D1016 ㊟-1区 NO.314 VWE16	白玉	黒色	滑石	1.3	4.9	1.8	1.8		0.03	算盤玉形 縦研 片側穿孔	- 82
63	S D1016 ㊟-1区 NO.314 VWE16	白玉	黒緑色	滑石	2.2	4.1	1.5	1.5		0.05	算盤玉形 縦研 片側穿孔	- 84
64	S D1016 ㊟-1区 NO.314 VWE16	白玉	黒色	滑石	1.0	4.1	2.0	2.0		0.02	算盤玉形 縦研 片側穿孔	- 85
65	S D1016 ㊟-1区 NO.314 VWE16	白玉	灰緑色	滑石	1.5	4.0	1.9	1.8		0.02	タイコ形 片側穿孔	- 86
66	S D1016 ㊟-1区 NO.314 VWE16	白玉	緑黒色	滑石	1.8	3.8	1.8	1.6		0.02	タイコ形 片側穿孔	- 87
67	S D1016 ㊟-1区	ガラス小玉	スカイブルー	ガラス	2.7	4.0	1.6	1.4		0.04		- 151
68	S D1016 ㊟-1区 VWC14	ガラス小玉	スカイブルー	ガラス	3.4	5.2	1.7	1.7		0.09		- 152
69	S Q2016 VRN01	ガラス小玉	スカイブルー	ガラス	3.0	4.4	2.0	2.0		0.06		- 156
70	S Q2017NO.23	小玉	暗褐色	滑石	2.0	4.6	2.0	1.8		0.06	やや算盤 縦研 片側穿孔	- 144
71	S Q1004 ㊟-2区 IJQ08	ガラス小玉	スカイブルー	ガラス	3.2	4.3	2.3	2.2		0.07		- 157
72	S Q2020 NO.1 IVAO11	ガラス小玉	スカイブルー	ガラス	2.9	4.1	1.9	1.9		0.05		- 158
73	S Q2020 NO.2 IVAO11	小玉	暗灰褐色	滑石	4.0	6.0	2.7	2.6		0.20	算盤玉形 縦横 片側穿孔	- 145
74	S Q2020 NO.3 IVAO11	ガラス小玉	暗スカイブルー	ガラス	4.8	5.0	3.0	3.0		0.12		- 159
75	S Q2020 NO.4 IVAO11	ガラス小玉	暗スカイブルー	ガラス	2.8	4.6	2.5	2.4		0.07		- 160
76	S Q2020 NO.5 IVAO11	粟玉	白濁暗緑色	滑石	7.3	6.7	2.2	2.1		0.43	縦研 片側穿孔	- 146
77	S K2843	白玉	茶褐色	滑石	1.9	4.4	2.0	2.0		0.03	タイコ形 片側穿孔	- 67
78	S D1016 ㊟-1区 NO.310 VWE16	ガラス小玉	コバルトブルー	ガラス	6.4	7.0	4.4	4.4		0.38		- 153
79	S D1016 ㊟-1区 NO.312 VWE16	ガラス小玉	暗スカイブルー	ガラス	5.5	6.7	3.4	3.0		0.25		- 154
80	S D1016 ㊟-1区 VWC14	ガラス小玉	スカイブルー	ガラス	4.9	5.3	3.6	3.1		0.14		- 155
81	S D1016 ㊟-2区 IVAC20	勾玉	暗灰褐色	土製	24.5	9.0	2.0	3.0		8.5		- 1
82	S D1016 ? ㊟-2区	白玉	黒灰色	滑石	3.0	4.6	2.1	2.0		0.08	算盤玉形 縦研 片側穿孔	- 147
83	S D1016 ? ㊟-2区	白玉	黒灰色	滑石	3.0	4.7	2.1	2.0		0.08	算盤玉形 縦研 片側穿孔	- 148
84	S D1016 ㊟-2区 NO.313 VWE16	白玉	黒色	滑石	3.8	5.7	2.4	2.2		0.20	タイコ形 縦研 片側穿孔	- 88
85	S D1016 ㊟-1区 NO.313 VWE16	白玉	黒色	滑石	3.3	6.0	2.5	2.3		0.20	タイコ形 縦研 片側穿孔	- 89

第3章 遺 物

86	SD1016	㊟-1区	NO.313	VWE16	白玉	黒色	滑石	3.9	6.0	2.4	2.4	0.23	タイコ形	縦研	片側穿孔?	-	90			
87	SD1016	㊟-1区	NO.313	VWE16	白玉	黒色	滑石	2.6	5.5	2.5	2.3	0.13	タイコ形	縦研	片側穿孔	-	91			
88	SD1016	㊟-1区	NO.313	VWE16	白玉	黒色	滑石	2.5	5.1	2.1	2.0	0.11	タイコ形	縦研	片側穿孔	-	92			
89	SD1016	㊟-1区	NO.313	VWE16	白玉	黒色	滑石	2.5	5.2	2.0	2.0	0.11	タイコ形	縦研	片側穿孔	-	93			
90	SD1016	㊟-1区	NO.313	VWE16	白玉	黒灰色	滑石	2.1	5.2	2.0	2.0	0.08	タイコ形	縦研	片側穿孔	-	94			
91	SD1016	㊟-1区	NO.313	VWE16	白玉	黒灰色	滑石	2.5	5.3	2.2	2.0	0.11	タイコ形	縦研	片側穿孔	-	95			
92	SD1016	㊟-1区	NO.313	VWE16	白玉	黒色	滑石	2.3	4.4	2.5	2.4	0.07	タイコ形	縦研	片側穿孔	-	96			
93	SD1016	㊟-1区	NO.313	VWE16	白玉	黒色	滑石	2.0	4.6	2.7	2.7	0.06	タイコ形	縦研	片側穿孔	-	97			
94	SD1016	㊟-1区	NO.313	VWE16	白玉	黒色	滑石	2.9	4.7	2.5	2.2	0.08	算盤玉形	縦研	片側穿孔	-	98			
95	SD1016	㊟-1区	NO.313	VWE16	白玉	黒色	滑石	3.2	4.1	2.0	2.0	0.08	算盤玉形	雑縦	片側穿孔	-	99			
96	SD1016	㊟-1区	NO.368	VWE16	白玉	暗灰緑色	滑石	1.7	4.3	2.1	2.0	0.04	算盤玉形雑縦研	片側穿孔	篩選別	-	100			
97	SD1016	㊟-1区	NO.368	VWE16	白玉	黒緑色	滑石	2.0	4.3	2.3	2.2	0.04	算盤玉形	縦研	片側穿孔	篩選別	-	101		
98	SD1016	㊟-1区	NO.368	VWE16	白玉	黒緑色	滑石	1.1	4.0	2.2	2.1	0.02	算盤玉形	縦研	片側穿孔	篩選別	-	102		
99	SD1016	㊟-1区	NO.368	VWE16	白玉	黒緑色	滑石	1.3	3.8	2.3	2.2	0.02	算盤玉形	縦研	片側穿孔	篩選別	-	103		
100	SD1016	㊟-1区	NO.368	VWE16	白玉	暗灰緑色	滑石	2.5	4.0	2.2	2.2	0.05	算盤玉形	縦研	片側穿孔	篩選別	-	104		
101	SD1016	㊟-1区	NO.368	VWE16	白玉	黒緑色	滑石	1.2	4.2	2.2	2.1	0.02	タイコ形	縦研	片側穿孔	篩選別	-	105		
102	SD1016	㊟-1区	NO.368	VWE16	白玉	黒緑色	滑石	1.1	4.1	2.4	2.3	0.02	タイコ形	縦研	片側穿孔	篩選別	-	106		
103	SD1016	㊟-1区	NO.368	VWE16	白玉	黒緑色	滑石	1.4	4.2	2.0	2.0	0.03	タイコ形	縦研	片側穿孔	篩選別	-	107		
104	SD1016	㊟-1区	NO.368	VWE16	白玉	黒色	滑石	2.3	4.5	2.6	2.5	0.06	タイコ形	縦研	片側穿孔	篩選別	-	108		
105	SD1016	㊟-1区	NO.368	VWE16	白玉	黒色	滑石	2.2	4.5	2.8	2.7	0.07	タイコ形	不明	片側穿孔	篩選別	-	109		
106	SD1016	㊟-1区	NO.368	VWE16	白玉	黒色	滑石	1.5	4.4	2.4	2.3	0.04	タイコ形	不明	片側穿孔	篩選別	-	110		
107	SD1016	㊟-1区	NO.368	VWE16	白玉	黒色	滑石	1.9	4.5	2.6	2.3	0.05	タイコ形	縦研	片側穿孔	篩選別	-	111		
108	SD1016	㊟-1区	NO.368	VWE16	白玉	黒色	滑石	2.4	4.5	2.4	2.2	0.07	タイコ形	縦研	片側穿孔	篩選別	-	112		
109	SD1016	㊟-1区	NO.368	VWE16	白玉	黒色	滑石	2.1	4.6	2.4	2.3	0.06	タイコ形	縦研	片側穿孔	篩選別	-	113		
110	SD1016	㊟-1区	NO.368	VWE16	白玉	黒色	滑石	2.4	4.6	2.7	2.7	0.07	算盤玉形	縦研	片側穿孔	篩選別	-	114		
111	SD1016	㊟-1区	NO.368	VWE16	白玉	黒色	滑石	2.4	4.4	2.4	2.3	0.07	算盤玉形	縦研	片側穿孔	篩選別	-	115		
112	SD1016	㊟-1区	NO.368	VWE16	白玉	黒色	滑石	1.8	4.6	2.6	2.5	0.06	タイコ形	縦研	片側穿孔	篩選別	-	116		
113	SD1016	㊟-1区	NO.368	VWE16	白玉	黒色	滑石	2.3	4.3	2.7	2.6	0.07	算盤玉形	縦研	片側穿孔	篩選別	-	117		
114	SD1016	㊟-1区	NO.368	VWE16	白玉	黒色	滑石	2.6	4.5	2.5	2.5	0.07	算盤玉形	縦研	片側穿孔	篩選別	-	118		
115	SD1016	㊟-1区	NO.368	VWE16	白玉	黒色	滑石	2.0	4.5	2.5	2.2	0.06	タイコ形	縦研	片側穿孔	篩選別	-	119		
116	SD1016	㊟-1区	NO.368	VWE16	白玉	黒色	滑石	2.8	4.4	2.5	2.3	0.08	タイコ形	縦研	片側穿孔	篩選別	-	120		
117	SD1016	㊟-1区	NO.368	VWE16	白玉	黒色	滑石	2.6	4.2	2.5	2.5	0.07	タイコ形	縦研	片側穿孔	篩選別	-	121		
118	SD1016	㊟-1区	NO.368	VWE16	白玉	黒色	滑石	2.7	4.6	2.2	2.2	0.09	タイコ形	縦研	片側穿孔	篩選別	-	122		
119	SD1016	㊟-1区	NO.368	VWE16	白玉	黒緑色	滑石	2.1	4.7	2.4	2.3	0.07	タイコ形	縦研	片側穿孔	篩選別	-	123		
120	SD1016	㊟-1区	NO.368	VWE16	白玉	黒色	滑石	2.5	4.7	2.5	2.4	0.08	タイコ形	縦研	片側穿孔	篩選別	-	124		
121	SD1016	㊟-1区	NO.368	VWE16	白玉	黒色	滑石	2.3	5.3	2.4	2.3	0.12	タイコ形	縦研	片側穿孔	篩選別	-	125		
122	SD1016	㊟-1区	NO.368	VWE16	白玉	灰緑色	滑石	1.6	4.8	2.6	2.4	0.06	タイコ形	縦研	片側穿孔	篩選別	-	126		
123	SD1016	㊟-1区	NO.368	VWE16	白玉	黒緑色	滑石	2.3	5.3	2.2	2.0	0.12	タイコ形	縦研	片側穿孔	篩選別	-	127		
124	SD1016	㊟-1区	NO.368	VWE16	白玉	暗灰緑色	滑石	2.3	5.3	2.2	2.1	0.11	タイコ形	縦研	片側穿孔	篩選別	-	128		
125	SD1016	㊟-1区	NO.368	VWE16	白玉	黒緑色	滑石	2.4	5.6	2.4	2.3	0.14	タイコ形	縦研	片側穿孔	篩選別	-	129		
126	SD1016	㊟-1区	NO.368	VWE16	白玉	暗灰茶色	滑石	2.4	5.3	2.2	2.0	0.10	タイコ形	縦研	片側穿孔	篩選別	-	130		
127	SD1016	㊟-1区	NO.368	VWE16	白玉	黒色	滑石	3.0	4.9	2.4	2.4	0.12	タイコ形	縦研	片側穿孔	篩選別	-	131		
128	SD1016	㊟-1区	NO.368	VWE16	白玉	黒色	滑石	2.7	4.6	2.2	2.1	0.09	タイコ形	縦研	片側穿孔	篩選別	-	132		
129	SD1016	㊟-1区	NO.368	VWE16	白玉	黒色	滑石	2.0	5.2	2.2	2.1	0.10	タイコ形	縦研	片側穿孔	篩選別	-	133		
130	SD1016	㊟-1区	NO.368	VWE16	白玉	黒色	滑石	2.1	5.3	2.2	2.0	0.11	タイコ形	縦研	片側穿孔	篩選別	-	134		
131	SD1016	㊟-1区	NO.368	VWE16	白玉	黒色	滑石	1.1	4.6	1.8	1.8	0.03	タイコ形	縦研	片側穿孔	篩選別	-	135		
132	SD1016	㊟-1区	NO.368	VWE16	白玉	灰緑色	滑石	2.2	4.7	2.3	2.2	0.08	算盤玉形	縦研	片側穿孔	篩選別	-	136		
133	SD1016	㊟-1区	NO.368	VWE16	白玉	黒色	滑石	2.9	4.5	2.4	2.3	0.09	タイコ形	縦研	片側穿孔	篩選別	-	137		
134	SD1016	㊟-1区	NO.368	VWE16	白玉	黒色	滑石	2.6	4.5	2.5	2.3	0.08	タイコ形	縦研	片側穿孔	篩選別	-	138		
135	SD1016	㊟-1区	NO.368	VWE16	白玉	黒色	滑石	1.5	4.9	2.4	2.2	0.06	タイコ形	縦研	片側穿孔	篩選別	-	139		
136	SD1016	㊟-1区	NO.368	VWE16	白玉	黒色	滑石	2.0	5.6	2.4	2.3	0.10	タイコ形	縦研	片側穿孔	篩選別	-	140		
137	SD1016	㊟-1区	NO.368	VWE16	白玉	黒色	滑石	2.5	5.8	2.2	2.2	0.17	タイコ形	縦研	片側穿孔	篩選別	-	141		
138	SD1016	㊟-1区	NO.368	VWE16	白玉	黒色	滑石	2.1	4.6	2.5	2.2	0.07	タイコ形	縦研	片側穿孔	篩選別	-	142		
139	SD1016	㊟-1区	NO.368	VWE16	白玉	黒色	滑石	1.4	4.2	1.9	1.9	0.04	タイコ形	縦研	片側穿孔	篩選別	-	143		
140	SK2827				勾玉	暗緑灰色	滑石	14.9	4.1	2.0	2.0	7.9	0.80			両側穿孔	篩選別	-	12	
141	SK2827				勾玉	暗緑灰色	滑石	14.1	3.6	2.3	2.2	7.6	0.61			両側穿孔	篩選別	-	11	
142	SK2827				算盤玉	白濁やや透明	水晶	4.6	6.8	1.7	1.6	0.30	算盤玉形	縦研	片側穿孔	篩選別	-	149		
143	SK2827				白玉	黒緑色	滑石	2.1	4.4	2.1	2.0	0.07	タイコ形	縦研	片側穿孔	篩選別	-	45		
144	SK2827				白玉	黒色	滑石	2.5	5.0	2.6	2.6	0.10	算盤玉形	縦研	片側穿孔	篩選別	-	46		
145	SK2827				白玉	黒緑色	滑石	2.5	5.0	2.6	2.6	0.09	算盤玉形	縦研	片側穿孔	篩選別	-	47		
146	SK2827				白玉	黒緑色	滑石	2.2	4.9	2.5	2.4	0.08	算盤玉形	縦研	片側穿孔	篩選別	-	48		
147	SK2827				白玉	黒緑色	滑石	2.0	4.9	2.5	2.4	0.08	算盤玉形	縦研	片側穿孔	篩選別	-	49		
148	SK2827				白玉	白濁黒緑色	滑石	2.0	5.0	2.4	2.4	0.08	タイコ形	縦研	片側穿孔	篩選別	-	50		
149	SK2827				白玉	黒色	滑石	1.7	4.4	2.5	2.4	0.05	タイコ形	縦研	片側穿孔	篩選別	-	51		
150	SK2827				白玉	灰緑色	滑石	3.1	4.6	2.0	1.9	0.10	タイコ形	縦研	片側穿孔	篩選別	-	52		
151	SK2827				白玉	黒緑色	滑石	2.3	4.4	2.1	2.1	0.07	タイコ形	縦研	片側穿孔	篩選別	-	53		
152	SK2827				白玉	黒緑色	滑石	2.0	4.0	2.3	2.2	0.04	タイコ形	縦研	片側穿孔	篩選別	-	54		
153	SK2827				白玉	黒緑色	滑石	2.0	4.0	2.0	2.0	0.04	タイコ形	不明	片側穿孔	篩選別	-	55		
154	SK2827				白玉	黒緑色	滑石	2.5	4.0	2.0	2.0	0.05	タイコ形	縦研	片側穿孔	篩選別	-	56		
155	SK2827				白玉	黒色	滑石	2.5	4.1	2.0	1.9	0.06	タイコ形	縦横	片側穿孔	篩選別	-	57		
156	SK2827				白玉	黒灰色	滑石	1.9	4.0	2.0	2.0	0.04	タイコ形	縦研	片側穿孔	篩選別	-	58		
157	SK2827				白玉	暗灰色	滑石	2.0	4.2	2.0	2.0	0.05	タイコ形	縦研	片側穿孔	篩選別	-	59		
158	SK2827				白玉	黒緑色	滑石	1.6	4.2	2.0	1.9	0.04	タイコ形	縦研	片側穿孔	篩選別	-	60		
159	SK2827				白玉	黒緑色	滑石	1.2	4.0	2.0	2.0	0.03	タイコ形	縦研	片側穿孔	篩選別	-	61		
160	SK2827				白玉	黒緑色	滑石	2.2	4.0	2.1	2.0	0.05	タイコ形	縦研	片側穿孔	篩選別	-	62		
161	SK2827				白玉	黒緑色	滑石	2.2	4.0	2.6	2.2	0.04	タイコ形	縦研	片側穿孔	篩選別	-	63		
162	SK2827				白玉	黒緑色	滑石	2.3	(3.8	-	-	0.03	タイコ形	縦研	片側穿孔	篩選別	-	64		
	SK2747?				ガラス小玉	スカイブルー	ガラス	2.6	(3.4	1.0	-	0.01	破損					-	65	
	SQ2016	㊟-2区VRO01			土製勾玉			37.0	14.5	3.0	4.5	14.0	10.62						-	2
	SK2184				土玉			26.5	28.5	4.0	3.5		20.34						-	3
	SD1016	㊟-1区			土玉			20.0	21.5	6.5	7.5		8.13						-	4
	SK1050				土玉?			16.5	15.2	-	-		4.28			孔なし			-	7

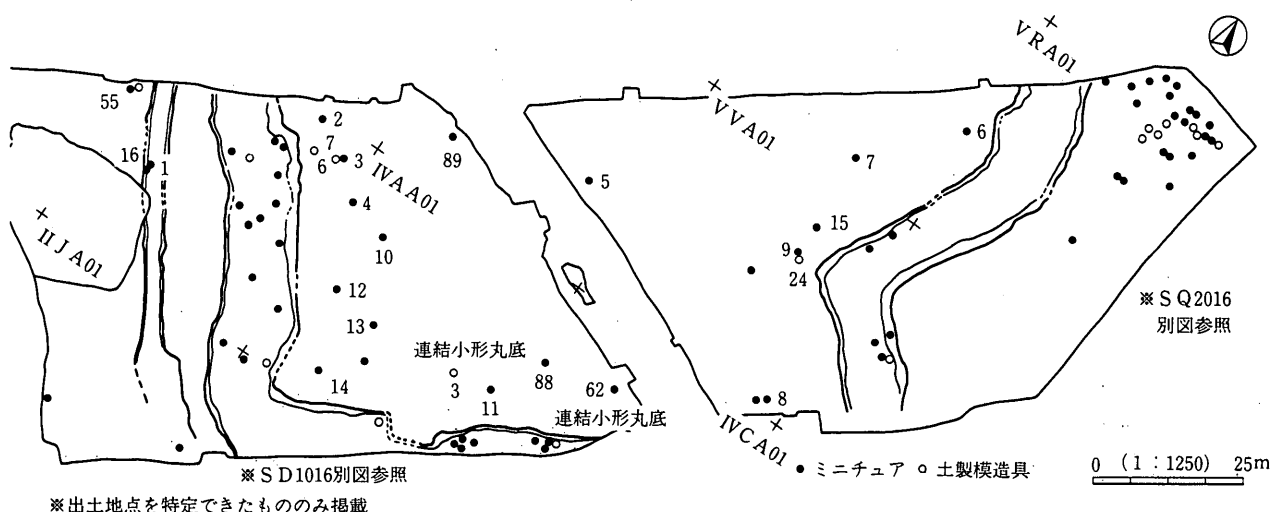
料で、製品は遺跡外へ搬出されているのだろうか。

第3節 土製品

土器以外の土製品を一括した。名称・分類は必ずしも妥当とはいえないものがあるが、ミニチュア土器、異形土器とした連結小型丸底土器、土製模造具、支脚、土錘、羽口、漆付着土器、性格不明の焼粘土塊に区分して記述する。

1. ミニチュア土器 (第425～427図、P L102・103)

通常のサイズより小型で、特殊な目的に供されたと思われる土器をミニチュア土器とした。識別できたものは全部で104点あるが、抽出にあたって明確な統計的な数値基準を設定していないため、必ずしも厳密な区別ができていないところがある。そのため、土器のなかにミニチュア土器が混在したり、ミニチュア土器と識別が難しい土器もあると思われる。また、整形方法は手づくねで製作されたものばかりでなく、通常の土器の製作方法に類似し、形態を縮小しただけだと思われるものや、刷毛目痕を残すものが確認できた。したがって、ここでは手づくねとは呼称せず、ミニチュア土器と呼ぶことにした。器種は多様なものがある。必ずしも明確に区別できるわけではないが、土器と同様の製作技法によるものでは小型丸底・器台・高杯・杯・甕または壺、小型丸底土器の胴部に穿孔されたものや、図の6のような口縁の内湾する高坏型がみられる。なお、胴部に穿孔をもつ小型丸底土器が「はそう」の模倣品と認められるか、あるいは他の土器にもみられる胴部穿孔された特殊な土器(註)と捉えられるかは明らかでない。また、6は白の土製模造品と捉えたほうが良いかもしれない。これに対して手づくねで作られたものは器種が不明瞭で壺型、坏型としか表現できないものが多いが、胴部に穿孔されたものがここでも見られる。整形方法の識別は曖昧さを残すが、製作者もしくは製作契機が多様であったことを示すかもしれない。また、胎土は土師器と類似しているが、手づくねで作られた一部に灰白色の砂粒を含まない粘土を使用するものがある。図示した13・25・37が該当するが、他のミニチュア土器とは製作地が異なる可能性も考えられ



第194図 土製模造具・ミニチュア出土分布 (数字は図の掲載番号、SD1016・SQ2016は各項参照)

る。

ミニチュア土器は土坑、SD1016、SQ1004、SQ2016、検出面から出土し、調査記録から出土地点がある程度特定できるもので出土分布図を作成してみると（第194図）、本遺跡内の各所で出土しているものの、SD1016とSQ2016からの出土数が最も多いなどの偏在する傾向もみられる。土坑出土の場合はSD1016岸際付近の土坑から出土する傾向があり、なかでもSD1016の西・南辺側の土坑から出土する傾向がある。個々の土坑で出土したミニチュア土器は1点前後しかなく、しかも破片出土が多いことから土坑へ直接廃棄されたと断定できるものは少ない。したがって、土坑出土のミニチュア土器は他の土器と同様の契機で入ったものではない可能性があるが、出土分布の偏在性や出土状態からは西・南辺周辺での使用契機の多さ、あるいはその契機がより個別であったことが想定できる。特にSD1016西・南辺周辺では井戸跡の分布密度が高く、しかも炭化物を大量に含むものが多いという傾向と関連するかもしれない。もちろん、ミニチュア土器使用が井戸跡を初めとする土坑と直結していたという所見は得られていないが、両者の使用者の共通性、あるいは空間利用の共通性が背景にあるとも考えられる。このことはSD1016内での空間利用を考える上で興味深い。溝跡では圧倒的にSD1016からの出土が多い。出土数は西辺・南辺に多く、出土状態は⑤-1・⑦-2区の西辺中央部では散在的、⑧-1・⑩-1区などでは特定場所に集中する傾向がある。西・南辺での出土数が多い傾向は土坑でみられた分布状況と類似する。これも空間利用のあり方に規定された様相とも思われる。しかし、一方で出土量の多さからはSD1016に特長的な遺物で、SD1016と直接結びついて使用される場合があったことも考えられなくはない。

次に遺物集中ではSQ2016のみから密集して出土した。その数は大量というわけではないが、SQ2016内では外縁部付近で弧を描くように分布しており、しかも土製模造具とは異なった分布を示すことが知られた。同じ遺構内ながら、この両者は異なる使用契機によるものと推定される。このことは土製模造具自体の出土分布がSQ2016にほぼ集中している点と関連しよう。

以上の出土分布からは遺跡各所でミニチュア土器が使用されたと推測され、製作契機の違いが想定され

表2 ミニチュア土器一覧

収納番号	出土地点、取り上げナンバー	口径 cm	底径 cm	高さ cm	備考 —整形その他	図番号
01	SK1013	—	2.6	—	不明 整形? 摩滅のため子細不明	— 1
02	SK1025 NO.11	4.8	2.9	4.5	小型丸底形? 手づくね	— 2
03	SK1046	3.1	3.3	(4.3)	小型丸底形? 手づくね	— 3
04	SK2003 NO.7	—	2.4	—	小型丸底形 整形? 摩滅のため子細不明	— 4
05	SK2063	7.8	6.7	7.2	白形? 整形? 摩滅のため子細不明	— 5
06	SK2054 NO.9	4.4	3.0	3.8	不明 手づくね、外面ミガキ?	— 6
07	SK2127	5.5	2.0	4.2	小型丸底形 整形? 摩滅のため子細不明	— 7
08	SK2208	5.5	4.2	3.4	坏形or鉢形? 底部穿孔 手づくね?	— 8
09	SK2284	—	1.8	—	小型丸底形? 整形	—
10	SK2299	—	2.0	—	小型丸底形 整形—外面ミガキ	— 9
11	SK2313	—	3.4	—	小型丸底形 整形	—
12	SK2321 NO.1	—	3.4	—	杯型? 手づくね→整形	— 10
13	SK2478 NO.1	—	2.2	—	坏形or鉢形? 整形	— 11
14	SK2744 NO.20	5.3	丸底	4.1	小型丸底形 整形	— 14
15	SK2748	9.1	3.9	4.9	鉢形 整形摩滅のため子細不明	— 12
16	SK2759	1.7	丸底	2.1	不明 手づくね	— 13
17	SK2828 P8	—	3.1	—	不明 整形	—
18	SK2874	—	—	(2.8)	小型丸底形 整形	— 15
19	SD1007 (IIEE13)	3.6	3.6	2.8	小型丸底形? 手づくね	— 16
20	SD1008 (⑧-1区)	—	3.3	—	小型丸底形? 手づくね	—
21	SD1020 NO.6	7.7	5.0	4.2	不明 手づくね	— 17
22	SD1057	1.6	2.2	2.3	小型丸底形 胴部穿孔 手づくね	— 18
23	SD2003	—	1.5	—	不明 手づくね	— 19
24	SD2013	—	3.4	—	小型丸底形 整形—内面刷毛ナデ	— 20
25	SD1016 (⑤-1区) NO.26	5.8	3.4	4.6	不明 手づくね	— 21
26	SD1016 (⑤-1区) NO.54	4.4	丸底	3.7	小型丸底形 整形—摩滅のため子細不明	— 22
27	SD1016 (⑤-1区) NO.84	4.5	2.0	5.0	小型丸底形 整形—内面刷毛ナデ	— 23
28	SD1016 (⑤-1区) NO.96	2.6	2.4	1.8	不明 手づくね	— 24
29	SD1016 (⑤-1区) NO.918	3.8	3.4	4.0	小型丸底形? 手づくね	白色粘土層 — 25
30	SD1016 (⑤-1区) 西岸	—	3.3	—	小型丸底形 整形摩滅のため子細不明	— 30
31	SD1016 (⑤-1区)	—	4.1	—	不明 手づくね	— 26

32	S D1016	(5-1区)	-	丸底	-	小型丸底形	整形摩滅のため子細不明	-	27
33	S D1016	(5-1区)	-	2.8	-	小型丸底形?	整形摩滅のため子細不明	-	28
34	S D1016	(5-1区)	-	1.9	-	小型丸底形	整形摩滅のため子細不明	-	29
35	S D1016	(5-1区)	2層	1.7	-	壺?	手づくね	-	31
36	S D1016	(5-1区)	-	3.2	-	不明	手づくね?	-	-
37	S D1016	(5-1区)	-	1.5	-	小型丸底形	整形摩滅のため子細不明	-	32
38	S D1016	(5-1区)	(4.7	1.4	(5.5	小型丸底形	整形一外面ミガキ	-	33
39	S D1016	(5-1区)	5.7	丸底	3.8	小型丸底形	整形摩滅のため子細不明	-	34
40	S D1016	(5-1区)	4.4	1.9	3.1	不明	整形一内面刷毛ナデ?	-	35
41	S D1016	(8-1区) NO.7	-	2.0	-	小型丸底形	整形摩滅のため子細不明	-	36
42	S D1016	(8-1区) NO.9	3.0	2.0	2.8	不明	手づくね	-	37
43	S D1016	(8-1区) NO.12	3.8	3.0	2.3	不明	手づくね	-	38
44	S D1016	(8-1区) NO.12	6.2	3.4	4.7	小型丸底形?	手づくね	-	39
45	S D1016	(8-1区) IVAT16	-	3.9	-	不明	整形摩滅のため子細不明	-	-
46	S D1016	(8-1区) IVBE13	7.2	3.4	3.8	不明	整形摩滅のため子細不明	-	40
47	S D1016	(8-1区) IVBF13	5.9	3.2	6.0	壺OR甕	整形一内面刷毛ナデ	-	41
48	S D1016	(7-2区) P120	-	丸底	-	小型丸底形	整形一外面ミガキ?	-	42
49	S D1016	(7-2区) P203	4.0	2.0	5.2	壺形	整形一刷毛ナデ?	-	43
50	S D1016	(7-2区) P275	-	2.8	-	不明	整形摩滅のため子細不明	-	44
51	S D1016	(7-2区) IIER11	-	4.0	-	不明	手づくね	-	-
52	S D1016	(7-2区) IIER15	-	4.6	-	不明	手づくね	-	-
53	S D1016	(7-2区) IIEP11	3.1	2.6	3.1	小型丸底形	整形摩滅のため子細不明	-	45
54	S D1016	(7-2区) IVFA01	5.7	2.3	5.6	小型丸底形?	整形一外面刷毛ナデ	-	46
55	S D1016	(7-2区) IJJS01	-	3.7	-	不明	整形摩滅のため子細不明	-	47
56	S D1016	(7-2区) 一括	-	1.9	-	不明	不明	-	48
57	S D1016	(7-2区) 一括	-	2.8	-	不明	手づくね	-	49
58	S D1016	(10-1区) NO.120	-	丸底	-	小型丸底形?	手づくね	-	50
59	S D1016	(10-1区) NO.130	4.7	5.0	4.0	器台	整形摩滅のため子細不明	-	51
60	S D1016	(10-1区) NO.290	-	1.8	-	不明	手づくね	-	52
61	S D1016	(10-1区) VWE11	-	3.3	-	不明	手づくね	-	53
62	S D1016	(10-1区)	-	3.8	-	不明	整形一内面刷毛ナデ	-	54
63	S X1001	IIEA09	5.1	5.2	2.0	杯形?	手づくね	-	55
64	S Q1004	(7-2区)	-	4.3	-	不明	手づくね	-	56
65	S Q1004	(7-2区) IVFA10	-	3.5	-	杯形?	手づくね	7区東低地と表記	57
66	S Q1004	(7-2区) IJJ13	-	丸底	-	小型丸底形	整形摩滅で子細不明	7区東低地と表記	58
67	S Q1004	(7-2区)	-	3.7	-	小型丸底形	整形摩滅で子細不明	7区東低地と表記	59
68	S Q1004	(7-2区)	-	-	-	高杯形	摩滅で子細不明	7区東低地と表記	60
69	⑦-1区水田面		(7.0	丸底	(4.5	小型丸底形	整形一外面刷毛ナデ	-	61
70	S Q2006	(5-2区) NO.5	3.2	2.9	2.1	不明	手づくね	-	62
71	S Q2016	(5-2区) VMI21	5.2	2.7	3.1	小型丸底形	手づくね	-	63
72	S Q2016	(5-2区) VMJ20	-	3.0	-	小型丸底形	整形摩滅で子細不明	-	64
73	S Q2016	(5-2区) VMK19	-	3.5	-	不明	整形摩滅で子細不明	-	65
74	S Q2016	(5-2区) VML19	2.3	1.3	1.7	不明	手づくね	-	66
75	S Q2016	(5-2区) VML20	2.7	2.8	2.4	不明	手づくね	-	67
76	S Q2016	(5-2区) VMN20	5.9	丸底	5.0	小型丸底形	整形摩滅で子細不明	-	68
77	S Q2016	(5-2区) VMN20	-	2.2	-	小型丸底形	整形摩滅で子細不明	-	69
78	S Q2016	(5-2区) VMN20	-	4.0	-	不明	手づくね?	-	-
79	S Q2016	(5-2区) VMP20	-	5.2	-	不明	-	-	-
80	S Q2016	(5-2区) VRG02	-	3.3	-	小型丸底形	整形摩滅で子細不明	-	70
81	S Q2016	(5-2区) VRJ02	-	3.3	-	不明	手づくね	-	71
82-1	S Q2016	(5-2区) VRJ02	-	2.4	-	不明	手づくね	-	72
82-2	S Q2016	(5-2区) VRL08	-	1.6	-	不明	手づくね	-	73
83	S Q2016	(10-1区) VRL14	(1.5	2.8	(1.5	不明	手づくね	-	74
84	S Q2016	(5-2区) VRM01	-	丸底	-	小型丸底形?	手づくね	-	75
85	S Q2016	(5-2区) VRN01	2.0	2.1	2.1	小型丸底形	手づくね	-	76
86	S Q2016	(5-2区) VRN04	-	3.4	-	不明	整形一外面刷毛ナデ?	-	77
87	S Q2016	(5-2区) VRN04	-	3.3	-	杯形?	手づくね	-	78
88	S Q2016	(5-2区) VRP01	-	13.2	-	高杯形	整形摩滅で子細不明	-	79
89	S Q2016	(5-2区) VRO01	6.8	6.0	6.2	高杯形	整形摩滅で子細不明	-	80
90	S Q2016	(5-2区) VRO03	(4.8	3.4	(3.7	小型丸底形?	整形摩滅で子細不明	-	81
91	S Q2016	(5-2区) VRR06	-	3.6	-	不明	手づくね	-	82
92	S Q2016	トレンチA	-	3.5	-	不明	手づくね	-	83
93	S Q2016	トレンチE	-	4.4	-	不明	整形摩滅で子細不明	-	84
94	S Q2016	トレンチF	-	3.0	-	不明	手づくね	-	85
95	⑤-1区表探(U8)		-	丸底	-	小型丸底形	胸部穿孔 整形摩滅で子細不明	-	86
96	⑤-1区調査区壁		5.5	5.4	1.8	不明	手づくね	-	87
97	⑧-1区検出面	IVBB08	1.6	1.4	0.9	不明	手づくね	-	88
98	⑤-2区検出面	VUE16	-	1.8	-	小型丸底形	胸部穿孔 整形	-	89
99	S D1016	(7-2区)	5.0	4.5	1.9	不明	手づくね	-	90
100	S D1016	(10-1区) VWC10	-	3.8	-	不明	手づくね	-	-
101	S D1016	炭層下	-	4.0	-	不明	手づくね	-	-
102	S Q2016	(10-1区) R8	3.2	-	-	器台形	整形摩滅のため子細不明	-	-
103	S D1016	(7-2区) 一括	-	-	-	紛失	-	-	-

る点からは使用契機も多様であると思われる。しかし、全体的にはS D 1016区画内の西・南辺周辺とS Q 2016で比較的多く認められ、ここで使用される際の数が多いか、使用契機が多いことも考えられる。このミニチュア土器については従来から祭祀具と考えられており、祭祀遺跡ばかりでなく集落遺跡でも出土する。周辺遺跡でも本遺跡の時期以前から在地で使用されていたことが知られ、本遺跡の祭祀は在地にない新式の祭式で一貫されていたわけではなく、集落で行われる祭祀の延長上の行為も含まれていたと考えられる。本遺跡での祭祀の内容は単一ではなく、多岐にわたる祭祀が重層的に行われたことを示すと考えられるかもしれない。また、祭祀の重層性を考える上でS D 1016区画内でも西・南側に多いことやS Q 2016に集中傾向が見られることは注目される。ミニチュア土器を使用する祭式の内容や対象については明らかにできなかったものの、ミニチュア土器が他の祭祀具（例えば玉類）と伴ったり、土器と共に使用・廃棄されたと特定できたものはなく、その一方でミニチュア土器のみが集中的に出土した例がいくつか認められていることからすると、ミニチュア土器のみで執り行われるものと思われる。ただし、ミニチュア土器自体が特定の祭式に付随する祭具とは断定できないので、多様な用法があった可能性がある。

註 関根孝夫 1994 「胴部に小孔のある壺」『日本と世界の考古学—岩崎卓也先生退官記念論文集—』

2. 土製模造具（第421・422図、P L 101・104）

容器以外の器物を模倣したと思われる土製品である。用語・識別基準も妥当でないところもあり、遺物もすべて模造具と特定できないが、その可能性のあるものを含めて取り上げる。模倣した器物がある程度類推できたのは勾玉・土玉・鏡とS Q 2016周辺で出土した杵を模倣した可能性がある棒状の土製品がある。他には口縁の内湾する高環型でミニチュア土器として扱ったが、白の模造品とも考えられるものがある（第432図6）。これ以外は破片で種類を特定できなかった。土製品の胎土は土師器と類似しており、砂を含む明褐色を呈する。一部キノコ状の土製品や勾玉は灰褐色・灰白色の緻密な粘土が使用される。2種の胎土認められる点はミニチュア土器と同様である。土製模造具の出土分布は圧倒的にS Q 2016とその周辺での出土が多い。しかも、S Q 2016ではミニチュア土器とは分布がややずれて出土し、遺跡全体での土製模造具の出土数の少なさからもミニチュア土器とは異なった用法・契機の使用があったと思われる。また、勾玉・土玉・鏡などは本遺跡より先行する集落遺跡でも出土が知られているが、一方で杵状の土製品、あるいは紡錘車形土製品は本遺跡以外の周辺遺跡ではあまり出土が知られていない。従って、在地に定着していた土製模造具と本遺跡で特長的な土製模造具が見られることになり、種類の多さと合わせて、出現時期の違いからも多様であった可能性がある。なお、杵状の模造具は周辺遺跡でもほとんど類例の知られていないものであり、その系譜がどのようなものであったかは不明である。以下には掲載した図の順で説明を加える。

1・2は勾玉で、1はS D 1016、2はS Q 2016から出土した。1は⑦-2区で出土したことは明らかであったが、遺物に取り上げ地点の記載がなかったために出土地点不明となっていた遺物である。しかし⑦-2区のS D 1016出土遺物出土状況図のなかに土製勾玉の出土という記載があったため、この勾玉がS D 1016出土のものと判断した。また、取り上げられた袋には土製勾玉と滑石製白玉が2点（82・83）が入っていたが、一緒に出土したものなのかは明らかでない。仮に伴出したものであるとすれば、土製勾玉と滑石製白玉が組み合わさって使用されていた可能性を示すことになる。なお、S Q 2016出土の2の勾玉周囲で白玉は出土していないので、この場合では白玉がセットとは捉えられない。1は灰白色の緻密な胎土で、2は砂を多く含む土師器と同様の胎土でつくられる。調整方法は表面が磨滅して不明である。

3・4は土玉である。S K 2184、S D 1016から出土した。球状の粘土塊に穿孔しており、4にはユビ圧痕が残る。類似した形態として図の7があるが、これは穿孔が認められないため異なる性格かと思われる。

土器と類似した砂を多く含む胎土である。土玉の性格は不明であるが、本遺跡周辺では本遺跡よりも後出する時期の古墳の副葬品としてまとまって出土した例や集落遺跡での出土例が知られる。なお集落遺跡出土の場合では土錘として扱われる場合もあり、本例も模造具として扱うべきか迷った。ここでは出土数の少なさからも古墳出土品のような特殊な用途の遺物と考えて土製模造具に加えた。

5は直径3cm、厚さ1cmの円盤状の土製品で、平坦面の片側によった場所に穿孔される。表面にはナデ痕が確認でき、焼成前の穿孔である。⑩-1区の中世の館堀であるSD2007から出土したが、中世には類例が知られず、しかも胎土は古墳時代の土師器に類似することから、SD2007が切るSQ2016からの混入の可能性が高いと考えた。鏡の模造品とも思われるが、子細は不明である。

6～12は器物の種類が特定できなかった。6はキノコ状の土製品で、砂粒を含まない灰白色の細かな胎土でつくられる。柄にあたる部分には指ナデ痕が認められる。完存品と思われるが、何を模倣したものか、本来的に土製模造具と捉えられるものなのか判然としない。7は土玉状の土製品である。形状は球状となり土玉に類似するが、穿孔されていない。性格は不明である。8も何かの土製品の部分と思われるが、性格や全体の形状が不明である。砂を多く含む胎土である。9は細長い棒状の土製品で片側を欠損するため、種類は不明である。10も同様に棒状土製品の一部であるが、性格不明である。11は円盤状の土製品で上面に放射状の刻みが施され、下面にはほぞ状の刻みが2～3条施される。12も円盤状の土製品であるが、他よりもやや大きい。性格不明である。

13～19は棒状の土製品で、形状から杵の可能性があると思われた。13は棒を差し込んだと思われる孔が観察されるので横杵、14～19は縦杵の可能性がある。14～17は棒状の一方が細くなる形状で、へら状の工具でナデられる。19のみは指の圧痕が残る。わずかにSD1016南辺やSK2057出土品があるが、ほとんどがSQ2016、ならびに隣接したSD1016東辺で出土しているため、ほぼこの周辺で使用、あるいは廃棄されたと思われる。SQ2016内ではミニチュア土器とは出土分布を違えており、使用契機や用法が異なることが推測できる。特に、杵状土製模造具のみはSQ2016から多数出土しており、他の土製模造具との違いが看取される。ただし、SQ2016内では杵状模造具と勾玉・鏡などの模造具の出土の分布は類似しており、

表3 土製模造具一覧

・勾玉・土玉については玉類の表に掲載

収納番号	出土遺構・取り上げ番号	種別	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	備考	遺構時期他	図番号
1	SK1046 NO.38	キノコ状	(2.2	1.5	1.4		古墳土坑	- 6
2	SK2057	杵状?	(5.6	2.4	2.1		古墳井戸	-19
3	SD1016 ⑤-1区 NO.76	紡錘車	5.1	(2.5	1.8	半分欠損	古墳溝	-21
4	SD1016 ⑦-2区 P-4	棒状	(4.1	2.1	2.0	棒状、器種不明	古墳溝	
5	SD1016 ⑩-1区 VWE11	横杵?	(6.2	2.5	2.2		古墳溝	-13
6	SD2007 ⑩-1区	円盤	3.2	3.1	1.1	円盤に穿孔。	中世溝	- 5
7	SQ2016 ⑤-2区 VRM03	鏡	5.2	5.3	2.8	手づくね	古墳遺物集中	-20
8	SQ2016 ⑤-2区 VRL03	杵状	(4.9	2.0	2.0		古墳遺物集中	-16
9	SQ2016 ⑤-2区 VRL04	杵状	(5.0	2.0	1.8		古墳遺物集中	-17
10	SQ2016 ⑤-2区 VRQ01	杵状	(5.9	2.6	2.0		古墳遺物集中	-18
11	SQ2016 ⑤-2区 トレンチ	杵状	(5.4	2.0	1.9		古墳遺物集中	-14
12	SQ2016 ⑤-2区 トレンチ	杵状	(3.6	1.9	1.5		古墳遺物集中	-15
13	SQ2016 ⑤-2区 VRM02	棒状不明	(8.5	1.8	1.1	棒状破片。	古墳遺物集中	- 9
14	SQ2016 ⑤-2区 トレンチ	棒状	(3.4	1.5	1.8		古墳遺物集中	-10
15	SQ2016 ⑤-2区 トレンチ	円盤状	(3.3	(2.0	1.9	円盤状、上面刻目。器種不明	古墳遺物集中	-11
16	SQ2016 ⑤-2区 VRO01	円盤状	(3.5	(4.1	1.8	円盤状、器種不明	古墳遺物集中	-12
17	出土地点不明	不明	(1.9	1.4	0.8	棒状?		- 8

類似した使用方法、もしくは組み合わせで使用されたとも考えられる。

20は鏡の模造品である。鈕のある側は指圧痕が顕著に残り、鈕は円筒状に出た部分に片側から穿孔された孔がある。S Q2016から出土しているが、出土分布では上述した杵状の土製模造具と近接して出土しており、何らかの関連をもって使用されていた可能性もある。

3. 土製紡錘車（第422図、P L104）

図の21は形状から土製紡錘車と思われ、1点のみの出土である。断面が逆台形となる滑石製紡錘車に類似した形態であることから土製紡錘車とした。しかし、本遺跡では滑石製紡錘車は認められておらず、周辺遺跡での類似形態の紡錘車が出現する時期を比べると、より古い所産となるため土製紡錘車とするにはやや不安がある。出土量の少なさからすれば特殊な使用に用いられたと思われる。

4. 連結小型丸底土器（第422図、P L104）

一般的にあまり類例が認められず、本遺跡での出土数もわずかな特殊器形である連結小型丸底土器を特異な土器として個別に取り上げる。形態は小型丸底土器を複数連結させたと推測されるが、完形品は1点もなく全体の形態の詳細は不明である。この土器は出土数の少なさや形態の特異さから異形土器と認められるが、必ずしもその性格や使用方法は明確にしえなかった。該当する土器は⑤-2区S D1016より1点、⑧-1区S D1016が1点、⑧-2区S K2296で1点の合計3点が出土している。いずれも砂粒をあまり含まない灰白色の胎土で、器壁も非常に薄い精製品である点は共通する。表面の調整は摩滅しているために詳細不明であるが、内面は刷毛調整(後にナデ?)、外面は磨きが施されると思われる。連結のしかたは個々につくった小型丸底土器の接合部の胴部をそれぞれ穿孔し、連結部周囲に粘土を充填して表面を仕上げている。連結数はS K2296出土例が4個体、⑤-2区S D1016例が2個体と推測される。県内での類似品には松本市向畑遺跡のミニチュア土器とも思われる小型のS字甕の連結品や、長野市篠ノ井遺跡群にミニチュア小型丸底土器の連結品と思われるものがある。県内の類例をみる限りはミニチュア土器に多い傾向があるようだ。

5. 羽口（第434・435図、P L106）

古墳時代遺構から出土した羽口は全部で25点あり、内21点を図示した。専用に製作された羽口（図の1～4、8～13）と、先端が被熱を受けてガラス化、あるいは変色が観察される高坏の脚転用と思われる羽口（図の5～7、14～21）がある。転用羽口については遺跡内で高熱をうけて発泡したり歪む土器もあるため、周辺で専用の羽口と伴出しない単独出土の場合では転用羽口と断定するのに不安を残すものがある。専用羽口は11点あり、形態的に数種類認められる。図の8～12のような先端部直径5～6cmでやや細身の筒型で底部が裾広がりになるものと、図の1・2・13のような直径5～6cm、底径8cmとなる側面形が台形となるズン胴のものがある。ズン胴となるタイプの図1は側面の傾斜角度が1辺が緩やかで先端孔の中心は反対側へ偏る。これは羽口の装着を想定して作られたものと思われる。また、成形方法は、厚めで内面に指圧痕を残す1のようなものと、器壁が均質で土器と同様に内面にもハケ調整ーナデをしている可能性がある2・13のような2者が見受けられる。これらの内、1は先端部分の成分分析より鉄の加工に関連すると判断された。(付章参考)。専用羽口の胎土は砂粒を多く含む土器と類似している。

羽口の出土分布は比較的集中する箇所が認められた。その集中箇所のひとつは⑦-2区のS D1016区画内の南西部付近で、もう一つはS Q2016である。ただし、S Q2016では転用と思われるもののみで、認定に問題を残す。これ以外の1点のみの出土例はほとんどが転用羽口と認定したものだが、羽口とできるか不

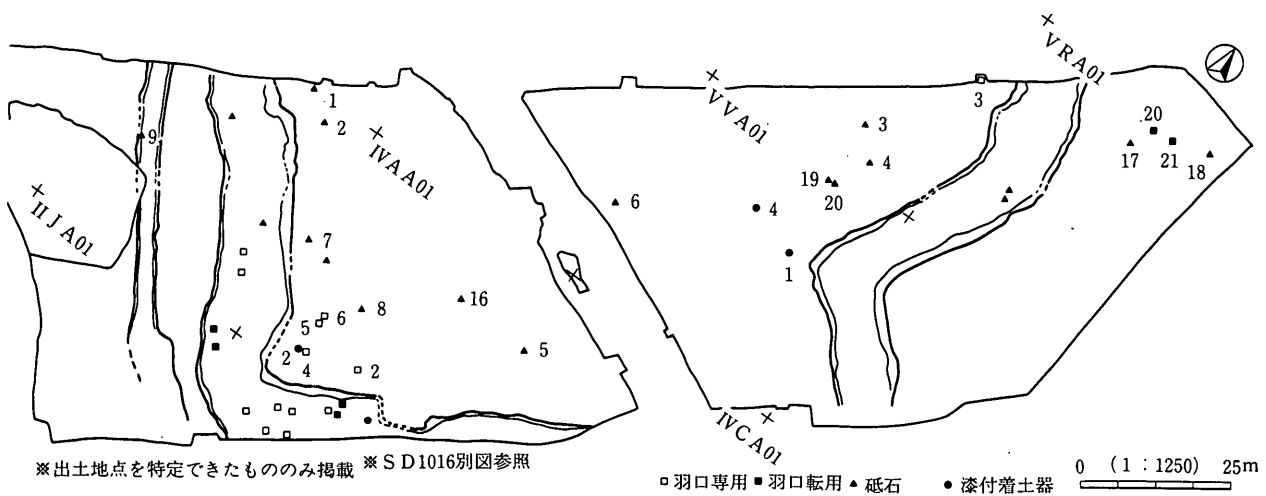
安を残す。なお、明らかに古墳時代に所属すると断定できる大型の鉄滓や微細な鍛冶関連遺物は確認できなかったが、小型の鉄滓破片と思われるものがS D1016から出土している。これは鉄滓分析委託終了後に所在が判明したため、成分の分析は行なえなかった。

いずれにしろ、確実な大型鉄滓の多量出土は認められないことから鍛錬鍛冶中心に行なった可能性がある。また、遺跡内では数カ所焼土跡が検出されているが、いずれも羽口出土地点からはずれており、鍛冶を行なった場所や遺構とは考えにくい。

県内での古墳時代の羽口は飯山や塩尻、飯田、佐久、茅野市の集落遺跡から転用羽口・専用羽口の報告例が知られるが、すべて本遺跡より後出時期の所産である。従って、現在確認できる県内の古墳時代鍛冶関連遺物を出土した遺跡のなかでもっとも古い所産と思われる

表4 古墳時代羽口出土一覧

収納番号	出土地点・遺構	備考	図番号
1	S D1016⑦-2区	専用羽口、ほぼ完存 (科学分析実施)	- 1
2	S K2751	専用羽口、ほぼ完存	- 2
4	S K2561	専用羽口、破片	- 3
5	S K2744	専用羽口、破片	- 4
6	S K2745	高杯脚転用、破片	- 5
7	S K2832	高杯脚転用、破片	- 6
8	S D1016 ⑦-2区IVAK20	高杯脚転用、破片	- 7
9	S D1016 ⑦-2区IIEQ14	専用羽口、破片	- 9
10	S D1016 ⑦-2区IIER15	専用羽口、破片	- 8
11	S D1016 ⑦-2区IVFE05	専用羽口、破片	-10
12	S D1016 ⑦-2区IVFG03	専用羽口、破片	-11
13	S D1016 ⑦-2区IVFG06	専用羽口、破片	-12
14	S D1016 ⑦-2区IVFI05	専用羽口、破片	-
15	S D1016 ⑦-2区IVFM03	専用羽口、破片	-13
16	S D1016 ⑦-2区IVFK01	高杯脚転用、破片	-14
17	S D1016 ⑦-2区IJJR01	高杯脚転用、破片	-15
18	S D1016 ⑦-2区IJJT02	高杯脚転用、破片	-16
19	S D1016 ⑦-2区 1層	高杯脚転用、破片	-
20	S D1016 ⑦-2区 最下層	高杯脚転用、破片	-17
21	S D1016 ⑦-2区 最下層	高杯脚転用、破片	-18
22	S D1016 ⑦-2区 一括	高杯脚転用、破片	-19
23	S D1016 ⑦-2区 一括	高杯脚転用、破片	-
24	S D1016 ⑦-2区 一括	高杯脚転用、破片	-
25	S Q2016 ⑤-2区VRM03	高杯脚転用?、破片	-20
26	S Q2016 ⑤-2区VRO03	高杯脚転用?、破片	-21



第195図 羽口・砥石・漆附着土器出土分布 (数字は図の掲載番号)

る。しかも専用羽口があることや量も他遺跡を圧倒する点は注目される。本遺跡では鍛錬鍛冶が集中的に行われたと考えられ、生産された器物は不明ながら漆付着土器の出土分布と一致する傾向が看取されることから、鍛冶のみを専業とするというよりも複合的な工程を含む器物生産の一部と推測される。この点で集落で行われる鍛錬鍛冶とは規模ばかりでなく、異なる生産形態と捉えられる可能性がある。羽口には専用と転用の2者があり、さらに

専用のなかにも形態的にバリエーションが認められたが、多様な形態が存在する理由については明らかにしえなかった。特に細身で裾広がりタイプは古墳時代の他遺跡出土例でも認められるが、ずん胴タイプについてはその分類の有効性を含めて位置付けが分からなかった。生産の技術的なものなのか、生産にかかわった人間の違いを表現するのだろうか。また、砥石の出土分布は遺跡全体に散在しており、羽口の分布と一致していない。このことは砥石がきめ細かな仕上げ砥を中心とする点に関連すると思われるが、荒砥が不明瞭である点は問題が残る。なお、羽口はS D1016⑦-2区最下層からも出土しており、鍛冶は遺跡存続時期内の早い段階から行われた可能性がある。

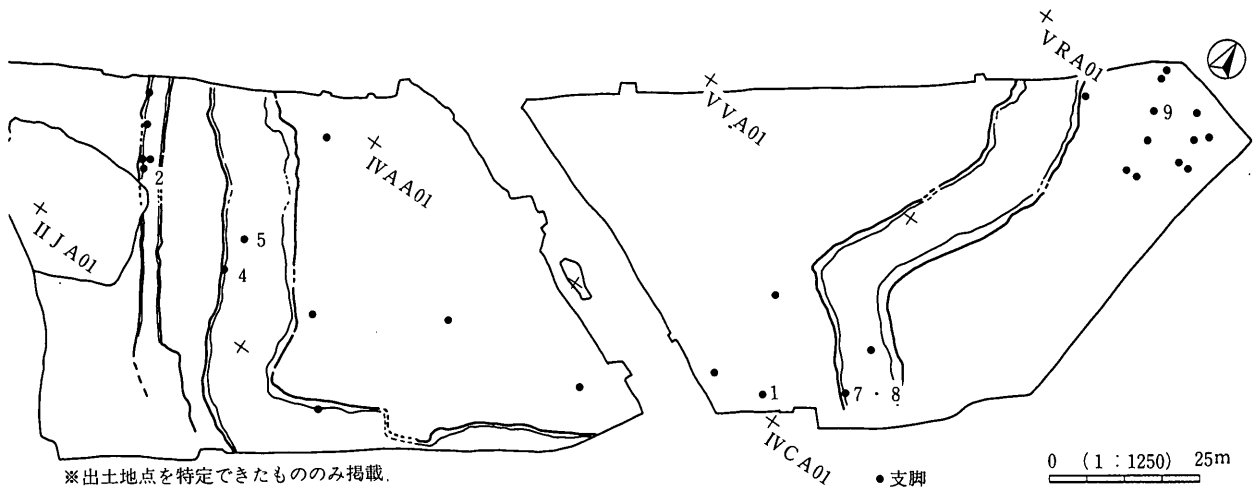
6. 漆付着土器
(第442図、
P L107)

土製品ではないが、漆の付着した土器をここで取り上げる。全部で5点あり、すべて図示した。いずれも小型丸底土器の内面に幕状の黒色物が付着し、成分分析を実施した結果、漆であることが判明した(付章参照。)このなかで、⑧-1区S D1016出土の4は口縁部に帯状の漆の夕

表5 支脚一覧(可能性のあるものも含む)

収納番号	出土遺構・取り上げ番号	備考	図番号
1	S K1055	支脚破片	
2	S K2101	支脚破片	
3	S K2203	支脚破片	
4	S K2208	支脚略完形	- 1
5	S K2208	支脚破片	
6	S K2339 NO.2	支脚破片	
7	S K2746	支脚破片	
8	S D1007 NO.23	支脚略完形	- 2
9	S D1007 ⑤-1 (IIEC08)	支脚破片	
10	S D1007 ⑤-1 (IIEE13)	支脚破片	
11	S D1007 ⑤-1 (IIEF12)	支脚破片	
12	S D1007 ⑤-1 (IIED10)	支脚破片	
13	S D1008	支脚破片?	
14	S D1008 ⑦-2区 3層	支脚破片	
15	S D1058	支脚破片	
16	S D2008	支脚破片	
17	S D2013	支脚略完形	- 3
18	S D2013	支脚破片	
19	S D1004	支脚破片?(羽口破片?)	
20	S D2003	支脚破片	
21	S D1016 ⑤-1	支脚破片	
22	S D1016 ⑤-1	支脚破片	
23	S D1016 ⑦-2 (IIEP13 P133)	支脚?(楕円形粘土塊)	- 5
24	S D1016 ⑦-2 (IIEP16)	支脚略完形	- 4
25	S D1016 ⑦-2 (IVF101)	支脚破片	
26	S D1016 ⑤-2	支脚破片	
27	S D1016 ⑩-1 (VWD11)	支脚破片	
28	S D1016 ⑩-1 (VWD15)	支脚破片(収納37同一?)	- 7
29	S D1016 ⑩-1 (VWD15)	支脚破片(収納36同一?)	- 8
30	S D1016 ⑩-1 一括	支脚破片	
31	S Q2016 ⑤-2 (VMK19)	支脚破片	
32	S Q2016 ⑤-2 (VMK18)	支脚破片	
33	S Q2016 ⑤-2 (VMO20)	支脚破片	
34	S Q2016 ⑤-2 (VRG04)	支脚破片	
35	S Q2016 ⑤-2 (VRL02)	支脚破片?	- 9
36	S Q2016 ⑤-2 (VRM04)	支脚破片?	
37	S Q2016 ⑤-2 (VRM07)	支脚破片	
38	S Q2016 ⑤-2 (VRN07)	支脚破片	
39	S Q2016 ⑤-2 (VRP02)	支脚破片	
40	S Q2016 ⑤-2 (VRP04)	支脚破片?	
41	S Q2016 ⑤-2 (VRQ01)	支脚破片	
42	S Q2016 ⑤-2 (VRQ04)	支脚破片	
43	S Q2016 ⑤-2 (VRM07)	支脚破	

※砂粒を混和材として含む胎土の粘土塊は支脚の可能性があると捉えて表に加えた。



第196図 支脚出土分布 (数字は図の掲載番号)

レが付着し、内底面脇から体部にへら状の工具を漆でかき集めたと思われる皺状の塊がみられ、漆加工を行なう際のパレットではないかと考えられる。出土分布は羽口とほぼ重なり、S D 1016区画内南西角の⑦-2区から隣接する⑧-1区に集中する傾向があるが、1点のみやや離れた⑧-2区S K 2297で出土している。この漆付着土器は小型丸底土器である点、さらに4のような作業の過程が窺えるものがあるため、基本的には塗りの作業に関わるものと思われる。また、遺跡内では漆を使用した製品や未製品が認められなかったことから、これらの漆を使って何を製作していたのかは不明である。しかし、出土量の少ない点や羽口と出土分布が重なる傾向が窺えることから漆の加工を専門とするより何かの製品をつくる工程の一部として漆加工が認められるようである。さらに、遺跡内では鉄製品・漆製品ともにほとんど認められないことから遺跡内で製作された製品が遺跡外へ搬出された可能性が高い。

7. 支脚 (第428図、P L 105)

所謂、山陰系の烏帽子形支脚が出土している。これ以外に支脚の可能性も指摘される粗雑なつくりの器台形の土器があるが、積極的に支脚と判定できなかったことから除外した。烏帽子形の支脚はその可能性がある破片を含めて43点あるが、完形・もしくは大型破片で全体の形状が窺えるものは図示した1~4のみであり、それ以外は小破片である。また、胎土は土器器同様の砂粒を多く含む明褐色のもので、類似した胎土の支脚の可能性のある粘土塊もあるが断定できないので除外した。形状はやや幅広い底面からやや緩やかな弧を描いて体部が立ち上がるもので、背面や両側面の底部近くに指で押した窪みが付く。整形は板状工具で調整した後にナデ仕上げされると思われ、体部の断面が方形となる。なお、図の5は支脚とは異なった形態で、楕円形の円盤状となる。形態的に異なるが、作りが類似することから支脚に類すると考えここに掲載した。出土分布はS Q 2016が最も多く、続いてS D 1016、S D 1007の順である。土坑出土はS D 1016区画内の南半分に多い傾向が窺える。この烏帽子形支脚は県内では出土例が余り知られておらず、現段階では本遺跡と篠ノ井遺跡群で確認されているのみである。今後出土例が増加する可能性もあるが、現段階では本遺跡の特徴的な遺物としてみられる可能性が高いと思われる。また、1遺跡の出土数とすれば多いものの、大量というわけではないので、使用される場や機会は限られていたと思われる。篠ノ井遺跡群出土例は細身で長く、側面に窪みが認められないなどの形態的差があり、本遺跡よりも先行する時期の所産とされる。篠ノ井遺跡群とは別契機にその使用方法を含めて伝播した可能性があるが、この支脚を

用いることに付随する煮沸具の変化（丸底化、あるいは搬入品の甕使用等）や、特殊な火処での使用は明らかにできなかった。しかし、篠ノ井遺跡群にしろ出土数の少なさや甕形態に大きな変化が見られないことから、その用法は特殊で限定的であったと考えられる。

8. 土錘（第423図、P L104）

古墳時代の遺構から出土し、古墳時代と推測される土錘は8点ある。形態はいずれも円筒状、もしくは先端が若干すぼまる円筒状である。サイズは2種あるようで、直径2cm前後で長さ5cm前後と直径3cm強で長さ5cm前後である。完形・略完形で重量を比較すると3が35gでやや軽い、他は60g～95gである。本遺跡の古墳時代以外の土錘は平安時代の洪水砂で覆われた水田面から4点、微高地域の中世館堀SD2001から1点出土している。これらの土錘をみると明らかに細身で、古墳時代の遺構から出土したもののほうが太く重い傾向が知られる。この形態差からすると、第1分冊に中世以後の遺構出土として掲載した土錘のなかにも古墳時代の土錘の可能性のあるものが含まれている。出土分布はSKから2点、SD1016より2点、SQ2016より3点、SQ1004周辺から1点出土し、集中したり、複数がかたまって出土する様相はない。本遺跡は特殊な遺跡であると思われるものの、土錘が出土したことは意外であった。漁労に係る者、もしくは漁労に係る行為があったのだろうか。

表6 微高地出土土錘一覧

収納番号	出土地点、取り上げ番号	長さ cm	径 cm	重量 g	備考	遺構時期他		図番号
1	SK2564	4.9	3.3	(55)	形態からは古墳時代？完存	時期不明土坑	1分冊340-1	
2	SK2565	5.6	3.3	55	形態からは古墳時代？一部欠損	時期不明土坑	1分冊340-2	
3	SK2745 P 21	5.5	3.2	70	完存	古墳土坑	-1	
4	SK2874	5.0	3.5	(30)	縦半分欠損	古墳土坑	-2	
6	SD1016 ⑤-2区一括	5.4	2.5	35	完存	古墳遺物集中	-3	
7	SD1016 ⑩-1区	5.8	3.6	80	完存	古墳遺物集中	-4	
10	SQ2016 ⑤-2区VRK04	5.5	3.5	95	完存	古墳遺物集中	-5	
11	SQ2016 ⑤-2区VRK04	(3.5)	(1.9)	(10)	小破片	古墳遺物集中	-6	
12	SQ2016 ⑤-2区VRM06	5.7	3.2	60	完存	古墳遺物集中	-7	
13	SQ1004 ⑦-2区HJQ09	5.0	2.6	(60)	一部欠損	古墳遺物集中	-8	
5	SD1011 ⑤-1区	5.0	3.0	(25)	形態からは古墳時代？	中世溝	1分冊340-3	
8	SD1038	3.3	3.4	45	形態からは古墳時代？	近世溝	1分冊340-4	
9	SD2001	5.0	2.3	60		中世館堀	1分冊340-5	

※（は残存部での数値

9. 粘土塊（第423・424図、P L105）

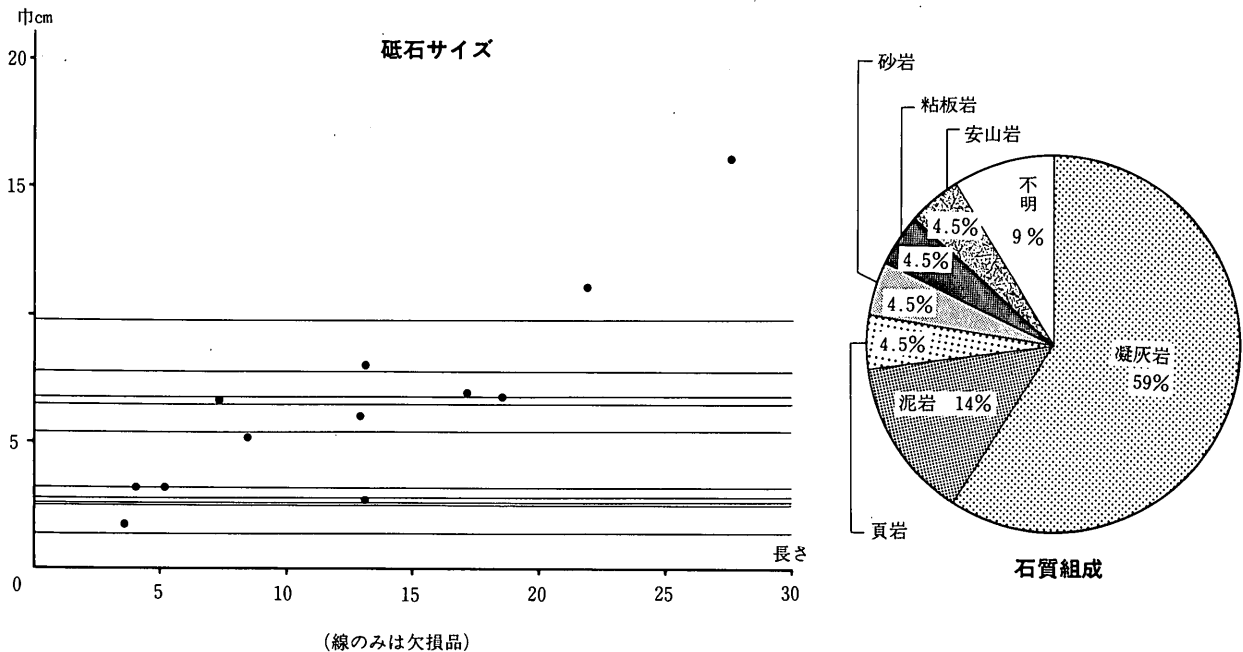
遺跡内では大量の焼粘土塊が出土したが、そのほとんどは遺跡内で行われた焼却行為で生成された焼土ブロックと思われる。しかし、それとは別に不整形ながら土器と類似した胎土で混和材として入れられたと思われる砂を含んだり、モミや藁状の植物圧痕が観察されるものがあった。これらを性格不明の焼粘土塊として一括する。一部に支脚や土製模造具の破片と思われるものや、意図されずに偶然生成されたものなども含んでいる可能性がある。図の11・18は砂を含まず、それ以外は砂を含んで土器と類似する胎土である。また、スサとも思われる藁状の植物茎の圧痕が観察されるものが多い。全体の形状や大きさが窺えるものは少ないが、5・8・9・10はほぼ本来の大きさが窺え、これらは目的とした形がなく、何らかの行為に付随して結果的に生成された粘土塊と思われた。なお、7・13は土製模造具、19は支脚破片の可能性が有る。

第4節 石製品

砥石と敲打痕や研磨痕、削痕を有する石などがあり、砥石以外は具体的な使用方法・名称・分類なども十分検討できておらず、分類や名称が適当でないものもある。また、定型的な砥石は調査でも識別が容易であったが、それ以外の自然石を転用した砥石、あるいは敲打痕や研磨痕、削痕などの使用痕を有する礫は調査で十分に識別できていたわけではない。あくまでも調査から無作為に持ち帰られた石を整理で観察し直して識別したもののみをここで扱う点は注意されたい。なお、本遺跡からは多数の礫が検出されているが、基本土層中に礫は全く含まれていないため、遺跡出土の礫は人為的に搬入されたと考えられる。しかし、これらの礫については性格を明らかにしえず、調査時の観察も不十分である。したがって、使用痕や加工痕の有無についてすべて確認できているわけではない。ここでは砥石と使用・加工痕を有する礫に大別して報告する。なお、敲打痕や研磨痕、削痕を有する石は弥生・古墳時代の集落遺跡でも出土し、本遺跡に特有の遺物ではない。

1. 砥石 (第429~431図、P L107・108)

古墳時代の遺構から出土した砥石は25点あるが、検出面や古代以後の遺構出土品にも古墳時代の砥石が混入している可能性がある。古墳時代の遺構出土砥石は不整形なもの、長方形を基調とする2種の形態がある。さらに、不整形なものは扁平な円礫を利用したと思われるものと、露頭の転石を利用したと思われる角礫の大型品があり、長方形を基調とするものでは断面が方形と5面の多面のものがある。特に長方形の砥石には非常に細長く整った形で、古墳出土例と遜色ないものもある。砥石のサイズは比較的残存しやすい幅に注目してグラフを作成してみると、幅1~3cmと5~8cm、10cm前後かそれ以上の3つの集目が認められる。砥石は本来研磨によって小さくなるため、規格性を求めることは難しいと考えられるが、グラフの上でバラツキが少なく数グループとして認められるのは偶然というより、砥石に規格性があるの



第197図 砥石のサイズと石質組成グラフ

ではないかと思われる。その規格性とは研ぐ対象物の違いではないかと思われる。石質はキメ細かな凝灰岩製が14点と多く、泥岩が3点、粘板岩1点、頁岩1点、珪質頁岩2点、砂岩1点、安山岩1点、不明2点である。古墳時代遺構出土砥石は肉眼による粒子の観察からも比較的緻密なものが多く、出土した砥石のほとんどは仕上砥と思われる。しかし、鍛冶関連の遺物出土があるのに荒砥が少ない点は問題が残る。なお、凝灰岩製砥石は中世遺構出土品にも見られるが、古墳時代遺構出土砥石のほうがきめ細かで中世遺構出土砥石のほうが灰白色の非常に質が悪い凝灰岩で作られている傾向が認められる。そのため、凝灰岩製砥石については古墳時代と中世の識別が容易である。なお、形態と石質の関係を示すと第197図の通りになる。

ちなみにやや先行する時期ながら、近在の集落遺跡である篠ノ井遺跡群では古墳時代前期の遺構から19点の砥石が出土し、砂岩9点、頁岩5点、凝灰質砂岩3点、片岩1点、安山岩1点である。石材の組成に大きな違いが見られるが、これは遺跡の性格の違いなのか、時代的な違いなのかは明らかでない。

また、砥石の遺存状況に注目すると欠損や使用の不能となった時点で廃棄されたと考えられるものがあるが、それ以外に側面・研磨面に砥石本来の整形に伴うと思われるケズリ痕（ハツリ痕？）を残すものがある。これはあまり使用されていないことを示すと考えられるが、このような状態の砥石が廃棄された理由は疑問が残る。憶測するに、本遺跡に限って専ら使用される砥石として生産―搬入され、持ち出すことが忌諱されたか、個人所有でなかった（共同所有であった？）ためとも考えられる。砥石の出土分布は遺跡内に全体的に散在しているが、S D 1016区画内の南西部周辺、S D 1016西辺周辺、S D 1016北東部、S Q 2016周辺に多い傾向がある。S D 1016区画内の南西部周辺では羽口が集中して出土しているが、この部分以外にも砥石が見られるため、鍛冶関連遺物の出土とは必ずしも一致しないと思われる（第195図）。

2. 使用・加工痕を有する礫（第431・432図）

使用・加工痕を有する礫を一括する。古墳時代の遺構から出土したことから古墳時代の所産と考えたが、遺物自体に年代を示す根拠はなく、他時代の可能性もある。図の1～3は細長い自然礫の一端に敲打痕を残す。石材は1・2が頁岩。3が凝灰岩である。3は側面に敲打によると思われる抉りがあり、紐などの装着のために加工が加えられた可能性もある。また、敲打痕のある先端部に若干磨痕が観察される。図の4～15は研磨痕をもつ礫である。円形、楕円形の自然礫を使用し、平坦面に研磨痕が観察される。4・5・7・8のように側面、あるいは9のように先端に一部磨った痕跡が見られるものがある。これらは固定して使用されるというよりも礫自体を持って研磨したと考えられる。また、研磨痕の観察から砥石のように金属器を研ぐのではないと思われるが、用途は不明である。石材は9が頁岩である以外はすべて近在でも入手可能な安山岩である。図の18～22は表面に削り痕が見られる軽石である。表面にはいくつも削り面が残され、面と面の境は鋭く稜をなすため、金属器で削られているとみられる。類似品が中世の遺構でも出土したが、出土量は古墳時代の遺構が最も多く、中世遺構出土のものも古墳時代の所産かもしれない（第1分冊に掲載）。性格は不明である。出土数が僅かなものとして17の凹石と16の長方形の柱状石製品がある。17は安山岩の円礫の平坦な上下面に敲打痕による窪みが観察できる。古墳時代のS D 1007から出土したことからここに掲載したが、S D 1007には中世遺物の混入も若干認められることや、凹石自体に年代を比定することが難しいことから時代の断定は不安がある。16はS D 1016から出土した性格不明の柱状石製品である。幅2cm、高さ1.5cmの長方形の断面形で、欠損するものの長さは残存部で約3.5cmを測る。長方形の1面に浅い彫り込みがある。石材は古墳時代遺構出土砥石と同じ凝灰岩であり、石材からも古墳時代の所産とみられる。その性格は不明であるが、砥石の類の可能性もある。上記以外で遺跡内では異質な石材の玉髓片やチャートが出土している。玉髓片は緑色、黄褐色、灰白色が縞状に観察できるもので、質が

表7 微高地出土砥石一覧

・古墳時代～近世までを含む

収納 番号	出土地点、取り上げ番号	石質	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重量 g	備考		図番号
							遺構時期他		
1	S K1023	泥岩	13.1	2.7	2.6	160	全面炭化物付着	古墳井戸	- 1
2	S K1050	凝灰岩	(7.3	6.6	(1.3	80	裏面欠損	古墳土坑	- 2
3	S K2068	粘板岩	21.9	11.1	2.6	940	自然円礫利用	古墳土坑	- 3
4	S K2129	珪質頁岩	(2.7	(3.5	(3.5	(10	小破片	古墳土坑	-
5	S K2154	凝灰岩	27.5	16.1	(4.5	1350	裏面欠損、自然転石	古墳土坑	- 4
6	S K2213	凝灰岩	(8.3	(5.4	5.2	245		古墳土坑	- 5
7	S K2377	頁岩	(3.3	1.4	(0.7	10	裏面欠損	古墳土坑	- 6
8	S K2757	凝灰岩	(4.3	2.8	0.9	5		古墳井戸	- 7
9	S K2759	凝灰岩	22.0	9.8	4.5	900		古墳井戸	- 8
44	S K2831	安山岩	(8.8	6.5	4.0	335	自然礫の一部研磨痕	古墳土坑	-
10	S D1007 ⑤-1区IIEE12	凝灰岩	(3.0	2.6	2.4	20		古墳溝	- 9
11	S D1016 ⑤-1区一括	凝灰岩	(4.0	3.2	0.8	15		古墳溝	-10
12	S D1016 ⑤-1区NO.99	凝灰岩	12.9	6.0	2.0	190	自然円礫利用	古墳溝	-11
13	S D1016 ⑦-2区IIEQ12	泥岩	8.5	5.2	3.0	145	上面一部調整痕あり	古墳溝	-12
14	S D1016 ⑩-1区VRF14	不明	(3.5	(1.8	(0.3	5	周囲全損	古墳溝	-13
15	S D1016 ⑩-1区VRF15	砂岩	(6.3	7.8	1.8	210	自然礫利用	古墳溝	-14
16	S Q1002 NO.10	不明	18.5	6.8	4.8	980	自然円礫利用	古墳遺物集中	-15
17	S Q2002	凝灰岩	17.1	6.9	2.6	570	側面調整痕あり	古墳遺物集中	-16
18	S Q2016 ⑤-2区VRI01	凝灰岩	5.1	(6.6	(0.9	25	砥石類似石材破片	古墳遺物集中	-
19	S Q2016 ⑤-2区VRL05	凝灰岩	(10.0	6.8	4.5	330	上下・側面調整痕	古墳遺物集中	-17
20	S Q2016 ⑤-2区VRR02	凝灰岩	5.2	(3.2	(0.6	10	周囲、裏面破損	古墳遺物集中	-18
21	S Q2016 ⑤-2区VRR02	珪質頁岩	(1.2	(3.7	1.5	5	研磨面2面残存	古墳遺物集中	-
22	S Q2017 NO. 9	凝灰岩	13.1	8.0	5.4	700	上下・側面調整痕	古墳遺物集中	-19
23	S Q2017 NO.10	泥岩	(8.4	2.5	1.7	60	断面5角形	古墳遺物集中	-20
24	S X2002	凝灰岩	(4.6	(2.1	(0.4	5	研磨面1面残存	古墳不明遺構	-
25	S K1012	凝灰岩	(5.2	3.0		55		中世井戸	1分冊339- 1
26	S K2007	凝灰岩	11.6	4.5		260		中世井戸	1分冊339- 2
27	S K2022	不明	12.1	5.0	2.5	185	調整痕、古墳時代砥石?	中世井戸	1分冊339- 3
28	S K2614	頁岩	5.3	2.8	1.1	15	古墳時代砥石?	不明土坑	1分冊339- 4
29	S K2877	凝灰岩	(5.5	3.2	1.4	45	質の悪い凝灰岩	中世井戸	1分冊339- 5
30	S D1008 トレンチ	凝灰岩	(7.8	3.3	3.2	100	質の悪い凝灰岩	中世館堀	1分冊339- 6
31	S D2001 ⑧-1	凝灰岩	(7.8	3.7	2.2	120	質の悪い凝灰岩	中世館堀	1分冊339- 7
32	S D2001 1層	凝灰岩	(8.1	3.0	3.2	100	質の悪い凝灰岩	中世館堀	1分冊339- 8
33	S D2001	凝灰岩	(2.9	(3.0	1.1	10		中世館堀	1分冊339- 9
34	S X2001	凝灰岩	(8.4	3.1	(0.9	35		近世耕作関連遺構	
35	⑤-2区検出面	凝灰岩	11.8	6.8	6.0	710			1分冊340- 1
36	⑤-1区検出面 IIEA09	砂岩	(7.3	5.2	2.1	145	部分的な研磨痕を残す自然礫		1分冊340- 2
37	⑤-1区検出面	頁岩	(6.7	5.0	1.0	55	部分的な研磨痕を残す自然礫		
38	⑧-1区検出面 IVAH04	凝灰岩	12.0	8.1	6.3	700	古墳時代砥石?		1分冊340- 3
39	⑧-1区出土地点不明	凝灰岩	11.6	4.2	3.3	155	側面調整痕、古墳時代砥石?		1分冊340- 4
40	⑦-2区検出面	凝灰岩	(8.0	3.0	1.7	70	質の悪い凝灰岩		1分冊340- 5
41	⑤-2区検出面	凝灰岩	(5.6	6.8	(1.2	55	古墳時代砥石?		1分冊340- 6
42	⑩-1区検出面	凝灰岩	(6.5	4.6	3.4	125	質の悪い凝灰岩		1分冊340- 7
43	S D2007	花崗岩	18.5	6.9	4.1	725	自然円礫、研磨痕あり		
45	出土地点不明	砂岩	9.2	4.1	(1.6		裏面欠損、上面小孔2か所		1分冊340- 8

※(は残存部の長さ ※重量は5g単位で切り上げ

悪いために玉類の素材とは考えにくい。本遺跡に近い石川地区や聖山周辺で産出することが知られており、こうしたところから礫同様に持ち込まれたのであろう。また、チャートは角礫であるが、これも同様と考えられる。ただし、搬入された時期が古墳時代とする確証はない。

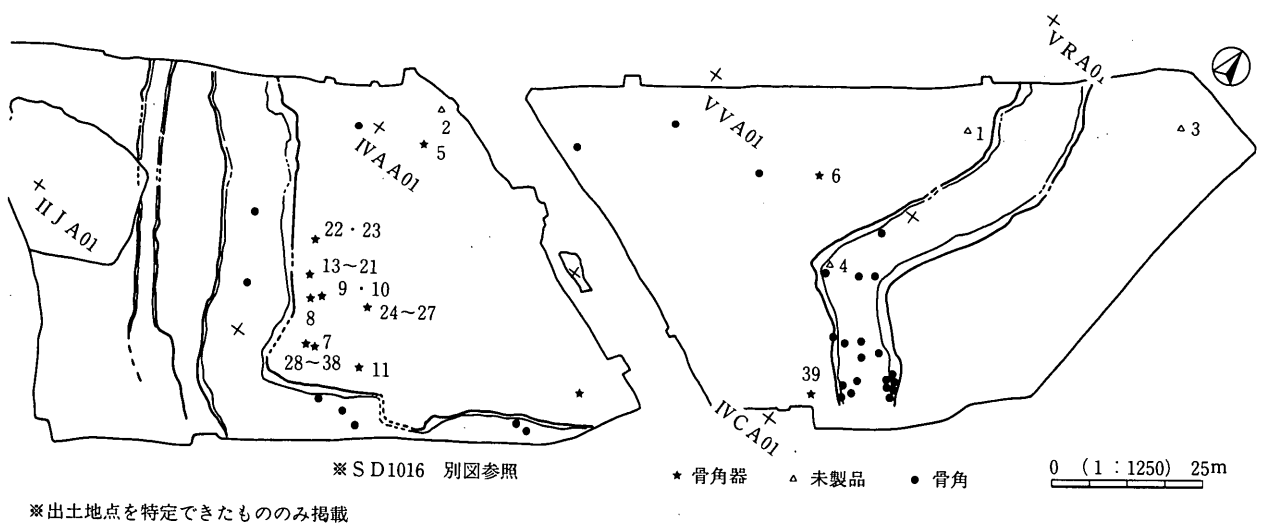
第5節 獣骨・骨角器

古墳時代遺構からは多数の獣骨が出土した。調査時にはあまり注意されずに取り上げられたが、整理段階で詳細に観察すると骨角器、あるいは未製品と思われる遺物もあることが確認できた。従って、遺跡内で骨角製品の製作が行われていると共に、出土した獣骨は食料としてばかりでなく、骨角器製作の材料として搬入されたものがあると推測される。出土獣骨の詳細は付章及び出土獣骨一覧を参照していただくことにして、ここでは獣骨の出土状態および骨角製品について述べることにする。

1. 獣骨

遺跡内では多数の獣骨が出土したが、取り上げ時にあまり注意を払われずに破損したり、取り上げ後の処置がまずく破損・紛失したものがある。また、2年次調査では玉類の採取を目的として土坑内の埋土をふるいにかけてところ、微細ながら獣骨が採取できることが判明した。こうした状況からすると調査で取り上げられた数以上の獣骨が存在していたことが知られる。ここでは均一な採取方法によってはいないが、調査で確認できた獣骨の特長について考古学的な立場から概略を述べる。なお、先述したように出土骨は細片に割れているものも多く、種類・部位を特定できなかつたり、同一個体の認定が難しいものが多い。したがって、数量的な資料として提示しにくい面がある。しかし、量的な問題は全体の概要を知る上でも重要と思われるので概略の傾向を提示するために、取り上げられた獣骨ごとに種や部位が特定できたものを1点とし、それ以外はサンプルごと一括して1点として数えて提示する。

獣骨は土坑・溝跡・遺物集中などから出土し、出土量が多いのはS D1016、遺物集中S Q2016がこれに次ぐ。土坑出土獣骨は全体量からすれば僅かであるが、先述したように見逃されたものもかなりあると見られる。基本的に小片で散在的に出土し、特定場所に集中して出土した例は確認できていない。また、出土した獣骨には生のままのものと被熱を受けている2者が見られる。獣種は識別されたなかではニホンジ



第198図 骨角器・未製品・骨角出土分布 (数字は図の掲載番号)

カが36点と最も多く、次いでイノシシ6点、クマ・カモシカ・ウマ各1点がある。このなかでウマは浅い土坑から出土し、数の少なさからも古墳時代の所産と断定はできない。ニホンジカは他の動物種を圧倒する量が見られ、部位別では20点が角、歯・足・顎・腰椎片・角座などが1～2点ずつである。イノシシは頭骨、頬骨などの破片、クマは右尺骨、カモシカは中手骨である。なお、遺構別にみると、土坑から出土した骨は焼けているものが圧倒的に多く、細片に割れているため種・部位の特定できたものは非常に僅かである。これに対してSD1016は生の骨が多く、焼けた骨が少量である。動物種ではシカ・カモシカ・イノシシが確認されたが、シカはSD1016西・東辺両辺で出土し、カモシカは西辺で1点、イノシシは東辺に3点ある。両方とも出土量は少ないが、イノシシは東辺のみに偏る傾向がある。SQ2016ではほとんどが焼けて破損しており、種や部位の特定ができなかったものが多い。

以上のように本遺跡出土の獣骨は均一な条件で採取されていないことや、焼けて細片となったために種や部位の特定ができないものが多いなど一部の様相しか知られないが、以下の傾向は看取される。まず、確認できた獣骨はいずれも大型の哺乳類であり、特にニホンジカは他の動物種を圧倒する量が見られる。本遺跡地が低地内の小微高地であることからしても大型獣が外から搬入されたと思われる。また、本遺跡では骨角製品の加工も認められることから食用として搬入されただけでなく、骨角製品の材料として搬入されたものもかなりあると思われる。なお、搬入の季節や契機、捕獲季節は明らかにしえなかった。骨の

表8 微高地出土遺構別骨・骨角器一覧

・骨の種類が特定されたものは個別に記述したが、不明なものは一括して表記している。
 ・古墳時代から近世の遺構出土骨を含む。

遺構一層位他	種別・部位	焼成有無	備考	遺構時期他
S K1013	不明 不明	焼生	全体に摩滅	中世井戸
S K1020	人間 (歯上右 M2カ-M3)	良好		中世井戸
S K1033土器内	不明	焼生	細片で子細不明	古墳井戸
S K1037	ニホンジカ (角)	焼生	細片	古墳土坑
S K1050	不明	焼生	細片一出土時は単一骨	古墳土坑
S K1088	犬	焼生	ほぼ1頭分 数種骨	中世井戸
S K2015	人間 (頭骨)	焼生	1人分 年齢・性別等不明	中世墓
S K2047土器内	不明	焼生	へら状骨角器	古墳土坑
S K2048	ニホンジカ (角)	焼生	未製品	古墳土坑
S K2051	ニホンジカ (歯)	焼生	破片	古墳土坑
S K2057	不明	焼生	小破片	古墳井戸
S K2063 一括	不明	焼生	細片多数	古墳井戸・土坑
	シカ (角)	焼生	未製品	
S K2108	不明	焼生	小片1片	古墳土坑
S K2147	イノシシ (歯)	焼生	細片	古墳柱穴
S K2172	不明	焼生	骨鏃	古墳井戸
S K2156	ウマ (下顎右歯)	焼生	歯1片一良好	古墳土坑
S K2255	不明	焼生	1小片	古墳土坑
S K2406	不明	焼生	細片少量	古墳土坑
S K2616	人間 (歯)	焼生	同一個体複数 (16~17才女性)	中世墓
S K2636	不明	焼生	細片多数	中世井戸
S K2744	不明	焼生	細片多数・へら状骨角器	古墳土坑
S K2745	不明	焼生	細片多数	古墳土坑
S K2746	不明	焼生	細片多数、骨鏃1	古墳井戸
S K2747	不明	焼生	細片多数、骨鏃2	古墳土坑
S K2748	不明	焼生	細片多数	古墳土坑
S K2750	不明	焼生	細片多数	古墳柱穴?
S K2751	不明 (歯片混在)	焼生?	細片多数、骨鏃? 1	古墳土坑
S K2753	不明	焼生	破片	古墳柱穴?
S K2755	不明	焼生	細片多数	古墳柱穴?
S K2756	不明	焼生	細片多数、骨鏃17	古墳井戸
S K2757	ニホンジカ (末節骨)	焼生	破片	
	不明	焼生	細片多数、骨鏃3	古墳井戸
S K2759	ニホンジカ (角)	焼生	破片	古墳井戸
	不明	焼生	細片多数、骨鏃8	
S K2827	シカ (歯片混在)	焼生	破片複数	古墳井戸
	不明 (歯片混在)	焼生	細片多数、骨鏃17	
S K2827?	不明 (歯片混在)	焼生	細片多数	古墳井戸
S K2828	不明	焼生	細片少量	古墳柱穴?
S K2831	不明	焼生	細片多数	古墳土坑
S K2832	不明	焼生	細片少量	古墳土坑
S K2865	不明	焼生	細片多数、骨鏃2	古墳土坑
S K2878	ウマ (歯上右 P 2 頰側)	焼生	破片2	古墳土坑
S K2879カ	不明	焼生	骨鏃1	古墳土坑
			SD2019より混入?	

S K不明	不明	焼	細片多数	
S K不明	不明	焼	細片多数、骨鏃1	
S K不明	不明 (歯破片混在)	生		
S D1007 ⑤-1区 (IIEF11)	ニホンジカ (角) 2	生	破片良好	古墳溝
S D1008	馬 (歯上左Mor P)	生	破片	中世館掘
S D1037	不明	焼	破片	近世溝
S D2001上砂層	不明	焼	破片	中世館堀
S D2001-⑩-1区	不明 (歯片含む)	生	破片少量	
S D2001-⑤-1区	不明	生	破片	
S D2012	不明	焼	破片	
S D2018	不明	生	破片	
S D1016-⑤-1区	ニホンジカ (角) 2	焼	破片少量	近世溝
	カモシカ (中手骨)	生	破片	古墳溝
	不明多数	生	破片	
S D1016-⑤-2区一括	ニホンジカ (角)	焼	破片	
	イノシシ (右脛骨)	生	破片	
	不明多数	焼	骨鏃15 多種破片多数	
S D1016-⑦-2区	ニホンジカ (前頭骨右角座)	生	破片	
	不明	生	破片	
	不明	焼	破片	
	ニホンジカ (右中足骨)	生	小片同一骨2片	
	ニホンジカ (前頭骨左角座)	生	同一破片複数	
	ニホンジカ (大腿骨)	生	破片	
	ニホンジカ (角)	生	破片	
	不明多数	生	破片多数	
S D1016-⑧-1区	ニホンジカ (角)	生	破片	
	NO.126	生	破片	
	NO.126	生	破片	
	NO.126	生	破片	
	NO.126	生	破片	
	NO.127	生	破片	
	(IIBE13)	生	破片	
	一括	生	破片	
S D1016-⑩-1区	NO.149	生	破片	
	(VWA06) 褐色層	生	破片	
	(VWA12)	生	破片	
	(VWB12) 黒色粘土層	生	同一骨破片少量	
	(VWC11) 黒色粘土層	生	破片	
	(VWD12) 黒色粘土層	生	破片	
	(VWD15)	生	破片	
	(VWD16)	生	破片	
	(VWE11)	生	破片	
	(VWE14)	生	同一骨破片複数	
	(VWE15)	生	同一骨破片複数	
	(VWG12) 褐色層	生	破片	
	(VWG12) 褐色層	生	破片	
	(VWG12) 褐色層	生	破片	
	(VWG12) 褐色層	生	破片	
	(VWG12) 褐色層	生	破片	
	(VWG12) 褐色層	生	破片	
	(VVG08) NO.121	生	小片多数	
	(VVG08)	生	同一個体歯数本	
	(VVS02) 黒色粘土層	生	未製品	
	(VVT07)	生	破片数点	
	一括	生	同一骨数片	
	一括	生	破片多数	
S D1016出土地点不明	ニホンジカ (角) 2	生	破片	
S Q2016 ⑤-2 (VRJ13)	ニホンジカ (角)	焼	ほぼ1本分細片	古墳遺物集中
	(VRL02)	焼	細片少量	
	(VRL17)	焼	破片	
	(VRN03)	生	破片	
	(VRQ01)	焼	破片少量	
	(VRM02)	焼	破片	
	(VRN02)	焼	未製品・破片	
	一括	焼	破片	
	一括	焼	破片	
	一括	焼	破片	
	一括	焼	破片	
	一括	生	先端付近破片	
	一括	焼	破片	
S Q1004 (IHS07)	不明	生	複雑細片多数、骨鏃1	古墳遺物集中
S Q2007	不明 (顎+歯)	生	破片	古墳遺物集中
S D2019 (集石部)	馬 (歯)	生	骨鏃	古代条里坪境溝
S X2001	不明	焼	同一骨細片少量	近世耕作関連遺構
⑦-1区平安水田	馬 (歯)	生	破片	平安水田
⑤-2区調査区北側側溝	シカ (右足)	焼	同一骨細片少量	
⑤-2区調査区北側側溝	不明	焼	同一骨破片少量	
⑤-1区検出面	不明	焼	同一骨破片複数	
⑦区出土地点不明	不明	生	破片	
⑧-2区検出面	不明	焼	破片	
出土地点不明	不明	焼	骨鏃1	
出土地点不明	シカ (角)	生	角一部破片数点	
	不明	焼	破片複数	

廃棄や契機も同様に明らかでないが、土坑・遺物集中S Q 2016では焼けた骨が多く、一方でS D 1016では生の骨が多い傾向は知られた。このなかでS Q 2016や土坑の一部は大量の炭化物や焼土も併せて検出されており、何らかの焼却行為によって2次的に被熱を受けている可能性がある。

2. 骨角未製品 (第432図、P L 108)

加工痕が認められるものの製品とは認めがたい骨は加工途中の未製品ではないかと推測し、製品とは別に取り上げることにした。このような部分的に加工が認められる骨には図に示した1～4がある。いずれもシカの角を利用する。1は角の一面にケズリ痕が確認でき、2は縦に分割した後に一端を研磨する。3は枝角及び角の基部を金属の刃物で切断しており、4は角の一端を切断した後に研磨される。なお、4には孔が認められるが、遺存状態が悪く、骨の腐食・植物根による2次的な破損か、人工の加工かは明らかでない。未製品の出土から遺跡内で骨角製品の加工が行われていたことが推測されるが、製作された製品については明らかにできなかった。しかし、加工痕からは①枝角・基部の切断、②分割、③縦に分割?後に端部研磨、あるいは直接形の削り出しといった工程が推測される。周辺の骨角器未製品を出土した遺跡では、古墳時代の更埴市生仁遺跡、平安時代では長野市屋地遺跡が知られる。生仁遺跡・屋地遺跡では本遺跡同様の①・②の工程未製品が確認できるが、目的とする製品の大きさや種類によって加工工程が異なる様子も窺える。従って、本遺跡でも単一の製品をつくりだす工程ではなく、複数の製品が作られていた可能性が高い。ちなみに生仁遺跡では骨製品として弓筈、骨鏃、やす状骨角器、刀子柄、装飾具があり、確認できた未製品には①や②の工程のほかに、角をあまり分割せずに直接削りを加えるものがある。また、屋地遺跡では製品として弓筈や装飾品、刺突具があり、未製品には①や②の工程に加え、縦に分割して板状材をとる③工程が認められる。

3. 骨角器 (第433図、P L 108)

本遺跡で出土した製品には多数の骨鏃と僅かなへら状骨角器、両端のとがる棒状骨角器があり、いずれも小型品である。これらの骨角器は調査段階で識別できたものではなく、整理段階で採取された獣骨から識別したものがほとんどである。しかも、骨鏃の大部分は2年次調査の⑦-2区において玉類の選別を目的とした土坑埋土のふるいがけで採取されたものなので、本来はもっと多数存在した可能性がある。しかも出土分布が⑦-2区周辺の土坑に集中するのはこのような採取条件による。また、焼けているためにフルイ掛けで破損したものが多く、全体の形状がわかるものは1点もない。骨鏃は図示した6、8～10、12～53、55～57が該当するが、破片から推定すると鏃先端がやや太目で茎が細い形状となり、1面には浅い溝がつくものと思われる。骨鏃は周辺遺跡で更埴市生仁遺跡(註1)や屋代遺跡群(註2)、長野市七尋岩陰遺跡(註3)、未報告ではあるが長野市榎田遺跡、松原遺跡、更埴市屋代遺跡群高速道路地点で出土している(註4)。詳しくは各報告書によることにしたいが、松原遺跡が弥生時代、榎田遺跡が古墳時代、屋代遺跡群高速道路地点が7世紀末以前の可能性がある以外はいずれも古墳時代の後半の所産であるとされる。遺跡の性格では生仁遺跡・榎田遺跡が集落遺跡、七尋岩陰遺跡が祭祀遺跡もしくは葬送にかかわる遺跡、その他はいずれも集落に近い河川跡もしくは溝である。また、出土数は七尋岩陰遺跡が13点ある以外はいずれも1～2点である。この骨鏃の性格について、綿田弘美氏は他県出土例では古墳からの出土が多い傾向が認められることから祭祀的な性格を推定している(註5)。周辺遺跡の年代でみると本遺跡例は松原遺跡について、古い時期の所産となる。また、出土数は本遺跡で見逃されたものもある可能性を考えると1遺跡の出土量としては他遺跡を圧倒するとみられる。本遺跡では非日常的な祭祀に使用されたのか、あるいは

表9 骨角器・未製品一覧

※ (は残存長

整理番号	遺構一層他	種類	獣種部位	焼成有無	長さ	幅	厚さ	備考	図番号
1	S K1033土器内	骨鏃?	不明	焼	(0.3	(0.3	(0.2	小破片	
2	SSK2047土器内	へラ状	不明	焼	(3.0	0.9	0.3		- 5
3	SK2048	未製品	鹿角	生	(4.2	(1.3	(0.9	縦分割 断面研磨	- 2
4	SK2063-NO21	未製品	不明	焼	(5.3	2.0	1.9	鹿角の一面に削り痕	- 1
5	SK2172	骨鏃	不明	焼	(1.2	0.7	0.5	先端 他に小片あり	- 6
6	SK2744	へラ状	不明	焼	(2.7	(1.4	(0.2	他に小片あり	- 7
7	SK2746	骨鏃	不明	焼	(1.2	0.4	0.4	茎破片	- 8
8-1	SK2747	骨鏃	不明	焼	(1.2	0.4	0.4	茎破片	- 9
8-2	SK2747	骨鏃	不明	焼	(0.7	0.3	0.2	先端破片	- 10
9	SK2751	骨鏃?	不明	焼?	(3.4	0.4	0.3	先端わずかに欠損	- 11
10	SK2756	骨鏃	不明	焼	(1.2	0.3	0.2	先端破片	- 13
11	SK2756	骨鏃	不明	焼	(1.2	0.5	0.4	先端付近の破片	- 14
12	SK2756	骨鏃	不明	焼	(0.8	(0.4	(0.2	先端付近の破片	- 15
13	SK2756	骨鏃	不明	焼	(1.7	0.5	0.4	茎破片	- 16
14	SK2756	骨鏃	不明	焼	(2.2	0.5	0.3	茎破片	- 17
15	SK2756	骨鏃	不明	焼	(2.7	0.6	0.3	茎破片	- 18
16	SK2756	骨鏃	不明	焼	(1.8	0.4	0.3	茎破片	- 19
17	SK2756	骨鏃	不明	焼	(1.2	0.5	0.4	茎破片	- 20
18	SK2756	骨鏃	不明	焼	(2.8	0.3	0.3	茎破片	- 21
19	SK2756	骨鏃	不明	焼	(1.1	0.6	0.5	茎破片	-
20	SK2756	骨鏃	不明	焼	(0.6	0.6	(0.4	茎破片	-
21	SK2756	骨鏃	不明	焼	(1.1	0.4	(0.2	茎破片	-
22	SK2756	骨鏃	不明	焼	(0.5	0.3	0.3	茎破片	-
23	SK2756	骨鏃	不明	焼	(0.8	0.3	0.3	茎破片 他に細片多数	-
24	SK2756	骨鏃	不明	焼	(0.7	0.3	0.2	茎破片	-
25	SK2756	骨鏃	不明	焼	(1.0	0.5	0.3	茎破片	-
26	SK2756	骨鏃	不明	焼	(0.4	0.2	0.2	茎破片 他に細片多数	-
27	SK2757	骨鏃	不明	焼	(2.1	0.5	0.5	茎破片	- 22
28	SK2757	骨鏃	不明	焼	(3.7	0.3	0.2	茎破片	- 23
29	SK2757	骨鏃	不明	焼	(2.0	0.3	0.3	茎破片	-
30	SK2759	骨鏃	不明	焼	(1.2	0.3	0.3	先端破片	- 24
31	SK2759	骨鏃	不明	焼	(0.9	(0.3	0.3	先端破片	- 25
32	SK2759	骨鏃	不明	焼	(1.7	0.4	0.4	茎破片	- 26
33	SK2759	骨鏃	不明	焼	(1.2	0.4	0.4	茎破片	- 27
34	SK2759	骨鏃	不明	焼	(0.8	0.5	(0.3	茎破片 他に細片多数	-
35	SK2759	骨鏃	不明	焼	(1.2	0.4	0.4	茎破片 他に細片多数	-
36	SK2759	骨鏃	不明	焼	(1.0	(0.2	(0.2	茎破片 他に細片多数	-
37	SK2759	骨鏃	不明	焼	(1.1	0.3	(0.2	茎破片	-
38	SK2827	骨鏃	不明	焼	(0.9	0.4	(0.2	茎破片	-
39	SK2827	骨鏃	不明	焼	(1.0	0.4	0.4	茎破片	-
40	SK2827	骨鏃	不明	焼	(0.8	0.3	0.2	先端破片	-
41	SK2827	骨鏃	不明	焼	(0.6	0.3	0.3	茎破片	-
42	SK2827	骨鏃	不明	焼	(0.9	0.6	0.4	茎破片	-
43	SK2827	骨鏃	不明	焼	(0.3	0.4	(0.3	茎破片 摩滅、他に破片	-
44	SK2827	骨鏃	不明	焼	(2.5	0.6	0.3	先端破片	- 28
45	SK2827	骨鏃	不明	焼	(1.4	0.6	0.3	先端破片	- 29
46	SK2827	骨鏃	不明	焼	(1.9	0.5	0.3	茎破片	- 30
47	SK2827	骨鏃	不明	焼	(1.1	0.4	0.3	先端破片	- 31
48	SK2827	骨鏃	不明	焼	(2.0	0.3	0.3	茎破片	- 32
49	SK2827	骨鏃	不明	焼	(1.3	0.4	0.4	茎破片	- 33
50	SK2827	骨鏃	不明	焼	(1.5	0.4	0.4	茎破片	- 34
51	SK2827	骨鏃	不明	焼	(3.3	0.4	0.4	茎・先端破片	- 35
52	SK2827	骨鏃	不明	焼	(2.8	0.4	0.2	茎破片	- 36
53	SK2827	骨鏃	不明	焼	(1.2	0.3	0.4	茎・先端破片	- 37
54	SK2827	骨鏃	不明	焼	(1.4	0.3	0.3	茎・先端破片	- 38
55	SK2865	骨鏃	不明	焼	(2.9	0.4	0.3	茎破片	- 39
56	SK2865	骨鏃	不明	焼	(0.7	0.2	0.2	先端破片	-
57	SK2879カ	製品?	不明	焼	(0.7	(0.8	(0.3	器種不明	-
58	SK番号不明	骨鏃	不明	焼	(0.7	(0.3	(0.3	茎破片	-
59	SD2018	骨鏃	不明	焼	(2.3	(0.7	(0.5	茎破片 他に細片多数	- 55
61	SD1016 ⑤-2	骨鏃	不明	焼	(2.0	0.7	0.5	茎破片	- 43
62	SD1016 ⑤-2	骨鏃	不明	焼	(2.1	0.7	0.6	茎破片	- 44
63	SD1016 ⑤-2	骨鏃	不明	焼	(1.6	0.6	0.4	茎破片	- 45
64	SD1016 ⑤-2	骨鏃	不明	焼	(0.7	0.6	0.6	茎破片	- 46
65	SD1016 ⑤-2	骨鏃	不明	焼	(2.3	0.5	0.4	茎破片	- 47
66	SD1016 ⑤-2	骨鏃	不明	焼	(1.1	0.4	0.4	茎破片	- 48
67	SD1016 ⑤-2	骨鏃	不明	焼	(2.5	0.5	0.5	茎先端付近	- 49
68	SD1016 ⑤-2	骨鏃	不明	焼	(3.5	0.5	0.4	茎破片	- 50
69	SD1016 ⑤-2	骨鏃	不明	焼	(1.6	0.4	0.4	茎破片	- 51
70	SD1016 ⑤-2	骨鏃	不明	焼	(3.0	0.5	0.4	茎破片	- 52
71	SD1016 ⑤-2	骨鏃	不明	焼	(1.5	0.5	0.4	茎破片	- 53
72	SD1016 ⑤-2	骨鏃	不明	焼	(0.9	0.4	0.4	茎破片	-
73	SD1016 ⑤-2	骨鏃	不明	焼	(0.9	0.4	0.3	茎破片 他に細片多	-
74	SD1016 ⑤-2	骨鏃	不明	焼	(0.6	0.4	0.4	茎破片	-
75	SD1016 ⑤-2	骨鏃?	不明	焼	(1.9	0.7	0.2	先端 やや断面偏平	- 54
76	SD1016 ⑩-1 (VVQ08)	未製品	鹿角	生	(6.7	(3.1	(1.5	鹿角断面削り痕	- 4
60	SD2016 ⑤-2 (VRN02)	未製品	鹿角	生	(10.5	6.3	2.5	鹿角基部・枝角切断痕	- 3
77	SQ2016 ⑤-2	骨鏃?	不明	焼	(2.7	0.8	0.5	断面三角 先端	- 56
78	SQ2007	骨鏃	不明	焼	(2.7	0.6	0.4	茎破片	- 57
79	出土地点不明	骨鏃	不明	焼	(0.8	0.3	0.1	先端破片	- 40
80	出土地点不明	骨鏃	不明	焼	(2.2	0.3	0.2	茎破片	- 41
81	出土地点不明	骨鏃	不明	焼	(1.9	0.4	0.4	茎破片	- 42
82	⑧-2区検出面	骨鏃	不明	焼	(3.8	0.7	0.5	茎破片	- 12

実用品であったかは断定するまでには至らなかったが、いずれも熱を受けており、土坑で焼却が行われた際に一緒に廃棄されたと思われる。そういった状況からは非日常的な所産とできるかもしれない。なお、形状について松原遺跡のものは磨製石鏃と同形態、屋代遺跡群高速道路地点のものはやや形態が異なる棒状の鏃であり、綿田氏は断定は避けながらも七尋岩陰遺跡例は鉄鏃模倣の可能性を述べている。古墳後期の骨鏃が鉄鏃の影響を受けて変容した可能性は残されるが、本遺跡出土品は直接鉄鏃の模倣とはみられない。

ヘラ状骨角器は図示した5、7、54がある。いずれも破片で詳細は不明である。両端のとがる棒状骨角器は1点のみで図示した11がある。先端を僅かに欠損するが、ほぼ完存品と思われる。用途は不明ながら、骨鏃の類似品かもしれない。表面には削り痕が確認できる。

以上のように本遺跡で確認できた骨角製品の大部分は骨鏃と思われる。材料の獣の骨種は明らかでないが、生仁遺跡および七尋岩陰遺跡出土品はシカの中手骨、もしくは中足骨とされる。本遺跡例も同様とすれば、上記にみた未製品は骨鏃を製作するものとは考えにくい。骨角器未製品が特定の場所に集中せず、しかも骨鏃の出土と一致していない分布状況からも両者を直接結びつけることは難しいと思われる。従って、本遺跡では漆附着土器や羽口にみられるように漆工や鍛錬鍛冶の存在が推測されながらも、古墳時代の漆製品、あるいは鉄製品が1点もない状況と同様に、製作された骨角製品も遺跡外へ搬出されている可能性が高い。

註1 『生仁遺跡Ⅲ』1989 更埴市教育委員会

2 『屋地遺跡Ⅱ』1990 長野市教育委員会

3 『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書13 ー更埴市内・長野市内その1 鳥林遺跡・小坂西遺跡・鶴萩七尋岩陰遺跡・赤沢城跡・塩崎城見山岩遺跡・地之目遺跡・一丁田遺跡』1994 長野県教育委員会・(財)長野県埋蔵文化財センター

4 整理担当者のご教示による。

5 綿田弘美「第5章 鶴萩七尋岩陰遺跡 第5節 小結」注4前掲書

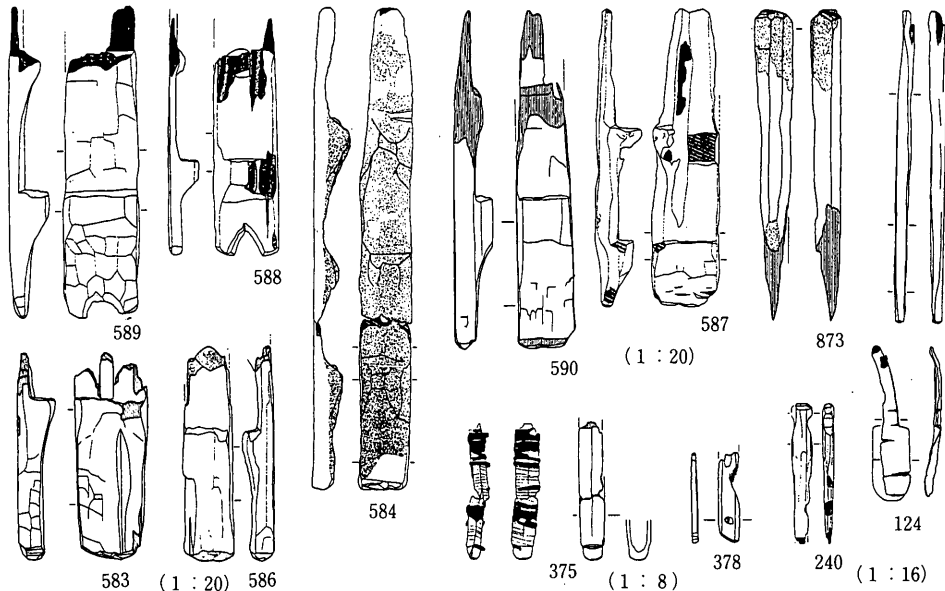
第6節 木製品

1. 出土状況の概要

大溝区画祭祀域に帰属する木製品は約3000点が出土し、出土地点別ではS D1016内がその大半を占め、井戸となる土坑からいくつかの出土が認められた。木製品の大半は、製品としての形状や加工痕が不明な板材、割り材などで、取り上げを行なった約5%が具体的な製品とし認識できるものであった。S D1016からは多量の木製品が出土したにもかかわらず全容がわかる製品が少なかった要因としては、祭祀域内での廃棄行為として破壊や焼却があったことと、微高地に立地する条件から乾燥化により製品が変形していたことが上げられる。出土木製品の状態は、炭化したものが全体の約2割を占め、表面が劣化し、収縮した状態のものが多く見られた。なお木製品の器種・加工の特長等の詳細については本書第3分冊を参照されたい。

ア 土坑出土木製品 (第199図)

土坑内からは建築材を主体とし板材、割り材等が出土した。遺存状況は悪く欠損の著しいものが大半で



124-S K2648 240-S K2756 375-S K2442 378-S K2832 583-S K2757 584-S K2648 586-S K2746 587-S K1022 588-S K2492 590-S K2473 873-S K2492

第199図 土坑出土主要木製品

あり実測個体数は15点である。井戸としたS K1022 (587)・2436 (589)・2473 (590)・2492 (588)・2648 (584)・2746 (586)・2757 (583)からは梯子が、S K2492 (873)・2756 (240)からは建築部材が出土した。873は柱材、240は垂木材の一部と考えられる。S K2648 (584)の梯子とS K2492 (873)・2756 (240)の建築部材は著しい炭化痕があり廃棄行為の後に土坑内に遺棄されたものであるが、他は井戸に伴う施設の一部とされる。建築材以外ではS K2648から一木平鋤(124)、S K2442から剣鞘(375)、S K2832から柄もしくは形代(378)が出土した。一木平鋤は破損品の廃棄であるが、特殊製品である剣鞘、柄は意図的に折られ遺棄された可能性がある。

イ S D1016出土木製品 (第200図)

S D1016内からは板材、割り材を主体とし全域から大小の木材片が多量に出土した。大形木材の大半は炭化し、表面が剥れている。また耕作具などの小形製品も遺存状況は極めて悪く、破損材が多く含まれていた。本址からは小破片を含め2346点の木製遺物を取り上げ検討の対象としたが、炭化の著しい材や厚さ数mmに収縮した材は遺物取り上げ時に破損し、原形を留めない状況となった。炭化物の厚い堆積層を考慮すると、取り上げた2346点の数倍が本址内にあったものと思われる。

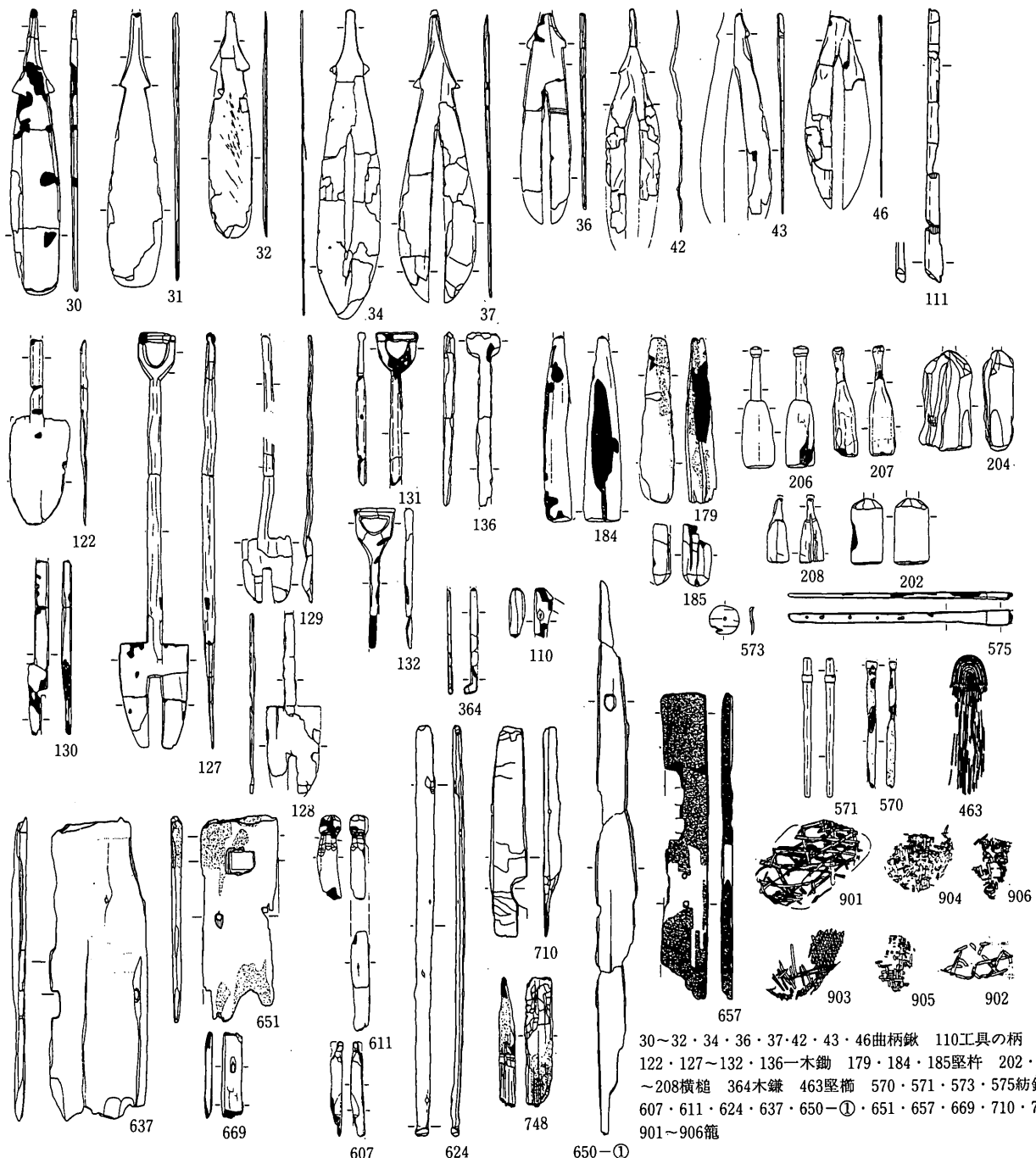
A 木製品の種類別出土状況 (第201～204図)

木製品の分類は2346点についてのみ行なった。加工形状の確認できた木製品は、建築材、耕作具、調整具、容器(籠を含む)、用途不明品など129点で、この内建築材を除く製品は54点である。また加工によって残された削り屑(残材)が多量に確認された。建築材となる板材・割り材などは両端木口、両側の木端が欠損し、表面が剥落・収縮するものが大半で、全体形状を推測できる資料は僅かであった。このため耕作具などの用途が確認できる製品以外は木取りと厚さのみを分類した。分類した木材に関する出土分布は工事工程の調査区割りによってA～E区域の5区に分け傾向を捉えた。

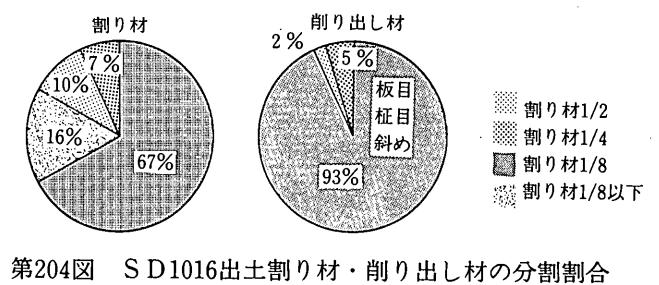
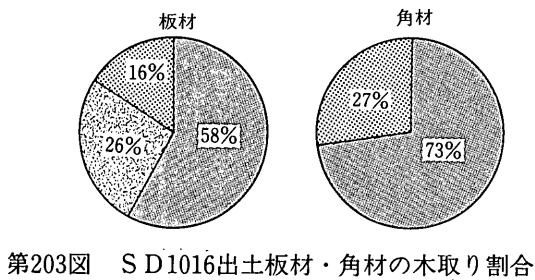
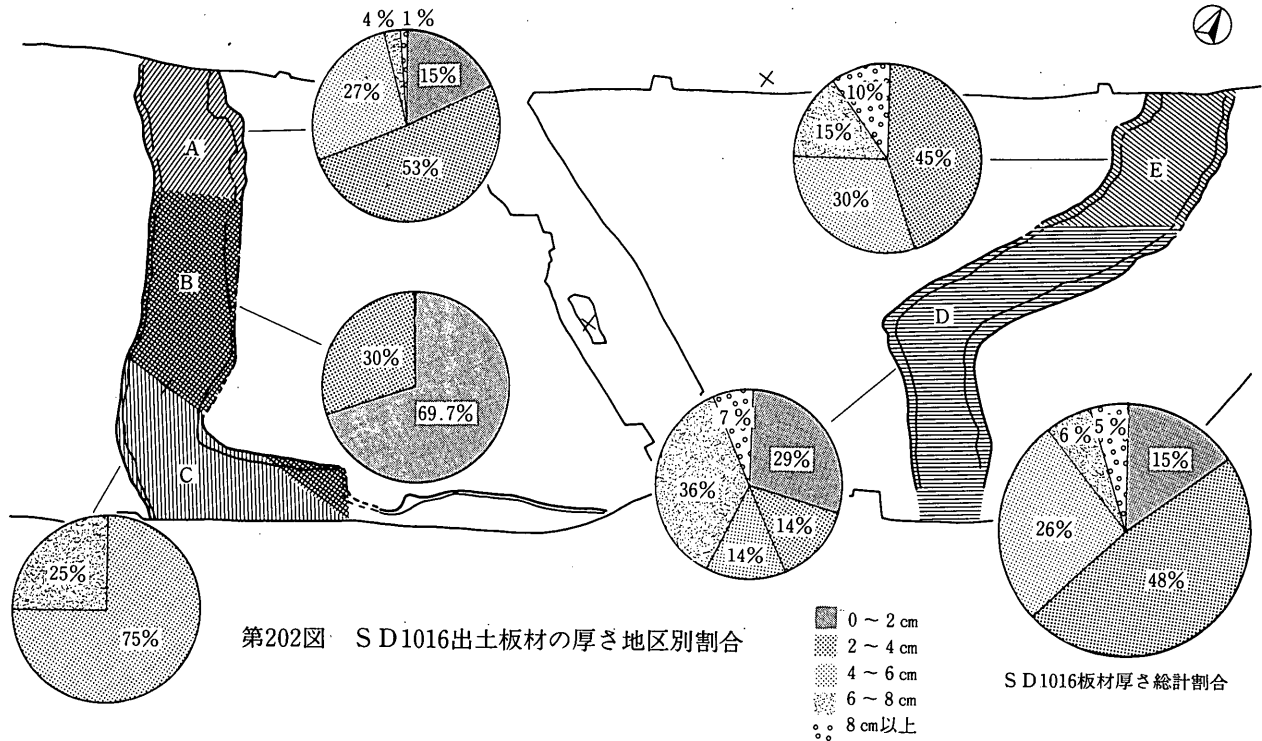
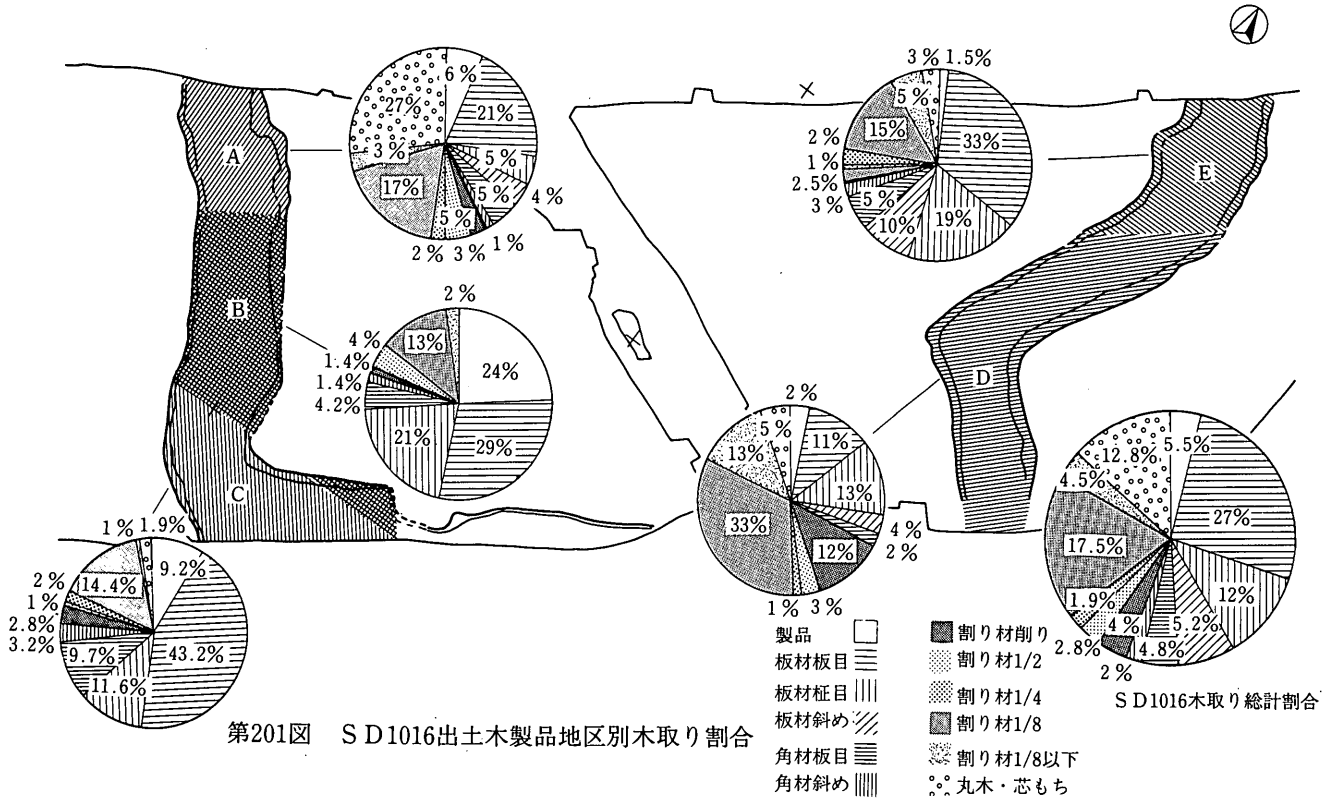
製品を除く木材の木取りで最も多かった材は板材で、全体の39%を占める。板材の内訳は58%が板目材、26%が柾目材で、残りが斜め材16%であった。板目材は出土全体でも27%と最も多くの割合を占めている。厚さでは収縮が顕著に認められる材が大半であるので正確な数値とは言えないが、2～4cmの材が48%、次いで4～6cmの材が26%で2cm以下が15%、6～8cmが6%、8cm以上が5%の順になっている。板材

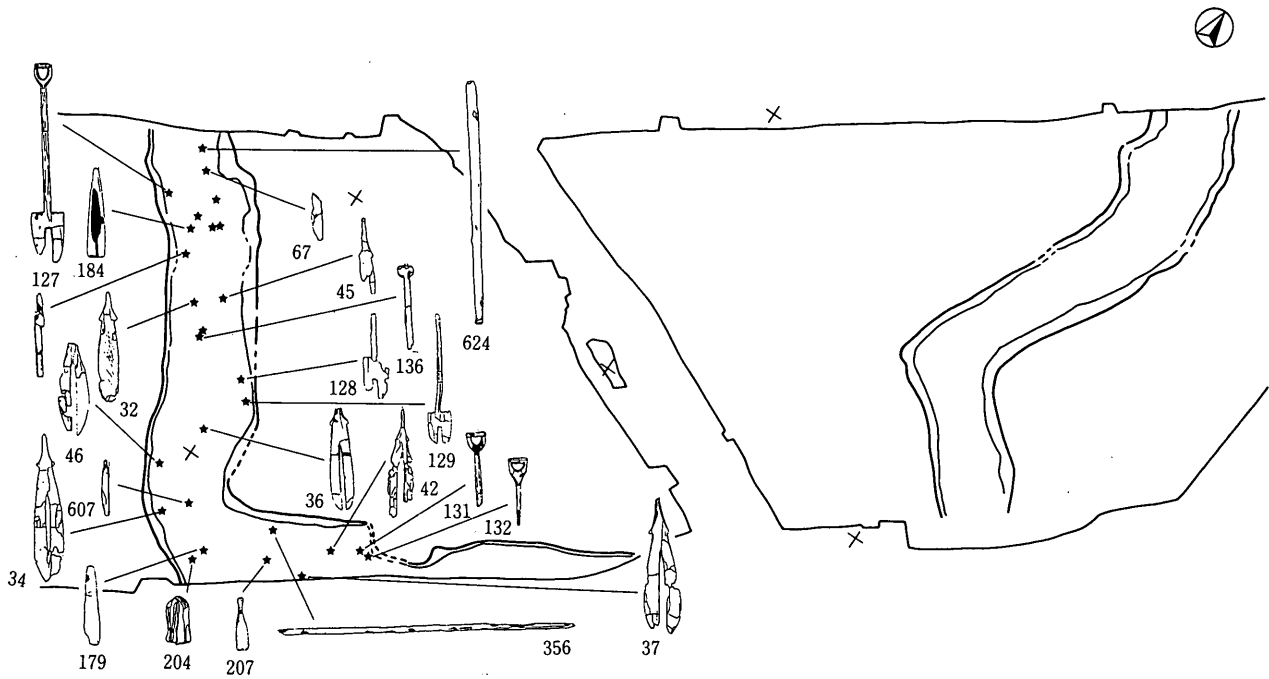
に次いで多かった木材は割り材で、30.7%である。割り材の内訳は1/8割り材が67%と最も多く次いで1/8以下の割り材が16%、1/2割り材が10%、1/4割り材が7%の順であった。割り材から更に加工された芯部側もしくは木肌側に削りを施し角材状となる木材(割り材削り)は、全体の4%を占め、内訳は1/8割り材が93%、1/4割り材が5%、1/2割り材が2%であった。丸木材は全体の12.8%であり直径5~10cm程度の材が約9割を占める。残存形状が角材として識別された木材は全体の6.8%で、内訳は板目材73%、斜め材27%であったが、板材欠損の木端とされるものが多く含まれる。製品として確認できた材は5.5%で、この内建築材を除くと中・小形木製品は全体の僅か2.3%であった。

A~E区の地点別の出土状況は、製品が最も集中している地点がB区で、次いでC区、A区となり西側の溝内のみから耕作具、調整具が出土している。杵や総カケなど紡織具はC区のみから出土している。地区別に木材木取りと板材の厚さの傾向を見ると、A区は他の出土区域に比べて丸木材が27%と比較的多く、

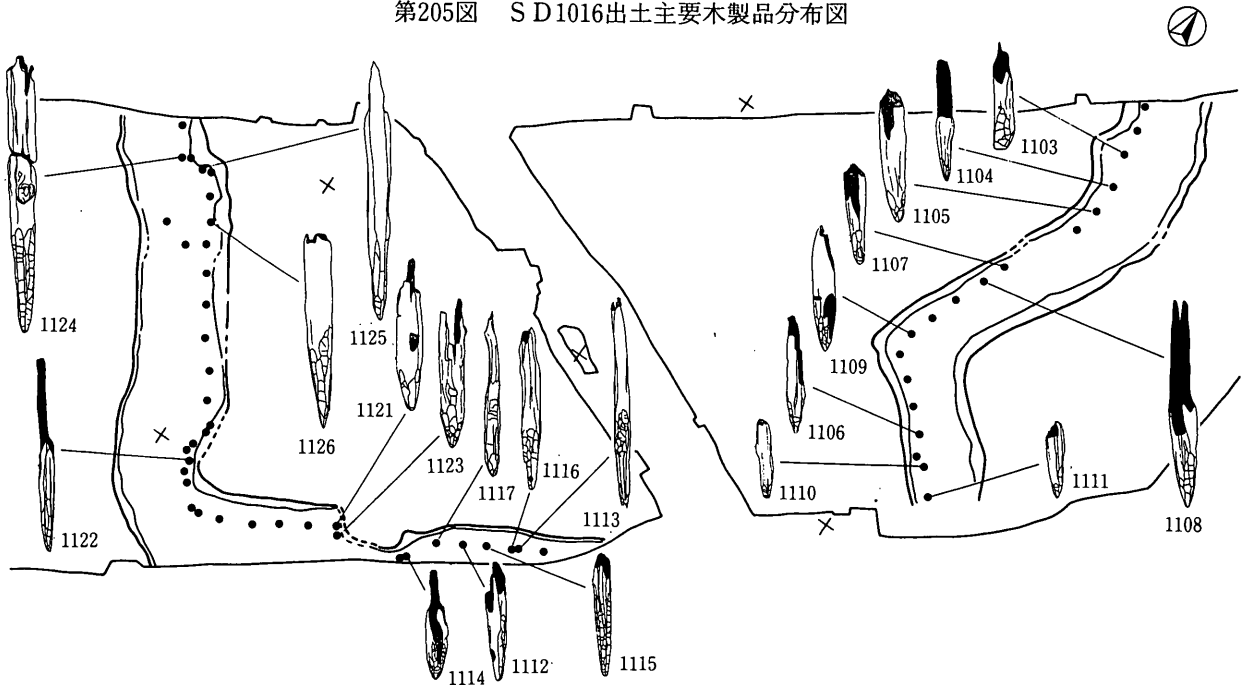


第200図 S D 1016出土主要木製品





第205図 S D 1016出土主要木製品分布図



第206図 S D 1016杭列杭分布概要

割り材も30%と高い値となっている。反対に板材が30%、角材が6%と少ない。板材の厚さでは本址出土の総計割合とほぼ同一となっている。B区は板材が50%を占め最も多いが、柾目材が21%と他の出土区域に比べ高い割合となる。また厚さでは0～2cmの薄い材が69.7%を占め、他も2～4cmの薄い材であった。C区は板材と角材が61.3%で、この内板目材が43.2%を占め、出土地区別では最も高い割合となり、B区同様に割り材の占める割合が少ない。板材の厚さでは4～6cmが75%を占め他も全て6cm以上の比較的厚い板材である。D区は割り材が50%と集中する区域であり、割り材からの削りを入れた加工材が12%と他の出土域とは異なる傾向であった。板材の厚さでは、6cm以上の厚い材が43%を占め大型板材が多量に出土している。E区は板材が62%で出土域のなかでは最も多く出土した区域であるが、厚さは4cm以下の薄

い板材が75.4%で、板材の大半は小型であった。板材のなかでも斜め材が全体の10%を占め柾目材も19%と高率である。また本区域は製品率が1.5%と最も低い。

B 木製品の種類

建築材を除く木製品で最も多かったものは耕作具で24点あり、この内訳は曲柄鋏身部が12点、一木鋤が11点、反柄が1点であった。曲柄鋏12点の中で形態のわかるものは8点で、全てナスビ型であり、軸端部が残ったものの内30・37は柄装着部に段を削りだしている。平鋤が3点、又鋤が6点、刃部に楕円形透かし窓を作りだした鋤が1点である。一木鋤で刃部形態のわかるものは5点で又鋤が4点、平鋤が1点である。把手部は隅丸三角形の透かし窓を削りだしたものが6点、透かしのない五角形状のものが1点である。調整具は堅杵4点、横槌5点がある。堅杵は欠損が著しいが、184は搗部が平坦をなす粗い敲きを主体とした用途で他は楕円形の摩滅した搗部をもつ摺り搗きを主とした用途のものであった。横槌は乾燥による歪みが顕著であったが、206～208は割り材から入念に削りだされた精製品で、全体形状は紡錘形で握り部先端にグリップが作り出されている。また水田域出土の同器種に比べ小型である。紡織具は棹が2点と総カケ、紡錘車が各1点ある。容器は小破片で刳物の槽が1点の他、籠が多数出土したが図示できたものは少なく全容を確認できるものはない。木製容器が少ないことから多量の土器とともに籠が容器としてかなりの割合を占めていたことが推測される。これらの他に工具の柄となる膝柄1点(110)、堅櫛が1点(463)、木鎌(364)が1点出土した。

本址出土の50%強を占める板材・角材は大半が建築材であると考えられるが部材として確認できたものは少ない。建築材の約2割が炭化して、原形を留めないもので、両端木口が残存した製品は1点(624)であった。水田域出土建築材に比べ遺存状況が極めて悪い要因は、製品以前の素材が廃棄されたかあるいは構築物の廃棄にあたり意図的に壊され焼却されたためと思われる。部位が確認できたものには柱材、梁・桁材はなく、垂木材と柄穴が残る壁材や床材となる板材であった。

ウ 樹種について (第10～12表) (註1)

大溝区画祭祀出土の木材樹種の同定は土坑内出土木製品85点、S D 1016出土木製品2021点について行なった。この内樹種同定された木材は土坑内62点、S D 1016内1765点であった。

S D 1016内出土の木材中樹種同定された木材の木取り分類は、出土木材の木取り分類の総計割合とほぼ一致するので、この同定結果は同址内の木材樹種割合を反映しているものと見られる。樹種で最も多かったのは、サワラで全体の51.7%を占め、次いでクヌギ節16.5%、コナラ節7.5%、モミ属6.1%、ヒノキ5.4%、ネズコ1.4%、クリ1.3%の順であった。木取りの分類と樹種の関係では、板材の69.6%がサワラで次いでモミ属9.9%、ヒノキ7.2%であり、角材では74.8%がサワラ、12.6%がヒノキ、2.9%がモミ属とクヌギ節であった。この同定結果から板材、角材は針葉樹材が主体として用いられていたことがわかり、これら樹種用材の用途は建築材であることが知られている(註2)。割り材は55%がサワラ、次いでクヌギ節18.9%、コナラ節8.9%であった。割り材中にサワラが1/2を占めていたことは本址周辺で加工材として多く用いていたことの現れであり、建築材への加工が行なわれていたことを示唆している。丸木材は比較的小形のものであり、クヌギ節49.5%、コナラ節22.2%とこの2種類が丸木材の2/3を占めている。削り屑では同定されたものが9点と少なく明確な傾向は導きだせないが、ヒノキ、モミ属、クヌギ節、コナラ節などが同定され、建築材や小形木製品の各種の樹種と一致している。

エ S D 1016縁辺を廻る杭材 (第3分冊第12節、図版175～179参照)

本址からは54本の杭が検出された。杭の用材は丸木材が96.5%で割り材が3.5%となり主として丸木材が選択されていた。直径は残存率の低い1110と1122などの一部を除くと8～12cmの大形材となり、先端部の加工は周縁部から緻密な削りが残り、削り面が長いことが特長となる。杭の全長については最も長く残存

第10表 S D 1016出土木製品の分類別樹種点数

分類	サワラ	ヒノキ	モミ	クヌギ	コナラ	ネズ	コ	ク	リ	ヤナギ	ケンボシ	カエデ	ツガ	アス	カ	ヤ	ヤマ	ケ	ヤ	エ	フ	カ	その他	計
板	518	54	74	16	12	16	16	5	7	11	7	6	1	3	1	5	13	3	1	1	5	13	744	
角	101	17	4	4	3	3	3	1	1	1	1	1	1	1	1	1	3	3	3	6	3	3	135	
丸	273	16	15	94	44	5	12	2	8	3	1	1	1	1	1	6	2	2	23	11	2	23	297	
割	1	3	3	5	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	496	
建	8	1	1	19	5	1	1	1	1	1	1	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	6	
削	1	1	1	11	4	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	21	
小形	912	96	107	297	132	24	24	23	16	15	14	12	10	10	10	9	8	8	8	8	6	5	1765	
杭																								
総計	912	96	107	297	132	24	24	23	16	15	14	12	10	10	10	9	8	8	8	8	6	5	1765	

第11表 S D 1016出土木製品の分類別樹種割合 (%)

分類	サワラ	ヒノキ	モミ	クヌギ	コナラ	ネズ	コ	ク	リ	ヤナギ	ケンボシ	カエデ	ツガ	アス	カ	ヤ	ヤマ	ケ	ヤ	エ	フ	カ	その他	計
板	69.6	7.2	9.9	2.1	1.6	2.1	2.1	0.7	0.7	0.3	0.3	1.5	0.9	0.8	0.8	0.1	0.4	0.4	0.1	0.1	0.7	1.7	744	
角	74.8	12.6	2.9	2.9	2.2	2.2	2.2	1.7	4.4	1.3	2.4	0.7	0.7	0.7	0.7	0.7	1.0	1.0	2.0	2.2	135	2.2	135	
丸	3.7	1.0	2.4	49.5	22.2	1.0	2.4	1.7	4.4	1.3	2.4	0.7	0.7	0.7	0.7	0.7	1.0	1.0	2.0	2.2	297	7.7	297	
割	55.0	3.2	3.0	18.9	8.9	1.0	2.4	2.4	0.4	1.6	0.6	0.6	0.6	0.2	0.2	0.4	0.4	0.2	0.2	0.2	496	2.2	496	
建	5.0	15.0	15.0	25.0	16.6	16.6	16.6	16.6	16.6	16.6	16.6	16.6	16.6	16.6	16.6	16.6	16.6	16.6	16.6	16.6	20	5.0	20	
削	16.1	33.3	16.6	16.6	16.6	16.6	16.6	16.6	16.6	16.6	16.6	16.6	16.6	16.6	16.6	16.6	16.6	16.6	16.6	16.6	6	16.6	6	
小形	17.4	2.2	2.2	41.3	10.9	4.8	4.8	4.8	2.2	2.2	4.3	4.3	4.3	4.3	4.3	4.3	4.3	4.3	4.3	4.3	46	4.3	46	
杭	4.8	4.8	4.8	19.0	19.0	19.0	19.0	19.0	19.0	19.0	19.0	19.0	19.0	19.0	19.0	19.0	19.0	19.0	19.0	19.0	21	9.5	21	
総計割合	51.7	5.4	6.1	16.8	7.5	1.4	1.4	1.3	0.9	0.8	0.8	0.7	0.6	0.6	0.6	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.3	0.3	1765	

第12表 土坑出土木製品の分類別樹種点数

分類	サワラ	ヒノキ	モミ	クヌギ	コナラ	ク	リ	ク	マ	ツ	カ	カ	カ	ケ	ケ	ケ	ケ	ケ	ケ	ケ	ケ	ケ	ケ	計
板	11		2				2																19	
角	2	1																					3	
丸	2		1	5	2				3														14	
割	8	2	1	4	1																		18	
建	2	3		1																			6	
小形	1																						1	
杭					1																		1	
総計	26	5	5	6	7	3	3	3	3	2	1	2	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	62	
総計割合	41.9	8.1	8.1	9.7	11.3	4.8	4.8	4.8	4.8	3.2	1.7	3.2	1.7	1.7	1.7	1.7	1.7	1.7	1.7	1.7	1.7	1.7		

樹種同定した土坑 () 内は点数

SK1022(4) SK1033(5) SK1046(1) SK2003(7) SK2005(2)
 SK2027(1) SK2057(7) SK2063(6) SK2436(5) SK2442(1)
 SK2473(1) SK2492(2) SK2745(2) SK2746(3) SK2756(5)
 SK2757(1) SK2759(1) SK2827(5) SK2831(2) SK2832(1)
 (この他に23点の樹種同定を行なったが遺存状況が悪く同定できなかつた)

する1124でも116cmで、30～60cm程度のものが大半を占める。杭として使用された当初の長さを確認できる資料はないが、同時期の水田域出土の杭材には直径7.5cmで長さ259.6cm(1073)、直径10cmで288.2cm(1081)の杭が出土している。このことから直径8～12cmとなる大半の杭は全長300cm以上あったことが推測され、50～60cm程度土中に打ちこまれていたとすると250～280cm近く突出していたものと考えられる。また溝底面と検出面の比高差が90～120cmであるので、遺構構築面上にも150～180cmほど突出していた状況に復元される。更に想像力を膨らませると、突出した杭上部には横木材が渡されていたことも考えられ、溝内のエリアと外部とが空間的に遮断されていた状況が復元される。樹種はクヌギ節が52.4%と最も多く、次いでコナラ節が19%で両者で全体の約7割を占め、他にヒノキ、クリ、モミ属、モクレン属などが利用されていた。

2 まとめ

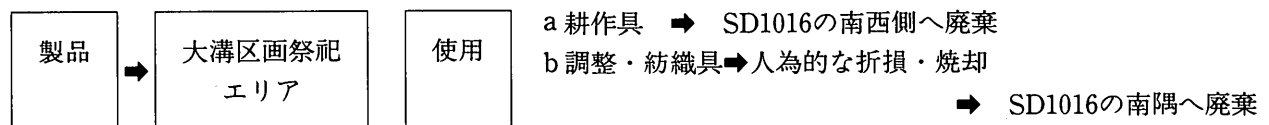
ア 木材廃棄について

木製品の出土状況からは、土坑（井戸を含む）から梯子、武具が出土し、SD1016からは梯子以外の建築材、耕作具、調整具などが出土した。燃焼による炭化状況は、SD1016出土の調整具となる竪杵、紡織具の杵に炭化が認められたほかは耕作具には炭化したものがなく、建築材は井戸出土の梯子の数点を除く大半が炭化していたと見られる。このことは器種によって廃棄された過程が異なり、時間的な経緯も前後関係があった可能性が強い。耕作具は比較的残りの良いものもあり西側の溝内からのみ出土していることから、使用後一括廃棄されたとみなされる。また調整具、紡織具は使用後折損され一部焼却されて南隅を中心に廃棄された。建築材は破壊、焼却されSD1016全域に廃棄されたと見られる。

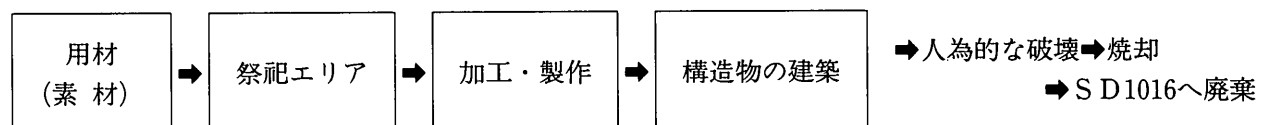
イ 木材加工について

本址から出土した木製品の加工工具となる遺物は木製膝柄1点で、本址帰属の可能性のある遺物として検出面から鉄斧1点（第1分冊第344図4 註3）がある他は皆無であった。これに対し出土木材のなかには残材や削り屑が認められた。小型木製品（耕作具や武具など）には確実に未製品となるものはなかったので耕作具や生活雑具の小形製品製作にかかわる加工とするよりは、大形板材などの製作が盛んに行なわれた痕跡とされ、遺存状況の問題もあるが建築材の未製品もないことから製品製作までの全ての工程が完了したと見られる。つまりSD1016によって囲まれたエリアのなかで建築材が製作され、その建築材が廃棄されたことになる。また加工具は燃焼により痕跡を留めなかったかあるいは異なる場所にもって行かれたことが考えられるが、鉄製品があれば残る土壌堆積環境であるので後者の可能性が強い。SD1016出土木製品からはその種類によって以下の過程が想定される。

A…耕作具、調整具などの小型木製品



B…建築材、杭



註

- 註1 樹種同定の詳細は『第3分冊 付章石川条里遺跡出土木製品の樹種（鈴木・能城）』の同定結果と考察を参照されたい。
- 註2 サワラは建築材として多く用いられる他建具などに使われている。
柴田桂太編：1989『資源植物事典』によると「ヒノキより軽軟で、脆弱であるため建築用材・土木用材としては（ヒノキに）劣るが、極めて素直に割裂し、水湿にも強い。余り強度を必要としない器具材、箱材として用い…以下略…」
第3分冊付章P70.82.83を参照されたい。
- 註3 平安時代の遺物として検出面から取り上げられたが帰属時期は明確ではない。

第4章 考 察

第1節 遺跡の構造

本遺跡の遺構配置をみると全体がひとつの計画性で貫かれているように感じられる。しかし、一方で偏在する遺構や遺物が認められ、場所ごとに空間利用のあり方が異なることも看取された。ここでは遺跡全体を貫く計画性と、内部空間利用の差異の2点から遺跡の構造についてまとめてみたい。

1. 遺跡全体の基本設計

本遺跡は後背低地内の小規模な微高地に立地する。この微高地の平面形は北東－南西方向に長軸をとる紡錘形となり、その規模は長軸約270m、短軸は子細不明ながら現土地利用状況や中世館規模から類推すると約100m強と思われる。古墳時代の特殊遺構群はこの微高地の東よりに占地し、西側には遺構の検出されない空白地帯がある。そして、微高地周囲については西側縁辺低地境で甕・壺類を中心とした遺物集中が検出されている。当初、低地境の遺物集中は水田に伴うとも考えられたが、出土土器は微高地の所産と類似した年代であることや、近接する⑥区の微高地周囲には類似した遺物集中が認められないため、本微高地に伴う遺構であると判断した。つまり、遺構の検出されない空白地帯を含みながらも微高地範囲がひとつの空間として意識されていたと思われる。

微高地中央の特殊遺構群は幅10～13mの大溝で周囲を区画され、ひとつの空間が形作られている。このS D1016の区画する平面形については東・西辺で形態が異なっているが、西側が地形を無視して直線的に構築されると見られ、本来意図された形は西側を基本とした方形であろうと判断した。このS D1016の役割は周囲からの物理的な隔絶を目的としているとみられるが、基本的には精神的な境を意味するのではないと思われる。例えば、古墳時代豪族居館では溝の岸上に柵列・塀が配置されるが、本溝では溝内に杭列が検出され、それは間隔が広い上に、打ち込みなのでの高さも低いと考えられる。したがって、杭列は実際的な防御施設とは言いがたく、象徴的な意味を示す施設と考えられる。つまり、杭列がS D1016の底面上にある意味はS D1016がこの特殊遺構群の空間を分ける「境」であったことによると思われる。また、S D1016では石製腕飾類が出土し、その出土地点はS D1016東・西・南の各辺中央部といったように極めて規則的な配置を示している。したがって、遺跡全体に関わる統一的な意識の元に遺棄されたものであり、石製腕飾類を保有する階層・集団にとってS D1016が区画する範囲は特別視される空間であったと考えられる。出土した石釧の意味は明らかでないが、遺棄されたのが遺跡構築当初ではない可能性があるため地鎮祭的な用法とは考えにくい。そして、後述するように出土した石製腕飾類の破壊行為が古墳でも見られるならば、両者に共通する背景があって、それは本遺跡の性格を表現する重要な意味をもつと思われる。なお、本遺跡に近い川柳將軍塚古墳では江戸時代に近在の農民によって器物が掘り出されているが、そのことを記した古文書に車輪石と思われる図が掲載されているものがある。車輪石は現存していないため確認しようがないが、本当に川柳將軍塚古墳で出土したならば本遺跡出土品との接合関係を含めて両者の関係は興味が引かれる。ただし、車輪石の出土は農民が掘り出した直後の記録にみえず、しばらく時間が経過した時点でかかれた古文書に見える。したがって、その記述の信憑性には疑問も残る。

以上みてきたように、本遺跡はS D1016の区画によって特別な空間が形づくられているが、微高地の縁辺部の遺物集中の存在からも、それとは別に微高地全体がひとつの空間として意識されていたと考えられる。つまり、微高地全体—S D1016区画内という2重の意識があったとみられる。しかし、単純にS D1016区画範囲を中核とする同心円的な構造とは見られないところがある。すなわち、S D1016区画東外側には大規模な遺物集中（S Q2016）があるが、西外側にはS D1016と平行する小規模な溝S D1007や方形性格不明遺構S X1001、若干の土坑が検出され、S D1016区画外側の東と西では遺構の種類・配置のされ方が異なっている。西側については遺構の検出されない空白地帯となる微高地が続き、西側を重点的に遮断するためにS D1007が配されているとも見られるが、そうした場合においても大規模な遺物集中が西側に認められないのは奇異に思われる。また、S D1016も西・東辺では形態ばかりでなく、付属する台形状突出部の配置数や杭列の配置のされ方の違いが見られる。例えば、西辺では台形状の突出部の配置数が多く、杭はこの突出部をトレースするように屈曲部分に2本ずつ配置される。これに対して、東辺は突出部が少ない上に、台形状突出部付近を杭列はトレースせず緩やかなカーブで一列に配置され、西側よりも造作が簡単にみえる。

このS D1016区画外側の東西での遺構種や造作の違いの意味を憶測するに、遺跡の「正面＝オモテ」・「裏＝ウラ」という意識が反映されているのではないかと思われる。すなわち、S D1016西辺中央部で検出された溝底面中央にある杭列は橋脚＝入口の可能性があり、西辺のほうが杭列の作りが丁寧と思われることを考え併せると西が「オモテ」、東が反対の「ウラ」にあたるのではないかと考えられる（南側がオモテにあたる可能性は残される）。こうした意識の違いによって遺跡の東西での遺構種類が異なると思われる。なお、このことは次に述べるS D1016区画内部の空間のあり方、さらに遺構配置から推測される通路のあり方などからも説明できる。また、S D1016内の石釧出土各地点で近接して出土している特殊品を比べると、西辺中央部のみが複数の管玉、銅鏃、銅鏡などが認められ、種類や量が多いことも正面であったことに関連するのかもしれない。特に、近接して出土した銅鏡・大型管玉も石釧同様に破損していることは類似した破壊行為が行われたことを示すと思われる。なお、西（南）側が正面となる理由は周囲の地形と集落遺跡との関係によると思われる。すなわち、本遺跡の立地は巨視的には後背低地内にあたるものの、微視的には本微高地を挟んで東西で地形の様相が異なる。東側には広域の低地が広がり、西側には谷状の低地と小規模な微高地が組み合う地形となっており、集落遺跡のある自然堤防へは西（南）が近く、谷状低地を渡れば小規模な微高地伝いに自然堤防へ達することができる地形上の利便さもある。

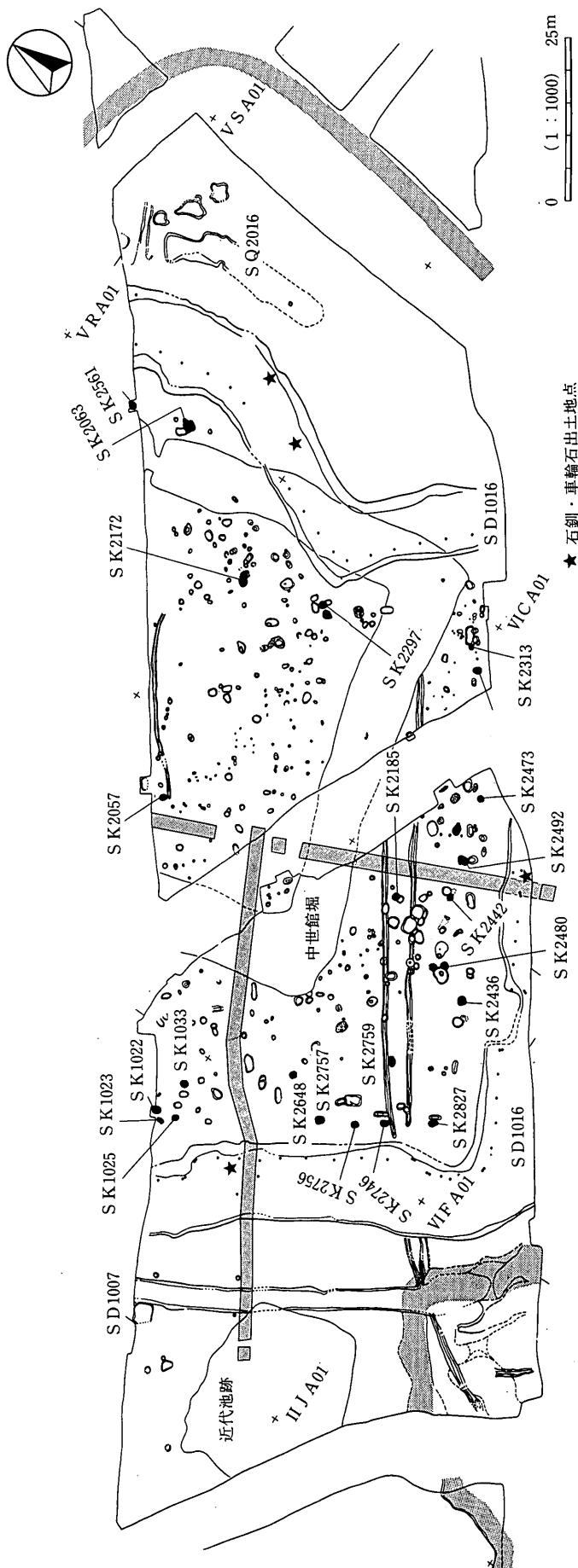
以上から、本遺跡はS D1016区画部分を最重要視する同心円的な構造に加え、遺跡のオモテ—ウラという2種の意識が基本設計に盛り込まれていると考えられる。

2. S D1016区画内部の空間構成

これまでにみたようにS D1016の区画内が最重要視された空間と捉えられるが、内部はどのような空間構成であったのだろうか。このことを考える上で、いくつか興味深いことが知られた。ひとつには調査時には土坑配置の規則性は認められなかったが、整理で見直すと一定の規則性が看取される部分がある。比較的明瞭に看取されるのは⑦-2、⑧-1、⑧-2区のS D1016岸に近い部分で、S D1016と平行した長軸方向をとる土坑と井戸跡が岸脇に一定間隔で配置されるようである。また、S D1016区画内の西側中央部付近でも東西方向の長楕円形の土坑配列が認められる。この土坑の並びに平行して土坑の認められない帯状空白地帯が東西方向に延びていると看取され、それを西側に延長先するとS D1016西辺の橋脚と推測される杭列にあたる。したがって、この土坑が検出されなかった帯状の空白地帯は内部の通路と推測され、長楕円形の土坑はこの通路にそって構築されたと考えられる。この通路と推測される部分をS D1016を越えて

西側へ延長してみるとSD1007と交差する付近でSK1060・1067が対峙して位置している。これもSD1007と通路の交差部分に設置された施設ではないかと思われる。また、同様に遺構の検出されない空白地帯は⑧-1区東端付近にも認められ、これも内部通路の可能性はある。こうしてみると、少なくともSD1016区画内は各石釧出土地点付近を基点とした通路によっていくつかの空間に分割されていたと考えられる。ただし、SD1016区画内の東半分についてはSD1016西辺から続く通路が貫いて南北二つの空間に分割されているのか明らかでなく、分割される空間が3、4かは即断しがたい。しかし、土坑のあり方からすると4つに分割されていた可能性があり、ここでは各空間を南東部・北東部・南西部・北西部とそれぞれ呼称することにした。

この分割された各空間のあり方を比較すると共通点と差異点を指摘できる。共通点は数の多寡はあるものの、井戸跡が検出されている点である。さらに建物跡は部分的にしか認定できなかったが、柱穴跡の可能性のある土坑は各区間で認められている。したがって、各空間には井戸跡と建物跡を備えていた可能性がある。さらに、井戸跡はそれぞれ外側（SD1016岸側）に配置されるものが多く、炭化物や土器を顕著に含む楕円形の土坑は各空間の縁辺（内部通路側とSD1016岸側）に認められる。また、各空間の縁辺に土器や炭化物を大量に含む土坑があるが、これらを片づけの遺構とするならば廃棄は各分割された空間の縁辺（隅）で行われていたことになり、現代的な解釈ながら屋敷の裏や境付近にゴミを捨てるのと類似した行為と思われる。こう



第207図 内部通路想定図（黒ぬりは井戸跡）

した行為からみると各空間は一定の独自性をもった面もあると思われる。しかし、東西方向の内部通路沿いでは井戸跡と思われる土坑は認められず、遺跡全体で東西通路脇には井戸を構築しない規則のようなものが働いた可能性がある。なお、内部の各空間での土器や炭化物を顕著に出土した土坑配置をみると、各空間の縁辺部に顕著に分布する。したがって、この土器・炭化物を顕著に出土する土坑は各空間内で中心的な役割を果たしたのではなく、派生的、いわば結果的にできた可能性が高い。このことは後述するように本遺跡の土坑それ自体が祭祀の対象であったとは考えにくい根拠のひとつでもある。また、土器・炭化物を顕著に含む土坑は数の多寡はあるが、いずれの空間で確認されるので廃棄を伴う行為は遺跡全体に共通した行為であることができる。

次に差異であるが、これは遺構・遺物を種類別分布に偏在が認められるところに顕著に現われ、各空間の機能差を示すと思われる。まず、特徴的な点を列挙してみたい。

A 遺物から看取される偏在

- ・手工業生産関連遺物（羽口・漆付着土器）はS D1016区画内の南西部で集中的に出土し、ここで手工業生産が行われたと推測できる。
- ・S D1016で出土した木製品を種類別に分布図に落としてみると、明らかに製品出土は西側に限定され、東辺ではほとんど認められない。一方で東辺北側では板状の材を多出している。これは東・西辺ともに木質遺物を出土しているので遺存状態の違いとは考えにくく、S D1016に接する各空間の様相を反映したものと見られる。東辺側で板材を多様する建物跡、もしくは貯蔵場所みたいなどころがあり、西辺に隣接する場所では生活・あるいは加工に関連する活動が行われていたと推測される。
- ・玉類の出土分布をみると、明らかに東部での出土は少ない。もちろん、篩で玉を捜す作業を均一に行っていないことに起因するかもしれないが、目につきやすいと思われる管玉の出土数を比較しても明らかに北東部側は少ない傾向がある。これは土坑へ玉類が入る契機が少ないが、あるいはそうした行為が行われなかったことに関連するのではないかと思われる。
- ・ミニチュア土器のあり方をみると、これも玉類の出土分布と近いあり方が看取される。すなわち、西側に多く、東側には少ないのである。もちろん、東側もS Q2016を含めると極端に少ないということにはならないが、少なくとも廃棄のされ方の違いは明らかである。また、土製模造具はS Q2016で集中的に出土しており、このS Q2016がS D1016区画内北東部と関連する遺構と考えるならば、土製模造具はこの部分で集中的に使われた可能性がある。このことはミニチュア土器と土製模造具は集落遺跡でも出土するものの、本遺跡では出土分布が一致せず、両者の使用法は同じではないと思われることも関連しよう。なお、ミニチュア土器を使用する用法が単一であった保証はないが、西側のほうが少なくともミニチュア土器を多用する、あるいはその機会が多いことを示すのかも知れない。

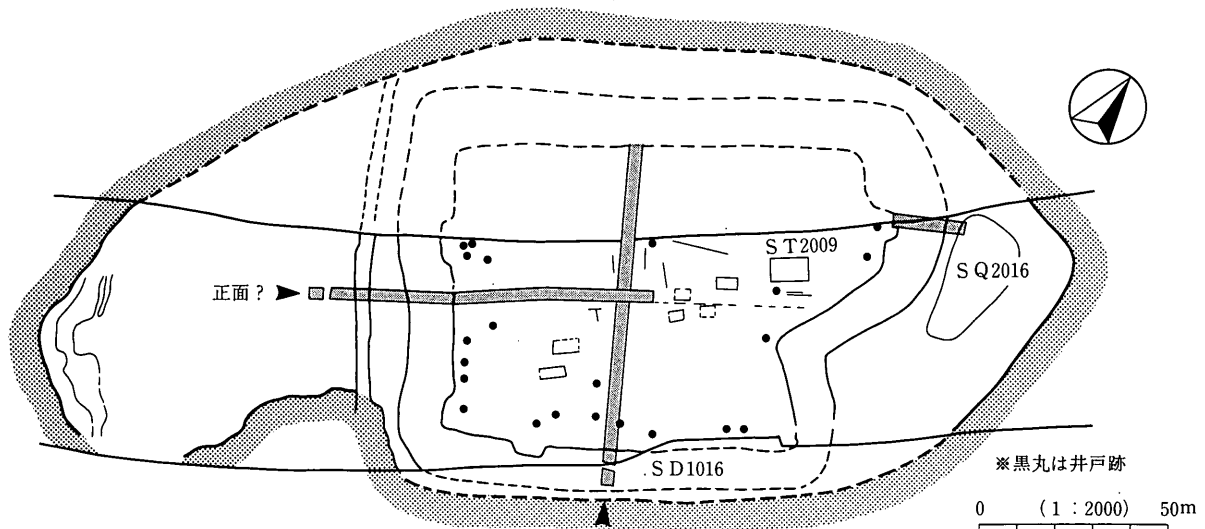
B 遺構から看取される偏在の様相

- ・井戸跡の分布をみると、明らかに東側より西側のほうが数が多く、しかも廃絶に際して西側のものは炭化物を顕著に含む特長が認められた。井戸数が西側に多い理由は西側のほうが多数の井戸を必要としたものか、人間の出入りも激しいか、活動する人間の多さによると思われる。
- ・建物跡はすべて整理段階で認定したものであるため、認定の妥当性に問題を残しているが、認定した建物の規模や構造は多様で、各空間での建物の機能が異なることも考えられる。なかでも最大規模を示す建物（S T2009）は中核的な存在とみられ、所在する北東部が遺跡内でも中心部ではないかと思われた。なお、この北東部の西南には小規模な柵列や建物を認定したが、これらの建物跡の機能や柵列跡の認定に問題を残す。また、柵列跡に関しては北東部を区画する施設の断片的な残存である可能性もあり、そうだとすれば、この空間が遺跡中心部である傍証とも見られる。

・ S Q 2016は S D 1016東外側に位置する大規模な遺物集中である。この遺構は土器の出土状態などからも祭祀が行われた場自体ではなく、別の場所で使用された器物を廃棄した場所であると思われた。しかも、遺構の規模は大きいものの、廃棄の契機は複数にわたるものであって単一の契機の所産ではないと思われる。つまり、この遺物集中は固定化された累積的な廃棄場所であり、その廃棄の中心は北側の S D 1016よりで徐々にその外側へ拡大していったと思われることから、廃棄の中心に最も近い S D 1016区画内の北東部に関連して設定されたものと推測された。さらに、北東部では土器・炭化物が顕著な土坑もあまり顕著でない点もこれに関連すると考えた。この推測通りならば、やはり S T 2009のある北東部が最も中核的な場所であり、しかも此処のみが固定化された廃棄場所をもつように恒常的に土器が排出される特殊な空間であったことになる。もちろん、炭化物や土器が顕著な土坑が全くないわけではないが、井戸跡をみても北東部では炭化物が顕著に含まれるものが少ないことは類似した背景と考えられよう。

以上の様相を見てくると、内部の分割された空間はそれぞれ異なった機能を持つ可能性が想定できる。最も顕著な例を挙げると、S D 1016西辺に面した空間は木製農耕具（土木具）や箆・紡錘車・横槌などの製品が多くみられ、なかでも南西部では手工業関連の遺物の出土が多い。つまり、S D 1016区画内の南西部・北西部の西半分は生活感が感じられると共に各種の加工活動が行われ、特に南西部では手工業関連の生産が行われていたと知られる。これに対し、北東部は S T 2009の存在や井戸跡数や炭化物を顕著に含む土坑の少なさを、特定の廃棄場所として S Q 2016が設定されていた可能性があることを考えると、北東部のみが恒常的に土器等が排出されると共に、清浄が最も保たれるべき重要な場所であったと考えられる。残った南東部については位置付けは不明で、この部分がひとつの独立した空間として捉えられるかも断定できなかった。ただ、この部分にある S K 2208は遺跡内でも大規模な土坑であり、しかも S K 2207からはベンガラが出土するなどのこの場所に特異な様相も知られる。さらに、この空間に隣接した S D 1016東辺何部では比較的玉類の出土が多いなどの特徴的な様相が見られるので、ここもひとつの空間として認知しうるべきなのかもしれない。

このように S D 1016区画内は特別視された空間ながら、いくつかの空間に分割され、それぞれが機能を異にしていた可能性が想定できる。しかも、井戸跡の数や遺物の廃棄の仕方の違いからも各空間で活動する人間や活動のあり方はさまざまであると考えられる。また、本遺跡の性格は断定できていないが、逆に



第208図 遺跡の構造模式図

例えば3ないし4種の活動に支えられているということもできる。ただ、本遺跡にかかわる首長に直属する人間の階層性や工人（あるいは職能のようなもの）として直接結びつけて理解できるのかは明らかではない。なお、機能の異なる空間で類似した土器・炭化物の出土が認められることは、やはり廃棄の類似性として考えるほうが良いと思われる。また、ここに土坑とS Q 2016の廃棄のあり方の差の意味を解く鍵があるかもしれない。

なお、これらの空間の機能差について遺構の時期的な変遷の検討を経ていないため、遺跡存続時間内のある段階で認められると考えられるが、時期ごとの機能変化については検討できなかった。この点は問題が残る。

第2節 本遺跡の諸様相のまとめ

1. 遺跡の立地環境

本遺跡の立地上の特長は自然堤防の集落遺跡から離れた後背低地内の小微高地に所在し、弥生時代以後に一般的な集落が営まれた痕跡がほとんど確認できない点が挙げられる。しかも、古墳時代の遺構の出現・廃絶は唐突で存続期間も短いと感じられた。したがって、本小微高地は通常の集落遺跡が営まれるには不適當あるいは忌諱された場所であり、本遺跡の選地と成立には特殊な事情があったと思われる。発掘調査ではその選地理由を明らかにできなかったが、周囲の歴史的環境を考えるといくつか注目される点がある。まず、弥生時代後期では後背低地を取りまいて自然堤防と山手の緩斜面地帯の各所に集落が分布していたが、古墳時代前期になると山手の緩斜面地帯から集落が消えて自然堤防側に集中してくる傾向が認められる。そして、後背低地には水田、山手には古墳が分布するように当地域が統一的な景観としてまとまるようである。隣接した柗下地点も類似した特殊遺跡である可能性を考えると、本遺跡周辺はこの統一的な景観のなかで特別な場所として位置付けられた可能性がある。この統一的な景観の成立背景や経過は不明であるが、当地域の空間構成について言及した論考のなかで本遺跡に関連しそうなものを取上げて若干検討を加えてみたい。

まず、古墳の立地について触れた宮下健司氏の論考（註1）からみよう。宮下氏は姫塚古墳、川柳將軍塚古墳などの当地域内で比較的古い古墳は聖川が平地へ流れ込む口元の山地に立地すると捉え、それは水源管理・祭祀的な意味合いから選地されたものと推測している。当地域では古代と近世を除くと千曲川取水用水が存在した可能性は確認されておらず、近世前期の水争いも聖川で起きているなど、近世末期以前で聖川が重要な役割を占めていることを考えると説得力はある。さらに、今回の発掘で弥生時代後期と古墳時代前期は時間をおいて重複した場所に水田を営みながらも、古墳時代の水田のほうが統一的な規格で作られていることが指摘されている。先の宮下氏の指摘を敷衍すると、古墳時代には水田耕作地もひとつの政治勢力によってまとめられて水源の管理・支配・祭祀も統一的に行われるようになり、本遺跡もそうした背景のもとに成立したと見られなくはない。これに対し、別の観点から本遺跡の立地に触れたものとして飯島哲也氏の論考（註2）がある。飯島氏は本遺跡を古墳造営のための遺跡と捉え、明言はしていないが、本遺跡が古墳の立地する山手と集落の中間域に立地する点に注目しているものと思われる。

この両者の考えから類推される本遺跡の選地理由は、統一的な景観成立と関連した水源・水田の祭祀か、古墳の所在地に近い葬送上の理由である。いずれも本遺跡の性格に直結する問題と捉えられよう。しかし、両者の想定にはそれぞれ問題がある。前者では水源との関わりで捉えるとしても聖川と距離的に若干離れ

ている点や、本微高地周辺では聖川系の用水は確認できていない問題がある。特に、今回の調査域内で確認された用水と思われる溝跡は走行方向から現四ノ宮集落背後の小規模な沢から続くものと思われ、聖川を取水源としているとは捉えられていない。さらに、隣接する石川条里遺跡併下地点も類似した特殊遺跡と思われるが、本遺跡とは微妙な時期差をもっているため、微高地自体が祭祀の対象となったとは考えにくい。後者の考えはどうか。集落から後背低地の南側を迂回して川柳將軍塚古墳へのルート中間にある点では整合的とも思われる。しかし、川柳將軍塚古墳へは聖川を越えなくてはならない問題や、川柳將軍塚古墳へ至るにはもうひとつ自然堤防北側を回り、犀川扇状地末端から山沿いに想定されるルートとの関係、自然堤防の集落の分布状況について明らかになっていない問題がある。なお、石川条里遺跡併下地点と本遺跡は谷状低地を挟んでいるが、両者をつなぐ道があったか否かは興味深いところである。併下地点の低地側では集石帯が検出され、報告書では護岸とされるが、掲載された図からみれば低地内へ続くようにもみえる。これは本遺跡と併下地点をつなぐ通路の可能性はないだろうか。だとすれば、両者は若干離れて時間差をもつが、有機的に関連したものと捉えられる可能性もあると思われる。しかし、これも現時点ではひとつの憶測でしかない。

この2つの見解から推測できる立地理由にはそれぞれ問題があるが、これも現代人がみたものであって、古墳時代人の意識は違うのかもしれない。ここでは本遺跡の出現前夜には塩崎地区がひとつの地域景観を形成し、そのなかで本遺跡周辺が特殊な遺跡が構築される特別な空間として位置付けられた可能性があること、少なくとも本遺跡は集落から分離し、古墳のつくられる山地と集落のある自然堤防の中間に位置することを確認しておきたい。なお、こうした景観の成立はひとつの世界観の成立と一体化し、世界観の成立・維持に関する説明の体系（神話）や祭祀の体系の整備があったと想像されるが、これについては考古学的には明らかにはできない。また、特殊な遺跡としては本遺跡出現の直前には篠ノ井遺跡群の自然堤防背面側に掘立柱建物跡や炉のない竪穴建物が集中する一角がある。この部分は溝でL字状に囲まれる可能性が残されているが、この遺跡との関連も注意が必要と思われる。

2. 遺構・遺物について

(1) 廃棄（遺棄）行為

本遺跡の土坑の性格について2種の可能性が想定された。ひとつは祭祀にかかわる廃棄土坑、もう一つは井戸や柱穴など多様な土坑があるとするものである。前者はすべての土坑と廃棄行為が一致し、後者は土器・炭化物の廃棄と土坑の構築は必ずしも一致した行為ではないとするものである。後者のほうが土坑の多様性をより整合的に説明できると考え、本報告でもこれに拠った。しかし、「その他の土坑」で扱った土器・炭化物を多量に出土する土坑は、廃棄を前提とした「廃棄土坑」の可能性があり、後者の考えでも廃棄のための土坑の存在をまったく否定するものではない。したがって、第一の問題は廃棄行為と土坑の關係に特定の祭祀等の行為として厳格な決まりがあるか、否かである。そこで、こうした廃棄行為を遺跡全体でみた場合にどのようにまとめられるか検討してみたい。

遺跡全体からみると炭化物・土器の顕著な出土はS D1016、S Q2016でも認められ、必ずしも土坑に限定されていないことが知られる。つまり、大量の炭化物・土器出土は遺跡内各所で認められ、少なくとも本遺跡の特長は遺跡全体で焼却廃棄が顕著に行われている点にあるといえる。一方で遺構相互を比べるとその廃棄のあり方に大きな相違も認められる。例えば、多量の炭化物・土器を出土した土坑では、土器の出土状態や炭化物の出土層の枚数から廃棄行為は1回限りのことが多いと思われるが、S Q2016は同じ場所へ複数回の廃棄による累積的な廃棄、S D1016は廃絶直前に焼却廃棄が行われていると捉えられた。また、多量の土器や炭化物を出土する土坑は遺跡内の分割された各空間で認められるが、S Q2016のみはS

D1016区画内の北東部と関連をもち、しかも土坑はS D1016区画内で完結するが、S Q2016はS D1016の区画外へ持ち出して廃棄される差異もある。さらに土坑自体でも土器や炭化物の出土状況や量に差異が認められる点はすでにみた通りである。こうした違いは廃棄の契機や性格の違いと理解すべきと思われ、出土状況の類似は廃棄行為の類似であって、少なくとも本遺跡では廃棄のされ方に重点が置かれていると考えられる。このように、廃棄行為自体が重要であったとするならば、逆に一定の条件を満たせば廃棄は土坑という特定遺構へ限定されないと考えられる。例えば、廃棄に際して土坑を構築せず窪地を利用したり、特殊域境界となるS D1016への廃棄は特殊域外と認識されていたとも考えうる。ここに土坑の性格を分離し、廃棄行為を別に捉えられる余地がある。以上からすると、廃棄に至る行為の内容は多様であって、土坑は廃棄の類似性を示すもので特定の祭祀行為が含まれるかどうかは別の問題と考えた方がよからう。つまり、祭祀行為かは別としても、ここでは多様な行為の後に焼却廃棄される共通点が遺跡の特長であることを確認しておきたい。次に、こうした廃棄（遺棄）と土坑の関係について周辺遺跡の類似例を比較してみたい。

周辺遺跡で土器を大量に出土した土坑を捜すと、数は少ないが散見される。まず、例として甕・壺を主体として大量の完形土器出土が見られる井戸跡、完形・略完形の甕が1個体入る柱穴例が挙げられる。井戸跡への土器廃棄は弥生時代後期には認められ、古墳時代例としては長野市稲添遺跡（I Z）24号土壙（参考文献1）、篠ノ井遺跡群S K6142・6202・6307（参考文献2）などがある。いずれも壺・甕類が顕著に出土する共通点があり、本遺跡のS K2057などは類似した出土状況と捉えられる。なお、S K2057出土壺下半部に煤が付着するので煮沸に利用された土器が使用されたもので、新調された土器を使用したものではない。また、掘立柱建物跡ではないが、竪穴住居跡の柱穴跡で完形土器が出土する場合がある。例として長野市本村東沖遺跡のS B2（参考文献3）、中俣遺跡22号住居跡（参考文献4）が挙げられる。本村東沖遺跡のS B2の場合は明らかに柱を撤去した後の所産と判断されるが、両者とも完形・略完形の甕が1個体（本村東沖遺跡では他に小型丸底土器が1個体ある）入ることを共通とし、建築、あるいは廃絶に関する行為としてみることもできよう。直接対比できると断定はできないが、本遺跡のS T2009あるいはその周囲の柱穴跡の可能性のある土坑で完形の壺や甕が出土したものは、これに類するかもしれない。

これ以外に土器を大量に出土した土坑がいくつかある。例として中俣遺跡の18・55号・60号土壙（参考文献4）、屋地遺跡B9・10号土壙（参考文献5）、更埴市屋代清水遺跡の8号土坑（参考文献6）、石川条里遺跡の柵下地点1号土壙（参考文献7）などがある。ただし、土器の出土状態や組成をみるとそのあり方は多様である。中俣遺跡は土器の出土状態の詳細は図示されていないが、出土した土器は必ずしも完形ではないようであり、また、屋地遺跡B9号土壙、屋代清水遺跡の8号土坑は完形の甕が1個体、屋地遺跡B10号土壙は高坏・甕など多様な器種が認められるなど土器の組成も異なる。年代は中俣遺跡が本遺跡よりも古い、それ以外は本遺跡よりも後出し、古墳時代後期の例は知られていない。これらの類例は大量の土器出土という点では本遺跡と類似するが、土器の組成やその出土状況も一様ではない。

これ以外に竪穴住居跡・溝跡内、あるいは掘り込みを伴わない大量の土器が出土する場合がある。竪穴住居跡埋土中から大量の土器が出土する場合については集落内祭祀として位置付ける見解（註3）もあるが、本県ではあまり検討されていない。唯一、桜井秀雄・三上徹也・宮脇正実氏によって岡谷市新井南遺跡2号住居址、大町市借馬遺跡49号住居址、借馬遺跡建物址27、飯田市恒川遺跡溝址15について祭祀行為としてみる見解が示されている（註4）。新井南遺跡、借馬49号住居址については土器の多さと玉類や手捏土器の出土、借馬遺跡建物址27・恒川遺跡溝址15については土器の出土の多さや出土状況に注目しているようである。また、掘り込みを伴わない、あるいは浅い遺構で大量の土器が出土した例についてみると、県内では坂城町青木下遺跡、長野市駒沢新町遺跡、中野市新井大ロフ遺跡、松本市高宮遺跡などがある。

いずれも本遺跡よりも後出する時期の所産で、滑石製模造具、ミニチュア土器を伴う。これらの遺跡では共通点として土器の大量廃棄が見られる。なお、笹沢浩氏は駒沢新町遺跡は片づけの遺構と捉え(註5)、桜井秀雄氏も駒沢新町・新井大ロフ遺跡・高宮遺跡について土器の出土した遺構・出土地点は祭祀場ではなく、祭祀終了後の廃棄の所産であると捉えている(註6)。

このように周辺遺跡でも土器を出土する土坑が僅かに認められ、それはすべて一律同じ性格とはいえないようである。しかも、柱穴跡については即断しかねるが、井戸跡などのように遺構と直接結びつく土器遺棄の例が本遺跡でも認められる可能性がある。やはり、出土状態は類似しながらも多様な場合が想定されよう。しかし、数からいっても本遺跡の土坑の特異性は際立っており、本遺跡に限られる何らかの特殊な背景があったことを考えなくてはならないだろう。また、祭祀遺跡では大量の土器出土が認められている(現時点では逆に祭祀遺跡と認定する条件になっているか?)点は、本遺跡も類似しているので、祭祀的な意味合いからの検討は必要だろう。そこで本遺跡で特異なあり方を示す土坑の場合はいわゆる「土坑祭祀」としての検討が必要と思われるので、最も代表的な土坑祭祀とされる奈良県纏向遺跡と対比をみておきたい。もちろん、竪穴住居跡への土器の大量廃棄を集落内祭祀とみられるかは別としても、土坑のかわりに竪穴住居跡へ土器廃棄されたとすれば、何も本遺跡の例は特殊ではないことは考えられる。また、同一視できる確証がないが、北陸地方の集落遺跡内で土器を大量に出土する土坑が散見され、これらはあまり特殊な遺構と認識されていない点も気になるところである。これらの点を含めて笹沢氏や桜井氏の指摘のように土器の出土した場所が祭祀遺構そのものではなく、祭祀終了後の廃棄の所産とする点は留意しておく必要があると思われる。

纏向遺跡では大量の土器を出土した土坑が検出され、石野博信氏によって「纏向型祭祀」とまとめられた(註7)。石野氏は纏向遺跡で検出された土坑を祭祀的な性格で捉え、検出数から遺跡内に所在するであろう土坑数を類推し、土器型式の年代幅のなかで割って1年単位で構築されているとした。そして、辻土坑4を取り上げて周辺で検出されている小規模な建物址と併せて祭祀の内容を分析している。すなわち、湧水点に達するまで穴を掘り、時には隣接地に建物を建て、稲穀を脱穀、炊飯し、盛りつけ、儀礼ののち共食し、土坑へ廃棄する過程を推測した。そして、農業祭祀としての性格をもち、のちの新嘗祭・宮廷竈神あるいは岡田精司氏のいう「ニイナメオスクニ儀礼」等の系譜につながる要素をもつとした。なお、土坑祭祀は鈴木敏弘氏によって集落内祭祀として継承的に検討されている(註3)。

本遺跡と比較した場合、少なくとも纏向遺跡で重視された「湧水点に達するまでに土坑を掘削」した点は一致しない。本報告では検出面からの深さ80cm以上で、円筒形を基調とする土坑は井戸跡と捉えたが、それよりも浅いながら土器を大量に出土した土坑も少なくない。また、井戸跡のみを纏向型祭祀に対比させたとしても、井戸跡はS D1016区画内でもS D1016の岸脇に分布し、S D1016区画内の中核ではなく端に位置するために本遺跡の中心的な行為とはできない。さらに、上記でみたようにS D1016区画内はいくつかの機能の異なる空間に分割されていると思われるものの、各空間それぞれで類似した土坑が認められる点は土坑への廃棄が特定の祭祀行為として限定されないと考えられ、遺跡内各所で類似行為が行われたとすれば「纏向型祭祀」の性格からしても奇異に映る。これをまとめると、本遺跡検出の土坑は所謂「纏向型祭祀」には直接対比することはできないと考える。やはり、本遺跡の場合はあくまでも片づけの遺構と理解したほうが良いのかもしれない。この考え方に立てば、多様な土器・炭化物の出土状態が認められる点もうまく説明できるように思われる。したがって、土坑への廃棄は多様な行為(祭祀行為を含む可能性もある)が想定されるなかで廃棄の共通性として理解すべきであり、祭祀行為自体を推測するにしても土坑とは切り離して考えるべきであることが導き出される。次に廃棄のために土坑が構築される理由と、廃棄された器物を使用した行為の内容について遺跡の様相から探ってみたい。

まず、廃棄の共通性としての土坑構築からみてみたい。この理由については確証は得られていないが、石釧の出土分布から窺えたS D1016区画内が特殊な空間として意識されていた可能性を考え合わせると、一種の「聖域」として清浄に保たれる必要性があって、片づけの遺構として土坑が構築されたと想定できるのではないかと考えられる。そして、S Q2016の場合はS D1016区画内北東部との関連で構築されるとすれば、この部分が恒常的に土器が排出されるためにS D1016の区画外へ個別に排出場所(S Q2016)が設定されたと考えられる。つまり、S Q2016と土坑の違いは廃棄行為が恒常的なものか、一時的なものかの違いの可能性がある。このことは井戸跡が南・西部に多いことも関連し、南・西部では人間の入れ替わりが激しかったか、あるいは多様な木製の道具類、あるいは手工業関連遺物の出土が認められる点から、より多くの人間が生活・活動した空間であった可能性と関連するのかもしれない。なお、このような土坑はこれまでに知られている豪族館ではほとんど類例がない。この点が単なる館とは呼べるか疑問が残る理由でもある。

(2) 遺跡内で行われた活動

さて、上記でみたように本遺跡では廃棄行為自体が特長的であることが確認できたと思うが、こうした廃棄に結びつく行為を含めて、多様な行為が遺跡内で行われていることが知られている。具体的な活動を特定しきれたわけではないが、いくつか想定できる活動と問題点についてみておきたい。本遺跡で確認できる活動には、遺物の種類自体から想定できるものと、廃棄行為として顕著に認められるが、具体的に活動内容を特定できなかったものがある。まず、前者の活動からみたい。

遺物の性格から類推できる活動としては生産関係の活動、祭祀具とされる器物を使用する活動がある。生産関連遺物には羽口・漆付着土器・骨角器未製品・木製紡錘車といった手工業生産関係遺物、木鎌・鋤・横槌などの農業関連遺物、土錘などの漁業関連遺物があり、これ以外に木製品の加工が行われている可能性が想定された。このなかで鋤などは土木具でもあるので農業に限定できず、土錘・紡錘車も出土量が非常に少ないため、専門的なものとは言いがたい。特に紡錘車は織物生産を類推させるが、織具は出土していない。つまり、農業・漁業関連遺物、織物生産関連遺物と特定できるものは少なく、副次的な生産か、本遺跡に居住した人間の生業の一旦を示すのだろう。一方、手工業関連遺物は量も多く、複数種類の生産が認められ、複合的な生産が行われていると考えられた。これらの手工業生産は遺跡存続時期内のどの段階で行われたか判然としないが、羽口はS D1016最下層から出土しているので遺跡のごく初期から行われた可能性があり、一方で木材加工は遺跡の廃絶直前と思われる。したがって、遺跡存続時間内で若干の時間差が認められる可能性はある。

しかし、本遺跡の手工業生産にはいくつか問題が残される。ひとつにはいずれの生産も製品が見当たらないことである。例えば羽口の分析から鉄製品の加工が行われていると推測されたが、古墳時代と特定できる鉄製品は皆無であり、漆製品も同様である。骨角器については骨鏃がある。本遺跡では材料の動物種が特定できなかったものの従来知られているところではシカの中手骨を利用しているとされるが、本遺跡の未製品はいずれもシカ角なので、これも製品と一致しない。さらに、具体的な加工については明らかにできなかったが、S D1016出土木材の大部分が木材加工に関連した割材と思われるものの、樹種はサワラが約半数を占めるのに対してサワラ製品は見当たらず、これも製品と一致していない。これは自家消費のための生産ではなく、遺跡外へ持ち出されることを前提としたか、あるいは生産量の少なさによる遺物の残存率の悪さなどが考えられる。特に、鉄製品については集落遺跡でも出土が少ないので、製品が出土せずとも特別のことではないのかもしれない。二つ目に、木材加工についてはS D1016の廃絶時前後に割り材が排出されたと考えられたことから、遺跡廃絶時に木材加工を行っているという一見矛盾した様相を示す

可能性も認められた。三つ目に側面や研ぎ面の一部に整形のための加工痕を残す砥石がいくつか確認されたが、これらはあまり使用されずに廃棄されたと思われる。なぜ使用可能なまま遺跡に残されたのかについては、砥石の所有が個人のもではなかったか、あるいは土器などの廃棄のように持ち出すことが忌諱されたとも考えられる。持ち出しが忌諱されるものであるとすれば、この砥石のあり方は遺跡で生産されて搬出された製品の性格を物語ののかもしれない。なお、上記の生産と対応する製品が存在しないことは微高地域に限定した場合であり、隣接した水田域の溝跡では多様な木製の道具・製品（漆製品を含む）が出土している。これらが微高地と関連するならば、まったく製品がないとはいえない。

次に祭祀行為である。まず、祭祀具とされる遺物にミニチュア土器や土製模造具がある。これらは集落遺跡でも認められ、本遺跡でも集落遺跡と共通した祭祀が行われていた可能性がある。しかし、この両者は出土分布を異にし、別の契機に使用されたと思われる。また、集落遺跡と共通する祭祀としては井戸跡への甕・壺を主体とした遺棄もある。その一方でS D1016での玉類、石製腕飾類を使用した祭祀は一般的なものとはいえず、本遺跡に特有のものといえる。したがって、本遺跡では多様な場面にさまざまなレベルで祭祀が行われ、しかも祭祀を行う主体も多様であると考えられる。つまり、一種類の祭祀行為で貫ぬかれているとはとても言えないのである。これ以外に土器を大量に出土する点では祭祀遺跡と共通する要素が認められるが、これについては後述する。

以上がある程度使用方法が限定できる遺物種からみた活動であるが、次には活動の内容を特定できない廃棄を伴う活動についてみたい。先にみたようにさまざまな場面で廃棄行為が行われ、それは遺構自体が祭祀の対象ではなく、あくまでも結果としての廃棄と考えた。しかし、大量の土器出土という点では祭祀的な様相であった可能性は残されるが、一方で集落遺跡で竪穴住居跡で土器がまとまって出土する場合もあり、両者の違いがどこにあるかは疑問も残る。ここでは結論を出せなかったが、出土した土器の全般的な傾向を再確認することから問題点を探りたい。

本遺跡から出土した土器重量は約3 tに達する。通常集落遺跡と比較材料がないものの、これまでに知られる周囲の状況からすると突出した量といえるのではないと思われる。遺構別内訳をみると、S D1016が約1 t、S Q2016も約1 tで残りが土坑もしくは小規模な遺物集中となる。つまり、2/3は2つの遺構出土となる。このなかでS D1016は遺跡を取り巻く遺構なので廃棄された土器の使用場所を特定することは難しいが、S Q2016はS D1016区画内北東部と関連した廃棄場所とすれば、この部分だけで遺跡内の約1/3以上の土器が消費されたことになる。遺跡全体で器種の比率をみると最も出土量が多いのが甕であり、次に小型丸底、高坏などが続くが、遺構種別にみた場合、土坑は小型丸底土器の出土が顕著でなく、S D1016やS Q2016などのほうが目立つ傾向がある。つまり、小型丸底土器については使用場所（方法、時期的なものか）が他の器種と異なる傾向があると考えられる。土器の使用痕についてみると、甕は一樣に外面に煤が付着し、内面に粒状のオコゲ痕が観察されるので煮沸に使用されたことが知られる。壺は一部に箆目が観察できるものがあるが、この箆目の意味するところはわからない。また、穿孔が認められるものもあるが、その量は非常に少ない。供膳具と思われる器は使用痕不明である。これらの使用痕跡からすると甕・壺は集落と大きく異なる用法は確認できず、基本的に多様な種子、獣骨の出土からも甕を併用して調理が行われていたことは間違いない。ただし、壺についてはどのような内容物があつたか特定できず、供膳具も用法は定かでない。また、土器の生産―搬入に関しては比較的良好な一括資料と見られたS K1033出土土器の胎土分析を行ったところ、Aグループとされた在地産胎土の土器が主体を占めながらも、少数ながら複数の胎土グループのものが含まれているとされた。したがって、本遺跡で使用されるために一括製作―搬入されたものではなく、複数産地・複数の契機に入手された土器が搬入・使用されていると考えられる。もちろん、胎土分析を実施したものはごく一部に限定されるため、どの程度普遍化できるか

定かではないが、土器に多様な形式が含まれることから支持されよう。また、部分的な資料を分析に供したS Q2016、S D1016出土土器も同様のことは確認された。しかし、本遺跡での土器のあり方を考える上で使用後に遺跡内で廃棄される点は気になる。S D1016区画内が特別視されていたことに関連し、一旦運び込まれた土器は再び持ち出すことが忌諱されたのだろうか。この点为本遺跡を理解する上で重要な点となると思われる。次に廃棄のされ方が異なるとみられる土坑、S D1016、S Q2016に分けて遺物の内容を比較してみたい。

まず、土坑であるが、すでにみたように土坑すべてで土器と炭化物が顕著に出土するものでもなく、破片が僅かしか出土しないものもある。ここでは廃棄にかかわるとされる土器・炭化物が顕著な例を取り上げてみる。土坑への廃棄は基本的にS D1016、S Q2016よりも廃棄規模が小さいので個別的な契機によるもので、廃棄は炭化物層の枚数や土器の出土垂直分布からして比較的集中して行われている可能性が捉えられている。さらに、機能の異なるS D1016の各空間ごとに複数存在し、各空間の機能差を越えて共通するものであると共に複数回こうした行為が行われている。土坑出土の遺物種類には土器の他に割材状の木材、各種玉類、種子、獣骨、骨鏃、砥石、ミニチュア土器、木製品など多様なものがある。ただし、ひとつの土坑で上記の各種の遺物すべてが確認できるわけではない。また、所在する場所によって偏在する遺物がみられるように各空間の機能差と関連している面も指摘できる。土器についてみると器種のあり方は多様であるが、比較的多くみられるのは甕であり、次には高坏が続く。小型丸底はS D1016やS Q2016ほど普遍的にはみられない。この組成は井戸跡と推測した土坑や柱穴跡と推測した土坑のように特定器種を入れる場合もあるので、均一に比較することはできないが、甕が主体的であることからして煮沸が土器廃棄に付随する行為に含まれていたことが考えられる。一方で供献用と考えられる土器をみると、高坏が多くみられるが、小型丸底土器は少ない傾向が指摘できる。もちろん、高坏も出土量が一定せず、しかも1つの土坑から多出する例は少ない。こうしたことを考えると、土坑へ廃棄される行為での供献器のあり方で小型丸底土器があまり顕著でない傾向は類似するが、他のものは多様であったと考えられる。この小型丸底土器が少ない理由については二つの可能性が考えられる。ひとつには実際に使用されながらも、別の場所へ供献-廃棄されたとするもので、もうひとつは供献行為自体が少なかったとするものである。いずれにしろ、供献した土器を土坑へそのまま廃棄したとは言えないものである。また、先の胎土分析の結果からは、土器は遺跡外の複数産地から搬入されている可能性がある。壺などは調理する食材などを入れて遺跡外から持ち込まれ、使用後に廃棄されたのであろうか。もっとも、土器は本遺跡での使用のために新調されたか、それとも日常で使用していた土器を持ち込んだのか断定できない。次に玉類、各種種子類、獣骨類であるが、これらは採取条件が均一でないため、どの程度普遍的なものかは明らかにできていない制約がある。玉類については白玉を除くと複数がひとつの土坑から出土する例は非常にわずかで、埋土をふるいで選別した調査地区でも玉類の出土が確認できない土坑もあり、必ず玉類が伴うものでもないらしい。しかし、玉類を出土した土坑が複数存在することは玉類を入れる行為があったことは考えられる。この玉類を入れる行為については単なる廃棄とは考えにくく、埋納に近いものであったのだろうか。だとすると、廃棄といっても単純なゴミ捨てとは異なることになり、やはり特殊な行為としての廃棄と考えられる。種子類や獣骨については調理行為に付随して搬入されたと思われるが、一部にはモモ核などの祭祀に関連すると思われるものが含まれる。このように土坑への廃棄（遺棄）に付随する行為は多様で一種類の行為とまとめにくい。少なくとも調理が行われている可能性が考えられる。しかも、玉類やモモ核の出土があるため、単なる生活で排出されたゴミ廃棄とは考えにくいところがある。ただし、これが祭祀行為の後に廃棄された遺物なのか、廃棄自体が埋納に近い、あるいは清浄に保つための作法なのかは即断できない。

S Q 2016の場合は非常に規模の大きな遺物集中である。出土状態も完形土器が置かれた状態ではなく、破片が多数を占めることから廃棄の所産であると考えた。調査段階では規模の大きさからも土坑への廃棄とは別の契機によるもので、S D 1016の木材廃棄と同じ遺跡廃絶時の所産とも考えたが、整理では規模の大きさも累積的な廃棄の結果と捉え直した。このことは出土土器に年代差が推測できることから支持される。こうしたことから土坑と同様に個別的な廃棄が累積した結果によって生成された遺物集中であると捉えることもできる。ただし、⑤-2区のS D 1016セクションではS Q 2016寄りから続く炭化物層は埋土中にあり、この炭化物層がS Q 2016からの所産だとすれば、S Q 2016の本格的な廃棄は遺跡存続内でも若干遅れる可能性はある。このS Q 2016は遺跡内で出土した土器の1/3を出土しており、その土器量は尋常ではない。出土した土器器種は多様であるが、土坑との差異は小型丸底土器が比較的目につく点である。それ以外の器種に大きな違いはなく、煮沸の甕・壺・高坏・鉢・器台などが出土している。また、出土した遺物の種類では木質遺物・種子類は判然としないが、獣骨は比較的多く出土しており、これは土坑と同様にS Q 2016へ廃棄された土器も調理を含む行為があったことを支持するものと考えられる。しかし、供献器が比較的目につく点では供献行為が土坑よりも顕著にみられる傾向があるといえる。さらに、ミニチュア土器、あるいは土製模造具といった祭祀関連遺物が集中的に出土しており、これらのことからすれば調理－供献で排出された器物以外の多様な行為で排出された遺物が含まれる可能性がある。

S D 1016の場合は遺跡を囲む溝であり、しかも廃絶後もくぼ地として残存していたと考えられるように土器も年代幅がある。このS D 1016への土器廃棄の契機は多様であると考えられるが、木材を集中的に焼却廃棄しているのは遺跡廃絶時と思われた。この廃絶時に土器も合わせて廃棄されているかについては何ともいえない。土器の平面分布をみると、岸脇に多い傾向があり、部分的に集中して出土して遺棄されたのではないかと見られる部分もある。しかし、全般的に他の遺物の出土分布に偏在が認められ、S D 1016に隣接する空間の状況をそのまま反映しているところがあるので、S D 1016への意図的な遺棄ばかりでなく廃棄の所産や混入も含まれると考えたほうがよさそうである。出土土器の器種の組成は甕の量が多いものの、高坏と小型丸底土器との比率がほぼ同じであり、この点では土坑と異なって、むしろS Q 2016に近いものである。したがって、S D 1016が聖域を区画する境を意味し、その外へ廃棄されるというあり方としてS Q 2016と類似するとみられるのかもしれない。

以上の比較からは類似遺構でも廃棄を伴う行為は単一種類の行為とはまとめられないが、その多くで煮沸を伴う行為が共通して見られる点は確認できる。したがって、廃棄を伴う行為には煮沸が行われることを基本とし、差異と認められる供献器のあり方に行為の種類を分ける鍵があると思われる。ちなみに、本遺跡より後出すると捉えられている祭祀遺跡では大量の土器が出土しているとはいえ、中心をなすのは供献器であって煮沸具は量が少ないか、通常の集落遺跡とは異なっているようである。また、これまでに指摘される調理を含む儀礼・祭祀では神への供献、あるいは共飲・共食を媒介とした形態が指摘されるが、特に後者にあっては基本的に供献器の量の膨大さと階層別に使用する器種類のバリエーションが認められるように思われる。もちろん、供献器が遺物として残りにくい形態も考えなくてはならないが、このことを考えると供献器の量の少ない場合は祭祀行為に限定できるのか疑問もないわけではない。こうした観点で、本遺跡の状況について見直してみるとどのようになるだろうか。

本遺跡では供献用土器のあり方に土坑とS Q 2016・S D 1016では若干異なる傾向が認められた。すなわち、調理－供献－廃棄が主体的に認められるS D 1016とS Q 2016、小型丸底土器（に何か入れたもの）の供献がやや不鮮明となる調理－廃棄のあり方を示すものが多い土坑である。これは単純化しすぎる図式であるが、このなかで土坑のあり方から推測される解釈には2つある。ひとつは調理と供献が分離して廃棄された可能性であり、もうひとつは供献行為が顕著でない場合である。前者によれば、調理された食物は

別の場所へ供献されたことになり、その後S D1016やS Q2016へ廃棄されたとも考えられる。後者の解釈によればS D1016内の小空間がある程度独立性をもち、供献行為の現れ方の違いが各空間での機能差、あるいは活動した人間の差として理解されることになる。S D1016内でそれぞれ煮沸行為が行われたことを重視すれば、後者の可能性のほうが高いと考えられる。つまり、遺跡内での大量土器消費は供献に重点が置かれるばかりでなく、ここで活動を行う人間が遺跡内へ運び込み、それで煮沸を行いながら一定の活動に携わった場合があったと理解できるのではないだろうか。つまり、土器使用は祭祀行為のみではなく、ここでの活動に際して持ち込まれ、そのまま廃棄される場合があったと考えられる。だからこそ、煮沸に際して膨大な食材が消費されながらも倉庫が顕著でないことは食材も壺などに入れてその都度持ち込まれたものであったと考えられるし、出土土器が単一の生産地のもので占められない理由もそれぞれが独自に調達して搬入するとすれば説明できると思われる。言い換えれば、ここに居住があったとしても限定された人間たちの固定的な居住ではなく、集落の人間達もここに臨時に詰めるようなあり方が考えられるように思われる。もちろん、これは憶測でしかないが、本遺跡と集落との共通性が見られることや、廃棄に際して土坑を構築する理由もこれで説明がつくように思われる。また、一方で供献器を多用する場合もあることは、別の祭祀や供献を媒介とした儀礼・祭祀もあった可能性は考えなくてはならないだろう。特に、S D1016区画内北東部が恒常的な廃棄場所を備えているとすれば、この部分のあり方は特別視できると思われる。そこで、祭祀的用法かどうかについて見直してみたい。

これまでに土器の儀礼・祭祀的な使用を考える場合、その多くは集落でみつかるとしてミニチュア土器・一部を意図的に欠損するなどして仮器化したり、異形態とする場合が知られる。また、特殊な出土状態を示すか、あるいは祭祀具とされる遺物が伴う場合に祭祀に用いられた土器と判断されていると思われる。しかし、先にみたように集落でみつかるとして同種の土器は祭祀用に作り分けされておらず、出土状態以外に祭祀的な用法を識別することは難しい。なお、集落-祭祀遺跡という分類自体の妥当性の問題はあるが、このような両方で土器が使用されるには二つの背景が想定される。ひとつは日常でも行われる行為と類似した行為が祭祀・儀礼的に行われる場合で、古代・中世で指摘される共飲共食を伴う儀礼などはそうした例となろう。もうひとつは土器自体にある象徴性によるもので、壺が境界を画する場合に使用されるとされる例などは後者の例となる。ただ、象徴性の意味はなかなか現代人には理解しがたく、考古学的な検討のみでは限界がある。

本遺跡の場合は祭祀関連遺物の伴出の観点からみれば、白玉はあるものの、滑石製模造具のみられない段階であり、祭祀遺跡でもみられる玉類の出土は部分的に確認できるが、普遍的に土器と共に出土しているわけではないなど祭祀具が伴うとは言いがたい。しかも、土器の出土状態はたしかに特異ではあるが、廃棄の所産であって使用状態を示しているとは考えがたいので、祭祀的な用法だとは断定できないところがある。ただ、指摘しうるのは土器の消費量は非常に膨大なものであり、日常で消費しうる量を上回るのではないかと推測される点がある。さらに、上記でみたようにS D1016内が聖域であり、その場で使用した土器の遺跡外での再使用されない可能性からは、少なくとも消耗品的に使用されたことが考えられる。ただし、中世のカワラケ同様の使用方法であったかはわからない。

結論としては、廃棄を伴う行為は一過性的な用法と廃棄方法が特殊なあり方が基底にあるものの、日常生活の延長での同じ用法で理解されるものと、祭祀とは断定はできないが、共献器を伴う特殊な用法が認められる場合があったことは推測できると思われる。

最後に、これ以外でいくつか気になった問題について触れておきたい。

まず、遺跡に残された遺物と遺跡から持ち出された遺物の問題がある。本遺跡は土器類の廃棄のようにS D1016区画内を清浄にたもつためと思われる廃棄行為が顕著にみられた。これらの土器は口縁部遺存度

の高い土器も多数含まれるように、再び遺跡外へ持ち出すことなく廃棄したと考えられた。この点では砥石も同様である。これについてはS D1016内が聖域とみなされ、そこで使用された土器は遺跡外で再使用しない不可逆的な性格のものではないかと思われる。その一方で、本遺跡では手工業生産が行われた可能性が推測されたものの、製品が検出されず、遺跡外へ搬出された可能性が推定された。この相反するあり方は一見すると矛盾しているように思われる。つまり、土器の持ち出し—再使用が忌諱されるとしたら、なぜ同様に遺跡で生産されたものが忌諱されなかったか疑問が残るのである。また、木材加工は遺跡廃絶に際して行われている可能性があり、これも通常からみると奇異に感じられる。この土器と手工業生産のあり方は遺跡に残されない遺物の評価、調査所見解釈の妥当性の問題があるが、上記の推測の通りならば遺跡の性格を考える上で重要な所見となりうると思われる。つまり、手工業生産品が持ち出されるのはそれが、通常の生活で使用するような器物ではなく、特殊品ではなかったかと考えられる。この点では本遺跡で確認できる手工業生産が複合的な生産であり、それは素材加工の工程ではなく製品として完成させる工程と考えられることも関連すると思われる。さらに廃絶に際して木製品の加工が行われていることなどからすれば、これらの器物生産はきわめて特殊なもので、遺跡の廃絶契機に深くかかわっていた可能性が浮かぶ。これらの点については遺跡の性格に関連して後述する。

以上、S D1016の区画内で行われた活動について断片的にみてきた。活動の内容を具体的に明らかにできたわけではないが、次にはここで推測できたことを材料に遺跡にかかわった人間と遺跡の性格について若干検討してみたい。

註

- 1 宮下健司 1985「長野市石川条里周辺における原始・古代の空間構造」『信濃』37-9
- 2 飯島哲也 1993「篠ノ井地区の遺跡」『長野県考古学会誌69・70』
- 3 鈴木敏弘 1991「古墳時代前期の諸問題」『赤羽台遺跡—八幡神社地区-2』東北新幹線赤羽地区遺跡調査会
- 4 桜井秀雄、三上徹也、宮脇正美 1993「祭祀における画期とその変容」『長野県考古学会誌69・70』
- 5 笹沢 浩 1982「駒沢新町遺跡」『長野県史 考古資料編 1巻(2)主要遺跡(北・東信編)』
- 6 桜井秀雄 1996「石製模造品を用いる祭祀儀礼の復元私案」『長野県考古学会誌79』
- 7 石野博信 1976「第4章 三輪山山麓の祭祀の系譜」『纏向遺跡』檀原考古学研究所

参考文献

- 1 稲添遺跡 1992『二ツ宮遺跡・本堀遺跡・柳田遺跡・稲添遺跡』長野市教育委員会
- 2 篠ノ井遺跡群(高速道路地点) 1997『篠ノ井遺跡群』(助)長野県埋蔵文化財センター・長野県教育委員会
- 3 本村東沖遺跡 1995『本村東沖遺跡II』長野市教育委員会
- 4 中俣遺跡 1991『中俣遺跡・押鐘遺跡・檀田遺跡』長野市教育委員会
- 5 屋地遺跡 1990『屋地遺跡II』長野市教育委員会
- 6 屋代清水遺跡 1992『屋代清水遺跡』更埴市教育委員会
- 7 石川条里遺跡併下地点 1992『石川条里遺跡(6)』長野市教育委員会

第3節 遺跡の性格

本遺跡は誰の目にも特殊な遺跡であることは異論がないと思われるが、その性格については見解が分かれるところであろう。筆者も発掘から整理に携わった一人ながら、遺跡の性格について独自の答を出せたわけではない。しかし、遺跡の性格については調査担当者間で幾度となく話し合われ、さまざまな形で指摘を受けたことがある。そこで、これまでに想定されている本遺跡の性格についてまとめておくことにしたい。

1. これまでの本遺跡の性格に関する見解

本遺跡の特殊性を示す要素のひとつに石製腕飾類・銅鏡・銅鏃・各種玉類など一般的に古墳から出土することが多い遺物が認められたことがある。これらの出土品は本遺跡が古墳へ埋葬されるような人物＝首長が関わった遺跡であることを示すと思われ、調査段階の推測やさまざまな本遺跡に関する見解でも共通した認識でもある。この首長の関わりの面から現段階で想定される古墳以外の遺跡には、祭祀遺跡（モガリの場を含む）、豪族居館の2種あると思われるが、本遺跡の様相はこれまでに知られる遺跡と直接対比できるものがない。ここに本遺跡の位置付けの難しさがある。したがって、従来の遺跡種類の枠組みを逸脱した遺跡である可能性も残されるが、現時点では祭祀遺跡・豪族居館を基本としたなかでの変則的なあり方、地域的バリエーション、あるいは従来の範疇を部分的に変更するなかで理解せざるをえないのが正直なところである。これも、古墳時代前期における首長と祭祀の関係、モガリの実態については明らかになっていない点に問題がある。また、表立った議論にはなっていないが、本遺跡に関して提起されている多様な解釈の背景には当地域の前方後円墳の出現や構築の意味、他地域との関係（畿内との関係や地域性、さらに首長の性格（首長と祭祀、階層分化、集落との関連）、古墳時代の祭祀の性格などさまざまな想定があると思われる。これらの関連する問題については直接触れることができないが、上記のような発想方法のなかで本遺跡の性格についてどのような解釈が提起されてきているのかについて経過をおってまとめることから始めたい。

(1) 調査段階での見解

調査から整理の間では新たな事実関係が判明する度に遺跡の性格の捉え方も変化した経緯があり、それぞれの時点で公表された遺跡情報の内容が異なっている。したがって、本遺跡の性格について触れた論考も、どの時点の公表資料を参照したかは内容に少なからず影響を与えていると思われる。まず、ここでは調査段階での想定経過からみてみよう。

調査開始直後に本遺跡がきわめて特殊な遺跡であることはわかったが、遺跡の性格は皆目検討がつかなかった。やがて、土坑からは玉類の出土や土器の大量出土が認められ、このことから祭祀遺構ではないかと考えられるようになった。さらに、土坑の検出数の多さから長期にわたる祭祀と推測したことや、奈良県纏向遺跡の土坑と類似すると考えたことから祭祀は農業祭祀にかかわるものではないかと類推した。また、SD1016では石釧が出土して首長層のかかわりが想定されると共に、SD1016廃絶時に木材の大量廃棄が行われていることが確認され、遺跡の廃絶＝首長交代にかかわる廃棄行為（首長交代祭祀）が行われたと推測された。特にSD1016では大量の建築材と思われる板材が出土して何らかの建物が存在した可能性が窺える一方で、建物遺構は具体的には把握されなかったが、板材に調整痕がほとんど観察されないことなどから仮の建物＝もがりの建物であって、建物遺構の未検出も遺構として残りにくい可能性を考えた。

このように初年度の調査段階では本遺跡は祭祀（農業祭祀）と首長交代祭祀（葬送儀礼）が複合する祭祀遺跡と考えたのである。

ところが、2年次の調査においては羽口の複数出土が確認され、単なる祭祀遺跡とはできないことが指摘されるようになった。そこで新たに浮かんだのが、豪族居館としての可能性である。これはSD1016で部分的な豪族居館のような台形状の突出部があることも補強材料となったが、従来知られていた豪族居館では土器・炭化物を大量に含む土坑の検出例はほとんど知られておらず、建物跡の不明瞭さと併せて断定には躊躇された。ここまでが調査段階の推測である。これ以後は、報告書刊行へむけての整理までは暫く時間が置かれ、本遺跡の調査担当者も他遺跡の調査に携わることになったこともあり、その検討は進められなかった。なお、この調査期間前後に当センターが公表した概報には以下のものがある。

①1989『助長野県埋蔵文化財センター年報5』助長野県埋蔵文化財センター

初年度調査分の概報である。この時点の考えについては(1)の1988年の冬期整理のところでも触れているが、遺跡の評価は祭祀遺跡と認識されていた。

②1990『助長野県埋蔵文化財センター年報6』助長野県埋蔵文化財センター

2年次にわたる調査の結果をまとめて記したものである。居住遺構が皆無である点から祭祀遺跡として捉えることが妥当であろうとしたが、豪族居館の可能性も加えた。

③1990『日本考古学年報41（1988年度版）』日本考古学協会

2年次に渡る発掘調査成果の概要をまとめ、日本考古学協会で発表した報告の概要である。

これ以外に初年度は2回の現地説明会、2年次には1回の現地説明会を行った。また、いくつか特殊品の出土などで新聞紙上で取り上げられた。

(2) 本遺跡の性格に触れた論文

ここでは本報告以前に本遺跡の性格について言及された論文・紹介を取り上げる。管見に触れたものを集めたが、漏れもあるかもしれない。これらの論文は調査終了後から整理の前半の時期に発表されたものが多く、しかも基本的にはそれまでに公表された調査所見に基づいている点は注意されたい。

①坂本和俊 1991「三ツ寺Ⅰ遺跡の祭祀儀礼の復元」『群馬県考古学手帳Vol.20』

『古事記』『日本書紀』の記述から古墳時代の豪族居館である三ツ寺Ⅰ遺跡では首長就任に際しての服属儀礼と農耕祭祀が行われたと捉え、類似例として石川条里遺跡を挙げている。特に石川条里遺跡で認められる古墳の副葬品と変わらない遺物を破壊する行為を取り上げ、首長就任式に伴って行われる儀礼に相応しいとする。また、石川条里遺跡を4世紀末の豪族館であると述べると共に、多くの豪族居館の継続時期が短いことからすれば、豪族居館の築造契機は首長の誕生、廃絶は死に伴うとした。

②広瀬和雄 1992「Colum 7 発掘された祭場—石川条里遺跡」『弥生の神々』大阪府立弥生文化博物館

石川条里遺跡を最高首長が主催し、輩下の首長も加わった農耕儀礼が行なわれた可能性を指摘している。そこでは豊作を願う春祭りと収穫を感謝する秋祭りが行なわれ、それは支配者たちの地位安泰の祈願でもあったと紹介している。

③飯島哲也 1992「3小結 柧下「居住域」遺構の性格」『石川条里遺跡(6)』長野市教育委員会

本遺跡と低地を挟んで北側約100m先にある対岸の微高地が長野市教育委員会によって調査され、掘立柱建物跡や土器を大量に出土した土坑数基、低地境に集石帯が検出された。調査面積は小さいながらも出土土器は推定で2000個体を越えるとされ、石釧も出土している。飯島氏は土器の器種組成を竪穴住居跡の出土例と比較して、組成上は大差ないことから祭祀遺跡と即断はできないとし、居住の建物の少なさは当該期の集落遺跡があまり検出されていない点からも竪穴住居・掘立柱建物跡とは別形態の可能性も想定すべ

きだとした。そして、祭祀的な要素を認めながらも高速道路地点と長野市柘下地点が若干時間差をもって近接する点を重視し、川柳将軍塚古墳と中郷神社古墳との有機的な繋りのなかで出現した居館跡、もしくは特異な居住施設として捉えている。また、石釧などの祭祀的な要素からは古墳造営に何らかの形で関わる「居住域」と考えることも示唆している。

④飯島哲也 1993「篠ノ井地区の遺跡」『長野県考古学会誌』69・70 長野県考古学会

本遺跡を含む篠ノ井地区の遺跡について概観するなかで、本遺跡について触れられている。基本的には上記の報告の見解を踏襲しており、大規模古墳造営に関わる集落(camp)も考慮に入れるべきであると述べている。

⑤桜井秀雄・三上徹也・宮脇正美 1993「祭祀における画期とその変容」

『長野県考古学会誌』69・70 長野県考古学会

県内の古墳時代の祭祀遺跡・遺構を概観するなかで石川条里遺跡についても触れている。ここでは石川条里遺跡内で検出された古墳時代遺構群を集落遺跡とは異なる「特殊生活域」とし、豪族館と祭祀場の2種の可能性から問題点の整理を行っている。まず、豪族居館としてみた場合に規模や祭祀に関連する遺構を伴う点では一致するが、居住遺構が未確認であることや、他の豪族居館では本遺跡のような土坑を用いた祭祀が確認できないという問題点を指摘している。祭祀場の観点からは、石川条里遺跡検出の遺構を土坑、溝、遺物集中の3者にわけ、前2者を石野博信氏の古墳時代祭祀の類型の「纏向型祭祀」、「石見型祭祀」に対応させて理解するなかで問題をまとめている。遺物集中に関しては駒沢新町遺跡例との類似から農耕祭祀として捉える可能性を示した。そして石野氏の首長権交代儀礼が居住地から離れて行われた「玉手山型」への変遷とする説も含め、時期差をもつとされた各祭祀類型が石川条里遺跡では同時に検出された点が問題であるとし、①の坂本氏の交代儀礼(農耕儀礼の要素を合わせもつ)が居館で行われた説と対比させ、本遺跡で行われたさまざまな祭祀形態は石野氏説のように時間差をもつものか、坂本氏の考えるように同時に行われたのかを問題とした。つまり、石川条里遺跡では首長交代儀礼と農耕祭祀の可能性が想定されるが、その存在の仕方が問題となると指摘している。さらに、石川条里遺跡の出現の意味は、一般的な生活域から離れた特殊生活域での祭祀の出現であり、これを祭祀行為の分化と捉え、古墳が築造され始める社会を反映したものと捉えている。

⑥北條芳隆 1995「石川条里遺跡と腕輪型石製品」『中部高地の考古学IV』長野県考古学会

石川条里遺跡出土の多様な石釧・車輪石について古墳出土品との比較から、ほぼ4世紀末の組み合わせと捉え、複数規格のものが選択されているありかたは当時の古墳人によって意識されたあり方であるとした。さらに、巨大前方後円墳ほど鋏型石・車輪石・石釧の3種類が組み合う場合が多く、規模が小さいほど組み合わせの種類が少ないことから、組み合わせのあり方は階層差や政治的中枢からの距離に規定されたものであるとし、石川条里遺跡の場合は畿内の100m規模の前方後円墳造営者に匹敵するとする。このように石川条里遺跡出土の腕輪型石製品は古墳へ副葬される場合とまったく同じ原理で使用されていると捉えている。一方で破壊行為を伴う場合は集落や溝の場合に限定されるほうが多い傾向と見られる点については、破壊行為が行われる時期が古墳では腕輪型石製品の副葬が徐々に他の滑石製模造品や甲冑に置き換わる末期的な段階であることに注目し、両者の祭式における意味合いが次第に交錯してくるなかで出現したと捉えている。その破壊を伴う祭祀の意味は集団的な祖霊祭祀として理解している。

⑦1995 安土城考古博物館『祭と政』

石川条里遺跡の水田域と共に農業関連の祭祀として紹介されている。

以上は本報告書が刊行されるまでに公表された本遺跡の性格に関する指摘であるが、先に述べたように

各論考の発表された時点で公表されていた事実関係の内容、およびその解釈については不足していたり、変化したり、追加されたことがあるため、公平な議論ができる条件が同一ではなかった。そのため単純な比較はできないが、非常に参考になるところがある。各論考の意図を十分読み切れていないところもあるが、誤解を恐れずにまとめると①の豪族館に限定する考え、②や⑤で触れられている祭祀遺跡としての可能性がある。また、⑤や③・④は両者の折衷案とも見られるかもしれないが、③・④は古墳造営(葬送)に限定する考えであるとできよう。

いずれの説も本遺跡が首長層との関わりで出現している点は共通しており、本遺跡で執り行われた祭祀については葬送儀礼(首長交代儀礼)と農業祭祀にかかわりで理解するものが多い。ただし、⑤で述べられているように首長交代儀礼と農耕祭祀が直結した祭祀とするか、同じ場所で別々に行われていたとするかは微妙なずれがあるように思われる。

なお、本遺跡と集落遺跡との関係についての捉え方についてはかみ合った議論はないが、⑥のように集落遺跡と重なる部分を指摘する見解、⑤のように立地が集落から分離している点を強調する見解がある。

(3) 整理段階での検討

整理段階では新たに判明したことがいくつかあり、それらの所見をまとめて1995年に大阪大学の都出比呂志氏を招いてご指導を仰いだ。その時の成果については1996『助長野県埋蔵文化財センター年報12』(助長野県埋蔵文化財センターにまとめて掲載している。この時までには新たに想定されたことは、土坑が単一の性格ではなく、土坑の配置に規則性がある可能性である。さらに、遺跡内の構造が単一空間ではなく、いくつか分割された空間から構成されていると共に、石釧などの石製腕飾類はS D 1016区画内の内部空間の分割と関連してS D 1016各辺中央部から出土する規則性が看取された。

これらの成果から都出氏によって「モガリ」の場である可能性が指摘され、この指摘については新聞紙上でも取り上げられることになった。この時に指摘された内容は遺跡理解の上で肯首しうることも多く、詳細は後述する。

(4) 本遺跡の性格についての見解のまとめ

以上でみてきたように本遺跡は首長層の関わる遺跡であることは共通する。これは調査からの推測でも同じであり、本遺跡の性格を規定する基本的な前提となろう。一方で遺跡の性格の規定の仕方や遺跡のイメージは若干異なり、本遺跡で執り行われたと推測される祭祀についても見解が異なっている。しかし、それぞれの見解はより豊かで微妙に異なる遺跡イメージをもっており、遺跡理解のための枠組みと手段を持たない筆者にとっては、本遺跡理解の上で参考になるところが多い。そこで、遺跡を理解するに当たった作業的な枠組みとして、これまでの多様な見解を筆者なりにまとめて分類し、そこでの観点を抽出、調査結果との照合をするなかで絞り込みを行ってみたい。なお、これはあくまでも現時点での遺跡の理解の枠組みのなかで想定したものであり、今後遺跡理解の枠組みの変化によっては意味をなさなくなる可能性がある。また、これまでに発表された見解から筆者なりに読み取ったところから構成したものであり、分類するにあたって強引な解釈を行ったところもあって、誤解があるかもしれない点は容赦願いたい。

ここでの分類の観点として桜井・宮脇・三上氏等による問題点の整理に基づいて、居住の有無と祭祀の種類に絞ってみた。また、これまでみた見解では明言されていないところもあるが、従来知られている遺跡種類の範疇に照らしてそれぞれ観点で想定されるところは筆者なりに補ってみた。なお、居住については居館の場合は居住があり、祭祀遺跡は居住がなく、さらに別に生活拠点があって本遺跡への居住が想定される場合を仮居住と理解した。また、祭祀については調査でも推測された農業祭祀と葬送儀礼(首長

交代儀礼)に分け、両者が執り行われる時期を異にして存在する場合、両者が表裏一体化した祭祀、葬送儀礼(首長交代儀礼)のみの3種にわけてみた。もちろん、こうした分類の妥当性は問題もあろうが、大雑把に遺跡を理解する上での分類と承知されたい。なお、上記②の見解は短文であり、農業祭祀のみに限定されるかどうか読みとり切れなかったので、ここでは省いた。

居住の有無	祭祀の種類	予想される性格	分類
居住あり	農耕祭祀→葬送儀礼	異なる祭祀を伴う豪族居館	I a
	首長就任儀礼=農業祭祀	居館	I b
	葬送儀礼	居館	I c
仮居住	葬送儀礼	古墳造営キャンプ	II a
	葬送儀礼	もがり・葬送関連作業場	(II b)
居住なし	農耕祭祀→葬送儀礼	首長が主催する共同祭祀場	III

このなかでI a・bのあり方は上記文献⑤で指摘された問題点から分離したものである。また、II a・II bはあまり差がないかもしれない。

2. 遺跡の性格

分類の観点にしたがって検討を加えてみたい。まず居住の有無である。本遺跡では竪穴住居跡は皆無ながら、掘立柱建物跡はその可能性があるものがいくつか抽出できた。さらに、集落で出土するような土器は本遺跡でも認められ、その使用痕跡から集落同様、あるいは類似した使用方法=煮沸する行為があったと推測できた。また、水に関しては井戸跡と推測した土坑があるので水の確保も可能である。こうした状況からは居住の可能性は想定できると思われる。ただし、素直に恒常的居住があったと断定できない点は掘立柱建物跡の数も少なく、S D 1016区画内が計画的な空間分割が行われているものの、建物跡配置の規則性及び同じ場所での建て替えが明瞭に看取できなかった点がある。さらに、これまでに知られている居館ととされる東日本の遺跡ではいずれも竪穴住居が主体、あるいは内部に含むものであるが、本遺跡ではまったく確認できていないことがある。このことからすれば、掘立柱建物跡が恒常的な居住建物と断定できるか躊躇されるところである。

本遺跡周辺での古墳時代前期～中期の掘立柱建物跡についてみると、基本的に周辺遺跡では竪穴住居跡が主体で、掘立柱建物跡の検出例は少ない。その在り方は篠ノ井遺跡群のように掘立柱建物跡が集中し、周囲には炉のない竪穴建物と併せてL字状の溝で囲まれる可能性があると思われるものや、部分的な発掘で詳細は不明であるが、掘立柱建物跡1棟のみながら竪穴住居跡がない石川条里遺跡柵下地点などがある。また、更埴市屋代清水遺跡では竪穴住居跡と併せて掘立柱建物跡が検出されている。屋代清水遺跡例からは普通の集落内でも掘立柱建物跡が存在した可能性は十分考えられるが、他ではあまり明瞭に把握できていない。これらの掘立柱建物跡の機能については十分検討されているわけではないが、すべてを倉庫と理解するには規模や構造の多様性が目につく。しかし、ここでは十分な検討ができていないので、本遺跡では居住の有無については断定はできないが、可能性はあるが、やや弱いとしかいえない。

なお、従来知られている豪族館内での建物は多様なものが知られるが、中心的な建物跡は棟持ち柱の構造をもつか、あるいは庇状の側柱構造をもつことが指摘されている(註1)。こうした例と比べると、S T 2009は建物跡の認定に問題を残すが、類似した例とは見られない。

次に祭祀についてみるが、ここでは農業祭祀と葬送儀礼にわけてみたい。まず農業祭祀からみると、先

にみたように農業祭祀の捉え方は2つある。ひとつは調査段階で推測したように農業祭祀と葬送儀礼は別に執り行われていたと考えるものであり、もうひとつは坂本氏が指摘するように首長交代儀礼自体に農業祭祀的な要素があると指摘する見解がある。本遺跡で農業祭祀を想定した根拠は奈良県纏向遺跡の土坑との類似点の基本にある。ここに加えて、調査では土坑配置に規則性が見出せなかったのでS D1016区画内すべてが均一の特殊な空間と捉え、土器の推測年代幅からすれば土坑は毎年、あるいは年に数回構築されたと考えたことも補助材料となっている。しかし、本遺跡調査で直接農業祭祀とする根拠は得られていない。これまでに農業祭祀と限定的に指摘されている例は、本遺跡の水田域のような耕地内、あるいは三重県城の腰遺跡のように井泉の場などがある(註2)。いずれも、水源や耕作地など具体的な対象が明確な場合である。さらに後者については水源における祭りは開発と関連して首長が行う場合があることが指摘されている(註2)が、本遺跡では耕作地から分離しているために、農業祭祀を想定する場合には象徴的な儀礼として考えざるをえない。奈良県纏向遺跡はこうした象徴的な祭祀の遺跡とされている(註3)が、見解の一致をみていないようなので、こうした象徴的な儀礼がどのような形になっていたかは現時点では判断が難しい。また、根本的に本遺跡の土坑もそれ自体が祭祀の対象ではなく廃棄の所産であり、纏向遺跡のような土坑祭祀に直接対比できないと考えた。つまり、現在知りうる農業祭祀とされる諸相と比べると本遺跡の相違点の方が目につく。もちろん、土坑と祭祀を切り離して考える場合に、行為の性格自体を十分明らかにできなかったのが祭祀の可能性を全く否定することもできない。しかし、S D1016区画内の分割された機能の異なる各空間に共通して認められていることや、S D1016区画内でも最も中核となる場所が北東部であると考えられるものの、ここで集中的に土坑が検出されていないことや、遺跡内で手工場生産を行う必然性も結びつけにくいなど現時点の理解として農業祭祀が行われていたと特定するにはやや否定的にならざるをえない。一方の首長交代儀礼と農業祭祀が結びついた可能性については判断する材料は得られていない。

次に葬送儀礼に関する祭祀である。この祭祀が推測された根拠は破損した状態で出土した石釧・車輪石・銅鏡・玉類にある。逆にいえば、これらの遺物がなければ、葬送儀礼(首長交代儀礼)に関する発想は浮かばなかったといっても過言ではない。この葬送儀礼とする根拠は本遺跡は首長のかかわりで成立した遺跡であり、首長が保有したであろう宝器類が破壊されるのは当然その死=遺跡廃絶時であるとするところにある。さらに、S D1016の廃絶時に大量の木材の廃棄と焼却処分が行われていると看取された点も、遺跡の徹底的な破壊=ケガレに付随する行為と推測したこともある。ただし、問題はこうした特殊品の破壊行為が遺跡存続時間内の何時行われたのが発掘では特定できていないことがある。調査時の推測ではS D1016でも土坑同様の祭祀に伴う廃棄が行われていると捉え、土坑での玉類の出土と対比する意味で、これらの特殊品は木材廃棄前後に遺棄されていると推測した。しかし、少なくともS D1016出土の土器には年代幅があり、土器は土坑同様に一括廃棄されているとはいいがたいところがある。また、実際に検討したところでは、特殊品の遺棄は遺跡の構築時ではなかったと考えられるものの、廃絶時か存続時期内かは断定できていないのである。仮に遺跡存続時期内であるとするれば、遺跡存続時期内での変容を物語ることになり、廃絶時であれば葬送儀礼に関連することは確実視できよう。この点は十分解明できなかった大きな問題である。ただし、文献の⑥で北條氏が指摘されたようにこうした破壊行為は古墳でも見られることから、その葬送(首長交代)儀礼に関連する蓋然性が高いと思われる。なお、首長交代儀礼と葬送儀礼を一体化して捉えられるかについて疑問視する見解もある(註4)。その根拠は律令での規定では即位儀礼は神祭りの一環と意識されており、神祭りと死者の祭りは厳然と分けられていたとするところにあるとされる。当善光寺平南部で首長権が移動するとする説に従えば、両者はわけて捉えるべきなのかもしれないが、ここでは何ともいえない。取りあえず、葬送のほうに重点をおいた表現をとっておく。

こうしてみると、遺跡の性格の選択肢のなかで農業祭祀が含まれる可能性は低いと判断され、残された可能性はI b・I cとII a (b)である。つまり、居館か、モガリの場のいずれかの可能性である。しかし、豪族居館については検出例および検討例があるものの、モガリの場は具体的に共通認識となりうる実態はないように思われるし、認定できる条件も良くわからない。そこでここでは居館との対比のなかで本遺跡の性格を比較せざるをえない。

近年古墳時代豪族館の検出例が相継ぎ、数多くの検討が進められてきている。しかし、こうしたなかでも、5世紀前半までの豪族居館の可能性が指摘される遺跡は形態が多様で、実態について良くわからないとされる(註5)。これらの居館の可能性が指摘される各遺跡を比較すると方形を基調として周囲を溝で区画する共通点はあるが、規模や内部の構築物の種類、さらに土塁・柵列といった防御施設の有無や種類は多様である。これらの遺跡と比較すると本遺跡はかなり大きな部類に属し、溝で周囲を区画する点、さらに全体の形は方形を基調とする点、溝のところどころに台形状の突出部がある点、一部に手工業生産が含まれる点は共通点と認められよう。異なる点は本遺跡で確認されたような溝の底面に杭が打設されるような施設は確認できない点、さらに土器を大量に含む土坑も検出例がない点などがある。さらに、一番重要と思われることに豪族居館とされる遺跡において竪穴住居跡が検出されているが、本遺跡の場合は検出されていない点がある。もちろん、東海以西では掘立柱建物跡のみで構成される遺跡もあり、篠ノ井遺跡群の一角にみられる掘立柱建物跡が集中的に検出されている部分を考えると、長野県は東海以西と類似したところもあるのかもしれない。しかし、ここで大きく問題にしたいのは、これまでの類例では竪穴住居跡にしる掘立柱建物で構成されるにしる、内部で確実に生活が行なわれていると想定されている点であり、さらに本遺跡のような廃棄行為や溝の区画内を「聖域」視する行為があまり顕著に認められていないと思われることがある。すなわち、辰己和弘氏が指摘(註6)されるように豪族居館はマツリゴトを執行する場＝「ハレ」の場と生活を営む「ケ」の場の2つから構成されるとするならば、本遺跡の場合ではむしろ「ハレ」のような特殊な意識が全体的に感じられるのである。もちろん、内部がいくつかの空間に分割され、中核的なS T 2009を中心とする北東部の区画が「ハレ」の場、手工業生産が行われたり、各種生産具を出土した西側などを「ケ」の場と呼び得る可能性があるが、土坑・S Q 2016への廃棄といったS D 1016区画内を清浄に保つためと思われる廃棄行為、あるいはS D 1016への石釧などの特殊品の破壊遺棄から推測されるS D 1016区画内を特別視すると思われる行為からは、S D 1016区画内全体が特別な空間として意識されていたことにほかならないと思われる。特に、石釧などの破壊行為は北條氏が指摘するように古墳と共通する行為であり、やはり葬送儀礼との関連で理解したほうが良いと思われる。

こうして考えてみると、本遺跡の諸特長は豪族居館の類似よりも、相違点のほうが強調されるように思われ、むしろ「首長葬送儀礼」に関わる遺跡である可能性のほうが高いように思われる。これは都出比呂志氏の指摘を受けて筆者なりにみた結果である。もちろん、古墳時代前期の豪族館の実態が不鮮明で、比較資料との検討も不十分なため、異論を刺しはさむ余地は多いに残されている。ここではあくまでも現状で推測できる遺跡の性格の可能性のひとつとして挙げておきたい。次にはこうした「首長葬送儀礼」(モガリの場)と理解した場合に、本遺跡でみられたさまざまな諸相はどのように考えられるか都出氏の指摘を参考にまとめてみたい。

まず、土坑等への廃棄行為についてである。こうした行為は遺跡内を清浄に保つための行為であって、土坑自体は祭祀行為に含まれないと考えた。多様な行為が含まれると考えられるが、共通するのは甕を用いて煮沸を行っている点である。しかも、土器の胎土分析からはひとつの土坑へ廃棄される土器は一括生産－消費－廃棄されたものでなく、複数産地のものが持ち寄られている可能性が指摘された。したがって、集落から人間が土器を持ち寄り、煮沸行為を伴う行為が行われていたと考えられないだろうか。この行為

自体が葬送儀礼に直接関連して理解できるわけではないが、本遺跡が首長と直属する者が居住していたのではなく、ここへ集落から人間が臨時に集まったとすればいくつか説明がつくことがある。まず、根本的に個別の契機と考えられる土坑への土器廃棄の意味や、砥石に見られた使用があまり見られないまま廃棄されている例などからは再使用可能であっても持ち出すことが忌諱されたことを示し、こうした廃棄行為が顕著な点も葬送儀礼に伴う「ケガレ」観を表現していると考えられなくもない。

次に手工業生産についてみると、先に木材加工のように遺跡廃絶時に加工が行われている可能性、あるいは製品が出土しない点が問題と思われたが、これも遺跡の廃絶＝葬送に伴って遺跡の外へ特殊品が搬出されていたものとするならば、説明がつけられると思われる。また、遺跡の構造でS D1016及び、底面上で検出された杭列は従来知られている豪族館のような物理的な防御施設とは言いがたく、精神的な区画の意味を持ち合わせていたのだろう。なお、S D1016の区画範囲の形態や台形状突出部をもつ点が豪族居館と類似する点については、場の設定自体が豪族居館をモデルとしている可能性が都出氏によって指摘されたことは申し述べておく。

3. 残された課題

先にみたように本遺跡は首長の関わりから祭祀場、モガリ場、居館の3つ可能性が想定されているなかで、農業祭祀を行う遺跡であることは否定的にみた。しかし、それを除くと葬送儀礼（首長交代儀礼）に関連する行為が行われていることは類似した見解といえる。したがって、当面の性格の捉え方の違いは豪族居館でこうした行為が複合して行われるか、あるいは本遺跡が葬送儀礼（首長交代儀礼）に限定されているかにある。本報告では不十分な類例の比較ながら祭祀遺跡、豪族居館としての可能性は低いと考え、葬送儀礼（葬送）に比重をおく解釈が妥当と考えた。しかし、ここに問題がないわけではない。比較材料とした古墳時代前半期豪族居館像について見解の一致をみておらず、首長の関係する祭祀のあり方も本遺跡以前の時期は明白になってはいないように思われるからである。こうした点からみると検討の余地が残されている。特に、祭祀に関してみれば、従来では祭祀遺跡と特定される場合、その多くが祭祀の対象とした場・モノ（例えば水源、峠、川、海、耕地）と直結して捉えられているものが多く、祭祀対象から分離した象徴的な祭祀・儀礼（例えば新嘗祭など）についてはあまり明らかになっていない点は注意したい。こうした具体的な場やモノとしての祭祀対象から分離した象徴的な祭祀儀礼については考古学のみで検討するのは限界もあるが、具体的な祭祀の対象が浮かんでこない本遺跡ではこうした儀礼的なものを考えざるをえず、そうしたなかに葬送儀礼（首長交代儀礼）もあるといえる。従って、一方で否定的にみた農業関係、あるいは秩序の維持に関する祭祀は比較材料がないため、その可能性をまったく否定できるものでもない。特に、本遺跡出現前夜に当地域が統一的な景観としてまとまる可能性を考え合わせると当空間－世界観の秩序の安定、発展に関連して、首長は「神」それ自体ではないが、仲介するトリックスターの要素をもつ「王」の象徴性の問題が考えられるかもしれない。これについてはより固定的な祭祀対象をもつ「特定の場」で行われた祭祀と、神を招くなどして行われる象徴的な祭祀儀礼の関係の整理を含めて検討すべきと思われる。また、本遺跡が具体的にこうした象徴性に基づく祭祀を行ったとするならば、こうした儀礼が成立する背景や経過ばかりでなく、古墳時代の祭祀を考える上で重要な位置を占めることになるだろう。

次に首長の性格と関連させて集落との関係について触れておきたい。本遺跡が葬送儀礼に限定される可能性を考えた場合、豪族居館は別に存在すると考えなくてはならなくなる。この点で、当地域の首長の性格についての評価の問題が大きく関連する。すなわち、当地域では森將軍塚古墳を初めとする前方後円墳に埋葬される人物が首長と考えられているが、森將軍塚古墳では小型埋葬施設が周囲で多数検出され、共

同体との結びつきが強いことが推測されている。その一方で首長のより階層的な分離を強調し、かなりの権力の集中とみる見解もある(註7)。現段階ではいずれともいえないが、共同体との結びつきが強ければ、居館は集落と近接した場所に存在して、より公(オオヤケ)的な様相が強いだろうし、後者であれば集落から独立してより広域支配に便利な場所=交通の要所などに占地し、多くの収穫物を納める倉庫群を保有していたと考えられる。つまり、居館の立地場所や構造は首長の性格を直接反映したものと考えられるのである。この点で、本遺跡を居館とみるか否かは集落から分離している点と関連して首長の権力構造の評価、その性格と密接に関わるのである。

この点について本遺跡の調査から指摘しうることが一部に生産が行われていることが知られたが、遺跡全体を貫く特長は器物の焼却廃棄、つまり大規模な消費と片づけであり、倉庫などの貯蔵に関する要素が非常に弱いと感じられことがある。したがって、この点では収穫物を独占的に管理していたとはいえない。また、本遺跡では土器は持ち寄られたと推測できることから、専門の土器生産を付属させていたのではなく、こうした器物の生産が各集落に依拠する形である上に、集落からの人間の参加があったと思われる。つまり、本遺跡で行われた行為は首長層、あるいは関連する人物等のみで儀礼が執り行われたものではない可能性があり、集落との関連が強いように思われるのである。このことは本遺跡で執り行われた祭祀にミニチュア土器や土製鏡などの集落遺跡にも相通づる遺物が多数検出されている点からもいえる。なお、集落から土器が持ち寄られて使用されているとするならば、本遺跡で使用された土器の生産地は首長の関連する範囲(支配域)を示すと思われる。この点では在地産と思われた土器の胎土グループに複数認められる可能性があることは興味深いところである。

また、これらの問題に関連するが、本遺跡の出現経過と遺跡の形態の系譜の問題がある。これは遺跡が在地内で発生したものか、外来の影響を受けて突然出現したかの問題である。現時点で見通しが得られているわけではないが、いくつかの可能性と派生する問題を指摘できるので触れておきたい。本遺跡周辺では本遺跡に遡る類似した遺跡はこれまでに全く知られていない一方で、本遺跡がひとつの画期となる様相がいくつか知られる。それは先行して少量の中実・中空の柱状脚の高坏があるものの、本遺跡ではヨコミガキを含む中空高坏が安定的にしかも大量消費される開始時にあたること、さらに滑石製白玉使用の開始が確認できる点である。こうした要素と一体化して出現するならば、本遺跡の系譜は在地内ではなく、外来の影響の元に出現した可能性が高いように思われる。とすれば、ここでいくつか派生する問題が出てこよう。まず、本遺跡が葬送に力点が置かれ、外来の思想の影響を受けて成立するならば、本遺跡の出現は在地内の首長の性格はこのような思想を産み出した地域と同じ背景—首長の階層性に規定される出現の必然性は必ずしも考えなくても良いことになる。つまり、「形」を真似たもの?であって在地の社会的な構造までが一致していると捉えたり、本遺跡とは別に存在したであろう居館も本遺跡と類似した姿をあてる必要がないとも考えられる。この点では集落の結びつきが想定されながらも、集落のある自然堤防上とは離れて存在する点、さらに居館が不明瞭な点も説明できる可能性がある。また、もうひとつは前方後円墳の築造に直接あたる者が在地の者である限りは関連器物の生産—例えば土器生産、祭式も在地の社会構造に関連してアレンジせざるを得ない側面も強かったと思われる。そこで、SD1016区画内と特別視する行為を行いながらも、内部を細かく分割すること、さらに土器は特定の産地の専業生産としなかった点(特に甕の形態差や他器種のバリエーションの発生)が生じたとも考えられる。これらの点については当地域の首長の性格や、社会構造との関連で追求する必要があると思われる。特に、前方後円墳と葬送に重点が置かれるあり方と集落との関係のあり方からみた首長像をどのように位置付けられるかは大きな問題となろう。また、特殊品の入手を含めて外的にみた首長と在地内からみた首長の2面性は注意されるであろう。

4. おわりに

以上、本遺跡の性格についてみてきたわけであるが、いくつか可能性が想定できるなかで本遺跡の場合では都出氏の指摘された通りに葬送儀礼（首長交代儀礼）に関する性格であるとした場合に、遺跡の諸状況が一番整合的に説明しうると考えた。もちろん、首長交代祭祀については調査段階から推測されたものであり、これが行われたことは上記の諸説でも大きな違いはないと思われる。問題はこうした儀礼に関して新たに構築された遺跡であるか、あるいは豪族居館でこうした儀礼が執り行われたかである。この点では現時点で知られる古墳時代の5世紀前半以前と考えられる遺跡との比較（甚だ不十分なものであるが）から、豪族居館ではないと考えたが、今後類似した例の出現とともに変更が必要になるだろう。ここではひとつの可能性として提示しておくことにしたい。

本遺跡の重要性に対して、十分なまとめができなかつたのは一重に筆者の浅学なる所以である。これまでに諸氏によって本遺跡の性格や重要性を指摘するさまざまな見解があった。納得したり、異論をはきみたいところもあったが、調査から整理に関わった人間ながら遺跡の性格については特定することができなかった。そこで、このような諸説を材料に遺跡の性格を推論する方法となったが、こうした推論の方法が良かったかは問題がある。特に遺跡のイメージの想定では、常に現代的なイメージが付きまとい、実際に現代的用語で表現した場合でも、何か納得しきれない所が筆者の中にもある。現代人が古墳人の意識を探る道のりは遠いが、しばらく時間をおいて、何らかの別の機会に検討できたらと思う。

註

- 註1 植木久 1991「豪族居館と建物構造」『季刊 考古学』39 雄山閣
- 註2 穂積裕昌 1992「「大溝空間」の性格とその意義」『城之腰遺跡』三重県埋蔵文化財センター
穂積裕昌 1994「古墳時代の湧水祭祀について」『同志社考古学シリーズ』VI
- 註3 石野博信 1976「第4章 三輪山山麓の祭祀の系譜」『纏向遺跡』檀原考古学研究所
1985「第五章二節 四・五世紀の祭祀形態と王権の伸張」『古墳文化出現期の研究』学生社
- 註4 榎村寛之 1996「古代日本の「信仰」」『日本の美術 まじないの世界Ⅰ』至文堂
- 註5 阿部義平 1990「宮殿と豪族居館」『古墳時代の研究 2 集落と豪族居館』雄山閣
阿部義平 1991「豪族居館と邸宅」『季刊 考古学』39 雄山閣
- 註6 辰巳和弘 1991「豪族居館と祭祀」『季刊 考古学』39 雄山閣
- 註7 白居直之 本分冊第1章第4節「周辺遺跡の概要と善光寺平南部の空間構造」

第5章 結 語

本遺跡は前方後円墳が善光寺平に出現し始めるころ、低地水田のなかの微高地に忽然と特殊遺構群が構築された。その特殊性は検出された遺構群や遺物類から、前方後円墳出現期以前の状況や同時期の一般集落や墓域とは異なる状況が浮かび上がった。まず本遺跡の立地であるが、北東には低地を隔てた自然堤防上に集落となる篠ノ井遺跡群、南西には川柳將軍塚をはじめとする山麓上の古墳群がある。特殊遺構群は低地と山麓との境界となる微高地に姿を現し、集落と墓域とはやや距離を置いている。周囲を低地水田に囲まれた領域には日常とはかけ離れた空間が大規模に作られたことが想像され、こうした空間領域の設定は弥生社会の様相とは隔たりがある。特殊遺構群の構成は、大溝に区画され閉鎖された空間域と低地の生産域そしてその中間の空白域の3領域からなる。閉鎖空間（内界）をつくるほぼ方形に巡らされた大溝の形態は豪族居館を思わせるが、内部の明確な遺構は廃棄土坑と数少ない不明瞭な柱穴のみである。空白域の縁辺には土器集中区がある他は遺構がなく、祭祀場を思わせる。この空白域を設けて、廃棄土坑・廃棄土器集中を集約させた遺構構成も集落とは性格が異なる。出土遺物は多量の土器と板材、羽口・砥石のほか威信財となる複数の装飾品類が破壊されていた。土器は小型丸底、器台、高杯など畿内地域の影響を受けた器種によって構成され、本地域では出土の稀少な時期である。また車輪石や石釧、銅鏡などは古墳に副葬されるべき特殊遺物である。大溝内から出土した木製品も含めこの領域から出土した遺物は意図的に破壊、破棄されたものであり、最終廃棄にあたっては火が用いられたことが明らかである。しかし鉄製品に至っては鍛冶関連遺物があるにもかかわらず皆無であった。遺構・遺物ともに集落とは質的に異なる様相が明らかであり、この領域で何らかの大規模な祭祀行為が行われたことは容易に推測される。

特殊遺構群、出土遺物が語る祭祀の内容については各章で詳細に検討されているが確定的なことは、ここでの祭式に地域首長が深く関わっていること、領域内で使用された道具、構築物は最終的に全て破壊・廃棄されていること、領域内での生産物は搬出されていることが指摘できる。これらを総合的に検討すると地域首長の葬送儀礼にかかわる祭式の場と考えることが最も妥当性がある。未だ類例がなく憶測の域を脱しえないが、「殯」とする解釈も可能である。閉鎖空間（内界）において地域首長集団の継承儀礼が、空白域において地域集団の葬送儀礼が行われたたのかもしれない。

時代の画期となるこの祭式の登場の背景には前方後円墳の出現があり、その墳墓形態にとどまらず在来の伝統的な祭式を変革せざるを得ない畿内政権の強い影響を読み取ることができる。本遺跡は地域首長が前方後円墳に被葬される前段階の首長継承祭祀の場として位置づけられ、畿内型の祖霊祭式の登用という政治性を帯びている。本遺跡出現以後善光寺平南部域周辺では規模は小さいものの同様の祭式が行われた可能性も指摘できる。出土遺物からは川柳將軍塚古墳との共通性があり、この古墳の被葬者と深く関わりのある特殊遺構であることは疑い得ないであろう。

石川条里遺跡の発掘調査から本報告書の刊行まで10年の年月が経過した。この間に発掘契機となった高速道路も完成し、センター内部の体制も変わって発掘当時を知る調査研究員も少なくなった。この10年という歳月のほとんどが膨大な遺物・遺構の整理に費やされたが、改めて振り返ると遺跡内容の豊富さを十分明らかにできたか、いささか不安も残る。

石川条里遺跡の発掘は高速道路建設に伴うもので調査対象範囲も膨大であったが、それ以上に本県では数少ない掘削深度が数mにおよぶ本格的な沖積地の発掘であり、こうした発掘に不慣れであったために発

掘にいたるまでの条件整備や発掘調査の手順で迷うことが多かった。しかも、2年次には工事と平行するようになり、調査期限の条件も厳しかった。こうした状況のなかで全国的にも注目される本遺跡が発見されたのであるが、調査ではできる限りのことをしたつもりであったが、整理作業で見直すと発掘時に見逃したことや記録漏れも多いことを思い知らされた。また、発掘所見と整理では遺跡像が大分変わってしまい、調査所見と整理時の遺跡イメージのずれを感じることも多々あった。

あらためて述べるまでもないが、考古学は遺構・遺物に解釈を加えながらより高次の歴史事象として把握する作業を行う。しかし、それ以前の遺物・遺構自体の認識に常にその時点での研究状況、あるいは調査担当者の研究歴・経験などに基づく思考の枠組み（パラダイム）に規定される側面があると思われる。このような枠組みの制約下において類例の知られる遺跡であれば、その善し悪しは別としても、ある程度普遍的な調査方法にのっとり他遺跡とも共通するレベルでのデータが得られるような努力がなされたであろうが、今回のような皆目見当もつかない遺跡に直面しては認識の変化・深化にしたがって調査方法が変化し、データの一貫性が損なわれるという側面が生じた。遺構を十分理解できないまま調査が進められたところもあり、記録漏れや見逃し、あるいは調査記録のわかりにくさを生じる原因もここにあったといえる。また、調査では遺跡の評価をめぐる幾度と話し合いが持たれたが、これは調査観点を抽出するための仮説を立てる試みであったものが、自分たちの認識不足からいつの間にか、その仮説に寄りかかって調査を進めてしまった傾向もあった。今回の発掘を通して発掘自体がこうした思考の枠組みに制約されている面が強いことや、常識を逸脱する遺跡に直面した時に、その思考の枠組みがいかに無力なものであるかを思い知らされた。

今回の報告書をまとめるにあたってはこうした調査時や整理で変化した認識、あるいはさまざまなレベルの所見をどのように整合させてまとめるかが課題であった。どれも仮説でしかないが、調査所見のまま提示したら、一貫しない調査方法や観点、あるいは複数の調査研究員の手による所見のずれもあって混乱も招きやすいように思われたし、羅列したのでは遺跡のイメージを伝えにくいようにも思われた。そこで、変則的ながら最終的な整理での遺跡イメージに基づいて構成し、整理でいくつか補足できるデータをつけ加えることにしたのである。しかし、本報告で提起した遺跡像に必ずしも自信をもっているわけではない。この報告書の刊行をもって石川条里遺跡の記録保存作業は完了するが、今後も別の観点から本遺跡を見直す必要があると感じている。

最後に、この報告書の完成までには数多くの研究者や関係各位の支援や助言があったことを申し述べておきたい。必ずしも、十分応えられなかったところもあるが、僅かながらも当地域の歴史の資料として、あるいは今後の調査に生かされる点があれば幸いである。

付 章

ここでは第1・3分冊に納め切れなかった自然科学分析、および第2分冊に関連する自然科学分析を掲載する。分析は複数年次にわたり、しかも一部は追加されたものがあるなど統一性に欠けるところがあるため編集の際に再編成しなおしたところがある。また、遺構・遺物の名称や番号が整理期間中に変更されたものがあるため、これについては修正を加えた。もし、執筆者の意図と異なるところを生じれば、それは編集者に責がある。また、紙幅の関係から分析データをすべて掲載しきれなかったため、一部割愛したところがある。これについては保管された分析報告を参照されたい。

第1節 ベンガラ・漆の同定と羽口の分析

編者註 石川条里遺跡出土の古墳時代ベンガラ・漆の同定と羽口に関する分析報告である。羽口は⑦-2区S D1016出土の古墳時代と思われるものを分析に供し、工程及び、溶解した物質を特定することを目的とした。また、古墳時代のS K2207出土の赤色顔料はベンガラ、古墳時代の土器に付着した黒色の薄い膜状の物質は漆ではないかと推測したが、その確認のために分析を依頼した。

川鉄テクノロジー株式会社
分析評価センター
岡原 正明
伊藤 俊治

1 はじめに

長野県埋蔵文化財センターで発掘されました石川条里遺跡から出土した赤色顔料・漆・鉄滓について調査のご依頼がありました。赤色顔料の同定、土器に残存付着している黒色物質が漆か否か、および羽口に付着している鉄滓の特性について、化学成分分析を含む自然科学的な観点で調査を行いましたので、その結果について報告いたします。

2 調査項目及び試験・検査方法

調査項目

調査項目を一覧表に纏めると表1のようになります。

(1) 外観写真撮影

各種試験用試料を採取すると前と採取した試料の状況を記録しておくために、両面をmm単位まであるスケールをカラー写真に同時写し込みで撮影しました。外観の観察写真を示しました。(編註：割愛)

(2) 化学成分分析

化学成分分析はJISの分析法に準じて行いました。分析方法および分析結果は表1に示してありますの

付一表1 調査項目

資料No.	資料の性格・特徴		発掘地点	掲載図	外観観察	成分分析	X線回折	微小X線	EPMA	EDX	FTIR	顕微写真
1	赤色顔料	顔料粉末（塊粉混在）	S K 2207	-----	○	○	○		○	○		
2-1	漆	土器底部に残存	S D 1016	図-5	○						○	
-2	漆	土器底部に残存	S K 2291	図-4	○						○	
-3	漆	土器片に付着	S K 2827	図-3	○						○	
-4	漆	土器片に付着	S D 1016	図-3	○						○	
-5	鉄滓	羽口先端に溶着	S D 1016	図-1	○	○	○					○

注：微小X線は微小X線回折を指す。

EDXはSEM-EDX（走査電子顕微鏡を用いたエネルギー分散蛍光X線分析）を指す。

で、ご参照ください。

一般に、赤色顔料の成分はベンガラ（酸化第二鉄：ヘタマイト）、辰砂（硫化水銀：天然朱）あるいは鉛丹（酸化第二鉛）が考えられます。表2に示した13元素の化学成分分析の結果では鉄以外に水銀や鉛元素検出されなかったため、さらにSEM-EDX（走査線電子顕微鏡に付属に付属したエネルギー分散型蛍光X線分析装置）でその存在の有無を検証しました。

鉄滓については18項も区の元素や鉄の状態分析を行いました。表2に化学成分分析結果を示しました。

(3) X線回折、微小X線回折測定

試料を粉碎して板状に成形し、X線を照射すると、試料に含まれている化合物の結晶の種類に応じて、それぞれの固有の反射（回折）されたX線が検出されることを利用して、試料中の未知の化合物を観察するものです。

(4) EPMA（X線マイクロアナライザー）による観察

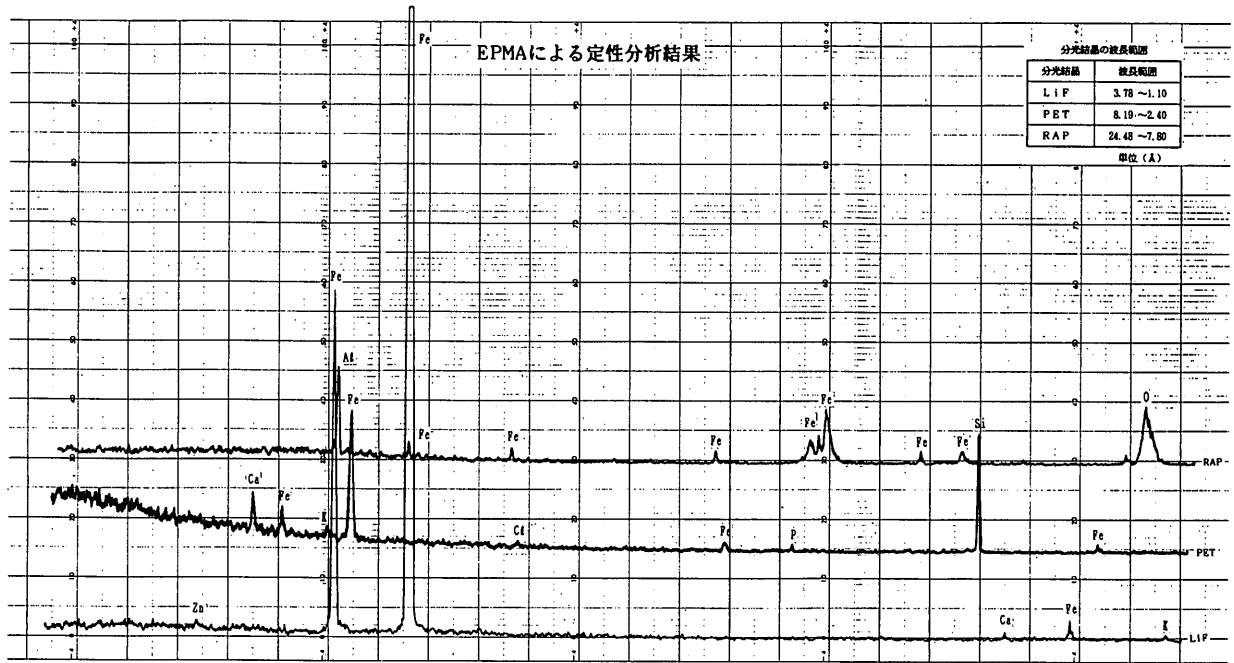
高速電子線を2 μm 程度に絞って、分析対象試料面に照射し、その微小部に存在する元素から発生する特性X線を測定するものです。今回は特に色調の鮮やかな赤色顔料について試料の面を一方向に走査して測定を行いました。結果を第1図に示しました。

(5) 顕微鏡組織写真

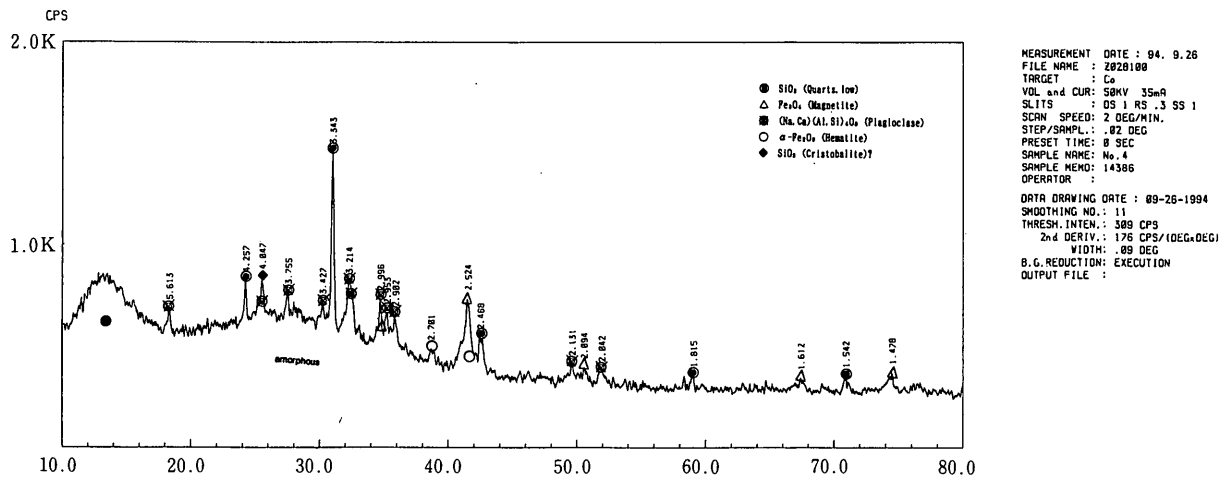
羽口付着物の一部を切り出し樹脂に埋め込み、細かい研磨剤などで研磨（鏡面仕上）し、そのご実体顕微鏡で観察しながら10倍で写真撮影を行いました。

(6) FT-IR

試料を採取しKBr（臭化カリウム）粉末と混合、粉碎後、錠剤成型機により錠剤試料を作成しました。FT-IR（フーリエ変換赤外分光分析）装置（島津製作所製FT-IR4200型）を用いて測定しました。波数の範囲は4000~400 cm^{-1} 、積算回数50回の測定条件としました。測定結果を第2図に示しました。



付一1図 EPMAによるベンガラの分析



付一2図 羽口先端部のX線回折

3 調査結果

3-1. 赤色顔料など（試料1~2-7）

赤色顔料と考えられる物質の同定を目的として行った。同定は赤色を呈するベンガラ($\alpha\text{-Fe}_2\text{O}_3$ ：酸化第二鉄)、辰砂(HgS ：天然硫化水銀、朱)または鉛丹(Pb_2O_3 ：酸化第二鉛)の存在確認のため前述したように、化学成分分析、X線回折およびSEM-EDXを用いて行った。

採取には細心の注意を払って進めた。

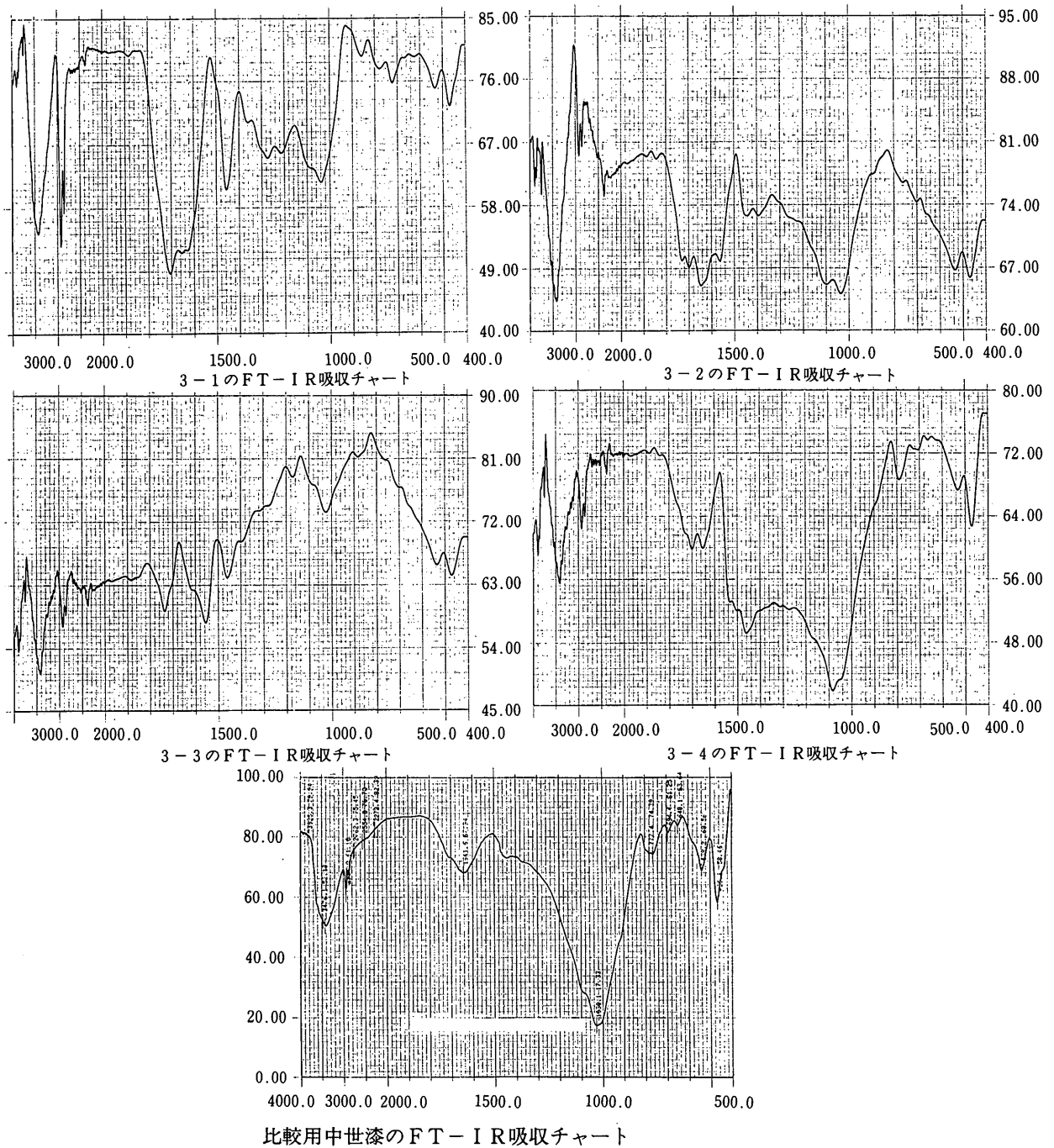
(1) 資料1 赤色顔料（付一1図）

やや湿気を含んでおり、塊と粉状のものが混在している。重量は11.1grであった。粉状の部分の採取し調査を行った。

化学成分分析の結果、赤色の元であるベンガラが74.4%と多く、またEPMAによる定性分析でも赤色の色調をなすFe (鉄) とO (酸素) のピークが観察される。このほかAl (アルミニウム)、Ca (カルシウム)、Si (シリコン) やK (カリウム) などの鉱物 (雑挟物) を形成する元素のピークが出現している。

X線回折の結果からも主としてヘマタイト (=ベンガラ) の存在が認められ、その他シリカ (SiO₂: 石英など) が検出される。なお、SEM-EDXを用いた分析でもHgやPbは検出されなかった。

したがって、この資料はベンガラと認められる。



付-3図 漆の FT-IR 分析

3-2. 漆の同定 (資料 3-1~3-4) (付-3図)

漆はもともとウルシオールを主成分とした有機化合物の混合物であり、その産地、生漆の処理工程、漆塗やその固化工程の違いによって、特性に微妙な違いを生ずると言われている。また仕上げ後の経時変化(湿度、紫外線や温度などの影響)によって成分の変化や劣化が進行する。

そこで、測定と比較用に中世漆のFT-IR吸光度のパターンを測定した後、資料3-1~4についてそれぞれ吸光度のパターンを強調し測定(第2図)した。相互の吸光度のパターンの相似性で判定した。

(1) 資料3-1 (SD1016) 土器底部の漆

上縁部9cm、頸部6cm、高さ6cmで縁の一部が欠落した土器底部に固着し、皸状になって多量に残存した黒色の表面が平滑な資料である。土器も含めた重量は99.6grであった。

FT-IRによる測定によると中世漆と相似のパターンを示すことから、この黒色の資料は漆と考えられる。

(2) 資料3-2 (SK2291) 土器底部に付着した漆

外径6cm、高さ3cmの上部が欠落した器の底部に付着残存している黒色の資料である。乾燥または劣化したような状態となり、一部がすでに剥離している。器も含めた全重量は63.4grである。

FT-IRの測定によると中世漆と相似のパターンを示すことから漆と考えられる。

(3) 資料3-3 (SK2827) 土器に付着した漆

長辺5cm、高さ2.5cmの三角形の土器片内に薄く付着した黒色の資料である。土器片も含めた全重量は6.5grである。一部剥離した痕跡が認められる。

FT-IRの測定によると中世漆と相似のパターンを示すことから、この黒色の資料は漆と考えられる。

(4) 資料3-4 (SD1016) 土器に付着した漆

長辺4cm、幅2cmの台形の土器小片に粗に付着した黒色の資料である。部分的に剥落しているが劣化はそれほどではない。土器片も含めた全重量は4.3grであった。

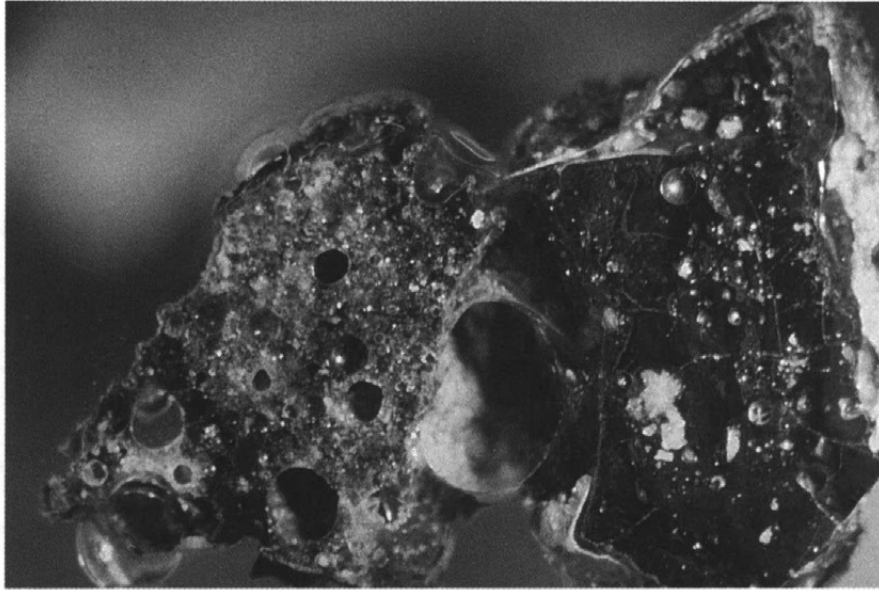
FT-IRによる測定では中世漆と相似のパターンを示すことから、この資料も漆と考えられる。

3-3. 羽口付着鉄滓

外径8cm、内径5cm、長さ10cmで先端吹出口は2.5cmの真円に近い羽口である。先端に溶着している鉄滓を調査した。羽口の胎土との比較分析が好ましいが、胎土の採取が不可能なので溶着物についてのみ調査・検討した。

化学成分分析(付-表2)によれば、T.Fe(全鉄)が6.40%でそのうち酸化第二鉄は6.97%であった。鉄精練時の所謂造滓成分($\text{SiO}_2 + \text{Al}_2\text{O}_3 + \text{CaO} + \text{MgO}$)は81.8%であり、通常鉄滓としては鉄の含有量が低い方である。鉄原料の一つである砂鉄にはTi(チタニウム)やV(バナジウム)が多く含まれることが多いが、この付着物にも TiO_2 (酸化チタニウム)が0.99%、Vが0.020%存在していることから、製鉄の原料に砂鉄を使用していたものと考えられる。

付-4図の実体顕微鏡写真で明らかなように付着物はガラス状を呈しており、通常精練が進んだ時に観察される鉱物質結晶は全く認められず、精練の極く初期段階の熔融で滓の流動が開始されたばかりの資料と認められる。



付-4図 羽口付着鉄滓顕微鏡写真(×10)

X線回折結果でも、マグネタイト(Fe₃O₄:砂鉄の主成分)とヘマタイトの弱いピークその他、硝子状になりやすい石英(シリカ)などの鉱物質が検出された。

以上の結果を総合すると、羽口の付着物は鉄精練の極く初期段階の溶融物(鉄滓)であり、鉄精練の原料には砂鉄が用いられていたと推測される。

付-表2 赤色顔料と羽口先端部成分分析

赤色顔料

単位:%(m/m)

成分 試料No.	T.Fe	FeO	Fe ₂ O ₃	SiO ₂	Al ₂ O ₃	CaO	MgO	TiO ₂
1	52.4	0.43	74.4	16.2	4.76	0.22	0.26	0.18
成分 試料No.	MnO	P ₂ O ₅	Na ₂ O	K ₂ O	V	Cu	C·W	
1	0.16	0.26	0.16	0.26	0.008	0.004	1.94	

鉄滓関係

単位:%(m/m)

成分 試料No.	T.Fe	M.Fe	FeO	Fe ₂ O ₃	SiO ₂	Al ₂ O ₃	CaO	MgO	TiO ₂
4 鉄 滓	6.40	0.11	1.36	6.97	58.3	16.7	4.21	1.91	0.99
成分 試料No.	MnO	P ₂ O ₅	Cr ₂ O ₃	Na ₂ O	K ₂ O	C	V	Cu	C·W
4 鉄 滓	0.23	0.36	0.08	2.16	5.08	0.94	0.020	0.004	0.60

【分析方法】 上記試料の分析方法はJIS法に準拠し、以下の方法とした。

- | | | |
|--------------------------------------|---|--------------------|
| T.Fe: 三塩化チタン還元-ニクロム酸カリウム滴定法 | SiO ₂ , Al ₂ O ₃ | } : ガラスビート蛍光X線線分析法 |
| M.Fe: 臭素メタノール分解-EDTA滴定法 | CaO, MgO, TiO ₂ | |
| FeO: ニクロム酸カリウム滴定法 | MnO, P ₂ O ₅ , H ₂ O | |
| Fe ₂ O ₃ : 計 算 | Na ₂ O, Cr ₂ O ₃ , V, Cu: ICP発光分光分析法 | |
| C·W: カールフィッシャー法 | C: 燃焼-赤外線吸収法 | |

第2節 石川条里遺跡出土種実遺体の同定

編者註 整理着手直後に調査段階から抽出されていた種実を分析に供したが、後になって出し忘れた種実があることが判明し、これを追加分析した。初回の分析は種実の同定と共に、土坑の構築季節の問題の解明のために可食の有無と採取季節に触れて頂くように依頼したが、追加分は量的にも少ないため種実の同定と新たに判明した種類について報告いただくことにした。両者の報告は若干内容が異なるが、本報告では統一的にまとめることができなかつたので、2つを併記することにした。したがって、全体の様相については両者を併読することで補っていただきたい。なお、分析試料には中世の遺構出土種実が含まれる点は注意されたい。また、ここでは基本的に報告をそのまま掲載したが、変更された遺構記号、あるいは項目の記号や番号などは編者が加筆した。

パリノ・サーヴェイ株式会社

初回分析（編者註）

はじめに

石川条里遺構（長野市篠ノ井塩崎所在）は、千曲川が形成した自然堤防と後背山地とに挟まれた後背湿地に立地し、現在の水田地帯である。千曲川の自然堤防上には、篠ノ井遺跡群とよばれる弥生時代の集落跡が見られ、水田の適地である遺跡周辺の後背湿地は、弥生時代以降水田として利用されていたことが明らかとなっている。すなわち、これまでの発掘調査により弥生時代から中・近世にかけての水田に伴う遺構が重層的に検出され、またプラント・オパールをはじめとする微化石分析の結果でも、弥生時代中期以降各時代にわたって稲作が行われていた可能性が指摘されている。石川条里遺跡の大部分はこうした低湿地からなるが、後背湿地内の微高地や、自然堤防との境界付近には、居住域や墓域の一部もみられる。

石川条里遺跡では、今回、古墳時代の溝や土坑から多量の装身具類・鏡や土器等が出土した。特に土坑群からは多量の土器が出土し、それらは何らかの祭祀行為に伴うものと推定されている。また、これらの土器に伴って多量の種実遺体が検出され、これらの種子も祭祀と関係するものと予想される。そこで、これらの種実類を同定することによって、当時の植物利用の一端を明らかにすることとした。

1. 試料

試料は、古墳時代中期の土坑および溝、中世の井戸および溝などから採取された種実遺体5式分(115ケース)である。試料については、結果とあわせて付一表3にまとめた。

2. 分析方法

双眼実体顕微鏡下でその形態的特徴を観察し、種類を同定した。

3. 結果

結果を表1に示す。同定された種類の形態的特徴を以下に記す。

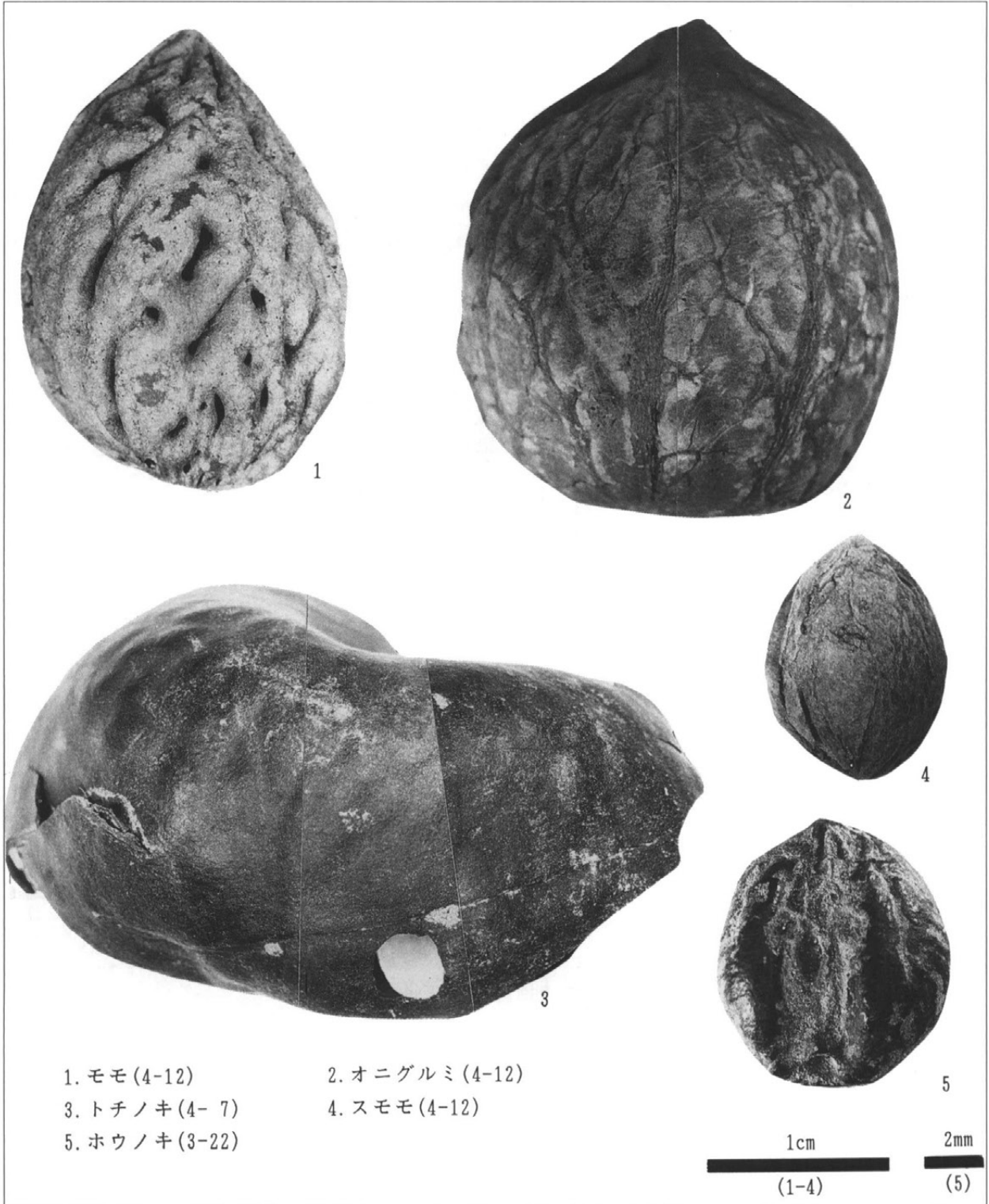
- ・オニグルミ *Juglans mandshurica* Maxim. subsp. *sieboldiana* (Maxim) Kitamura クルミ科
核が検出された。褐灰色。大きさは27mm程度。側面の両側に縫合線が発達する。広卵形で、基部は丸く

付一表3 種実同定結果(※編者註 遺構番号等について加除筆したものがあある。)

	出土遺構	種類(個数)		出土遺構	種類(個数)
1	SK1015 ※	モモ(10)	59	SK2827	ブドウ属(6)
2	SK2744	モモ(破片多数)	60		不能
3		オニグルミ(13)	61		ミズキ(1)
4		不能	62	SK2827カ	イネ(約100)
5		イネ(4)、他は不能	63		イネ(6)
6	SK2746	イネ(31)、他は不能	64		メロン類(30)
7		不能	65		モモ(3)
8		イネ(約15)	66		モモ(4)
9		不明	67		モモ(2)
10		モモ(2)	68		サンショウ(1)、他は不明
11		不能	69		カナグラム(13)、サンショウ(1)
12		メロン類(1)	70		サンショウ(23)
13		不能	71		不能
14		モモ(6)、オニグルミ(1)	72		ブドウ属(16)
15	SK2747	イネ(39)、他は不明	73		不能
16		メロン類(1)	74		不能
17	SK2748	イネ(7)、他は不明	75		ハウノキ(1)
18		モモ(7)	76		不能
19	SK2751	不明	77	SK不明1	不能
20		オニグルミ(破片多数)	78		メロン類(3)
21		イネ(多数)	79		不明
22		不能	80		サンショウ(2)
23		不能	81	SK不明2	イネ(1)、他は不明
24	SK2759	イネ(多数)	82	SK不明4	イネ(2)
25		不能	83	不明	不能
26		メロン類(1)	84		不能
27		不明	85		不能
28		不能	86	SD1016⑤-1	ヒョウタン類(61)
29	SK2761	イネ(2)、他は不明	87	※ ⑤-1	モモ(6)、オニグルミ(1)
30	2828	モモ(2)	88	⑤-1-括	モモ(3)
31	2831	イネ(1)、他は不明	89	⑤-1	木片
32		不能	90	⑤-1中央西	トチノキ(1)
33	2832	イネ(約100)	91	⑤-1	不能
34		モモ(1)	92	⑤-1	トチノキ(3)
35		メロン類(10)	93	⑤-2	サクラ属(1)
36		ブドウ属(1)、カナグラム(1)、サンショウ(1)	94	⑤-2	モモ(2)
37		サンショウ(14)	95	⑤-2	モモ(2)
38		ブドウ属(3)	96	⑦-2HER16(東端下)	モモ(4)、スモモ(1)
39		ミズキ(1)	97	⑦-2HER14	オニグルミ(2)、モモ(5)、スモモ(1)
40		不能	98	⑦-2	モモ(1)
41	SK2832	不能	99	⑦-2IVFK01	モモ(1)
42	SK2843	イネ(1)	100	⑦-2IV	モモ(2)
43		ブドウ属(1)	101	⑦-2IIEP12	モモ(4)、オニグルミ(1)
44		不能(1)	102	⑦-2IIED12	モモ(1)
45	SK2649 ※	モモ(2)	103	⑦-2 1層	モモ(8)
46	SK2063-A	不能	104	⑩-1	モモ(3)
47	※	モモ(1)	105	⑩-1	モモ(1)
48	SK2635 ※	モモ(1)	106		モモ(2)
49	SK2057 ※	モモ(3)	107	東端	不能
50	SK2758	イネ(36)	108	⑧-1	モモ(1)
51	SK2865 ※	イネ(3)、他は不明	109	⑩-1	サクラ属(1)
52	SK2877	不能	110	SD1007⑤-1 1層	不能(2)
53	SK1084 ※	モモ(2)	111	※ ⑤-1 2層	ウリ科(1)、他は不能
54	SK2827	イネ(69)、他は不明	112	⑤-1 2層	不明
55		メロン類(16)	113	SD2018	モモ(2)
56		モモ(1)	114	SD2001	モモ(1)、オニグルミ(1)
57		クマズミノキ(1)、他は不明	115	SD1016不明	不明
58		サンショウ(6)			

※：発掘調査時に目についた種実遺体を採取した遺構(無印の遺構は、整理調査時に篩別を行い種実遺体を採取した)

図版 1

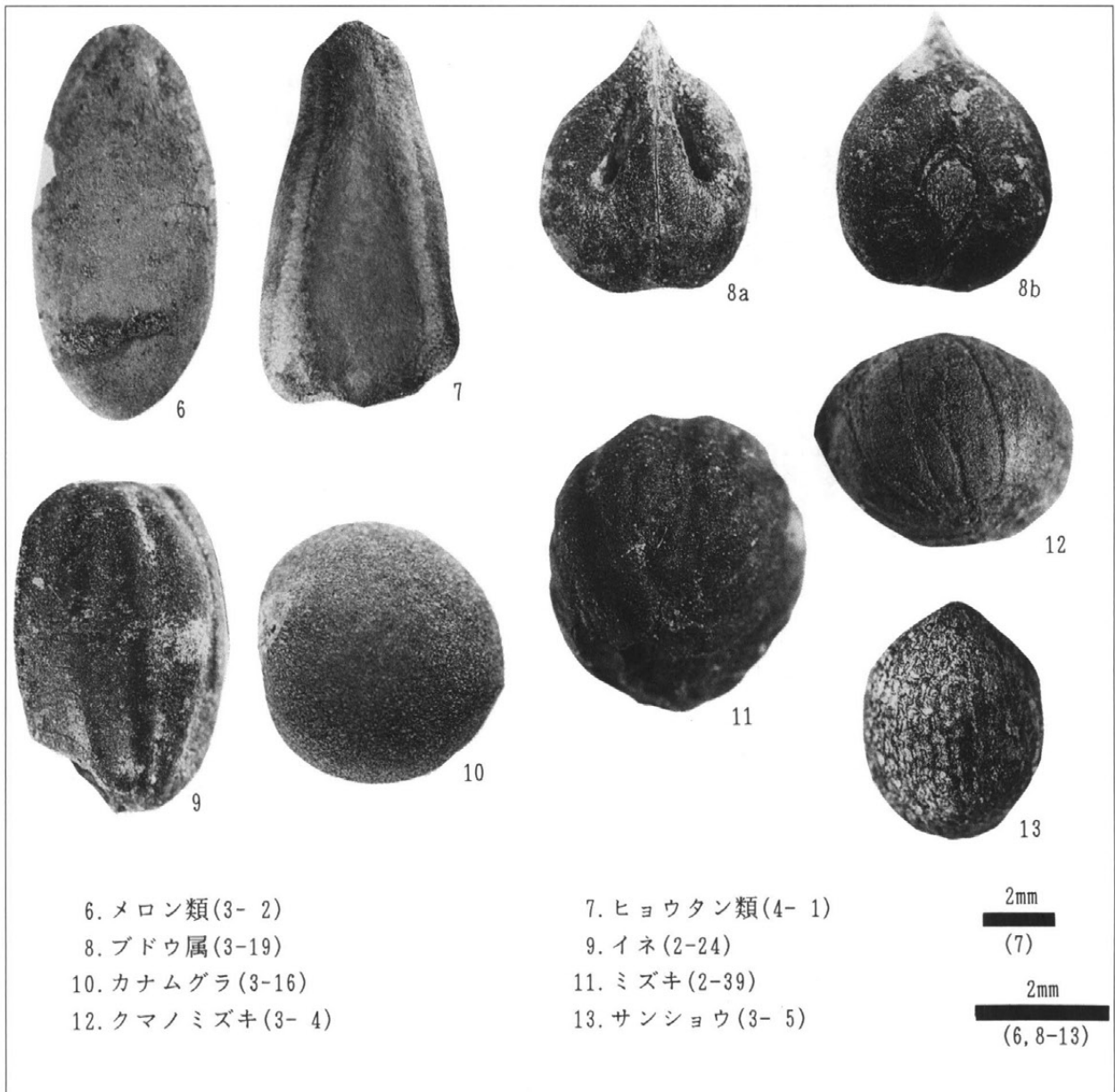


付-5図 種実写真1

なっているが先端部は尖る。表面は荒いしわ状となり、縦方向に溝が走っている。内部は子葉が入る2つの大きなくぼみがある。

・モモ *Prunus persica* Batschバラ科

核(内果皮)が検出された。褐色~黒褐色。核の形は楕円形で、やや扁平である。大きさは、約27mm程度。丸く大きな臍点がありへこんでいる。一方の側面にのみ、縫合線が顕著に見られる。表面は、不規則な線状のくぼみがあり、全体としてあらいしわ状に見える。



付-6図 種実写真2

・スモモ *Prunus salicina* Lindl バラ科

核(内果皮)が検出された。褐色~黒褐色。大きさは、縦軸14mm、横軸10mm。核の形は楕円形で、偏平である。下端には、丸く大きな臍点がありへこんでおり、上端は丸い。一方の側面にのみ、縫合線が顕著に見られる。表面は、不規則で浅いしわがみられる。

・トチノキ *Aesculus turbinata* Blume トチノキ科

種皮が検出された。黒褐色で、大きさは4cm程度。不定形で、種皮は薄く堅い。

・ハウノキ *Magnolia obovata* Thunb モクレン科

種子が検出された。おおきさは8mm程度。黒色で種皮は堅く、形状は楕円形で偏平。平らな面には深くくぼみがあり、表面には縦方向のしわがある。

・ブドウ属 *Vitis* sp ブドウ科

種子が検出された。黒色。大きさは約4mm程度。心臓形。腹面には中央に縦筋が走り、その両脇には楕円形に深くくぼんだ穴が存在する。背面には中央に「さじ」状の「へそ」があり、「へそ」回りはくぼんで

いる。

・カナムグラ *Humulus scandens* (Lour) Merrill クワ科

種子が検出された。黒褐色。側面観は円形、上面観は凸レンズ形。直径4mm程度。側面の一端に心形の「へそ」が存在する。種皮は薄く光沢がありやや硬い。表面は細かく不規則な凹凸がありざらつく。

・サンショウ *Zanthoxylum piperitum* DC ミカン科

果実が検出された。黒褐色。大きさは4mm程度。楕円形。表面には浅い不規則な網目模様がみられる。

・ミズキ *Corunus controversa* ミズキ科

核の破片が検出された。灰褐色。大きさは4mm程度。縦方向にややつぶれた球形。基部に大きな臍がある。縦方向に走る深い溝がみられる。

・クマノミズキ *Corunus macrophylla* Wallich ミズキ科

核の破片が検出された。灰褐色。大きさは3mm程度。縦方向にややつぶれた球形。基部に大きな臍がある。縦方向に走る浅い筋がみられる。

・イネ *Oryza sativa* L イネ科

胚乳が検出された。胚乳は炭化し、大きさは縦軸5mm、横軸3mm程度。胚が位置する部分は欠如し大きく窪んでいる。表面には縦軸に平行な隆起構造が数本認められる。

・メロン類 *Cucumis melo* L. cf. var. *makuwa* Makino ウリ科

種子が検出された。大きさは縦軸6mm程度。側面観は楕円形、上面観はやや偏平な楕円形。表面は比較的平滑。藤下(1980)による日本産の「メロン仲間」の研究成果からいえば、今回出土した形態ものはマクワウリやシロウリの範疇にはいる。

・ヒョウタン類 *Lagenaria siseraria* Standlay ウリ科

種子が検出された。果実片は黒褐色。肉厚で弾力がある。種子は褐色。長さ12mm程度。長楕円形をしており、縦軸方向に深いしわが数本存在する。

4. 考察

今回同定された種類の大部分は、可食植物をはじめ人間にとって有用なものばかりである。このような産状は、遺構内に自然に種実が埋積したのではなく、人為的にこれらが投棄されたことを示唆する。

オニグルミ・サンショウ・ブドウ・トチノキについては、いずれも可食植物であり、周囲の山林に自生するものである。したがって食用のための採取が考えられる。中でもトチノキは木灰などアルカリを用いた「あくぬき」技術が必要である。この技術は、これまでの調査により縄文時代後期頃に確立されたとみなされている(橋口, 1983)。なお、オニグルミやトチノキ属など子葉を食用とするものについては、皮が破損していることから、食用に利用された残渣を投棄した可能性もある。

モモ・スモモ・メロン類・ヒョウタン類・イネについては、栽培のため古い時代に渡来した植物であることから、栽培されていたことが考えられる。モモは一部縄文時代とされるものも知られているが、多く検出されるようになるのは弥生時代以降である(粉川, 1988)。今回検出されたモモの核は小型で丸く、古墳時代などの古い時代に多く検出される形質の範疇に入る。スモモについては、県内で更新世の化石が検出されているが(野尻湖植物グループ, 1984)、核の形態が異なっていることから、両者の関係は不明である。歴史時代のスモモが、野性のスモモを人為的に改良したものか、渡来したものであるかは今後の研究成果を待たなければならない。ヒョウタン類は縄文時代からその産出が知られ、メロン類は弥生時代以降を中心にその産出が知られている(粉川, 1988)。今回検出されたメロン類の種子の形質からすれば、当時栽培されていたものはマクワウリあるいはシロウリの仲間であるとみられ、他の古墳時代の遺跡でも普通

付一表4 遺構毎の検出状況

遺構	時代・遺構の性格	モモ	スモモ	オニグルミ	トチノキ	イネ	メロン類	ショウタン類	ブドウ属	カナムグラ	ハウノキ	サンショウ	クマノミズキ	ミズキ
S K1015※	中世井戸	△												
S K2744	古墳土坑	○		○		△								
S K2745	古墳土坑					○								
S K2746	古墳 "	△		▲		○	▲							
S K2747	古墳 "					○	▲							
S K2748	古墳 "	△												
S K2751	古墳 "			○										
S K2757	古墳 "					◎								
S K2759	古墳 "					◎	▲							
S K2761	不明					△								
S K2828	古墳土坑	△												
S K2831	古墳 "					▲								
S K2832	古墳 "	▲				◎	○		▲	▲		○		▲
S K2843	古墳 "					▲			▲					
S K2649※	中世井戸	△												
S K2063-A※	古墳土坑	△												
S K2635※	中世井戸	△												
S K2057※	古墳土坑	△												
S K2758	古墳 "					○								
S K2865※	古墳 "					△								
S K1084※	中世井戸	△												
S K2827	古墳土坑	▲				○	○		△			△	▲	▲
S K2827カ	古墳 "	△				◎	○		○	○	▲	○		
S K-Z 1	不明						△					△		
S K-Z 2	不明					▲								
S K-Z 4	不明					△								
S D1016※	古墳 祭祀域内面溝	○	△	△	△			○						
S D2018※	近世溝	△												
S D2001※	中世館の堀	▲		▲										

凡例

※：発掘調査時に目についた種実遺体を採取した遺構(無印の遺構は、整理調査時に篩別を行い種実遺体を採取した)

▲：僅かに検出(1個)、△：少ない(2~9個)、

○：多い(10~99)、◎：非常に多い(100個以上)

(編者註 遺構の性格については一部記載を変更した)

に産するものである(藤下、1980)。イネは、弥生時代以降に稲作が全国的に広がっている。

古墳時代土坑検出の種実遺体の全体的な特徴として、周囲の山林から採取可能な植物より栽培植物の方が多く、また個体数も多い。検出される組成は遺構毎に異なるが、これらが季節性などを反映しているかどうかは不明である。基本的にこれらの種実は秋に収穫されるものであるが、一部の種実は貯蔵が可能であることから、採取時期と投棄時期が異なっている可能性があるからである。

中世の遺構から検出された植物遺体は、古墳時代のものと比べて種類数も少なく大型のものが多い(付一表4)。中世の井戸などでは、発掘調査時に目についた種実遺体を適宜取り上げた例が多い。これに対し、古墳時代の土坑では、玉類などの摘出を目的とした採取土壌の篩別の際に採取された試料が多い。すなわち、採取方法が粗かった結果である可能性もある。なお、これらの種実は、遺構が廃絶された後の埋積過

程において投棄されたのであろう。いずれにしても、中世の遺構の覆土について水洗選別等を行えば、小型の種実遺体が検出される可能性はある。

古墳時代の遺構に関しても、採取方法の違いにより土坑毎に種類構成に差異が生じていることはありそうである。ただし、これらの種実遺体が人為的に投棄されたと見られることから、土坑毎の種類構成の違いが遺構の性格など、何らかの差を表している可能性もある。例えばS K 2757やS K 2759については、多くの炭化米が検出され、他の種類はほとんどみられない。米は大部分が澱粉質であるから、分解され易く土壌中には残りにくい。炭化米が多量に検出されたということは、人為的なイネの投棄・埋積により瞬間的に嫌氣的条件下にさらされたか、投棄前あるいは投棄時に火熱を受けたと考えられる。このような状況や、特定の種類（イネ）のみが投棄されたという点は、これらの遺構より出土した種実遺体の持つ特徴である。また、S K 2746・S K 2832・S K 2827・S D 1016などは、検出される種類構成が他の遺構と比較して多い。これらもまた、投棄前あるいは投棄時に火熱を受けたと考えられる。このように、古墳時代の祭祀に関連するとされる土坑の中には、特定の種類（イネ・モモなど）のみが検出されるものや多くの種類が検出されるものなどの特徴を示すものがみられる。これらの産状が一般の土坑との性格の差を示すものであるのかどうかなどの点、あるいは検出される種類の多寡が土坑の性格や祭祀の内容・季節の差につながるのかなどの点については、今後の検討課題といわざるを得ない。本試料については、少なくとも検出された土器の器種組成の特徴把握や、土器・装身具類・鏡など各種遺物との出土位置関係の吟味、さらに種子の出土状況（土器内にまとまっていたなど）の再確認が必要であろう。

〈文献〉

- 藤下典之(1980)本邦各地の遺跡から出土したウリ科栽培植物の遺体について 一特に遺跡の編年と*Cucumis melo*の種子の大きさ一。考古学・美術史の自然科学的研究、p.223-233、日本学術振興会
- 橋口尚武(1983)調理。縄文文化の研究2 「生業」、p.63-76、雄山閣。
- 粉川昭平(1988)穀物以外の植物食。弥生文化の研究2 「生業」、p.112-115、雄山閣。
- 野尻湖植物グループ(1984)野尻湖層と貫ノ木層の植物遺体。地団研専報27、p.107-116。

追加分析（編者註）

はじめに

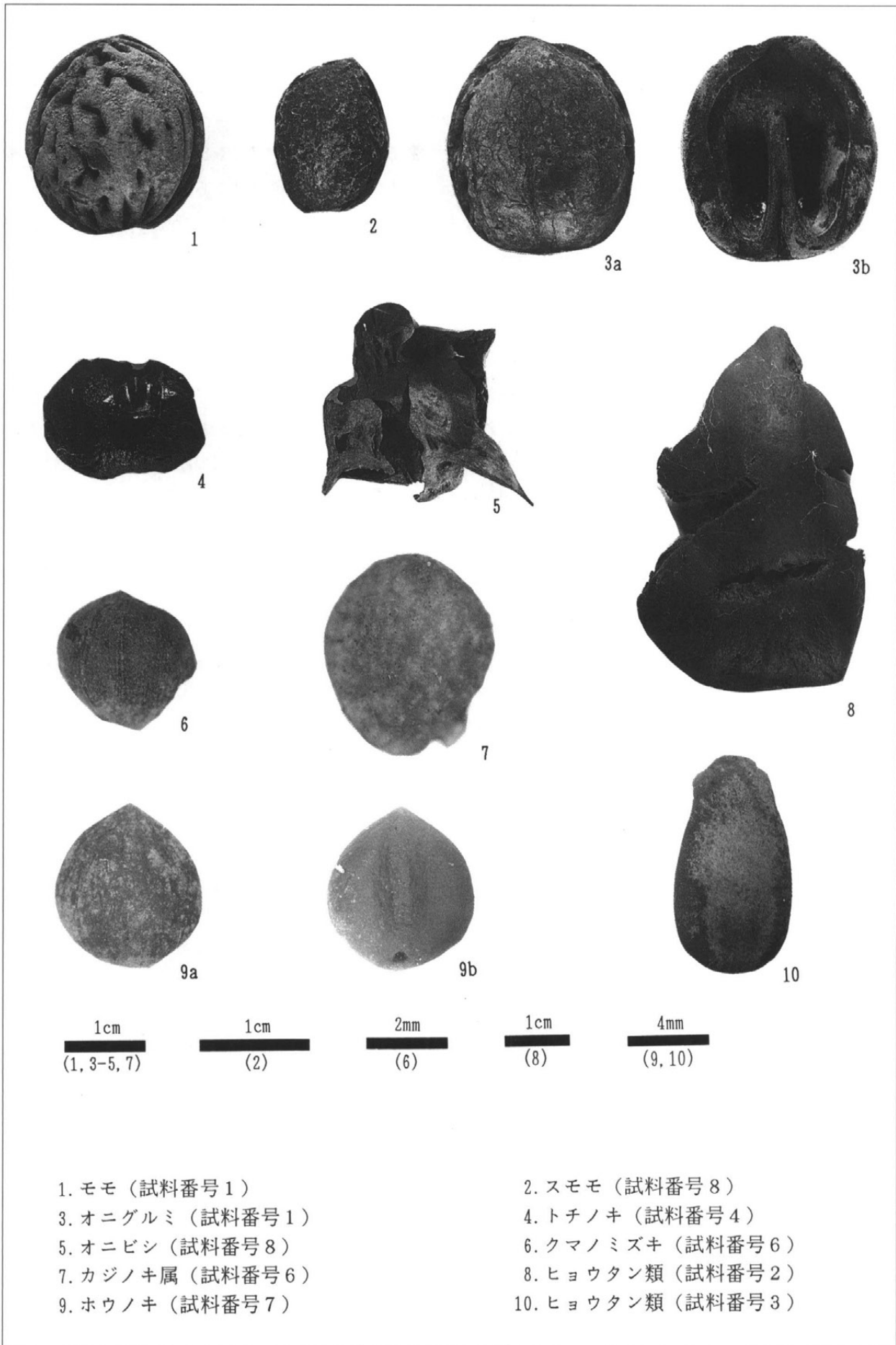
石川条里遺跡では、これまで多くの自然科学分析（花粉分析、珪藻分析、種実同定など）を当社は行った。それによって、遺跡をとりまく自然環境や植物利用などについて徐々に明らかになってきた。今回の調査は、古墳時代の溝（S D 1016）を対象として、その中から検出されて種実遺体の同定を行うことによって、当時の植物利用に関する情報を得ることを目的とする。

1. 試料

試料は、S D 1016から検出された種実遺体11試料である。試料の詳細については、結果と合わせて表1に示す。そのうち試料番号1～8は複数個体の種実が一括されていた。

2. 分析方法

肉眼もしくは双眼実体顕微鏡下でその形態的特徴から種類を同定した。



付-7図 種実写真3

3. 結果

結果を表3に示す。以下に前報では検出されなかった種類の形態的特徴について記す。

- ・カジノキ属 *Broussonetia* sp. クワ科

種子が検出された。褐色。大きさは2 mm程度。倒卵型、表面にはいぼ状の模様が粗く配列し、側面の隅に突起がみられる。

- ・オニビシ *Trapa natans* L. var. *japonica* Nakai ヒシ科ヒシ属

果実が検出された。偏平で倒三角形を呈し、大きさは3 cm程度。物理的に変形し、つぶれている。果実の刺は4本。

4. 考察

今回検出されたものは、オニビシとカジノキ属を除けば、いずれも前回の報告で検出された種類であるため、検出された個々の種類に関する詳細は前報を参照されたい。ここでは今回新たに見つかった種類についてのみ、その特徴について述べる。

オニビシは比較的富栄養な池沼に生育する種類で、その子葉は食用になる。石川条里をはじめとする長野盆地の後背湿地に分布する遺跡（川田条里，更埴条里など）では、周囲に池沼などのような水域環境が存在していたことが花粉分析などの結果から明らかにされている。また、実際ヒシ属の花粉化石が検出された地点もある。このことからオニビシは周辺で容易に入手可能であったと考えられ、当時採取され食料に利用されていたと推測される。

カジノキ属は和紙の原料として有名なコウゾを含む属である。しかし、ヒメコウゾなど野生の近縁種も存在するため、栽培に由来するか否かを結論づけることはできない。カジノキ属は樹皮からとる繊維を利用するほか、果実も食用となることから、当時いろいろな用途で利用されていたと考えられる。

今回検出されたもののうち、クマノミズキとハウノキは、現在周辺の山野に普通にみられる種類である。このことから、当時も周辺に生育していたと推測され、検出された化石は生育地から遺跡内に流れ混んできたものと考えられる。ヒトに有用な植物のうち、オニグルミ、トチノキ、オニビシ、カジノキについて周辺の山野から採取したものを利用していただと考えられる。また、モモ、スモモ、ヒョウタン類については、当時周辺で栽培され利用されていたものと推測される。

付一表5 種実同定結果 ※出土遺構は編者が追加

試料番号	出土遺構	種類（カッコ内は個体数）
1	S D 1016⑦-2区 II E Q 18	モモ(7) オニグルミ(3)
2	S D 1016⑦-2区一括	ヒョウタンの皮(3)
3	S D 1016⑦-2区 II J T 01	モモ(2) オニグルミ(1) ヒョウタン(20)
4	S D 1016⑦-2区 II E S 17	モモ(1) トチノキ(5)
5	S D 1016⑩-1区 灰白色層	コブシ(1) クマズミノキ(6) 他は不明
6	S D 1016⑩-1区東ベルト灰白色層	クマズミノキ(約100) カジノキ属(16)
7	S D 1016⑩-1区 V V S 07	ハウノキ(1) 同定不能(1)
8	S D 1016⑦-2区一括	スモモ(1) オニビシ(1)
9	S D 1016⑩-1区 V V S 07	ヒシ属(1)
10	S D 1016⑩-1区 V V S 08 黒色粘土	ヒシ属(1)
11	S D 1016⑩-1区 一括	ヒシ属(1)

第3節 石川糸里（微高地）遺跡（長野市）出土の古墳時代ならびに中世の人骨と獣骨

编者註 石川糸里遺跡出土の古墳時代・中世遺構出土の骨類についての報告である。出土遺構番号の記載を誤ったまま分析に供したので、本報告では修正を加えた。

京都大学霊長類研究所
茂原 信生

I) はじめに

石川糸里（微高地）遺跡は長野市篠ノ井塩崎にある遺跡で、古墳時代から中世にかけての遺跡である。長野県埋蔵文化財センターによる平成元年の調査の際に1頭分のイヌを含む獣骨、および人骨と歯が出土した。本報告はこれらの自然遺物についての報告である。

出土した骨には、ヒトの歯がほぼ1体分混在していた。それ以外は獣骨である。出土した部位を表1（土坑別）、表2（種別）に示した。また、イヌの骨格は重複する部分はなく1頭分と考えられ、それぞれの骨の大きさも同一固体のものと考えられる。おもに焼骨が出土している土坑は古墳時代中期と考えられており、イヌの骨格が出土したのは中世の井戸跡である。

II) 人骨と歯

1体分と考えられる頭蓋骨片、ほぼ1体分の30本（S K2616）と上顎の右第2あるいは3大臼歯の歯冠（S K1020）が出土している。いずれも中世のものである。それぞれの出土位置も異なるし、上顎右第2あるいは3大臼歯は重複しているので、全体では3体分である。

S K1020（中世）

遠心面に隣接面磨耗は見られない。咬耗は進んでおらず、近心頬側咬頭（パラコーン）の一部にごく小さな象牙質の露出があるだけである。咬耗度はモルナー（1971）の3度である。したがって、高齢ではなく、青年から壮年ぐらいであろう。性別は不明である。

歯の大きさは近遠心径が8.8mm、頬舌径が10.8mmである。現代日本人の男性の平均値8.94mmと女性の平均値8.86mm（権田；1959）よりもやや小さめである。頬舌径は男性平均値10.79mmと変わらず、女性の平均値10.50mmよりやや小さい。歯の大きさでは性判定は出来なかった。

S K2015（中世）

1固体のものと思われる頭蓋骨片が出土している。保存状態は悪く、細片化するとともに脆く、接着復元できるものはごく限られている。確認できる部位は前頭骨左眼窩部、左側頭骨下顎窩、頭頂骨などである。前頭骨は比較的厚目である。子供ではなさそうであるが、詳細な年齢や性別は不明である。

S K2616（中世）

木棺墓から出土したものである。上顎左第3大臼歯以外はすべて出土している。歯の大きさは、現代人男性（権田；1959）よりも大きいものはほとんどなく、現代人女性の平均値を下回るものが多く、とくに犬歯が小さい（付一表8-1・2）。縄文時代の北村遺跡人（茂原；1993）の男性よりは大きいものが多い。下顎の大臼歯の咬頭と溝の型は、第1大臼歯が左右ともY5型、第2大臼歯が+4型、第3大臼歯は退化傾向が著しく、パターンは不明である。残っている第3大臼歯は、咬耗がまったく見られないので、歯から推測される年齢は18歳以下であり、さらに第2大臼歯には第3大臼歯との隣接面磨耗はなく、象牙質の

付一表6：石川条里遺跡出土の動物骨（出土土坑別）

（F：破片、C：完形）

グリッド	No.	補番	種類	骨名	状態	左右	上下	部位	備考	
SD1007	EF	11		ニホンジカ	角	F	生	不明	角？	
SD1007	EF	11		ニホンジカ	角	F	生	不明	角？	
SD1008				ウマ	歯	F	生	左 上	臼歯片	
SD1016	BO	13	125	ニホンジカ	角	F	生	不明	角？	
SD1016	BO	13	126	1	ニホンジカ	距骨	C	生	右	
SD1016	BO	13	126	2	ニホンジカ	脛骨	F	生	右	遠位端
SD1016	BO	13	126	3	ニホンジカ	距骨	C	生	右	遠位端
SD1016	BO	13	126	4	ニホンジカ	腰椎	F	生	右	椎弓部
SD1016	EP	12		ニホンジカ	中足骨	F	生	右	遠位部	
SD1016	FM	1		ニホンジカ	大腿骨	F	生	左	近位部	
SD1016	WD	16		ニホンジカ	角	F	生	不明	角？	
SD1016	WA	12		イノシシ	上腕骨	F	生	左	遠位部	
SD1016	WG	12	褐色土	イノシシ	上腕骨	F	生	左	遠位半	
SD1016	WG	12	褐色土	イノシシ	頬骨	F	生	左	頬骨弓部	
SD1016	WG	12	褐色土	ニホンジカ	下顎骨	F	生	右	大白歯部	M3あり
SD1016	WG	12	褐色土	ニホンジカ	寛骨	F	生	右	寛骨臼部（腸骨）	
SD1016	WG	12	褐色土	ニホンジカ	胸椎	F	生	右	椎体+椎弓	
SD1016	灰粘B			イノシシ	脛骨	F	生	右	遠位部	
SD1016	⑤-1区		127	ニホンジカ	角	F	生	不明	角？	
SD1016	⑤-1区			カモシカ	中手骨	F	生	不明	遠位部	
SD1016				ニホンジカ	角	F	生	不明		
SD1016				ニホンジカ	角	F	生	不明	角？	
SD1016				ニホンジカ	角	F	生	不明	やや大きめのもの3点	
SD1016	⑦-2区		P172	ニホンジカ	前頭骨	F	生	右	角座部	
SD1016	ES	17		ニホンジカ	前頭骨	F	生	左	角座部	
SD2007				ニホンジカ	角片	F	焼骨	不明	加工品	
SK1088				イヌ	全身骨格	C	生		手足骨欠多し	
SK1020				ヒト	歯	C	生	右 上	M2あるいはM3	
SK1037				ニホンジカ	角片	F	焼骨	不明	2点	
SK2048				ニホンジカ	角片	F	焼骨	不明		
SK2051				ニホンジカ	歯片	F	生	不明	破片混在	
SK2147				イノシシ	歯片	F	生	不明	不明	
SK2156				ウマ	歯片	F	生	右 下	臼歯	
SK2757				ニホンジカ	末節骨	F	焼骨	不明	小白歯	
SK2759				ニホンジカ	角片	F	焼骨	不明	近位部	
SK2827				ニホンジカ	歯片	F	生	不明	破片多数	
SK2827				ニホンジカ	歯片	F	生	不明	破片混在	
SK2827				ニホンジカ	歯片	F	生	不明	破片混在	
SK2827				ニホンジカ	歯片	F	生	不明	破片混在	
SK2878				ウマ	歯片	F	生	右 上	破片混在	
SQ2016	RM	2		クマ	尺骨	F	焼骨	右	切痕部	
SQ2016	RN	2	1	ニホンジカ	角片	F	焼骨	不明	切痕あり	
SQ2016	RN	2	2	ニホンジカ	角片	F	焼骨	不明		
SQ2016	RN	2	3	ニホンジカ	角片	F	焼骨	不明		
SQ2016	RN	2	4	ニホンジカ	角片	F	焼骨	不明		
SQ2016	RN	2	5	ニホンジカ	角片	F	焼骨	不明		
SQ2016	RN	2	6	イノシシ	基節骨	F	焼骨	不明	遠位半	
SQ2016	RN	3		ニホンジカ	角	F	生	不明	角座付近	
SQ2016				ニホンジカ	橈骨	F	焼骨	右	※註1	
SQ2016				ニホンジカ	脛骨	F	焼骨	右	遠位端	
SQ2016				イノシシ	側頭骨	F	焼骨	右	下顎窩	
SQ2016				ニホンジカ	中節骨	F	焼骨	不明	近位端	
トレンチ一括2				ニホンジカ	中足骨	F	焼骨	不明	遠位部外側関節	

註1 出土遺構の記載誤りや不備は修正・加筆した。

付一表7：石川条里遺跡出土の動物骨（出土動物種別）

(F：破片、C：完形)

		No.	補番	種 類	骨 名	状 態	左	右	上	下	部 位	備 考
SQ2016				イノシシ	側頭骨	F	焼骨	右			下顎窩	
SD1016	WG	12	褐色土	イノシシ	頬骨	F	生	左			頬骨弓部	
SK2147				イノシシ	歯片	F	生	不明	不明		臼歯	
SD1016	WA	12		イノシシ	上腕骨	F	生	左			遠位部	
SD1016	WG	12	褐色土	イノシシ	上腕骨	F	生	左			遠位半	
SQ2016	RN	2		イノシシ	基節骨	F	焼骨	不明			遠位半	
SD1016	灰粘B			イノシシ	脛骨	F	生	右			遠位部	
SD1016	㊦-2区			ニホンジカ	前頭骨	F	生	右			角座部	
SD1016	ES			ニホンジカ	前頭骨	F	生	左			角座部	
SD1016	WG	12	褐色土	ニホンジカ	下顎骨	F	生	右			大白歯部	M3
SD1007	EF	11		ニホンジカ	角	F	生	不明				角?
SD1007	EF	11		ニホンジカ	角	F	生	不明				角?
SD1016	BO	13	125	ニホンジカ	角	F	生	不明				角?
SD1016	WD	16		ニホンジカ	角	F	生	不明				角?
SQ2016	RN	3		ニホンジカ	角	F	生	不明			角座付近	
SD1016			127	ニホンジカ	角	F	生	不明				角?
SD1016				ニホンジカ	角	F	生	不明				角?
SD1016				ニホンジカ	角	F	生	不明				角?
SD1016				ニホンジカ	角	F	生	不明				やや大きめのもの3点
SD1016				ニホンジカ	角	F	生	不明				
SD2007				ニホンジカ	角片	F	焼骨	不明				加工品
SK1037				ニホンジカ	角片	F	焼骨	不明				2点
SK2048				ニホンジカ	角片	F	焼骨	不明				破片多数
SK2759				ニホンジカ	角片	F	焼骨	不明				切痕あり
SQ2016	RN	2	1	ニホンジカ	角片	F	焼骨	不明				
SQ2016	RN	2	2	ニホンジカ	角片	F	焼骨	不明				
SQ2016	RN	2	3	ニホンジカ	角片	F	焼骨	不明				
SQ2016	RN	2	4	ニホンジカ	角片	F	焼骨	不明				
SQ2016	RN	2	5	ニホンジカ	角片	F	焼骨	不明				
SK2827				ニホンジカ	歯片	F	生	不明	不明			破片混在
SK2827				ニホンジカ	歯片	F	生	不明	不明			破片混在
SK2827				ニホンジカ	歯片	F	生	不明	不明			破片混在
SK2051				ニホンジカ	歯片	F	生	不明	不明			破片混在
SD1016	WG	12	褐色土	ニホンジカ	胸椎	F	生				椎体+椎弓	
SD1016	BO	13	126	ニホンジカ	腰椎	F	生				椎弓部	
SQ2016				ニホンジカ	橈骨	F	焼骨	右				
SD1016	WG	12	褐色土	ニホンジカ	寛骨	F	生	右			寛骨臼部(腸骨)	
SD1016	FM	1		ニホンジカ	大腿骨	F	生	左			近位部	
SD1016	BO	13	126	ニホンジカ	脛骨	F	生	右			遠位端	126-1と同一個体
SQ2016				ニホンジカ	脛骨	F	焼骨	右			遠位端	成獣
SD1016	BO	13	126	ニホンジカ	距骨	C	生	右				
SD1016	BO	13	126	ニホンジカ	距骨	C	生	右			遠位端	
SQ2016				ニホンジカ	中節骨	F	焼骨	不明			近位端	
SD1016	EP	12		ニホンジカ	中足骨	F	生	右			遠位部	
北側溝内一括2				ニホンジカ	中足骨	F	焼骨	不明			遠位部外側関節	
SK2757				ニホンジカ	末節骨	F	焼骨	不明			近位部	
SD1016	㊦-1区			カモシカ	中手骨	F	生	不明			遠位部	
SD1008				ウマ	歯	F	生	左	上		臼歯片	小白歯あるいは大白歯
SK2156				ウマ	歯片	F	生	右	下		小白歯	
SK2878				ウマ	歯片	F	生	右	上		P2頰側エナメル質	破片混在
SQ2016	RM	2		クマ	尺骨	F	焼骨	右			切痕部	
SK1088				イヌ	全身骨格	C	生					手足骨欠多し
SK1020				ヒト	歯	C	生	右	上		M2あるいはM3	

露出はないが咬頭がかなり咬耗しているので、16・7歳程度と考えられる。咬耗度は上顎中切歯・下顎の切歯・上下の左第1大臼歯にはわずかに象牙質の露出が見られるのでモルナー（1971）の3であり、それ以外はモルナーの2である。第3大臼歯には咬耗はないので1である。エナメル質減形成や齶歯は見られない。

以上の結果から、この歯の持ち主は16～17歳の女性であろうと推定される。

III) 出土した獣骨

出土したものはいずれも哺乳類の骨で、焼かれたものと焼かれていないものが出土している。種名が同定されたのは以下の通り、3目5科6種である。

哺乳綱 Mammalia

食肉目 Carnivora

イヌ科 Canidae

イエイヌ *Canis familiaris*

クマ科 Ursidae

クマ *Selenarctos thibetanus*

奇蹄目 Perrisodactyla

ウマ科 Equidae

ウマ *Equus caballus*

偶蹄目 Artiodactyla

シカ科 Cervidae

ニホンジカ *Cervus nippon*

イノシシ *Sus scrofa*

ウシ科 Bovidae

カモシカ *Capricornis crispus*

IV) 各土坑別の出土骨の特徴

S D1016は祭祀域を区画する溝であり、S Kは祭祀に関連する土坑、S Q2016は祭祀域の土器集中部である。獣骨の多くは古墳時代前期末のものと考えられている。各土坑から出土した骨に関して、順に記載する（付-9～11図）。

a) 獣骨

1) S D1007（古墳）

ニホンジカの角と思われるものが2点確認された。破片である。

2) S D1008（中世）

ウマの上顎小白歯、あるいは大臼歯の近心部である。比較的新しい時代のものの可能性もある。咬耗はやや進んでおり、若い固体ではない。

3) S D1016（古墳）

もっとも多く獣骨が出土している溝跡である。

シカ

シカの角片が16点出土している。やや大きめの破片が含まれている。いずれも焼けていない（写真1-b）。どの角片も表面はすべて脱落している。切断痕はみられない。角座を持った前頭骨が出土している。

右下顎骨が出土しているが、第3大臼歯の頬側部が植立している（付-9図-a）。下顎骨体は厚い。

右距骨が2個とそれと関節した脛骨遠位部（写真1-f、g）、左右不明の距骨が1点、踵骨が右1点、左2点、腰椎の椎弓の一部（付-9図-h）も出土している。焼けていない。脛骨の遠位端が関節したまま出土しているものは脛骨の骨端がはずれたものであるから、若い固体であろう。これらは表面が荒れていて詳細な形態は不明である。

他に、右寛骨臼部、胸椎（付-9図-i）、橈骨の遠位骨端などが出土している。

イノシシ

左頬骨が出土している（付-10図-e）。焼けていない。四肢骨では、左上腕骨遠位部、右脛骨遠位端が出土している（付-10図-c、d）。上腕骨は焼けていない。骨端は癒合しているので成獣であろう。右脛骨遠位端も焼けておらず、表面は脱落している（付-10図-b）。この骨端は癒合している成獣であるがあまり大きな個体ではないと思われる。

カモシカ

カモシカの右中手骨遠位部である（付-11図-c）。骨端は癒合している。焼けておらず、他の骨と同様に表面はかなり破損している。

4) S D2007（中世）

シカの角片が出土している。焼かれている。加工品であろう。

5) S K1033（古墳）

ニホンジカの破損した歯が出土している。歯種は不明である。

6) S K1037（古墳）

シカの角片が出土している。

7) S K2048（古墳）

数センチのシカの角片が出土している。切痕は見られない。

8) S K2051（古墳）

ニホンジカの歯の破片が出土している。歯種は不明である。

9) S K2147（古墳）

イノシシの歯片が出土している。焼けていない。量的には1本分にも足りない。

10) S K2156（古墳）

ウマの下顎右小臼歯（歯種は不明）の中央部である（付-11図-b）。歯根部までがさほどないので若くはないと思われる。

11) S K2193（中世）

井戸跡からウマの上顎歯が1本出土している。保存状態は非常によい。井戸からウマの歯が出土したりすることは比較的よくあることであり、祭祀によるものと考えられている。

12) S K2244（古墳）

ニホンジカの角が出土している。加工品である。

13) S K2401（古墳）

ニホンジカの下顎小臼歯部と思われる部位と歯が出土している。保存状態は非常に悪く、表面はすべて脱落しているものと思われる。

14) S K2757（古墳）

焼けたシカの末節骨近位部が出土している。切痕は見られない。成獣の末節骨であろう。

15) S K2759（古墳）

数ミリの大きさの焼けたシカの角片である。加工痕は認められない。

16) S K2827（古墳）

シカの歯片が数点出土している。あわせても1本分にも足りない量である。焼けた部分と焼けていない部分がある。原因は不明である。

17) S K2878（古墳）

ウマの上顎右第2小臼歯の頬側部のエナメル質である。歯の大きさから判断して、頭蓋最大長が450mm程度のウマと思われる（付-11図-a）。

18) S Q2007（古墳）

加工品である。ただし、削り跡が明瞭であり仕上げはしていない。シカの角であろうと思われる。焼けている。

19) S Q2016（古墳）

数センチの大きさの5片のシカの角が出土している。うち2片（1片は分岐部）に切痕が見られる（付-9図-b~e）。これらはすべて焼けている。太さから見てさほど若い固体ではなさそうである。

クマの右尺骨近位関節（切痕部）と思われる焼けた骨が出土している（付-11図-d）。ツキノワグマの尺骨大である。人工痕はない。他にイノシシの基節骨遠位半が出土している。前肢か後肢かは判定できない。成獣のものである。また、イノシシの焼けた側頭骨部（下顎窩）とシカの中節骨の近位部が出土している。

20) トレンチ一括

シカの中足骨の遠位外側関節が含まれている。焼骨である（付-9図-k）。大きさは現生のニホンジカのオスと比較しても大きめである。成獣であったろう。

21) S D2019（集石部）（古代）

ウマの歯の破片が出土している。臼歯であるが歯種は不明である。

b) 加工品

出土遺物の中には獣骨あるいはシカの角で出来た加工品が多く含まれている。これらはいずれも焼けており、削り跡が明瞭なものが多いので、製作の途中に遺棄されたものと思われる。これらが出土している位置を記載しておく。種名や部位は特定できないものが多いが、多くはシカの角である。

S D1016、2016

S K2047、2244、2746、2747、2751、2756、2757、

2759、2827、2865、2899

S Q2007、2016

V) 出土動物遺存体の全体的特徴

出土動物骨のうちニホンジカの出土量がもっとも多く、次いでイノシシの出土量が多い。カモシカは1点、ウマは5点、クマは1点、およびイヌがほぼ1体分である。ニホンジカでは角片が多く、角片の中には切痕がみられるものがある。出土している加工品の原料の多くはシカの角であると考えられる。

同定された骨は焼かれていない骨が多いが、焼かれた骨も出土している。焼かれた骨のなかには細く削られた加工物がかなり出土している。刃物で形成された面が確認でき、なめらかに磨かれていない。したがって、なんらかの理由で製作中に遺棄されたものであろう。

VI) イヌの骨

付一表 8：石川条里遺跡出土のイヌ(SK)の出土部位リスト
(中世井戸からの出土)

出土部位	左右	備 考
体幹骨	胸椎	1個
	腰椎	2個
	肋骨	15本
頭蓋骨	頭蓋	鼻骨、後頭部欠、左右I1~P3、右M1
	下顎骨	I1、I2、P3欠、P1脱落
上肢骨	下顎骨	I1、I2、P3欠
	肩甲骨	右
	上腕骨	右
	上腕骨	左
	橈骨	右
	橈骨	左
	尺骨	左
下肢骨	寛骨	右
	寛骨	左
	大腿骨	右
	大腿骨	左
	脛骨	右
	脛骨	左
	腓骨	左
陰莖骨		オス

出土した部位に重複する部分はない(付一表9、8図)。頭蓋骨の縫合は完全には癒合していないが(付一12図)、四肢骨の骨端は化骨している(付一13図)。歯の咬耗は進んでいない。同じぐらいの縄文時代犬と比べると咬耗の少なさが顕著である。狩猟に用いられたようなイヌではなかろう。陰莖骨が出土しているのでオスである。計測は斎藤(1963)の方法にしたがった。

頭蓋骨は後頭部、鼻骨などが欠けている。上顎第2大白歯や下顎の第3大白歯が萌出し、さらに磨耗しているので生後1年以上の成獣である。下顎の右第1小白歯は生前に脱落しているが他の歯はすべて植立していた。頭蓋は頑丈そうである。頬骨弓も太い。左右の鼓胞の間の頸最長筋の付着部は

付一表 9：石川条里遺跡出土の中世犬の頭蓋骨 計測値と比較資料(単位はmm)
(*は推定値あるいは片側から計算した値)

	石川条里 中世	田柄貝塚 (縄文後~晩期)		鎌倉材木座 中世(鎌倉)		朝日城址 中世		豊明 中世	シバイヌ 現世	
	♂	♂(Ave)	♀(Ave)	♂(Ave)	♀(Ave)	♂(Ave)	♀(Ave)	♂	♂(Ave)	♀(Ave)
1: 頭蓋最大長(pr-i)		163.0	152.3	175.3	158.3	179	157.3	172.2	155.5	145.3
2: 基底全長(pr-)		152.6	141.9	165.6	151.1	167.3	150	161.1	147.9	137.9
3: 頬骨弓幅(zy-zy)	99*	88.3	85.2	96.1	90.2	100.3	91	101	94.8	88.1
4: 頭脳蓋長(na-i)		87.2	82.8	95.9	86.1	99.9	86.5	94.6	86.1	80.8
5: nasio-basion(na-ba)	93*	84.2	79.0	91.6		92.7	84.7		84.2	79.1
6: 頭蓋幅(1)(eu-eu)	55*	52.4	51.6	54.1	50.7	54.8	52	53.4	50.1	48.3
7: 頭蓋高(1)(br-ho)	54*	50	45	48.8	42	51.5	47.3	49	49	45
8: basion-bregma高(ba-br)		62.0	58.9	66.9	58	70.9	64.2	64.9	65.0	61.4
9: 最小前頭幅(ft-ft)	37*	31.7	30.0	33.3	29.7	35	32.1	36.7	29.5	28.2
10: 前頭骨頬骨突起端幅(ect-ect)	47.9	42.8	41.1	44.2	40.5	46.7	41.9	50.2	43.5	39.3
11: 後頭三角幅(ot-ot)	59*	59.5	57.7	63.7	57.4	64.8	59.2	62.7	55.2	51.6
12: 両耳幅(au-au)	57*	59.1	56.7	61.5	58.0	64	58.3	61.8	54.2	50.7
13: 最小眼窩間幅(ent-ent)	32.6	28.7	27.6	31.6	27.7	28.2	27.4	32.7	28.7	25.4
14: 顔長(pr-na)	83.0	79.4	74.7	84.2	73.4	83.6	75.3	83.2	74.6	69.4
15: 吻長(1)(pr-o.a)	74.9	68.3	64.6	74.8	66.7	75.2	66	71	65.0	60.1
16: 吻幅(犬歯部)	35*	34.5	30.8	36.5	32.5	37.7	33.1	33.1	31.5	28.9
17: 吻高(na-)	39.6	39	36	41	35.5	40	36.7	40	34	32
18: 鼻骨凹陷深	5.8*	5.0	3.4	4	3.7	5.8	4.3	5.1	6.4	5.5
19: 硬口蓋長(pr-sta)	80.1	78.5	72.9	86.2		85.6	78.1	79.5	74.9	70.3
20: 硬口蓋最大幅	57.1	57.4	53.7	60.2	56.6	61.9	57.2	60.5	59.2	55.2
21: 下顎骨全長(1)(id-goc)	126.0	118.5	112.2	127.9	117.9			125.4	114.1	107.0
22: (2)(id-c.mid)	124.7	117.4	110.6	129	115.6	131.4	116.9	125.5	114.2	107.0
23: 下顎枝高	49.9	44.3	44.3	52	47.3	55.3	47.9	50.9	44.6	41.3
24: 下顎枝幅(最小値)	32.0	29.3	27.2	33.7	29.1	30.3	27.8	30.8	27.7	25.5
25: 下顎体高(M1の中央)	24.2	22.4	20.5	24.9	22.3	22.5	19.7	21.8	18.9	17.2
26: 下顎体厚(M1中央下方)	11.9	10.9	9.8	11.4	9.9	11.6	10	9.8	9.1	8.2
27: 咬筋窩深(下顎枝幅位)	5.7	7.1	6.5	8.3	7	7	5.9	6.9	5.8	5.3
横頭顯示数(3/6)	180	168.5	165.1	177.6	177.9	183.1	174.9	189.1	189.4	182.7
眼窩後顯示数(9/6)	67.27	60.5	58.1	61.6	58.6	63.9	61.8	68.7	59.0	58.3
顔面顯示数(14/3)	83.84	89.9	87.7	87.6	81.4	83.5	82.7	82.4	78.8	78.8
鼻骨凹陷顯示数(18/17)	14.65	12.9	9.6	9.8	10.4	14.5	11.7	12.8	18.7	17.4
口蓋顯示数(20/19)	71.29	73.2	73.7	69.8		72.3	73.2	76.1	79.2	78.6
下顎体厚高顯示数(26/25)	49.17	48.5	47.8	45.8	44.4	51.6	50.8	45.0	48.3	47.7

発達して左右が合している。口蓋の最後部は全体が前に凸になっている。犬歯は歯槽から判断して頬舌径が厚く、犬歯部の吻幅も大きい。下顎骨も現生のシバイヌよりはるかに厚い。下顎骨の咬筋付着部の下縁は純で、咬筋窩はさほど深くない。下顎底は下に凸の曲線である。

下顎骨長（顎）が125mmで、長谷部（1952）の型区分では中級犬のもっとも小さいものに属している（表5）。山内（1958）の体高推定式を用いるとこのイヌの体高は約45cmと推測される。

歯の大きさは現生のシバイヌよりやや大きめである（付一表10、11）。しかし、大臼歯列の長さは相対的に小さめである。

四肢骨はさほど頑丈な印象は受けない（付一表12）。四肢長骨の骨端はすべて癒合を完了している。四肢骨はシバイヌや縄文時代犬よりはかなり長い、頑丈さは縄文時代犬より劣っており、現生のシバイヌよりは頑丈である。

石川条里遺跡出土のイヌは、現生のシバイヌや縄文時代犬（オスは中小級犬）よりはやや大きめで、中世の鎌倉材木座出土のイヌのオスや同じ中世の朝日城址出土のイヌのオスと同じ位の大きさである。すなわち、頭蓋骨最大長が170～180mm程度のものであろう。中世犬としては鎌倉材木座犬よりも幅径の要素が大きめであるが、顔面のいわゆるストップ（窪み）は大きく、現生犬に近い。また、下顎体は厚いが筋の発達はさほどではない。縄文時代のイヌに比べると一回り大きく、全体的には中世犬の特徴を示していると言えよう。長野県から縄文犬の報告はある（宮尾・他；1987）が、中世犬が詳しく報告されている例はない。この個体は長野県の中世のイヌが、日本の他の地域の中世犬とさほど異なっていないことを示す貴重な資料である。今後、いろいろな時代のイヌが長野県の遺跡から発掘されることによって信州シバとして現代に伝えられている日本在来犬のルーツを探ることが可能になることが期待される。

参考文献

- 権田和良（1959）：歯の大きさの性差について。人類学雑誌、43(1)：151-163。
- 長谷部言人（1952）：犬骨。埋蔵文化財発掘調査報告第一号「吉胡貝塚」、文化財保護委員会、146-150。
- 宮尾嶽雄・西沢寿晃・花村肇（1987）：早期縄文時代長野県栃原岩陰遺跡出土の哺乳動物。第6報 イヌおよび中・小型食肉類。長野県考古学会誌53：24-38。
- Molnar, S. (1971) : Human Tooth Wear, Tooth Function and Cultural Variability. Amer. J. Phys. Anthropol., 34 : 175-190.
- 斎藤弘吉（1963）：犬科動物骨格計測法。私家版（東京）：1-138。
- 茂原信生（1993）：北村遺跡出土の人骨の形質。長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書、14、「北村遺跡」、259-402
- 山内忠平（1958）：犬における骨長より体高の推定法。鹿児島大学農学部学術報告、No.7：125-131。

付一表10：石川条里遺跡出土犬の上顎歯の計測値と比較資料（単位はmm）

			中世	縄文		中世	現生			
			石川条里	田柄貝塚		豊明城址	シバイヌ			
			♂	♂	♀	♂	♂	SD	♀	SD
1	I 1	近遠心径		4.5	4.3		4.3	0.23	4.0	0.30
2		頬舌径		4.4	3.9		4.7	0.28	4.3	0.27
3	I 2	近遠心径		5.2	4.9	4.8	5.1	0.35	4.8	0.31
4		頬舌径		4.6	4.3	4.8	5.2	0.26	4.8	0.27
5	I 3	近遠心径		6.0	6.1	4.7	5.2	0.30	4.7	0.33
6		頬舌径		4.5	4.2	6.2	6.2	0.28	5.6	0.47
7	C	近遠心径		9.3	8.4	9.4	9.1	0.64	8.3	0.61
8		頬舌径		5.3	4.7	5.3	5.3	0.37	4.7	0.43
9	P 1	近遠心径		4.8	4.8	4.6	5.3	0.33	5.0	0.39
10		頬舌径		3.4	3.3	3.3	3.7	0.15	3.4	0.22
11	P 2	近遠心径		8.3	8.2	8.3	8.2	0.86	7.4	0.67
12		頬舌径		3.5	3.3	3.6	4.0	0.24	3.6	0.26
13	P 3	近遠心径		10.4	10.0	10.4	10.8	0.55	9.8	0.48
14		頬舌径		4.4	4.1	4.2	4.9	0.41	4.5	0.40
15	P 4	最大近遠心径	17.5	17.9	16.7	17.2	17.6	0.78	16.3	0.75
16		外側近遠心径	17.5	17.4	16.6	16.3	16.8	0.58	15.7	0.66
17		頬舌径	9.6	9.1	8.3	9.3	9.5	0.42	8.6	0.49
18	M 1	近遠心径	10.8	11.2	10.9	10.9	11.1	0.55	10.4	0.56
19		最大頬舌径		15.7	14.9	14.9	14.9	0.72	14.1	0.76
20		頬舌径		13.1	12.5	12.8	12.9	0.70	12.0	0.57
21	M 2	近遠心径	5.5	6.0	5.8	6.2	6.1	0.41	5.7	0.39
22		頬舌径	8.5	9.4	9.1	8.8	8.9	0.63	8.4	0.52
23		歯列長 (I 1-M 2)	86.1	83.8	79.6	83.5	79.4	3.37	74.3	3.67
24		小白歯長 (P 1-P 4)	48.1	41.7	40.0	44.6	41.6	2.73	38.8	2.13
25		大白歯長 (M 1-M 2)	15.2	14.8	14.8	14.5	15.0	0.81	13.9	1.13
26		白歯長 (P 1-M 2)	59.8	54.8	52.7	56.4	53.4	2.64	50.0	2.47
		((18+21)/16)×100	93.1	98.5	93.5	104.9	102.7	5.1	102.7	4.1
		(24/23)×100	55.9	49.8	50.5	53.4	52.4	1.9	52.0	1.6
		(26/23)×100	69.5	65.4	66.2	67.5	67.3	1.3	67.1	1.3
		(25/23)×100	17.7	17.7	18.5	17.4	18.9	1.2	18.7	1.6
		(24/26)×100	80.4	76.2	76.3	79.1	77.8	2.1	77.5	1.6

付一表11：石川条里遺跡出土犬の舌顎歯の計測値と比較資料（単位はmm）

			中世	縄文		中世		現生犬					
			石川条里	田柄		鎌倉		豊明		シバイヌ			
			♂	♂	♀	♂	♀	♂	♂	SD	♀	SD	
1	I 1	近遠心径		2.6	2.5	2.8	-	2.2	2.6	0.19	2.6	0.16	
2		頬舌径		3.3	3.2	3.8	-	3.2	3.4	0.22	3.1	0.19	
3	I 2	近遠心径		4.0	3.9	3.8	-	3.7	3.8	0.27	3.6	0.24	
4		頬舌径		4.4	4.2	4.7	-	4.3	4.4	0.26	4.0	0.25	
5	I 3	近遠心径	4.7	5.1	4.8	4.8	4.6	4.9	5.0	0.30	4.6	0.39	
6		頬舌径	4.9	4.4	4.0	4.8	3.7	4.6	4.6	0.32	4.1	0.34	
7	C	近遠心径	10.0	9.3	8.7	9.7	8.9	9.8	9.9	0.76	8.8	0.82	
8		頬舌径	6.0	5.5	5.0	6.0	5.2	5.3	5.8	0.35	5.1	0.42	
9	P 1	近遠心径	4.2	4.2	3.7	4.0	3.7	4.0	4.1	0.29	3.9	0.21	
10		頬舌径	2.8		2.9	3.0	2.9	3.0	3.1	0.19	2.9	0.20	
11	P 2	近遠心径	7.5	7.2	6.6	7.1	6.2	8.0	7.3	0.67	6.6	0.79	
12		頬舌径	3.8	3.8	3.5	3.9	3.3	3.9	4.1	0.26	3.6	0.46	
13	P 3	近遠心径		8.7	8.3	9.3	7.9	8.7	9.3	0.44	8.5	0.29	
14		頬舌径		4.1	3.9	4.5	3.9	4.0	4.8	0.23	4.3	0.70	
15	P 4	近遠心径	10.7	10.3	9.6	10.6	8.9	10.1	10.8	0.54	9.9	0.32	
16		頬舌径	5.8	5.3	4.8	5.6	4.8	5.0	5.9	0.36	5.3	0.89	
17	M 1	最大近遠心径	19.2	19.8	18.7	19.5	17.6	18.7	18.6	0.65	17.4	0.40	
18		近心頬舌径	8.0	7.9	7.3	8.1	7.1	7.5	7.7	0.36	7.1	0.36	
19		遠心頬舌径	7.9	7.6	7.1	7.8	6.9	7.5	7.2	0.36	6.6	0.36	
20	M 2	近遠心径	8.0	8.0	7.9	8.1	6.6	7.9	7.4	0.42	6.9	0.47	
21		頬舌径	6.4	6.2	6.2	6.4	5.3	6.3	5.9	0.36	5.5	0.37	
22	M 3	近遠心径	3.4	3.9	3.7	3.7	3.4	4.0	3.8	0.47	3.6	0.44	
23		頬舌径	3.5	3.5	3.5	3.3	3.2	3.6	3.5	0.38	3.2	0.35	
24		歯列長	85.5	84.1	79.8	85.5	77.5	85.5	80.3	3.209	76.4	2.73	
25		小白歯列長	34.1	29.8	27.9	34.6	33.5	34.5	32.8	2.28	31.2	1.83	
26		大白歯列長	29.4	30.8	29.8	30.5	26.6	29.7	28.9	1.16	27.3	1.40	
27		白歯長	62.1	61.7	57.9	65.2	59.7	63.3	60.7	2.93	58.0	2.22	
		(25/24)×100	39.9	36.8	35.0	40.4	42.5	40.4	40.8	1.59	41.1	1.50	
		(26/24)×100	34.4	36.8	37.7	36.1	33.4	34.7	36.0	1.25	35.8	1.62	
		(27/24)×100	72.6	74.4	71.9	76.3	75.2	74.0	75.5	1.06	75.8	1.11	
		(25/27)×100	54.9	49.9	48.6	53.1	56.1	54.5	54.0	1.75	54.1	1.72	
		(25/26)×100	116.0	100.7	93.6	114.2	126.0	116.2	113.4	7.76	114.9	8.75	

付一表12：石川条里遺跡出土のイヌの四肢骨の計測値、および比較資料（単位はmm）

		石川条里		現生シバイヌ		田柄貝塚（縄文）	
		♂	♀	♂	♀	♂	♀
S 1	肩甲骨 全長	125.5		108.6	100.6	-	-
H 1	上腕骨 全長	146.2		123.0	114.5	131.28	117.34
H 2	中央最小幅	12.7		9.4	8.7	11.19	10.13
H 3	中央最大幅	15.1		11.9	11.1	14.98	12.90
H 4	下端最大幅	28.6		26.1	24.3	28.36	25.88
R 2	橈骨 上端最大幅	15.9		13.9	12.9	15.48	14.66
R 3	中央横径	11.7		9.9	8.9	10.71	9.85
R 4	中央矢状径	7.5		5.7	5.3	7.10	6.52
P 1	骨盤 寛骨長	134.2		119.0	111.6	117.55	114.75
P 2	腸骨厚	9.5		7.4	6.8	8.25	-
P 3	腸骨最小幅	17.6		14.4	13.5	15.35	14.65
P 4	寛骨臼最大長	20.3		17.0	16.1	18.46	-
F 1	大腿骨 全長	160.0		133.8	124.1	134.80	126.60
F 2	中央横径	12.9		10.6	9.7	12.04	11.05
F 3	中央矢状径	12.5		9.6	9.2	11.58	10.77
F 4	下端最大幅	27.2		24.5	22.8	27.52	25.90
T 1	脛骨 全長	159.5		135.1	125.2	141.80	125.58
T 2	上端最大幅	29.8		26.8	25.2	29.22	28.05
T 3	上端最大矢状径	29.4		20.0	24.7	30.07	28.45
T 4	中央横径	11.7		10.0	9.3	10.92	9.98
T 5	中央矢状径	10.3		9.8	9.1	10.63	9.48
T 6	下端最大幅	19.2		17.9	16.7	20.10	18.20
OS 1	陰茎骨全長	85.4		71.6	-	-	-
	上腕骨中央断面示数	H 2 / H 3	84.1	79.2	78.7	74.75	78.70
	中央頰丈示数	H 3 / H 1	10.3	9.7	9.7	11.42	10.77
	橈骨中央断面示数	R 4 / R 3	64.1	58.4	58.8	66.41	66.17
	腸骨断面示数	P 2 / P 3	54.0	52.6	50.3	53.76	51.11
	大腿中央断面示数	F 2 / F 3	103.2	110.2	106.5	104.08	102.80
	中央頰丈示数	F 2 / F 1	8.1	7.9	7.9	8.92	8.97
	脛骨上端示数	T 2 / T 3	101.4	103.5	102.2	96.27	98.73
	中央断面示数	T 4 / T 5	113.6	102.9	102.1	102.86	105.46
	中央頰丈示数	T 4 / T 1	7.3	7.4	7.4	7.71	7.79
	脛骨大腿骨示数	T 1 / F 1	99.7	101.0	100.9	102.44	100.24

図の説明

付一8図：石川条里遺跡の中世犬の出土部位。シャドウ部が出土した部位である。

写真説明

付一9図：石川条里遺跡出土のニホンジカ。

a；下顎骨右外側面と第3大白歯、b；鹿角、c；切断痕（矢印）のある鹿角、d；鹿角片、e；鹿角片、f；右距骨、矢印は接続して出土した脛骨遠位部、g；右距骨、h；腰椎弓後面、i；胸椎椎弓、j；左寛骨寛骨臼腸骨部、k；中足骨位部（焼骨）

付一10図：石川条里遺跡出土のイノシシ。付図のシャドウ部はそれぞれの出土部位を示している（写真3も同じ）。

a；基節骨遠位部（焼骨）、b；右脛骨遠位部、c；左上腕骨遠位部、d；左上腕遠位部、e；左頬骨弓部

付一11図：石川条里遺跡出土のウマ、カモシカ、クマ。

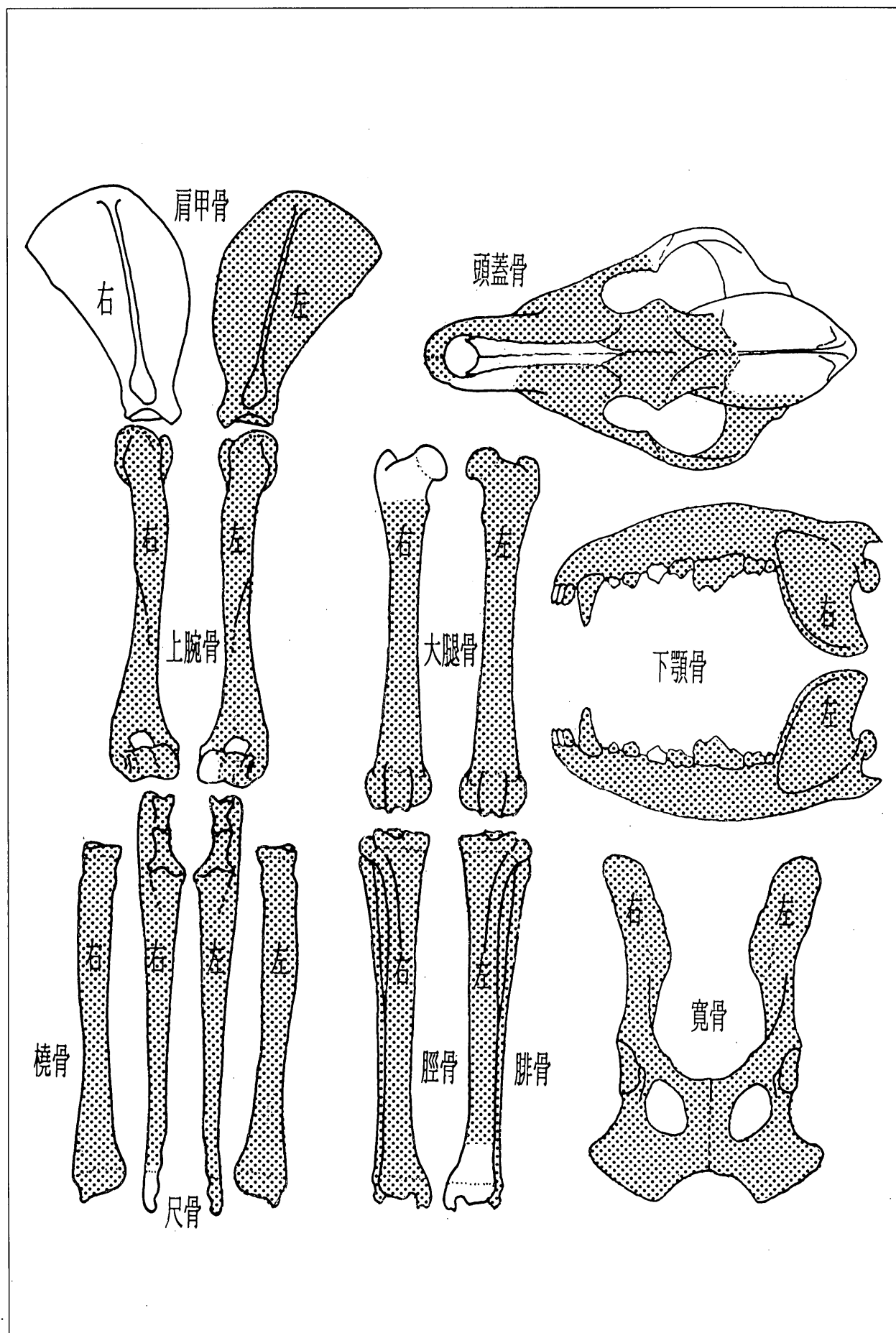
a；ウマ上顎右第2小白歯、b；ウマ上顎左白歯片、c；カモシカ中手骨遠位部、d；クマ右尺骨切痕部（焼骨）

付一12図：石川条里遺跡出土の中世のイヌの頭蓋骨。

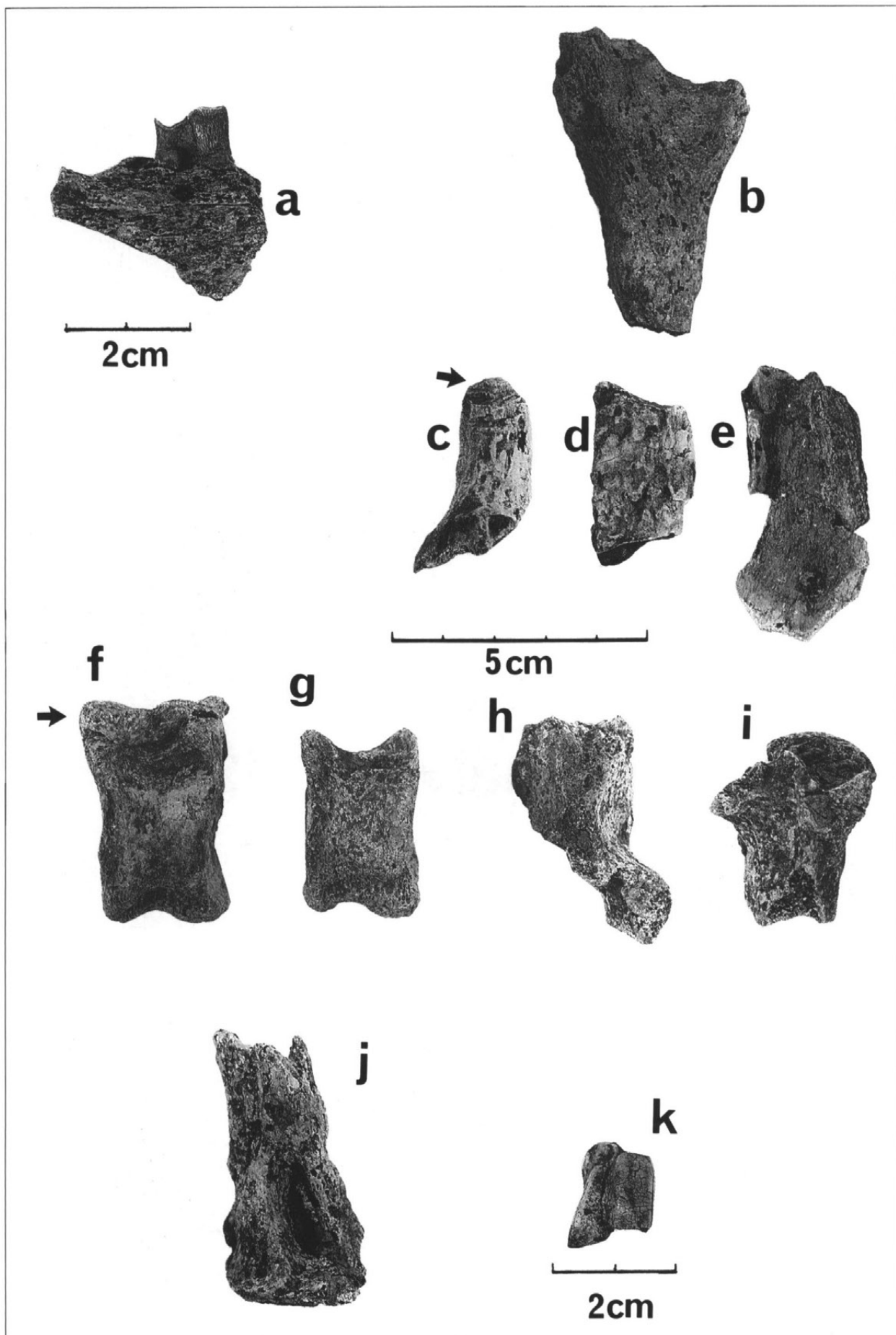
a；上面観、b；左側面観、c；底面観、d；左下顎骨外面、e；右下顎骨外面

付一13図：石川条里遺跡出土の中世のイヌの四肢骨。

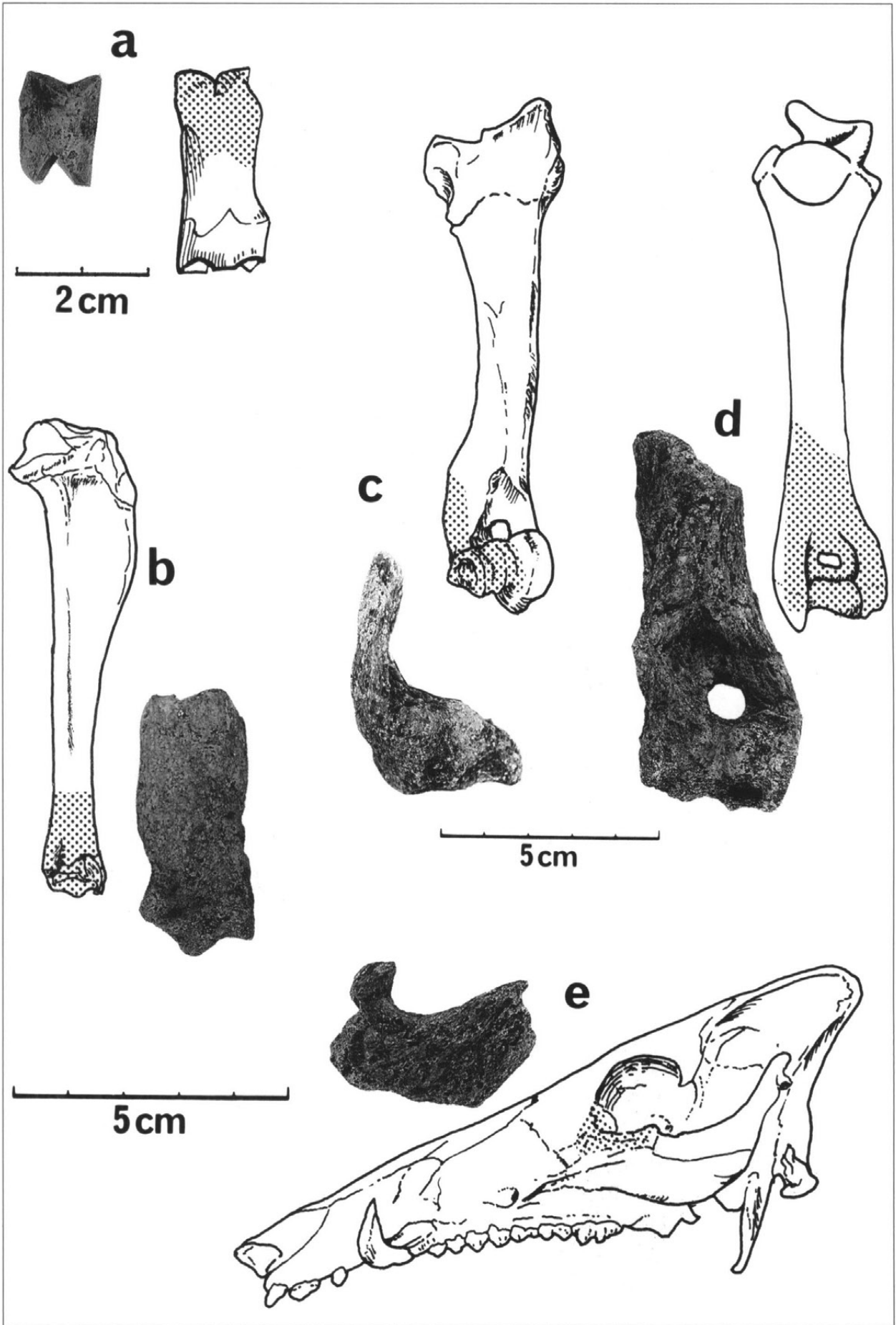
a；左肩甲骨外面、b；右上腕骨前面、c；左上腕骨前面、d；右橈骨前面、e；右尺骨、f；左尺骨、g；左橈骨前面、h；寛骨、i；陰茎骨、j；右大腿骨前面、k；左大腿骨前面、l；右脛骨前面、m；左脛骨前面



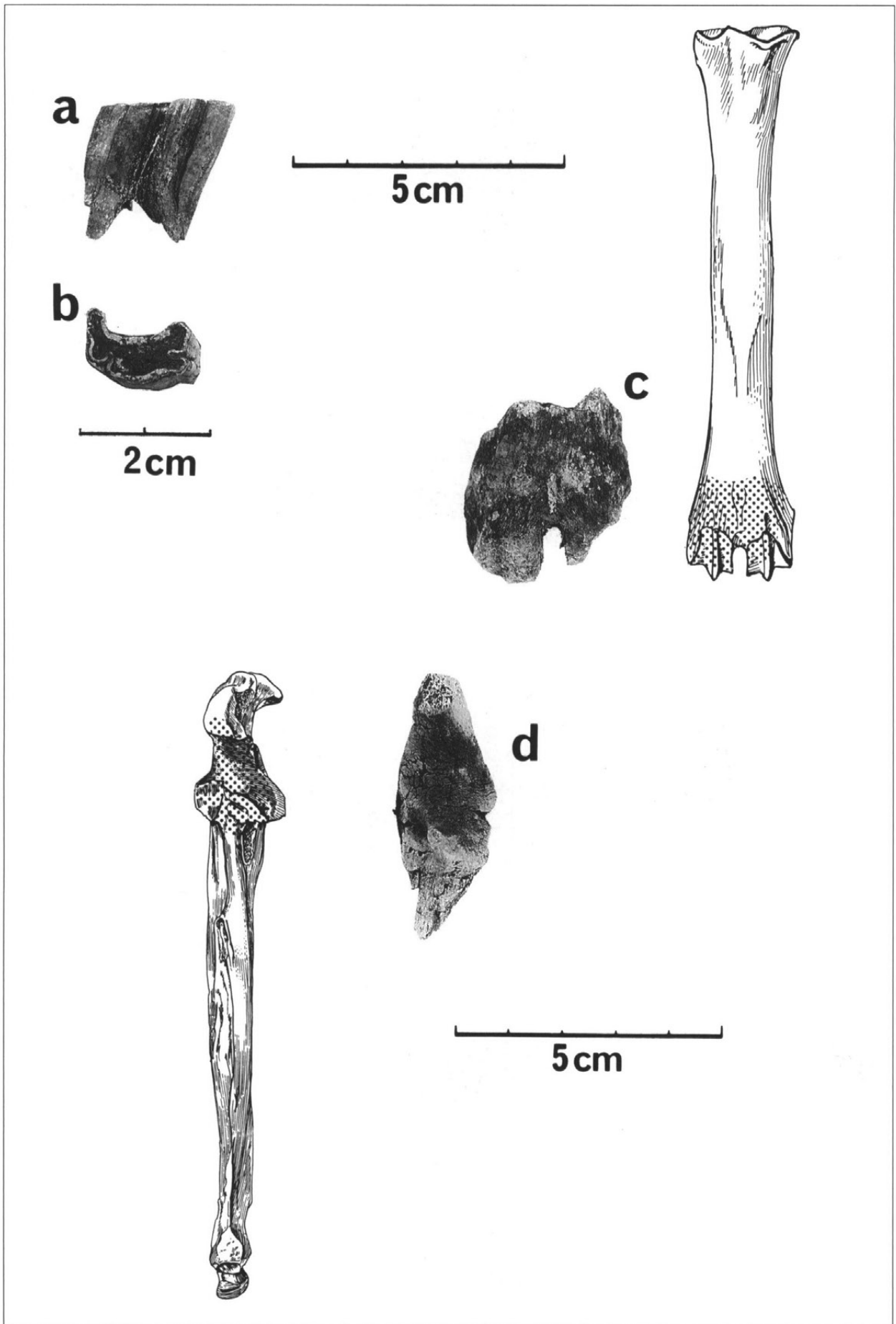
付-8 図



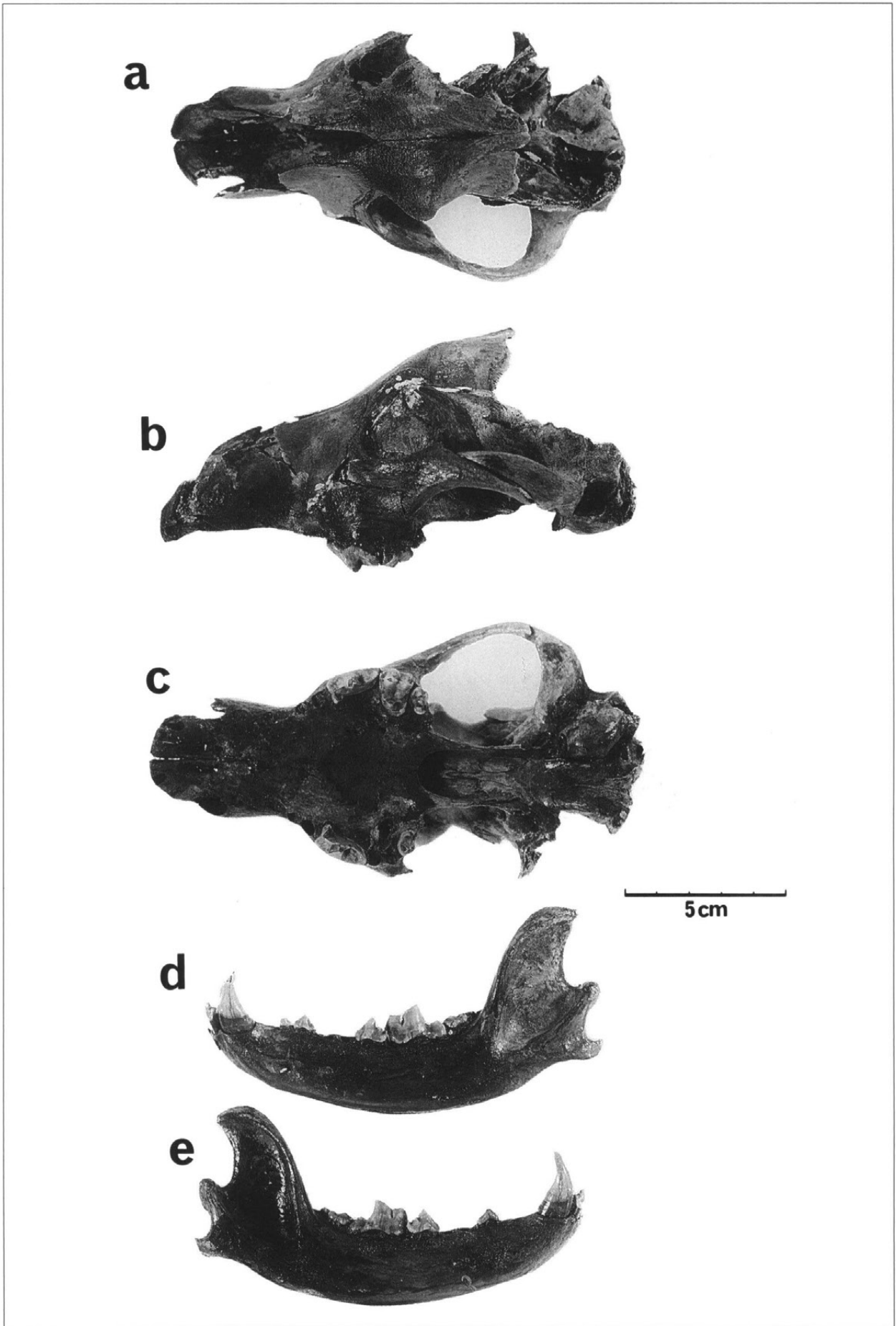
付-9 図



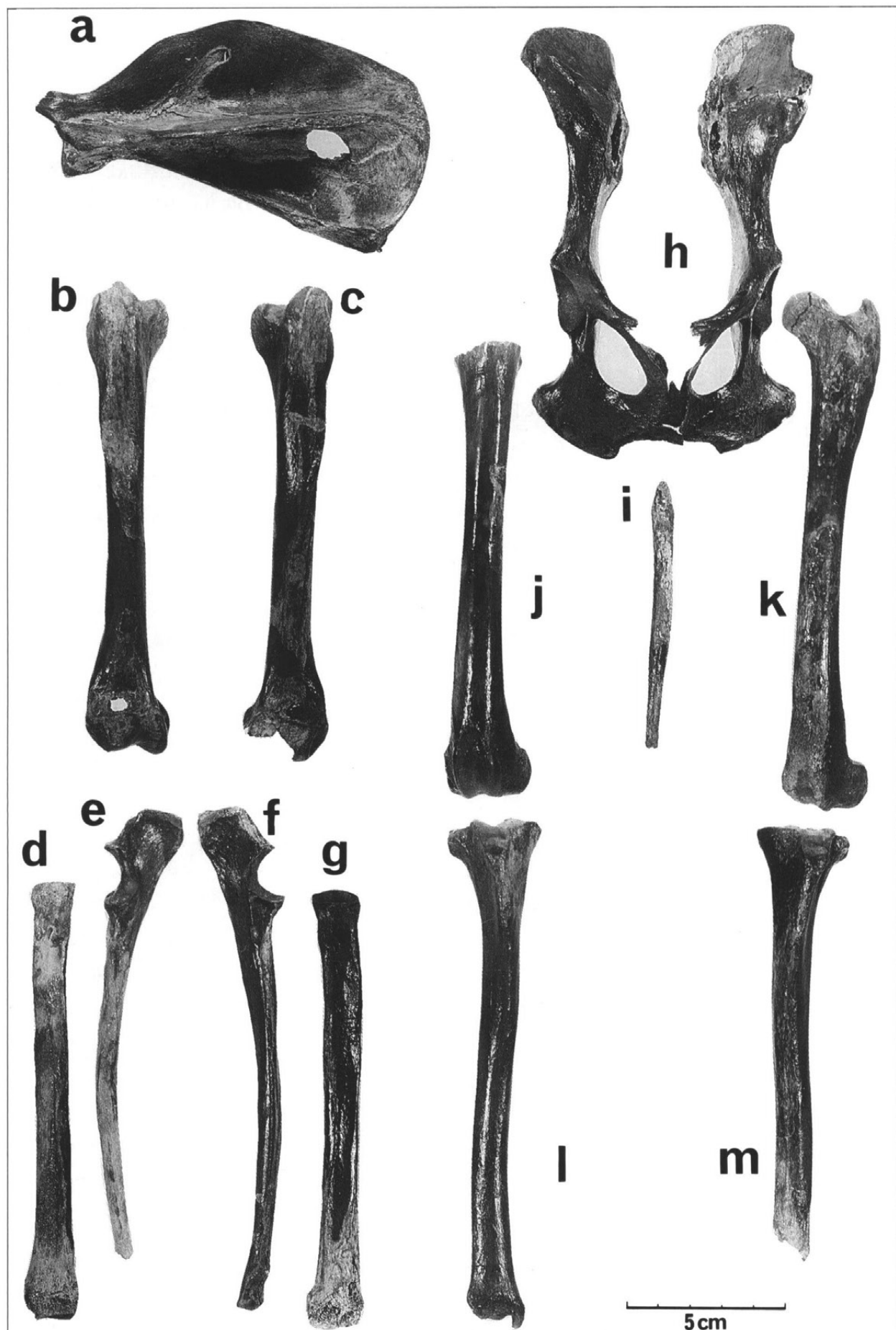
付-10図



付-11図



付-12図



付-13図

第4節 石川条里遺跡出土胎土分析

编者註 本遺跡出土の土器について生産—消費のあり方や製作に関する情報を得るために胎土分析を実施した。分析を依頼した時点では土器形式の分析ができておらず、また、在地の土器胎土の特徴について子細なデータが明らかになっていなかった。そこで土器分類と産地の関係の解明を目的とせず、生産—消費のあり方の解明に重点をおくことにした。特に本遺跡の大量土器消費に関連して供給源が単一か複数かを問題とした。また、こうした観点と併せて器種別に作り分けられた可能性についても情報が得られればと考えた。そのため、肉眼観察によって識別される胎土の異なる試料を抽出し、併せて大量の土器を出土したひとつの土坑を取り上げて胎土分析を試みることにした。そして、一部に独特の形態的な特徴を有する土器であるS字甕、布留甕も分析に供した。なお、在地産と捉えた土器は厳密な形態的な観察と分類によるものではなく、肉眼観察によって認定しうる普遍的な土器胎土のものとした。

ここに報告をそのまま掲載するが、分析に供した時点では試料を仮番号で扱っていたので、あらためて出土遺構や出土地点を補足するための試料一覧をつけ加えた。また、試料提出以前に産地の予想について記載した部分については一部编者註として加筆した。

(株)第四紀 地質研究所 井上 巖

X線回析試験及び化学分析試験

1 実験条件

1-1 試料

分析に供した試料は第1表胎土性状表に示す通りである。

X線回析試験に供する遺物試料は洗浄し、感想したのちに、メノウ乳鉢にて粉碎し、粉末試料として実験に供した。

化学分析は土器をダイヤモンドカッターで小片に切断し、表面を洗浄し、乾燥後、試料表面をコーティングしないで、直接電子顕微鏡の鏡筒内に挿入し、分析した。

1-2 X線回析試験

土器胎土に含まれる粘土鉱物及び造岩鉱物の同定はX線回析試験によった。測定には日本電子製JDX-8020 X線回析装置を用い、次の実験条件で実験した。

Target: Cu, Filter: Ni, Voltage: 40kV, Current: 30mA, ステップ角度: 0.02°

計数時間: 0.5秒。

1-3 化学分析

元素分析は日本電子製5300LV型電子顕微鏡に2001型エネルギー分散型蛍光X線分析装置をセットし、実験条件は加速電圧: 15KV、分析法: スプリント法、分析倍率: 200倍、分析有効時間: 100秒、分析指定元素: 10元素で行った。

2 X線回析試験結果の取扱い

実験結果は第1表胎土性状表に示す通りである。

第1表右側にはX線回析試験に基づく粘土鉱物及び造岩鉱物の組織が示してあり、左側には、各胎土に

対する分類を行った結果を示している。

X線回析試験結果に基づく粘土硬質及び造岩鉱物の各々に記載される数字はチャートの中に現われる各鉱物に特有のピークの強度を記載したものである。

電子顕微鏡によって得られたガラス量とX線回析試験で得られたムライト (Mullite)、クリストバライト (Cristobalite) 等の組成上の組合せとによって焼成ランクを決定した。

2-1 組成分類

1) Mont-Mica-Hb三角ダイアグラム

付-14図に示すように三角ダイアグラムを1~13に分割し、位置分類を各胎土について行い、各胎土の位置を数字で表した。

Mont、Mica、Hbの三成分の含まれない胎土は記載不能として14にいれ、別に検討した。

三角ダイアグラムはモンモリロナイト (Mont)、雲母類 (Mica)、角閃石 (Hb) のX線回析試験におけるチャートのピーク強度をパーセント (%) で表示する。

モンモリロナイトは $Mont / (Mont + Mica + Hb) * 100$ でパーセントとして求め、同様に Mica、Hb も計算し、三角ダイアグラムに記載する。

三角ダイアグラム内の1~4はMont、Mica、Hbの3成分を含み、各辺は2成分、各頂点は1成分よりなっていることを表している。

位置分類についての基本原則は第1図に示す通りである。

2) Mont-Ch、Mica-Hb菱形ダイアグラム

付-15図に示すように菱形ダイアグラムを1~19に区分し、位置分類を数字で記載した。記載不能は20として別に検討した。

モンモリロナイト (Mont)、雲母類 (Mica)、角閃石 (Hb)、緑泥石 (Ch) の内、

a) 3成分以上含まれない、b) Mont、Chの2成分が含まれない、

c) Mica、Hbの2成分が含まれない、の3例がある。

菱形ダイアグラムはMont-Ch、Mica-Hbの組合せを表示するものである。

Mont-Ch、Mica-HbのそれぞれのX線回析試験のチャートの強度を各々の組合せ毎にパーセントで表すもので、例えば、 $Mont / (Mont + Ch) * 100$ と計算し、Mica、Hb、Chも各々同様に計算し、記載する。

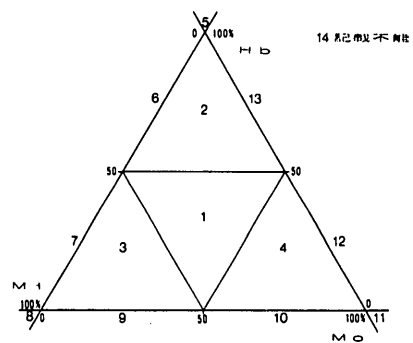
菱形ダイアグラム内にある1~7はMont、Mica、Hb、Chの4成分を含み、各辺はMont、Mica、Hb、Chのうち3成分、各頂点は2成分を含んでいることを示す。

位置分類についての基本原則は付-15図に示す通りである。

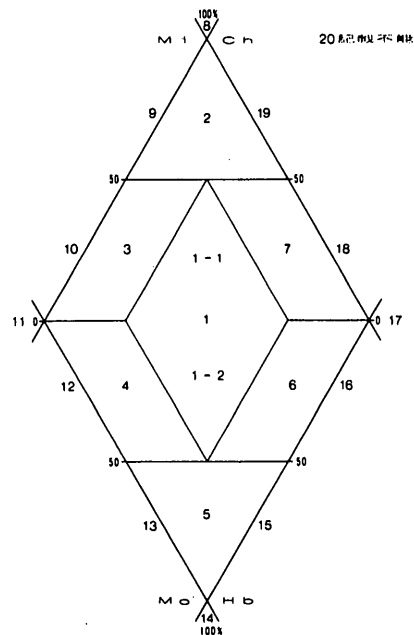
2-2 焼成ランク

焼成ランクの区分はX線回析試験による鉱物組成と、電子顕微鏡観察によるガラス量によって行った。

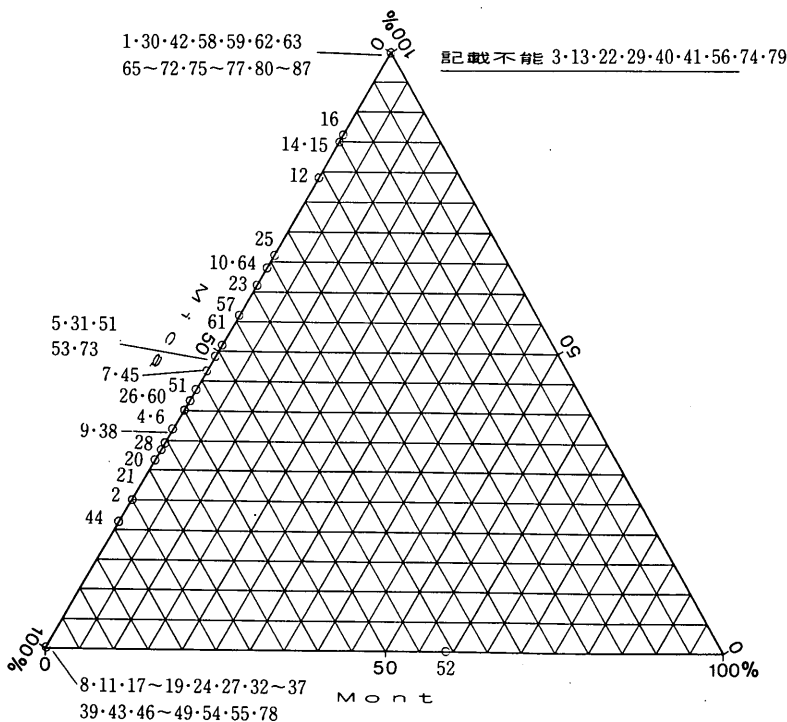
ムライト (Mullite) は、磁気、陶器など高温で焼かれた状



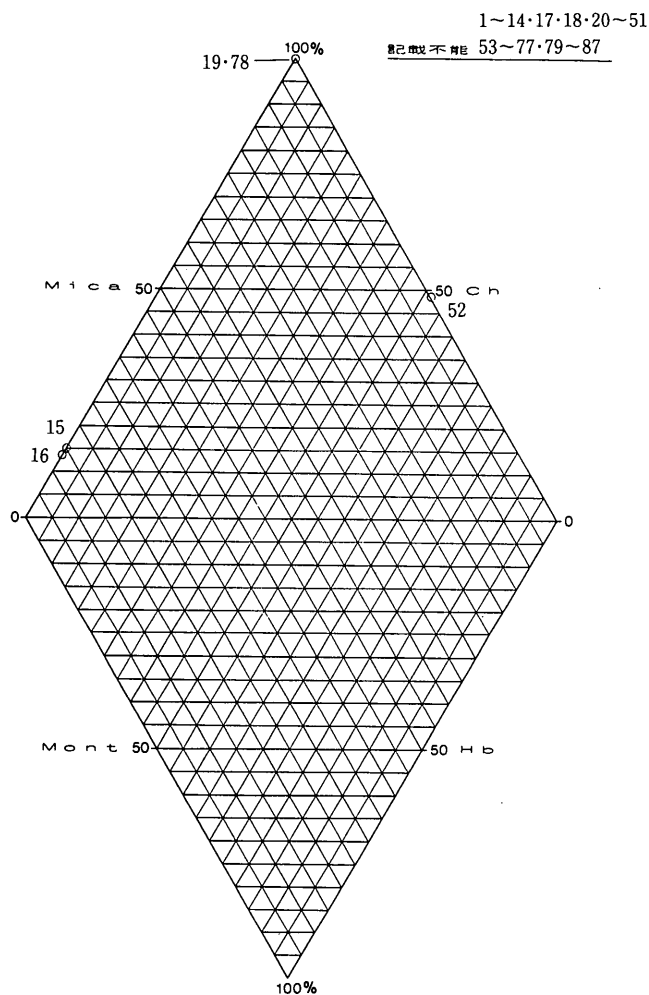
付-14図 三角ダイアグラム位置分類図



付-15図 菱形ダイアグラム位置分類図



付-16図 Mo-Mi-Hb三角ダイヤグラム



付-17図 Mo-ch, Mi-Hb菱形ダイヤグラム

態で初めて生成する鉱物であり、クリストバライト (Cristobalite) はムライトより低い温度、ガラスはクリストバライトより更に低い温度で生成する。

これらの事実に基づき、X線回析試験結果と電子顕微鏡観察結果から、土器胎土の焼成ランクをI～Vの5段階に区分した。

- a) 焼成ランクI：ムライトが多く生成し、ガラスの単位面積が広く、ガラスは発泡している。
- b) 焼成ランクII：ムライトとクリストバライトが共存し、ガラスは短冊状になり、面積は狭くなる。
- c) 焼成ランクIII：ガラスのなかにクリストバライトが生成し、ガラスの単位面積が狭く、葉状断面をし、ガラスのつながりに欠ける。
- d) 焼成ランクIV：ガラスのみが生成し、原土(素地土)の組織をかなり残してる。ガラスは微小な葉状を呈する。
- e) 焼成ランクV：原土に近い組織を有し、ガラスは殆どできていない。

以上のI～Vの分類は原則であるが、胎土の材質、すなわち、粘度の良悪によってガラスの生成量は異なるので、電子顕微鏡によるガラス量も分類に大きな比重を占める。このため、ムライト、クリストバライトなどの組合せといくぶんことなる焼成ランクが出現することになるが、この点については第1表の右端の備考に理由を記した。

3) 化学分析結果の取り扱い

化学分析結果は酸化物として、ノーマル法(10元素全体で100%になる)で

計算し、化学分析表を作成した。化学分析表に基づいて $\text{SiO}_2\text{-Al}_2\text{O}_3$ 、 $\text{Fe}_2\text{O}_3\text{-MgO}$ 、 $\text{K}_2\text{O-CaO}$ の各図を作成した。これらの図をもとに、土器類を元素の面から分類した。

3 X線回析試験結果

3-1 タイプ分類

付一表13胎土性状表に示すように土器は在地と非常在地（編者註1）のものを分析した。付一表15タイプ分類一覧表に示すように土器胎土はA～Hの8タイプに分類された。

Aタイプ：Hb 1成分を含み、Mont、Mica、Chの3成分に欠ける。

石川条里遺跡の在地の土器26個が該当する。

Bタイプ：Mica、Hb、Chの3成分を含み、Mont 1成分に欠ける。

畿内の甕2個（編者註2）が該当する。とくにHb（角閃石）の強度が高く異質である。

Cタイプ：Mica、Hbの2成分を含み、Mont、Chの2成分に欠ける。

畿内の甕4個、在地の高坏と小型壺、甕と小型丸底で構成される。

Dタイプ：Mica、Hb 2成分を含み、Mont、Chの2成分に欠ける。組成的にはCタイプと同じであるが検出強度が異なるためにタイプが異なる。

高坏6個（1個は在地）、小型丸底4個、甕3個、甕（畿内?）3個、台付甕（東海?）（編者註3）、連結埴、壺（在地）各1個の19個で構成される。

Eタイプ：Mica、Chの2成分を含み、Mont、Hbの2成分に欠ける。

壺2個（1個は在地）で構成される。

Fタイプ：Mica 1成分を含み、Mont、Hb、Chの3成分に欠ける。

甕8個、高坏5個、壺3個、小型丸底2個、台付甕（東海?）2個の20個で構成される。

Gタイプ：Mont、Mica、Chの3成分を含み、Hb 1成分に欠ける。高坏1個。

Hタイプ：Mont、Mica、Hb、Chの4成分に欠ける。

主に $\text{Na}_2\text{O} \cdot \text{mSiO}_2 \cdot \text{nH}_2\text{O}$ （アルミナゲル）で構成される。

壺3個（1個は在地）、甕3個（1個は在地）、高坏、小型丸底、台付甕（東海?）の各1個の9個で構成される。

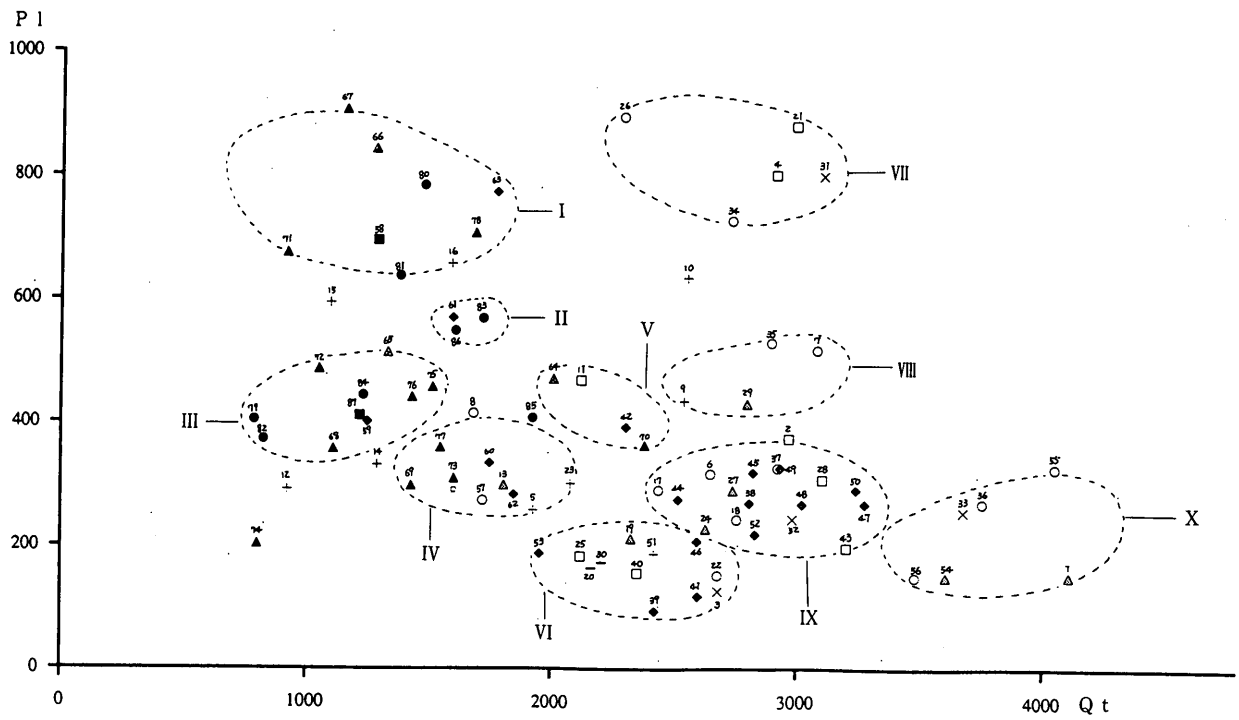
以上の結果から明らかな様に土器の大半はA、C、D、F、Hの5タイプで構成され、在地の土器はそのほとんどがAタイプで統一される。非在地の土器のうち高坏はDとFタイプ、小型丸底はDタイプ、甕はDとFとHタイプ、壺はFとHタイプというように胎土に統一性が認められる。東海系の台付甕はD、F、Hの3タイプで組成的には甕と同じ傾向にあり、特に東海系としての特徴は示さない。畿内系の甕はBとCタイプに集中し、一部はDタイプのものもある。特にCタイプの12と14、Bタイプの15と16はHb（角閃石）の強度が高く異質であり、生駒西麓的な要素を含んでいるように見受けられる。

3-2 石英（Qt）-斜長石（Pl）の相関について

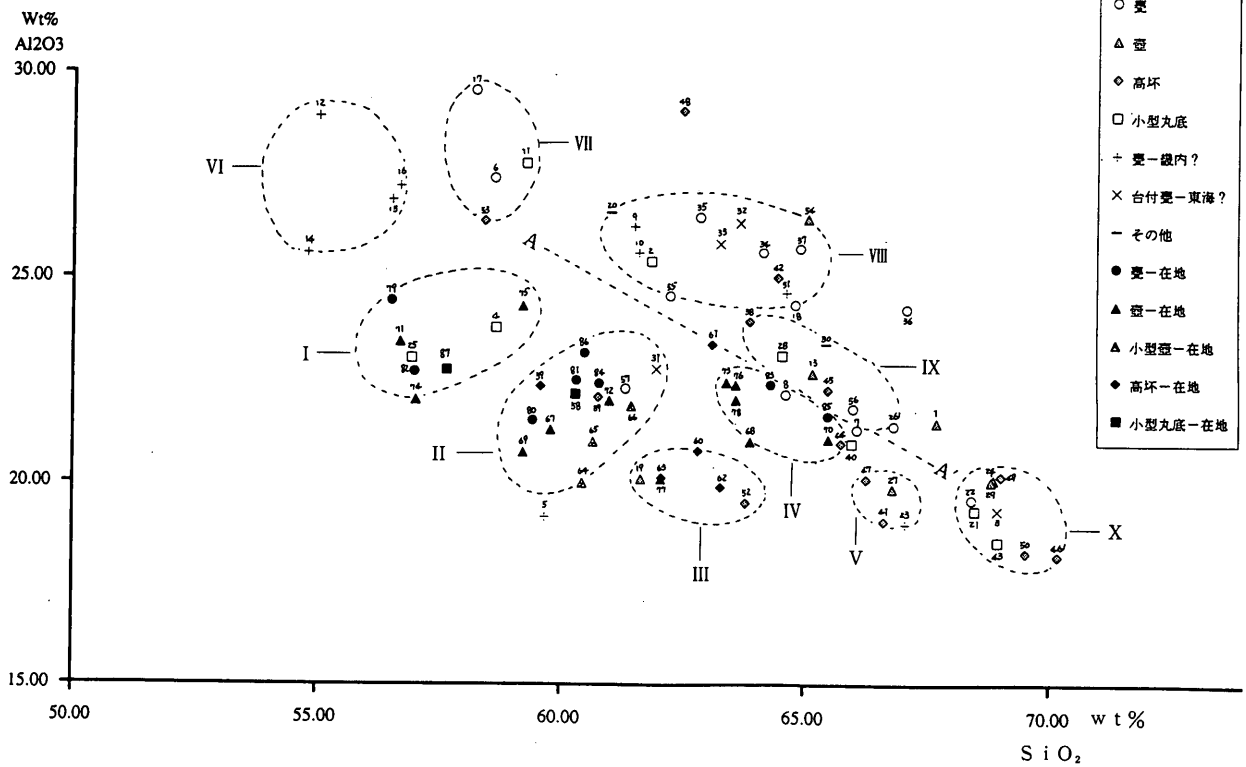
土器胎土中に含まれる砂の粘土に対する混合比は粘土の材質、土器の焼成温度と大きな関わりがある。土器を製作する過程で、ある粘土にある量の砂を混合して素地土を作るということは個々の集団が持つ土器製作上の固有の技術であると考えられる。

自然の状態における各地の砂は固有の石英と斜長石比を有している。この比は後背地の地質条件によって各々異なってくるものであり、言い換えれば、各地の砂はおのこの固有の石英と斜長石比を有していると言える。

この固有の比率を有する砂をどの程度粘土中に混入するかは各々の集団の有する固有の技術の一端と考



付-18図 Qt - P I 図



付-19図 SiO₂Al₂O₃ 図

えられる。

付-18図Qt-P I図に示すように土器はI~Xの10グループと“その他”に分類された。図から明らかな様に在地の土器はQtの強度が2000以下の領域にあり、非在地の土器は2000以上の領域に分布し、明瞭に異なる。

Iグループ：P I (斜長石) の強度が高いのが特徴で、Aタイプの胎土の在地の土器が集中する。特に在地の壺、甕が多い。

- IIグループ：在地のAタイプの甕とCタイプの壺が混在する。
- IIIグループ：在地のAタイプの土器が集中する。特に壺と甕が集中する。
- IVグループ：在地のAタイプの壺と高坏が集中し、非在地の甕が共存する。
非在地の甕のうち畿内系の甕2個が混在する。甕はCタイプとDタイプの胎土である。
- Vグループ：非在地の高坏と小型丸底、在地の壺が混在する。
- VIグループ：非在地の高坏が集中し、小型丸底、壺、甕、および連結埴、新潟系の甕(編者註4)、東海系の台付甕、畿内系の甕の各1個が混在する。胎土のタイプとしてはHタイプが最も多く、次いでDタイプ、Fタイプとなる。
- VIIグループ：Plの強度が高いのが特徴で、非在地のDタイプの胎土の小型丸底と甕で構成される。東海系の甕もDタイプの胎土で類似性が高い。
- VIIIグループ：非在地の甕が集中し、壺が混在する。土器胎土はDタイプ、FとHタイプで構成される。畿内系の甕が混在する。
- IXグループ：非在地の土器が集中し、土器の胎土はDタイプとFタイプが集中するのが特徴である。特に高坏は集中し、小型丸底、甕、壺が共存する。東海系の甕もFタイプの胎土で混在する。
- Xグループ：非在地のFタイプの胎土の土器が集中する。特にQt(石英)の強度が高く異質である。甕と壺が共存する。東海契機甕もFタイプの胎土で混在する。
- “その他”：畿内系の甕のうち15、16はBタイプの胎土で、Iグループに近いところにある。12と14は共にCタイプの胎土でIIIグループに近いところにある。この4個はHbの強度が高く異質である。10はCタイプの胎土で、どのグループにも属さず、異質である。74の在地の壺はQtとPlの強度が低く、異質である。

以上の結果から明らかな様に、在地の土器はI～IVのグループに分れ、4つの異なる集団で製作された可能性がある。非在地の土器はV～Xの6グループに分れ、明らかに6つ以上の集団を示唆している。東海系の土器は非在地系の土器と同じグループに属し、特に1つのグループに集中すると言う様なことがなく、非在地の土器と同じように6つのグループに分散し、むしろ非在地系の土器と同じように製作されたものではなかろうか。これとは対照的に、畿内系の甕のうち12、14、15、16の4個は在地の土器が分布する強度が2000以下の領域にあり、明らかに異質で、Hbの強度が高く、畿内の可能性が考えられる。連結埴と新潟系の土器(編者註4)は共にVIグループに属し、AタイプとCタイプの胎土で、非在地の土器の一部と見るほうが妥当かもしれない。

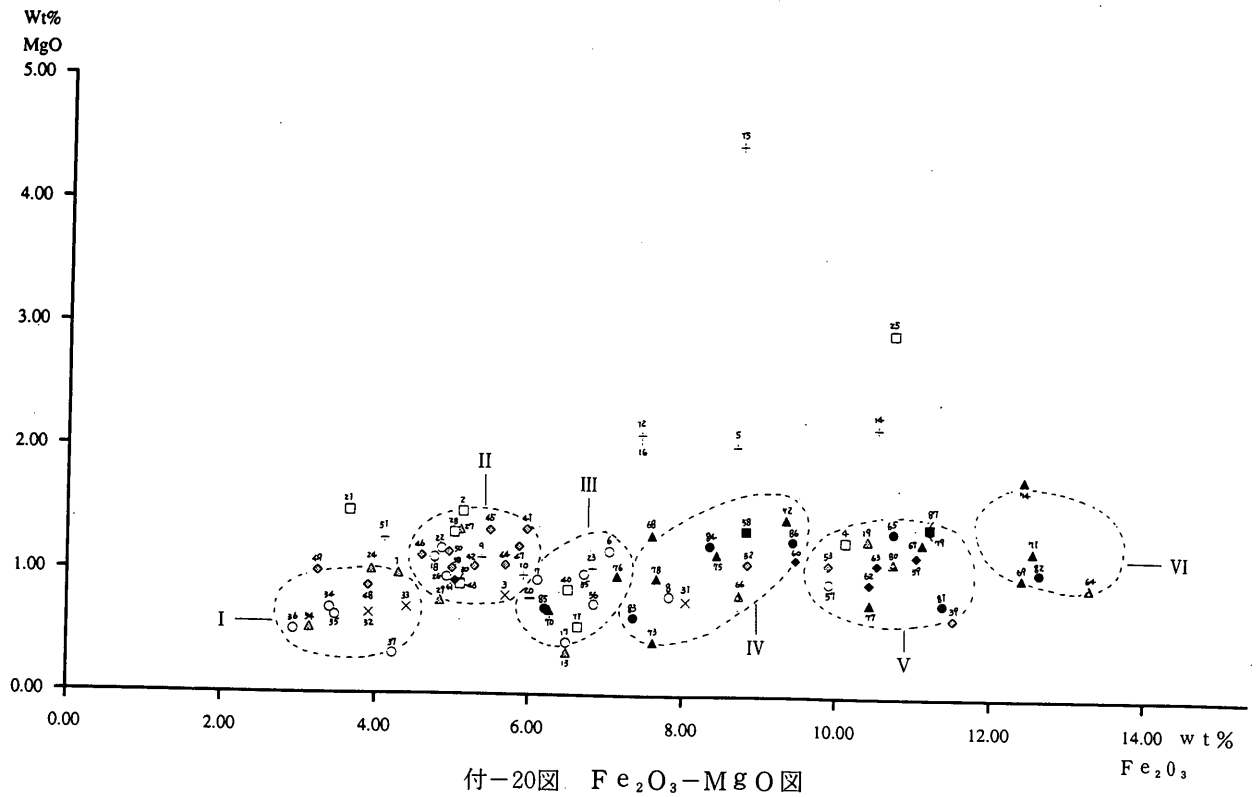
4 化学分析結果

化学分析は第2表化学分析表に示すように重量%で表示してある。これらの表に基づいて付-19図 $\text{SiO}_2-\text{Al}_2\text{O}_3$ 図、付-20図 $\text{Fe}_2\text{O}_3-\text{MgO}$ 図、付-21図 $\text{K}_2\text{O}-\text{CaO}$ 図を作成した。

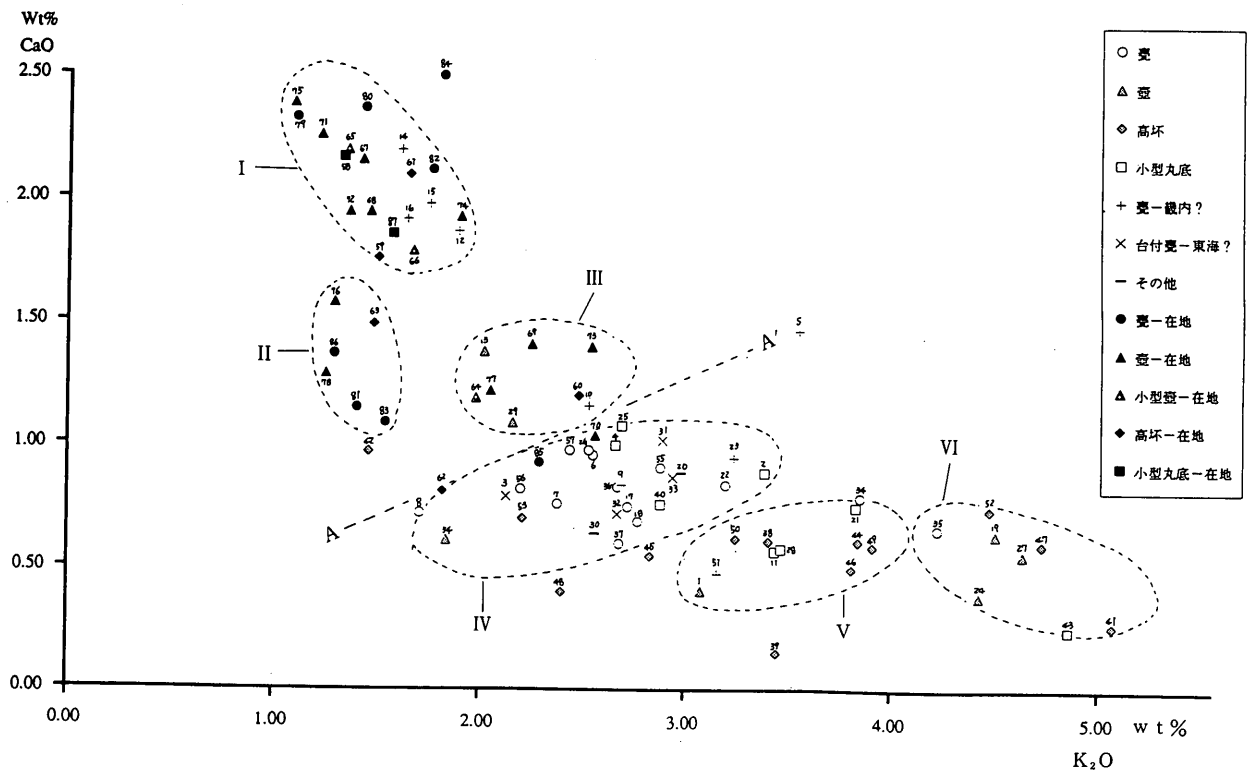
4-1 $\text{SiO}_2-\text{Al}_2\text{O}_3$ の相関について

付-19図 $\text{SiO}_2-\text{Al}_2\text{O}_3$ 図に示すように、I～Xの10グループと“その他”に分類された。在地と非在地の土器はA-A'線を境として明瞭に分れる。A-A'線より下の領域で Al_2O_3 が65%以下に在地の土器が集中し、4グループを形成する。また、非在地系の土器はV～Xの6グループに分散する。

- Iグループ：在地の壺と甕が集中し、非在地と在地の小型丸底が共存する。
- IIグループ：在地の甕、壺、小型壺が集中し、高坏が混在する。非在地の甕と高坏も混在する。
- IIIグループ：在地の壺が集中し、非在地と在地の甕が混在する。
- IVグループ：在地の高坏が集中し、在地の壺、非在地の壺と高坏が共存する。



付-20図 Fe_2O_3 - MgO 図



付-21図 K_2O - CaO 図

Vグループ：非在地の高坏と壺。

VIグループ：畿内系の甕で構成される。畿内系の甕が集中する。

VIIグループ：非在地の甕、高坏、小型丸底が混在する。

VIIIグループ：非在地の甕が集中し、東海系の甕、畿内系の甕、連結埴、高坏、壺が混在する。

IXグループ：非在地の甕が集中し、高坏と壺、新潟系の甕が混在する。

Xグループ：非在地の高坏が集中し、小型丸底壺、甕が共存する。

“その他”：非在地の1、48、36、61は分散し、異質である。

以上のように、在地と非在地は明瞭に分れ、畿内系の12、14、15、16の4個は独自のグループを形成し、明らかに異質である。東海系の土器は非在地の土器と共存し、明瞭に分れることはなく、非在地の土器との類似性が認められる。新潟系の土器も非在地の土器と共存し、非在地の土器と類似性が認められる。

4-2 Fe₂O₃-MgOの相関について

付-20図Fe₂O₃-MgO図に見られるように土器はI～VIの6グループと“その他”に分類された。非在地の土器はFe₂O₃の値が7%以下の領域に分布し、在地の土器は7%以上に領域に分布し、明瞭に分れる。

Iグループ：非在地の甕、壺、高坏が共存し、東海系の甕が混在する。

IIグループ：非在地の高坏が集中し、甕、小型丸底、壺が共存する。畿内系、東海系、新潟系の甕が混在する。

IIIグループ：非在地の甕が集中し、小型丸底、在地の壺と甕が混在する。畿内系の甕と連結埴が混在する。

IVグループ：在地の壺と甕が集中し、高坏と小型丸底が共存する。非在地の甕、東海系の甕、高坏が混在する。

Vグループ：在地の高坏と壺、甕、小型丸底が集中し、非在地の甕、壺、小型丸底、高坏が混在する。

VIグループ：在地の壺が集中し、甕が共存する。

“その他”：MgOの値が高い領域に畿内系の5、12、14、15、16の甕が分布し、異質である。小型丸底21、25もMgOの強度が高い。

以上の結果から明らかな様に、畿内系の土器のうちHbの強度が高い12、14、15、16は明らかにMgOの強度が高く異質である。東海系の甕は非在地の土器と常に共存し、組成的に類似性が高い。同様のことは新潟系の土器でも言える。

4-3 K₂O-CaOの相関について

付-21図K₂O-CaO図に示すようにA-A'線を境としてCaOの値が高くK₂Oの値が低い領域に在地の土器がI～IIIの3グループを形成し、K₂Oの値が高い領域には非在地の土器が分布し、IV～VIの3グループを形成する。

Iグループ：在地の壺と甕が集中し、小型丸底と高坏が共存する。このグループには畿内系の甕の12、14、15、16が混在する。

IIグループ：在地の甕、壺、高坏で構成される。

IIIグループ：在地の甕が集中し、在地の高坏と非在地の壺と畿内系の甕が混在する。

IVグループ：非在地の土器が集中する。特に、非在地の甕、小型丸底、東海系の甕が集中する。高坏と壺、畿内系の甕、新潟系の甕、連結埴などが混在する。

Vグループ：非在地の高坏と小型丸底が集中し、甕と気合系の甕が混在する。

VIグループ：非在地の壺、高坏、甕、小型丸底が共存する。

“その他”：A-A'線より上の領域ではCaOの値が高い84の在地の甕があるが、これはIグループに属するものであろう。42の非在地の高坏は異質である。A-A'線より下の領域では畿内系の甕の5があり、異質である。CaOの値が低い領域には非在地の高坏39があるが、これはVグループに属するものと同じではなかろうか。

以上の結果から明らかな様に在地の土器は3グループに分れ、3つの異なる集団を示唆している。畿内系のHbの強度が高い甕はIグループに属し、非在地としては明らかに異質である。非在地の土器は大きく分けて3グループに分れ、細分すると更に増える可能性が認められる。東海系の甕は非在地の土器と同

第4節 石川条里遺跡出土胎土分析

試料 No	タイプ 分類	焼成 ランク	組成分類		粘土鉱物および造岩鉱物															4CL~5CE
			Mo-Mi-Hb	Mo-Ch,Mi-Hb	Mont	Mica	Hb	Ch(Fe)	Ch(Mg)	Qt	Pl	Crist	Mullite	K-fels	Halloy	Kaol	Zeolite	Au	ガラス	古墳時代前期末
石川条里-11	F		8	20		60				2121	470									小型丸底
石川条里-12	C		6	20		122	446			923	292									甕-畿内?
石川条里-13	H		14	20						1805	300									甕?
石川条里-14	C		6	20		97	564			1286	332									甕-畿内?
石川条里-15	B		6	10		106	611	157		1096	595									甕-畿内?
石川条里-16	B		6	10		103	625	142		1589	659									甕-畿内?
石川条里-17	F		8	20		90				2438	292									甕?
石川条里-18	F		8	20		142				2757	244									甕
石川条里-19	E		8	8		129		197		2326	214									甕
石川条里-20	D		7	20		194	92			2163	165									連結増?
石川条里-21	D		7	20		146	68			2994	884									小型丸底
石川条里-22	H		14	20						2680	153	151								甕
石川条里-23	C		6	20		67	106			2079	303	100								甕-畿内?
石川条里-24	F		8	20		130				2631	230	102								甕
石川条里-25	C		6	20		72	135			2119	184									小型丸底
石川条里-26	D		7	20		92	65			2289	897			416						甕
石川条里-27	F		8	20		130				2740	292						86			甕
石川条里-28	D		7	20		120	61			3106	310									小型丸底
石川条里-29	H		14	20				168		2798	433									甕
石川条里-30	A		5	20			63			2206	174									甕-新潟
石川条里-31	D		7	20		115	111			3107	803									台付甕-東海?
石川条里-32	F		8	20		161				2985	245									台付甕-東海?
石川条里-33	F		8	20		142				3678	257									台付甕-東海?
石川条里-34	F		8	20		112				2734	730			421						甕
石川条里-35	F		8	20		107				2896	532									甕
石川条里-36	F		8	20		106				3756	271									甕
石川条里-37	F		8	20		134				2924	328							155		甕
石川条里-38	D		7	20		123	69			2808	271								148	高坏
石川条里-39	F		8	20		46				2423	95									高坏
石川条里-40	H		14	20						2352	157									小型丸底
石川条里-41	H		14	20						2600	119			205						高坏
石川条里-42	A		5	20			107			2304	394									高坏
石川条里-43	F		8	20		106				3207	199							119		小型丸底
石川条里-44	D		7	20		104	28			2519	277								124	高坏
石川条里-45	D		7	20		78	64			2823	321									高坏
石川条里-46	F		8	20		87				2597	209								129	高坏
石川条里-47	F		8	20		119				3280	270									高坏
石川条里-48	F		8	20		110				3023	269									高坏
石川条里-49	F		8	20		113				2934	328								132	高坏
石川条里-50	D		7	20		69	52			3244	293								156	高坏
石川条里-61	C		6	20		98	103			1594	571	214								高坏-在地
石川条里-62	A		5	20			118			1846	284			134						高坏-在地
石川条里-63	A		5	20			133			1772	775	171								高坏-在地
石川条里-64	C		6	20		81	146			2007	473	268					115			小型甕-在地
石川条里-65	A		5	20			117			1327	515									小型甕-在地
石川条里-66	A		5	20			101			1276	845									小型甕-在地
石川条里-67	A		5	20			70			1156	908	136	48							甕-在地
石川条里-68	A		5	20			136			1108	358									甕-在地
石川条里-69	A		5	20			65			1424	299									甕-在地
石川条里-70	A		5	20			205			2380	365	179								甕-在地

試料 No	タイプ 分類	焼成 ラング	組成分類		粘土鉱物および造岩鉱物														4CL~5CE	
			Mo-Mi-Hb	Mo-Ch,Mi-Hb	Mont	Mica	Hb	Ch(Fe)	Ch(Mg)	Qt	Pl	Crist	Mullite	K-fels	Halloy	Kaol	Zeolite	Au	ガラス	古墳時代前期末
石川条里-71	A		5	20			74			919	676	123								壺-在地
石川条里-72	A		5	20			82			1049	488	152								壺-在地
石川条里-73	D		7	20		91	88			1599	311									壺-在地
石川条里-74	H		14	20						800	204	238	51							壺-在地
石川条里-75	A		5	20			234			1511	459									壺-在地
石川条里-76	A		5	20			104			1427	443									壺-在地
石川条里-77	A		5	20			77			1544	361	180		465						壺-在地
石川条里-78	E		8	8			89	162		1685	709									壺-在地
石川条里-79	H		14	20				144		786	405									壺-在地
石川条里-80	A		5	20			101			1473	786							151		壺-在地
石川条里-81	A		5	20			90			1376	639	152								壺-在地
石川条里-82	A		5	20			198			824	373	212								壺-在地
石川条里-83	A		5	20			96			1718	570									壺-在地
石川条里-84	A		5	20			77			1228	445	133								壺-在地
石川条里-85	A		5	20			122			1921	409									壺-在地
石川条里-86	A		5	20			148			1603	550	169								壺-在地
石川条里-87	A		5	20			210			1214	412									小型丸底-在地

付-表14 化学分析表

試料番号	Na ₂ O	MgO	Al ₂ O ₃	SiO ₂	K ₂ O	CaO	TiO ₂	MnO	Fe ₂ O ₃	NiO	Total	古墳時代前期末
石川条里-1	0.38	0.99	21.49	67.70	3.08	0.41	0.98	0.11	4.29	0.56	99.99	壺
石川条里-2	0.46	1.49	25.42	61.84	3.39	0.89	1.00	0.37	5.13	0.00	99.99	小型丸底
石川条里-3	0.50	0.81	19.34	68.95	2.13	0.79	1.34	0.00	5.69	0.45	100.00	台付甕-東海?
石川条里-4	1.12	1.27	23.79	58.66	2.66	1.00	1.32	0.05	10.12	0.00	99.99	小型丸底
石川条里-5	1.48	4.48	19.17	59.68	3.55	1.47	1.15	0.24	8.71	0.08	100.01	甕-畿内?
石川条里-6	0.63	1.18	27.45	58.61	2.55	0.96	1.08	0.27	7.04	0.23	100.00	甕
石川条里-7	1.18	0.94	21.32	66.08	2.38	0.76	0.80	0.34	6.11	0.09	100.00	甕
石川条里-8	0.92	0.81	22.18	64.61	1.71	0.72	0.87	0.36	7.82	0.00	100.00	甕
石川条里-9	0.92	1.12	26.28	61.49	2.69	0.84	1.07	0.20	5.38	0.00	99.99	甕-畿内?
石川条里-10	0.95	0.98	25.65	61.58	2.53	1.16	0.97	0.06	5.93	0.19	100.00	甕-畿内?
石川条里-11	0.63	0.56	27.81	59.27	3.44	0.57	1.06	0.00	6.63	0.02	99.99	小型丸底
石川条里-12	1.04	2.08	28.95	55.02	1.89	1.87	1.31	0.18	7.44	0.23	100.01	甕-畿内?
石川条里-13	1.17	0.35	22.70	65.16	2.02	1.38	0.74	0.00	6.48	0.00	100.00	壺?
石川条里-14	1.13	2.19	25.63	54.81	1.61	2.20	1.29	0.27	10.53	0.34	100.00	甕-畿内?
石川条里-15	0.95	2.03	26.92	56.53	1.75	1.98	1.15	0.00	8.69	0.01	100.01	甕-畿内?
石川条里-16	0.71	2.12	27.26	56.69	1.64	1.92	1.33	0.52	7.44	0.37	100.00	甕-畿内?
石川条里-17	0.71	0.43	29.59	58.22	2.72	0.75	1.09	0.00	6.48	0.00	99.99	甕?
石川条里-18	0.60	1.12	24.38	64.80	2.77	0.69	0.89	0.00	4.76	0.00	100.01	甕
石川条里-19	0.41	1.29	20.12	61.64	4.51	0.64	0.96	0.02	10.41	0.00	100.00	壺
石川条里-20	0.06	0.79	26.62	61.00	2.98	0.89	1.27	0.00	6.01	0.38	100.00	連結罎?
石川条里-21	1.25	1.49	19.34	68.49	3.83	0.75	0.83	0.00	3.65	0.37	100.00	小型丸底
石川条里-22	0.78	1.19	19.61	68.43	3.20	0.84	1.06	0.00	4.85	0.04	100.00	甕
石川条里-23	0.87	1.04	19.01	67.08	3.24	0.95	0.73	0.27	6.82	0.00	100.01	甕-畿内?
石川条里-24	0.28	1.02	20.11	68.87	4.43	0.39	0.89	0.00	3.94	0.08	100.01	壺
石川条里-25	0.79	2.96	23.05	56.94	2.69	1.08	1.78	0.00	10.72	0.00	100.01	小型丸底
石川条里-26	1.09	0.96	21.41	66.83	2.53	0.98	0.85	0.25	4.92	0.18	100.00	甕
石川条里-27	0.52	1.35	19.88	66.81	4.64	0.56	0.83	0.14	5.10	0.16	99.99	壺
石川条里-28	0.64	1.32	23.13	64.54	3.47	0.58	1.08	0.12	5.02	0.10	100.00	小型丸底
石川条里-29	0.96	0.77	20.06	68.82	2.16	1.09	1.12	0.00	4.83	0.20	100.01	壺
石川条里-30	0.80	0.94	23.41	65.43	2.56	0.64	1.06	0.00	5.09	0.08	100.01	甕-新潟

試料番号	Na ₂ O	MgO	Al ₂ O ₃	SiO ₂	K ₂ O	CaO	TiO ₂	MnO	Fe ₂ O ₃	NiO	Total	古墳時代前期末
石川条里-31	1.33	0.77	22.80	61.95	2.89	1.02	1.20	0.00	8.04	0.00	100.00	台付甕-東海?
石川条里-32	0.47	0.66	26.38	63.66	2.67	0.72	1.53	0.00	3.91	0.00	100.00	台付甕-東海?
石川条里-33	0.37	0.71	25.88	63.25	2.94	0.87	1.56	0.03	4.40	0.00	100.01	台付甕-東海?
石川条里-34	0.80	0.70	25.67	64.14	3.85	0.79	0.65	0.00	3.40	0.00	100.00	甕
石川条里-35	0.79	0.64	26.51	62.83	4.23	0.66	0.87	0.00	3.47	0.00	100.00	甕
石川条里-36	0.48	0.52	24.27	67.09	2.67	0.83	1.10	0.09	2.94	0.01	100.00	甕
石川条里-37	0.55	0.33	25.76	64.90	2.68	0.60	0.72	0.25	4.22	0.00	100.01	甕
石川条里-38	0.43	1.03	23.97	63.86	3.41	0.61	1.00	0.32	4.99	0.38	100.00	高坏
石川条里-39	0.38	0.65	22.12	60.76	3.45	0.15	0.64	0.00	11.52	0.34	100.01	高坏
石川条里-40	0.88	0.86	20.97	65.98	2.88	0.76	0.90	0.00	6.50	0.27	100.00	小型丸底
石川条里-41	0.82	1.35	19.07	66.63	5.07	0.27	0.59	0.24	5.97	0.00	100.01	高坏
石川条里-42	0.68	1.05	25.05	64.44	1.46	0.97	1.01	0.00	5.29	0.05	100.00	高坏
石川条里-43	0.66	0.90	18.58	68.96	4.86	0.25	0.70	0.00	5.10	0.00	100.01	小型丸底
石川条里-44	0.68	1.07	20.98	65.75	3.84	0.61	0.90	0.20	5.69	0.28	99.99	高坏
石川条里-45	0.90	1.34	22.29	65.48	2.83	0.55	1.05	0.06	5.49	0.00	99.99	高坏
石川条里-46	0.84	1.13	18.23	70.17	3.81	0.50	0.64	0.02	4.59	0.08	100.01	高坏
石川条里-47	0.52	1.21	20.10	66.27	4.73	0.60	0.70	0.00	5.87	0.00	100.00	高坏
石川条里-48	0.05	0.88	29.10	62.48	2.40	0.40	0.80	0.00	3.90	0.00	100.01	高坏
石川条里-49	0.76	1.00	20.18	69.02	3.91	0.59	0.99	0.01	3.25	0.29	100.00	高坏
石川条里-50	1.34	1.16	18.31	69.52	3.25	0.62	0.76	0.00	4.95	0.09	100.00	高坏
石川条里-51	0.37	1.27	24.68	64.62	3.16	0.48	1.11	0.14	4.11	0.05	99.99	甕-畿内?
石川条里-52	0.38	1.08	19.52	63.79	4.48	0.74	0.87	0.07	8.84	0.24	100.01	高坏
石川条里-53	0.16	1.08	26.40	58.42	2.21	0.70	1.06	0.00	9.90	0.06	99.99	高坏
石川条里-54	0.50	0.54	26.48	65.06	1.84	0.61	1.26	0.00	3.15	0.55	99.99	壺
石川条里-55	0.66	0.99	24.59	62.23	2.88	0.91	1.02	0.02	6.71	0.00	100.01	甕
石川条里-56	0.40	0.75	21.84	66.00	2.20	0.82	0.84	0.21	6.84	0.10	100.00	甕
石川条里-57	0.76	0.93	22.33	61.32	2.44	0.98	1.01	0.07	9.91	0.24	99.99	甕
石川条里-58	1.87	1.35	22.19	60.29	1.33	2.17	1.39	0.27	8.82	0.32	100.00	小型丸底-在地
石川条里-59	1.06	1.16	22.37	59.58	1.50	1.76	1.49	0.04	11.04	0.00	100.00	高坏-在地
石川条里-60	0.94	1.12	20.80	62.81	2.48	1.20	1.16	0.00	9.47	0.03	100.01	高坏-在地
石川条里-61	1.35	0.93	23.40	63.09	1.65	2.10	2.12	0.00	5.03	0.33	100.00	高坏-在地
石川条里-62	0.98	0.93	19.91	63.27	1.82	0.81	1.50	0.16	10.43	0.19	100.00	高坏-在地
石川条里-63	1.21	1.09	20.15	62.06	1.48	1.49	1.21	0.68	10.53	0.11	100.01	高坏-在地
石川条里-64	0.92	0.92	20.01	60.44	1.98	1.19	1.09	0.17	13.28	0.00	100.00	小型壺-在地
石川条里-65	1.58	1.11	21.03	60.66	1.35	2.20	1.04	0.25	10.74	0.05	100.01	小型壺-在地
石川条里-66	1.61	0.83	21.91	61.44	1.67	1.79	1.49	0.21	8.73	0.33	100.01	小型壺-在地
石川条里-67	1.26	1.27	21.31	59.79	1.42	2.16	1.30	0.07	11.11	0.33	100.02	壺-在地
石川条里-68	1.40	1.31	21.03	63.88	1.46	1.95	1.18	0.21	7.59	0.00	100.01	壺-在地
石川条里-69	0.93	0.99	20.75	59.23	2.25	1.41	1.50	0.53	12.40	0.00	99.99	壺-在地
石川条里-70	1.16	0.70	21.09	65.49	2.56	1.04	1.46	0.14	6.26	0.10	100.00	壺-在地
石川条里-71	1.07	1.21	23.45	56.70	1.22	2.26	1.12	0.27	12.54	0.17	100.01	壺-在地
石川条里-72	1.57	1.45	22.04	60.99	1.36	1.95	1.08	0.22	9.34	0.00	100.00	壺-在地
石川条里-73	0.97	0.44	22.48	63.38	2.54	1.40	1.17	0.00	7.61	0.00	99.99	壺-在地
石川条里-74	1.18	1.79	22.03	57.02	1.90	1.93	1.49	0.10	12.42	0.15	100.01	壺-在地
石川条里-75	1.25	1.16	24.33	59.21	1.09	2.39	1.46	0.38	8.43	0.32	100.02	壺-在地
石川条里-76	1.04	0.98	22.42	63.57	1.29	1.58	1.02	0.64	7.14	0.32	100.00	壺-在地
石川条里-77	1.07	0.77	20.12	62.05	2.05	1.22	1.31	0.70	10.44	0.28	100.01	壺-在地
石川条里-78	1.19	0.96	22.05	63.58	1.25	1.29	1.61	0.14	7.65	0.26	99.98	壺-在地
石川条里-79	1.43	1.38	24.46	56.52	1.10	2.33	1.12	0.08	11.21	0.37	100.00	甕-在地
石川条里-80	1.46	1.35	21.53	59.42	1.43	2.37	1.40	0.29	10.74	0.00	99.99	甕-在地

試料番号	Na ₂ O	MgO	Al ₂ O ₃	SiO ₂	K ₂ O	CaO	TiO ₂	MnO	Fe ₂ O ₃	NiO	Total	古墳時代前期末
石川条里-81	0.78	0.77	22.53	60.31	1.40	1.15	1.35	0.00	11.38	0.32	99.99	甕-在地
石川条里-82	1.43	1.03	22.72	56.99	1.76	2.12	1.17	0.00	12.63	0.14	99.99	甕-在地
石川条里-83	1.06	0.64	22.42	64.30	1.54	1.09	1.39	0.08	7.35	0.13	100.00	甕-在地
石川条里-84	1.58	1.23	22.45	60.78	1.81	2.50	0.82	0.39	8.34	0.09	99.99	甕-在地
石川条里-85	1.13	0.71	21.65	65.48	2.29	0.93	1.50	0.00	6.20	0.10	99.99	甕-在地
石川条里-86	0.96	1.27	23.20	60.47	1.29	1.37	1.53	0.18	9.43	0.28	99.98	甕-在地
石川条里-87	1.03	1.39	22.76	57.65	1.57	1.86	1.62	0.56	11.21	0.36	100.01	小型丸底-在地

付-表15 タイプ分類一覧表

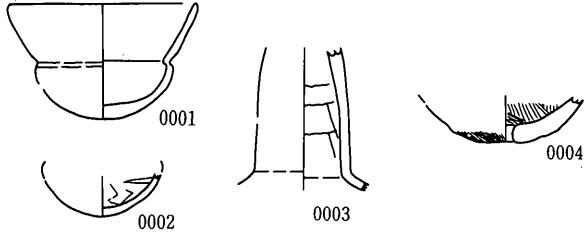
試料 No.	タイプ 分類	4CL~5CE		試料 No.	タイプ 分類	4CL~5CE		試料 No.	タイプ 分類	4CL~5CE	
		古墳時代前期末				古墳時代前期末				古墳時代前期末	
石川条里-1	A	壺		石川条里-14	C	甕-畿内?		石川条里-18	F	甕	
石川条里-30	A	甕-新潟		石川条里-23	C	甕-畿内?		石川条里-24	F	壺	
石川条里-42	A	高坏		石川条里-25	C	小型丸底		石川条里-27	F	壺	
石川条里-58	A	小型丸底-在地		石川条里-57	C	甕		石川条里-32	F	台付甕-東海?	
石川条里-59	A	高坏-在地		石川条里-61	C	高坏-在地		石川条里-33	F	台付甕-東海?	
石川条里-62	A	高坏-在地		石川条里-64	C	小型壺-在地		石川条里-34	F	甕	
石川条里-63	A	高坏-在地		石川条里-2	D	小型丸底		石川条里-35	F	甕	
石川条里-65	A	小型壺-在地		石川条里-4	D	小型丸底		石川条里-36	F	甕	
石川条里-66	A	小型壺-在地		石川条里-5	D	甕-畿内?		石川条里-37	F	甕	
石川条里-67	A	壺-在地		石川条里-6	D	甕		石川条里-39	F	高坏	
石川条里-68	A	壺-在地		石川条里-7	D	甕		石川条里-43	F	小型丸底	
石川条里-69	A	壺-在地		石川条里-9	D	甕-畿内?		石川条里-46	F	高坏	
石川条里-70	A	壺-在地		石川条里-20	D	連結埴?		石川条里-47	F	高坏	
石川条里-71	A	壺-在地		石川条里-21	D	小型丸底		石川条里-48	F	高坏	
石川条里-72	A	壺-在地		石川条里-26	D	甕		石川条里-49	F	高坏	
石川条里-75	A	壺-在地		石川条里-28	D	小型丸底		石川条里-54	F	壺	
石川条里-76	A	壺-在地		石川条里-31	D	台付甕-東海?		石川条里-55	F	甕	
石川条里-77	A	壺-在地		石川条里-38	D	高坏		石川条里-52	G	高坏	
石川条里-80	A	甕-在地		石川条里-44	D	高坏		石川条里-3	H	台付甕-東海?	
石川条里-81	A	甕-在地		石川条里-45	D	高坏		石川条里-13	H	壺?	
石川条里-82	A	甕-在地		石川条里-50	D	高坏		石川条里-22	H	甕	
石川条里-83	A	甕-在地		石川条里-51	D	甕-畿内?		石川条里-29	H	壺	
石川条里-84	A	甕-在地		石川条里-53	D	高坏		石川条里-40	H	小型丸底	
石川条里-85	A	甕-在地		石川条里-60	D	高坏-在地		石川条里-41	H	高坏	
石川条里-86	A	甕-在地		石川条里-73	D	壺-在地		石川条里-56	H	甕	
石川条里-87	A	小型丸底-在地		石川条里-19	E	壺		石川条里-74	H	壺-在地	
石川条里-15	B	甕-畿内?		石川条里-78	E	壺-在地		石川条里-79	H	甕-在地	
石川条里-16	B	甕-畿内?		石川条里-8	F	甕					
石川条里-10	C	甕-畿内?		石川条里-11	F	小型丸底					
石川条里-12	C	甕-畿内?		石川条里-17	F	甕?					

付一表16 胎土分析試料一覧(編者追加)

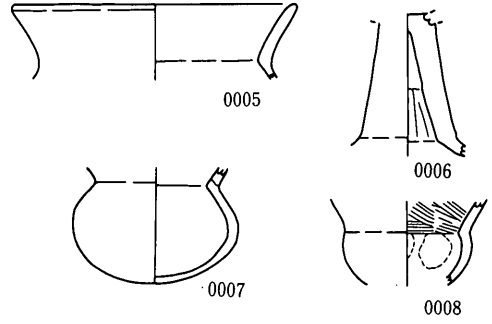
番号	出土遺構	出土地点	図番号	器種	胎土・土器の特長	備考
1	SK1041		0010	壺	灰白色砂粒多。	
2	SK2005	2-3層		小型丸底	灰白色雲母顕著で緻密。表面摩滅した口縁部破片。	
3	SK2005	No.30		甕	明灰白色 粒子細、わずかに砂含む。摩滅した胴部小片。	
4	SK2047	一括		台付甕	灰褐色で細砂多含。ハケ顕著。S字甕? 胴部小片。	
5	SK2080	一括		小型丸底	明褐色細砂多含雲母顕著。表面摩滅した口縁部小片。	
6	SK2106	No.3、5	0548	甕	明褐色緻密。布留甕?。 胴部小片。	
7	SK2108	No.14		甕	明褐色長石粒顕著。粒子やや粗。外面削り、内ハケの胴部破片	
8	SK2113	一括		甕	暗灰白色で白色角礫多含。外面縦ハケ、内横ハケ。胴部破片。	
9	SK2156	1層		甕	灰褐色で細砂多、石英・雲母顕著。薄手。布留甕?。胴部破片	
10		5、25、26、	1031	甕	赤褐色砂多-やや粒子粗。薄手。布留甕?	
	SK2268	1層				
11	SK2268	1層		小型丸底	灰褐色で緻密。砂粒細かい。摩滅した胴部小片。	
12	SK2280	No.7		甕	明褐色で緻密。薄手。布留甕。胴部破片。	
13	SK2285	一括		壺?	明褐色で白色砂粒顕著。砂やや粗い。弥生土器か。小片。	
14	SK2297	No.9		甕	灰褐色で全体粒子細かく、わずかに粗砂含む。布留甕か。	
15	SK2298	一括	1101	甕	灰白色で緻密。SK2297の1101と接合。布留甕口縁部。	
16	SK2347	一括		甕	明褐色で粒子細。外摩滅-内削り。薄手。布留甕か。小片。	
17	SK2355	一括		甕?	灰褐色粒子細。細雲母目立つ。摩滅した胴部小片。	
18	SK2362	一括		甕	灰褐色粒子細。チャート粒?等の砂僅混。外縦ハケの胴部小片	
19	SK2378	No.13		壺	灰白色粒子細。底部破片。	
20	SK2445	No.5		連結埴?	明灰褐色で緻密。砂含まず。摩滅した胴部小片。	
21	SK2473	一括		小型丸底	明灰褐色で緻密。摩滅した口縁部破片。	
22	SK2562	一括		甕	赤灰褐色で緻密。チャート等の粗砂僅含む。器形細不明小片	
23	SK2606	一括		甕	明褐色。細砂多く含む。薄手。布地の布留甕模倣品?。小片。	
24	SK2648	No.4、7、8、 9最下層	1491	壺	灰白色。細砂多く含む。風化酸化鉄粒?含む。土は布地に近いが、色調が異質。胴部~底部破片。	
25	SK2648	一括		小型丸底	明褐色。細砂多含。粒子は比較的均質。口縁部小片。	
26	SK2744	No.7		甕	暗灰褐色。砂粒多。白色角礫含。内・外面斜ハケナデ。小片。	
27	SK2744	No.7		壺	灰白褐色。砂粒多。SK2648の1491類似。胴部小片。	
28	SK2832	一括	1748	小型丸底	灰褐色で全体的に緻密。雲母顕著。口縁部破片。	
29	SK2843	No.34、55、56、 58、5、9、 2層	1777	壺	灰白色。砂多。白色角礫や風化酸化鉄粒含む。胎土は布地産の可能性はあるが、色調がやや異なる。胴部破片。	
30	SK2874	一括	1853	甕	灰白色。粗砂僅含。口縁部の形態は異質。口縁から胴部破片。	
31	SD1007	II ED17		台付甕	明褐色。細砂多含。外面斜ハケ。S字甕胴部破片?。	
32	SD1007	18		台付甕	灰褐色。細砂多含。外面斜ハケ。S字甕?。	
33	SD1007	II EF13		台付甕	灰褐色。細砂多含。外面斜ハケ。S字甕?。	
34	SD1007	II EE12	3602	甕	明褐色。全体的に粒子細。少量砂含む。在地?。	
35	SD1007	II EE10		甕	明灰褐色。細砂多含。形態は異質。頸部破片。	
36	SD1007	II EE13		甕	灰白色。砂多含み、長石・石英顕著。外面斜ハケ、内面ナデ。	
37	SD1007	II EE13		甕	暗灰白色。砂少含だが、長石・石英顕著。外ナデ。内ケズリ。	
38	SD1016	⑤-1区		高坏	灰褐色。細砂多含。風化酸化鉄粒や黒色の粒子顕著。精製。	納0293
39	SD1016	⑤-1区		高坏	赤褐色。細かい砂多く含む。精製	納0529
40	SD1016	⑤-1区		小型丸底	灰白色。粗砂多く含む。在地か。	納0690
41	SD1016	⑤-2区		高坏	明褐色。粒子細かく均質。精製。	納0796
42	SD1016	⑤-2区		高坏	灰白色。砂少し含む。精製。	納0886
43	SD1016	⑤-2区		小型丸底	灰白色。砂多含。風化酸化鉄粒顕著。	納1004
44	SD1016	⑤-2区		高坏	灰褐色。粒子細かく均質。精製。	納1183
45	SD1016	⑤-2区		高坏	明褐色。粒子細かく均質。精製。	納1304
46	SD1016	⑦-2区		高坏	暗灰白色。粒子細かく均質。精製。	納1526
47	SD1016	⑦-2区		高坏	明灰白色。粒子細かく均質。精製。	納1720
48	SD1016	⑦-2区		小型壺	灰白色。細砂多含。雲母顕著。精製。	納1775

49	SD1016	㉚-2区	3133	高坏	灰白色。粒子細かく均質。精製。	納1903
50	SD1016	㉛-1区	2842	高坏	灰褐色。粒子細かく均質。精製。	納2262
51	SD1016	㉜-1区	2518	甕	灰褐色。砂少し含む。布留甕。	納2407
52	SQ1002	No. 7		高坏	灰褐色。粒子細かく均質。精製。	
53	SQ2016	VRK04		高坏	暗灰色。あまり砂含まない。精製。外横ミガキ、内ナデ。	
54	SQ2016	VR L03		壺	灰白色。砂少含。口縁部破片。	
55	SQ2016	上面		甕	明灰白色で粗砂多含。摩滅破片。	
56	SQ2016	VR P06		甕	明灰白色で粗砂多含。外ケズリ、内ナデ。	
57	SQ2016	VR-8		甕	明褐色。細砂多含。外タテハケ、内ナデ。薄手の胴部少片。	
58	SK1033			小型丸底	明褐色。砂多含。	実測 1
59	SK1033		0082	高坏	明褐色。砂多含。	実測 2
60	SK1033		0083	高坏	明褐色。砂多含。	実測 3
61	SK1033		0084	高坏	明灰褐色。砂多含。若干粒子細かい。	実測 4
62	SK1033		0085	高坏	明褐色。砂多含。	実測 5
63	SK1033		0086	高坏	明褐色。砂多含。	実測 6
64	SK1033		0079	小型壺	明褐色。砂多含。	実測 7
65	SK1033		0080	小型壺	明褐色。砂多含。	実測 8
66	SK1033		0081	甕	明褐色。砂多含。	実測 9
67	SK1033		0061	壺	明褐色。砂多含。	実測10
68	SK1033		0064	壺	明褐色。砂多含。	実測11
69	SK1033		0065	壺	明褐色。砂多含。	実測12
70	SK1033		0066	壺	明褐色。砂多含。	実測13
71	SK1033		0068	壺	明褐色。砂多含。	実測14
72	SK1033		0076	壺	明褐色。砂多含。	実測15
73	SK1033		0075	壺	明褐色。砂多含。	実測16
74	SK1033		0059	壺	明褐色。砂多含。	実測17
75	SK1033		0060	壺	明褐色。砂多含。	実測18
76	SK1033		0069	壺	明褐色。砂多含。	実測19
77	SK1033		0062	壺	明褐色。砂多含。	実測20
78	SK1033		0063	壺	明褐色。砂多含。	実測21
79	SK1033		0077	甕	明褐色。砂多含。	実測22
80	SK1033		0070	甕	赤褐色。砂多含。	実測23
81	SK1033		0072	甕	明褐色。砂多含。	実測24
82	SK1033		0071	甕	明褐色。砂多含。	実測25
83	SK1033		0078	甕	明褐色。砂多含。	実測26
84	SK1033		0074	甕	明褐色。砂多含。	実測27
85	SK1033		0073	甕	明褐色。砂多含。	実測28
86	SK1033		0067	甕	明褐色。砂多含。粒子若干細かい。	実測29
87	SK1033		0087	小型丸底	明褐色。砂多含。	実測30

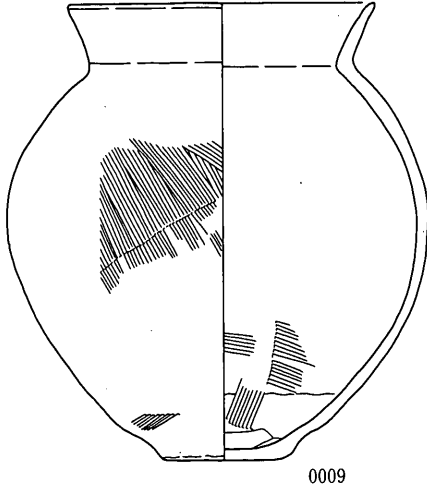
S K 1019



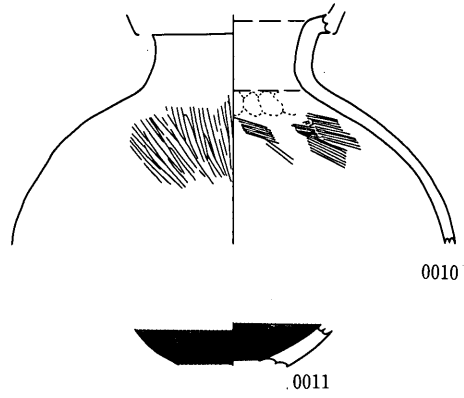
S K 1022



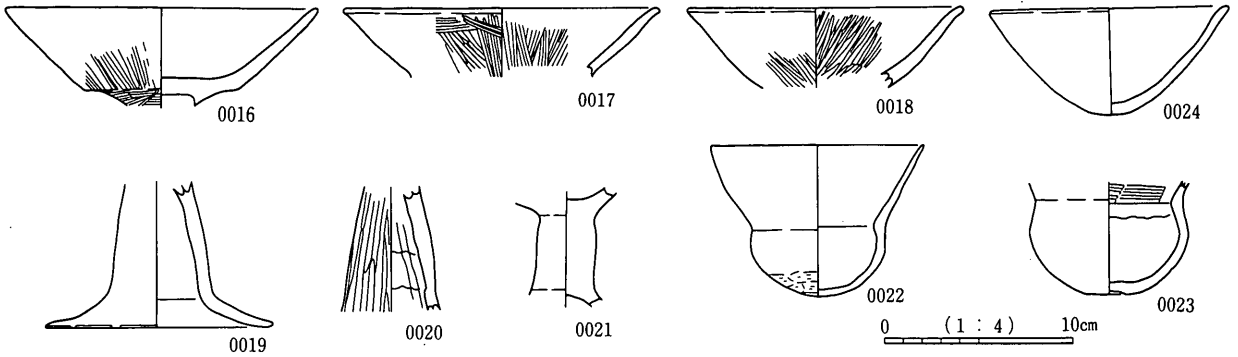
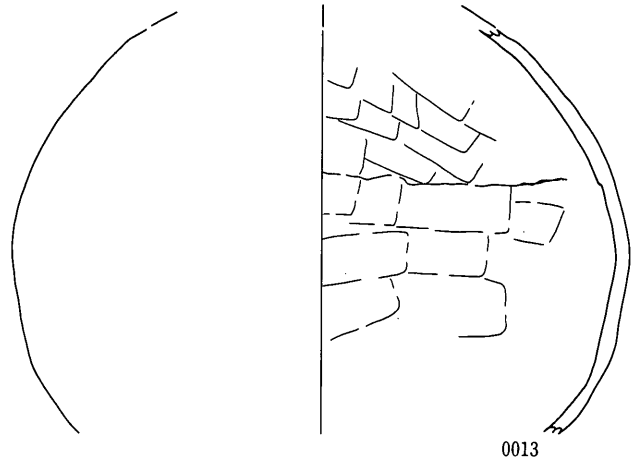
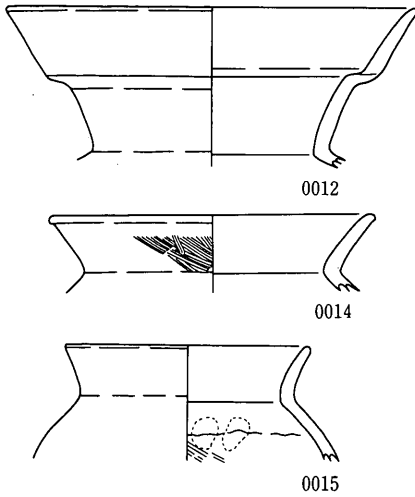
S K 1023



S K 1041

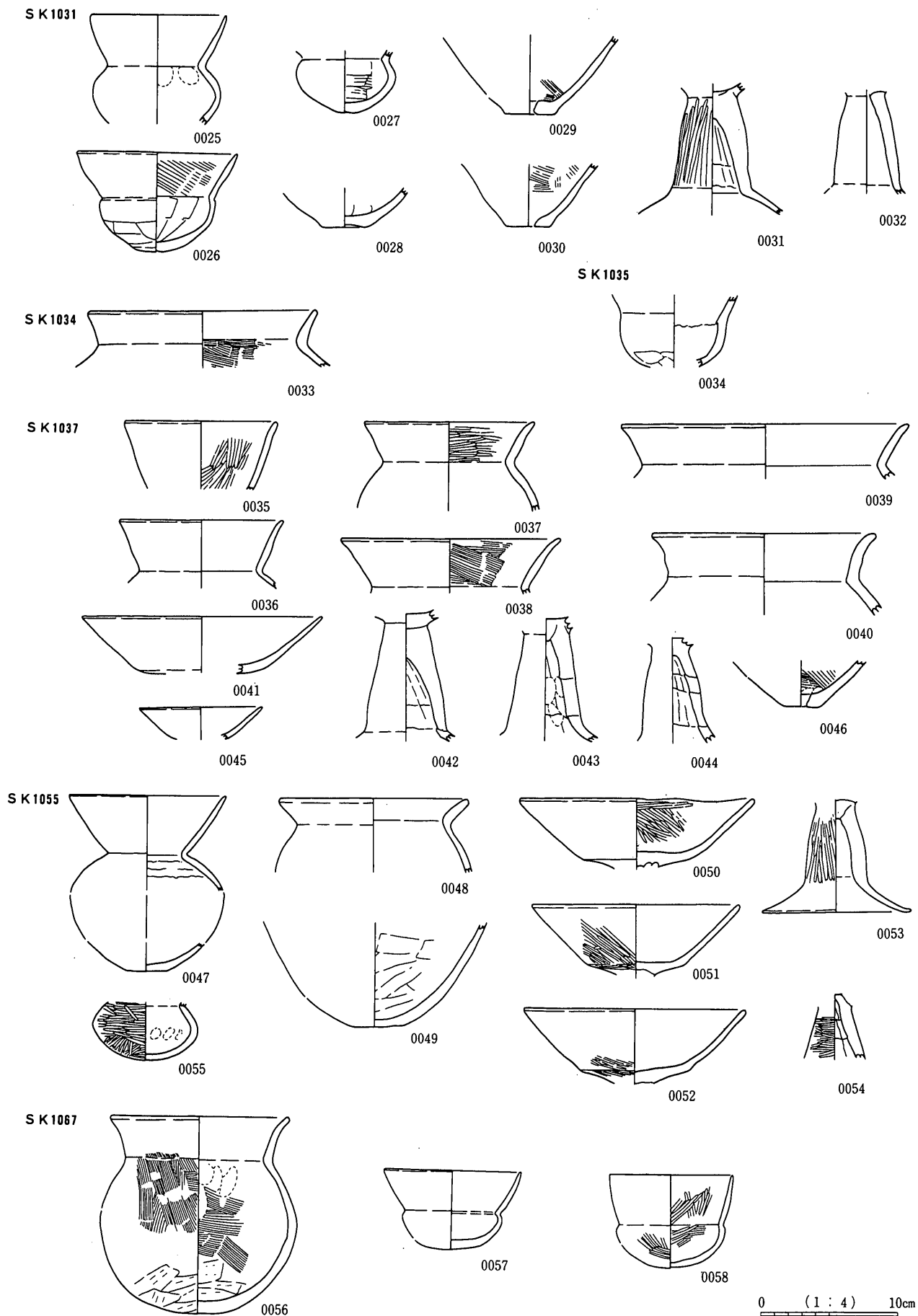


S K 1025



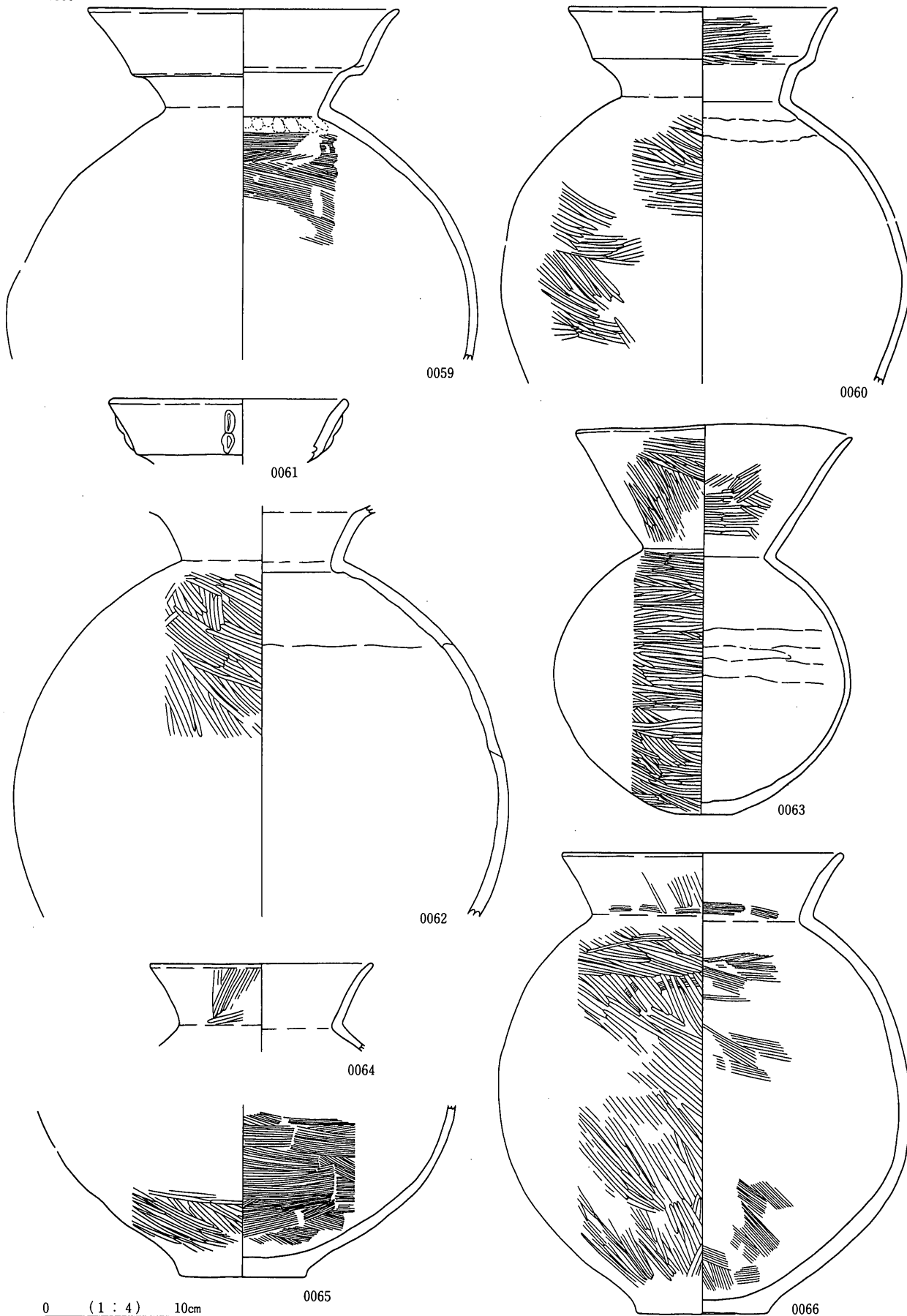
0 (1 : 4) 10cm

第209图 土坑出土土器 1 < S K 1019 (0001~0004) S K 1022 (0005~0008) S K 1023 (0009) S K 1025 (0012~0024) S K 1041 (0010 · 0011) >

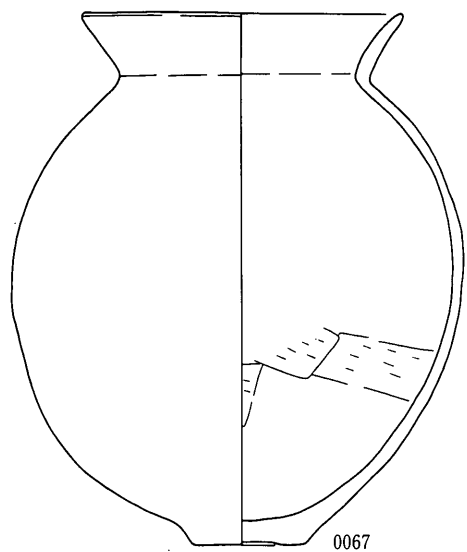


第210图 土坑出土土器 2 < SK1031 (0025~0032) SK1034 (0033) SK1035 (0034) SK1037 (0035~0046) SK1055 (0047~0055) SK1067 (0056~0058) >

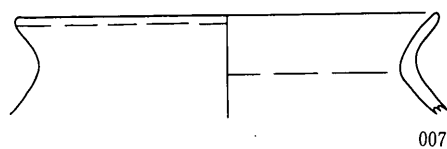
S K 1033



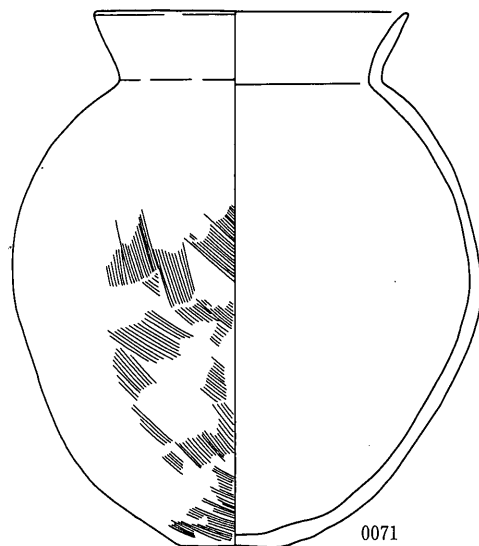
第211图 土坑出土土器 3 < S K 1033 (0059~0066) >



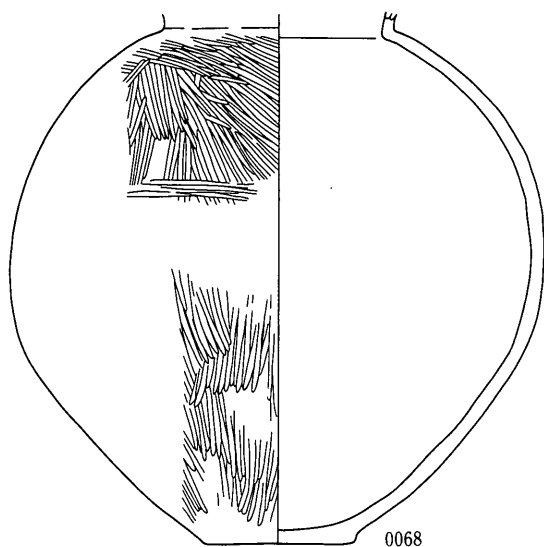
0067



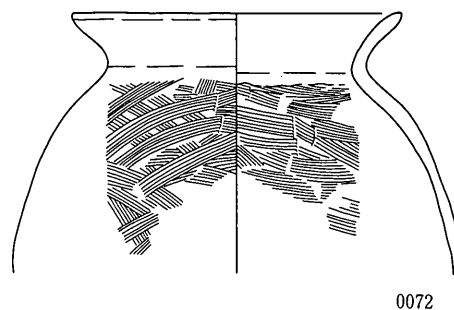
0070



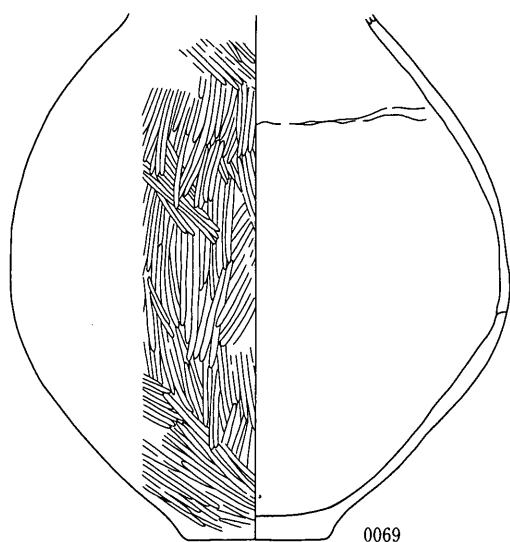
0071



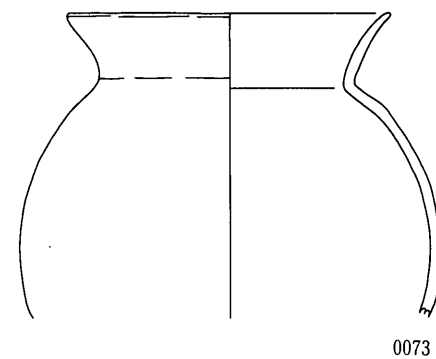
0068



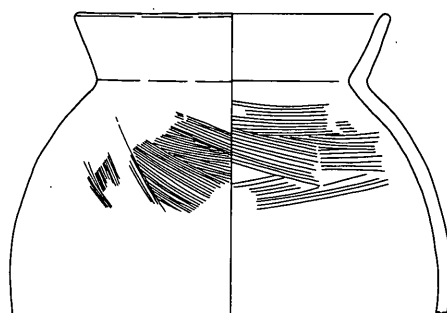
0072



0069



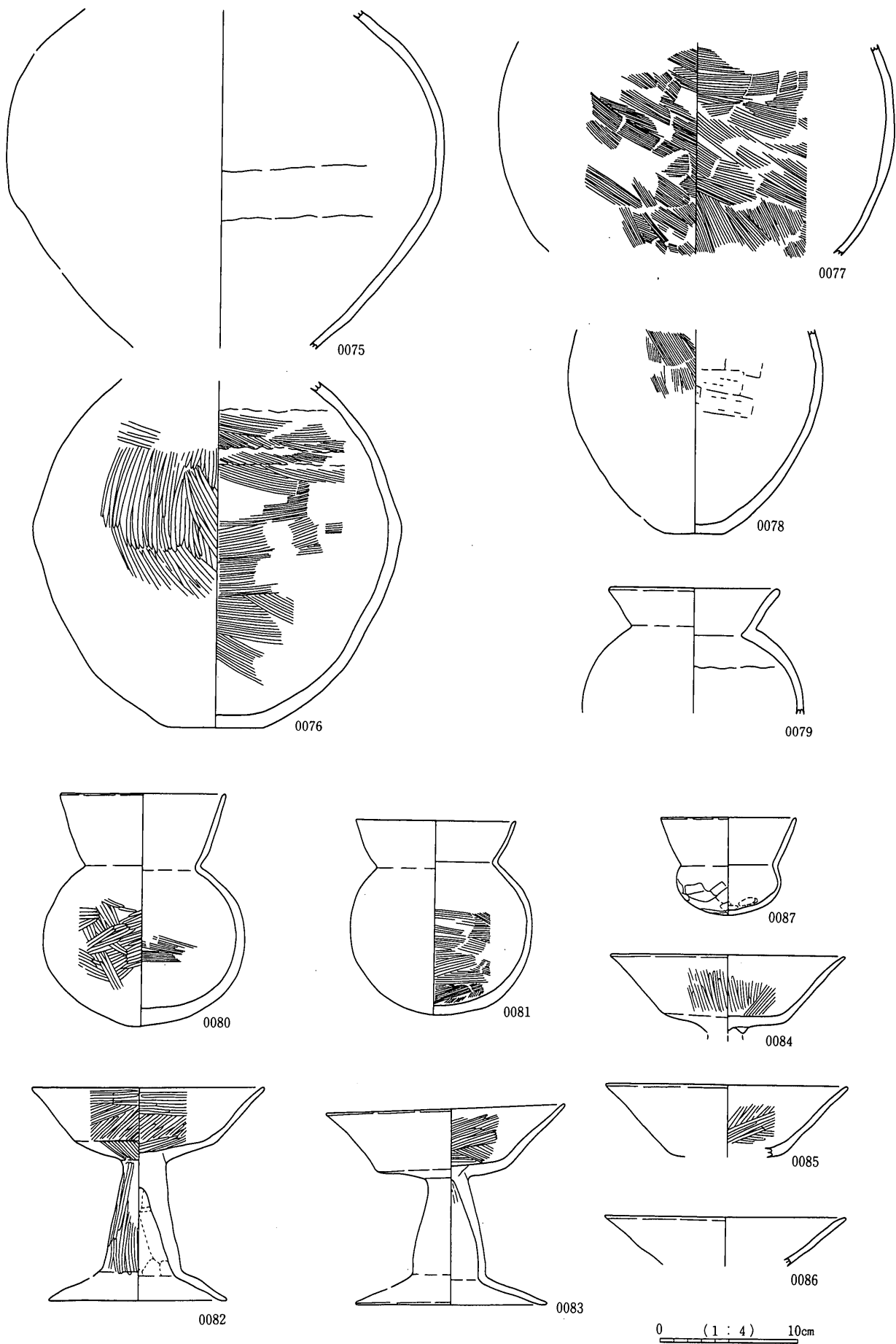
0073



0074

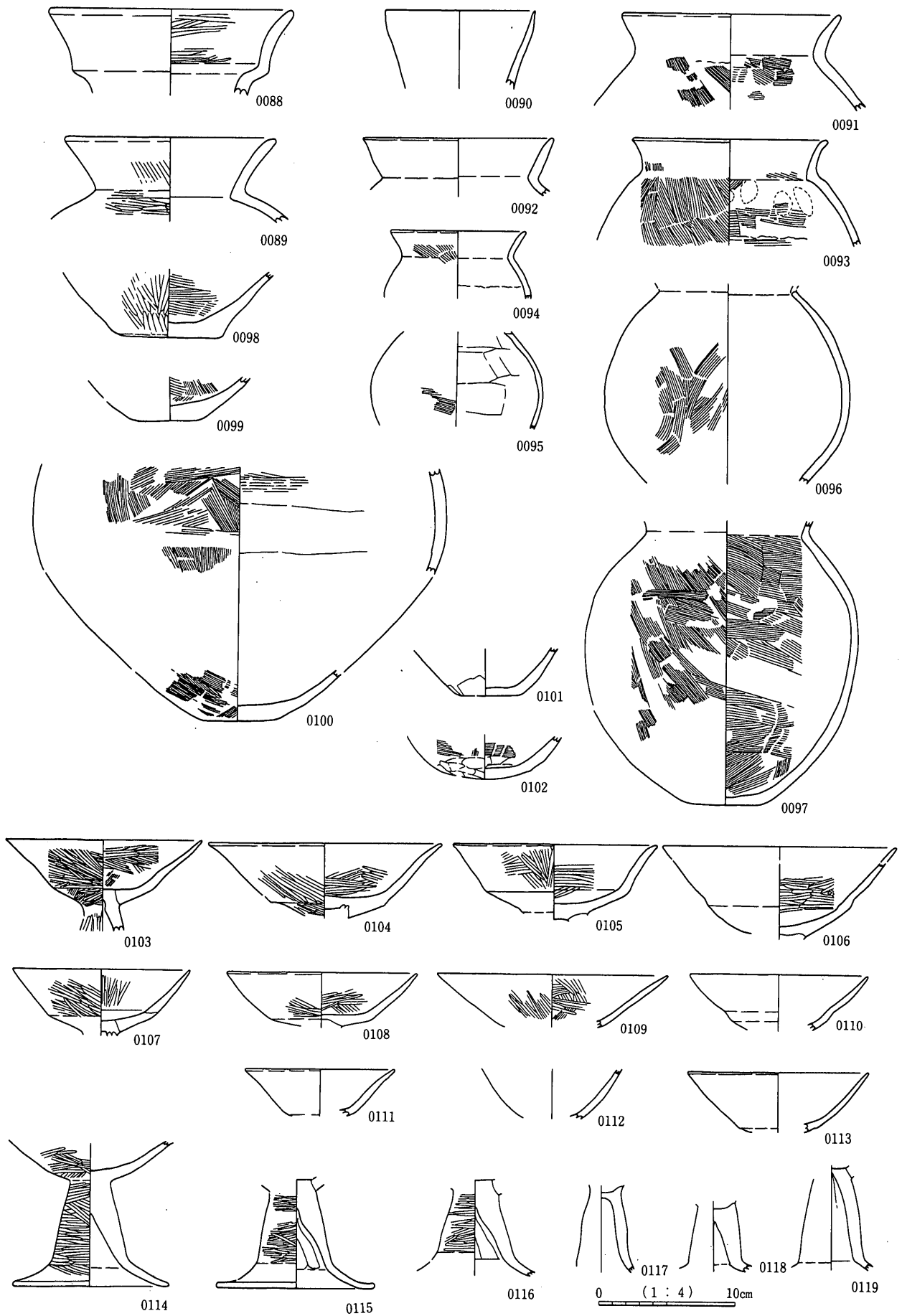
0 (1 : 4) 10cm

第212图 土坑出土土器4 < S K1033 (0067~0074) >

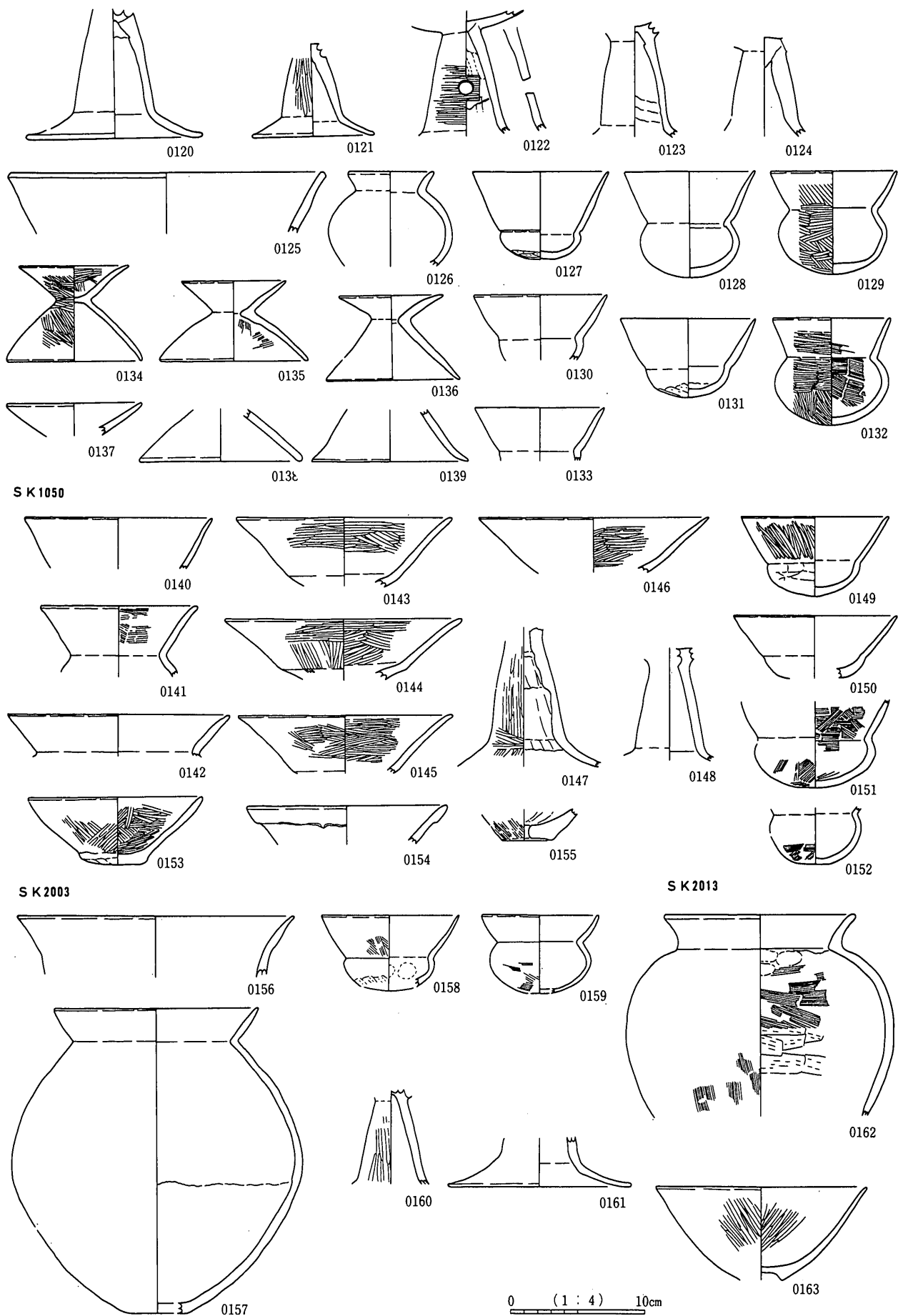


第213图 土坑出土土器5 <S K1033 (0075~0087)>

S K 1046

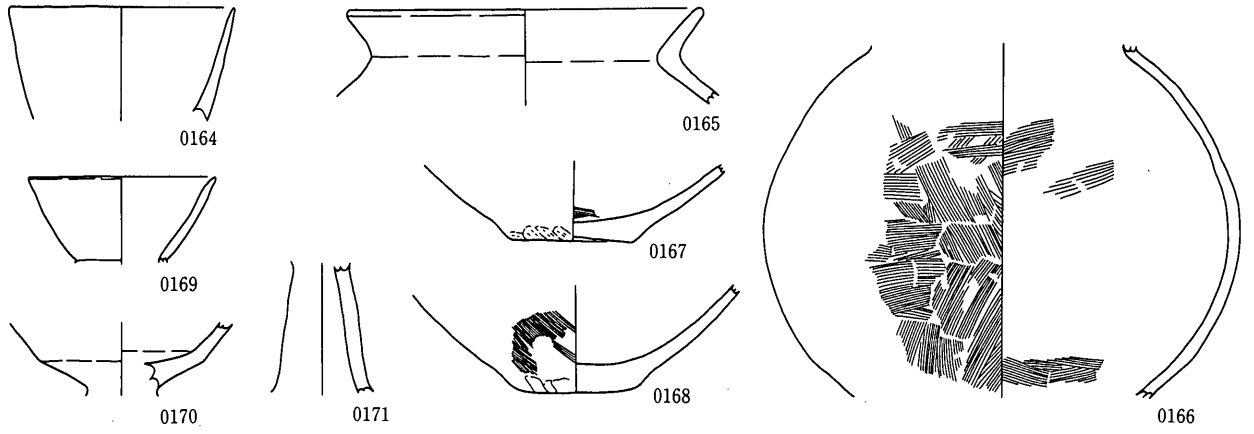


第214图 土坑出土土器6 < S K 1046 (0088~0119) >

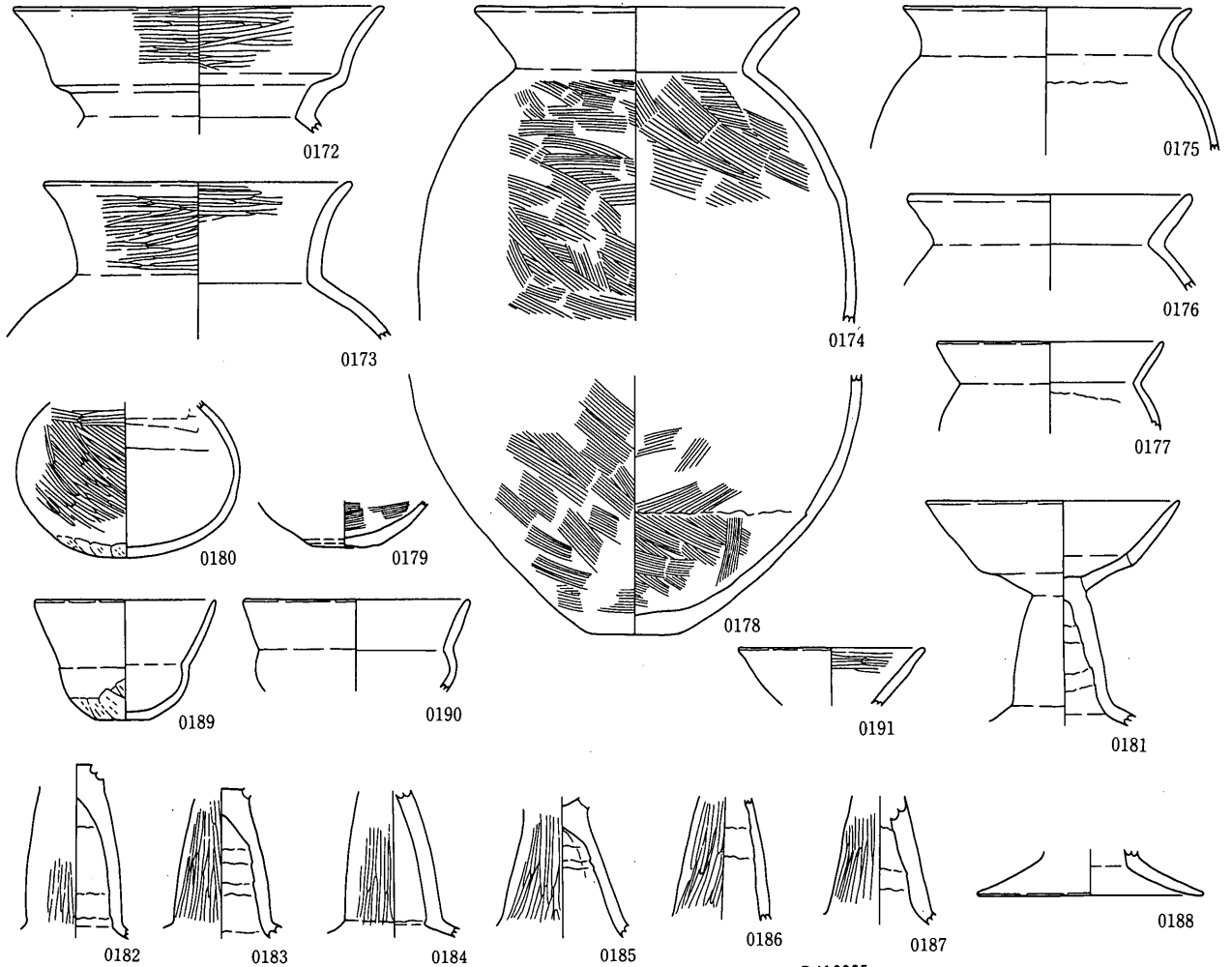


第215图 土坑出土土器 ? < S K1046 (0120~0139) S K1050 (0140~0155) S K2003 (0156~0161) S K2013 (0162·0163) >

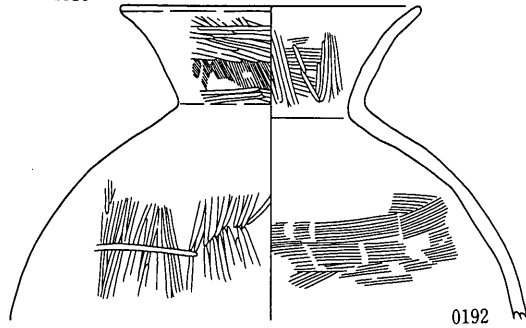
S K 2004



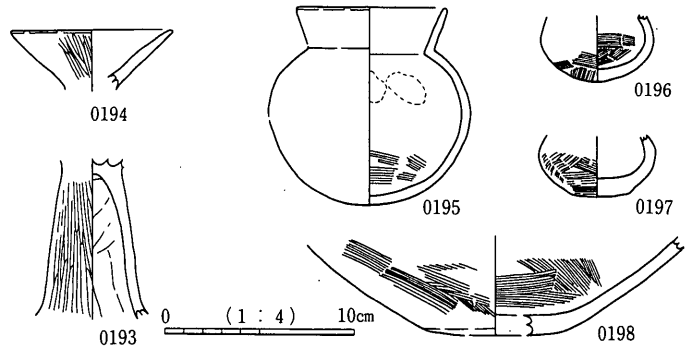
S K 2005



S K 2023

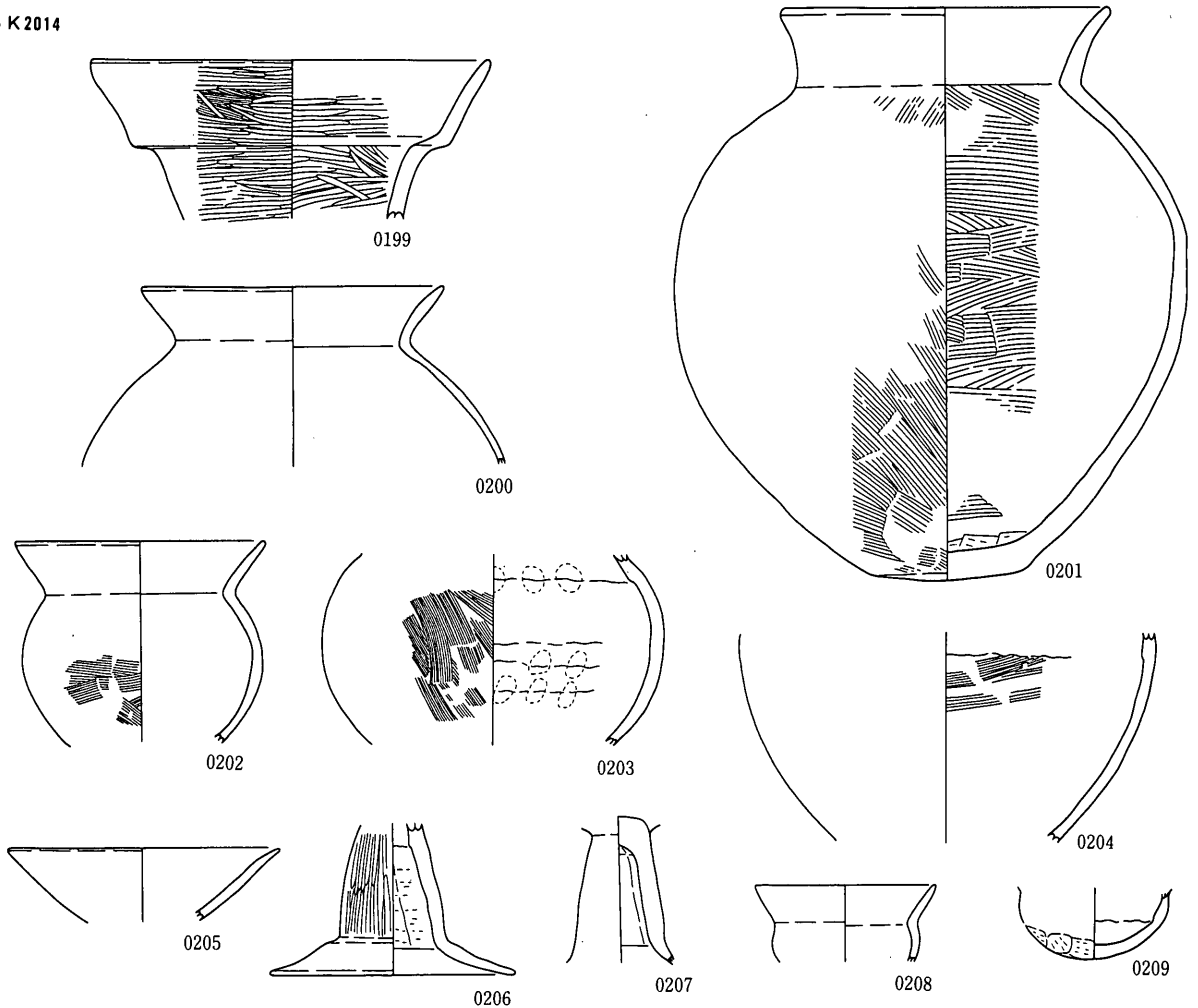


S K 2025

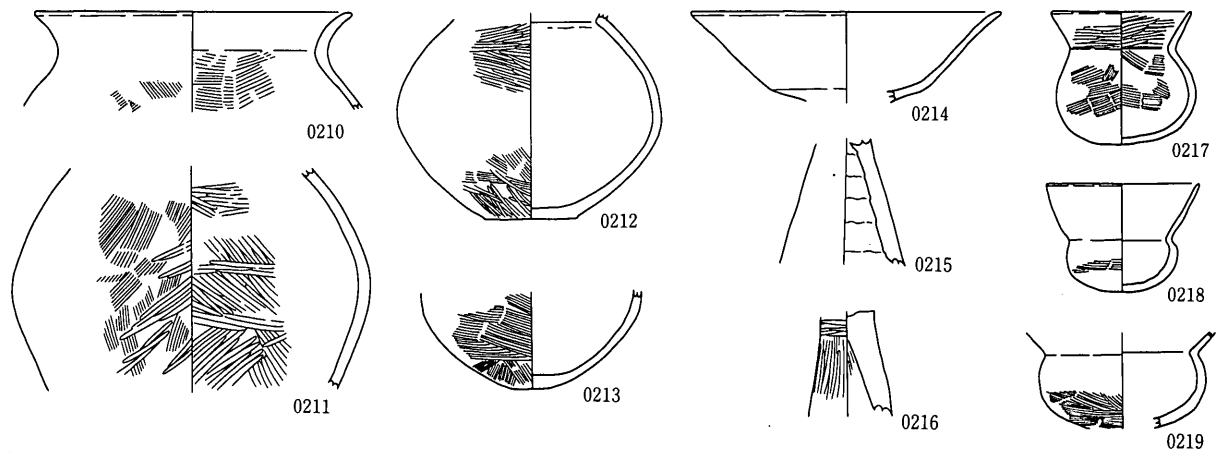


第216图 土坑出土土器 8 < S K 2004 (0164~0171) S K 2005 (0172~0191) S K 2023 (0192~0194) S K 2025 (0195~0198) >

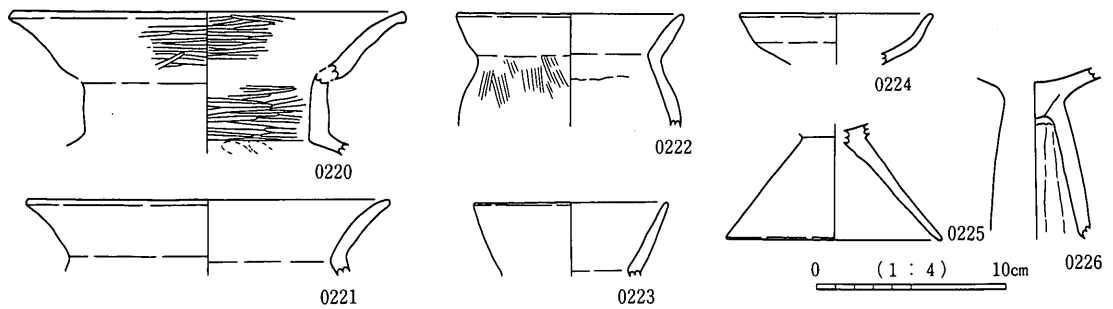
S K 2014



S K 2016

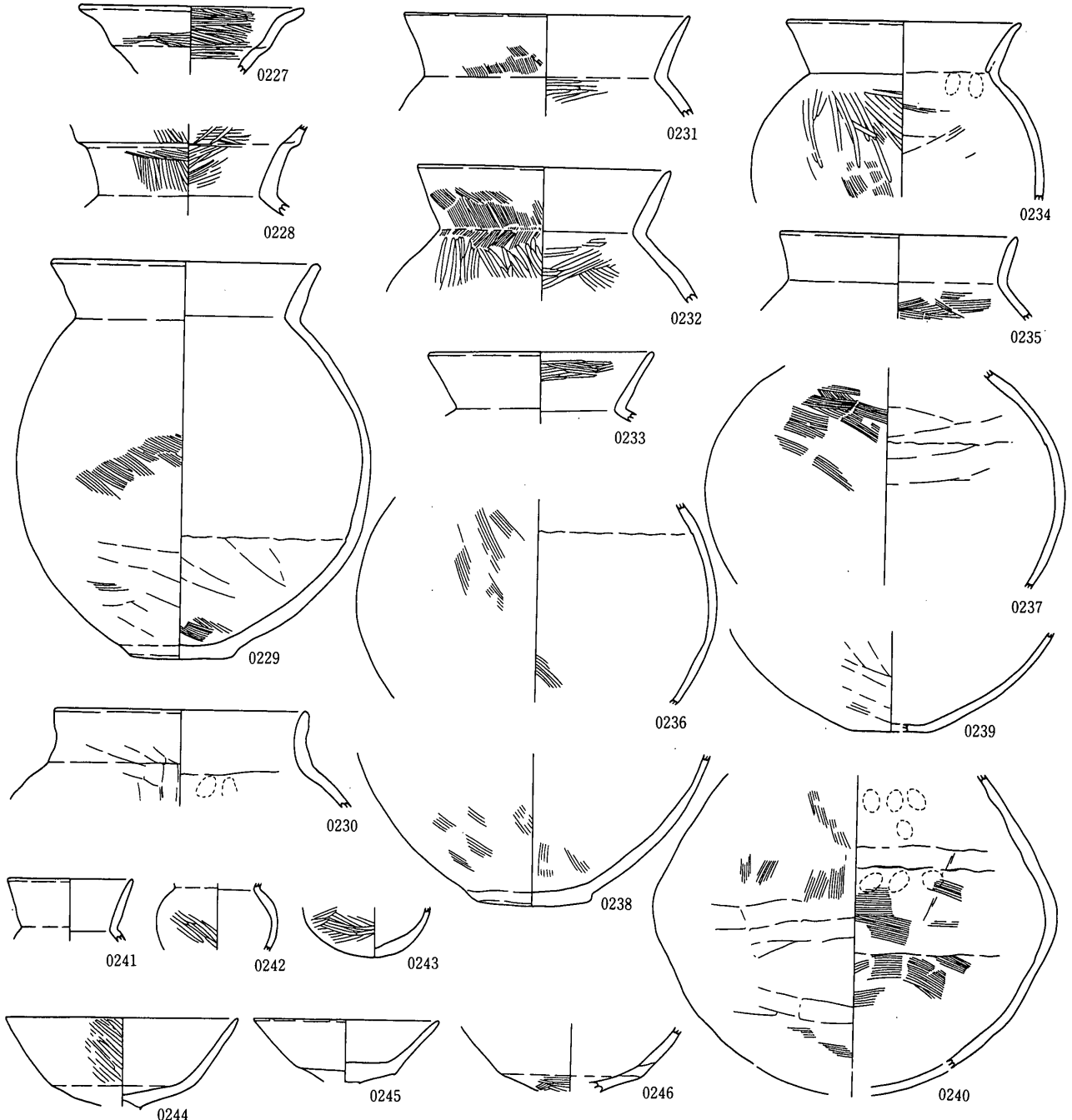


S K 2031

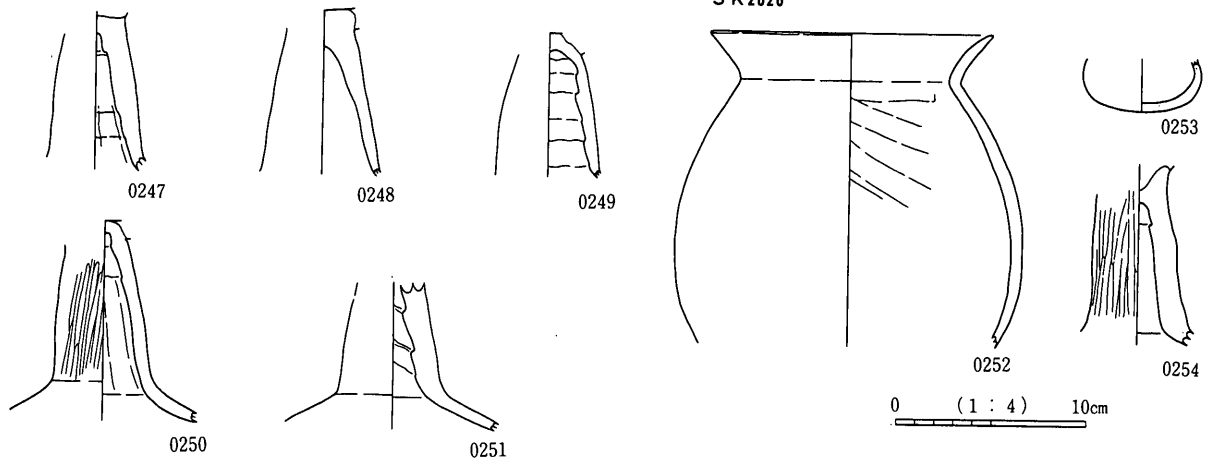


第217图 土坑出土土器 9 < S K 2014 (0199~0209) S K 2016 (0210~0219) S K 2031 (0220~0226) >

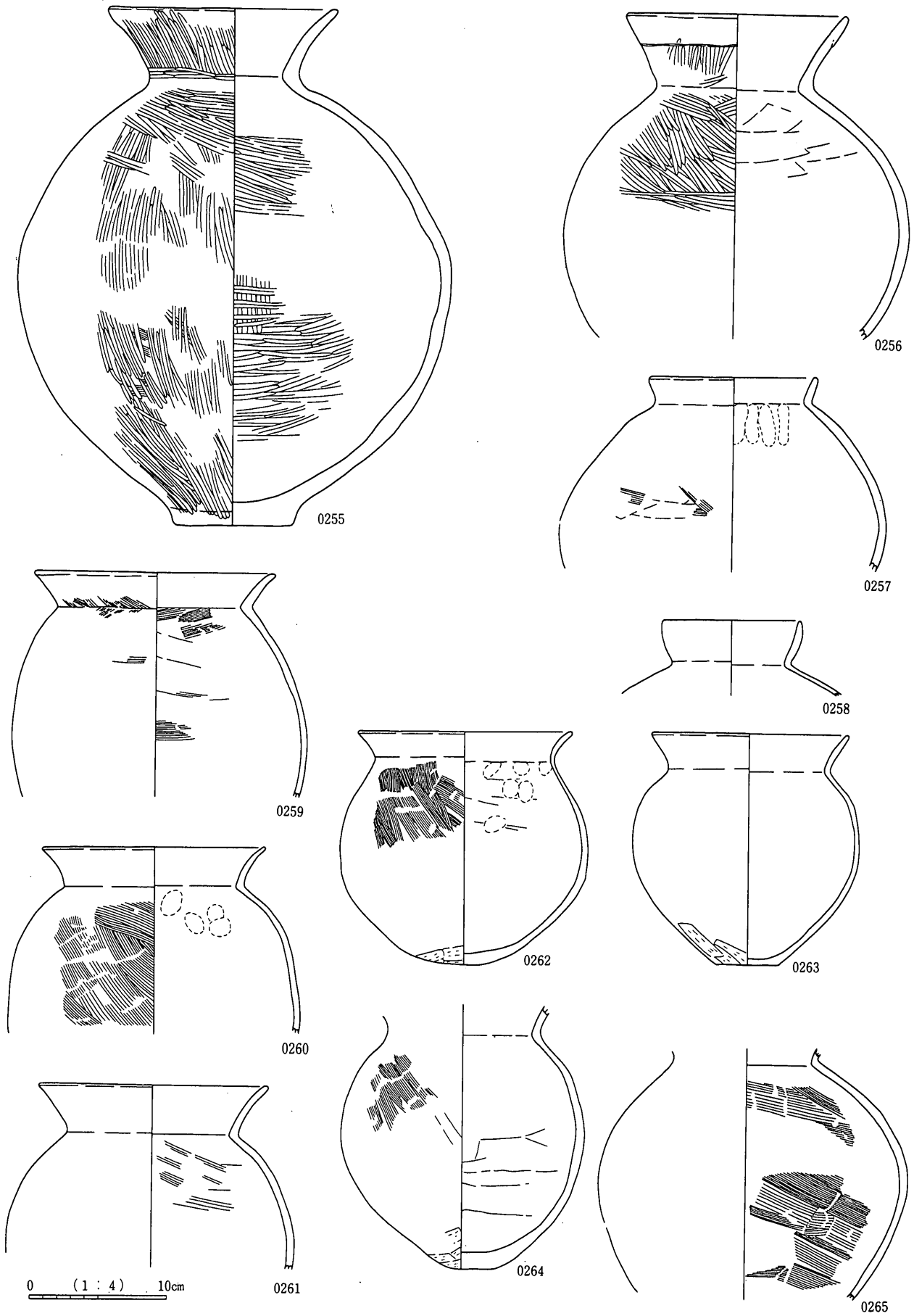
S K 2039



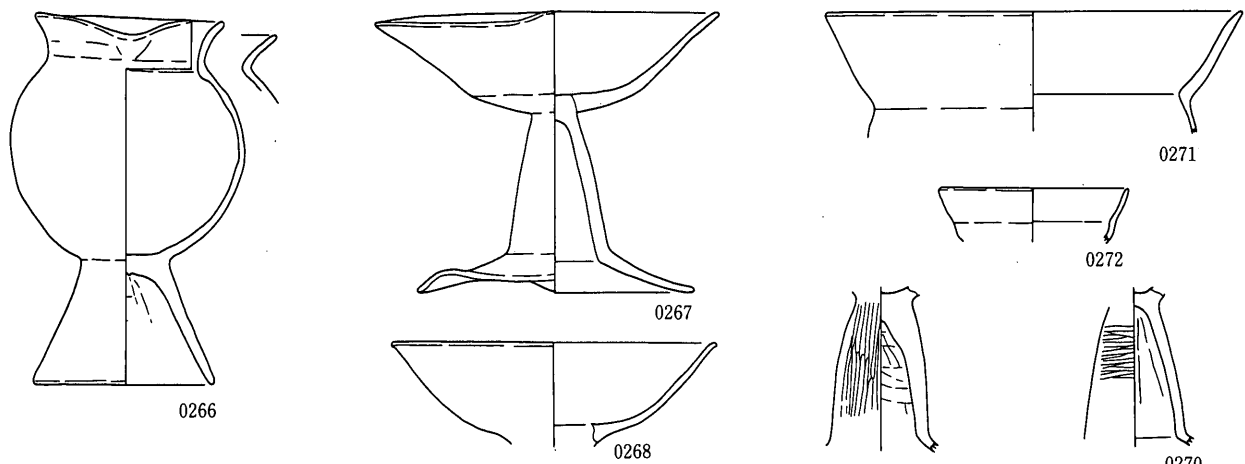
S K 2026



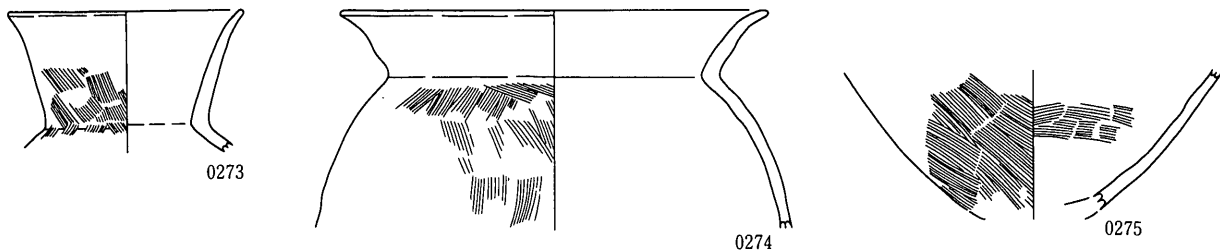
第218图 土坑出土土器10< S K 2026 (0252~0254) S K 2039 (0227~0251)>



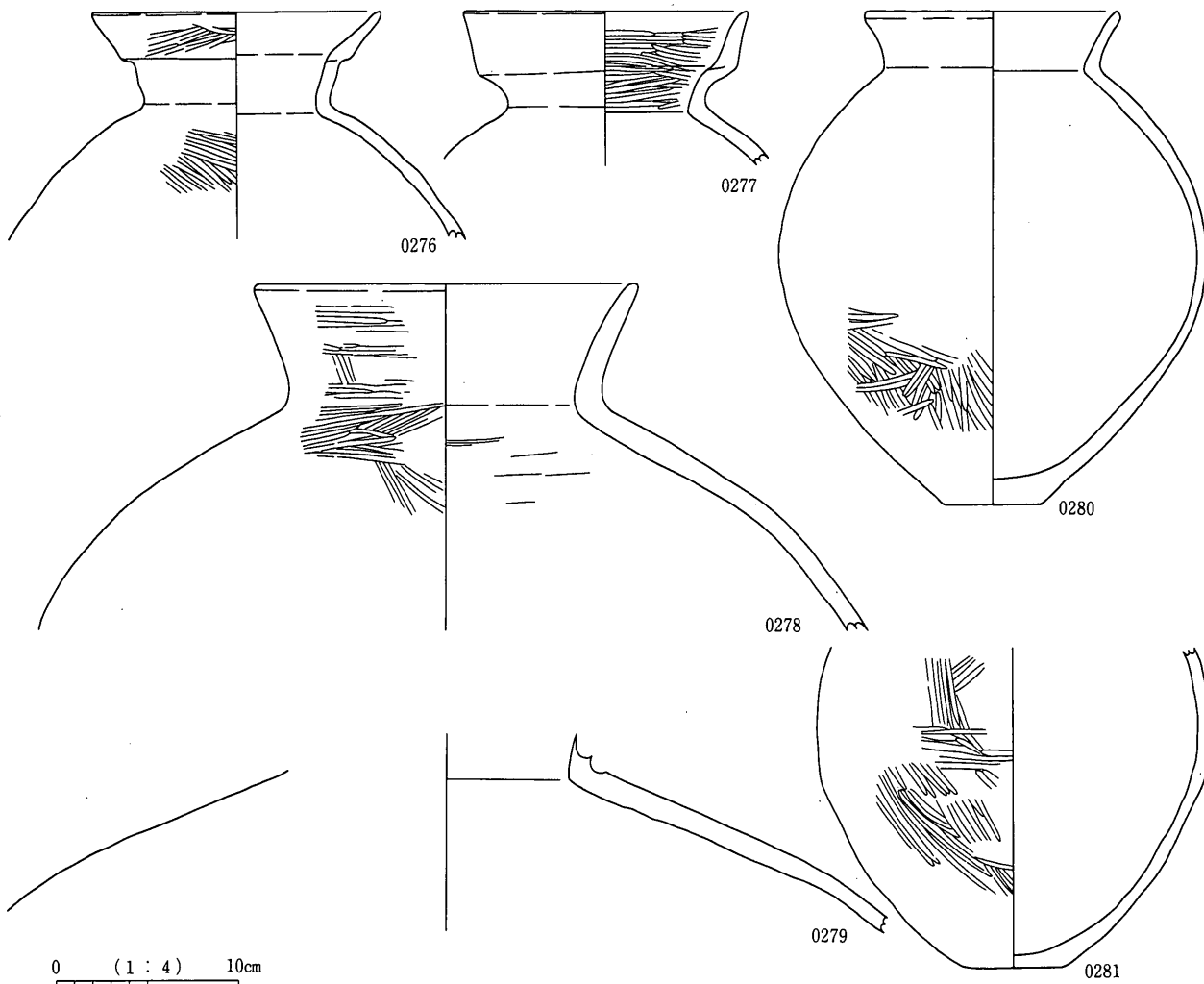
第219图 土坑出土土器11< S K 2027 (0255~0265)>



S K 2035

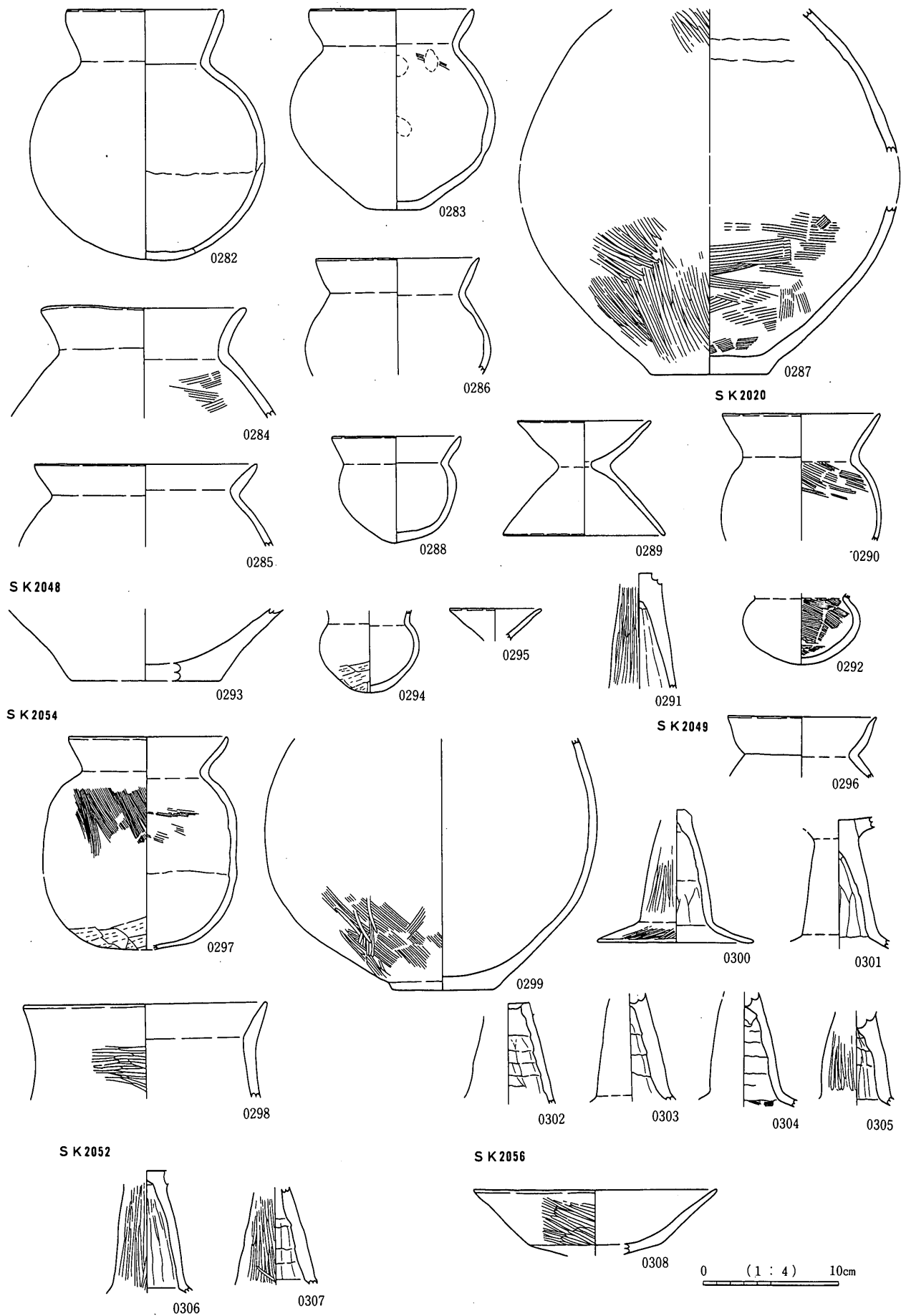


S K 2047



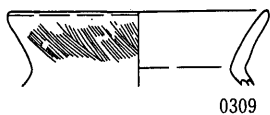
0 (1:4) 10cm

第220图 土坑出土土器12< S K 2027 (0266~0272) S K 2035 (0273~0275) S K 2047 (0276~0281)>

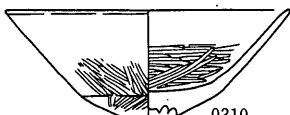


第221图 土坑出土土器13 < S K 2020 (0290~0292) S K 2047 (0282~0289) S K 2048 (0293~0295)
 S K 2049 (0296) S K 2052 (0306·0307) S K 2054 (0297~0305)
 S K 2056 (0308) >

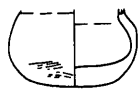
S K 2053



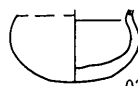
0309



0310

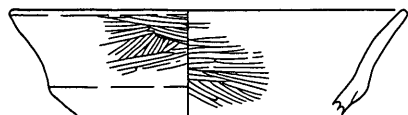


0311

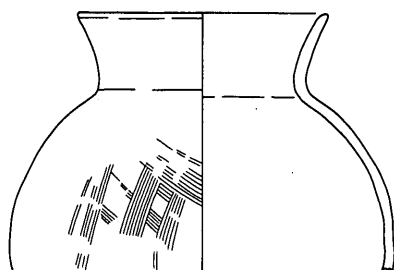


0312

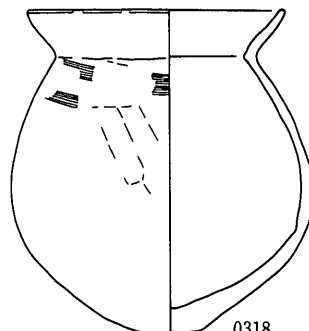
S K 2058



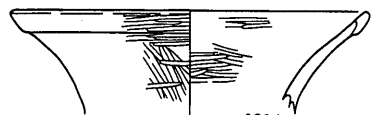
0313



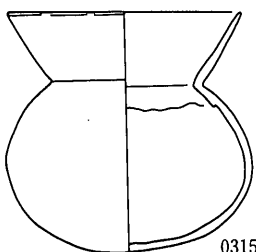
0316



0318



0314



0315



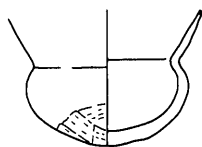
0317



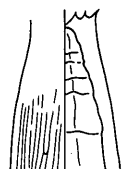
0319



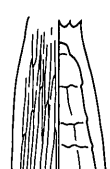
0320



0321



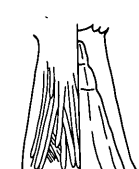
0322



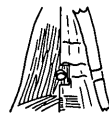
0323



0324

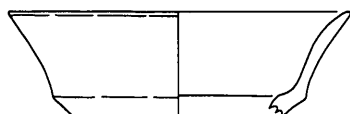


0325

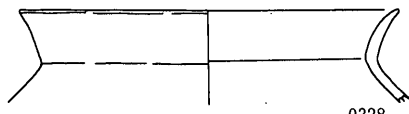


0326

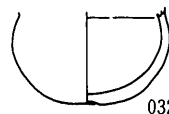
S K 2060



0327

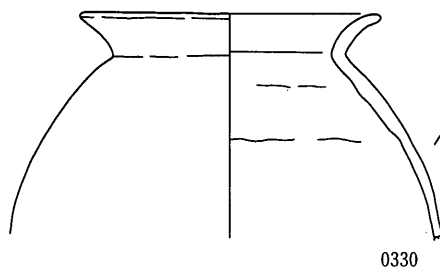


0328

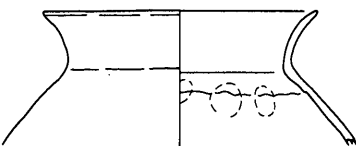


0329

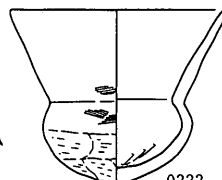
S K 2061



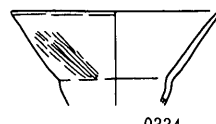
0330



0331



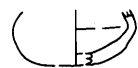
0333



0334

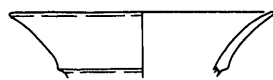


0332

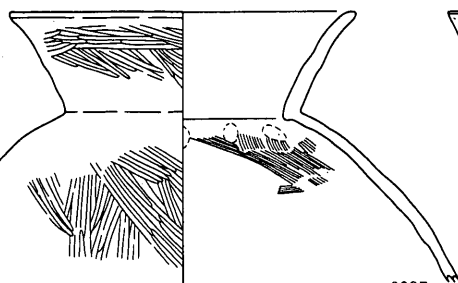


0335

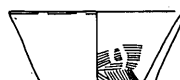
S K 2066



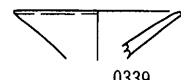
0336



0337



0338



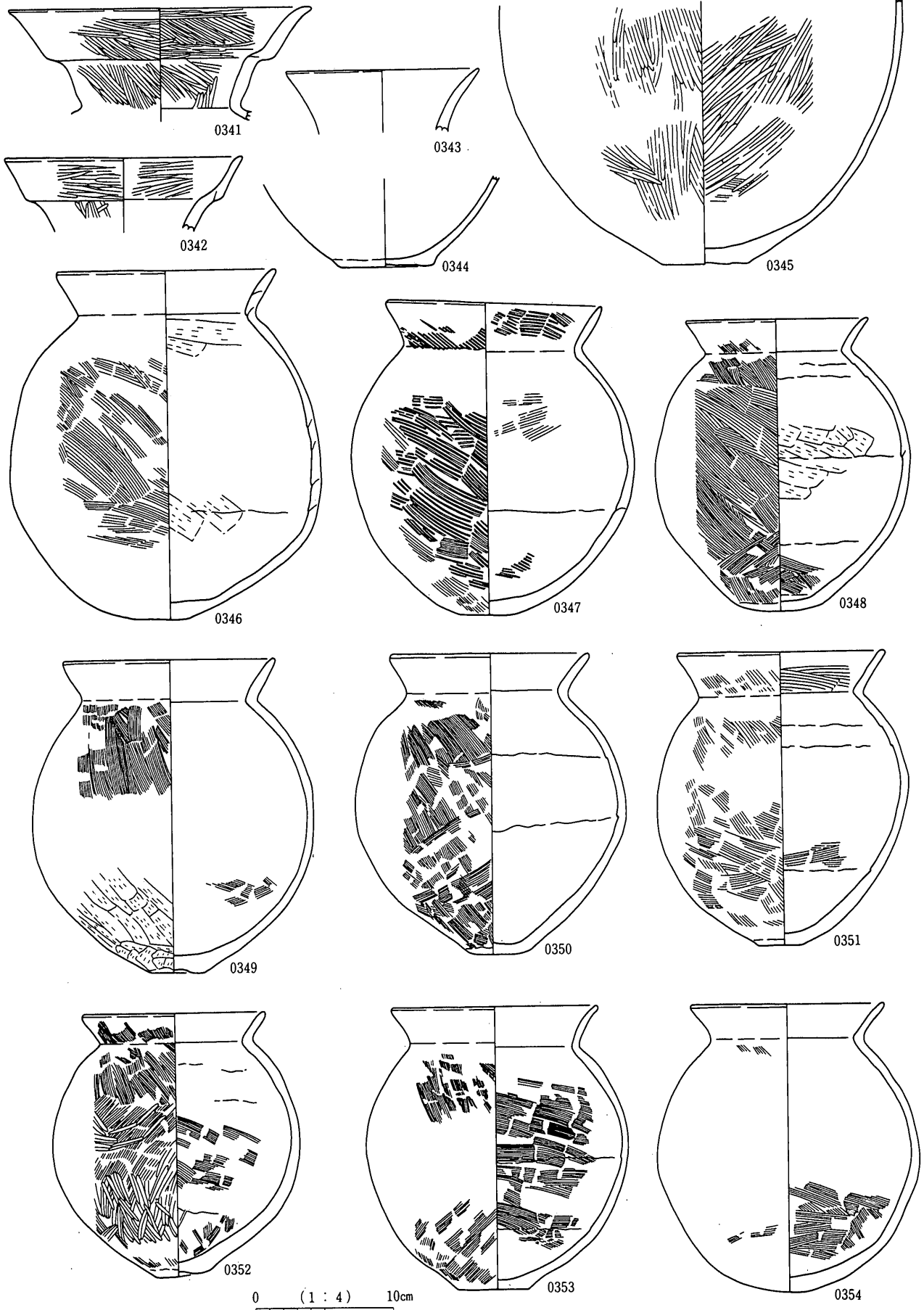
0339



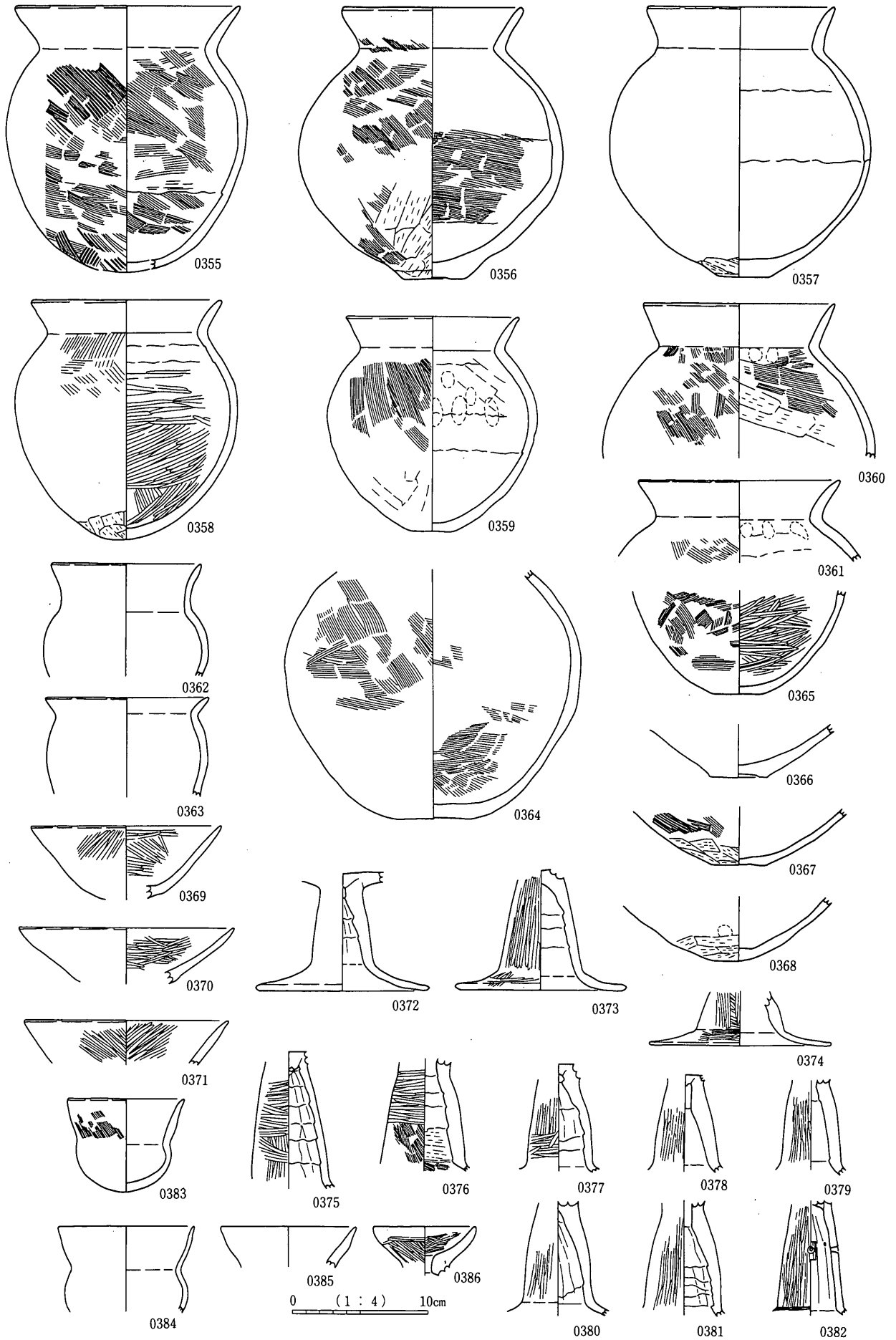
0340

0 (1 : 4) 10cm

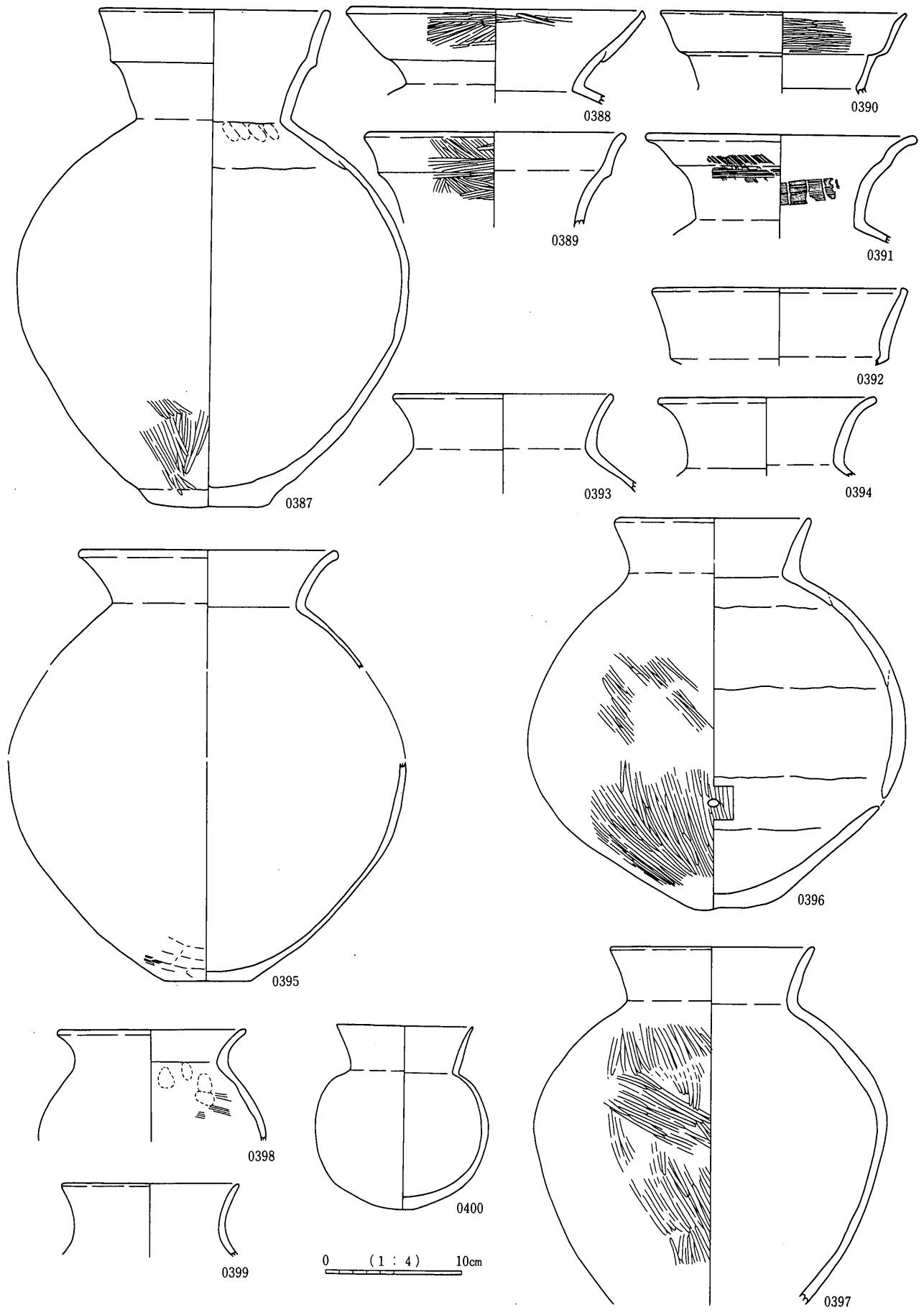
第222图 土坑出土土器14< S K 2053 (0309~0312) S K 2058 (0313~0326) S K 2060 (0327~0329) S K 2061 (0330~0335) S K 2066 (0336~0340)>



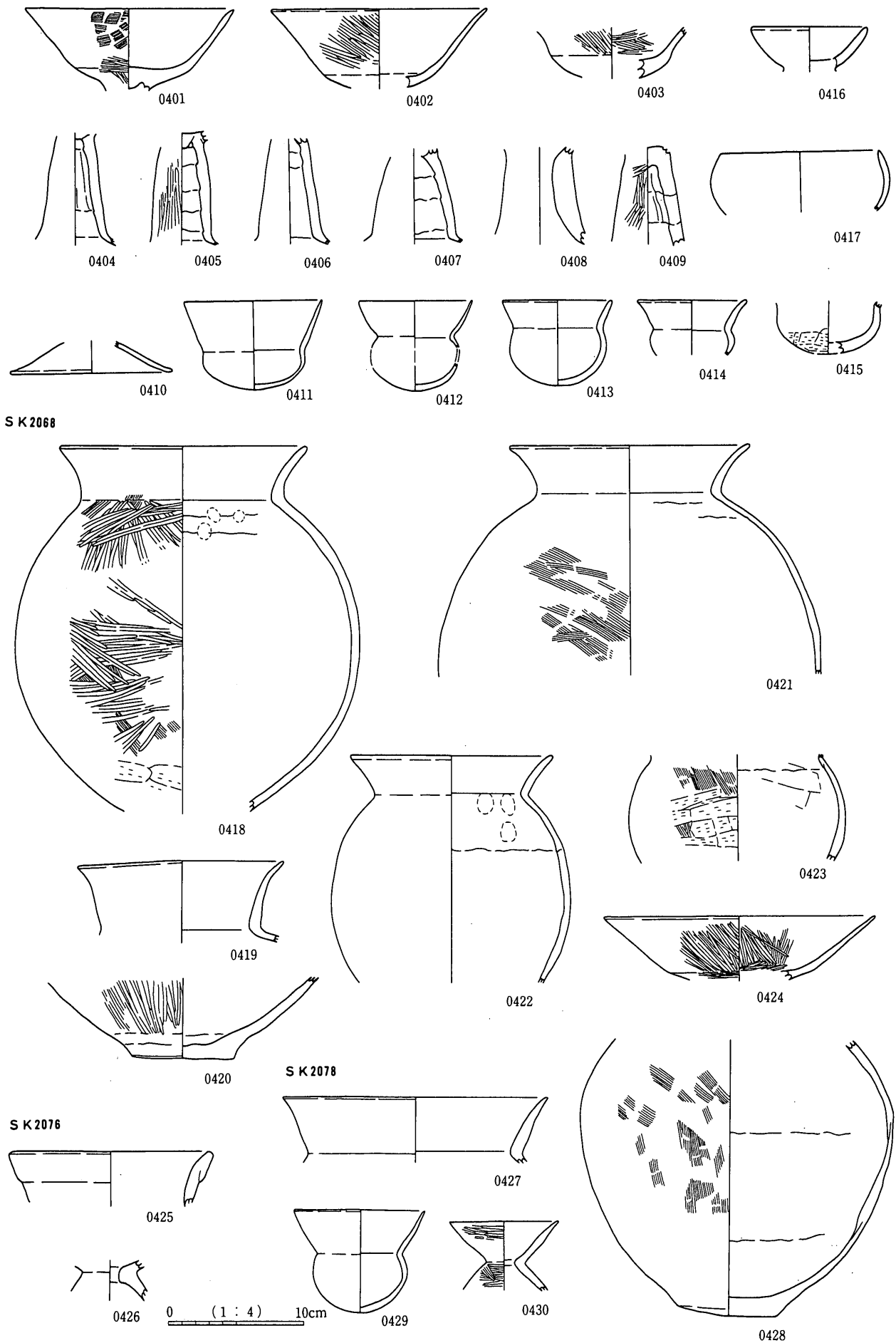
第223图 土坑出土土器15< S K 2057 (0341~0354)>



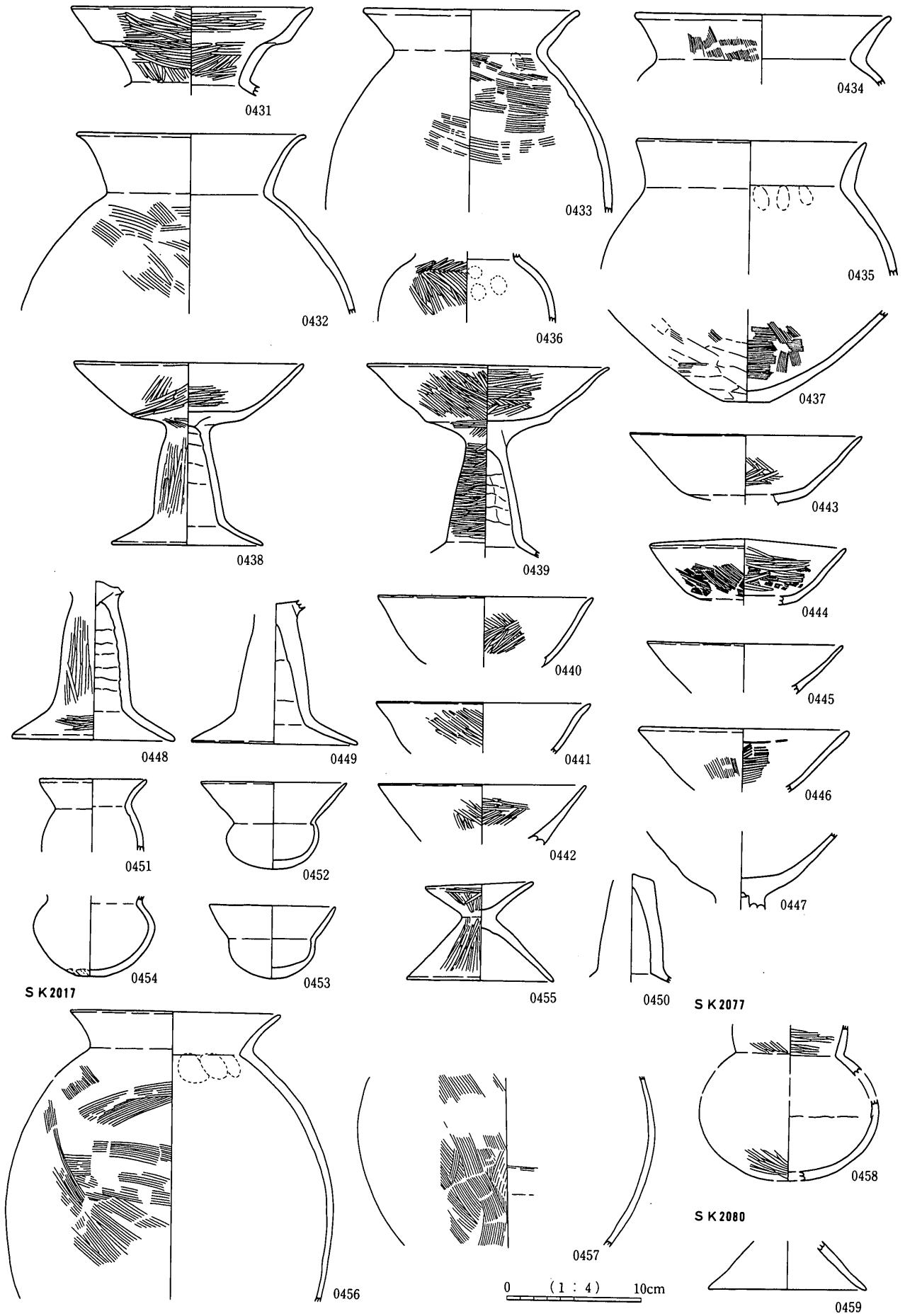
第224图 土坑出土土器16<S K 2057 (0355~0386)>



第225図 土坑出土土器17< S K 2063 (0387~0400)>

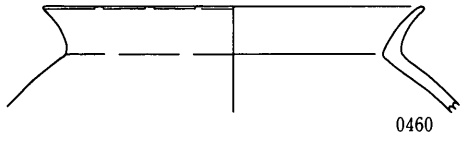


第226図 土坑出土土器18< S K 2063 (0401~0417) S K 2068 (0418~0424) S K 2076 (0425・0426) S K 2078 (0427~0430)>

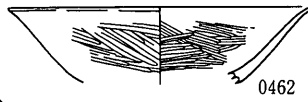


第227图 土坑出土土器19< S K 2017 (0456·0457) S K 2067 (0431~0455) S K 2077 (0458) S K 2080 (0459)>

S K 2084

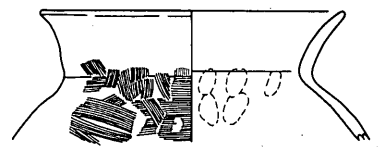


0460

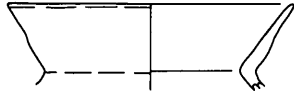


0462

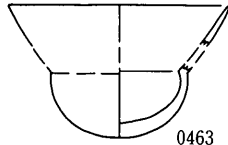
S K 2085



0464

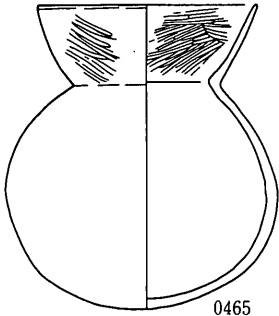


0461

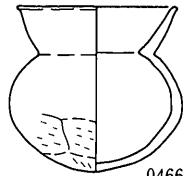


0463

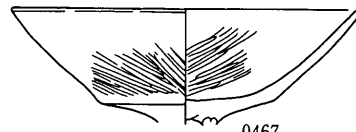
S K 2098



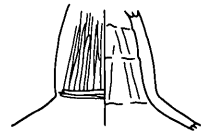
0465



0466

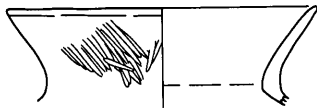


0467

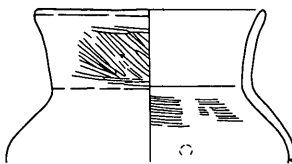


0468

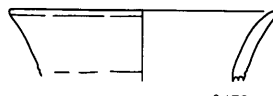
S K 2101



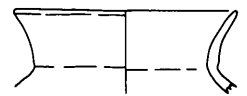
0469



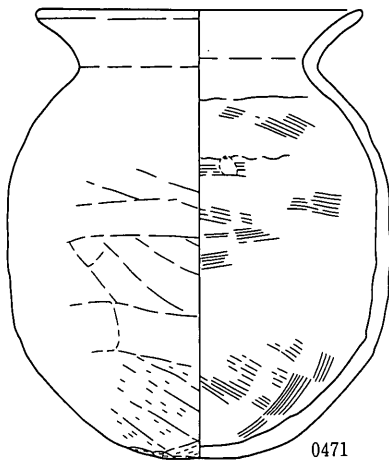
0470



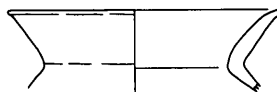
0472



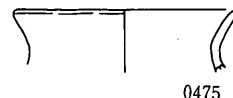
0473



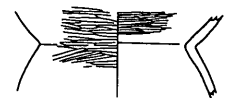
0471



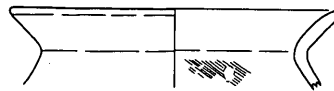
0474



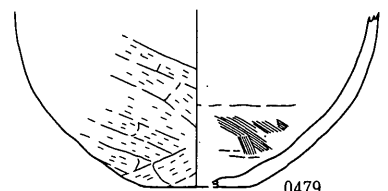
0475



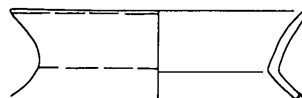
0476



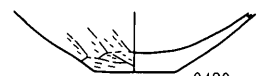
0477



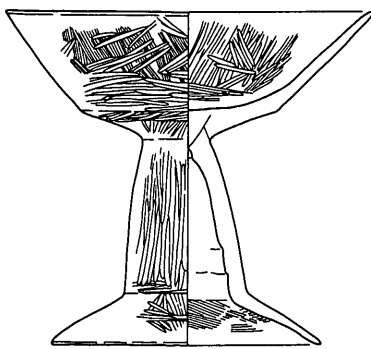
0479



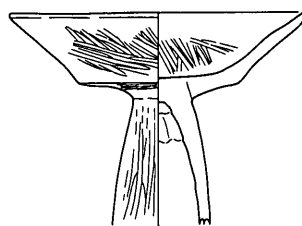
0478



0480



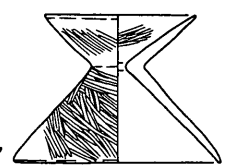
0481



0482



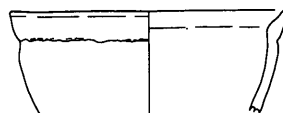
0483



0486



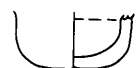
0484



0488



0485

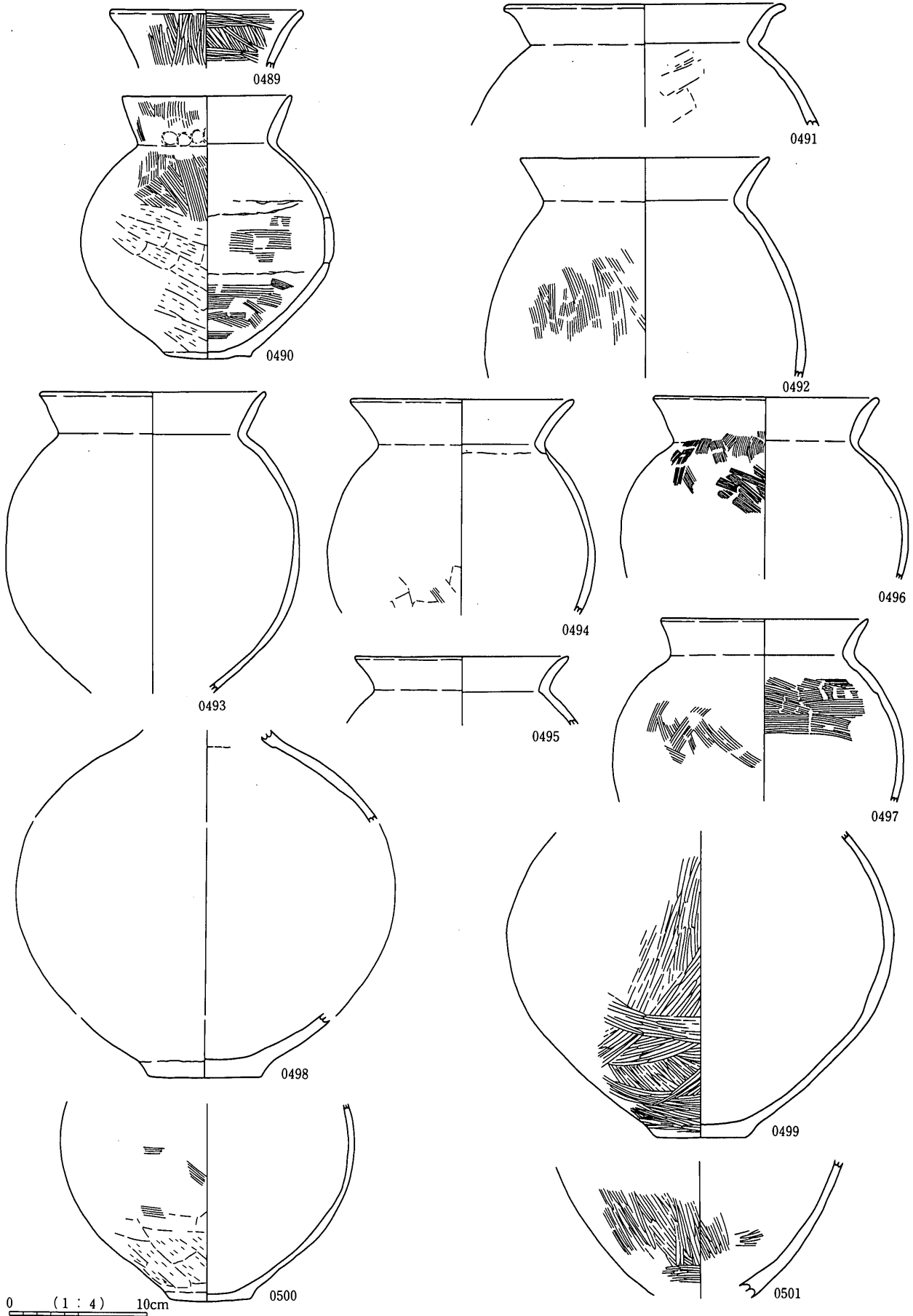


0487

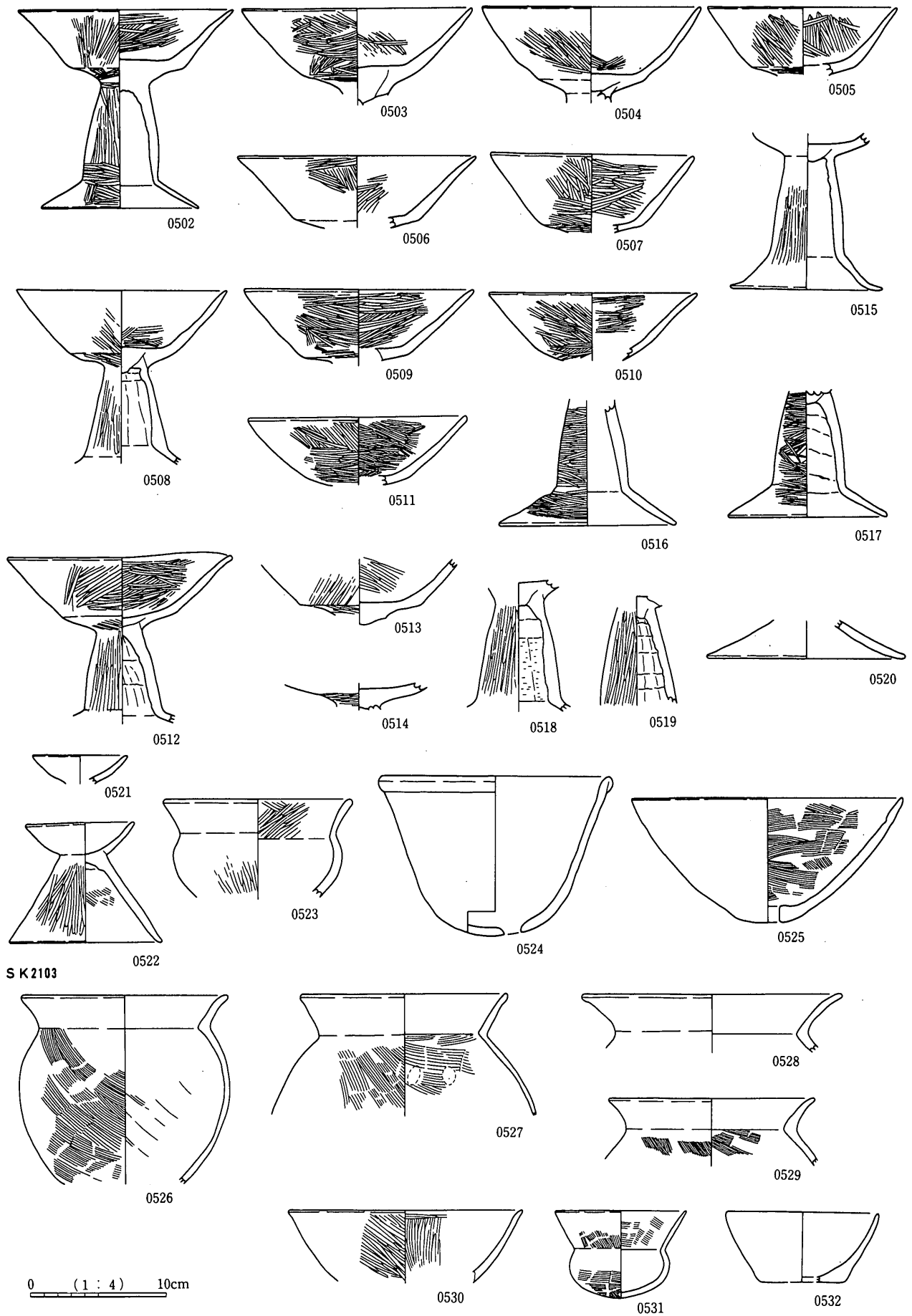
0 (1:4) 10cm

第228图 土坑出土土器20< S K 2084 (0460~0463) S K 2085 (0464) S K 2098 (0465~0468) S K 2101 (0469~0488) >

S K 2086

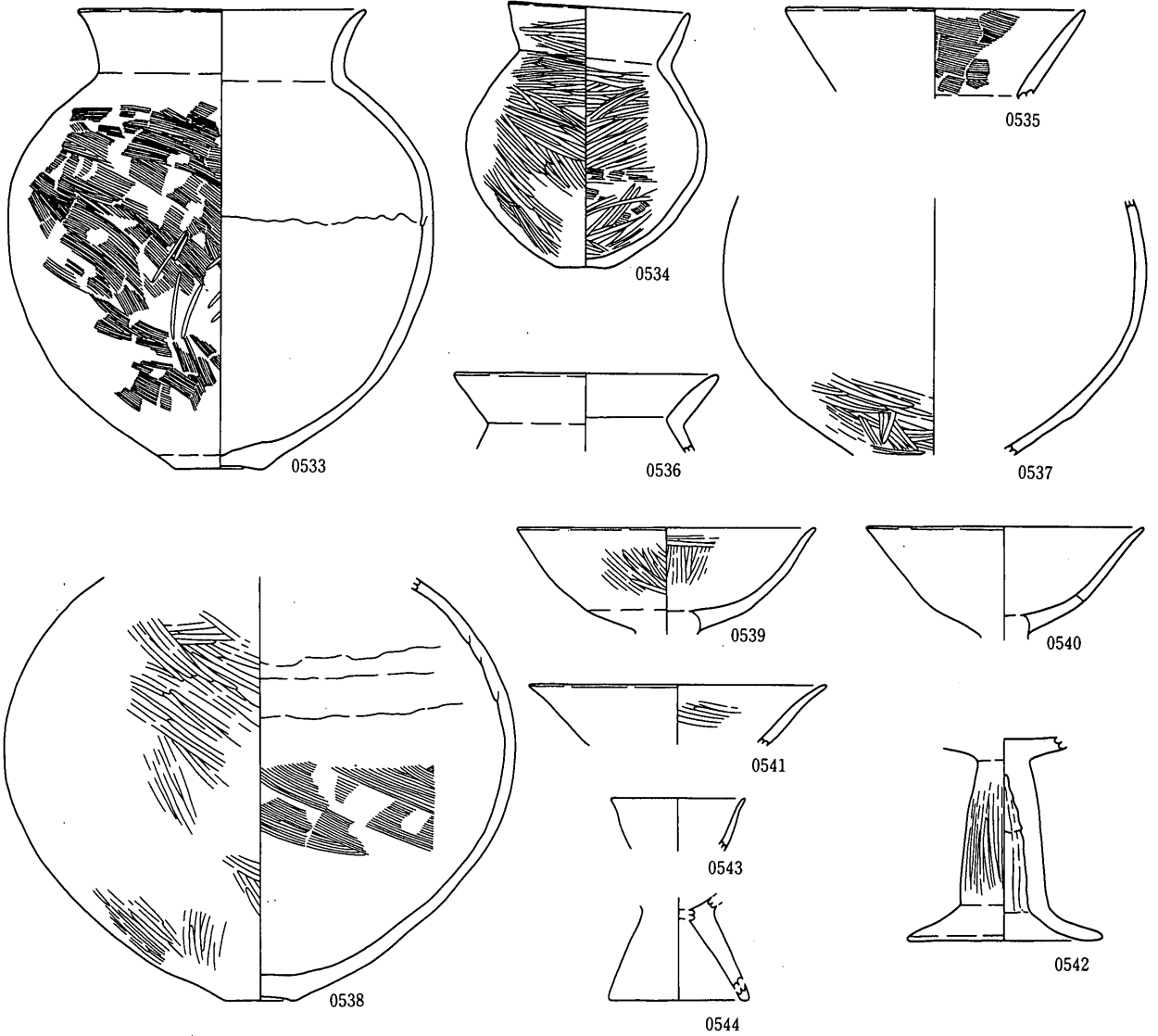


第229图 土坑出土土器21< S K 2086 (0489~0501)>

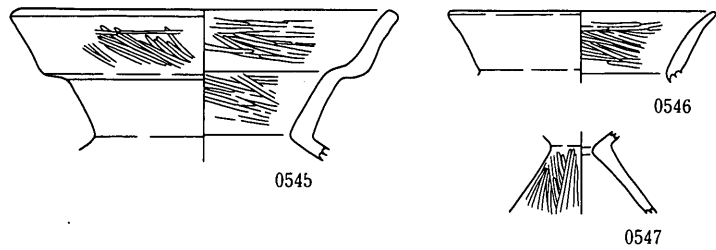


第230图 土坑出土土器22< S K2086 (0502~0525) S K2103 (0526~0532)>

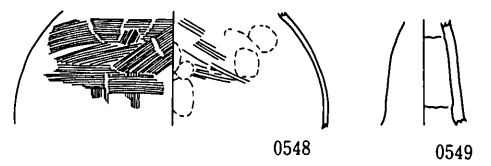
S K 2102



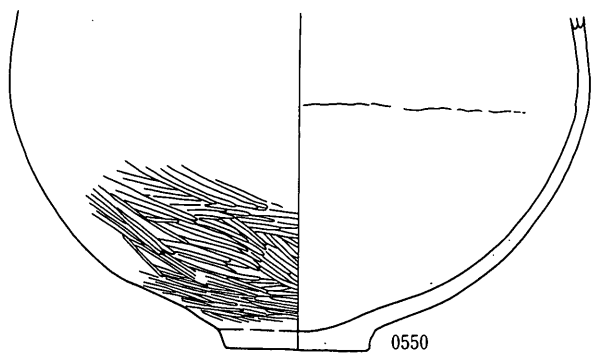
S K 2104



S K 2106



S K 2109



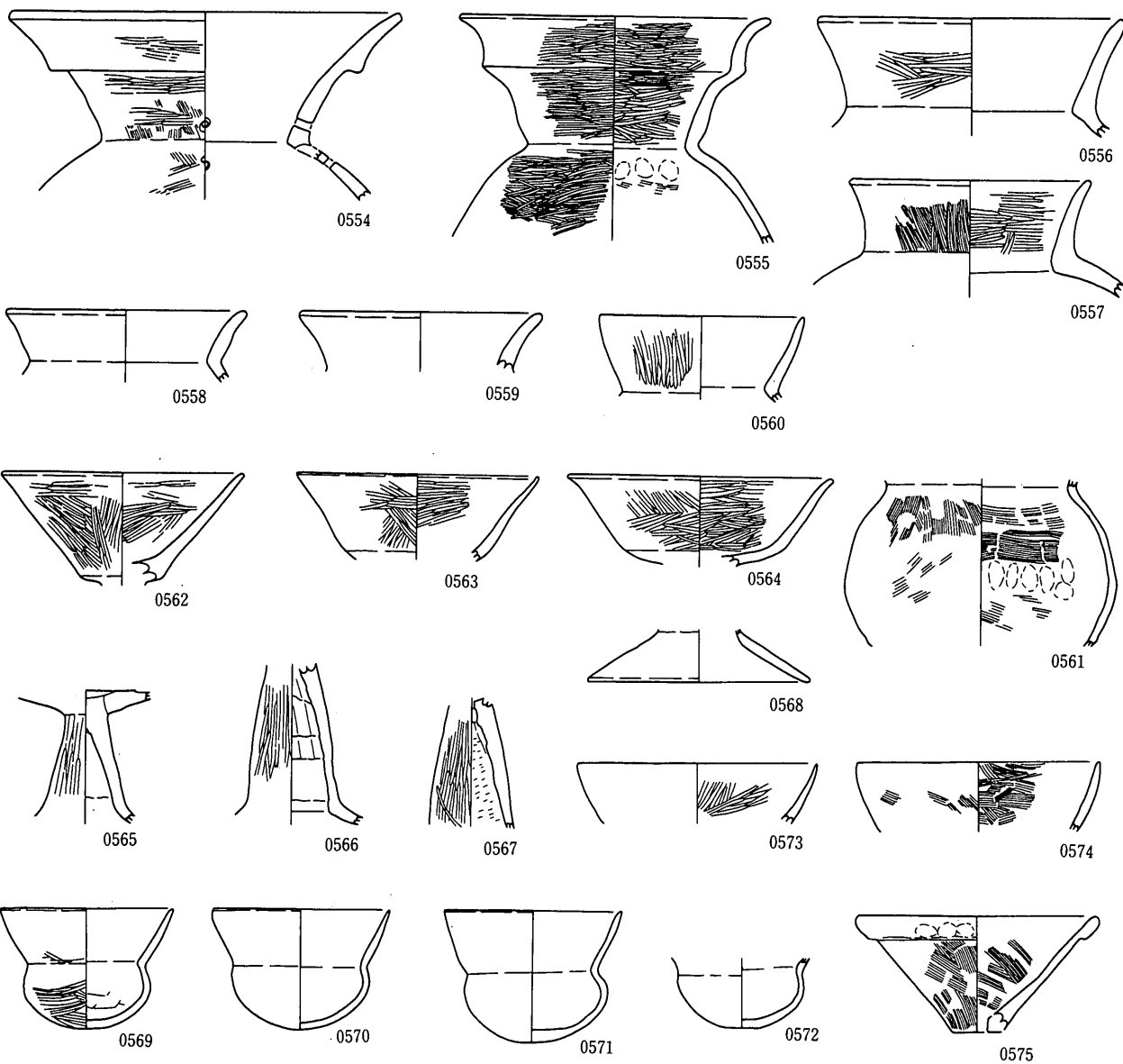
S K 2107



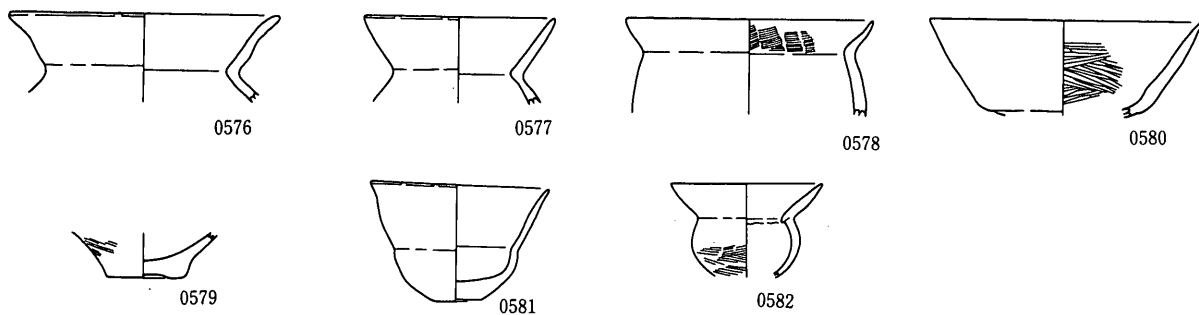
0 (1 : 4) 10cm

第231图 土坑出土土器23< S K 2102 (0533~0544) S K 2104 (0545~0547) S K 2106 (0548·0549) S K 2107 (0552·0553) S K 2109 (0550·0551)>

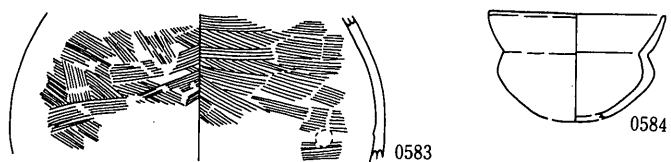
S K 2108



S K 2113



S K 2115



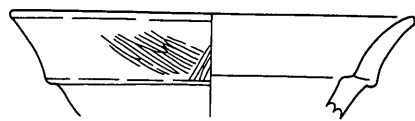
0 (1 : 4) 10cm

第232图 土坑出土土器24<S K 2108 (0554~0575) S K 2113 (0576~0582) S K 2115 (0583·0584)>

S K 2112



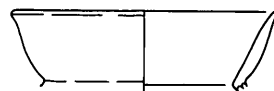
0585



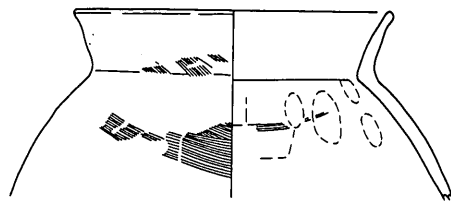
0586



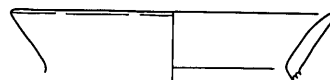
0587



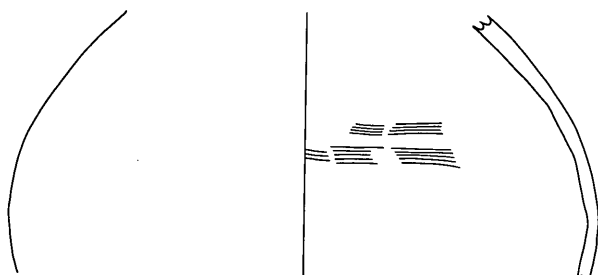
0588



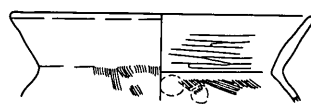
0589



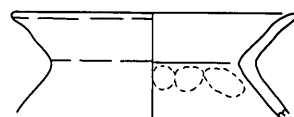
0590



0593



0591



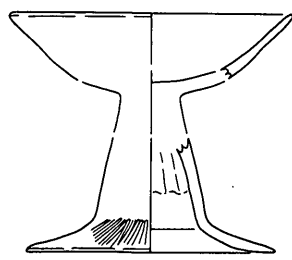
0592



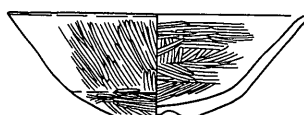
0594



0595



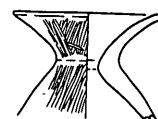
0596



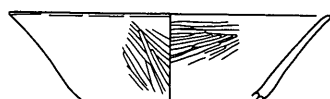
0597



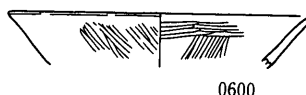
0598



0603



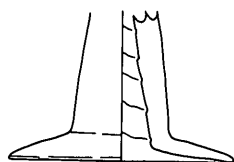
0599



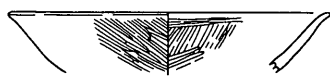
0600



0604



0602



0601

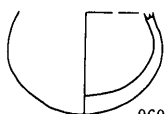


0605

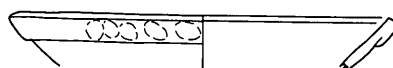
S K 2126



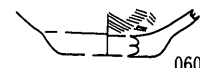
0606



0607



0608



0609

0 (1 : 4) 10cm

第233图 土坑出土土器25< S K 2112 (0585~0605) S K 2126 (0606~0609)>

S K 2119



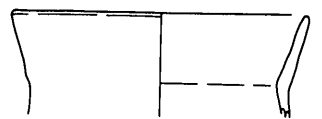
0610



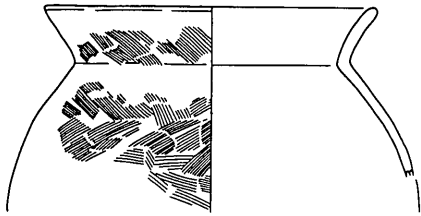
0611



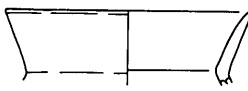
0612



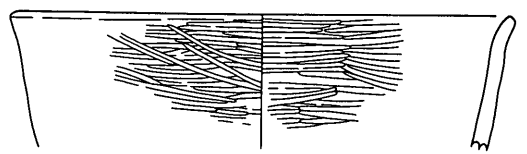
0613



0614



0615

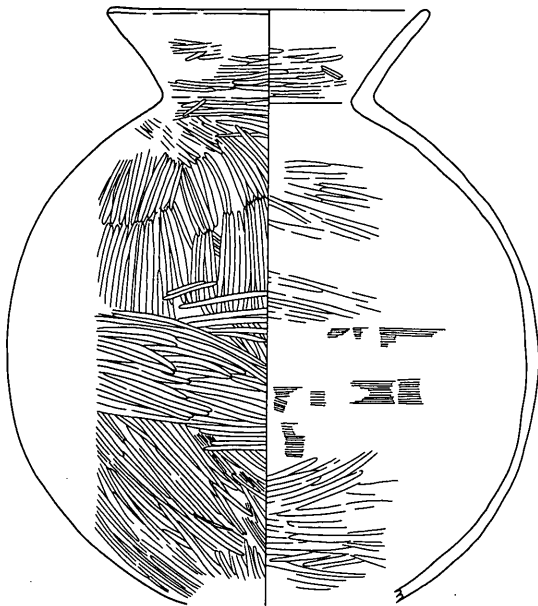


0616

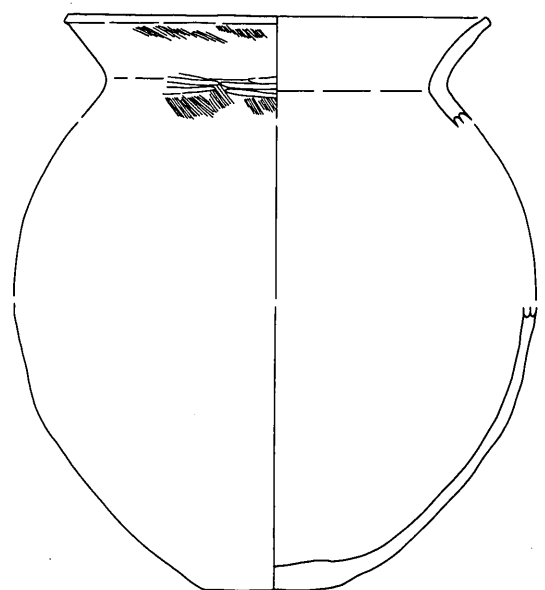


0617

S K 2120

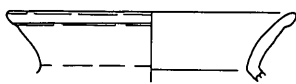


0618

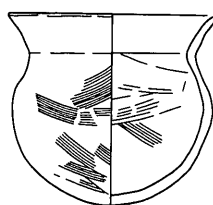


0619

S K 2123



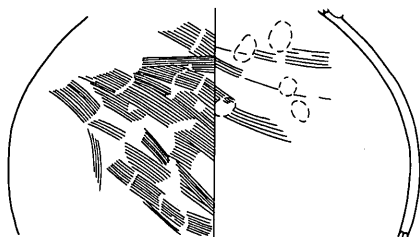
0620



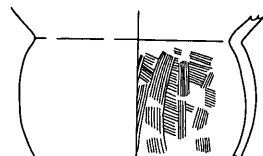
0623



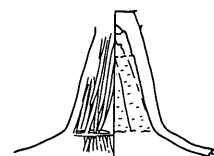
0625



0621



0624



0626



0627



0622

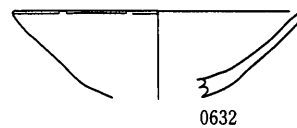
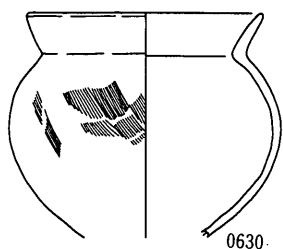


0629

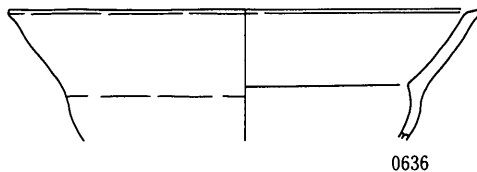
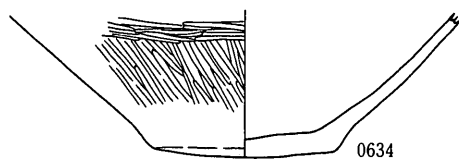
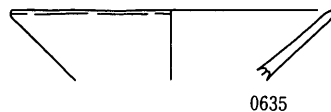
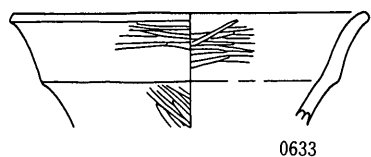
0 10cm (1:4)

第234图 土坑出土土器26< S K 219 (0610~0617) S K 2120 (0618·0619) S K 2123 (0620~0629)>

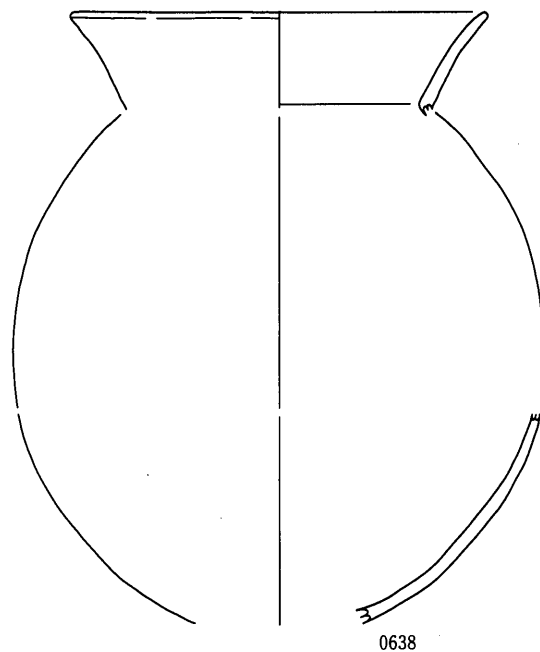
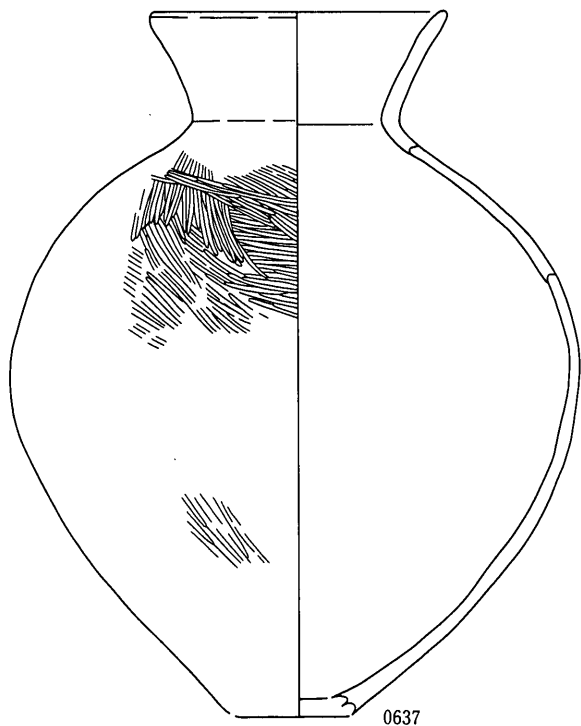
S K 2121



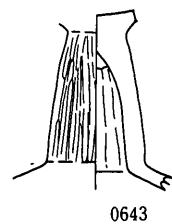
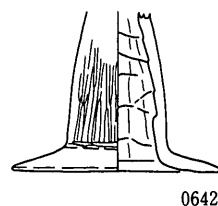
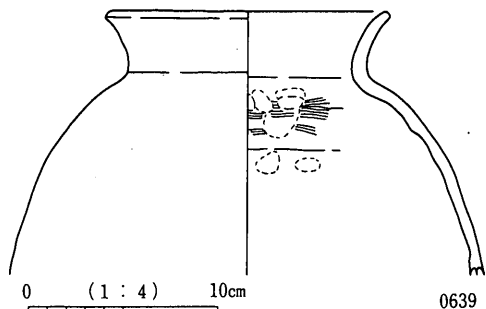
S K 2128



S K 2129

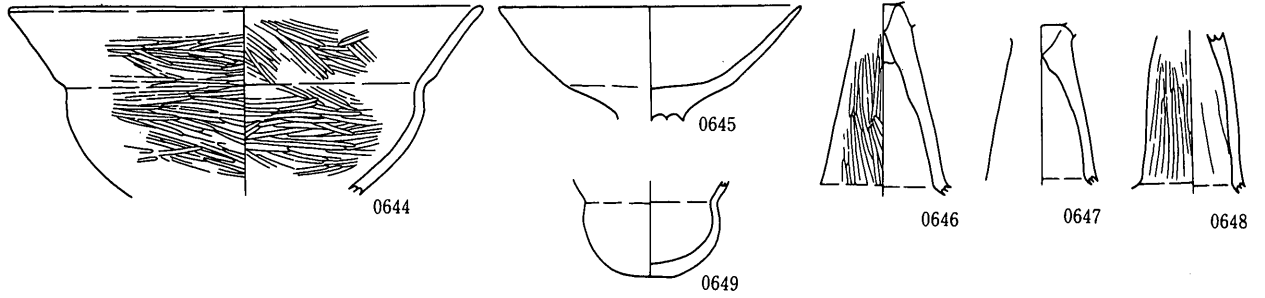


S K 2134

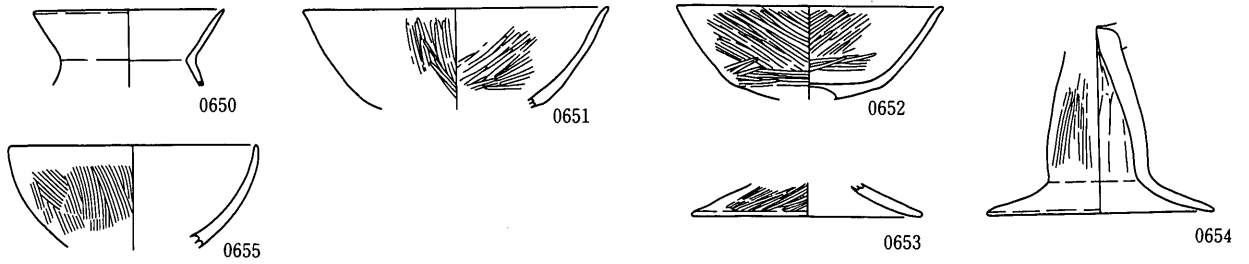


第235图 土坑出土土器27< S K 2121 (0630~0632) S K 2128 (0633~0636) S K 2129 (0637~0639) S K 2134 (0640~0643)>

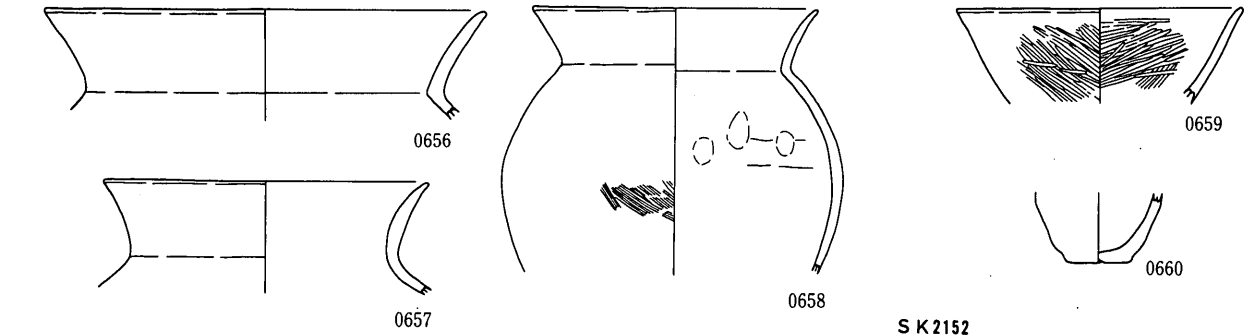
S K 2146



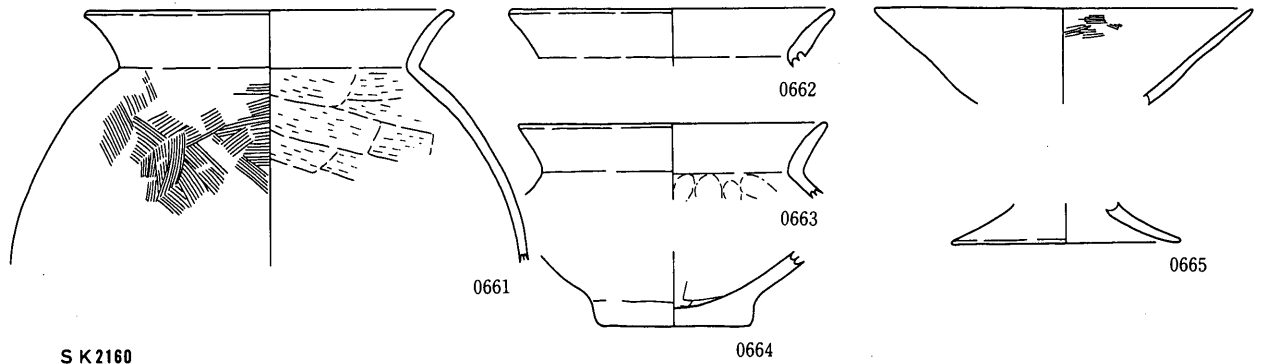
S K 2148



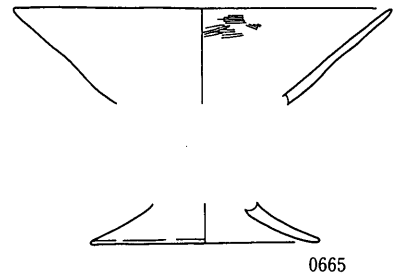
S K 2151



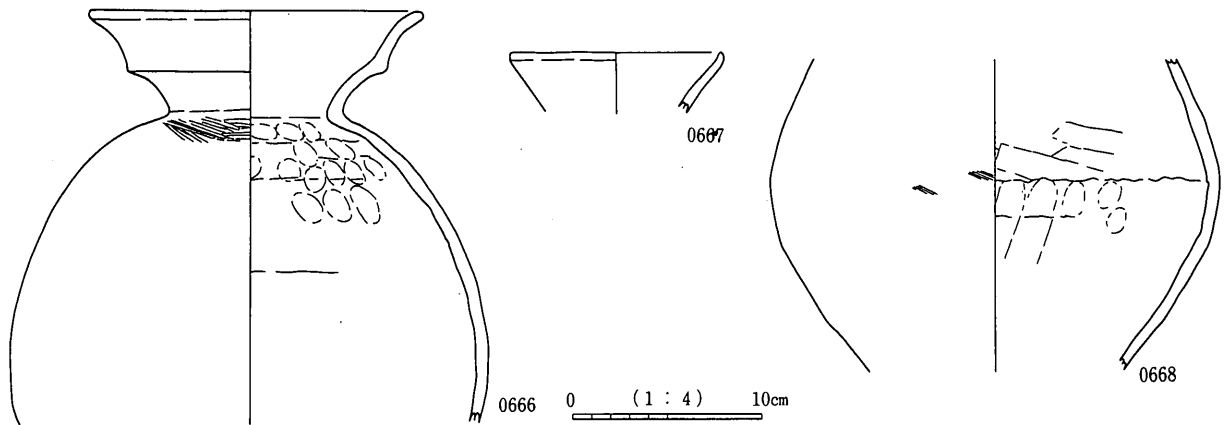
S K 2153



S K 2152

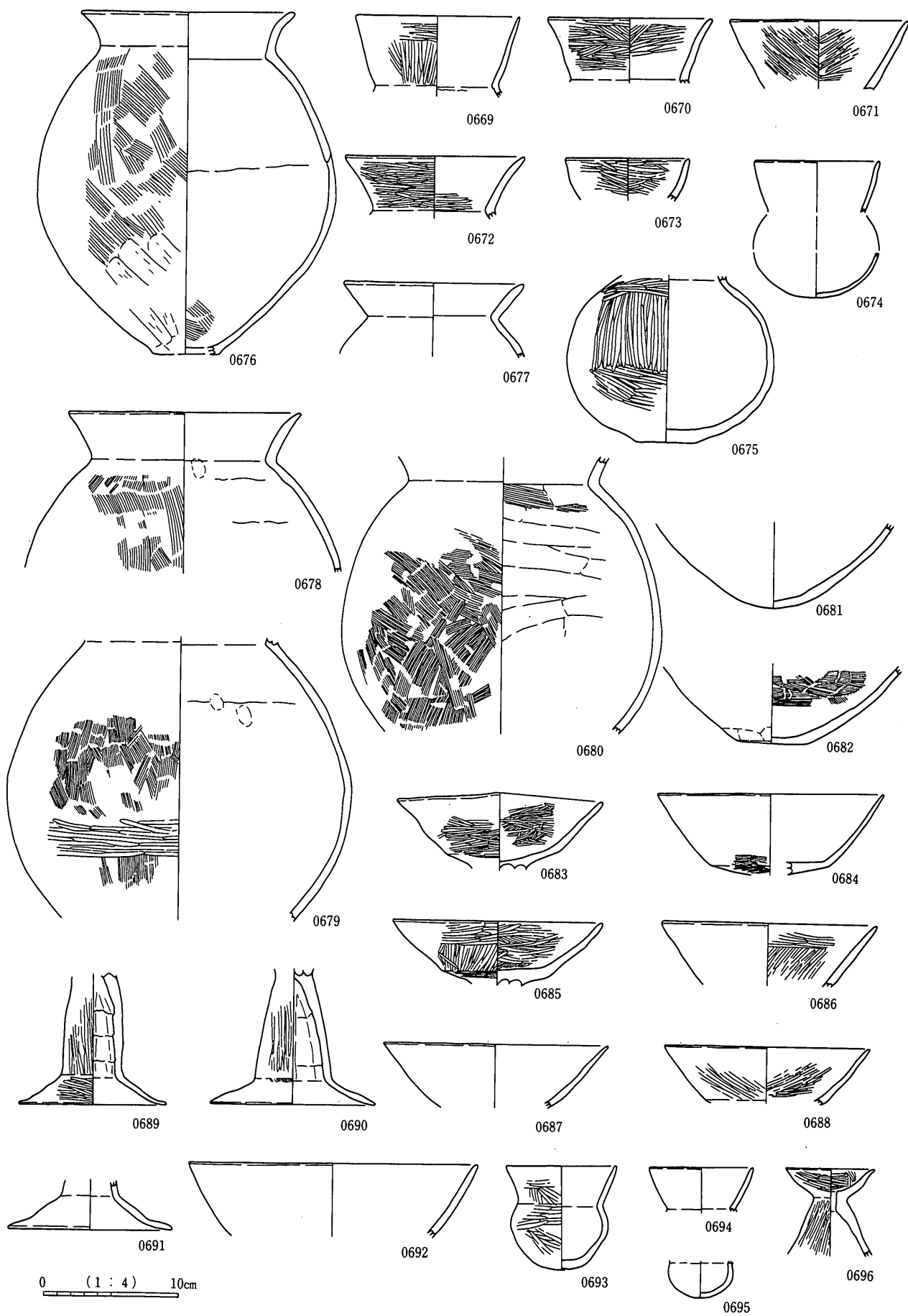


S K 2160



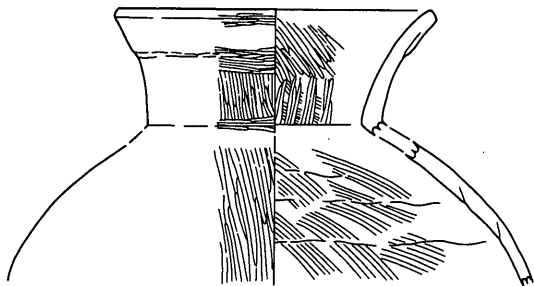
0 10cm (1:4)

第236图 土坑出土土器28< S K 2146 (0644~0649) S K 2148 (0650~0655) S K 2151 (0656~0660) S K 2152 (0665) S K 2153 (0661~0664) S K 2160 (0666~0668)>

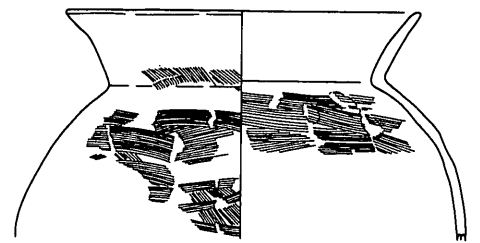


第237图 土坑出土土器29< S K2147 (0669~0696)>

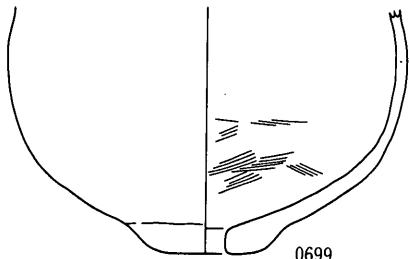
S K 2156



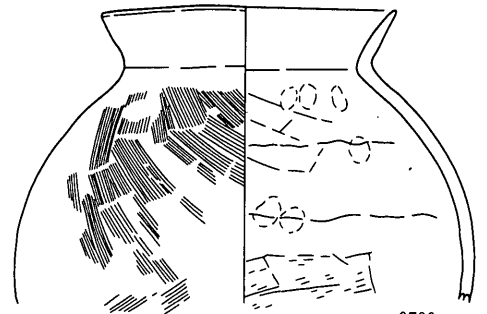
0697



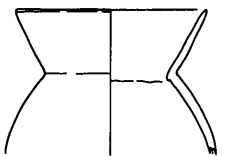
0698



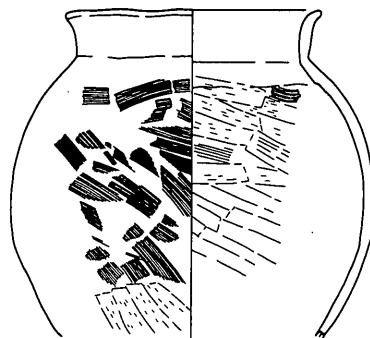
0699



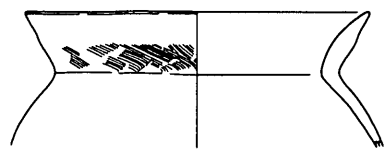
0700



0701



0703



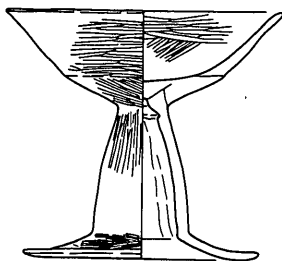
0704



0702



0705



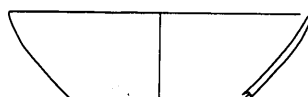
0706



0707



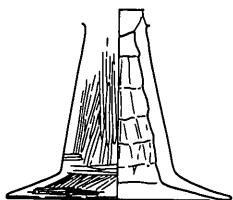
0708



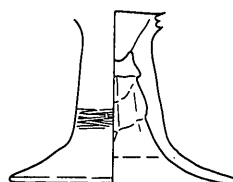
0709



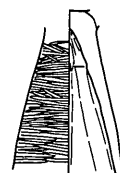
0717



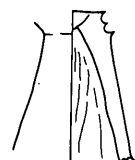
0710



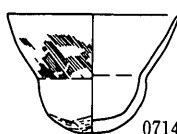
0711



0712



0713



0714



0715

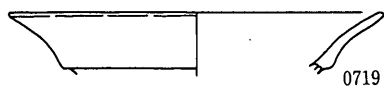


0716

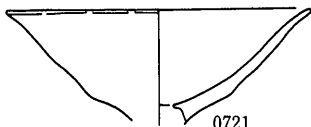
0 (1 : 4) 10cm

第238图 土坑出土土器30< S K 2156 (0697~0718)>

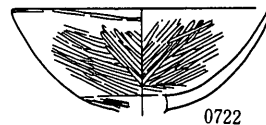
S K 2154



0719



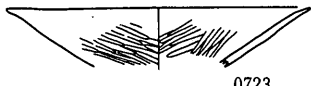
0721



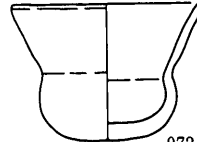
0722



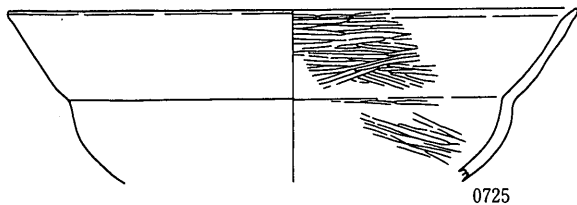
0720



0723

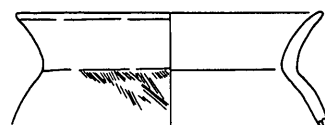


0724



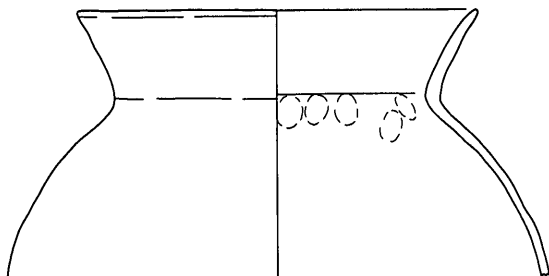
0725

S K 2161

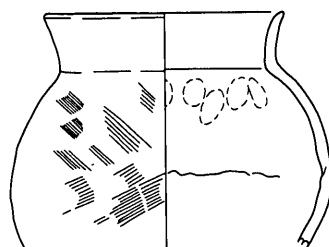


0726

S K 2162



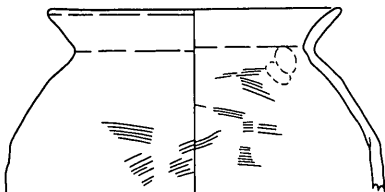
0727



0728



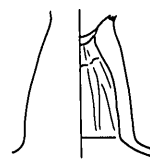
0731



0729

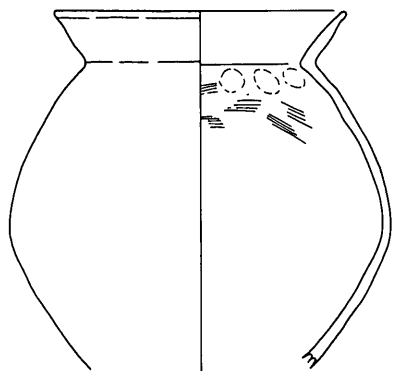


0730

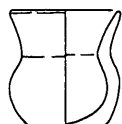


0732

S K 2164

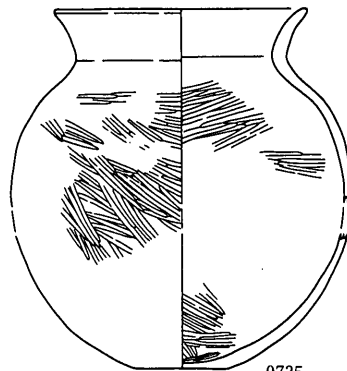


0733

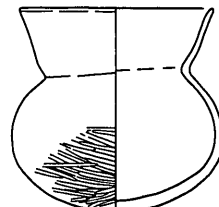


0734

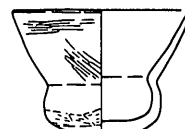
S K 2170



0735



0736

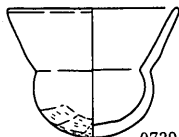


0737

S K 2168



0738



0739

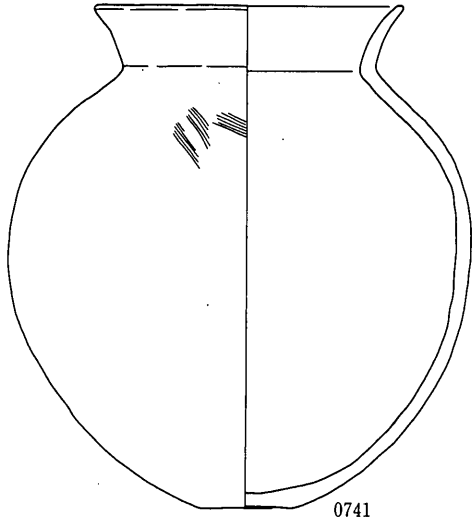


0740

0 (1 : 4) 10cm

第239図 土坑出土土器31< S K 2154 (0719~0725) S K 2161 (0726) S K 2162 (0727~0732) S K 2164 (0733·0734) S K 2168 (0738~0740) S K 2170 (0735~0737) >

S K 2166

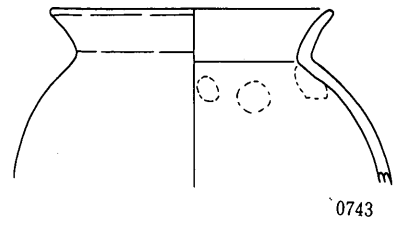


0741



0742

S K 2167



0743

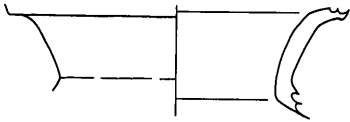


0744



0745

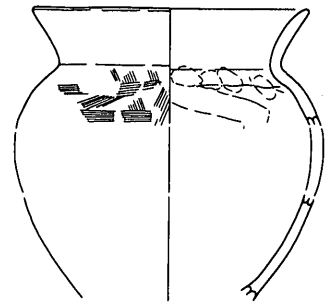
S K 2171



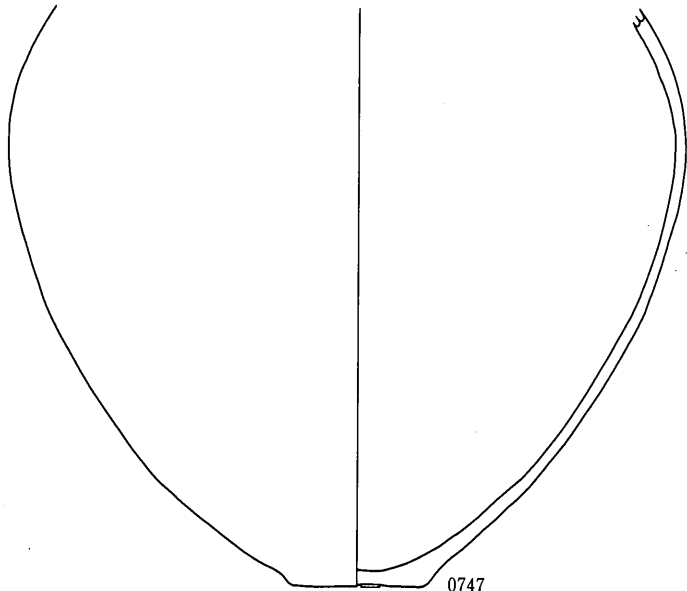
0746



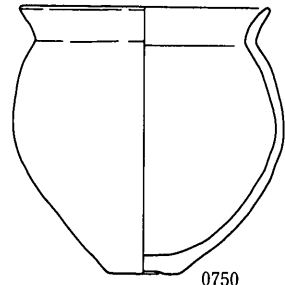
0748



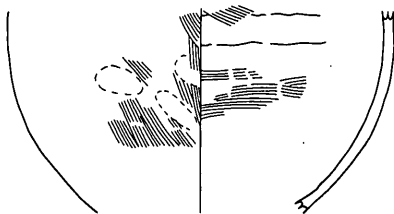
0749



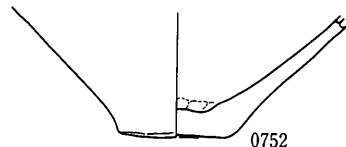
0747



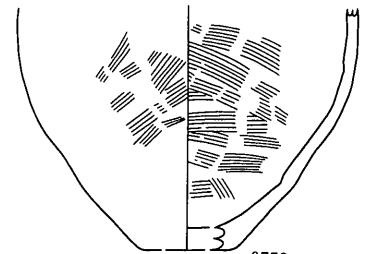
0750



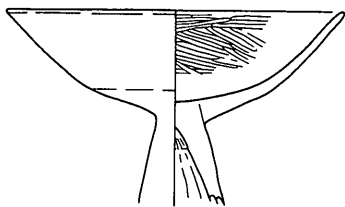
0751



0752



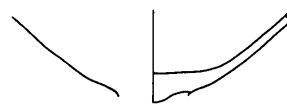
0753



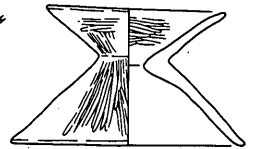
0754



0755



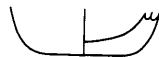
0756



0759



0757

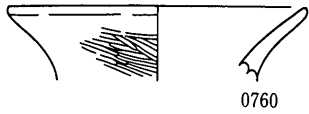


0758

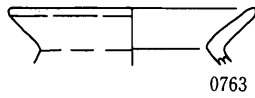
0 1 : 4 10cm

第240图 土坑出土土器32< S K 2166 (0741 · 0742) S K 2167 (0743 ~ 0745) S K 2171 (0746 ~ 0759) >

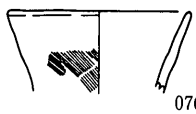
S K 2172



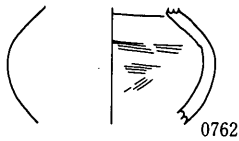
0760



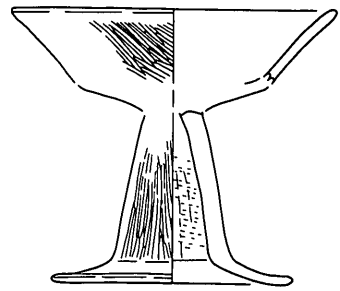
0763



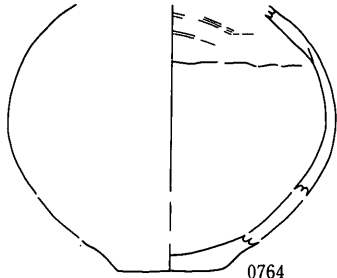
0761



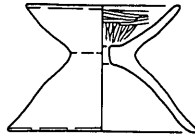
0762



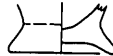
0765



0764

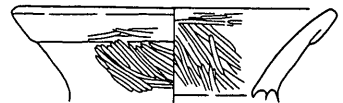


0766



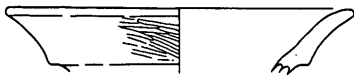
0767

S K 2173

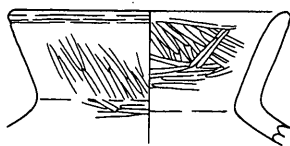


0768

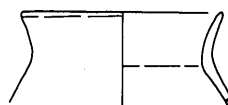
S K 2178



0769



0770

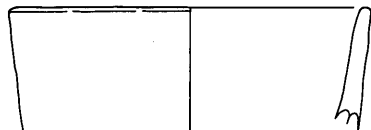


0771

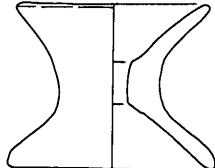


0772

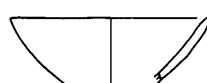
S K 2182



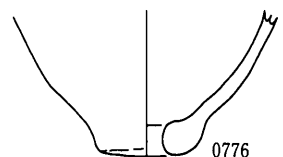
0773



0774

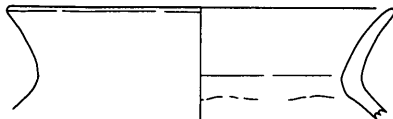


0775

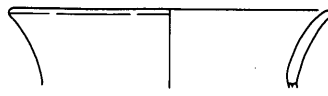


0776

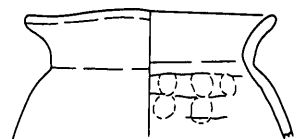
S K 2183



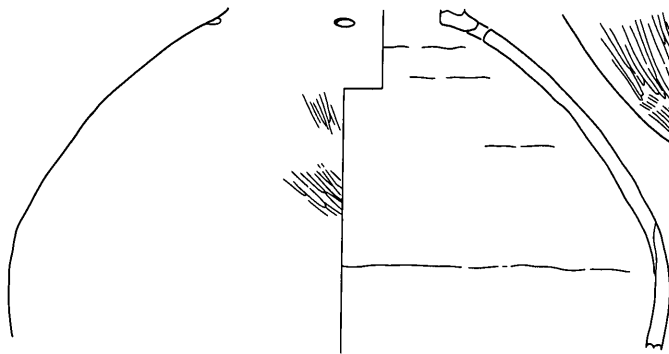
0777



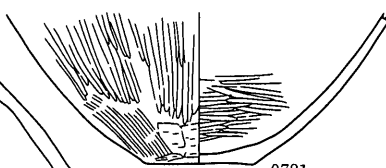
0778



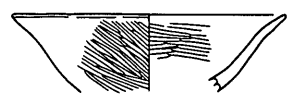
0779



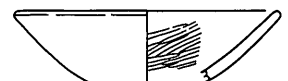
0780



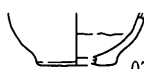
0781



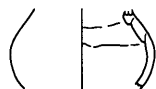
0782



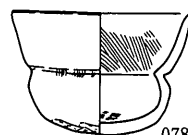
0783



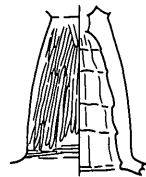
0786



0787



0785

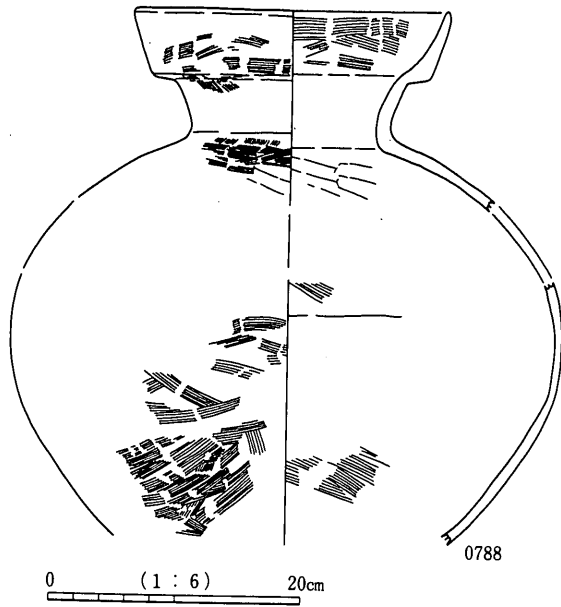


0784

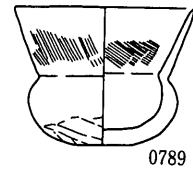
0 (1 : 4) 10cm.

第241图 土坑出土土器33< S K 2172 (0760~0767) S K 2173 (0768) S K 2178 (0769~0772) S K 2182 (0773~0776) S K 2183 (0777~0787) >

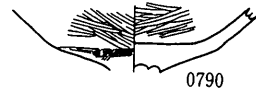
S K 2185



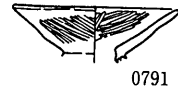
0788



0789

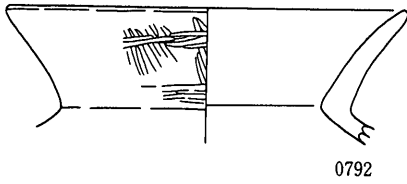


0790

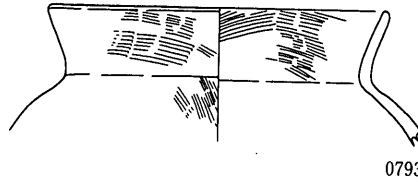


0791

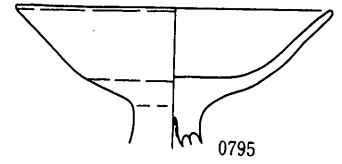
S K 2187



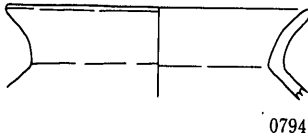
0792



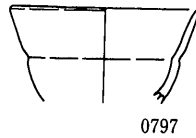
0793



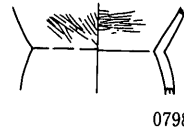
0795



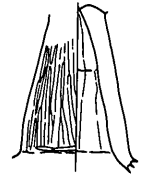
0794



0797

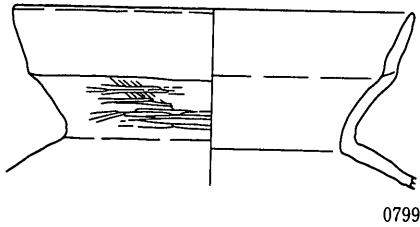


0798

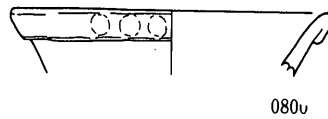


0796

S K 2188

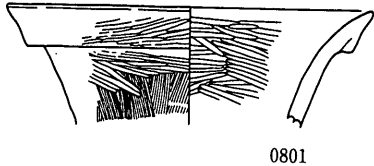


0799

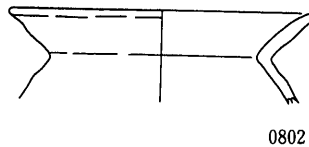


0800v

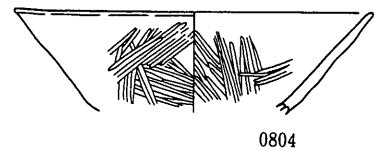
S K 2189



0801

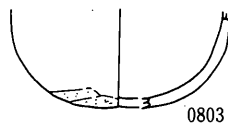


0802

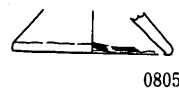


0804

0 (1:4) 10cm



0803

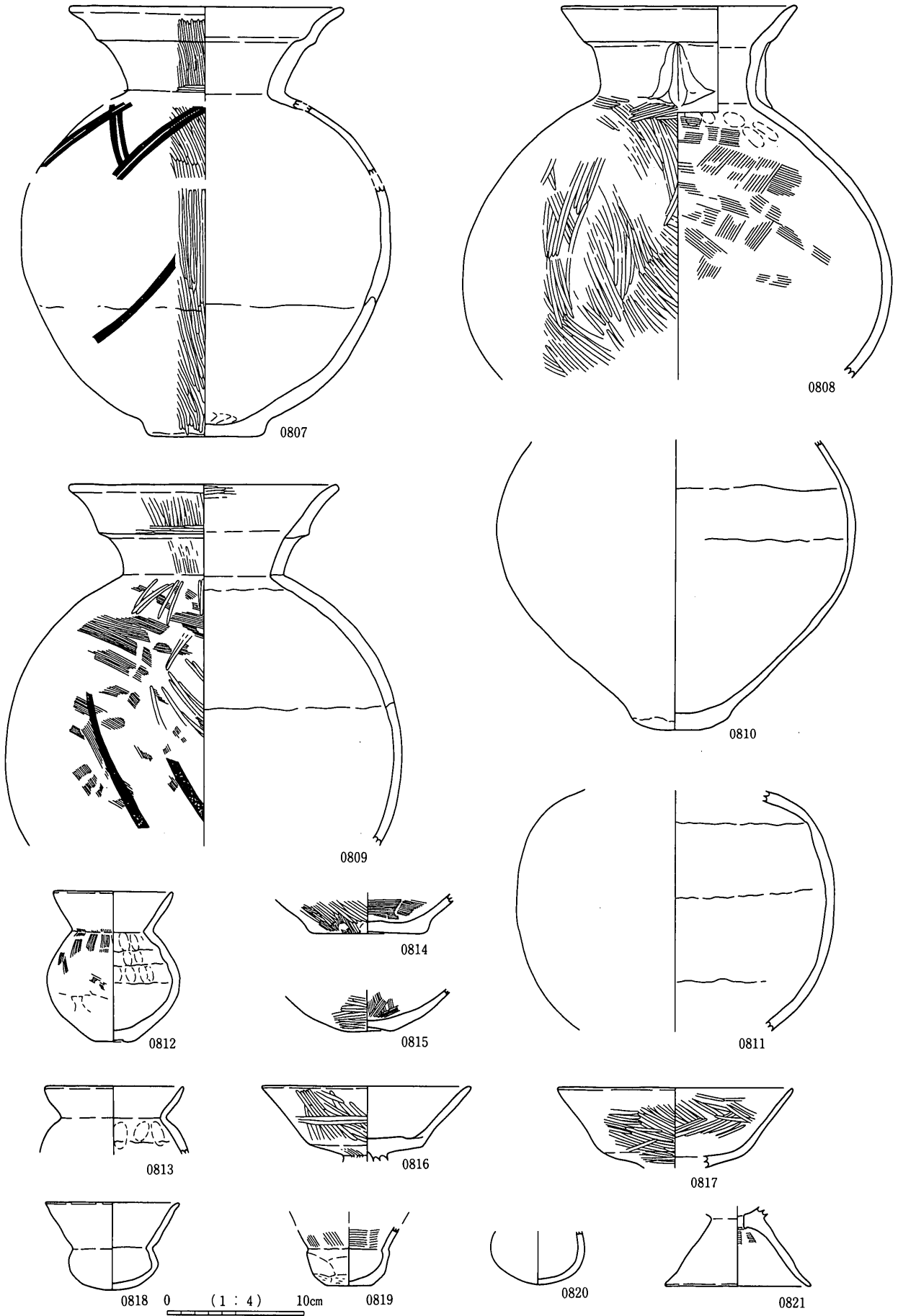


0805

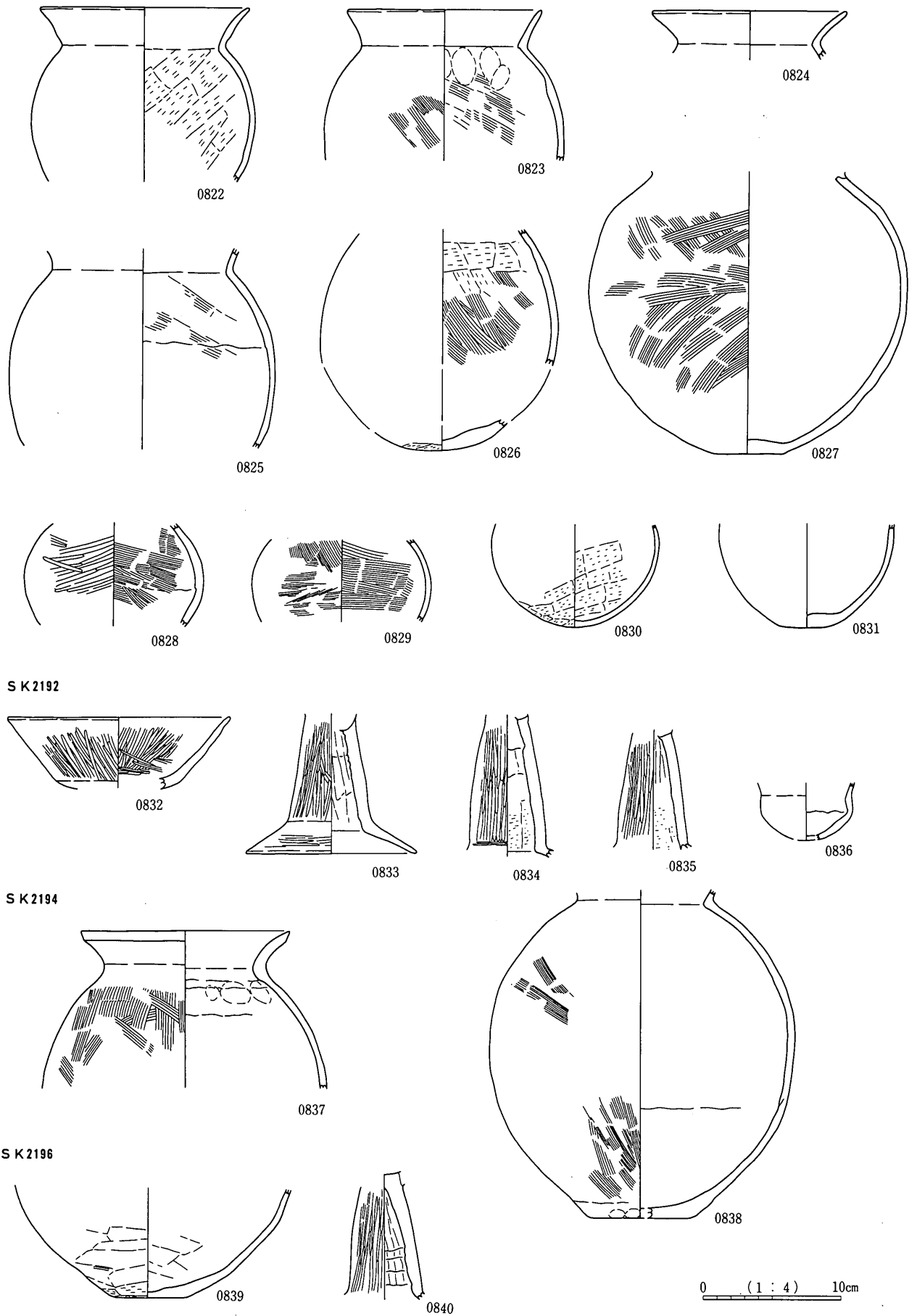


0806

第242図 土坑出土土器34< S K 2185 (0788~0791) S K 2187 (0792~0798) S K 2188 (0799・0800) S K 2189 (0801~0806)>

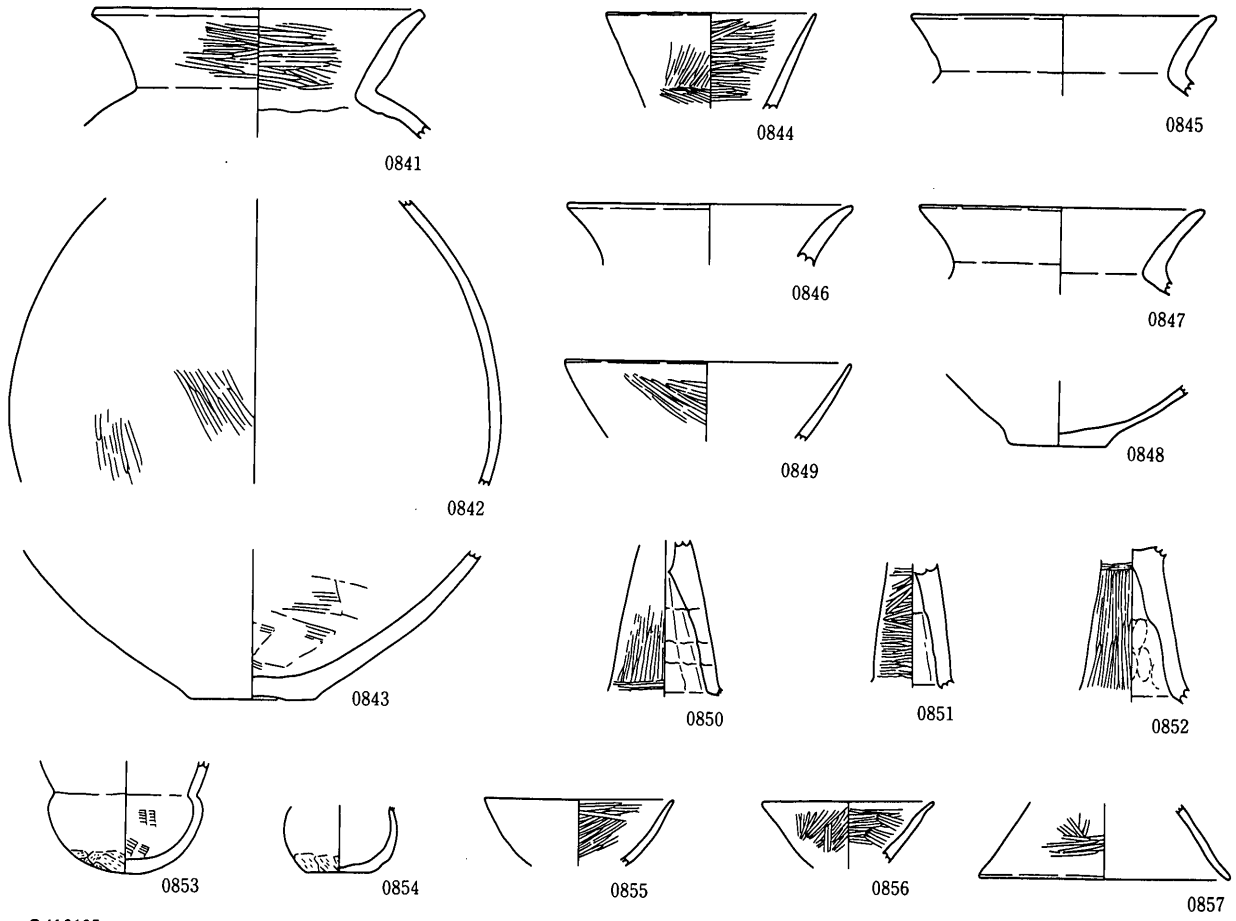


第243图 土坑出土土器35< S K2184 (0807~0821)>

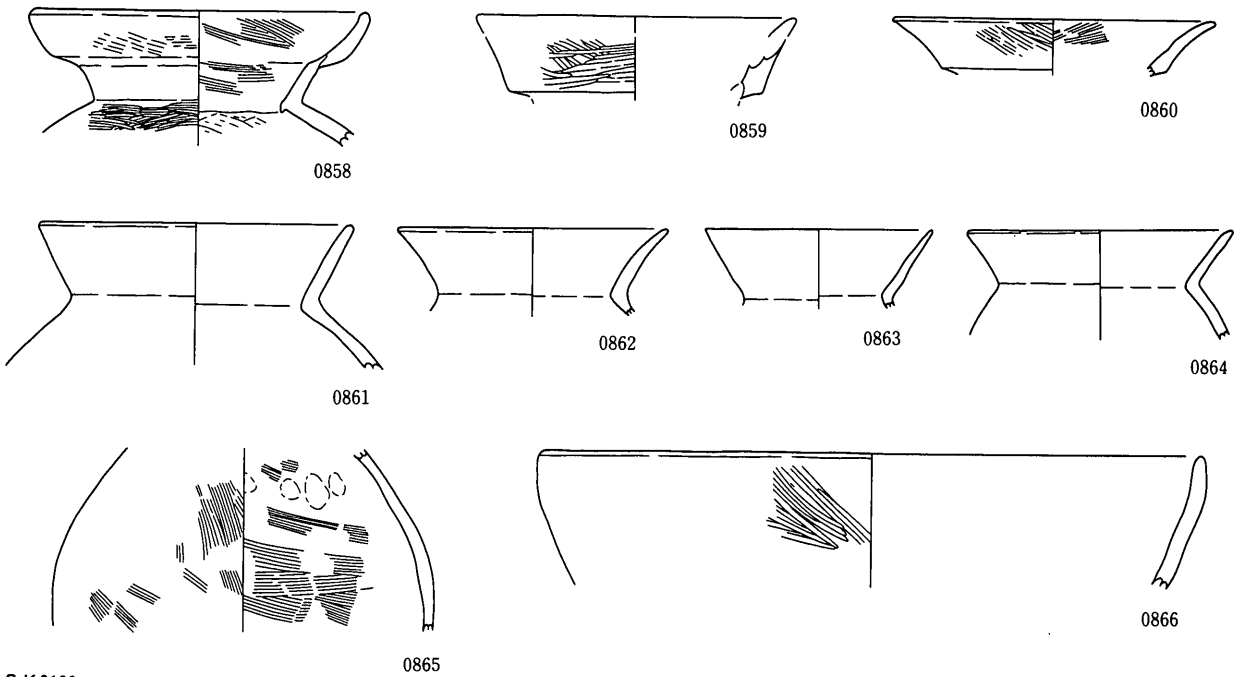


第244图 土坑出土土器36< S K 2184 (0822~0831) S K 2192 (0832~0836) S K 2194 (0837·0838)
S K 2196 (0839·0840)>

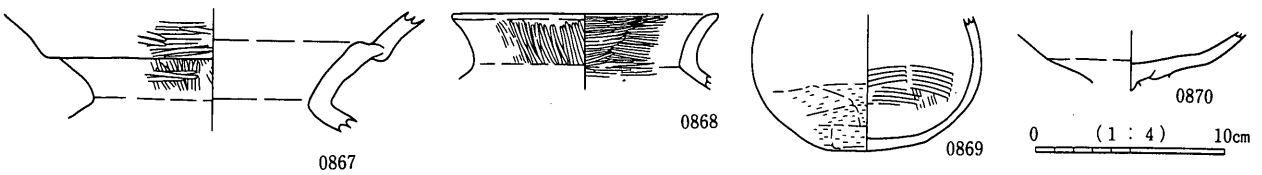
S K 2195



S K 2197

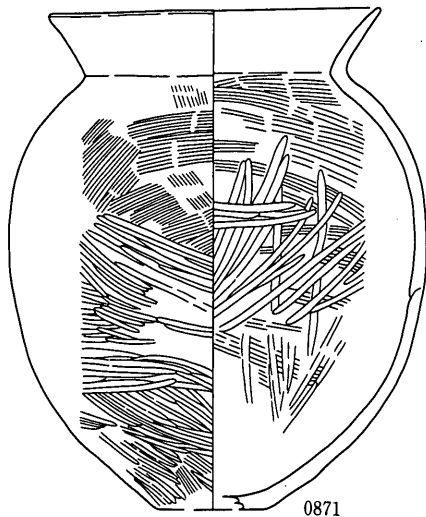


S K 2198

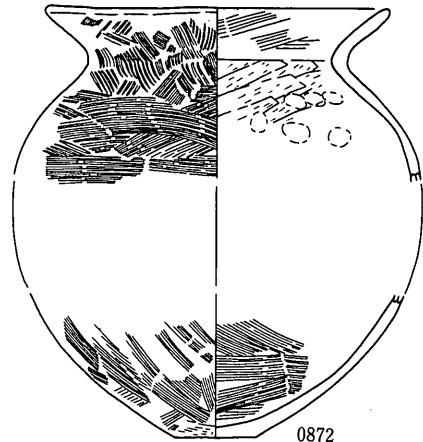


第245图 土坑出土土器37< S K 2195 (0841~0857) S K 2197 (0858~0866) S K 2198 (0867~0870)>

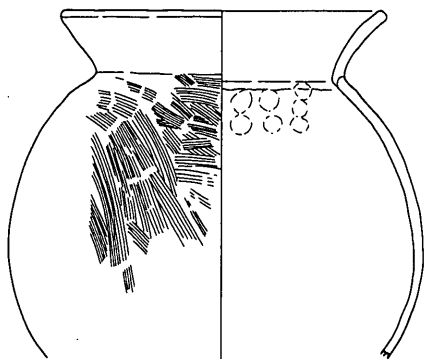
S K 2201



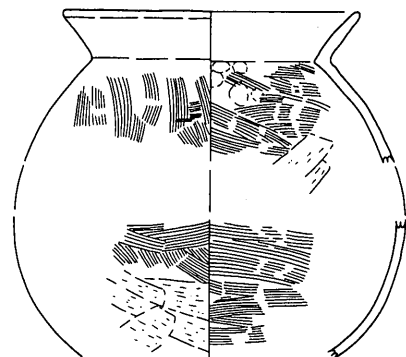
0871



0872



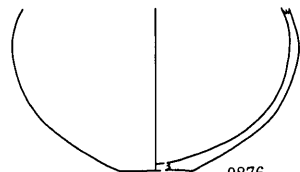
0873



0874



0875



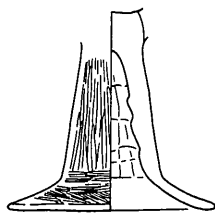
0876



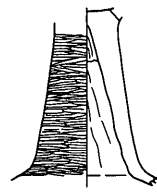
0877



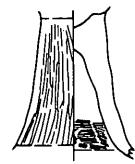
0878



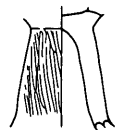
0879



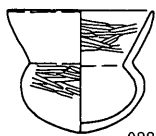
0880



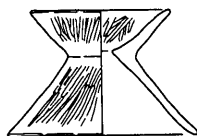
0881



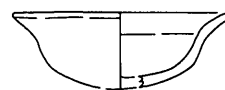
0882



0883



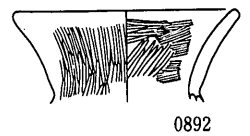
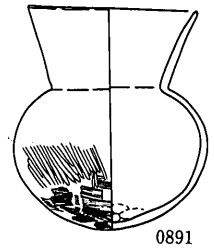
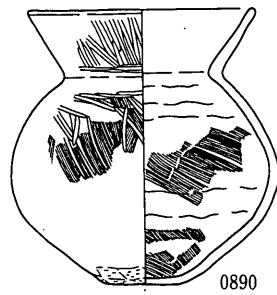
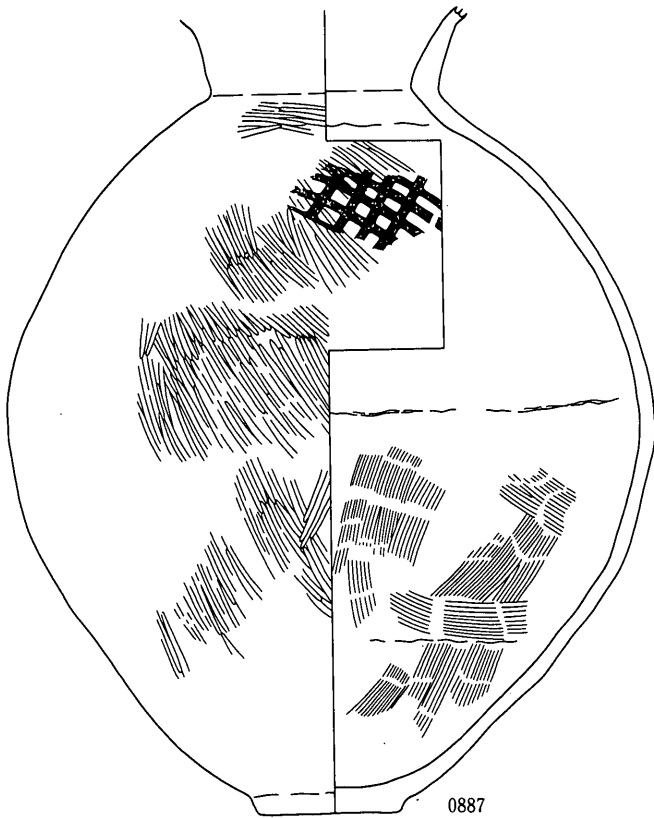
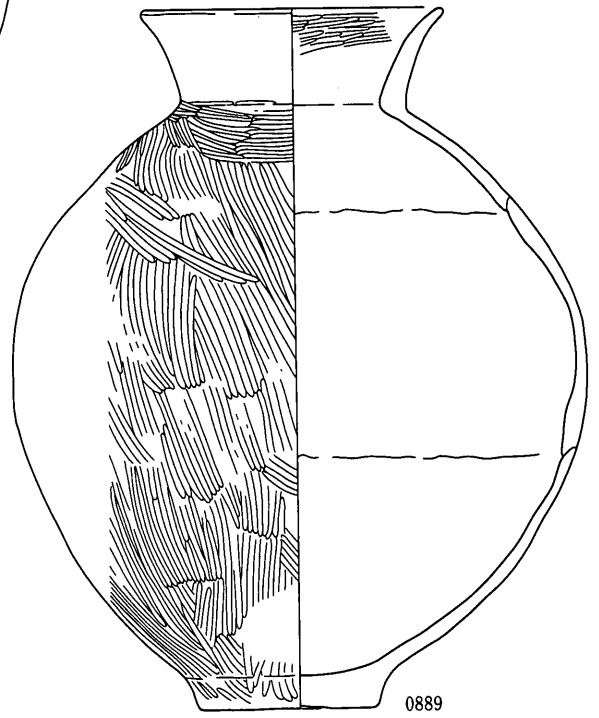
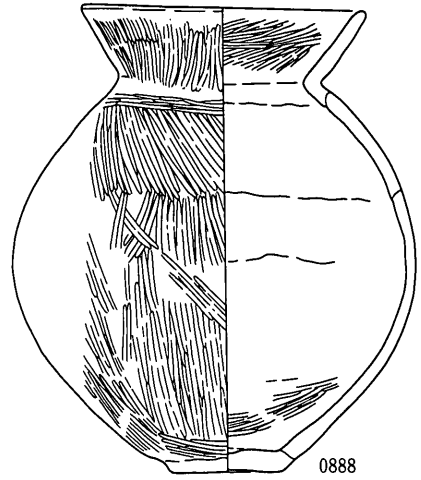
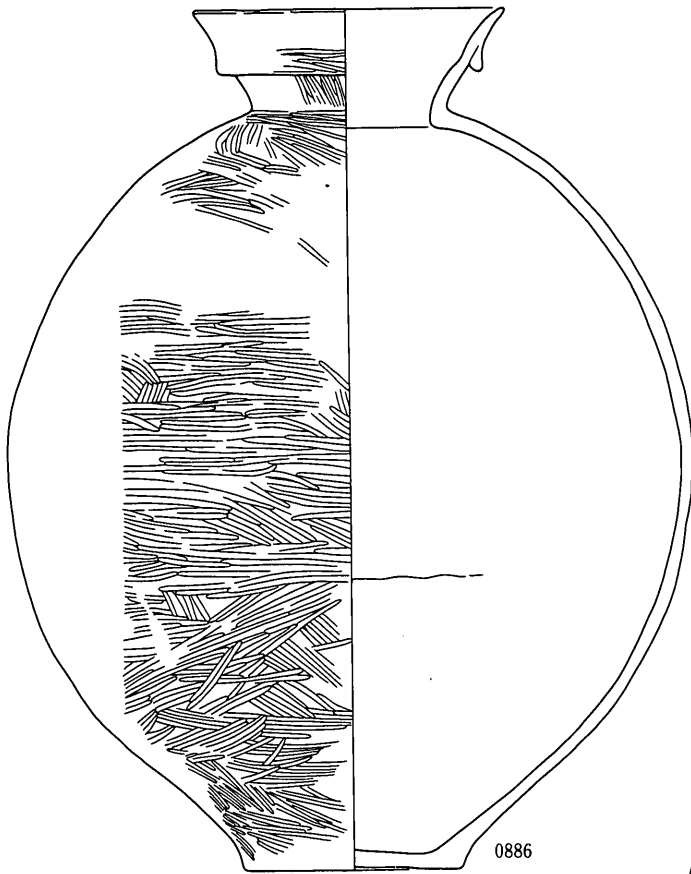
0884



0885

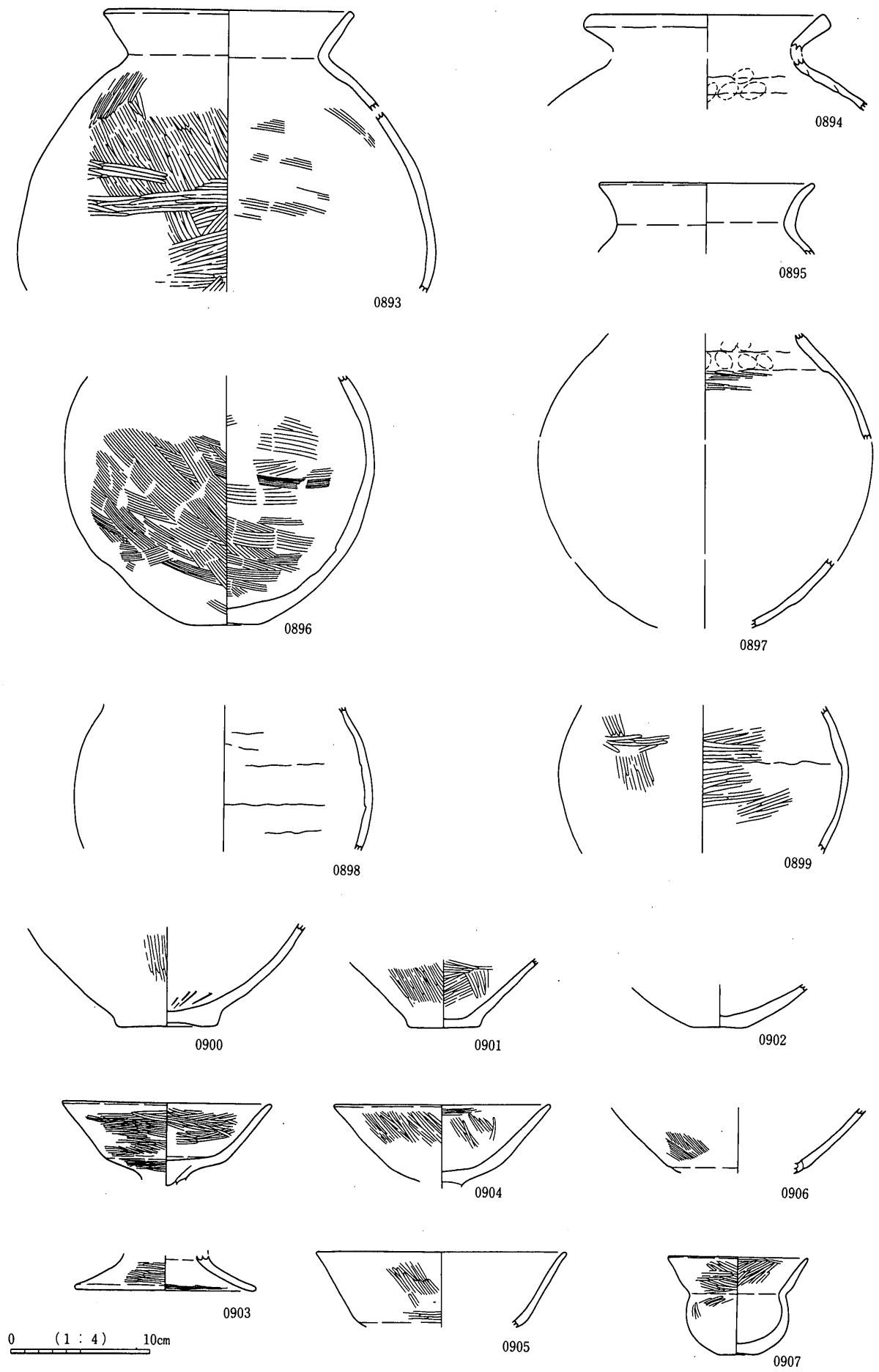
0 (1 : 4) 10cm

第246图 土坑出土土器38< S K 2201 (0871~0885) >

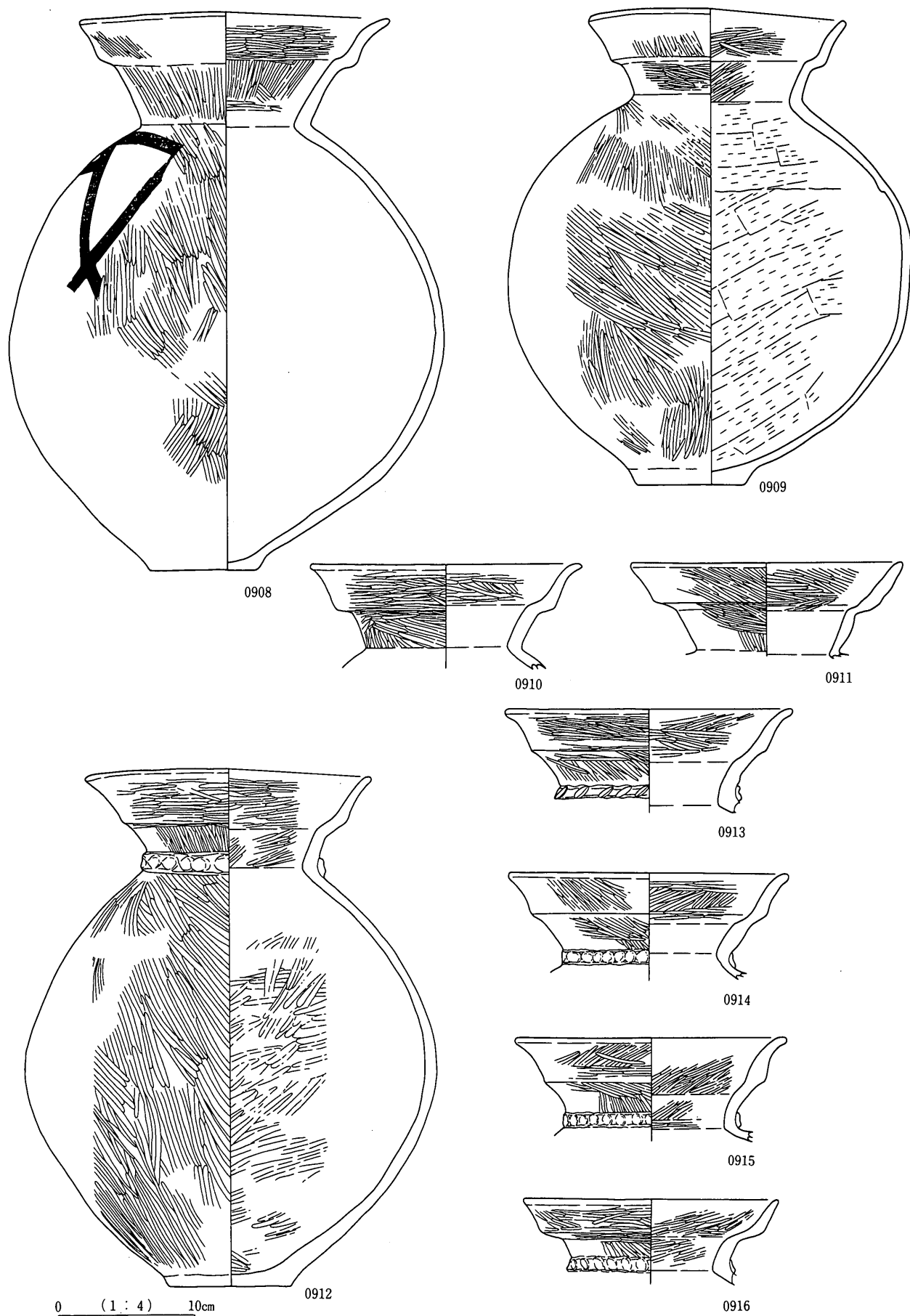


0 (1 : 4) 10cm

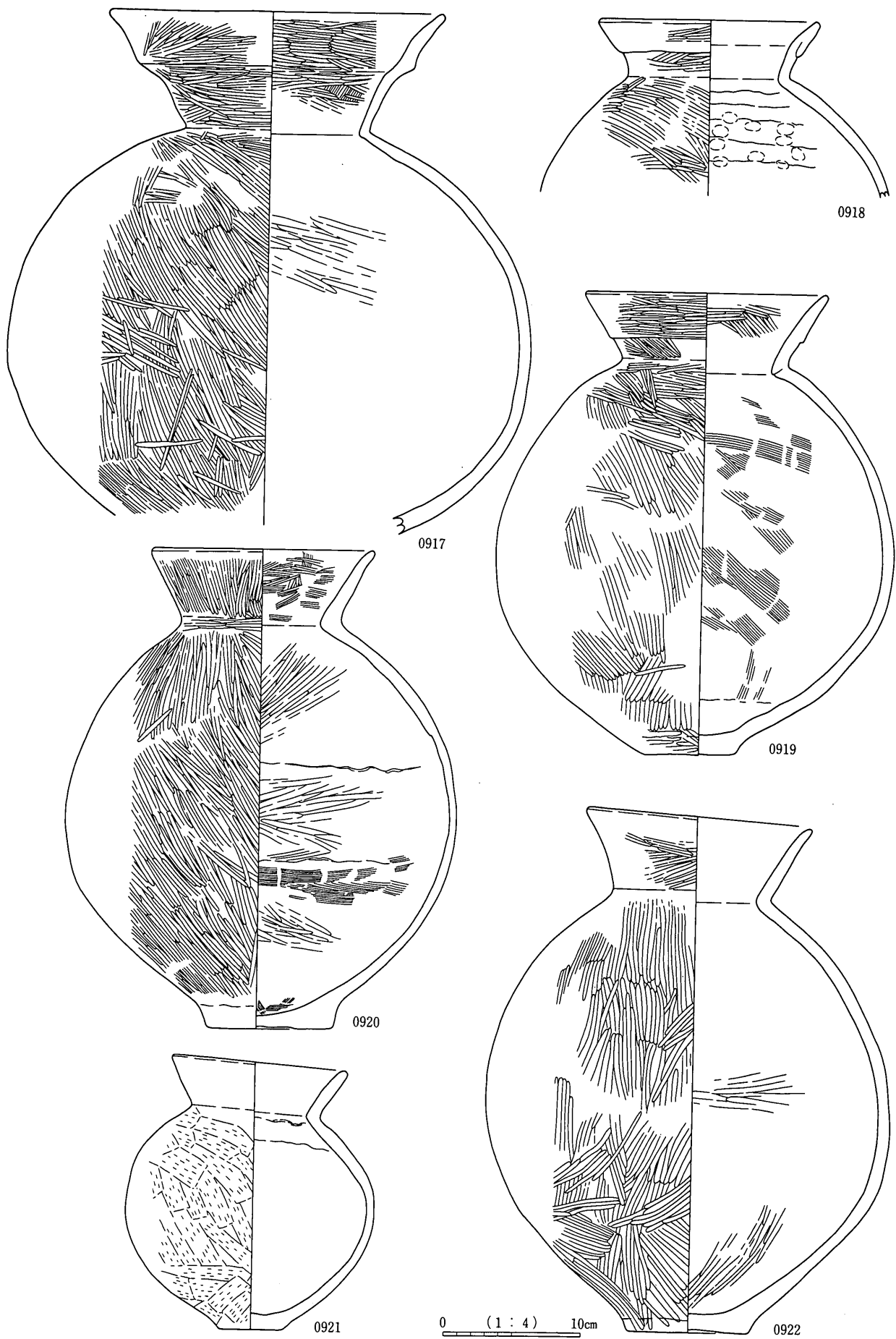
第247图 土坑出土土器39< S K 2203 (0886~0892)>



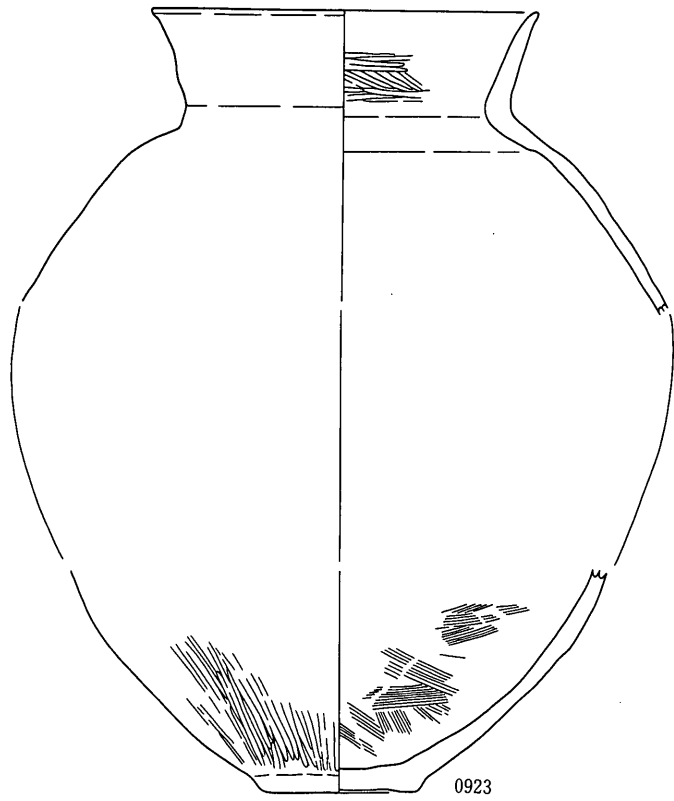
第248图 土坑出土土器40< S K2203 (0893~0907)>



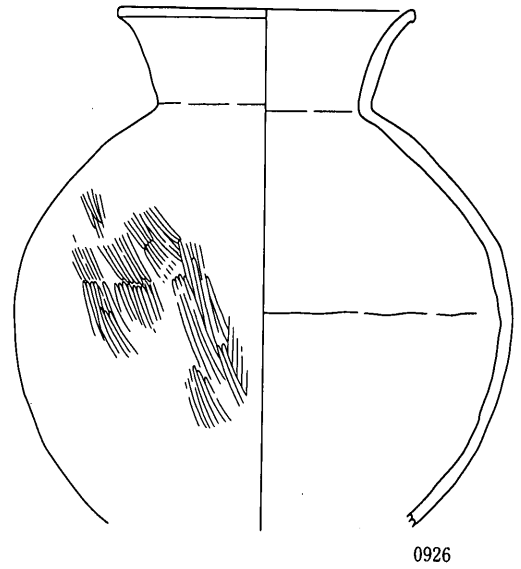
第249图 土坑出土土器41< S K 2207 (0908~0916) >



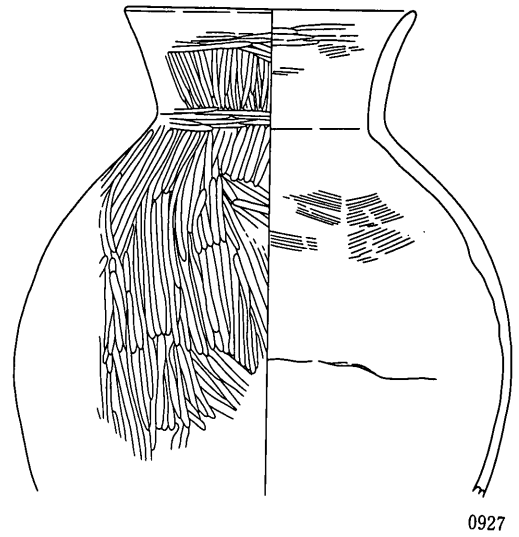
第250图 土坑出土土器42< S K2207 (0917~0922) >



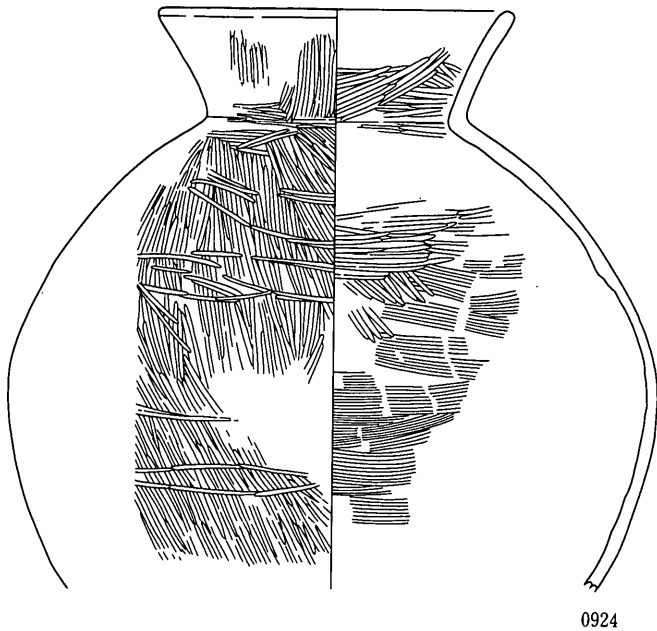
0923



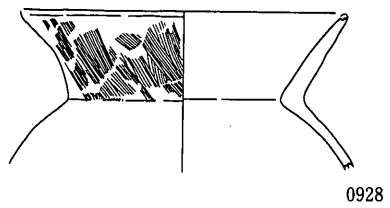
0926



0927



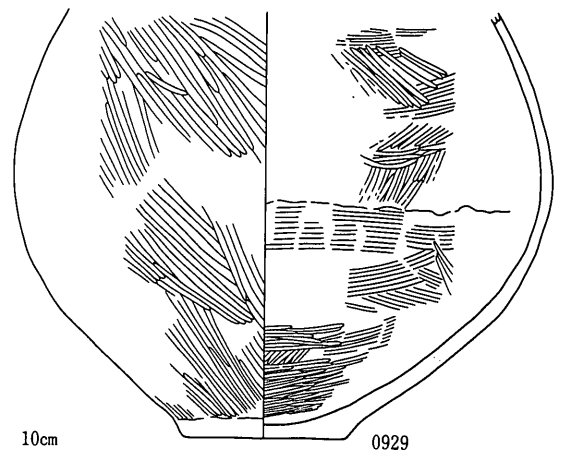
0924



0928



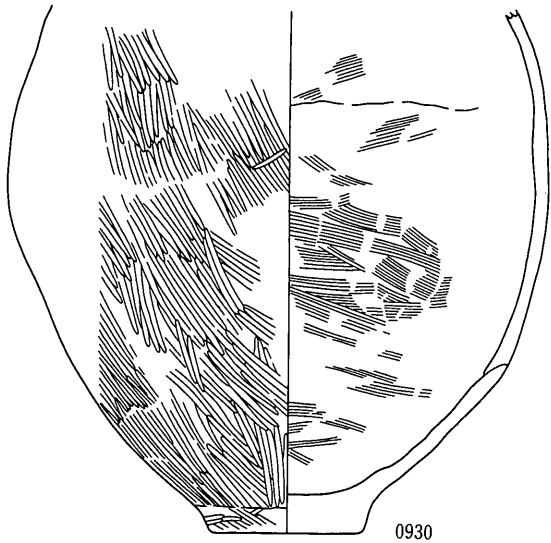
0925



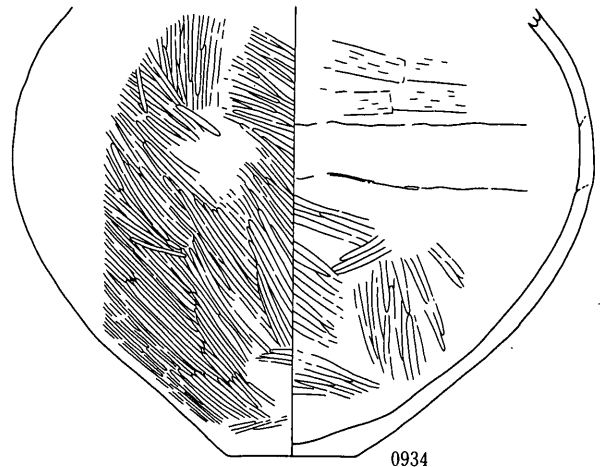
0929

0 (1 : 4) 10cm

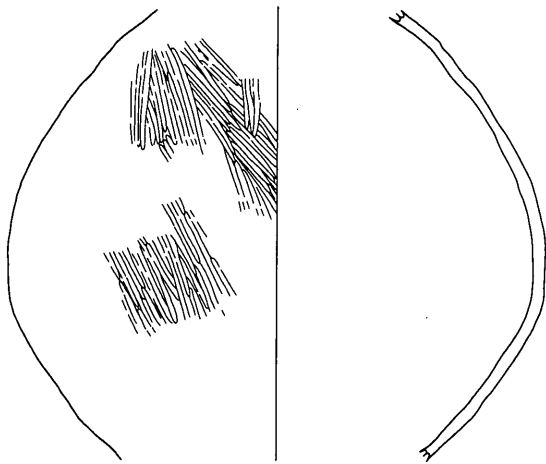
第251図 土坑出土土器43< S K 2207 (0923~0929) >



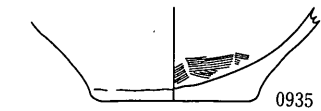
0930



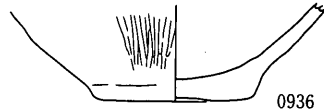
0934



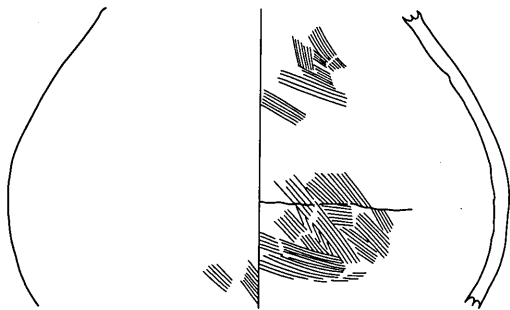
0931



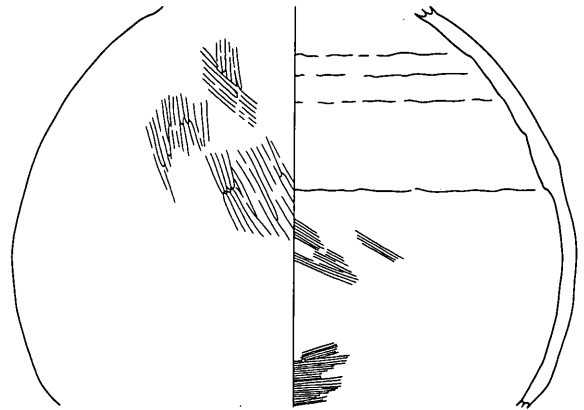
0935



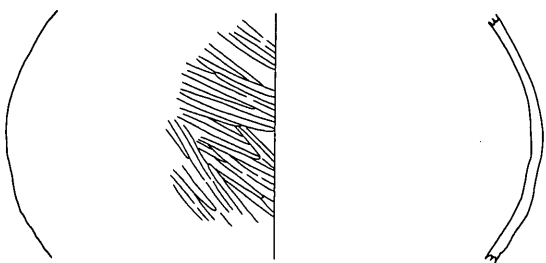
0936



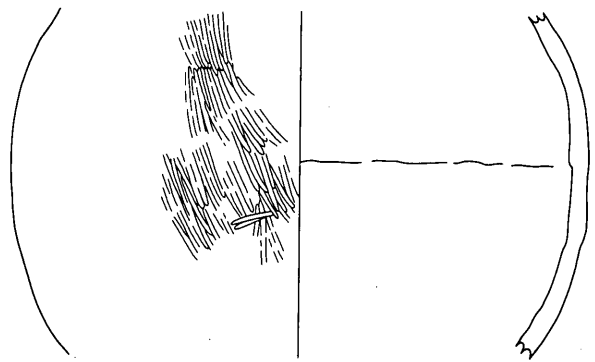
0932



0937



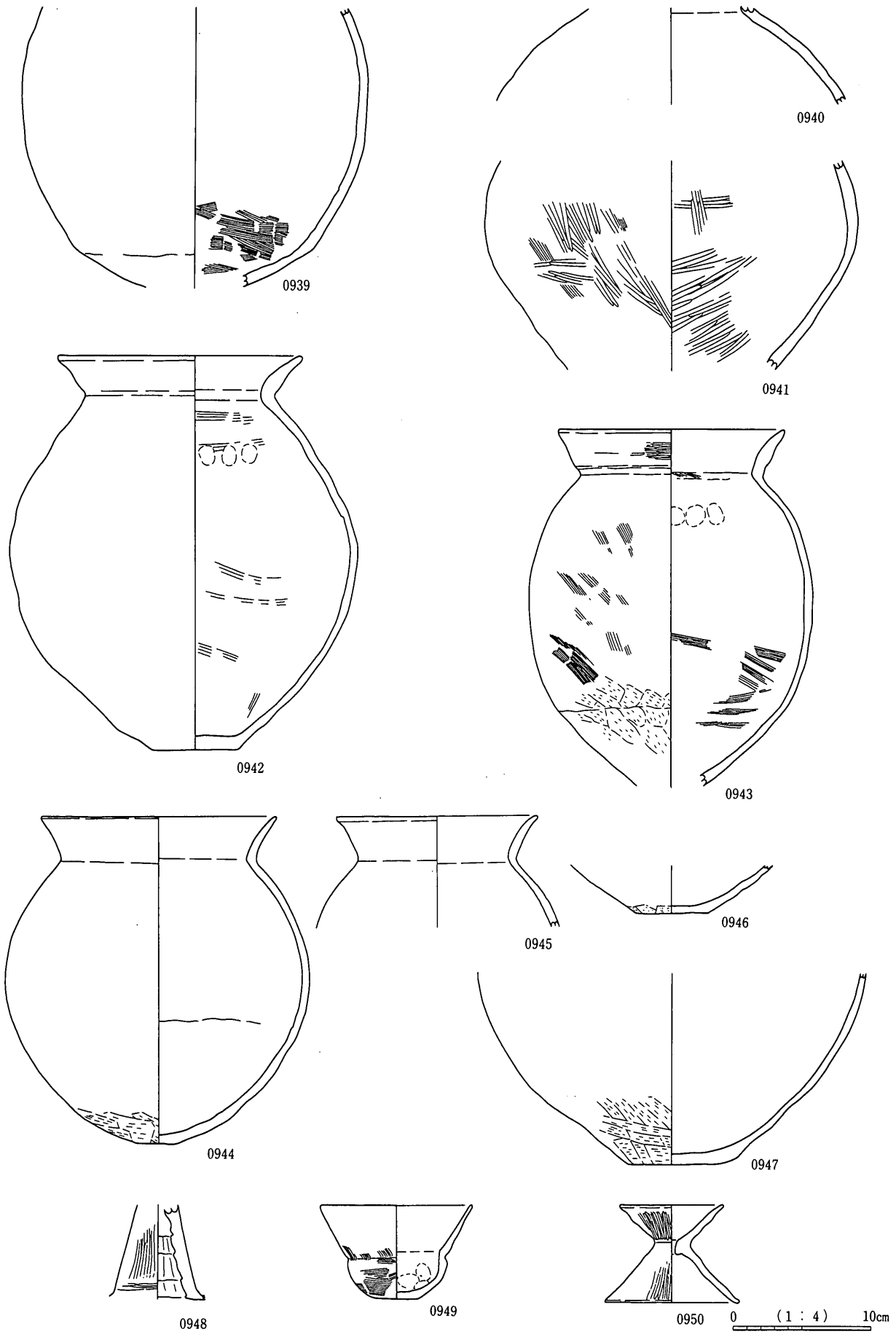
0933



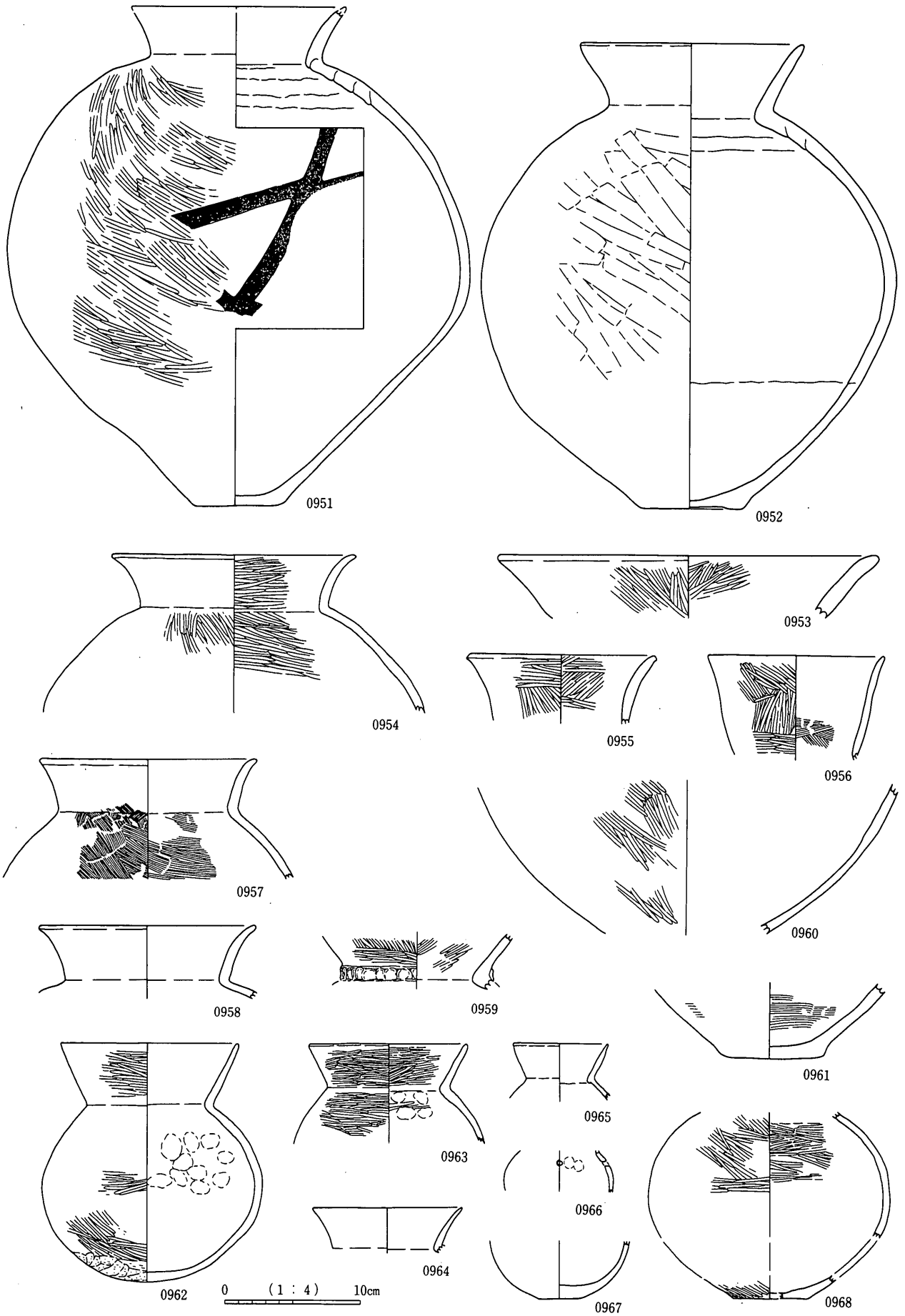
0938

0 (1 : 4) 10cm

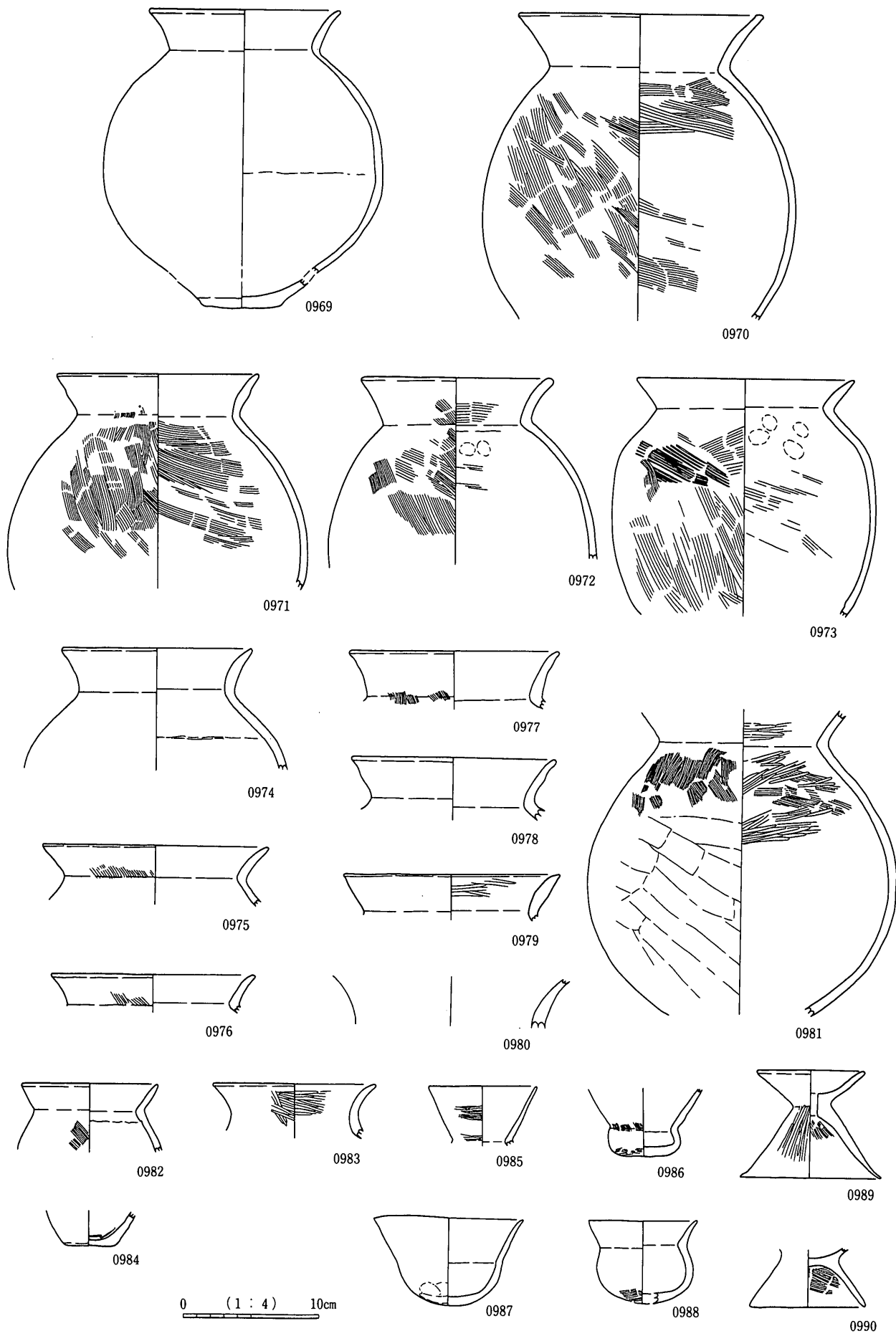
第252图 土坑出土土器44< S K2207 (0930~0938)>



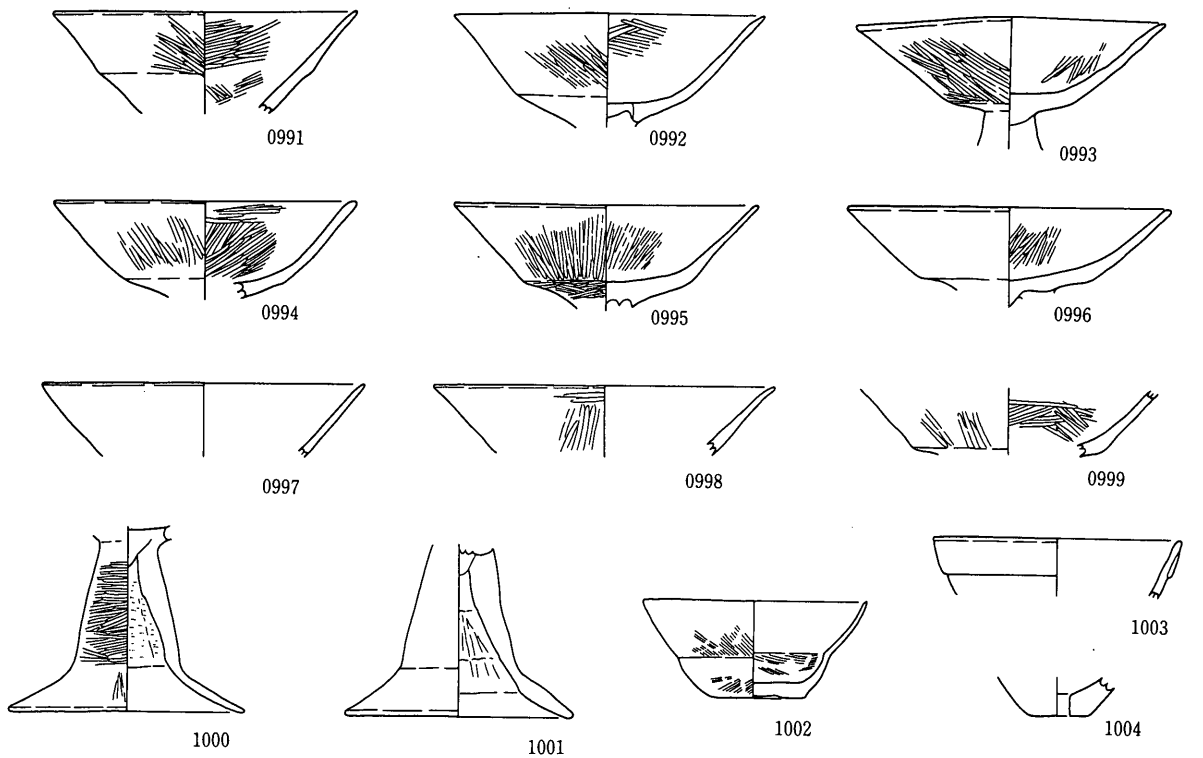
第253图 土坑出土土器45< S K2207 (0939~0950)>



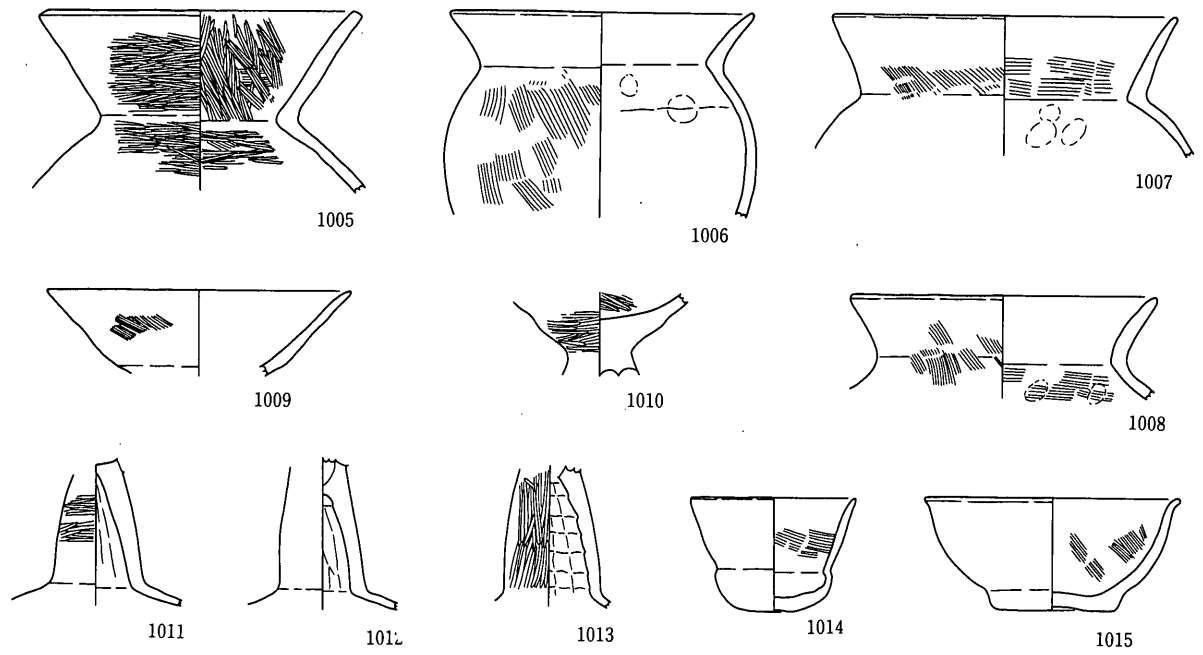
第254図 土坑出土土器46< S K 2208 (0951~0968)>



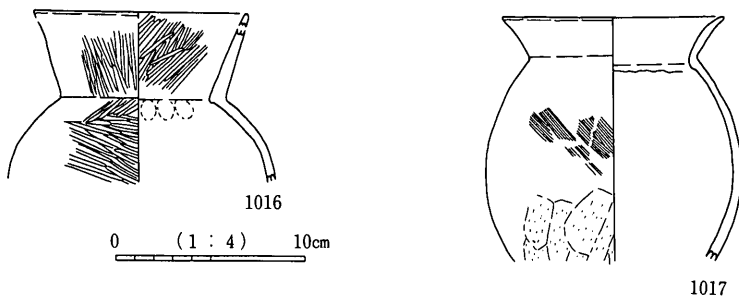
第255图 土坑出土土器47< S K2208 (0969~0990)>



S K 2210

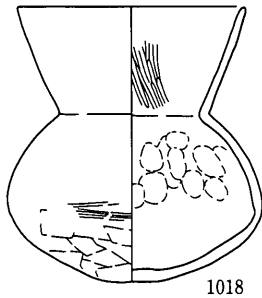


S K 2246

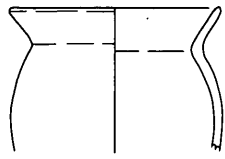


第256图 土坑出土土器48< S K 2208 (0991~1004) S K 2210 (1005~1015) S K 2246 (1016·1017)>

S K 2228



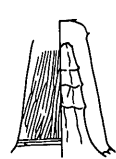
1018



1019



1020

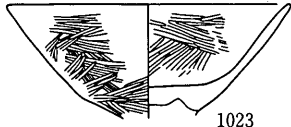


1021

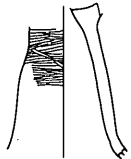


1022

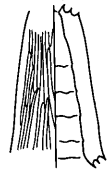
S K 2255



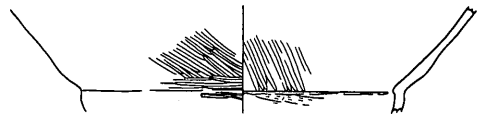
1023



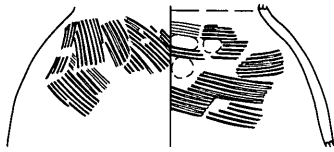
1024



1025

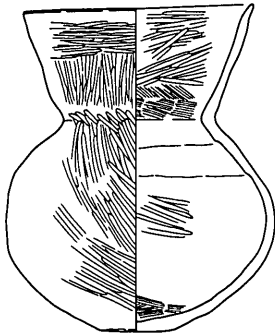


1026

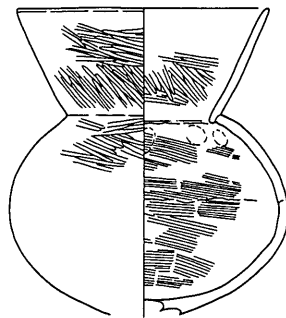


1027

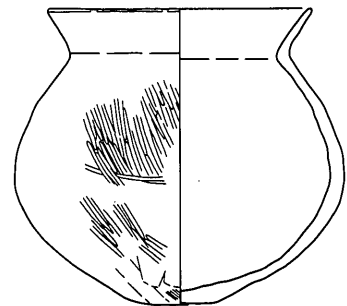
S K 2268



1028



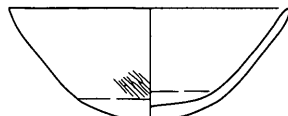
1029



1030



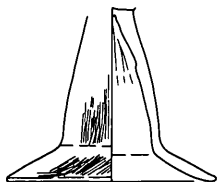
1032



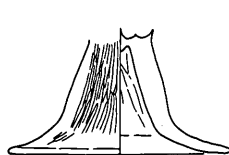
1033



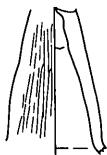
1031



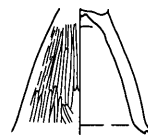
1034



1035



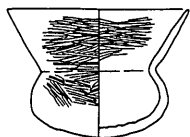
1036



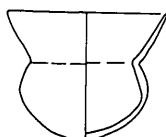
1037



1042



1038



1039



1040



1041

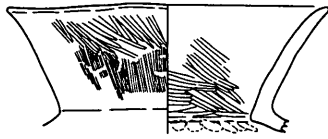


1043

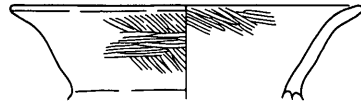
0 (1 : 4) 10cm

第257图 土坑出土土器49< S K 2228 (1018~1022) S K 2255 (1023~1027) S K 2268 (1028~1043) >

S K 2258



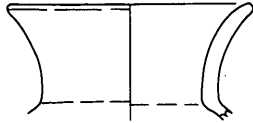
1044



1045



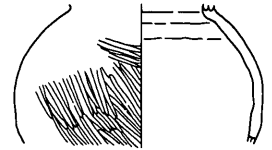
1046



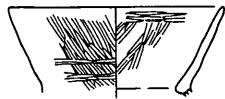
1047



1049



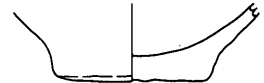
1051



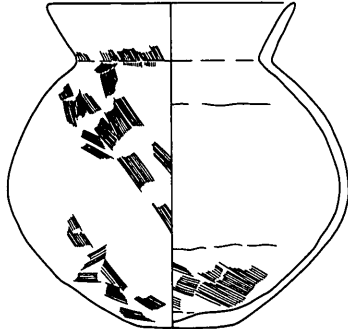
1048



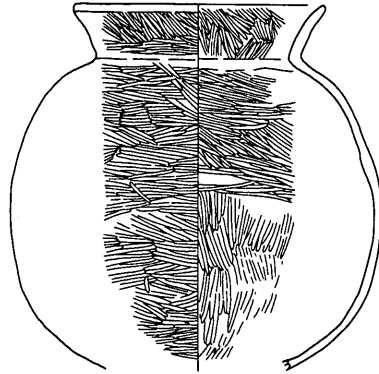
1050



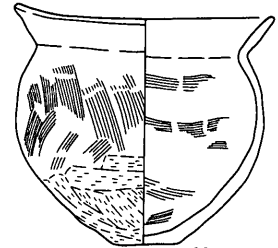
1052



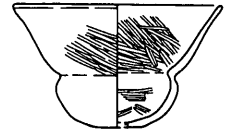
1053



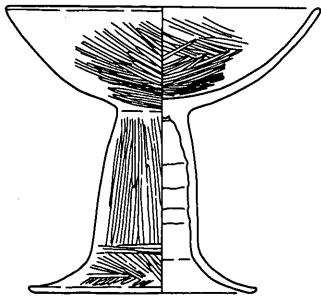
1054



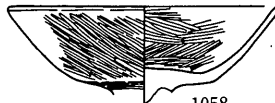
1055



1056



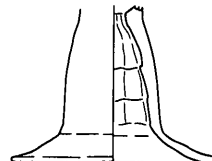
1057



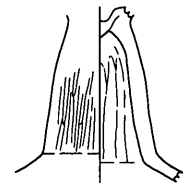
1058



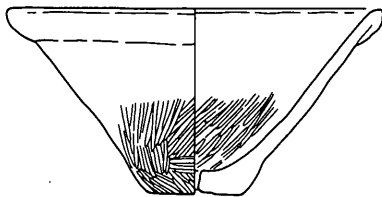
1059



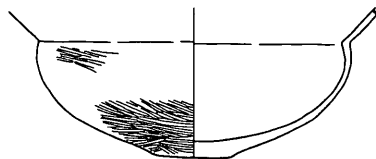
1060



1061



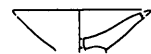
1062



1063

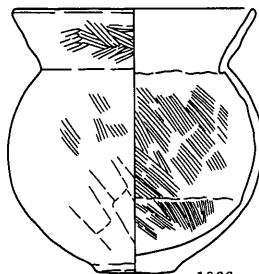


1064

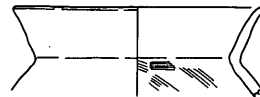


1065

S K 2259



1066

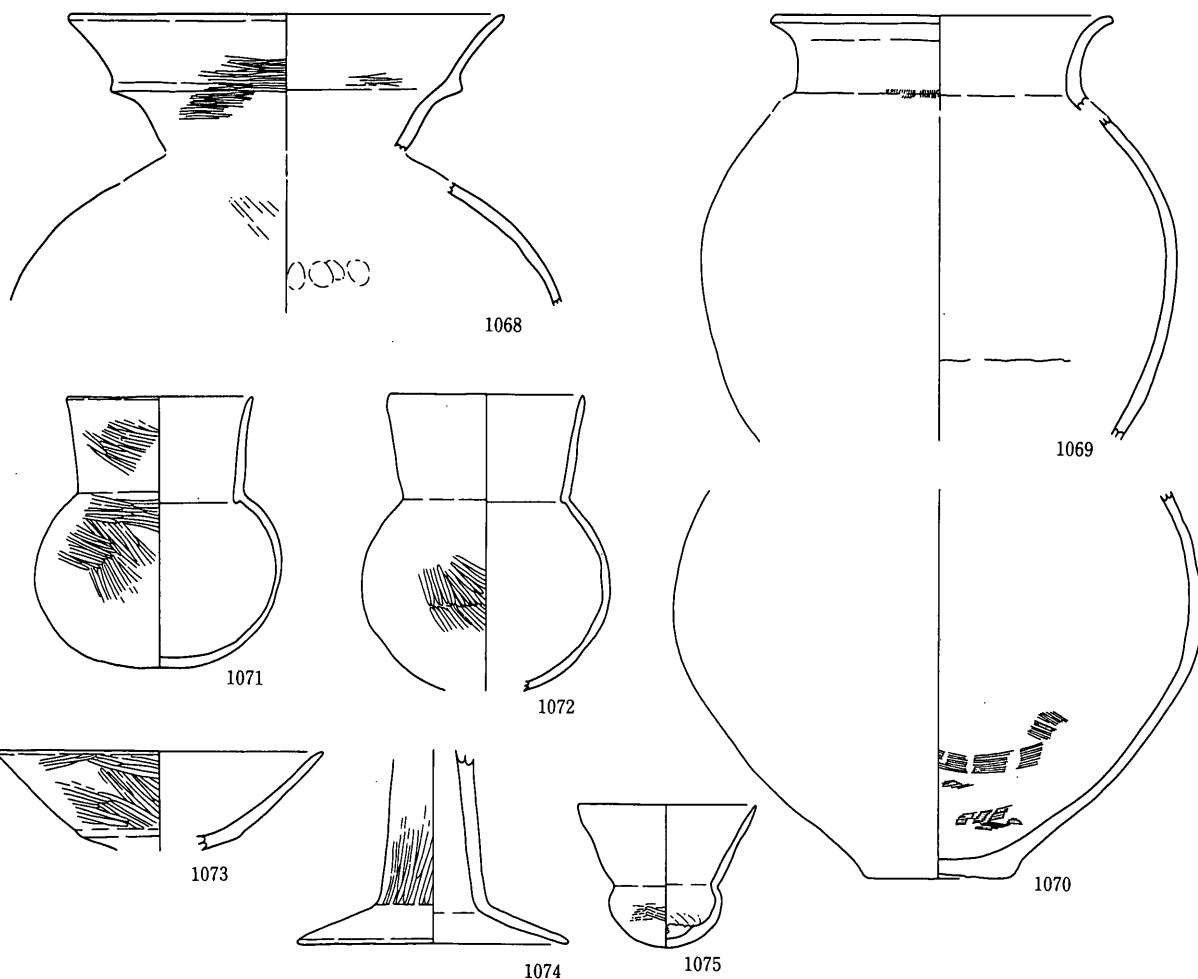


1067

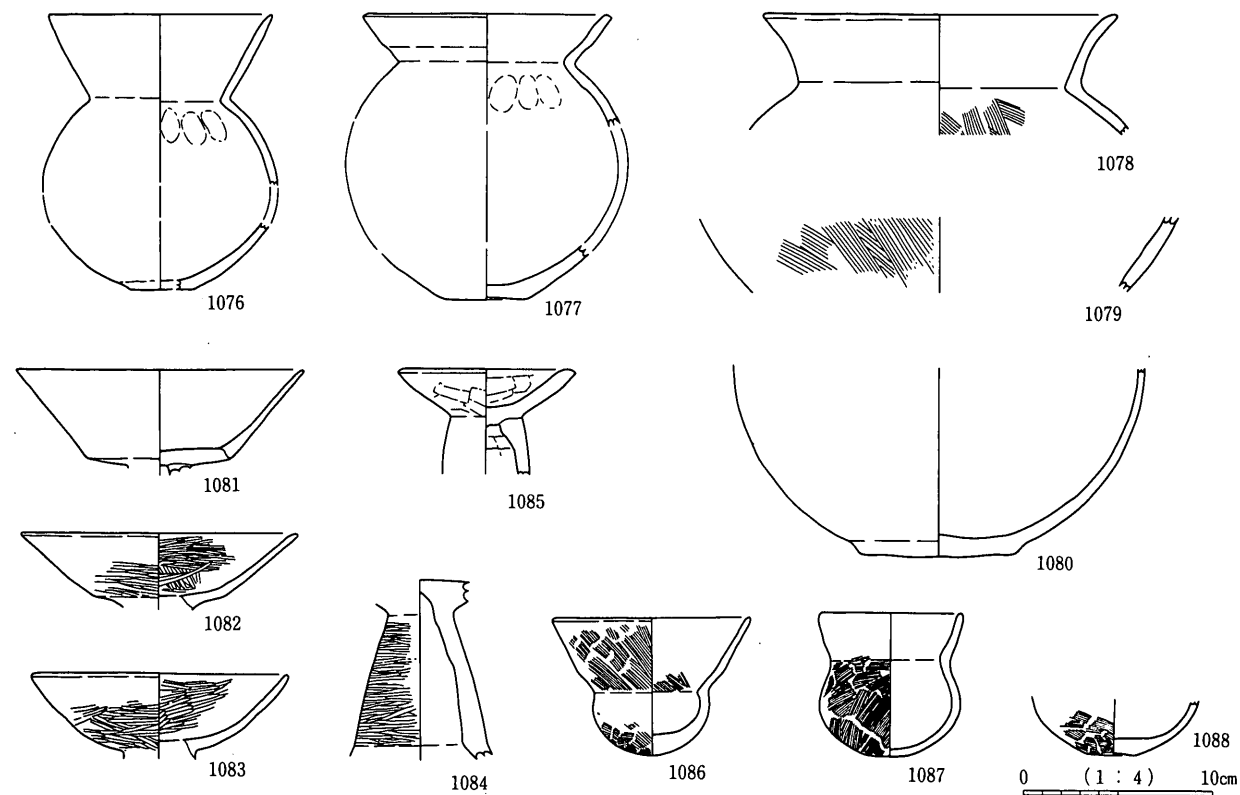
0 (1 : 4) 10cm

第258图 土坑出土土器50< S K 2258 (1044~1065) S K 2259 (1066·1067)>

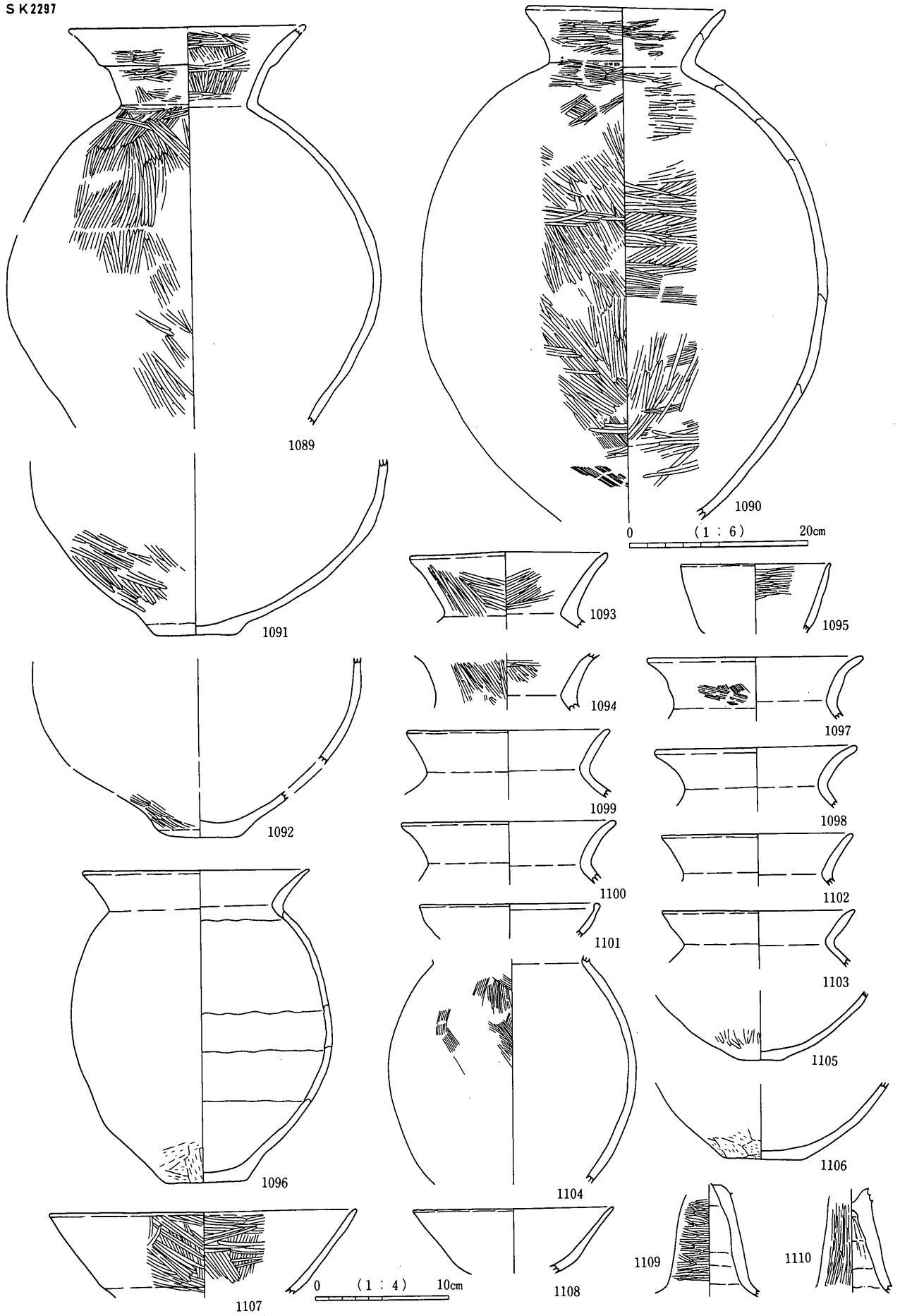
S K2291



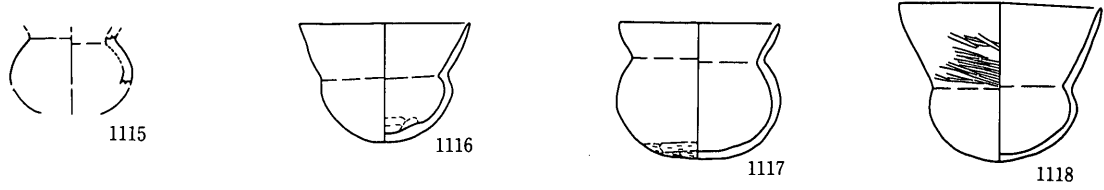
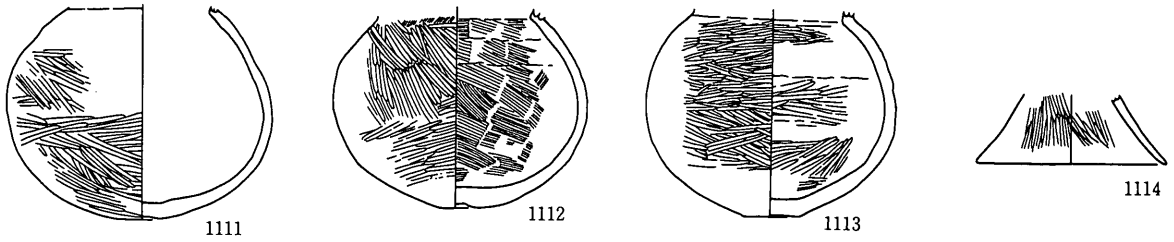
S K2302



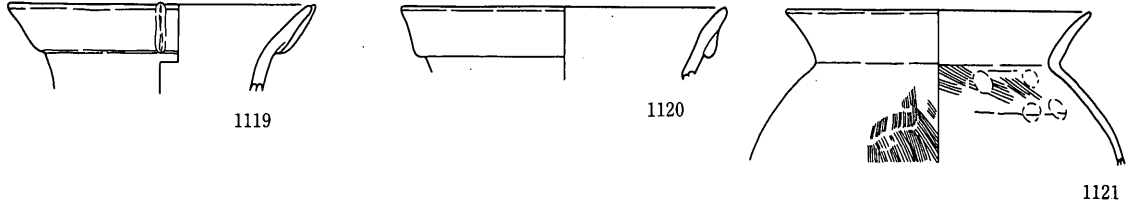
第259图 土坑出土土器51< S K2291 (1068~1075) S K2302 (1076~1088)>



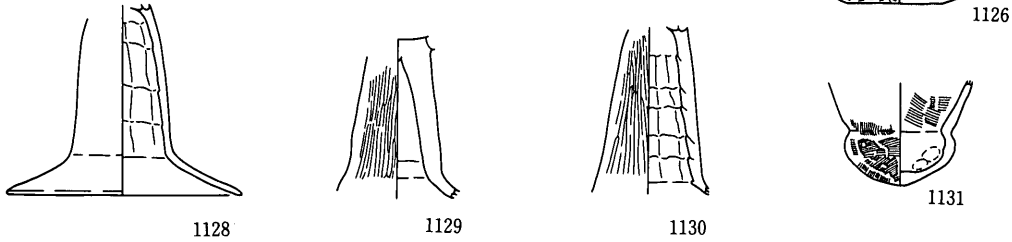
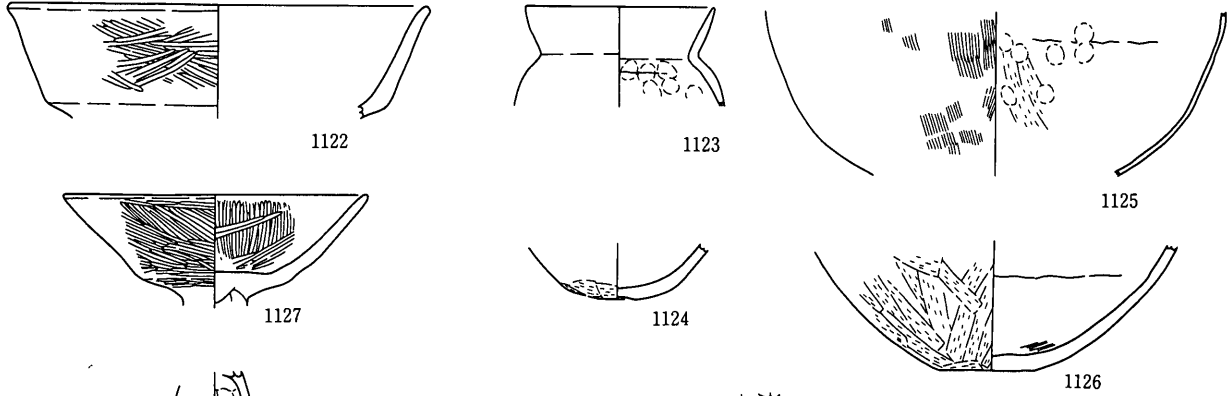
第260图 土坑出土土器52< S K 2297 (1089~1110)>



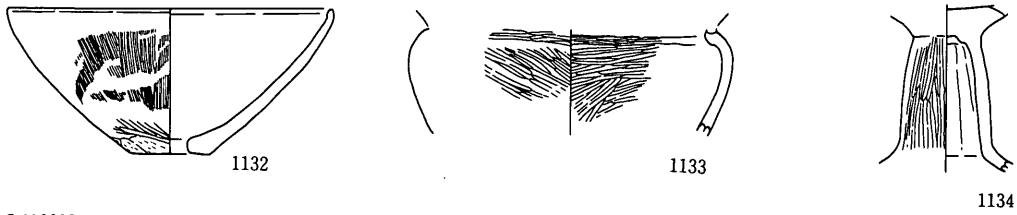
S K 2279



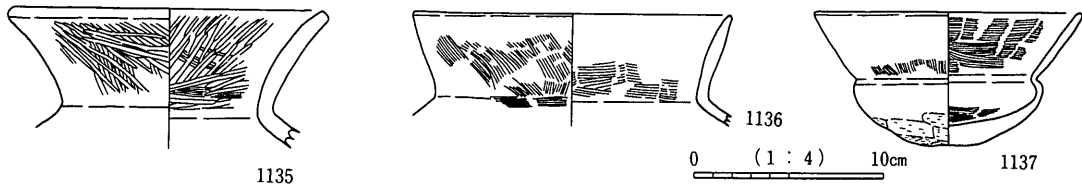
S K 2280



S K 2285

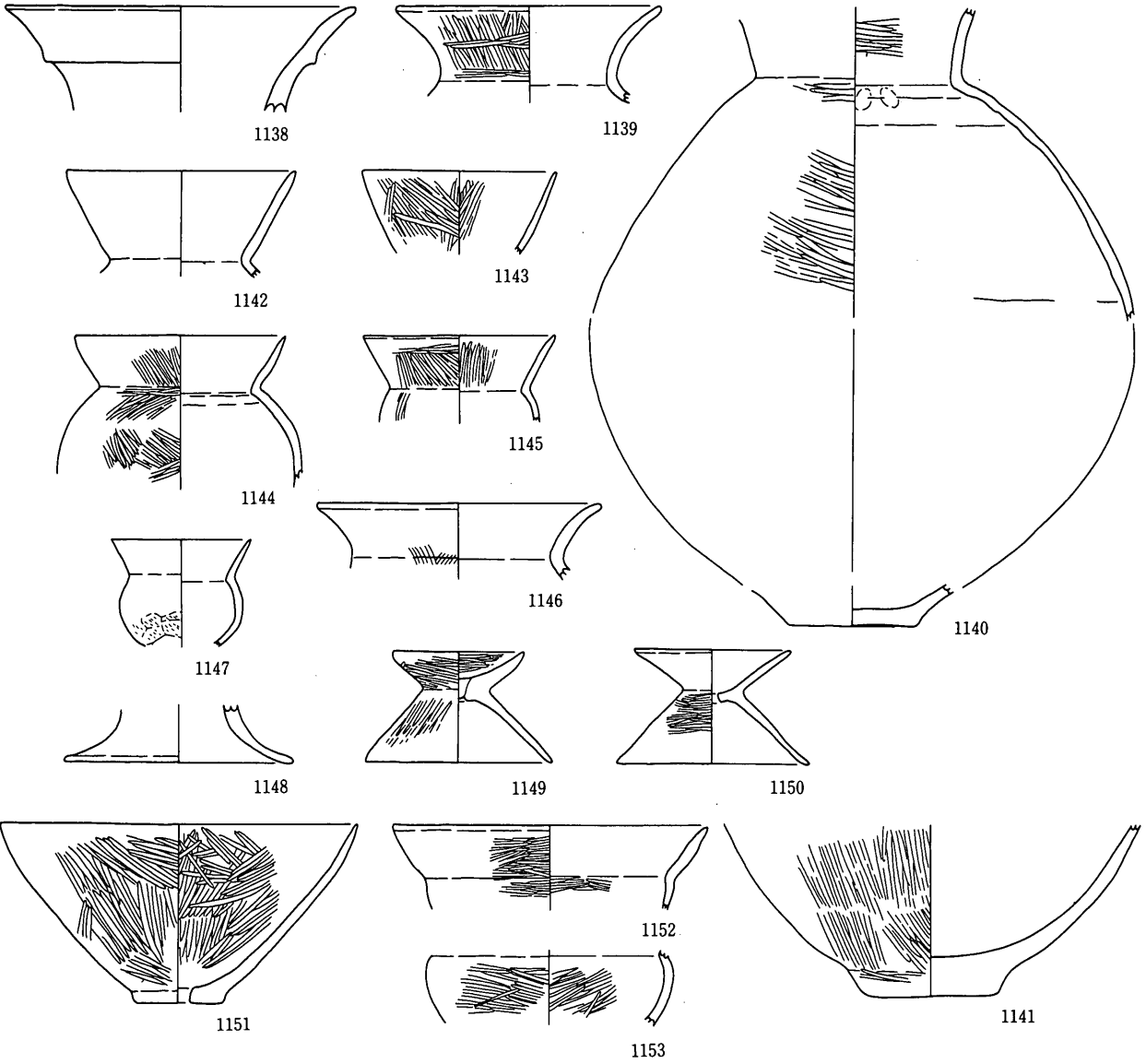


S K 2290

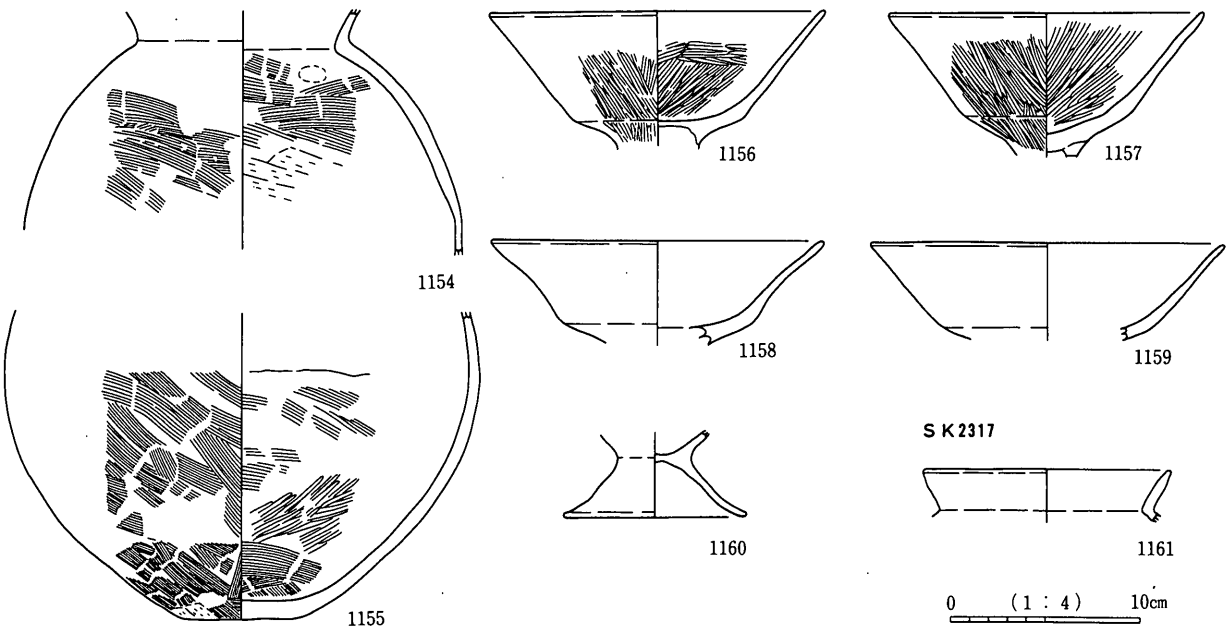


第261图 土坑出土土器53< S K 2279 (1119~1121) S K 2280 (1122~1131) S K 2285 (1132~1134)
S K 2290 (1135~1137) S K 2297 (1111~1118)>

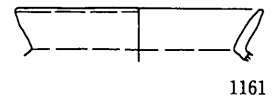
S K 2299



S K 2313



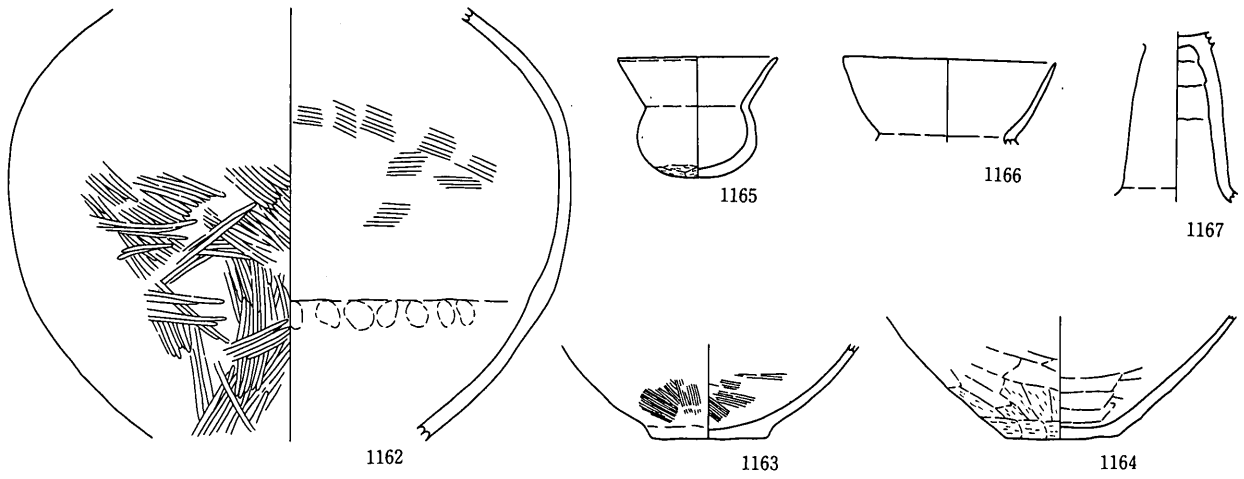
S K 2317



0 (1 : 4) 10cm

第262图 土坑出土土器54 < S K 2299 (1138~1153) S K 2313 (1154~1160) S K 2317 (1161) >

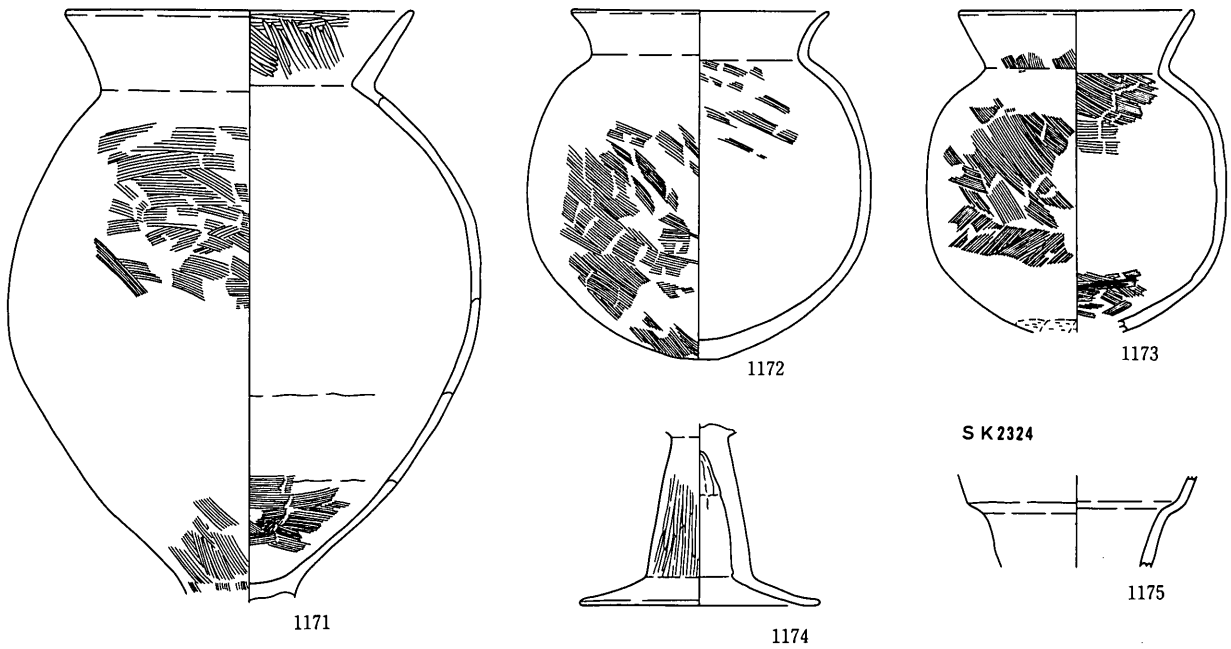
S K 2312



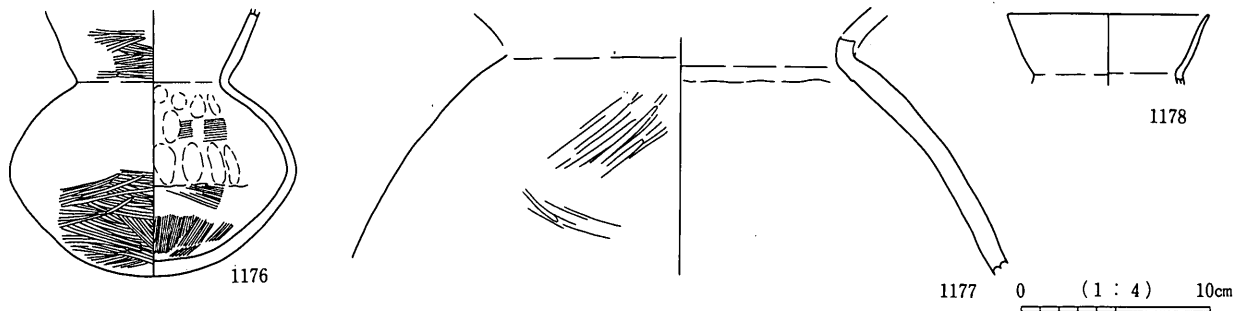
S K 2322



S K 2323

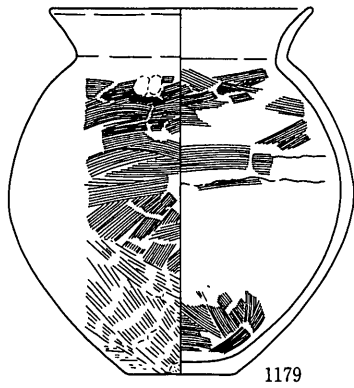


S K 2325

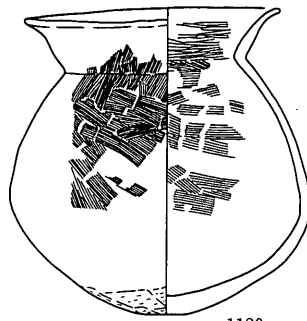


第263图 土坑出土土器55< S K 2312 (1162~1167) S K 2322 (1168~1170) S K 2323 (1171~1174) S K 2324 (1175) S K 2325 (1176~1178) >

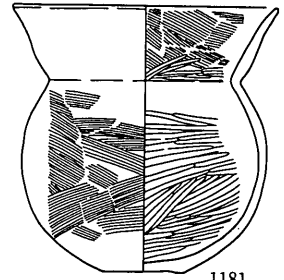
S K 2330



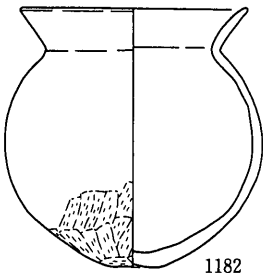
1179



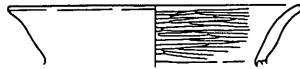
1180



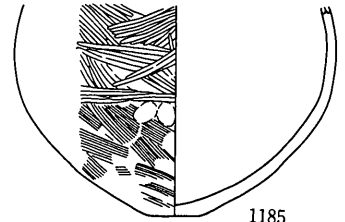
1181



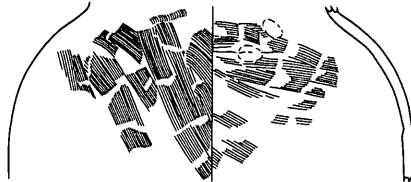
1182



1183



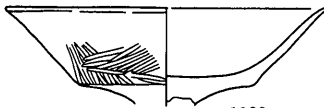
1185



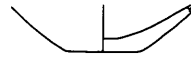
1184



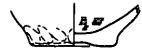
1186



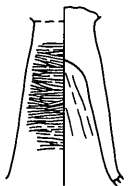
1189



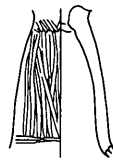
1187



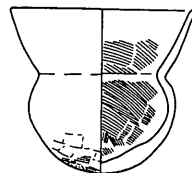
1188



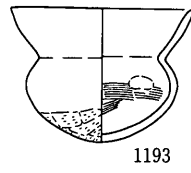
1190



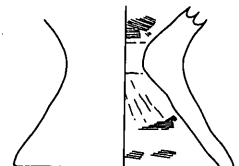
1191



1192



1193



1194

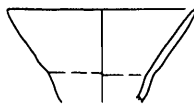
S K 2331



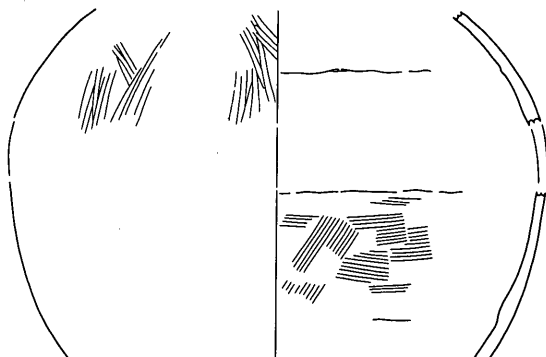
1195



1196



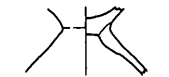
1198



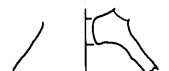
1197



1199

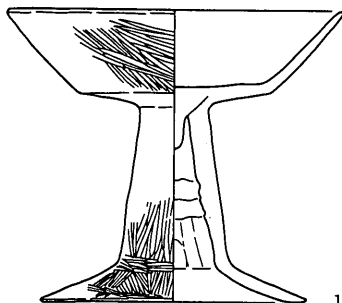


1200



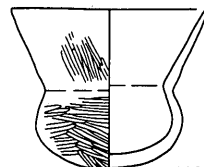
1201

S K 2333

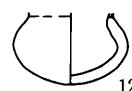


1202

S K 2339



1203

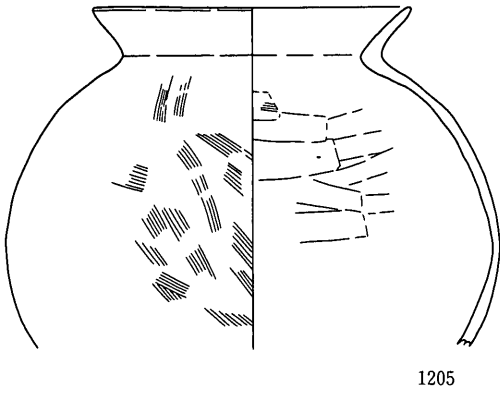


1204

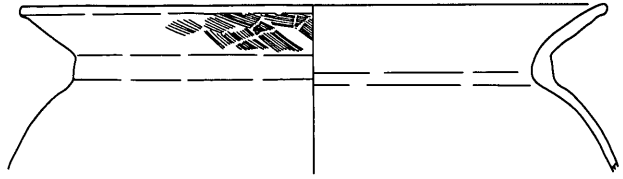
0 (1 : 4) 10cm

第264图 土坑出土土器56 < S K 2330 (1179~1194) S K 2331 (1195~1201) S K 2333 (1202) S K 2339 (1203·1204) >

S K 2340



1205

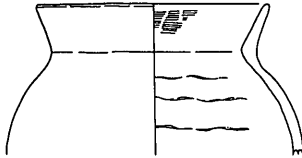


1206



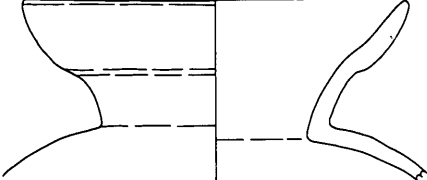
1207

S K 2351

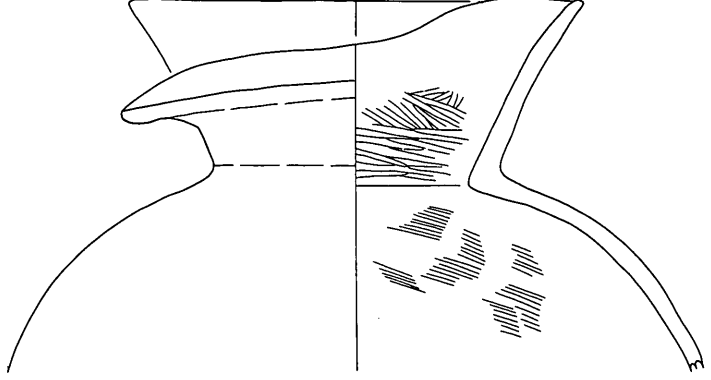


1208

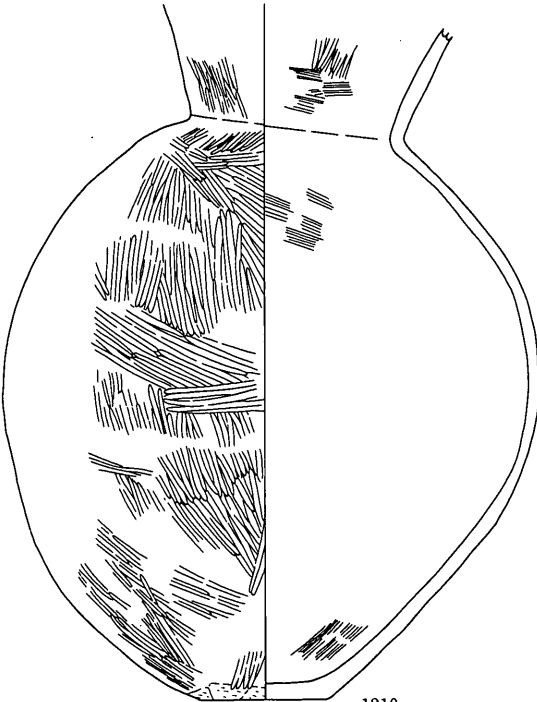
S K 2346



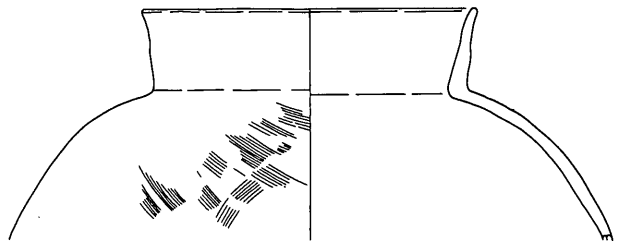
1209



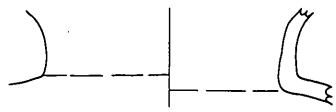
1211



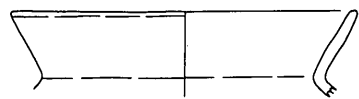
1210



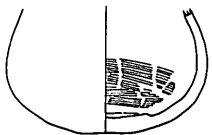
1212



1213



1214

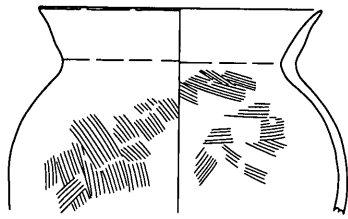


1215

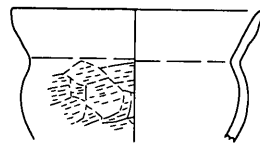
0 (1 : 4) 10cm

第265図 土坑出土土器57< S K 2340 (1205~1207) S K 2346 (1209~1215) S K 2351 (1208) >

S K 2345



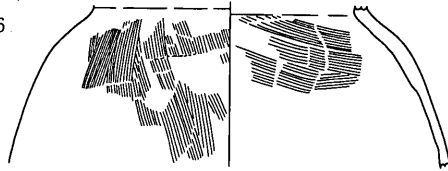
1216



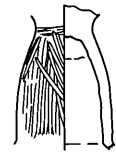
1217



1219

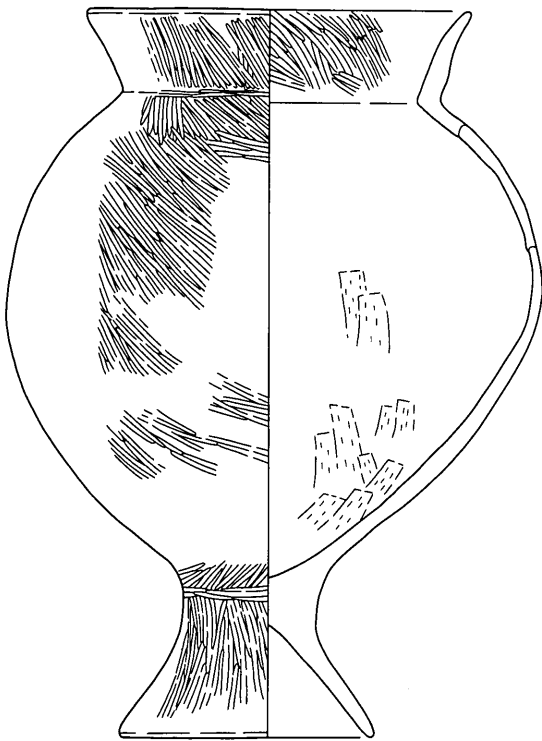


1218

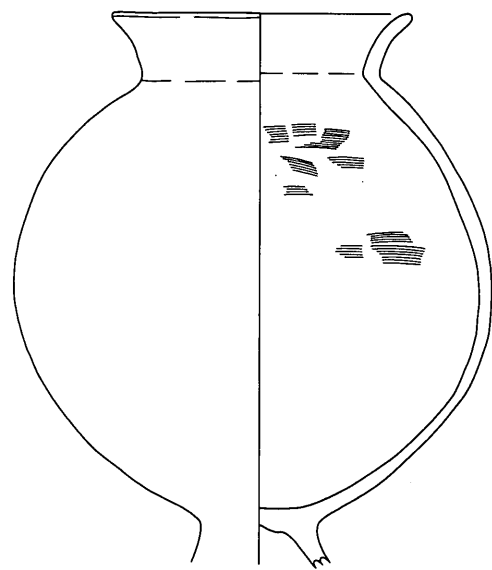


1220

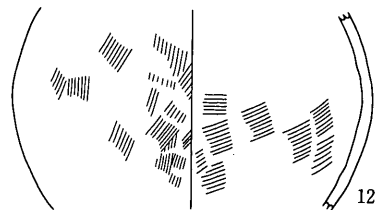
S K 2361



1221

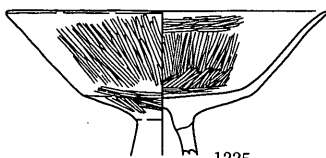


1222



1223

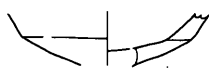
0 (1 : 4) 10cm



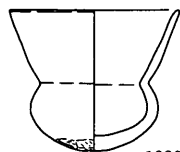
1225



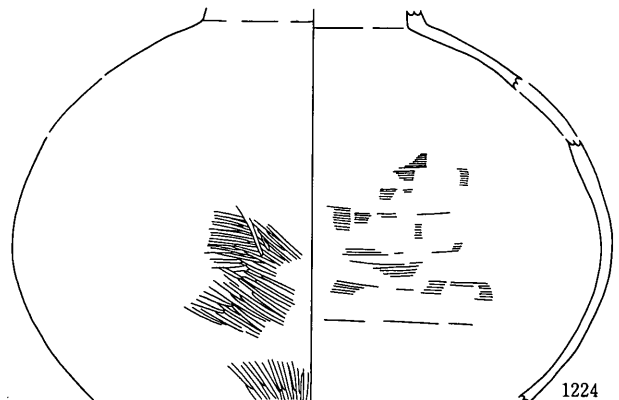
1226



1227



1228



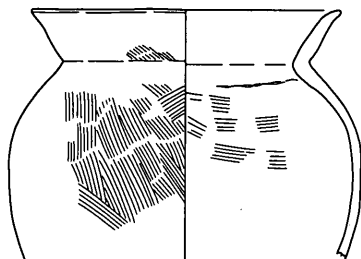
1224

0 (1 : 6) 20cm

0 (1 : 4) 10cm

第266图 土坑出土土器58< S K 2345 (1216~1220) S K 2361 (1221~1228)>

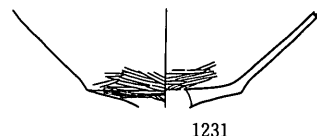
S K 2357



1229

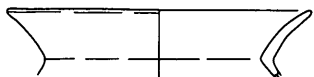


1230

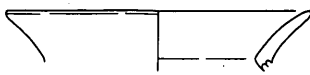


1231

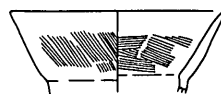
S K 2360



1232

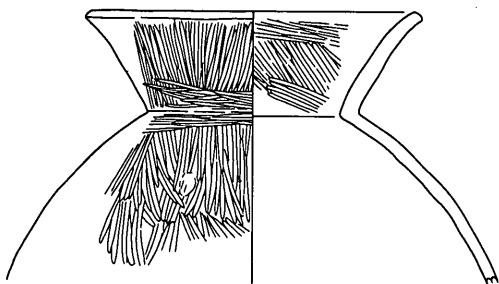


1233

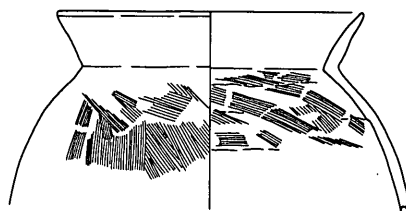


1234

S K 2363



1235

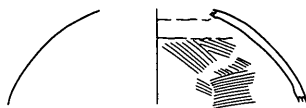


1236

S K 2374



1237



1239



1240



1238

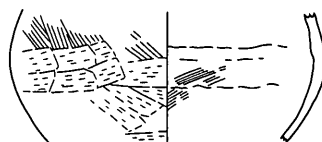


1241

S K 2376

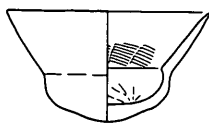


1242

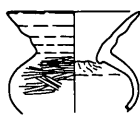


1243

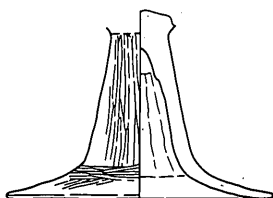
S K 2377



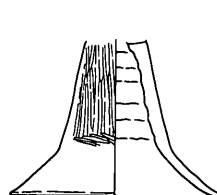
1244



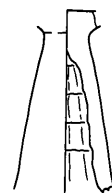
1245



1246



1247

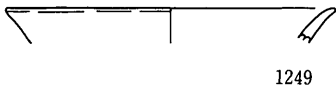


1248

0 (1 : 4) 10cm

第267图 土坑出土土器59 < S K 2357 (1229~1231) S K 2360 (1232~1234) S K 2363 (1235·1236) S K 2374 (1237~1241) S K 2376 (1242·1243) S K 2377 (1244~1248) >

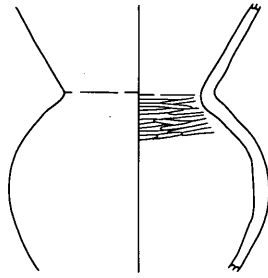
S K 2378



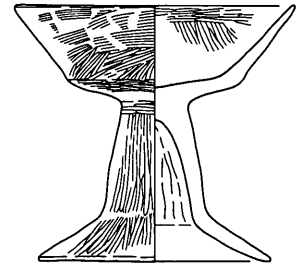
1249



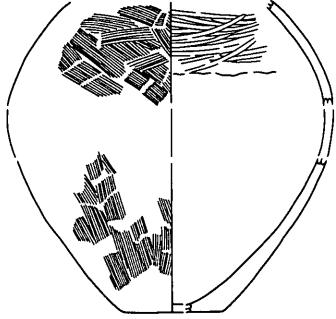
1250



1252



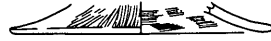
1255



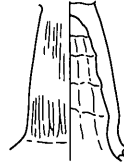
1251



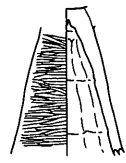
1253



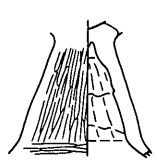
1254



1256

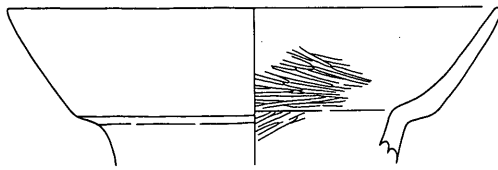


1257

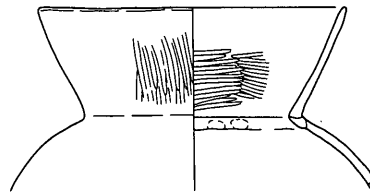


1258

S K 2387



1259



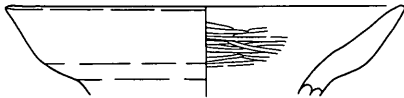
1261



1264



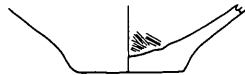
1265



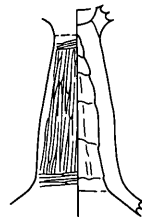
1260



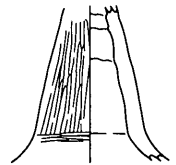
1262



1263

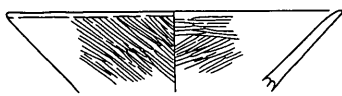


1266



1267

S K 2382



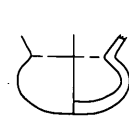
1268

S K 2389

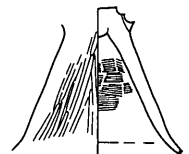


1269

S K 2390



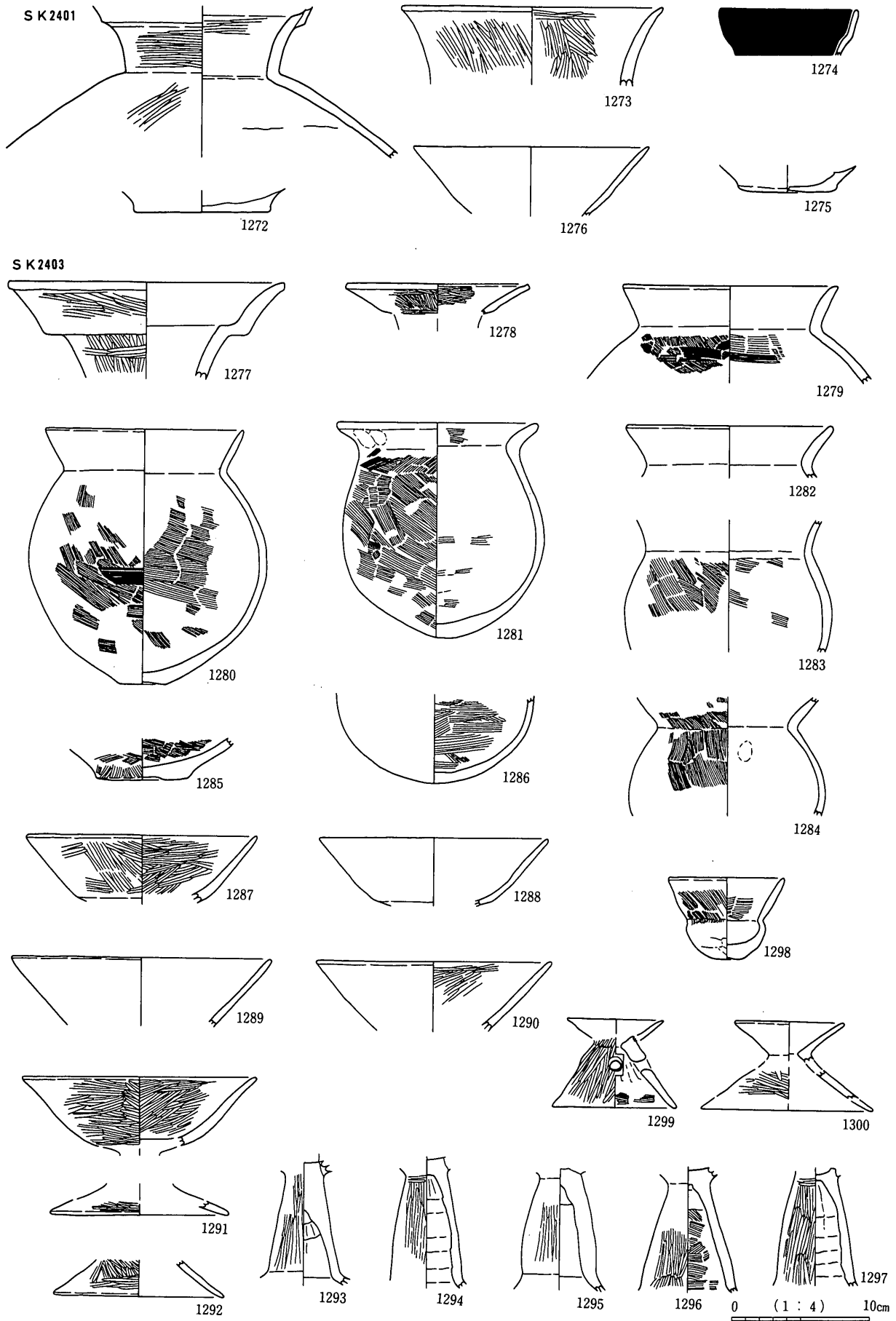
1270



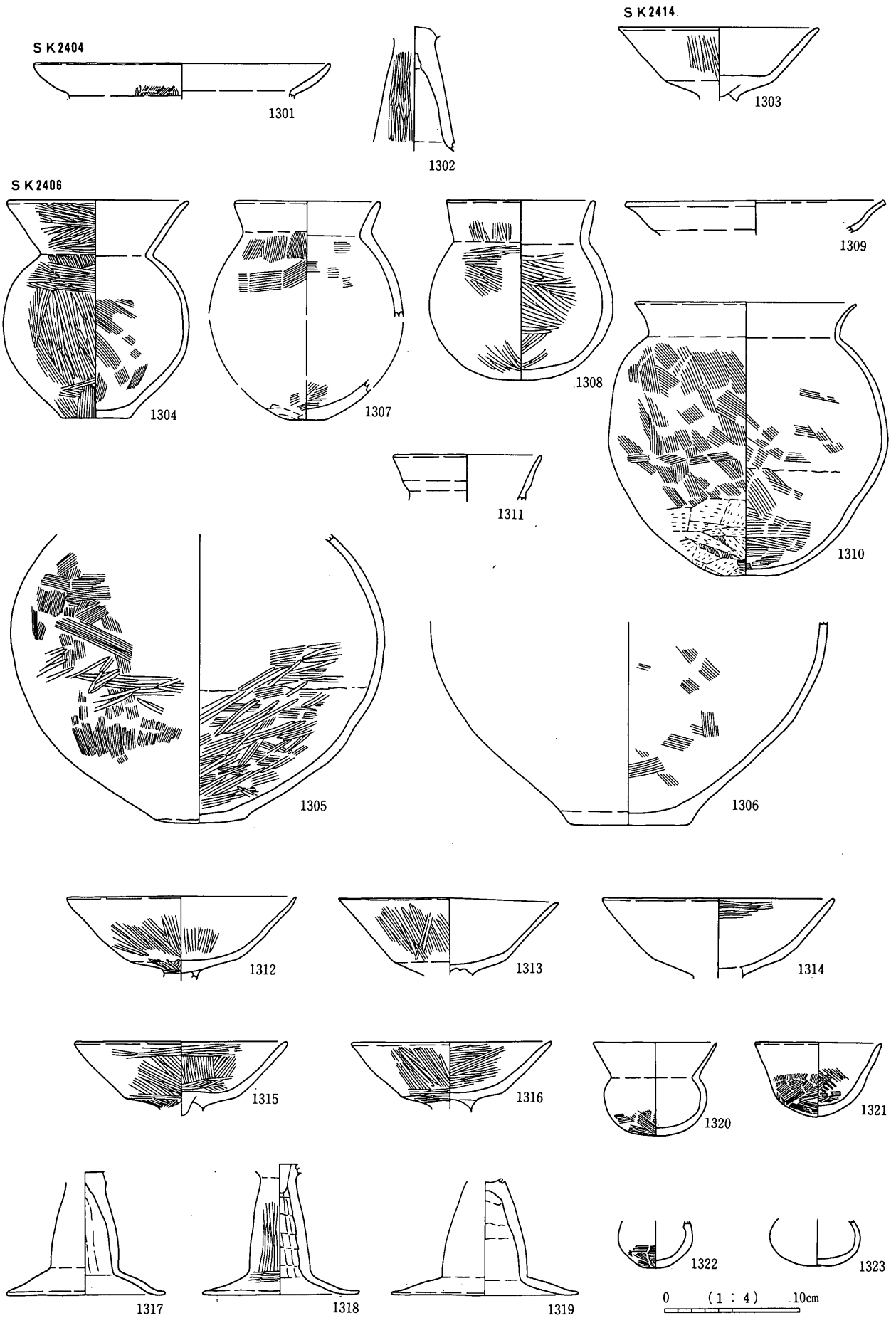
1271

0 (1 : 4) 10cm

第268图 土坑出土土器60<S K 2378 (1249~1258) S K 2382 (1268) S K 2387 (1259~1267) S K 2389 (1269) S K 2390 (1270·1271)>

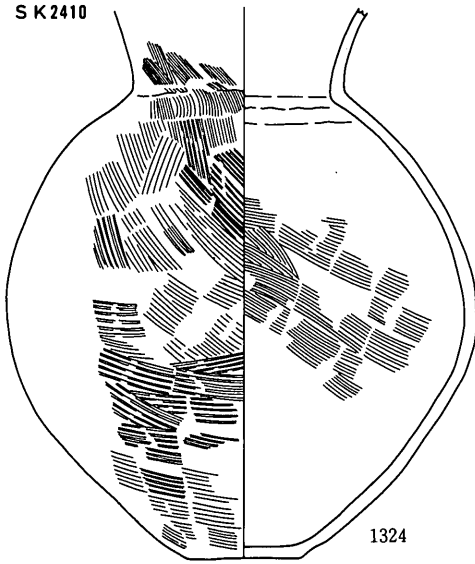


第269图 土坑出土土器61<SK2401 (1272~1276) SK2403 (1277~1300)>

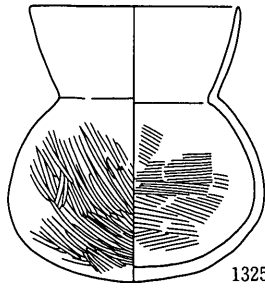


第270图 土坑出土土器62<SK2404 (1301·1302) SK2406 (1304~1323) SK2414 (1303)>

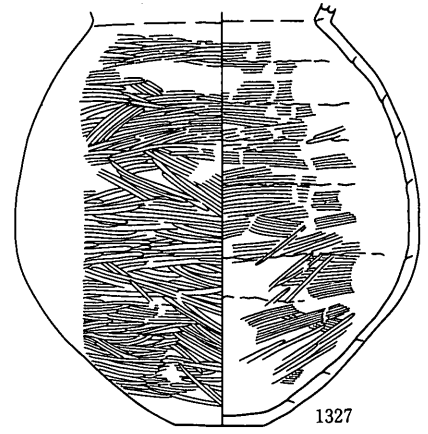
S K 2410



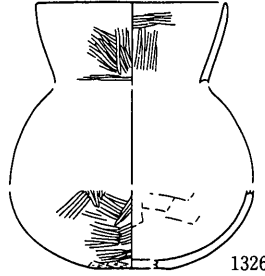
1324



1325



1327

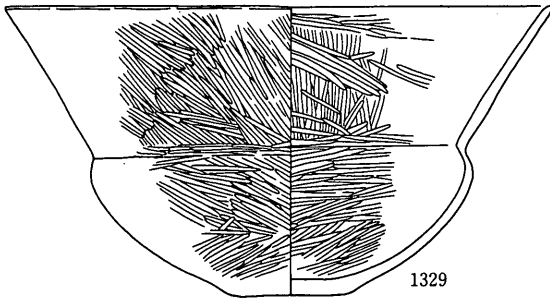


1326

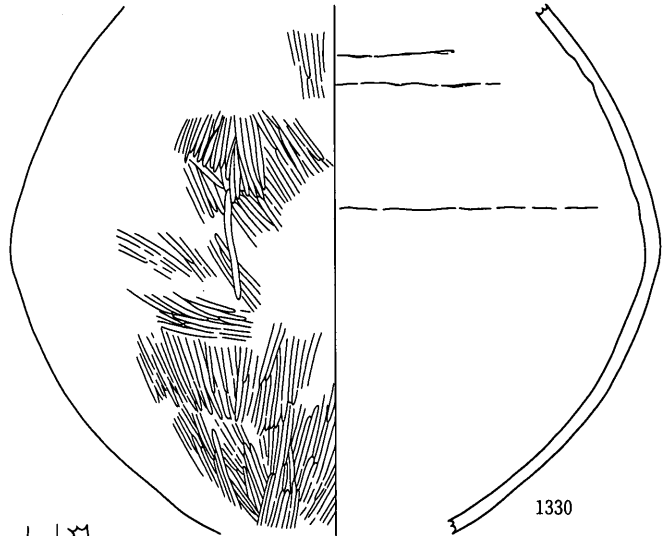


1328

S K 2413



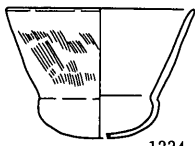
1329



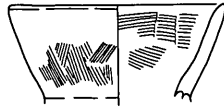
1330



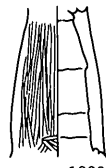
1332



1334



1335

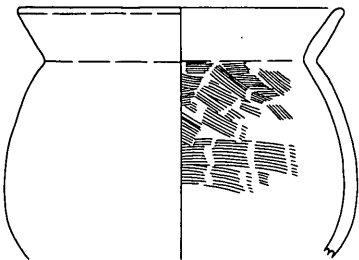


1333

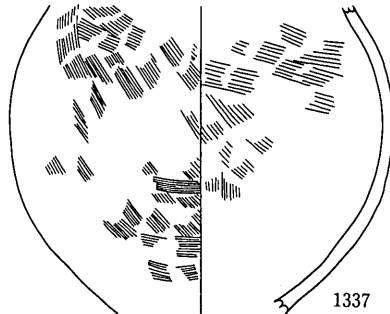


1331

S K 2421

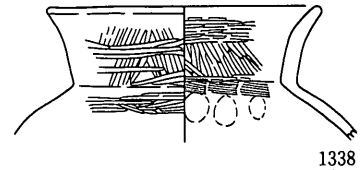


1336



1337

S K 2425



1338

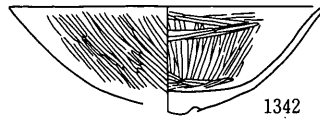
0 (1 : 4) 10cm

第271图 土坑出土土器63 < S K 2410 (1324~1328) S K 2413 (1329~1335) S K 2421 (1336·1337) S K 2425 (1338) >

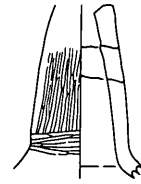
S K 2422



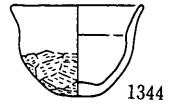
1339



1342



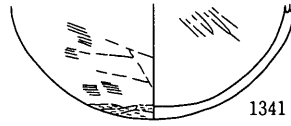
1343



1344

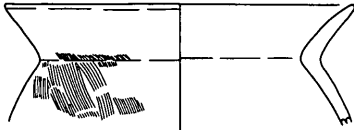


1340

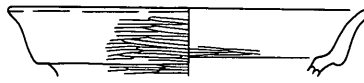


1341

S K 2429

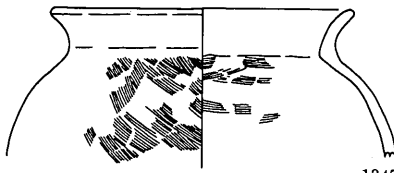


1345

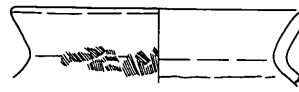


1346

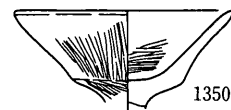
S K 2430



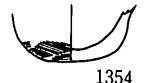
1347



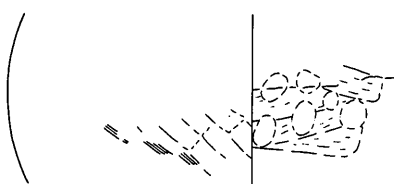
1348



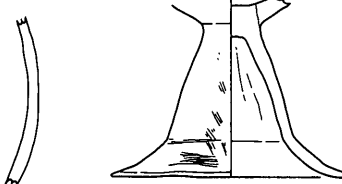
1350



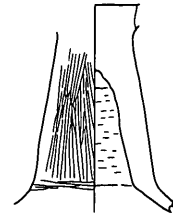
1354



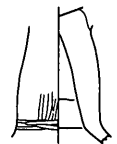
1349



1351

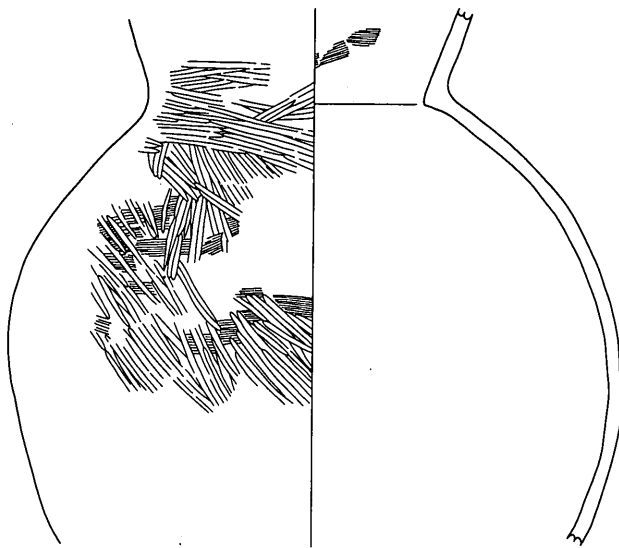


1352

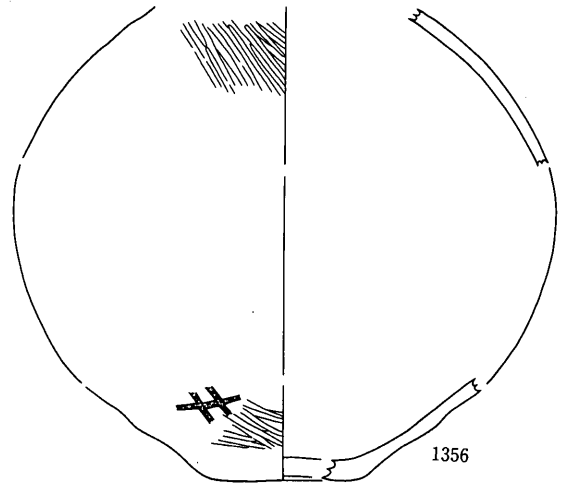


1353

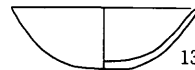
S K 2436



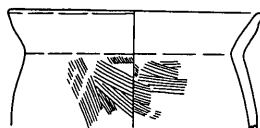
1355



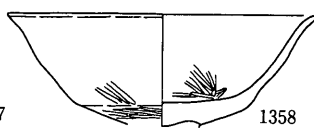
1356



1361



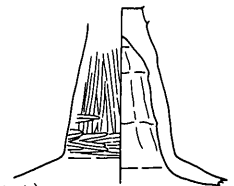
1357



1358



1359

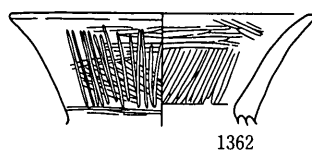


1360

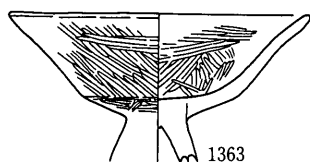
0 (1 : 4) 10cm

第272图 土坑出土土器64 < S K 2422 (1339~1344) S K 2429 (1345·1346) S K 2430 (1347~1354) S K 2436 (1355~1361) >

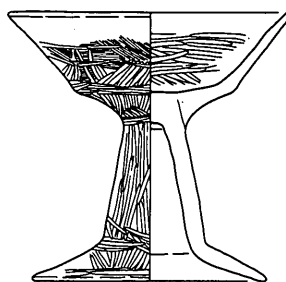
S K 2432



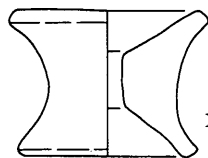
1362



1363



1364

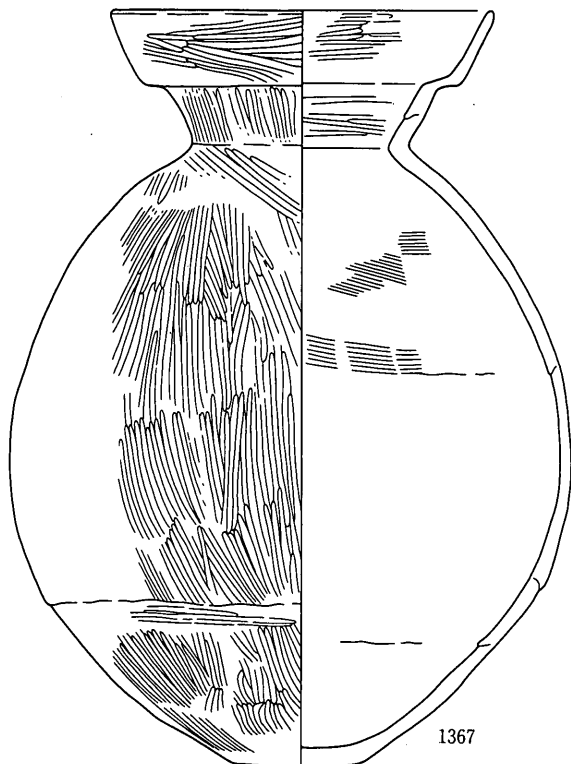


1365

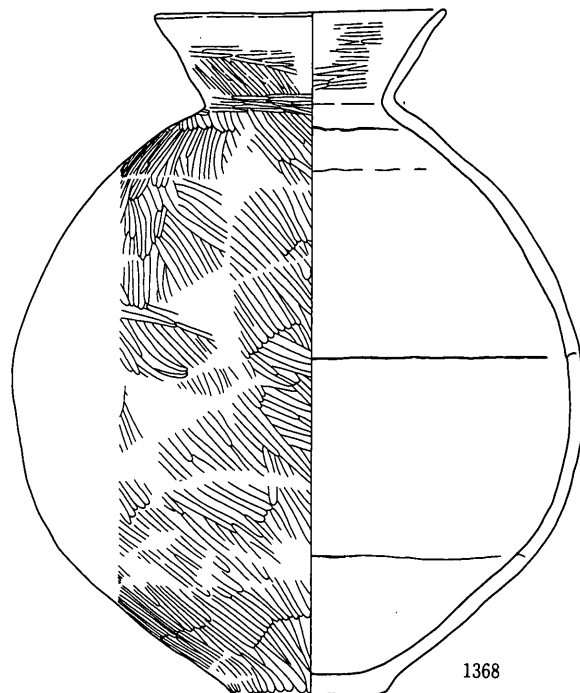


1366

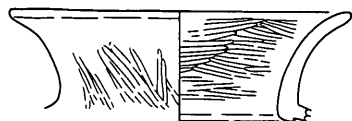
S K 2444



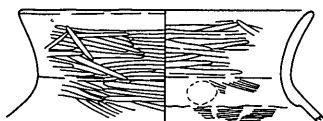
1367



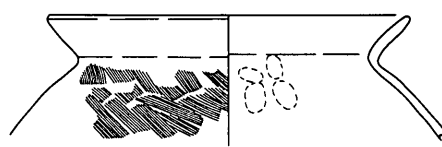
1368



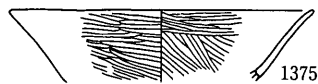
1369



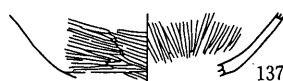
1370



1372



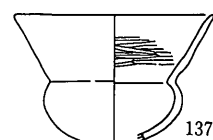
1375



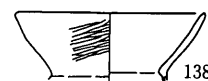
1376



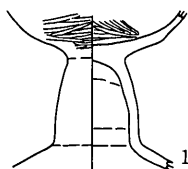
1371



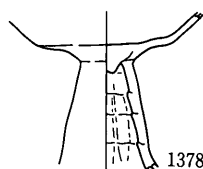
1379



1380



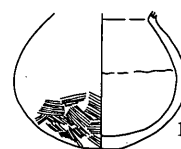
1377



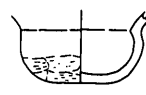
1378



1373



1374

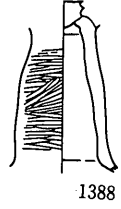
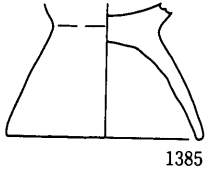
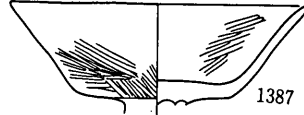
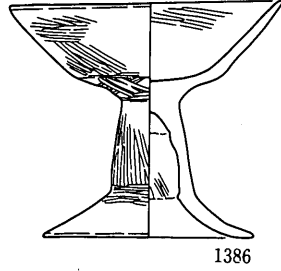
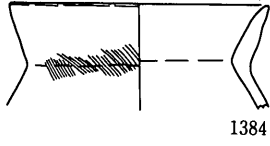
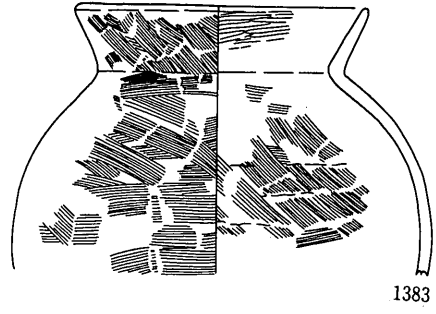
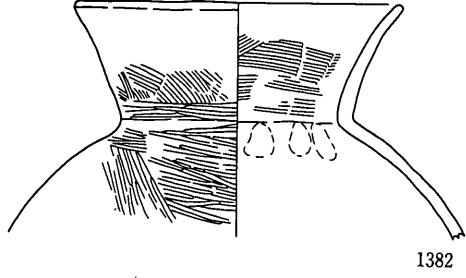


1381

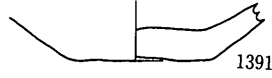
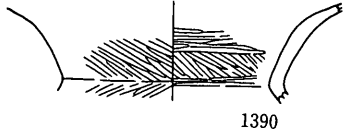
0 (1 : 4) 10cm

第273图 土坑出土土器65< S K 2432 (1362~1366) S K 2444 (1367~1381)>

S K 2445



S K 2446



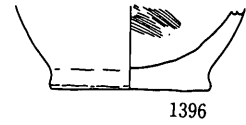
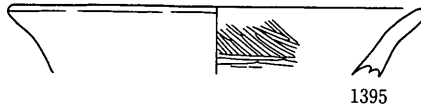
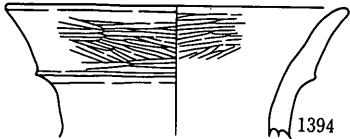
S K 2447



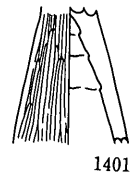
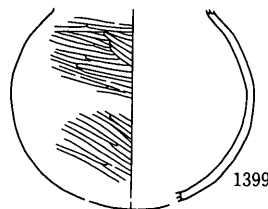
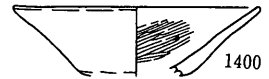
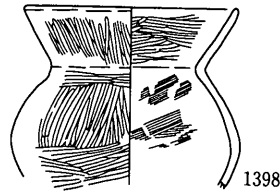
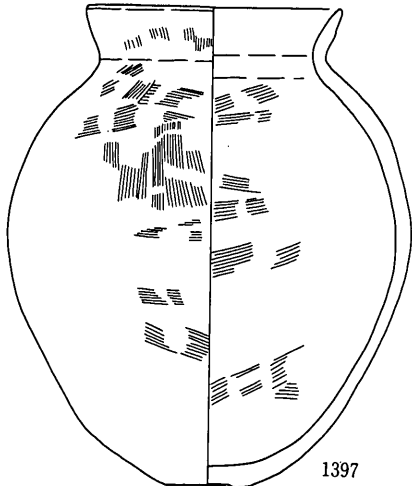
S K 2449



S K 2480



S K 2482



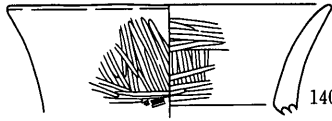
0 (1 : 4) 10cm

第274图 土坑出土土器66< S K 2445 (1382~1389) S K 2446 (1390·1391) S K 2447 (1392) S K 2449 (1393) S K 2480 (1394~1396) S K 2482 (1397~1402)>

S K 2473



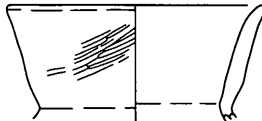
1403



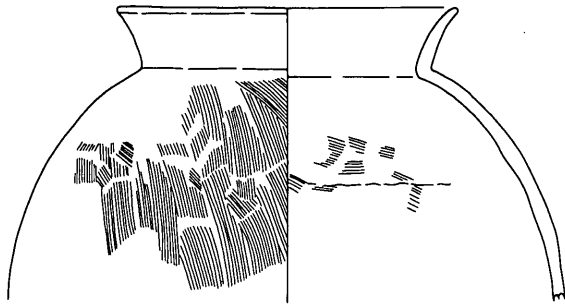
1404



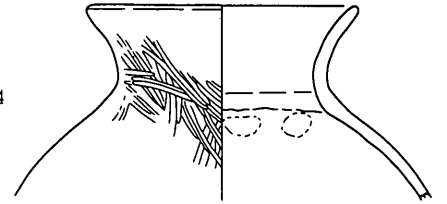
1406



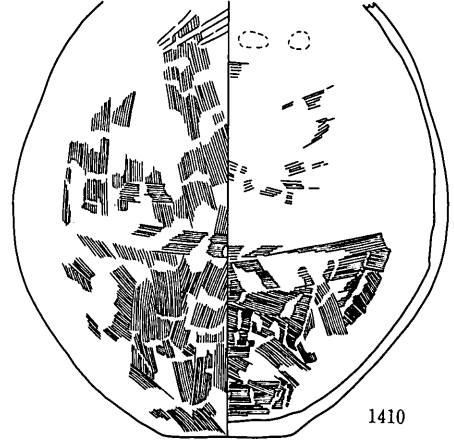
1407



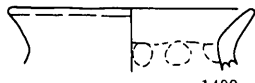
1408



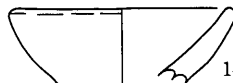
1405



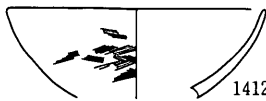
1410



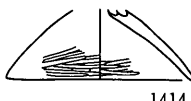
1409



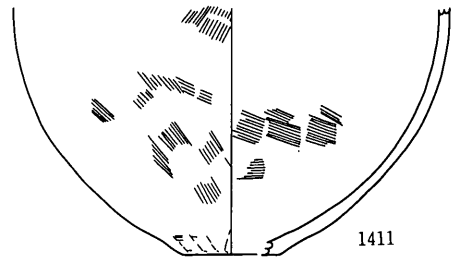
1413



1412

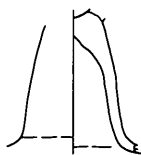


1414



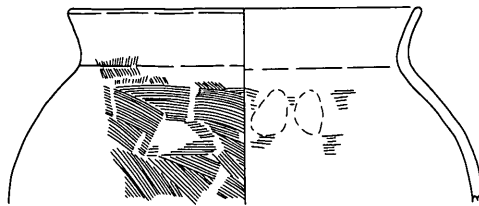
1411

S K 2484

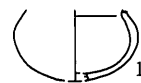


1415

S K 2485

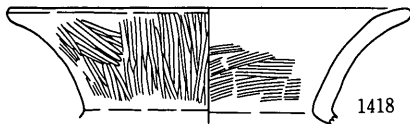


1416

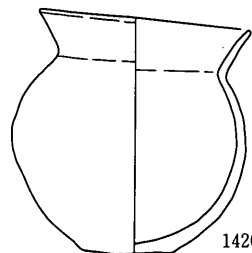


1417

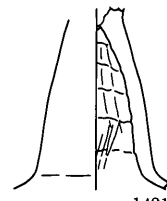
S K 2490



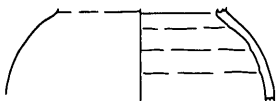
1418



1420



1421

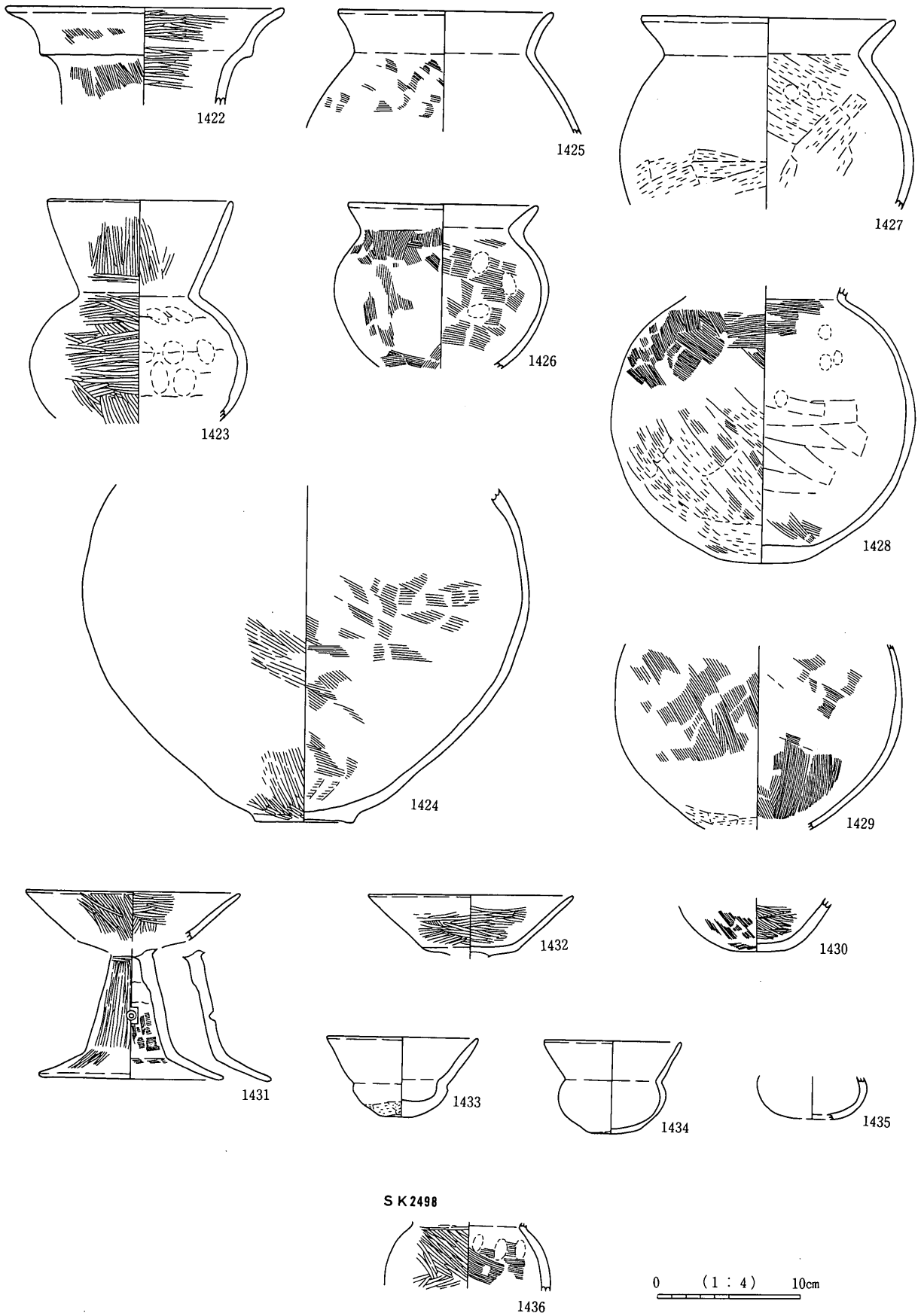


1419

0 (1 : 4) 10cm

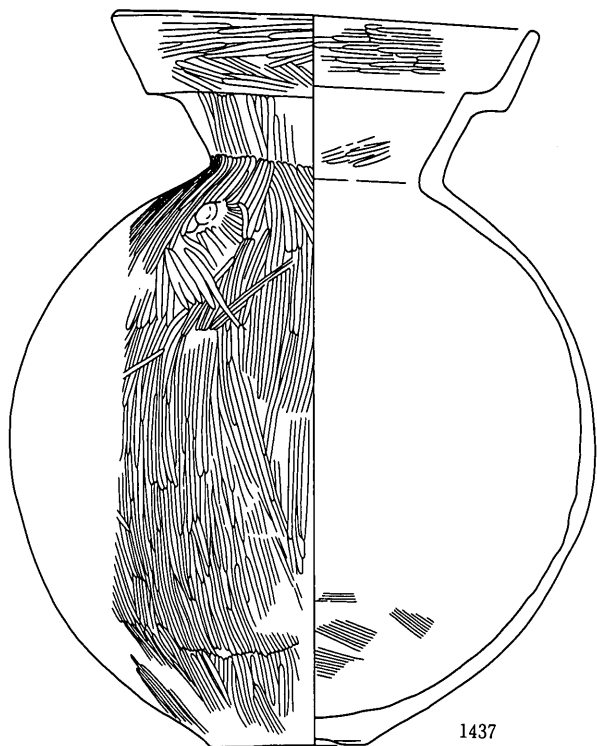
第275图 土坑出土土器67<S K 2473 (1403~1414) S K 2484 (1415) S K 2485 (1416·1417) S K 2490 (1418~1421)>

S K 2478

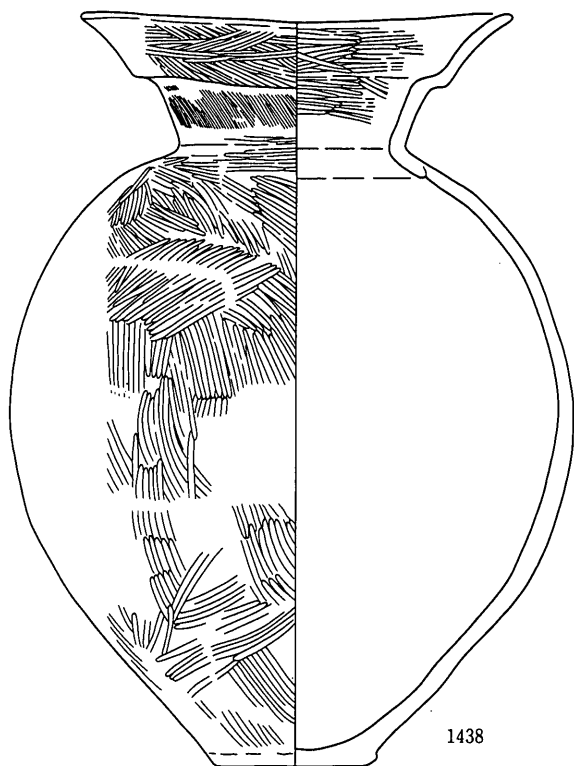


第276图 土坑出土土器68< S K 2478 (1422~1435) S K 2498 (1436)>

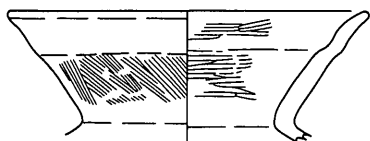
S K 2492



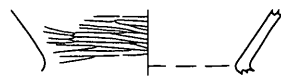
1437



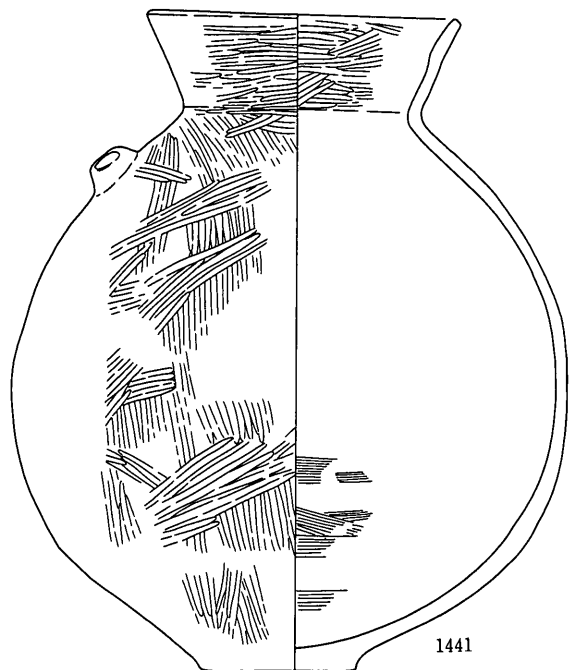
1438



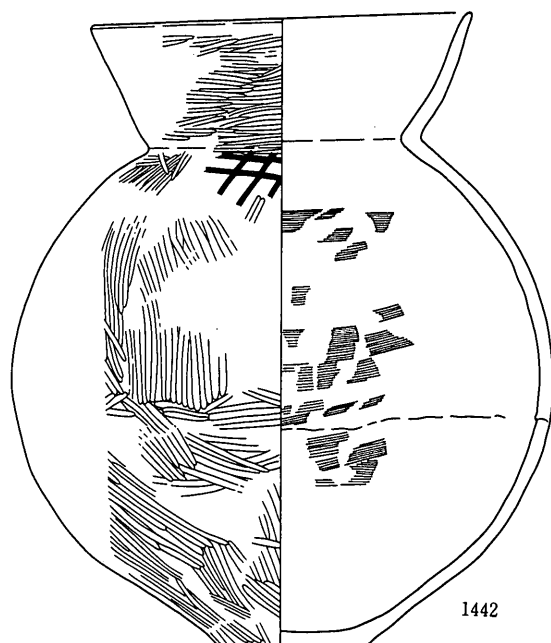
1439



1440



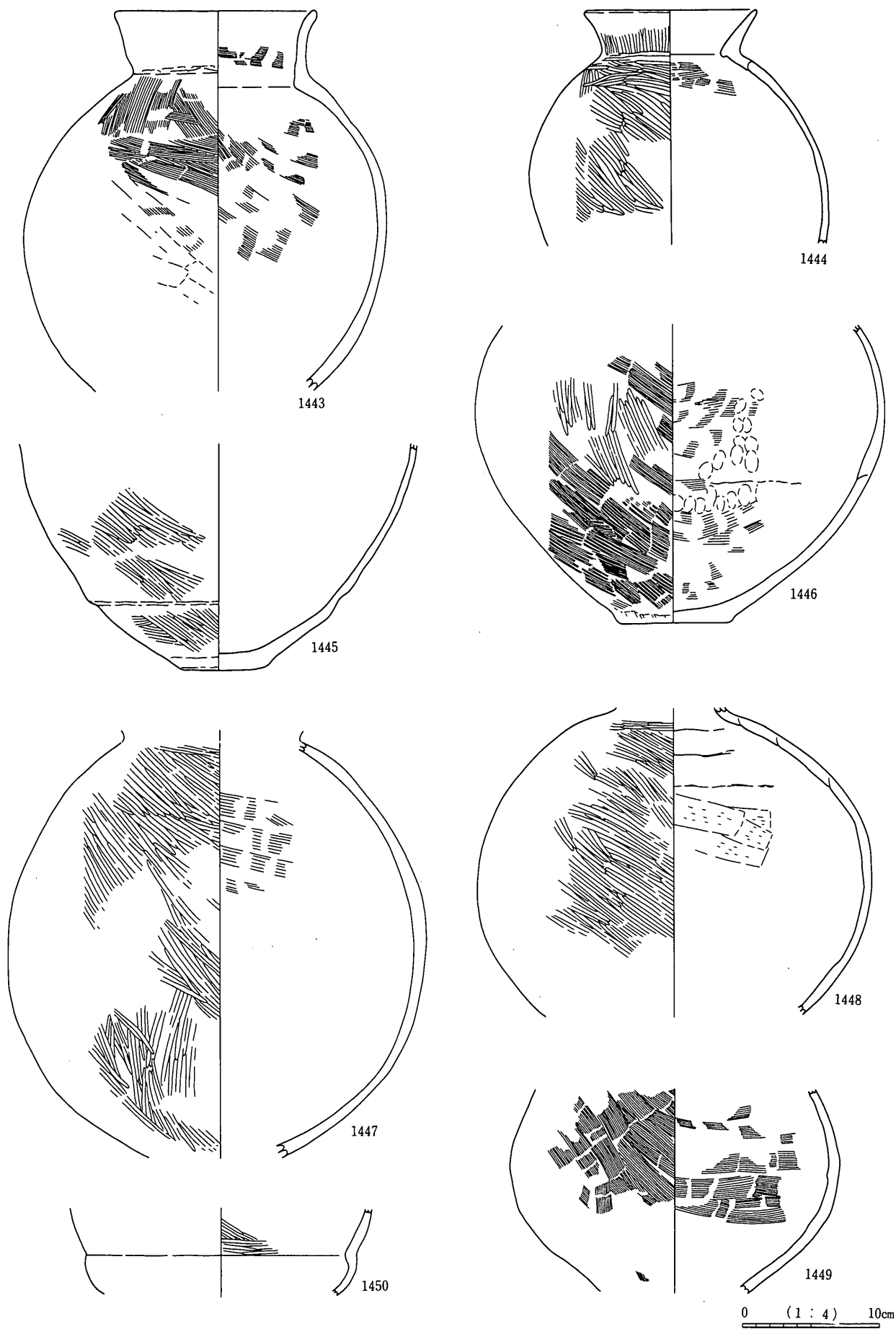
1441



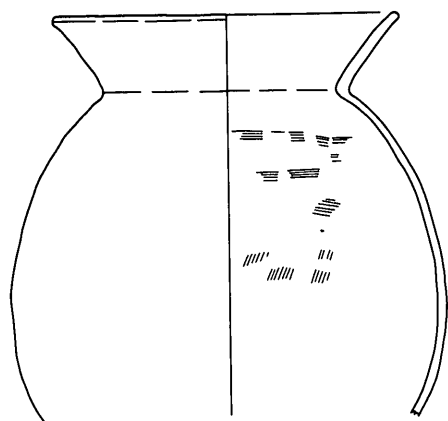
1442

0 (1 : 4) 10cm

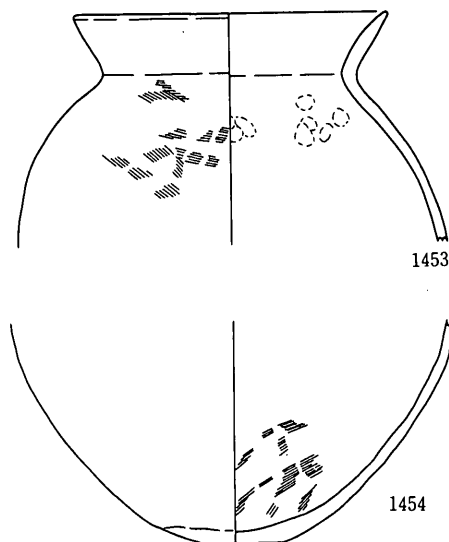
第277图 土坑出土土器69< S K 2492 (1437~1442)>



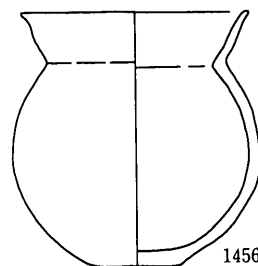
第278图 土坑出土土器70< S K2492 (1443~1450)>



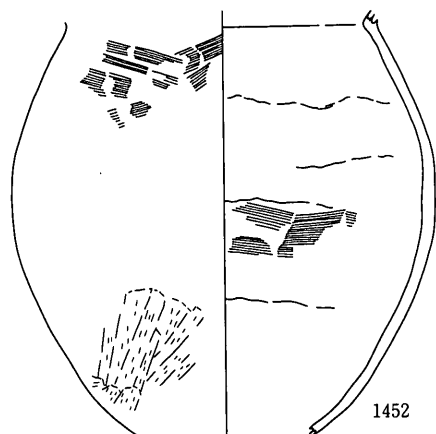
1451



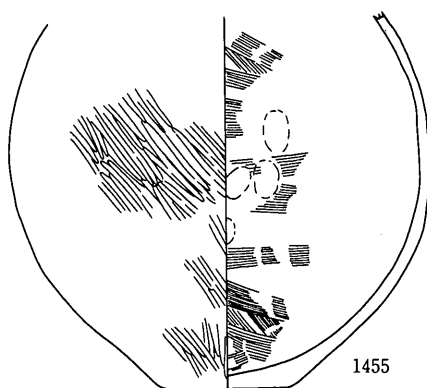
1453



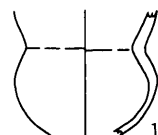
1456



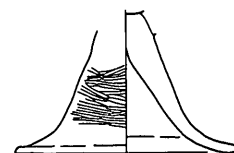
1452



1455

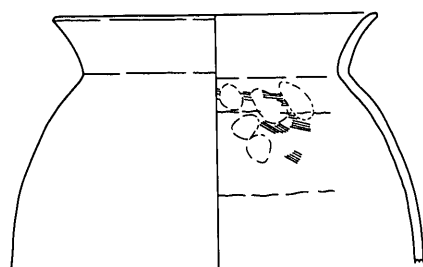


1457

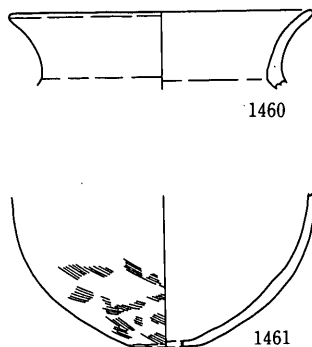


1458

S K 2512

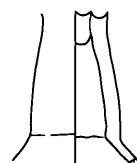


1459

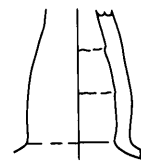


1460

1461

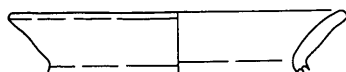


1462

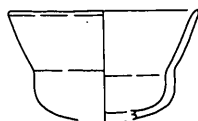


1463

S K 2591



1464



1465

S K 2593

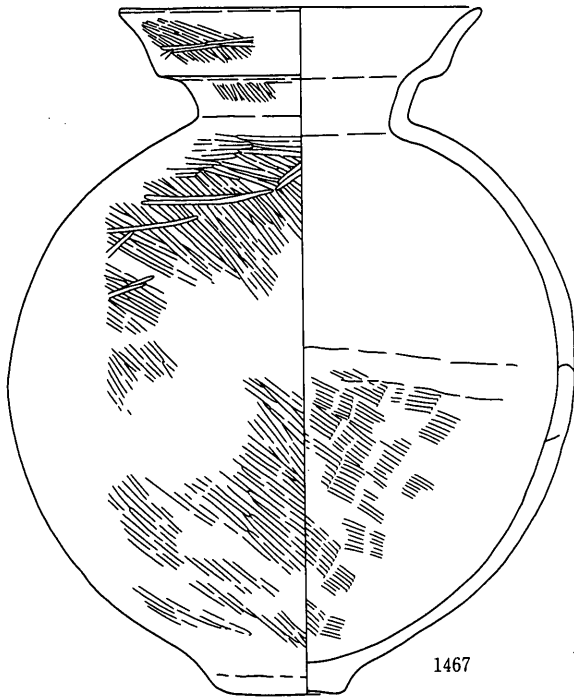


1466

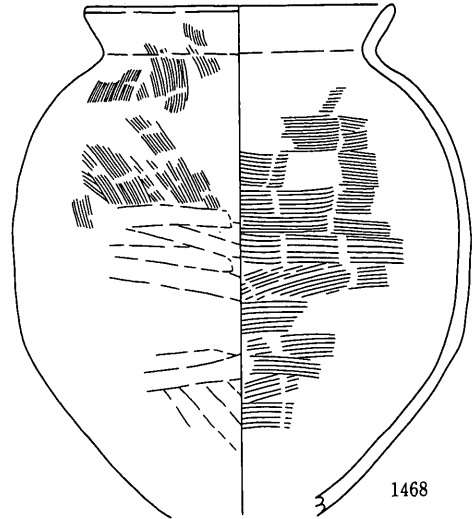
0 (1 : 4) 10cm

第279图 土坑出土土器71 < S K 2492 (1451~1458) S K 2512 (1459~1463) S K 2591 (1464 · 1465) S K 2593 (1466) >

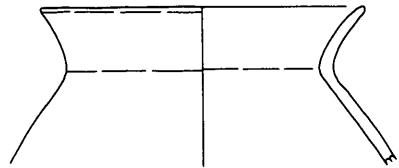
S K 2561



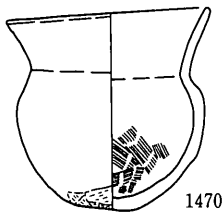
1467



1468



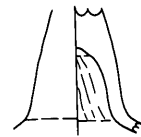
1469



1470

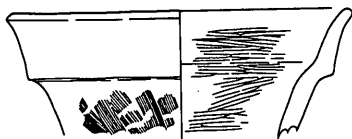


1471



1472

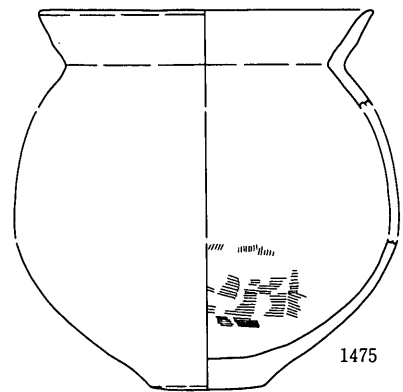
S K 2606



1473

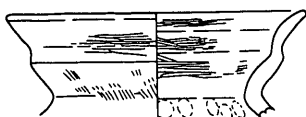


1474

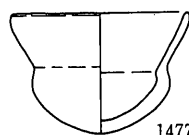


1475

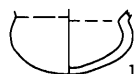
S K 2609



1476



1477

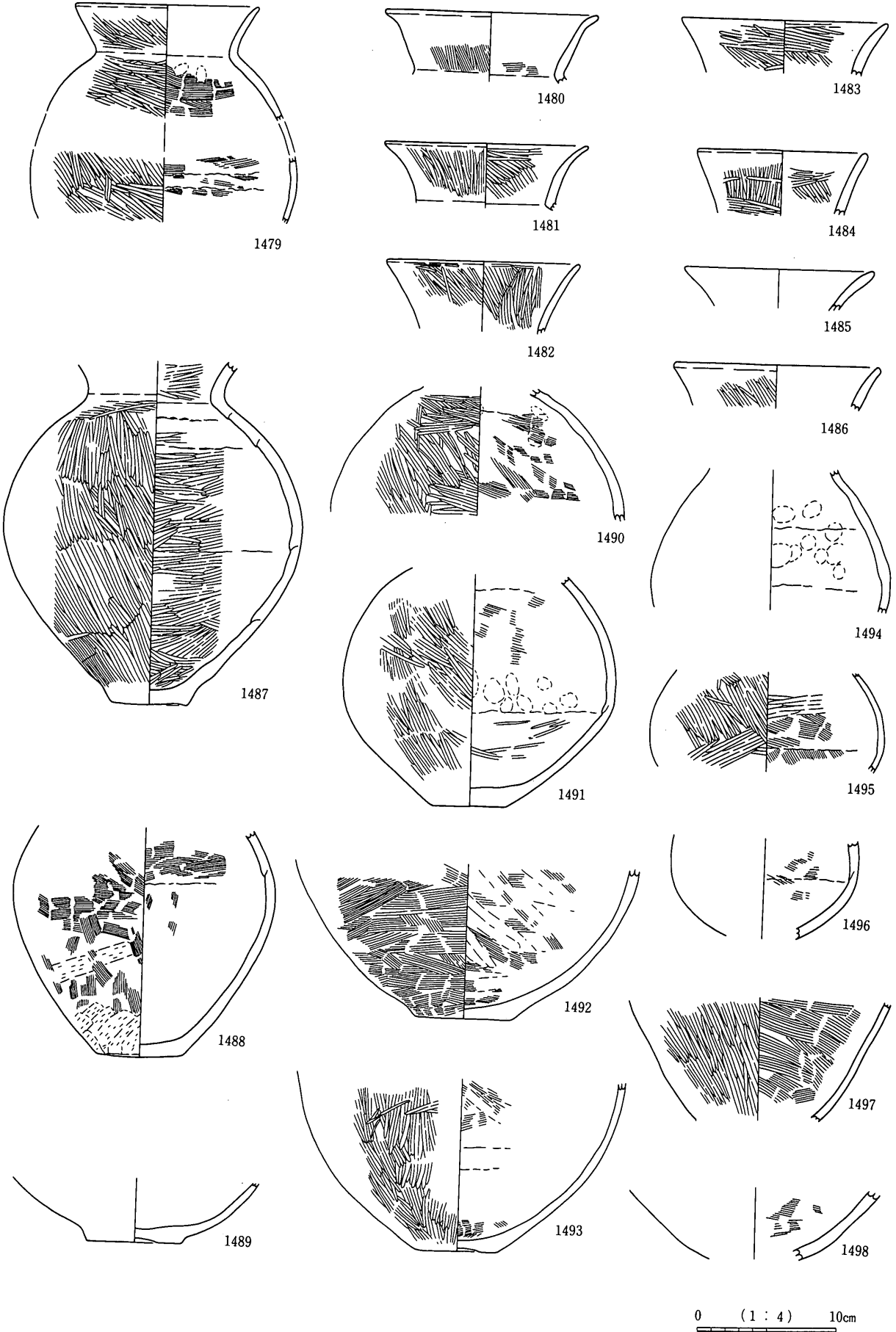


1478

0 (1 : 4) 10cm

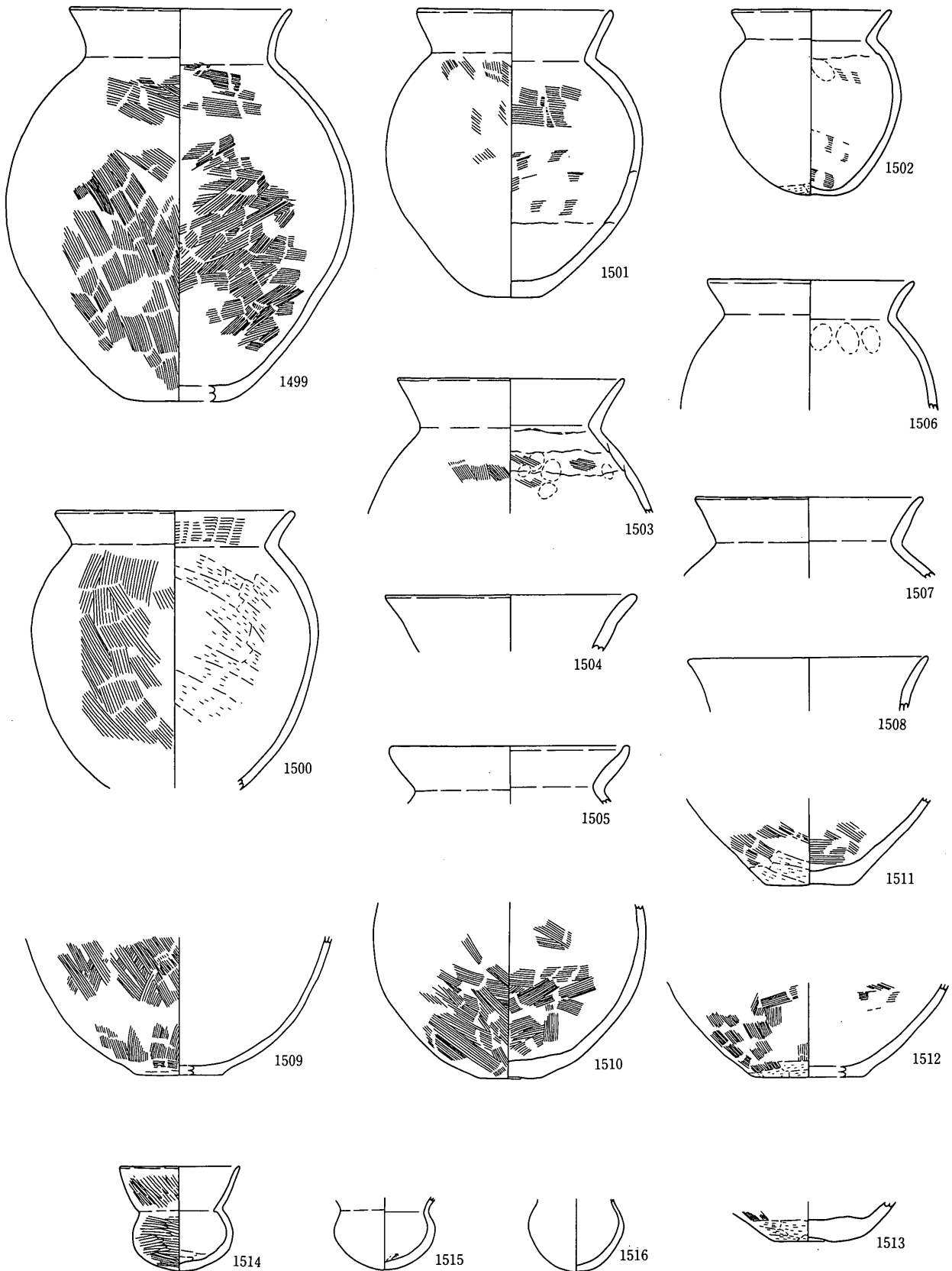
第280図 土坑出土土器72< S K 2561 (1467~1472) S K 2606 (1473~1475) S K 2609 (1476~1478)>

S K 2648



0 (1:4) 10cm

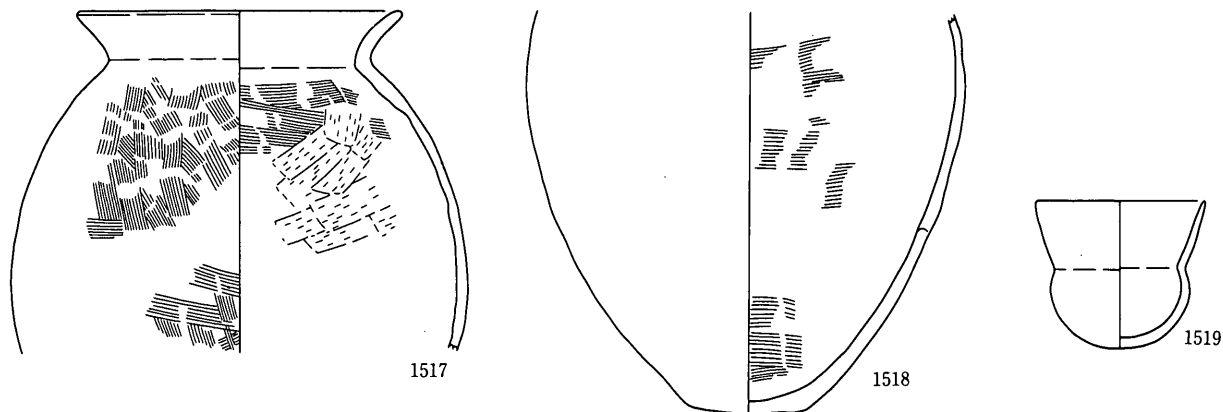
第281图 土坑出土土器73< S K 2648 (1479~1498) >



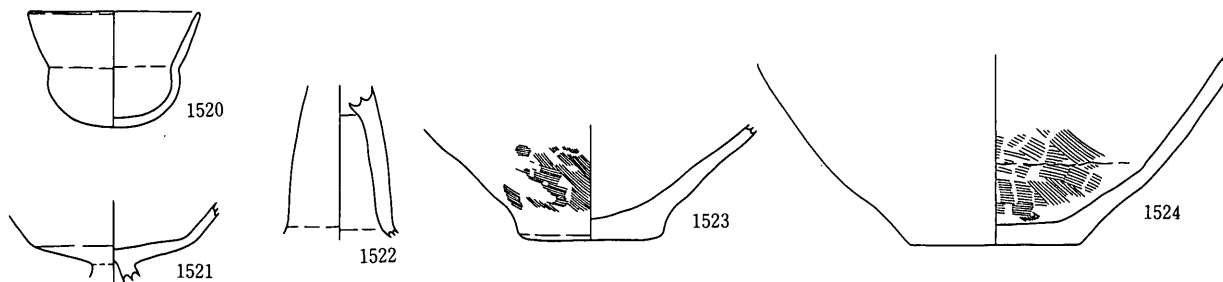
0 (1 : 4) 10cm

第282图 土坑出土土器74< S K2648 (1499~1516)>

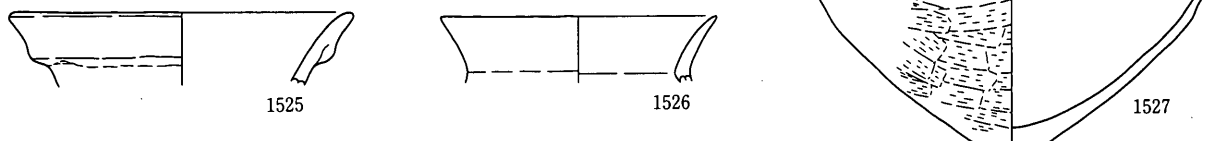
S K 2608



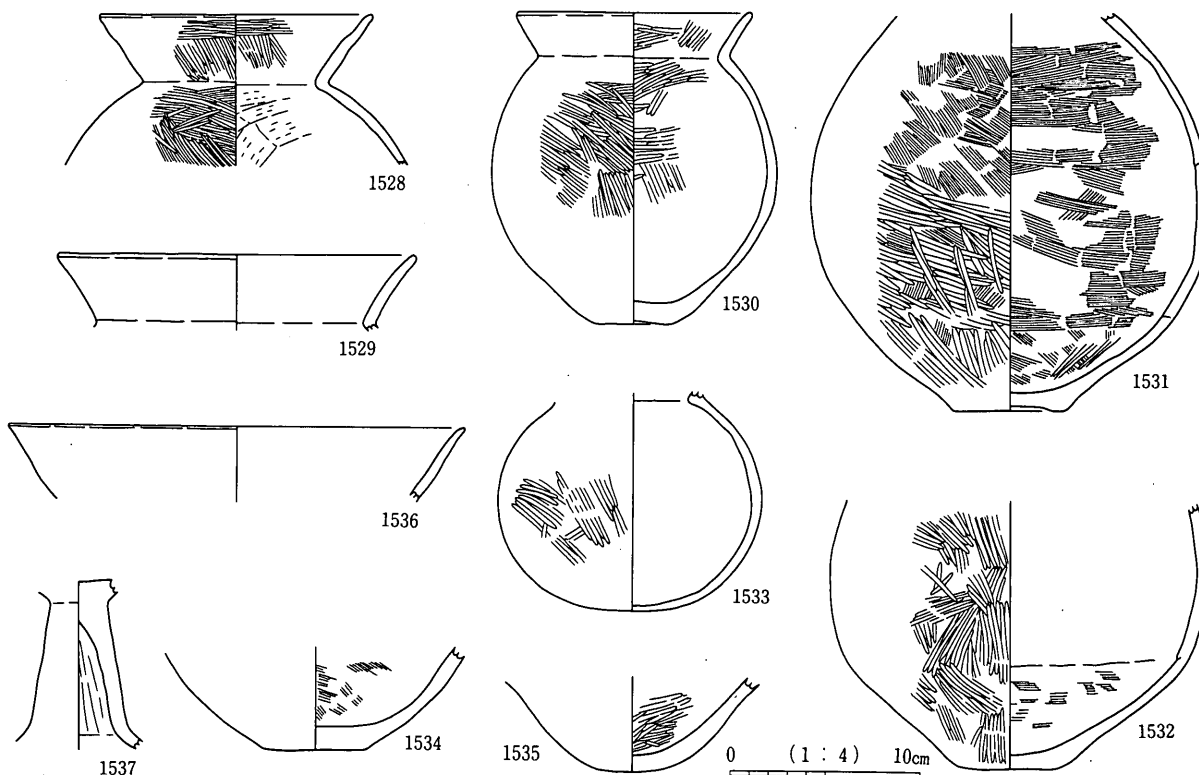
S K 2615



S K 2622

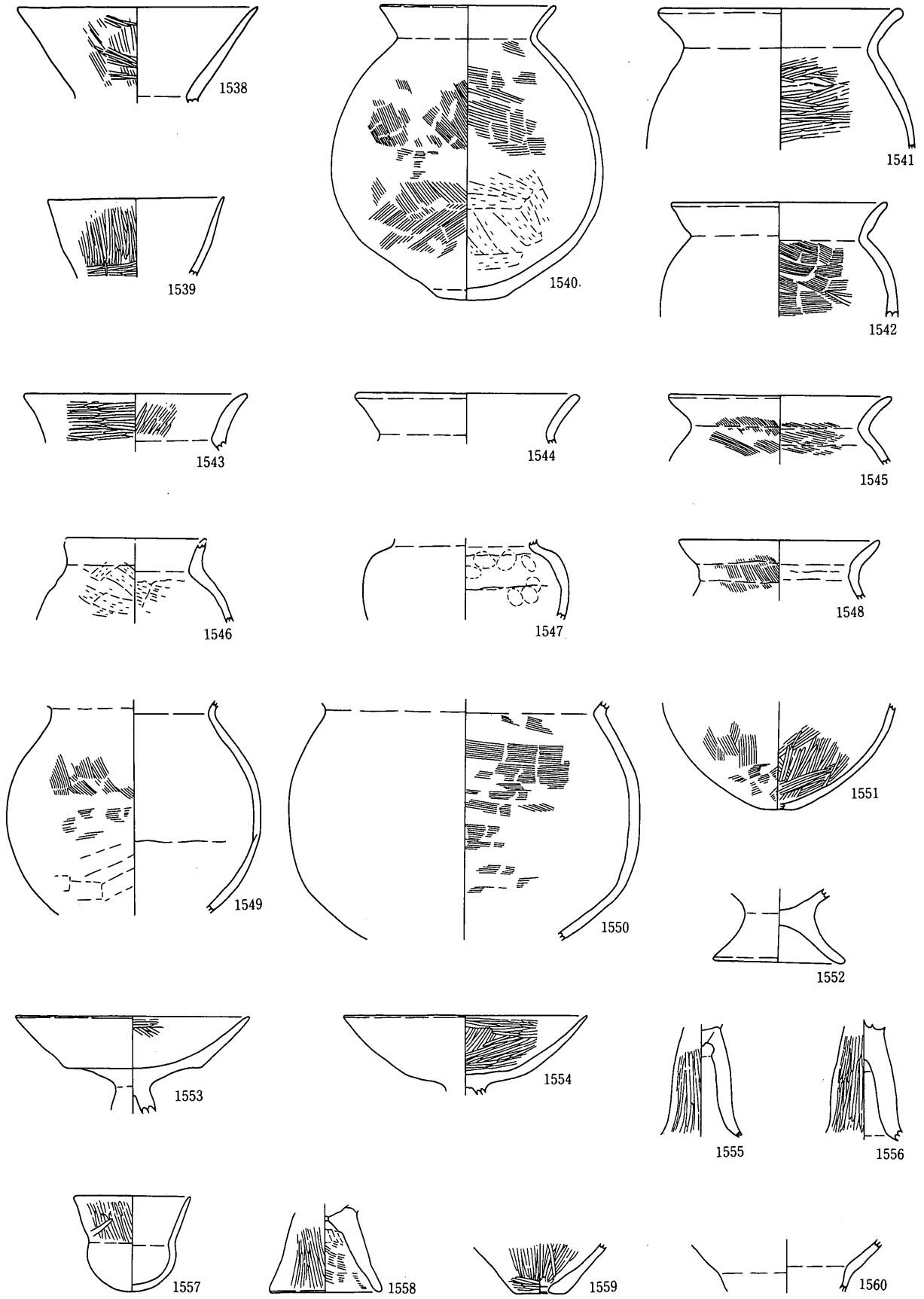


S K 2758



第283图 土坑出土土器75< S K 2608 (1517~1519) S K 2615 (1520~1524) S K 2622 (1525~1527) S K 2758 (1528~1537) >

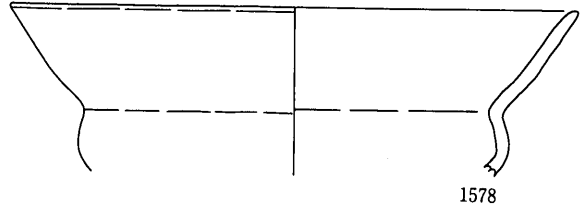
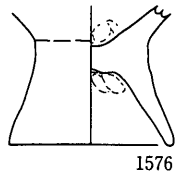
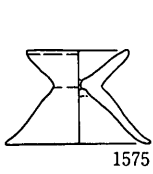
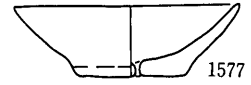
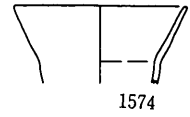
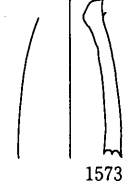
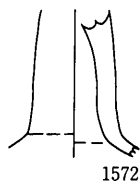
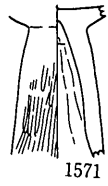
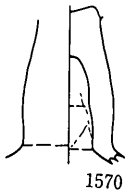
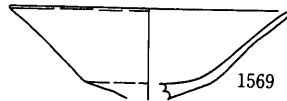
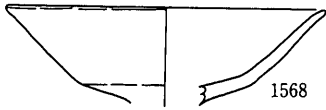
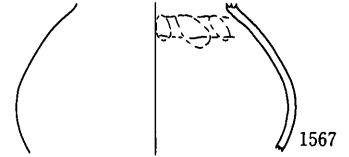
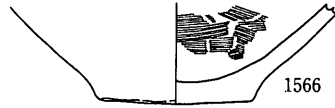
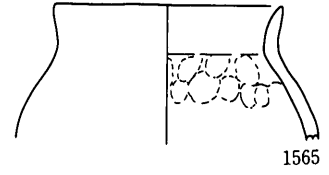
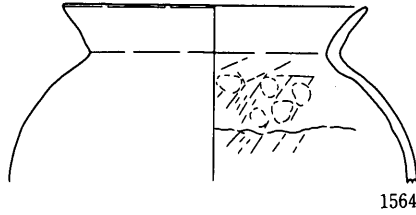
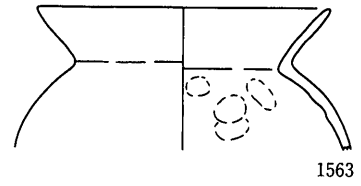
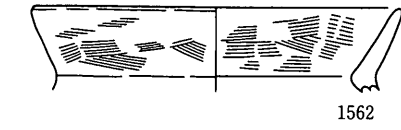
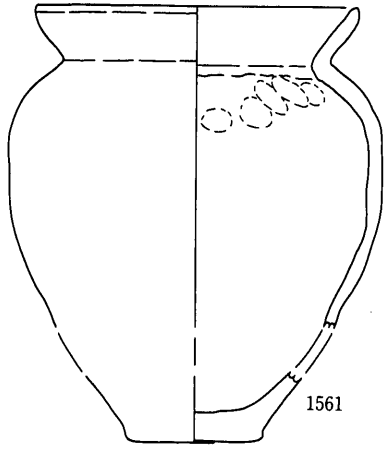
S K 2745



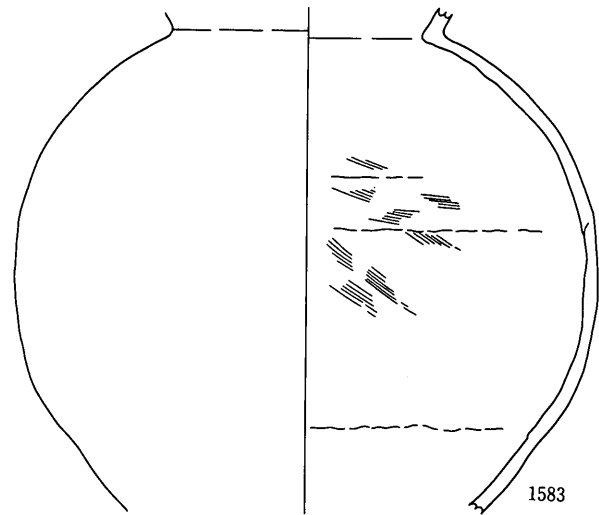
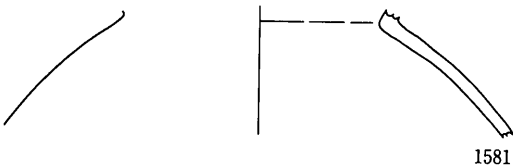
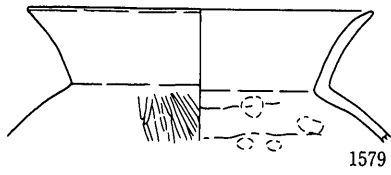
0 (1 : 4) 10cm

第284图 土坑出土土器76< S K 2745 (1538~1560)>

S K 2744

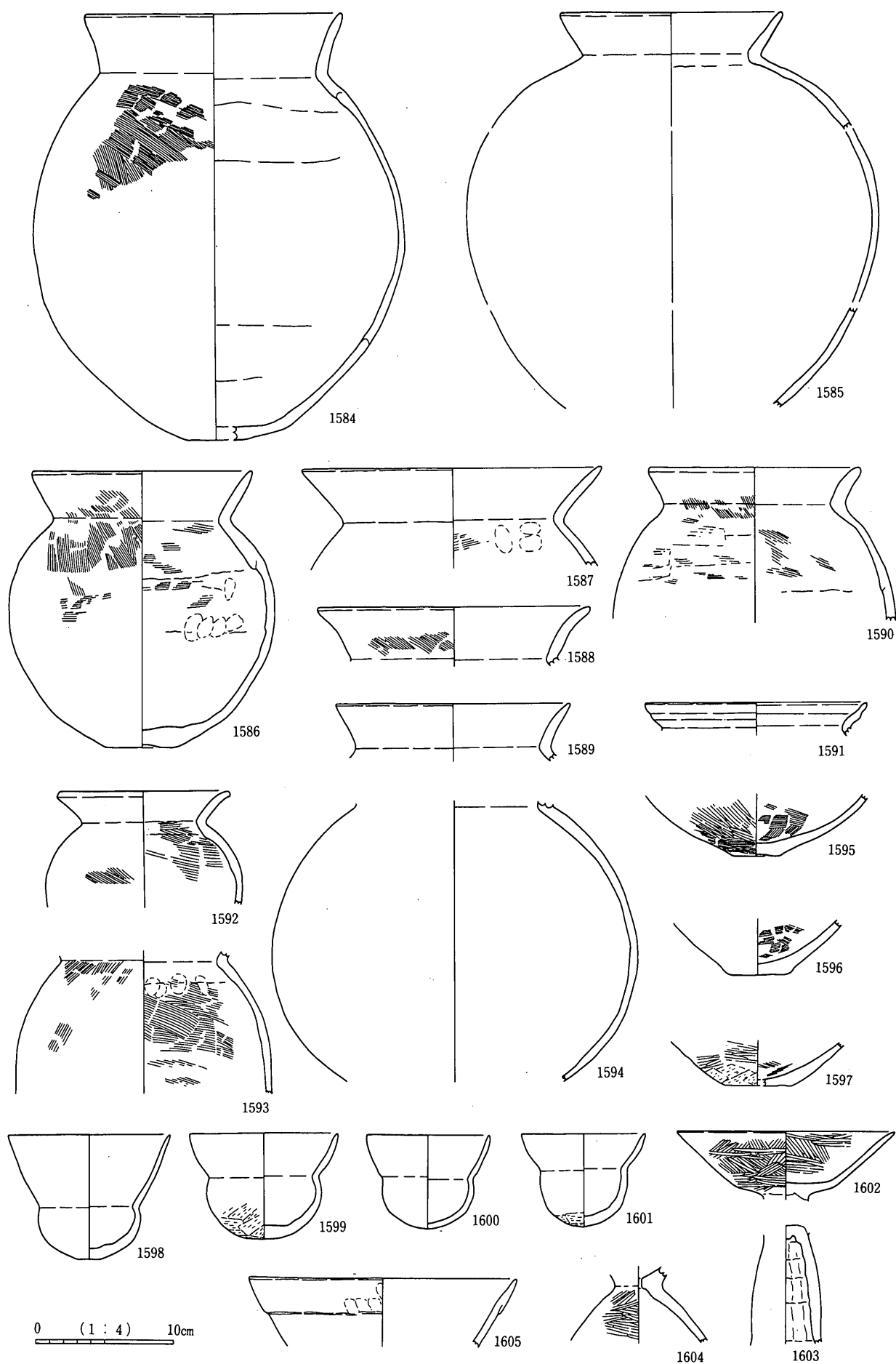


S K 2746

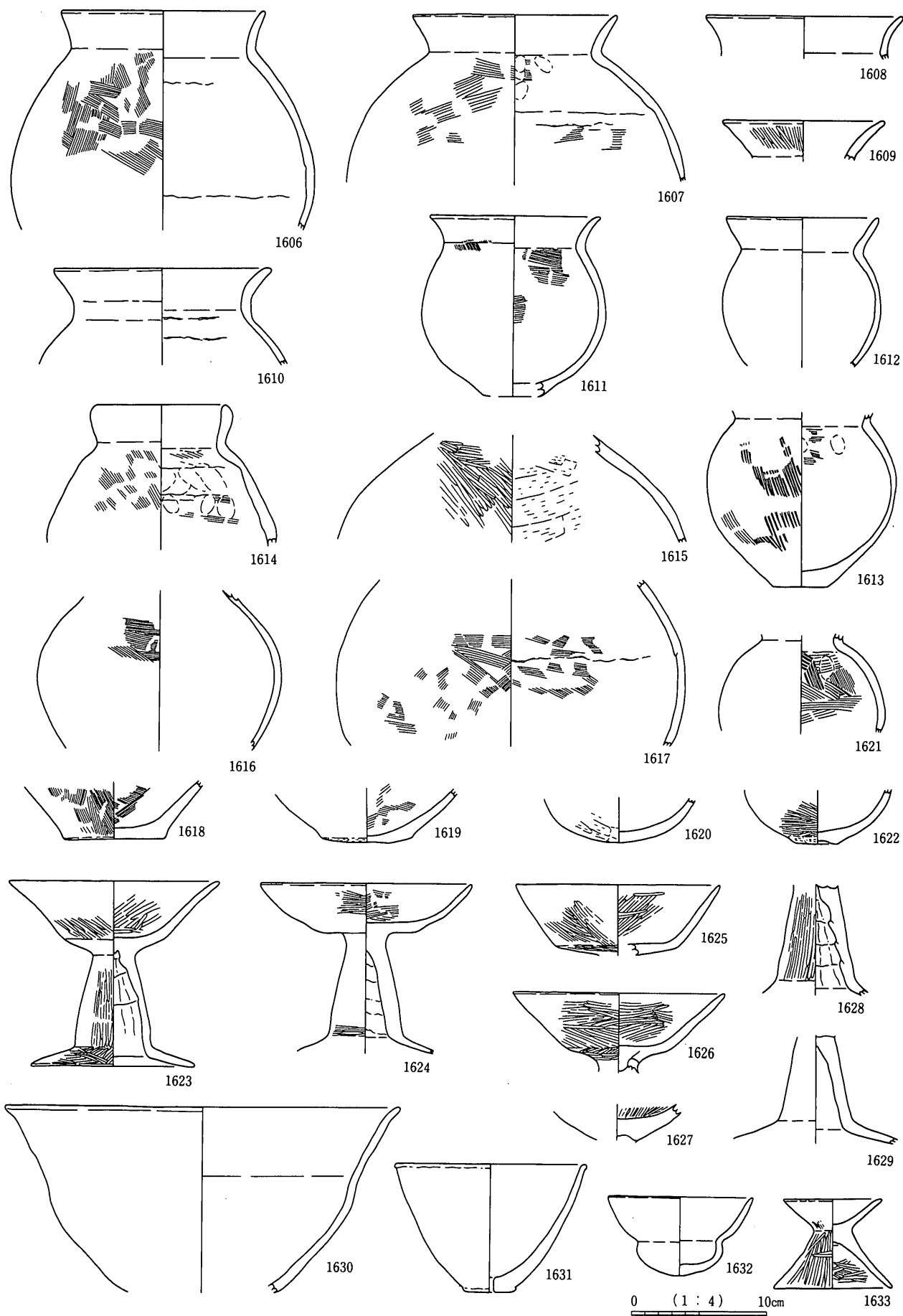


0 (1 : 4) 10cm

第285图 土坑出土土器77< S K 2744 (1561~1578) S K 2746 (1579~1583)>

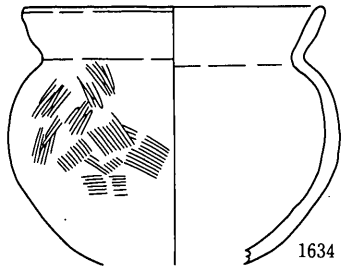


第286图 土坑出土土器78<SK2746 (1584~1605)>



第287图 土坑出土土器79< S K2748 (1606~1633)>

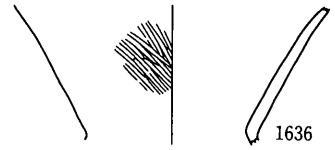
S K 2751



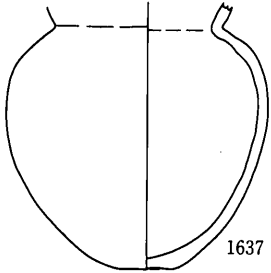
1634



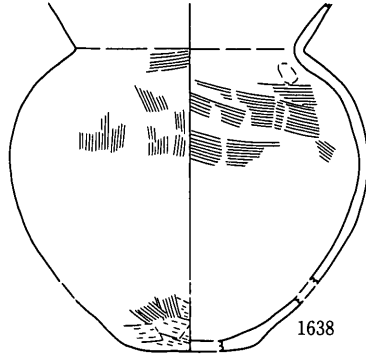
1635



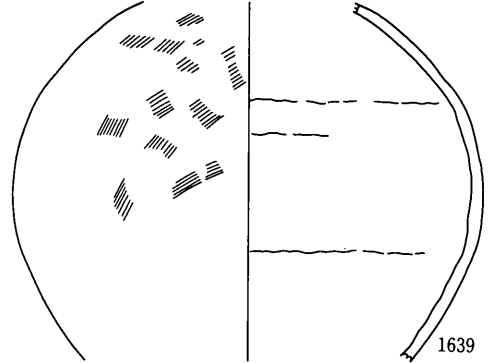
1636



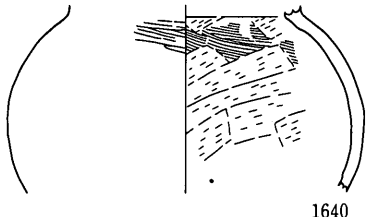
1637



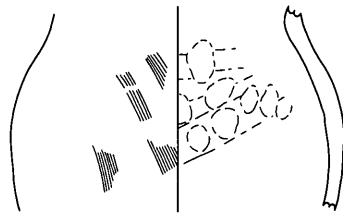
1638



1639



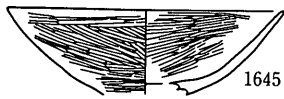
1640



1641



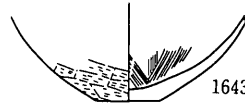
1642



1645



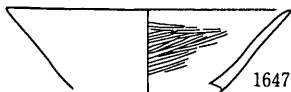
1646



1643



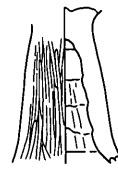
1644



1647



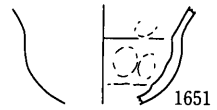
1648



1649



1650

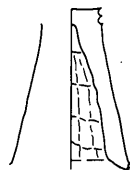


1651

S K 2747

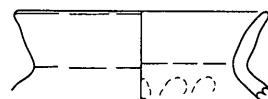


1652



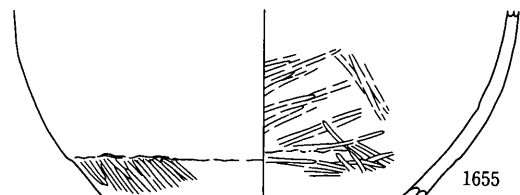
1653

S K 2753



1654

S K 2755

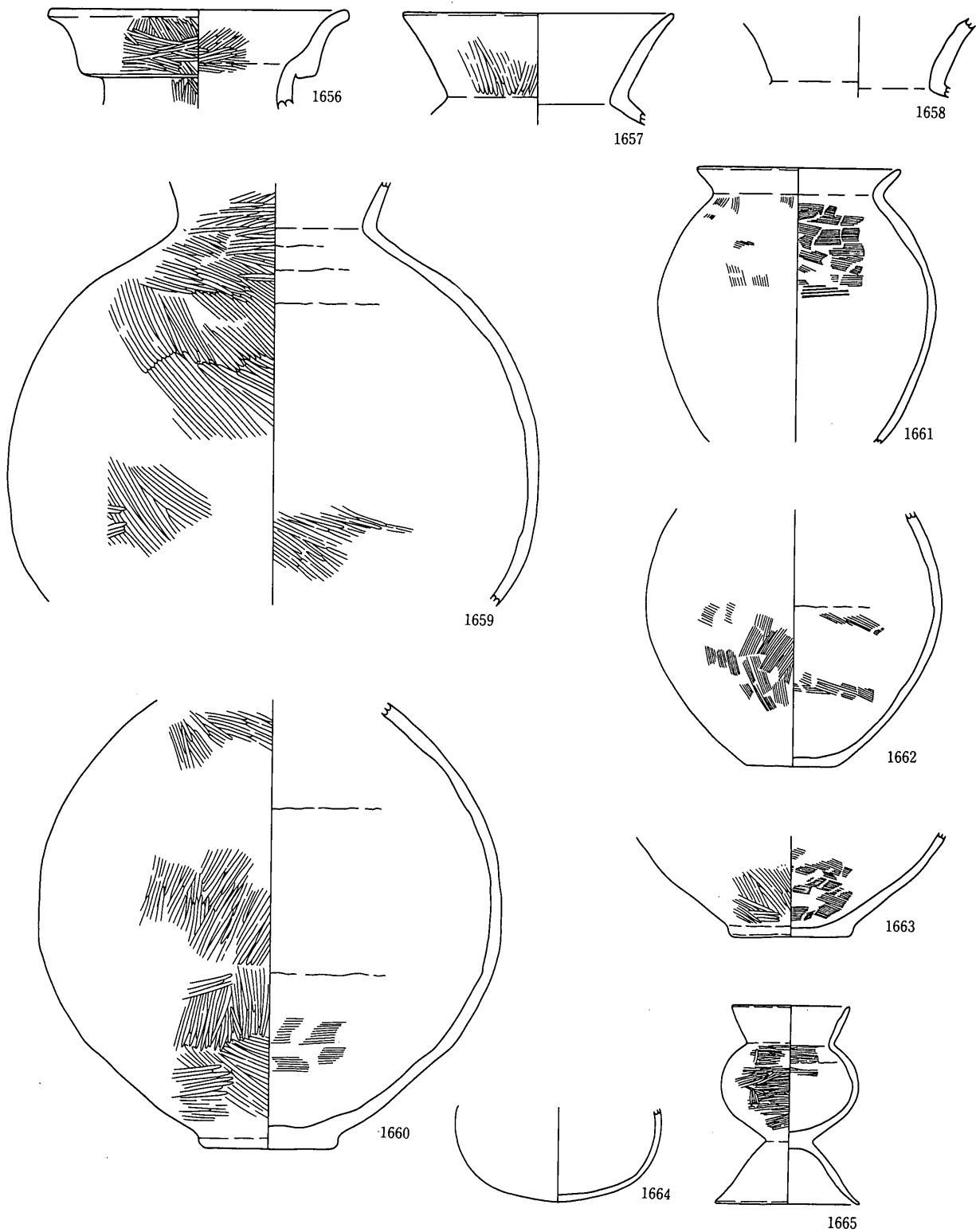


1655

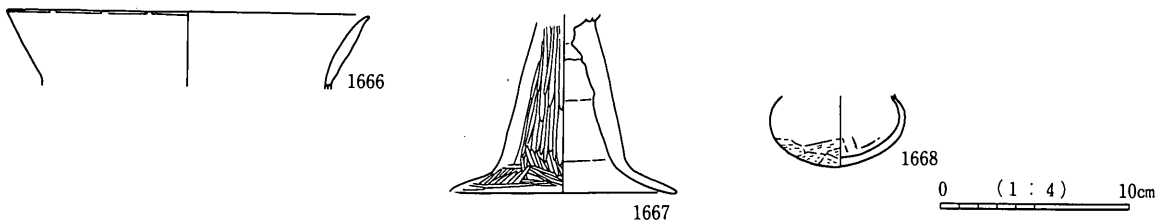
0 (1 : 4) 10cm

第288图 土坑出土土器80< S K 2747 (1652 · 1653) S K 2751 (1634 ~ 1651) S K 2753 (1654) S K 2755 (1655) >

S K 2756

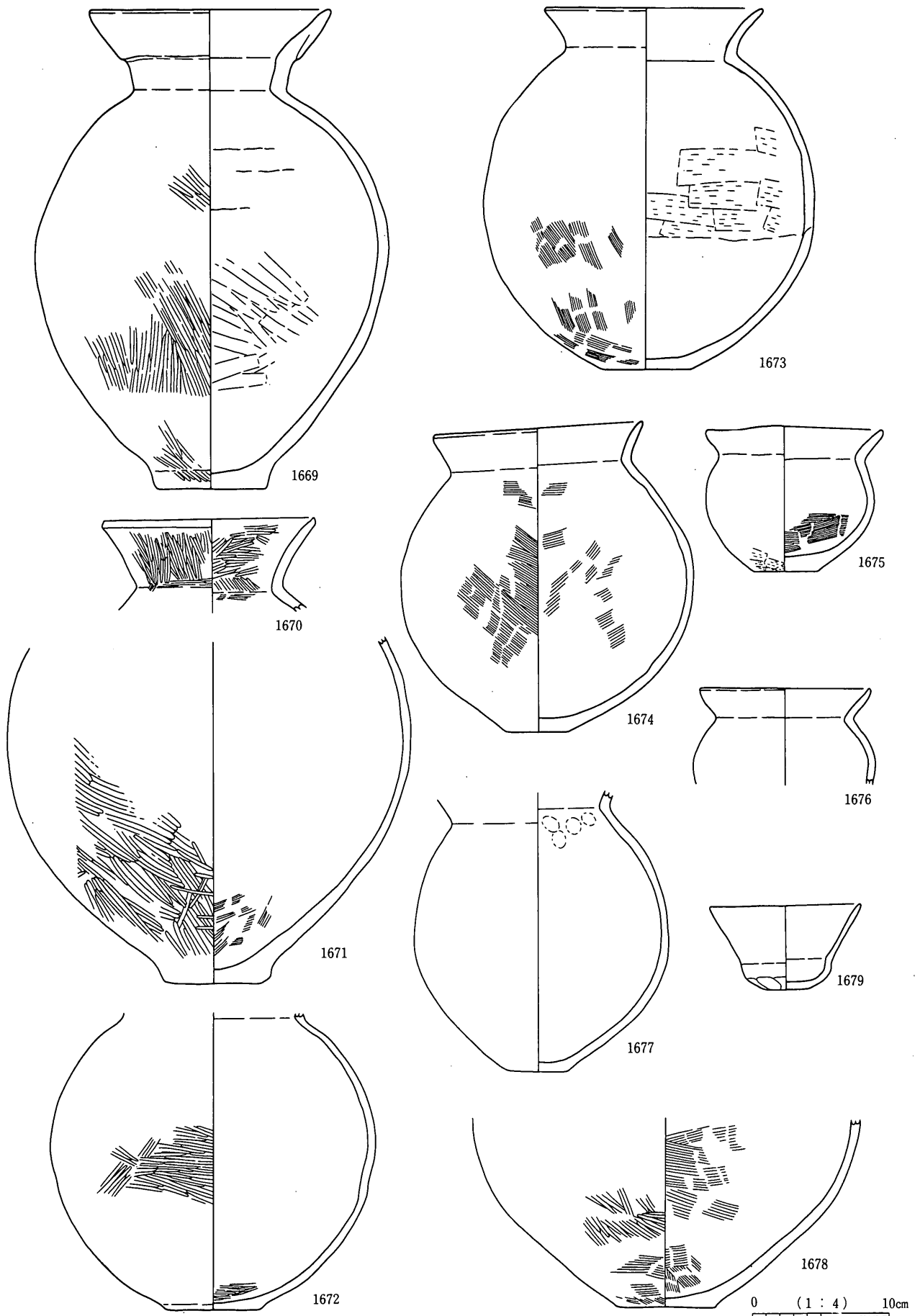


S K 2833



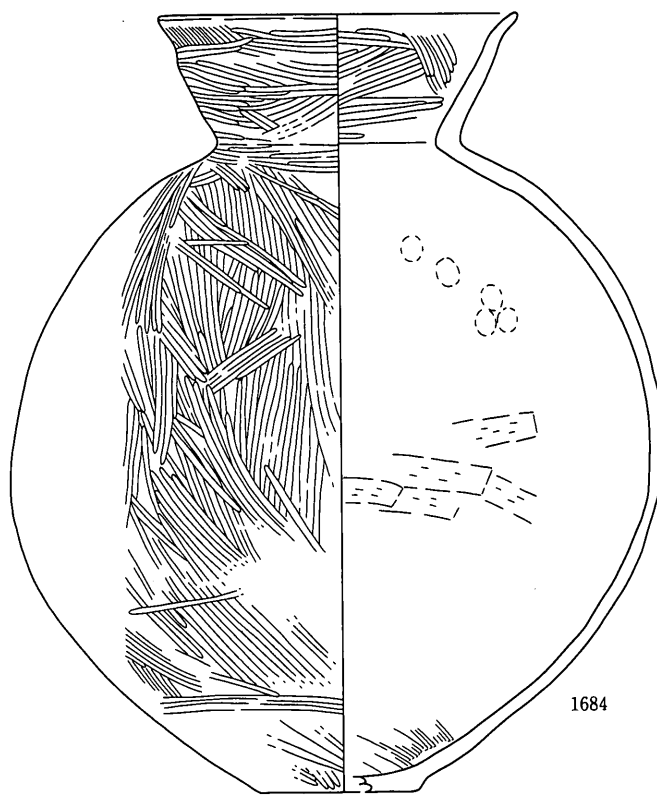
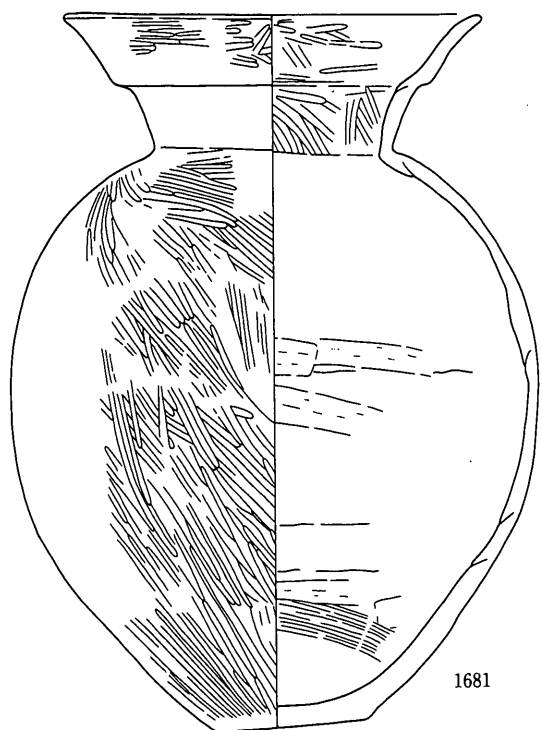
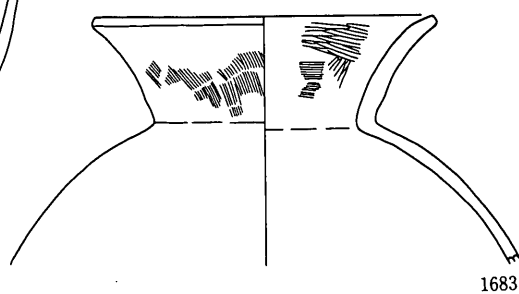
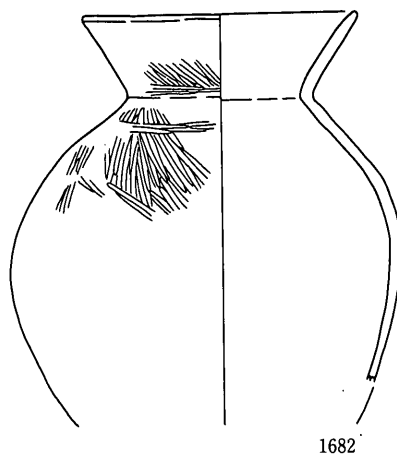
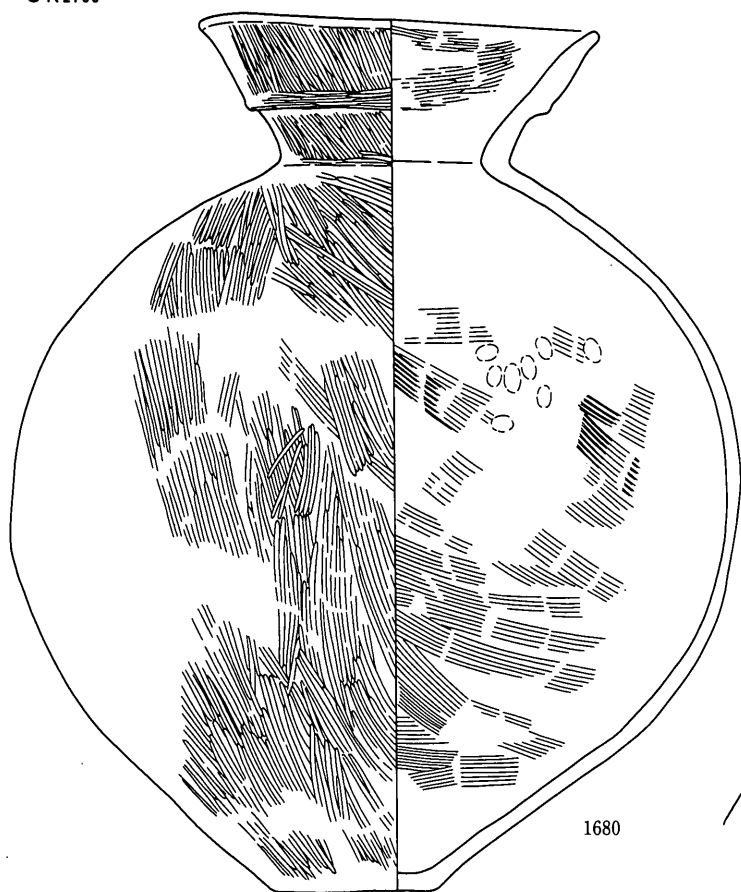
第289图 土坑出土土器81<S K2756 (1656~1665) S K2833 (1666~1668)>

S K 2757



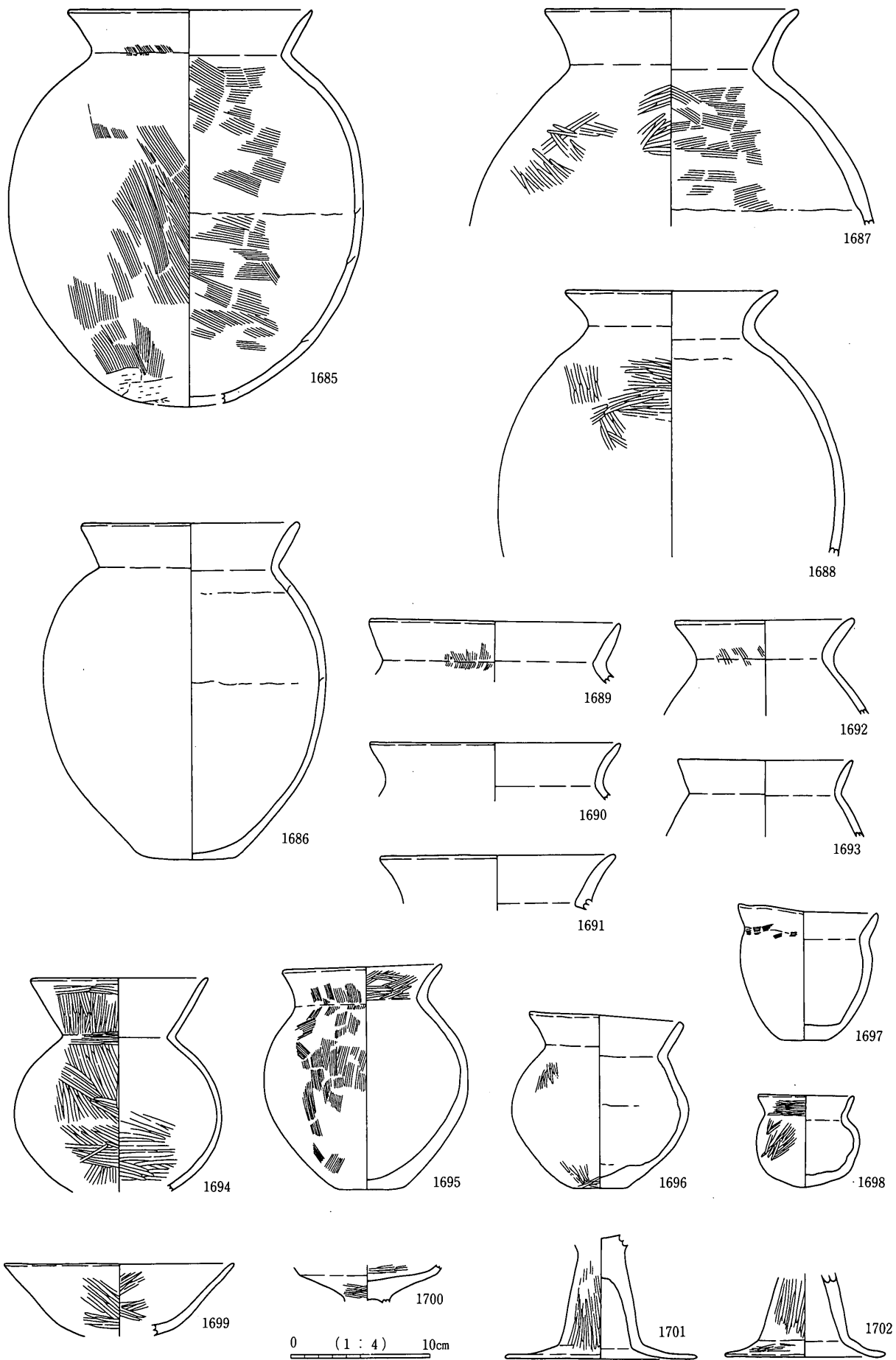
第290图 土坑出土土器82< S K 2757 (1669~1679) >

S K 2759

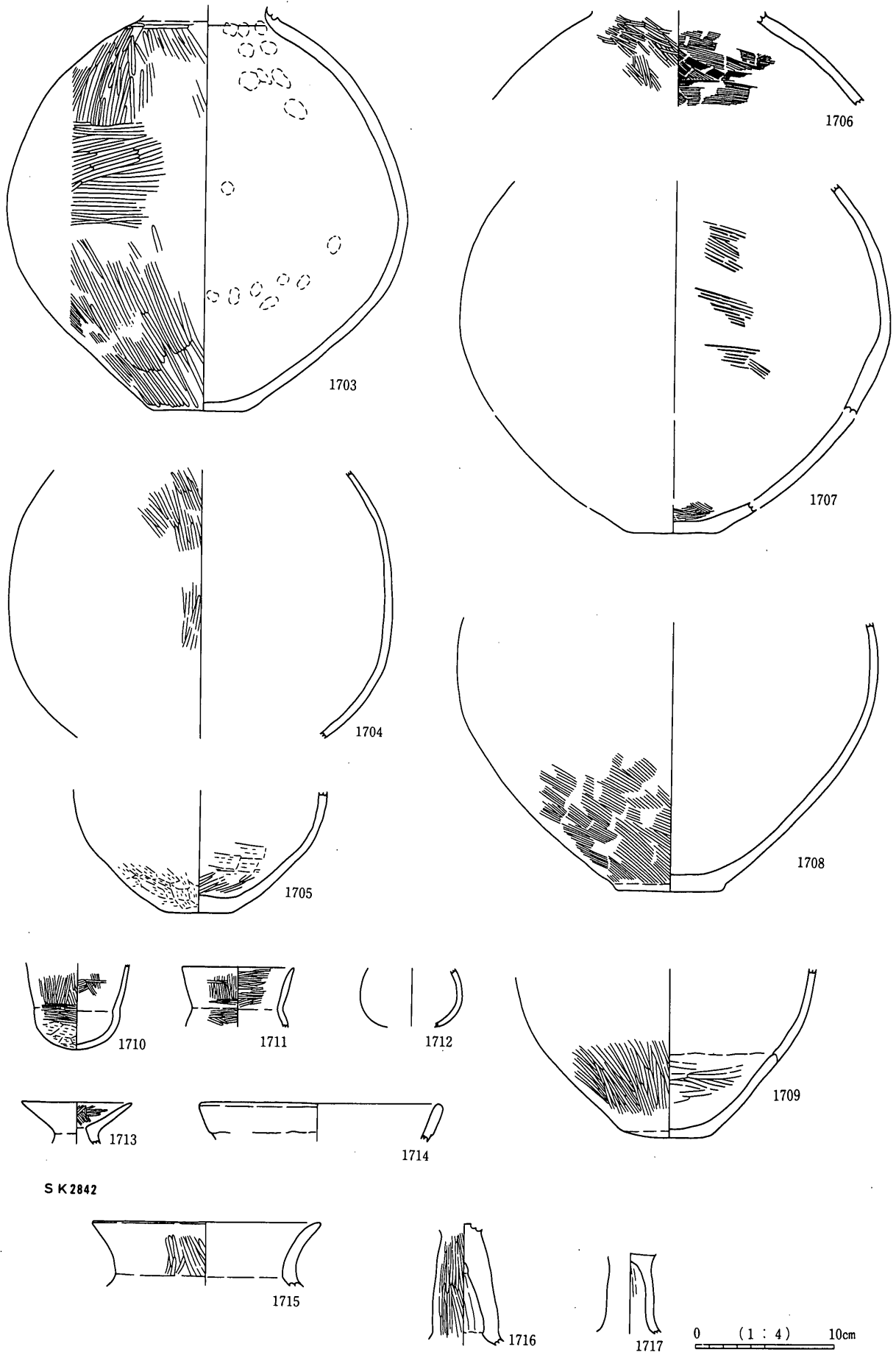


0 (1 : 4) 10cm

第291图 土坑出土土器83< S K 2759 (1680~1684)>

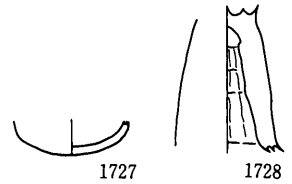
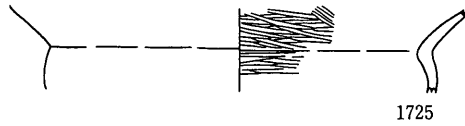
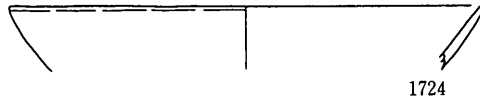
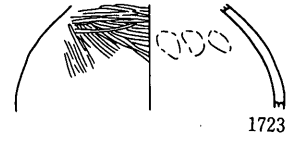
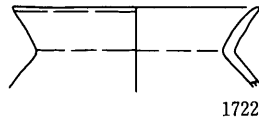
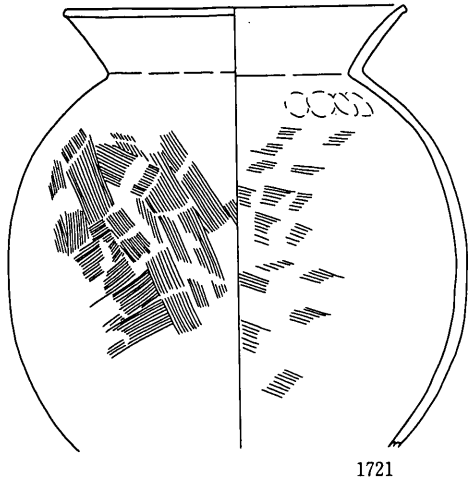
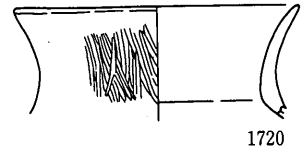
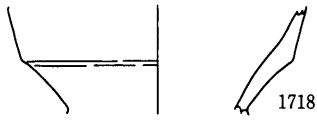


第292图 土坑出土土器84< S K2759 (1685~1702)>

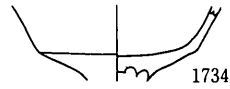
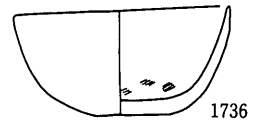
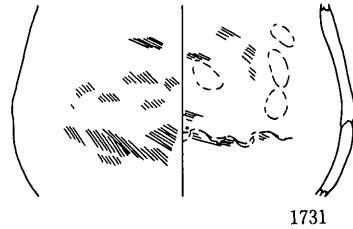
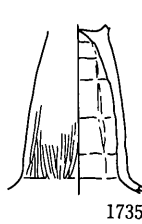
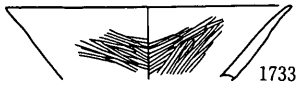
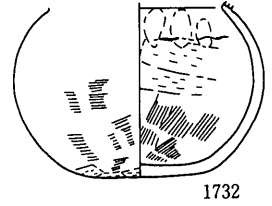
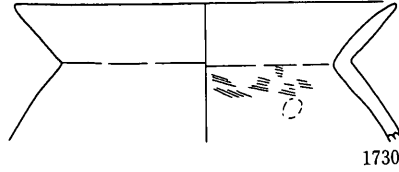
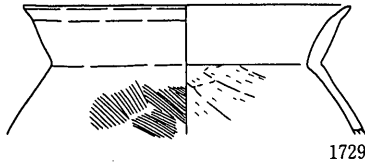


第293图 土坑出土土器85<SK2759 (1703~1714) SK2842 (1715~1717)>

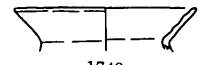
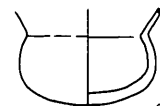
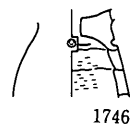
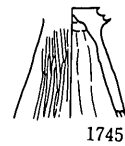
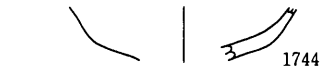
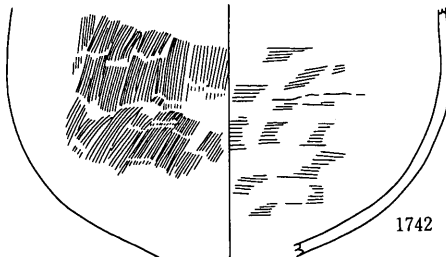
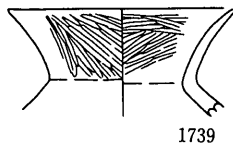
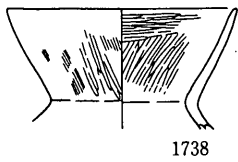
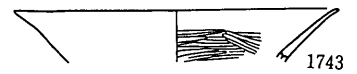
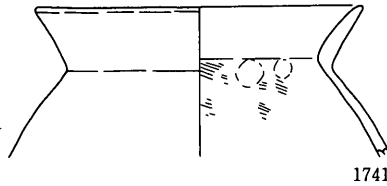
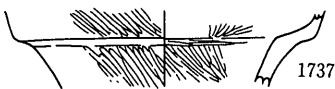
S K 2827



S K 2828



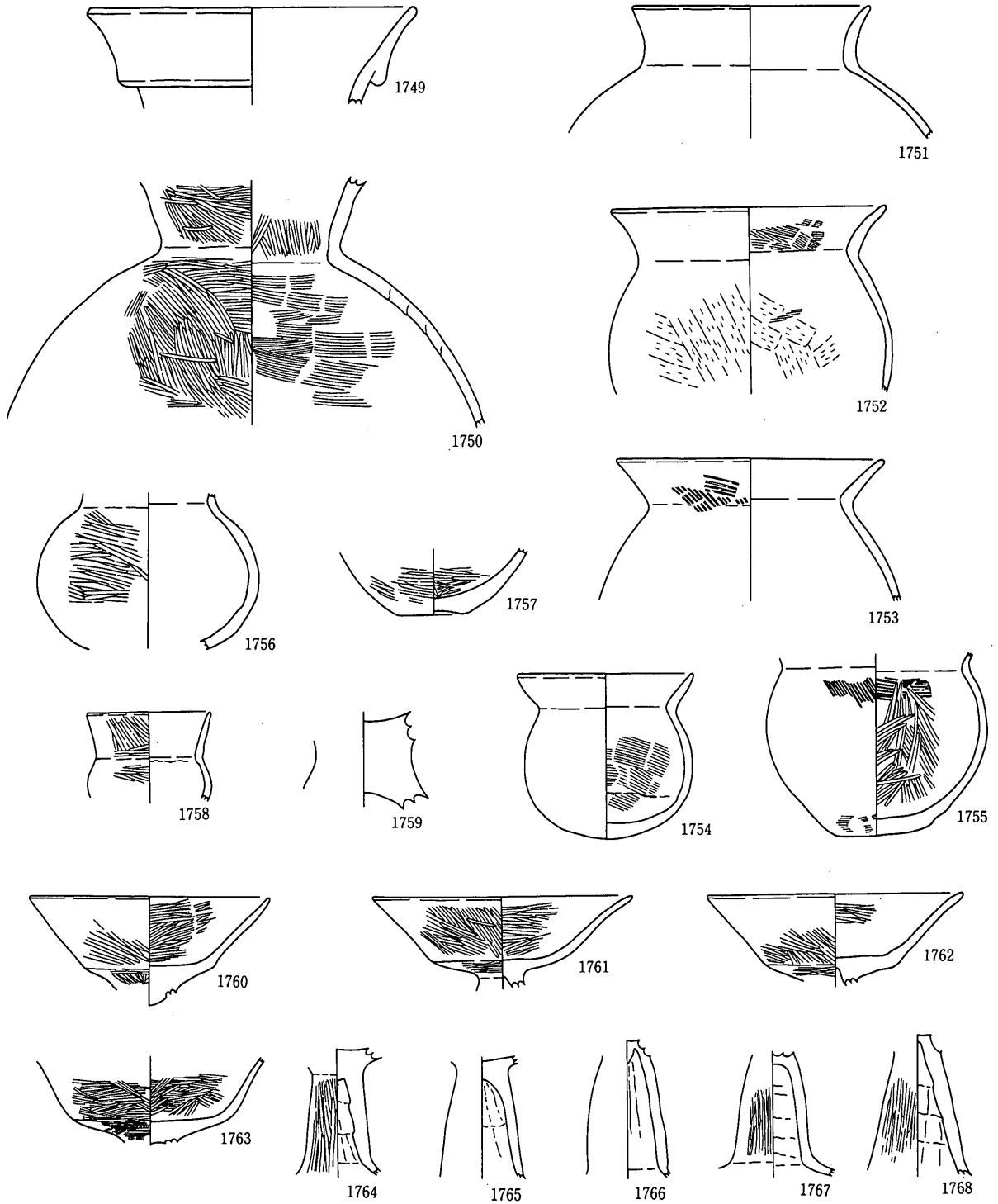
S K 2832



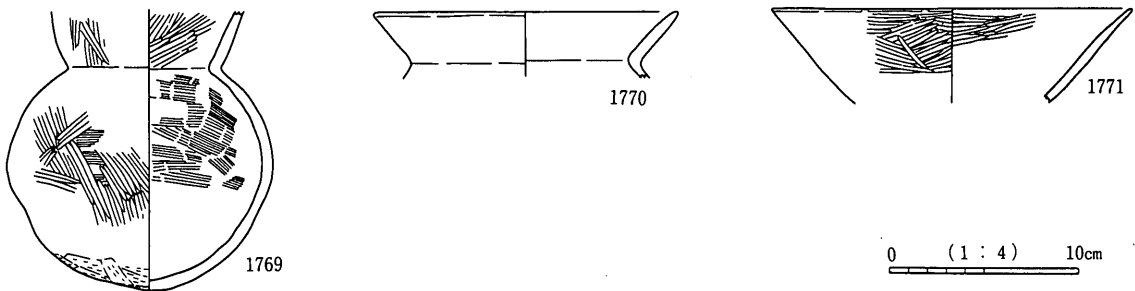
0 (1 : 4) 10cm

第294图 土坑出土土器86< S K 2827 (1718~1728) S K 2828 (1729~1736) S K 2832 (1737~1748)>

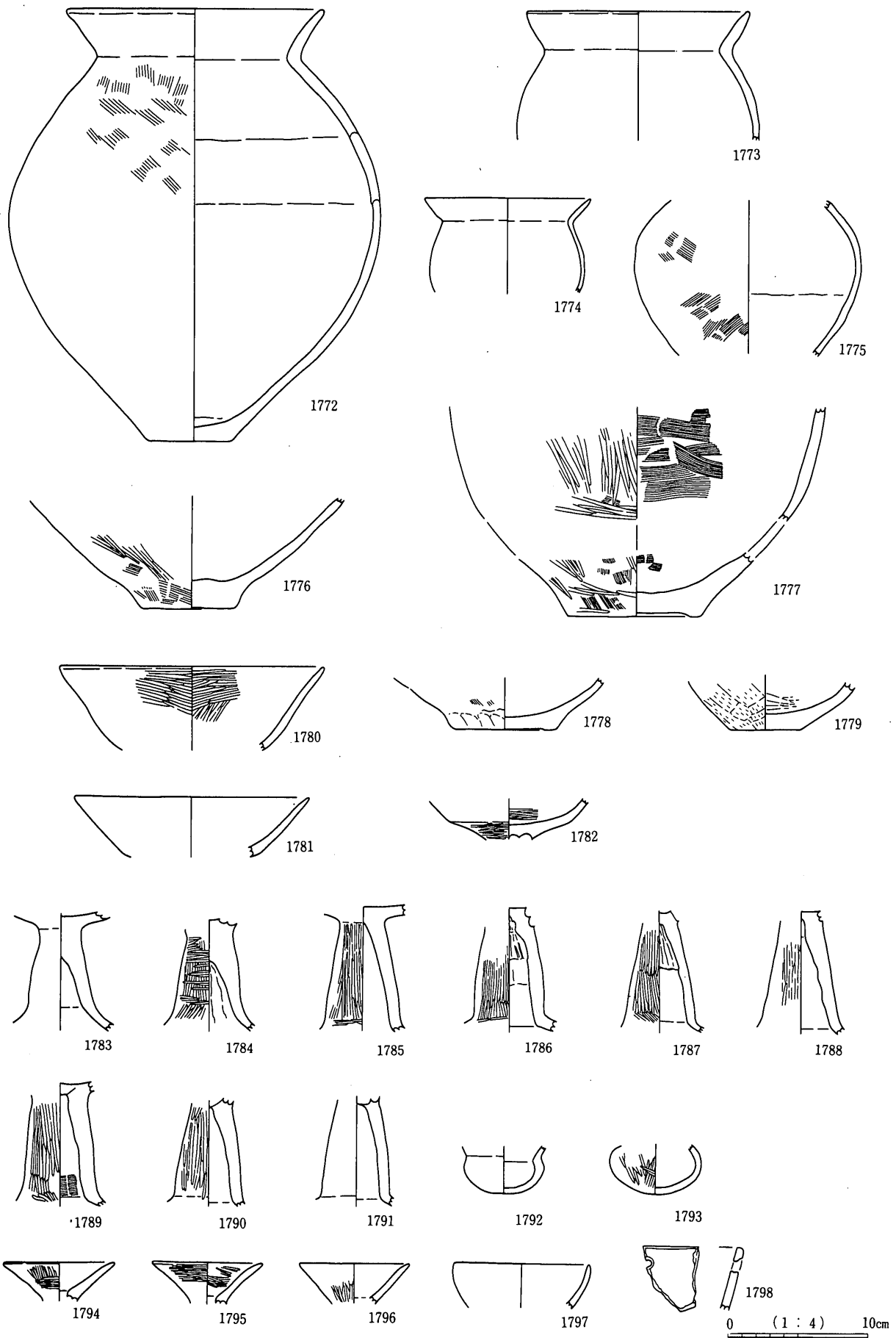
S K 2831



S K 2868

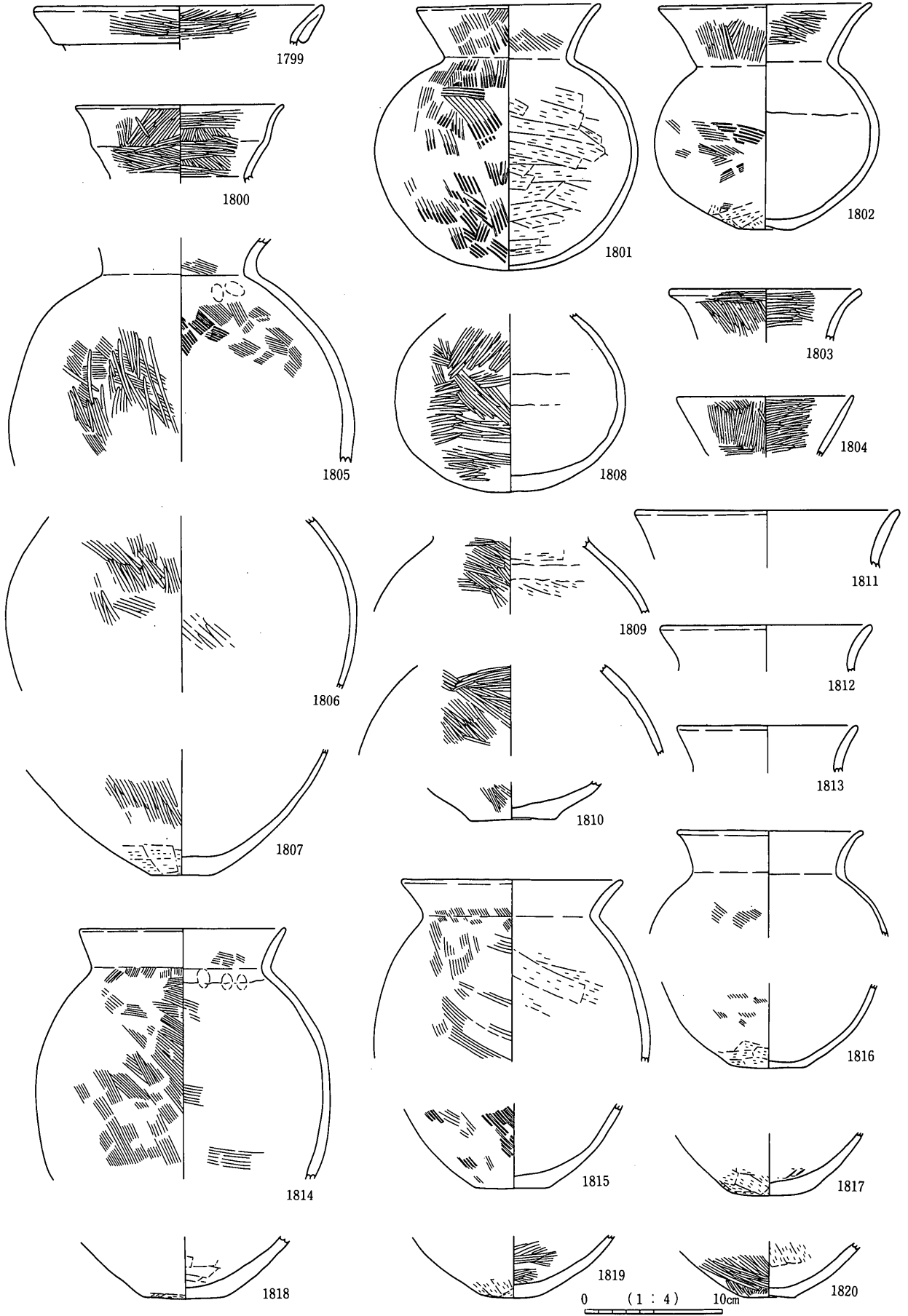


第295图 土坑出土土器87< S K 2831 (1749~1768) S K 2868 (1769~1771)>



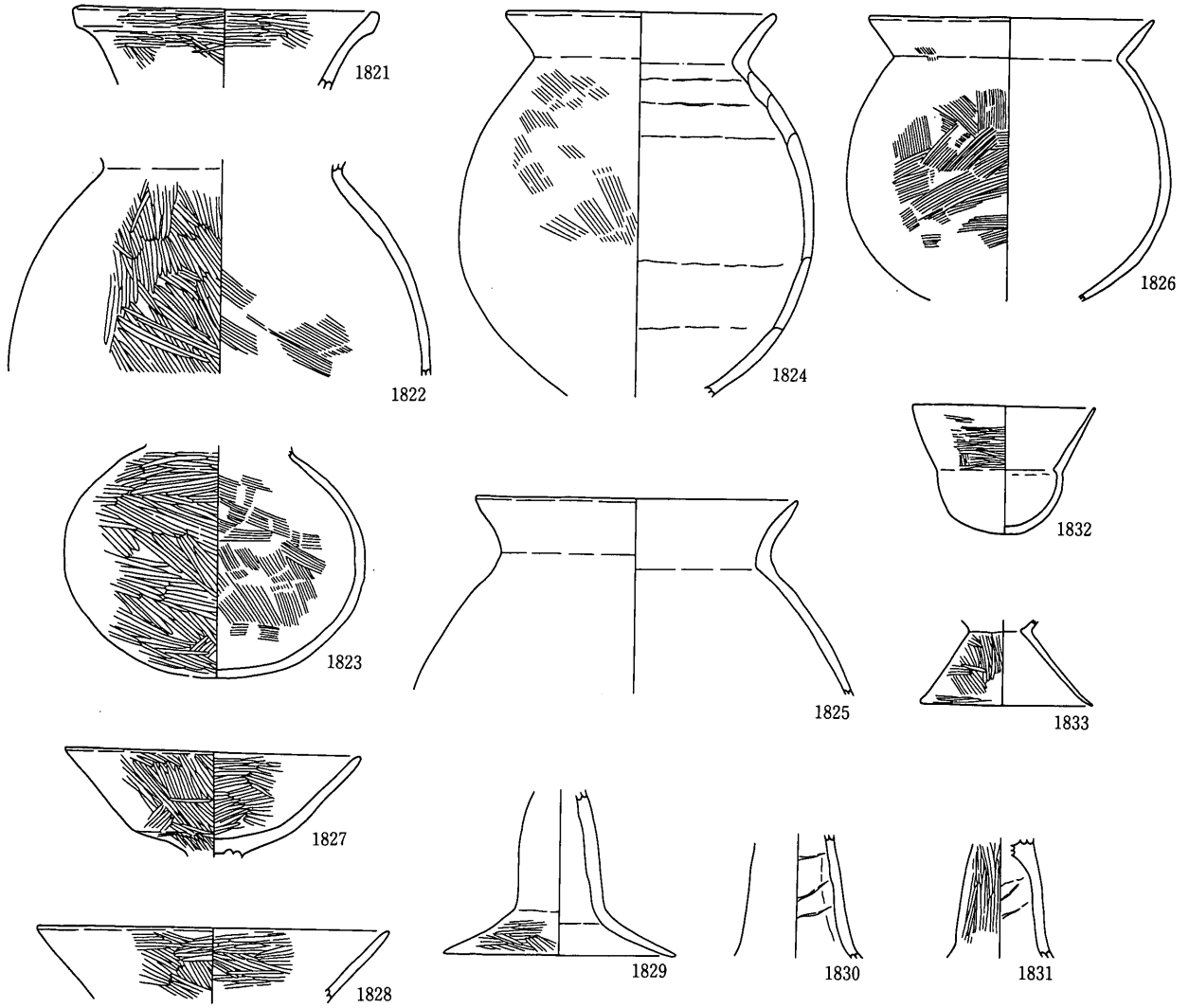
第296图 土坑出土土器88< S K 2843 (1772~1798)>

S K 2863

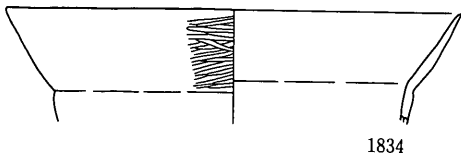


第297图 土坑出土土器89< S K 2863 (1799~1820) >

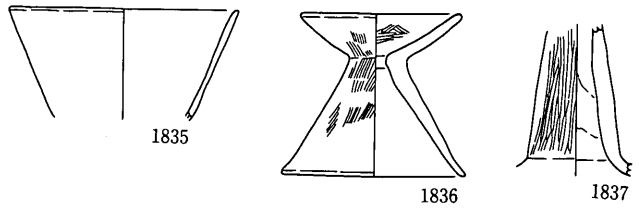
S K 2865



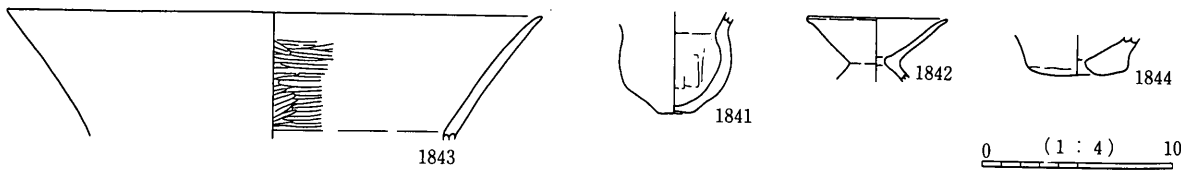
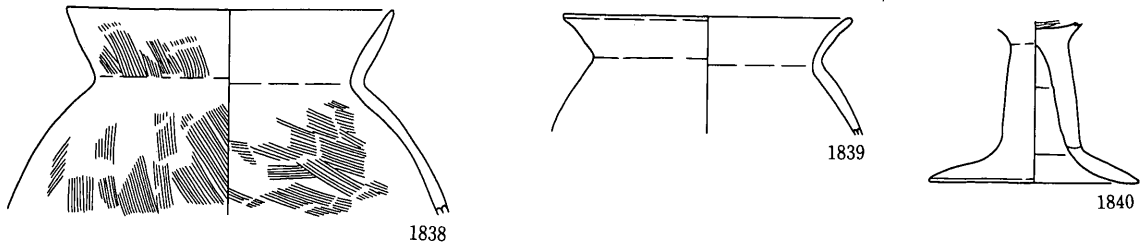
S K 2870



S K 2879

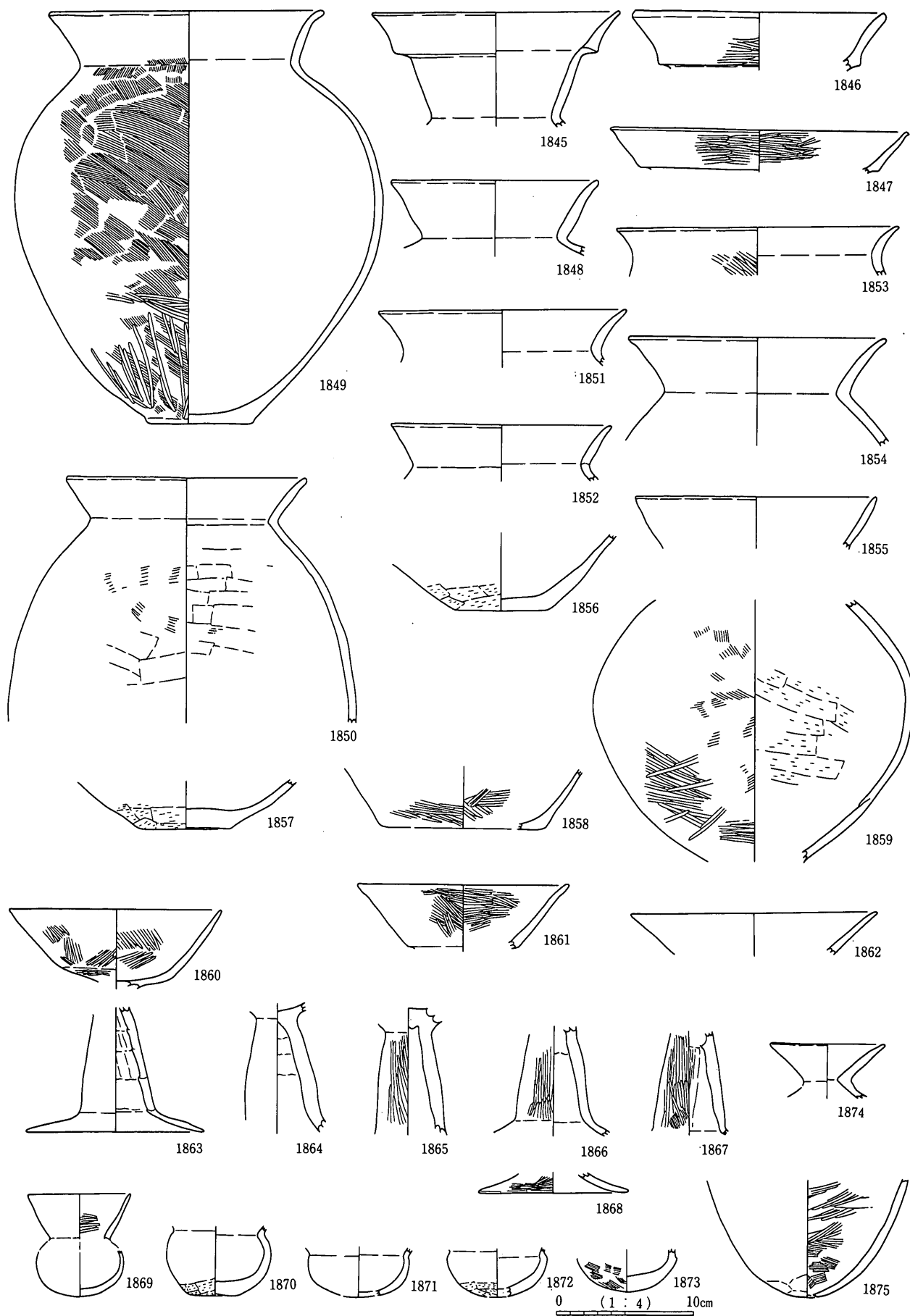


S K 2871



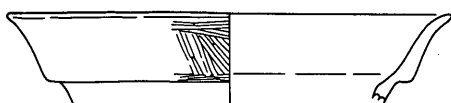
0 (1 : 4) 10cm

第298图 土坑出土土器90< S K 2865 (1821~1833) S K 2870 (1834) S K 2871 (1838~1844) S K 2879 (1835~1837)>

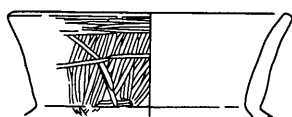


第299图 土坑出土土器91< S K 2874 (1845~1875) >

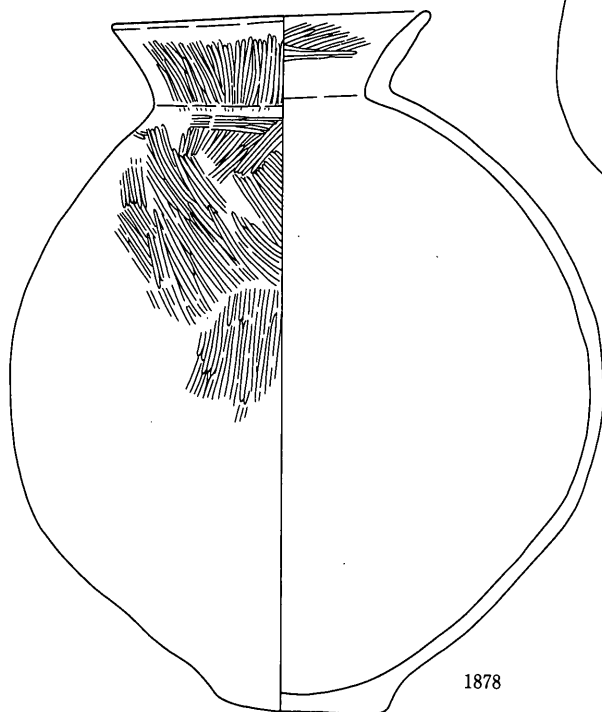
S K 2878



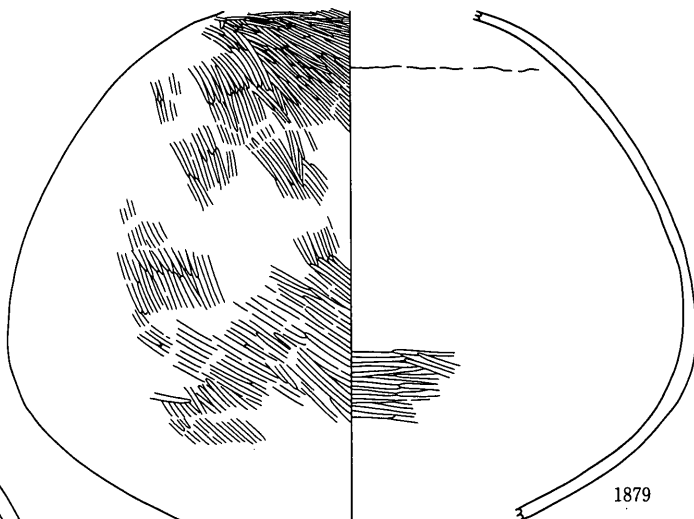
1876



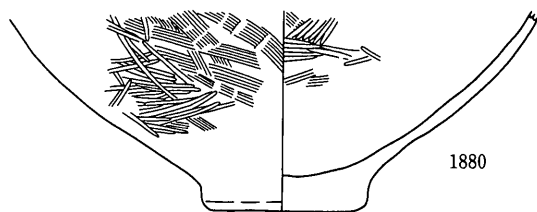
1877



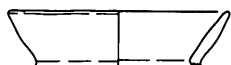
1878



1879



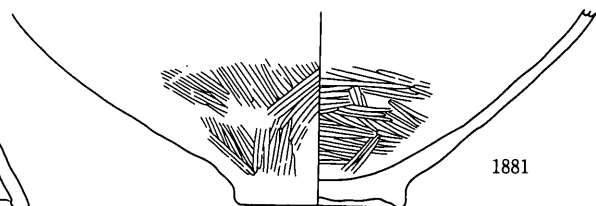
1880



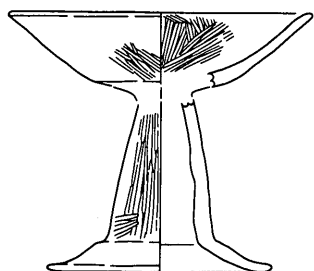
1882



1883



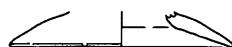
1881



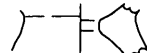
1884



1886



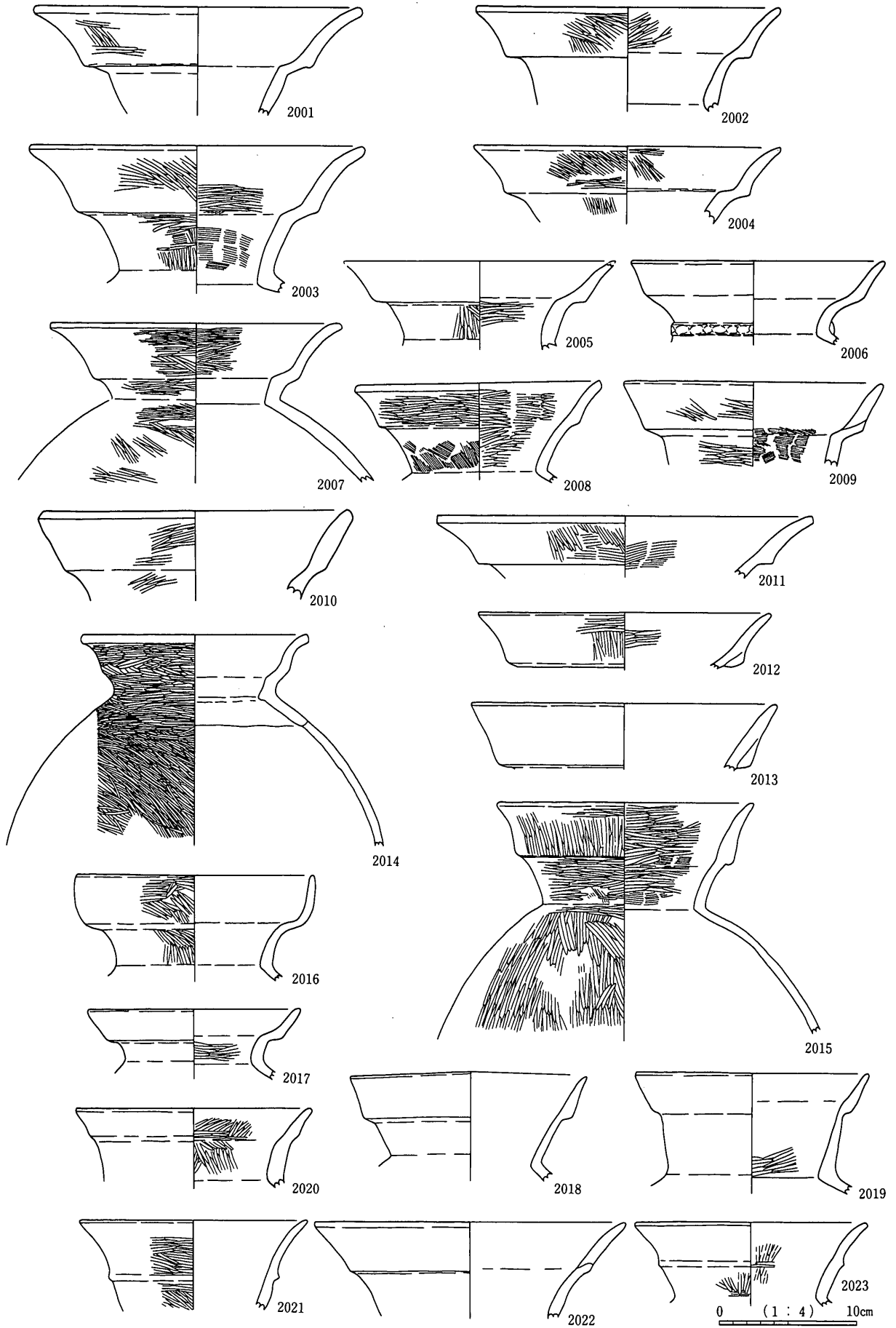
1885



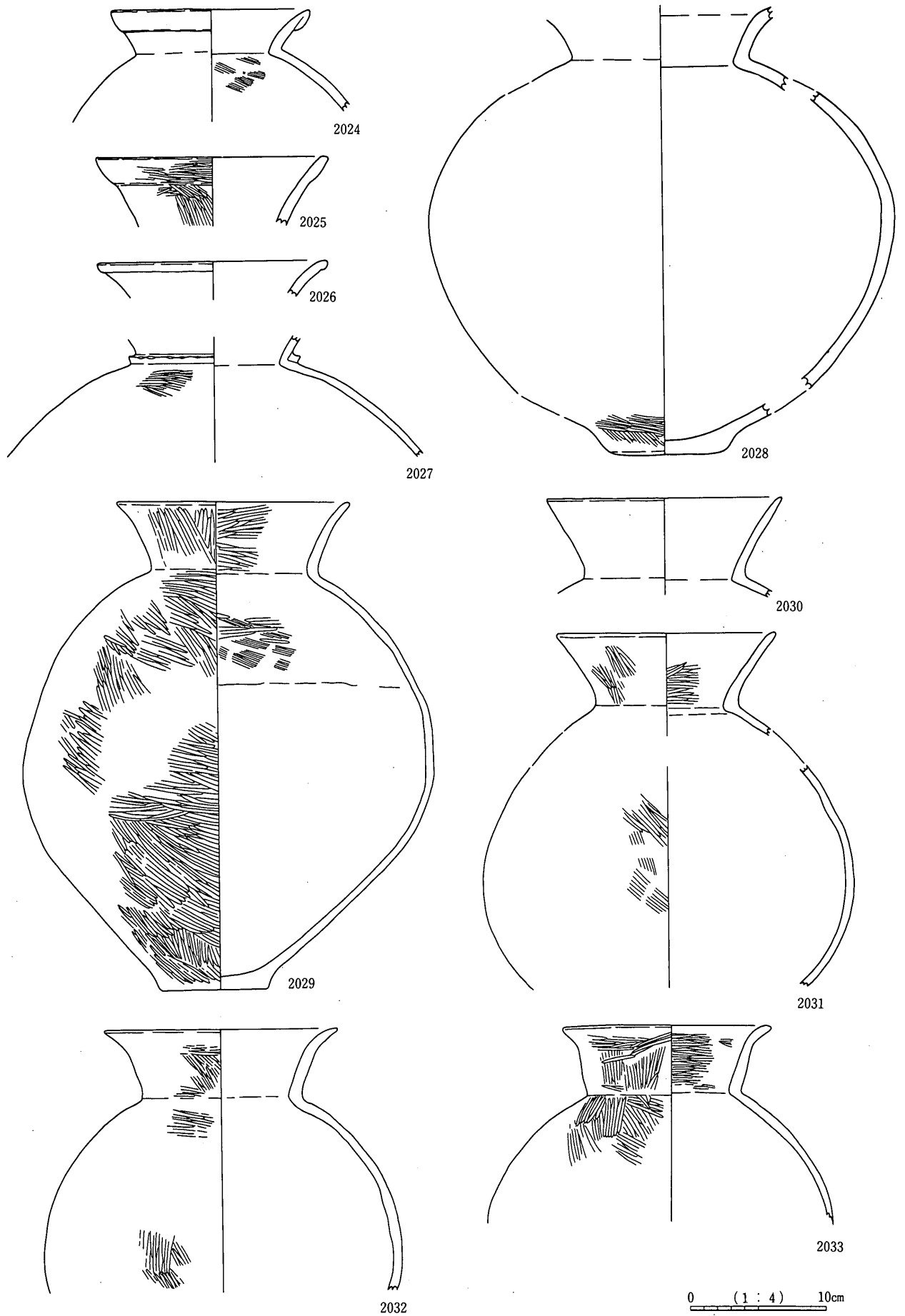
1887

0 (1 : 4) 10cm

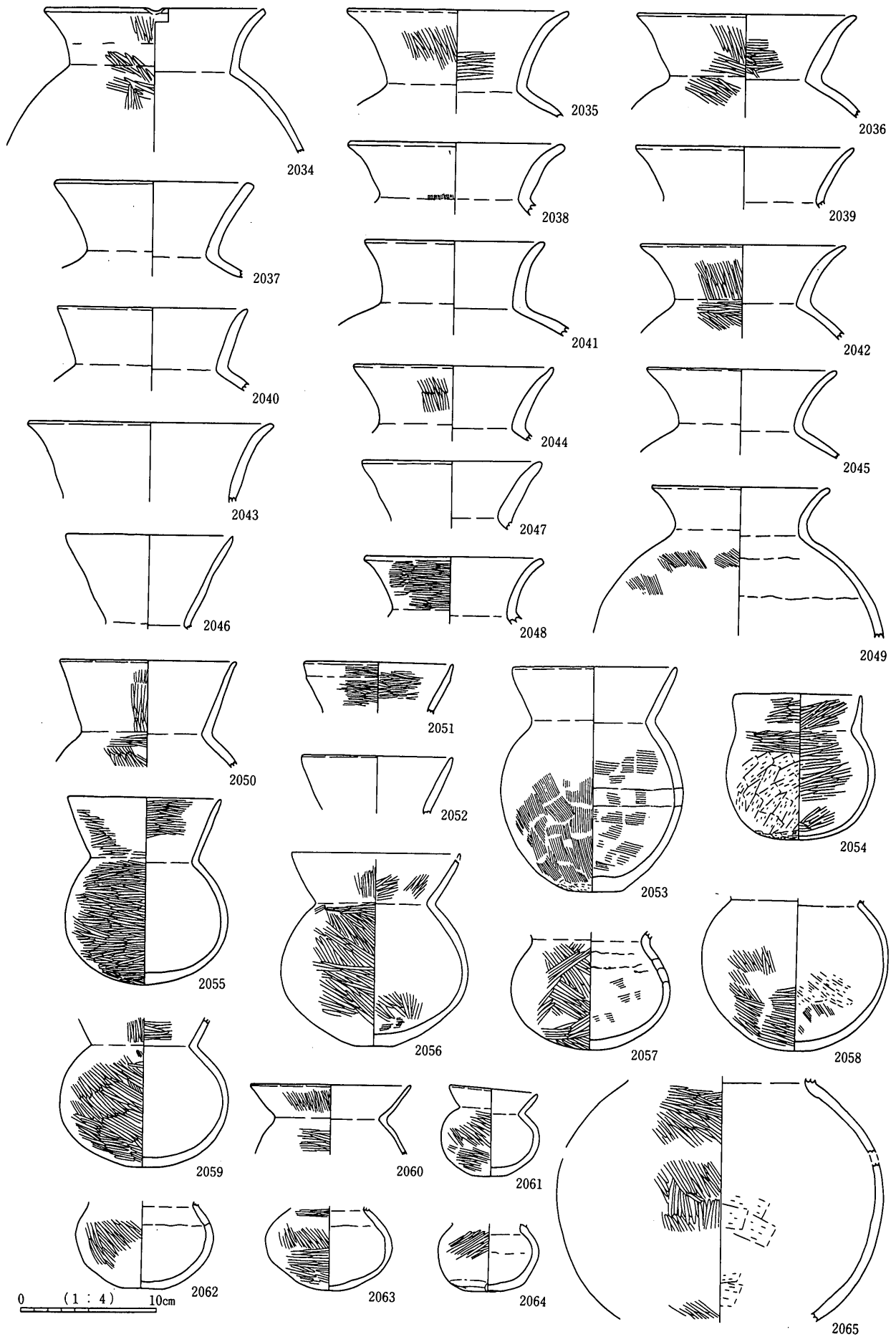
第300图 土坑出土土器92< S K 2878 (1876~1887) >



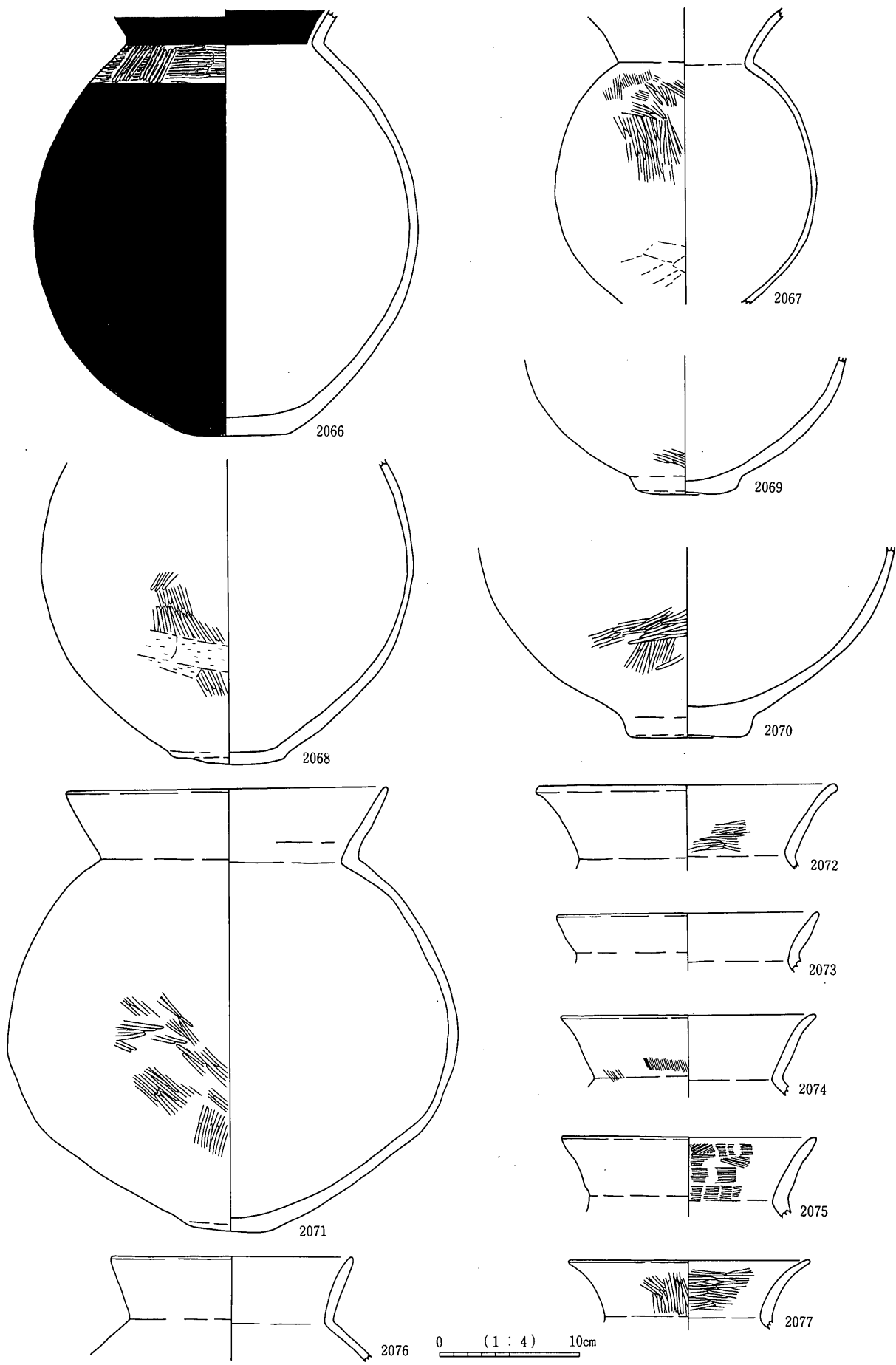
第301图 SD1016出土土器1 <2001~2023>



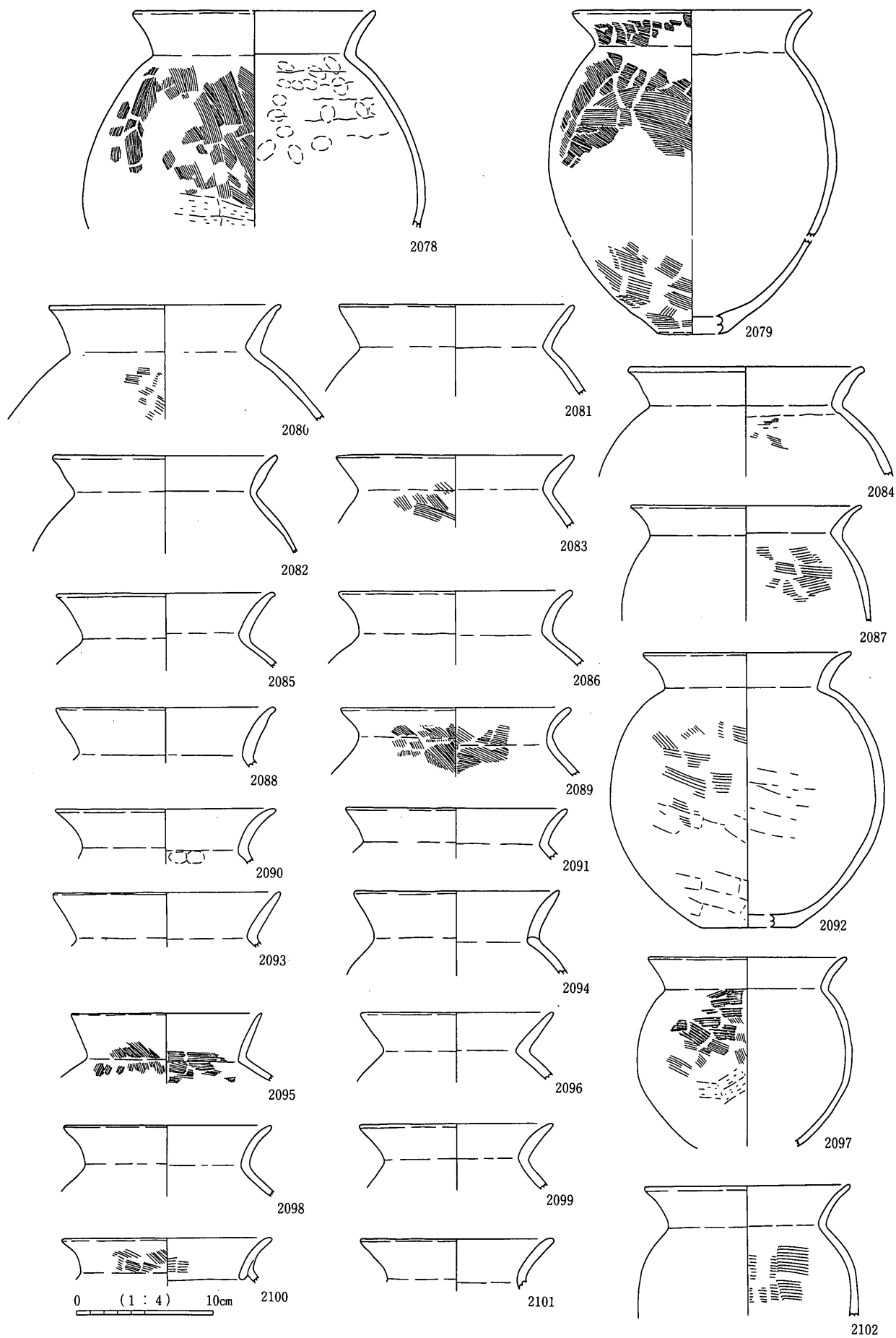
第302图 SD1016出土土器2 <2024~2033>



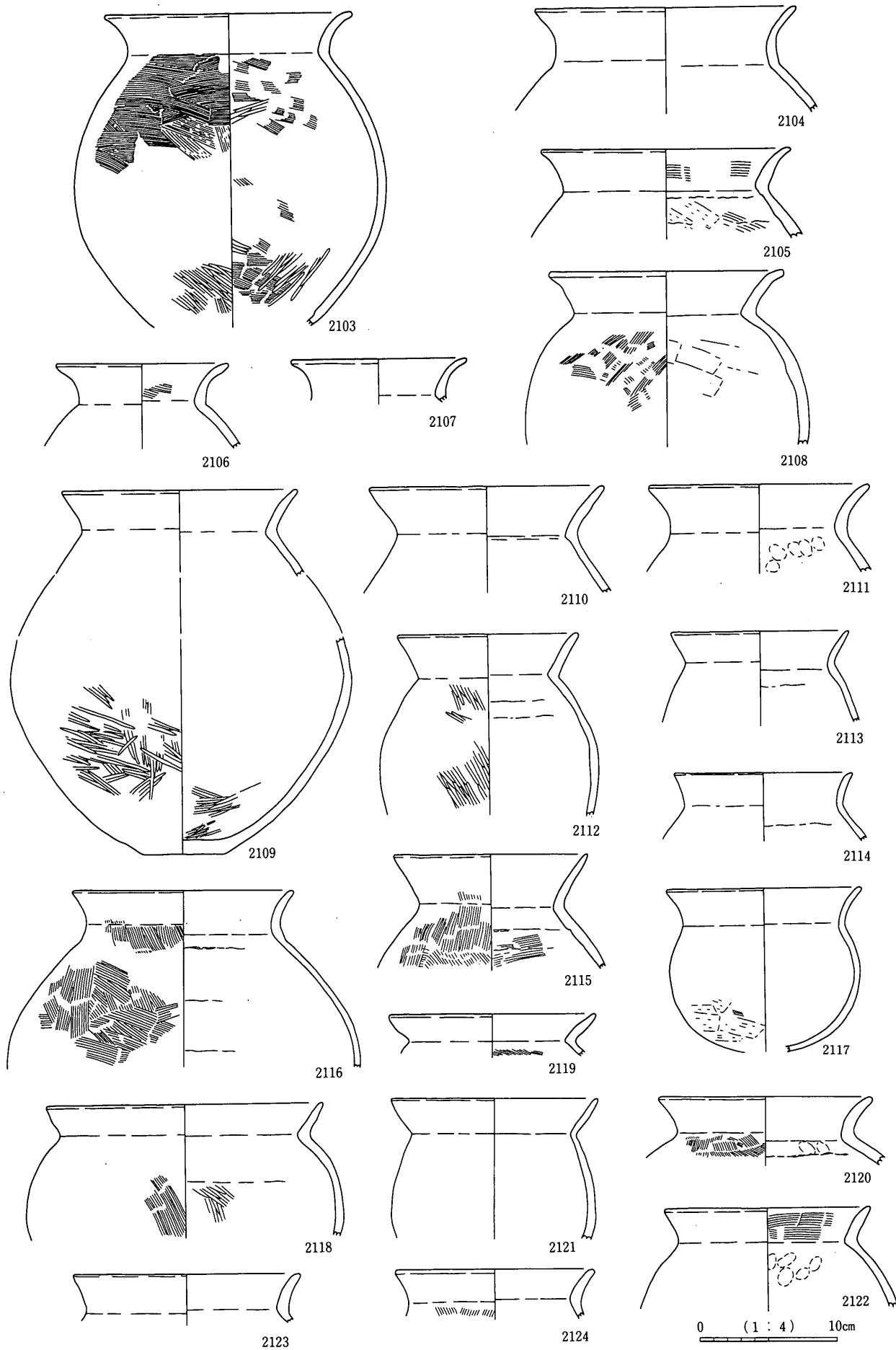
第303图 S D1016出土土器 3 <2034~2065>



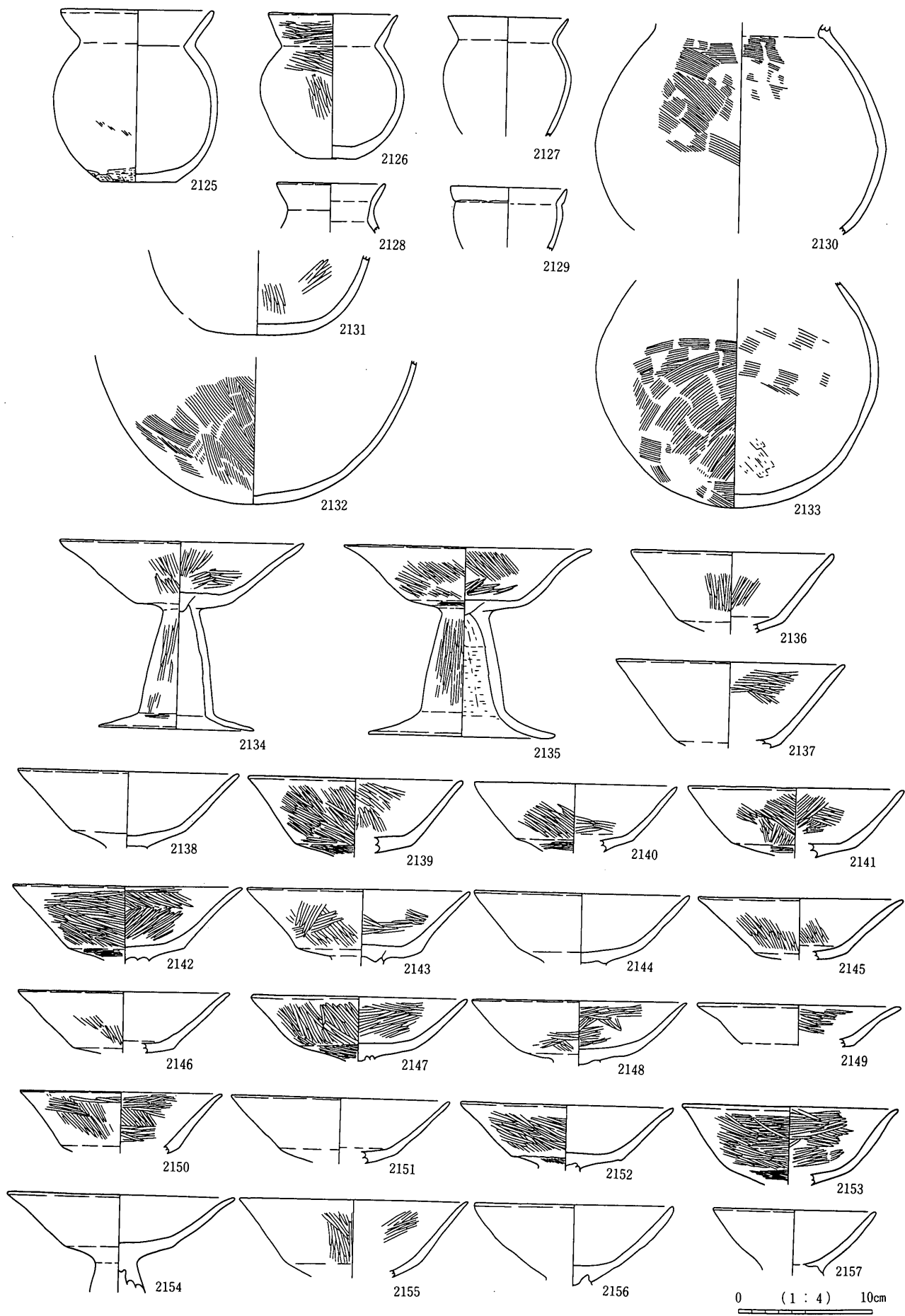
第304图 S D 1016出土土器 4 <2066~2077>



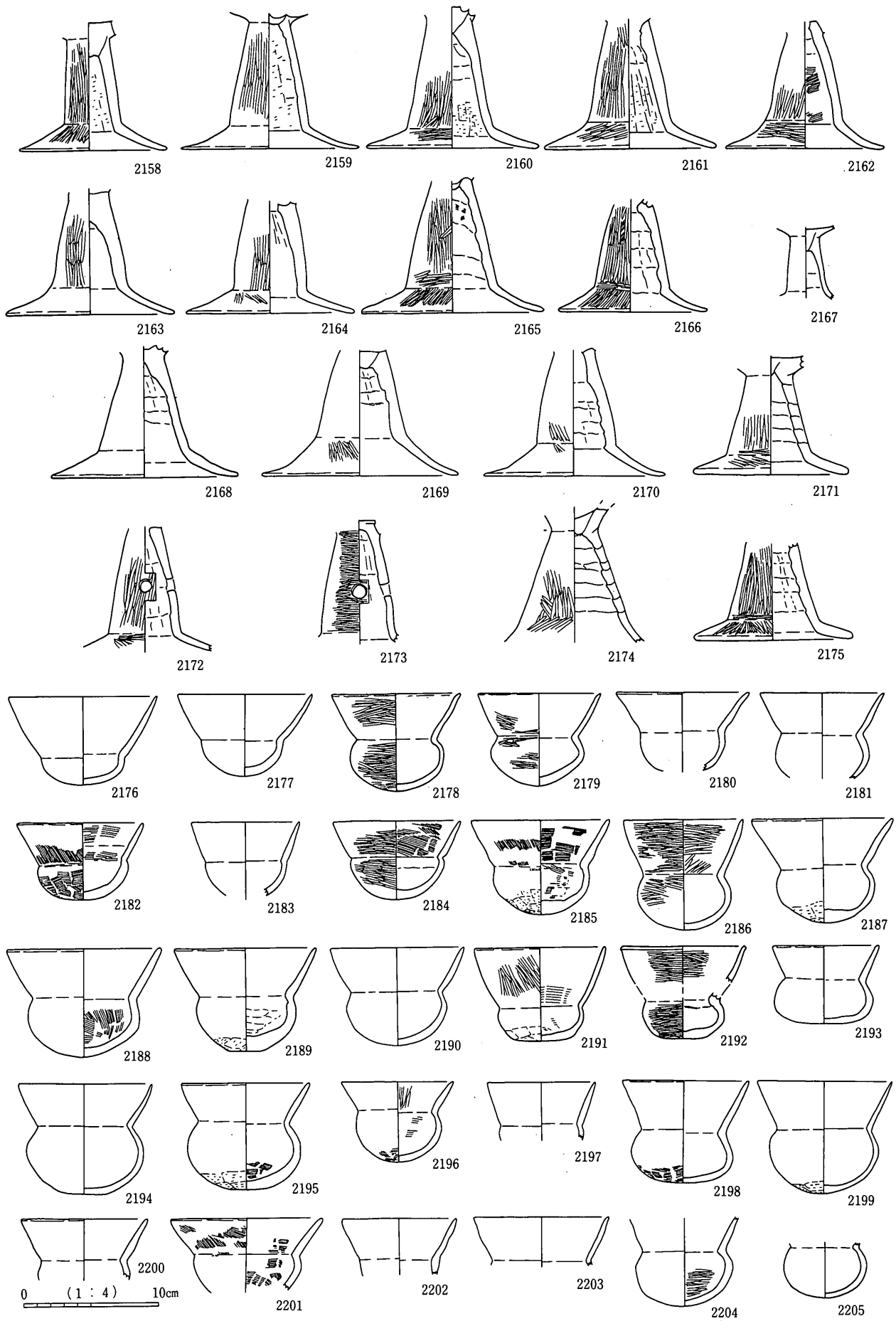
第305图 SD1016出土土器5 <2078~2102>



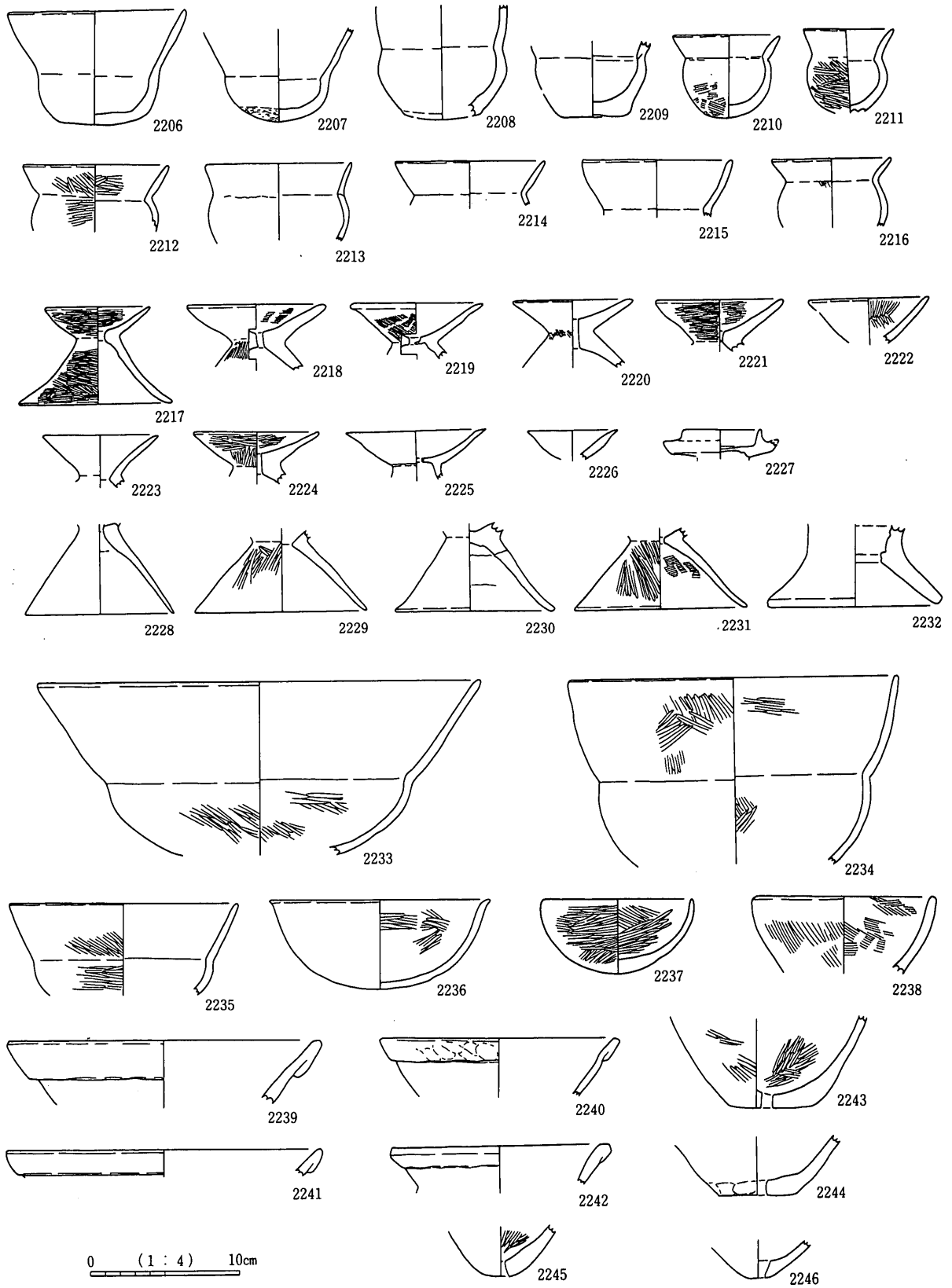
第306图 S D 1016出土土器 6 <2103~2124>



第307图 S D1016出土土器 7 <2125~2157>

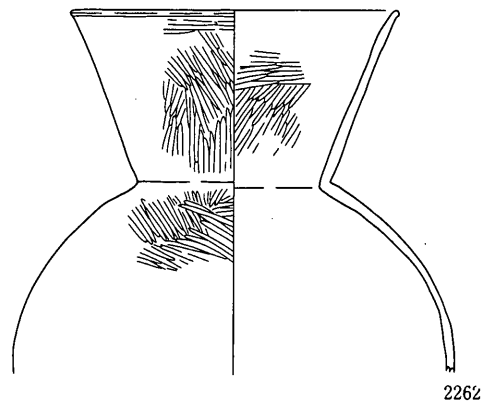
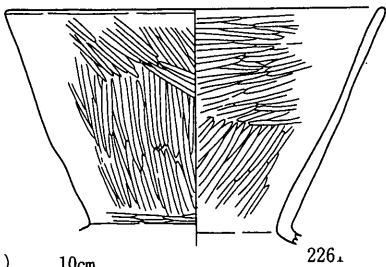
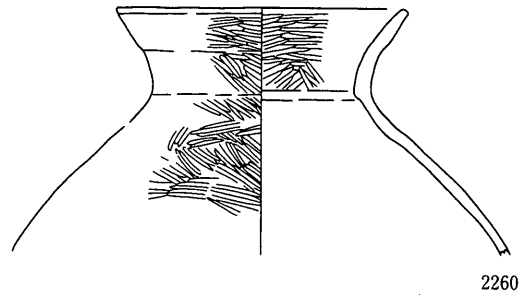
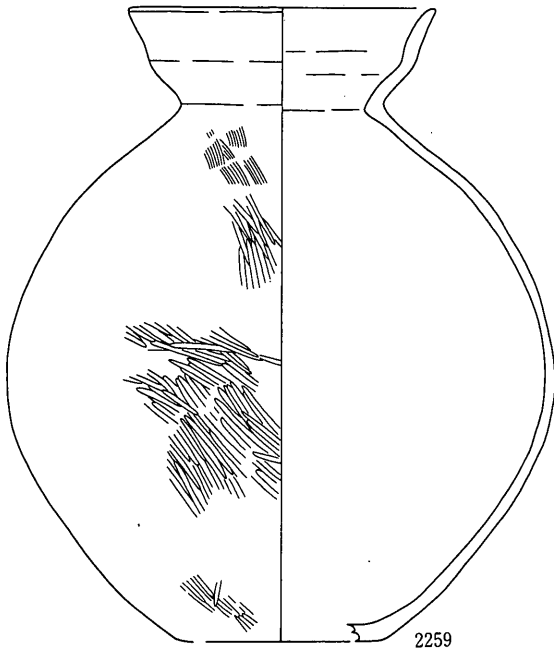
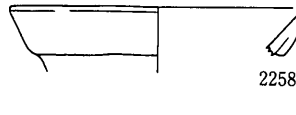
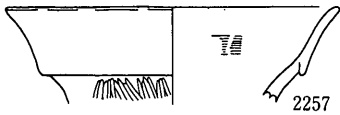
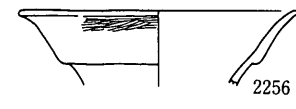
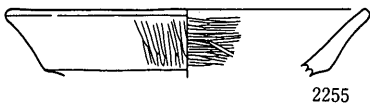
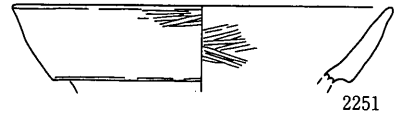
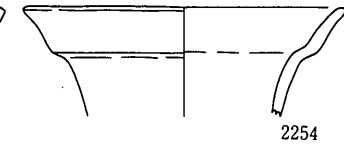
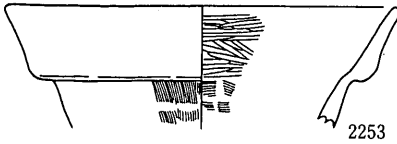
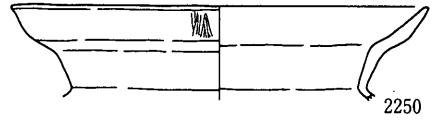
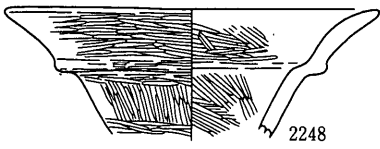
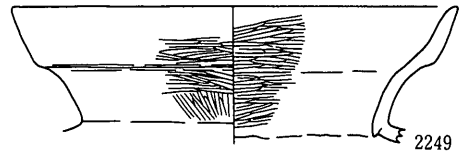
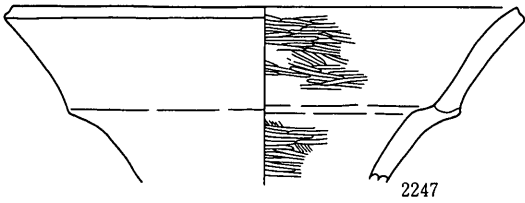


第308图 S D1016出土土器 8 <2158~2205>



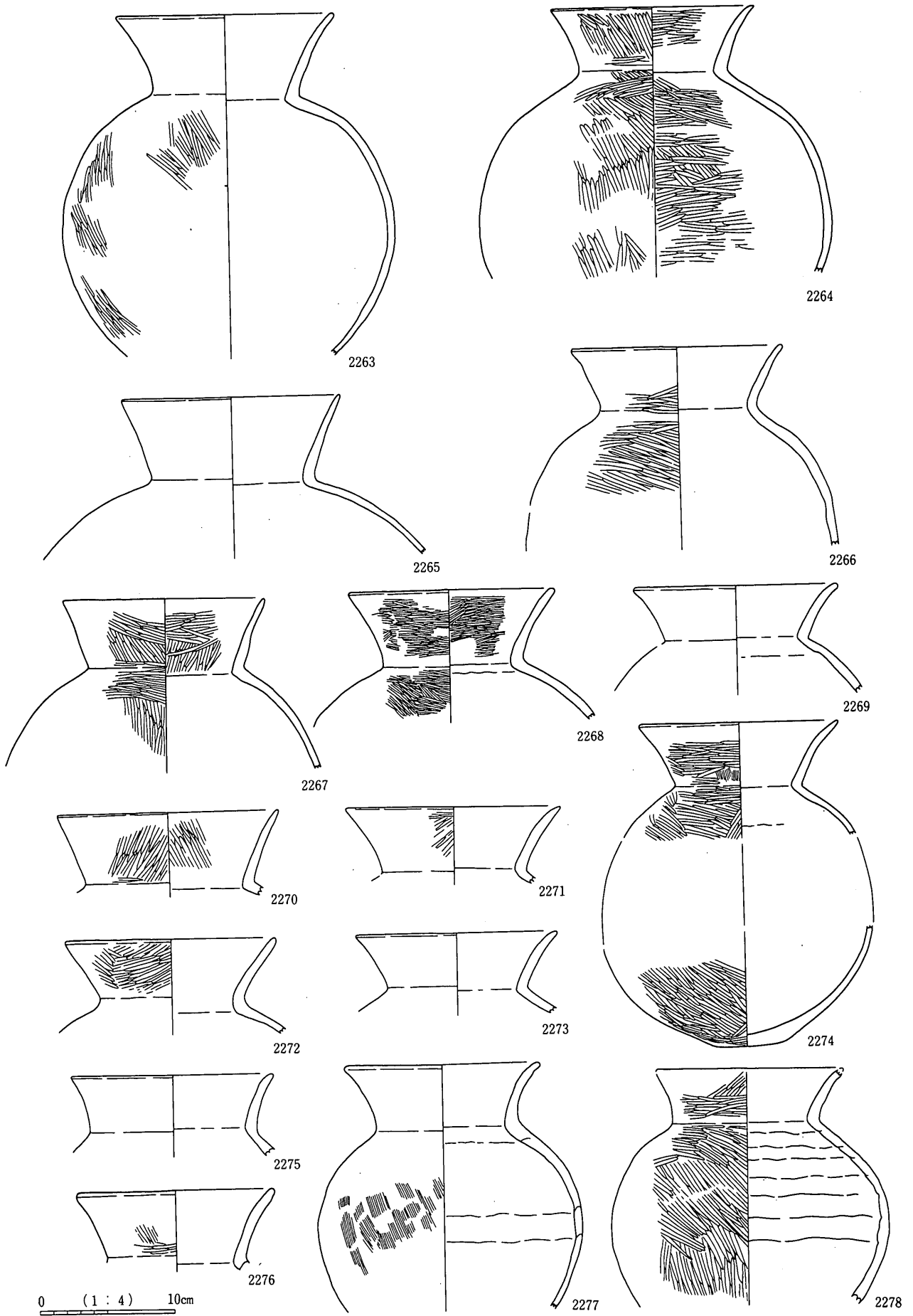
第309图 S D 1016出土土器 9 <2206~2246>

⑩区

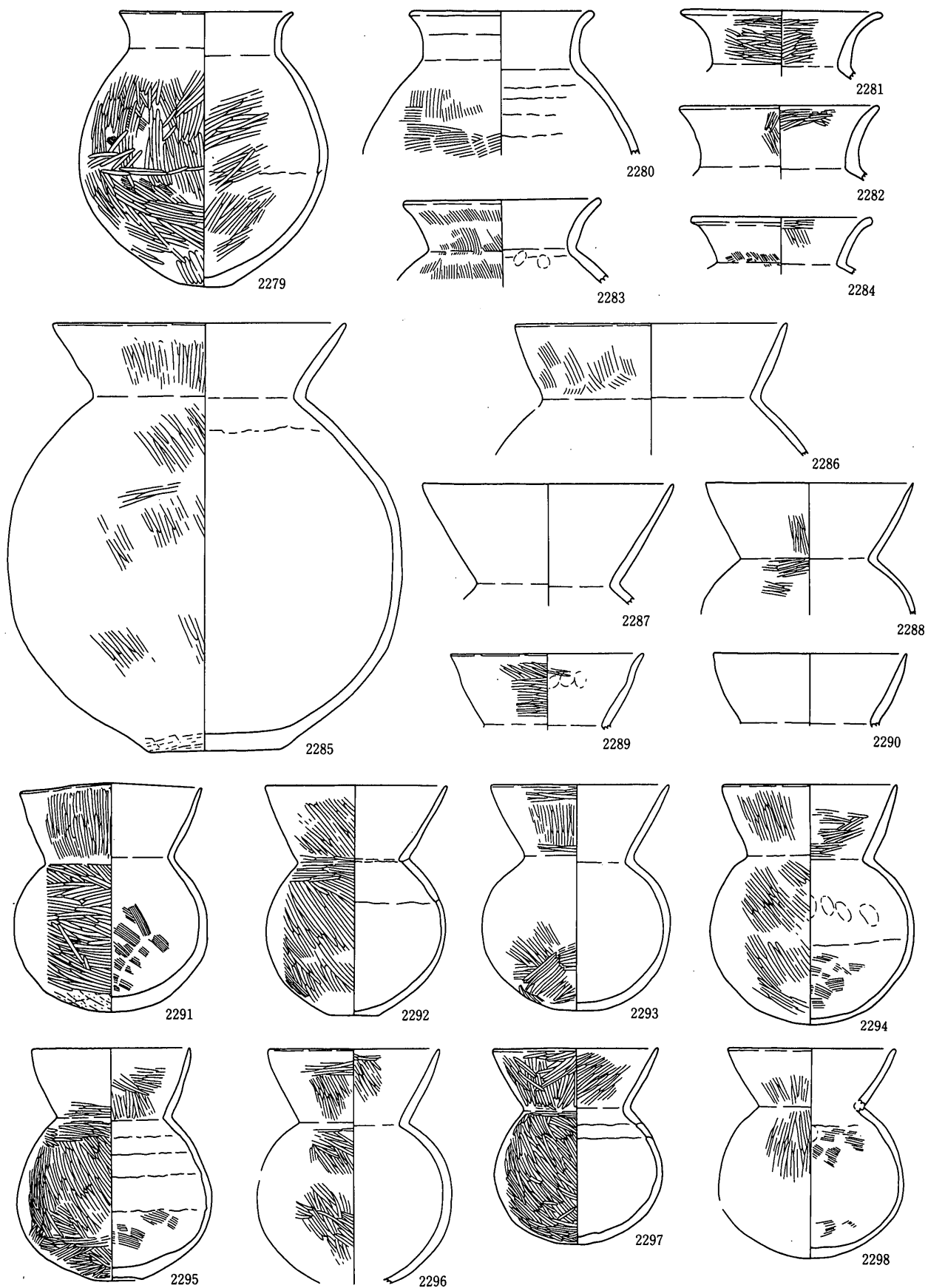


0 (1:4) 10cm

第310图 S D 1016出土土器10<2247~2262>

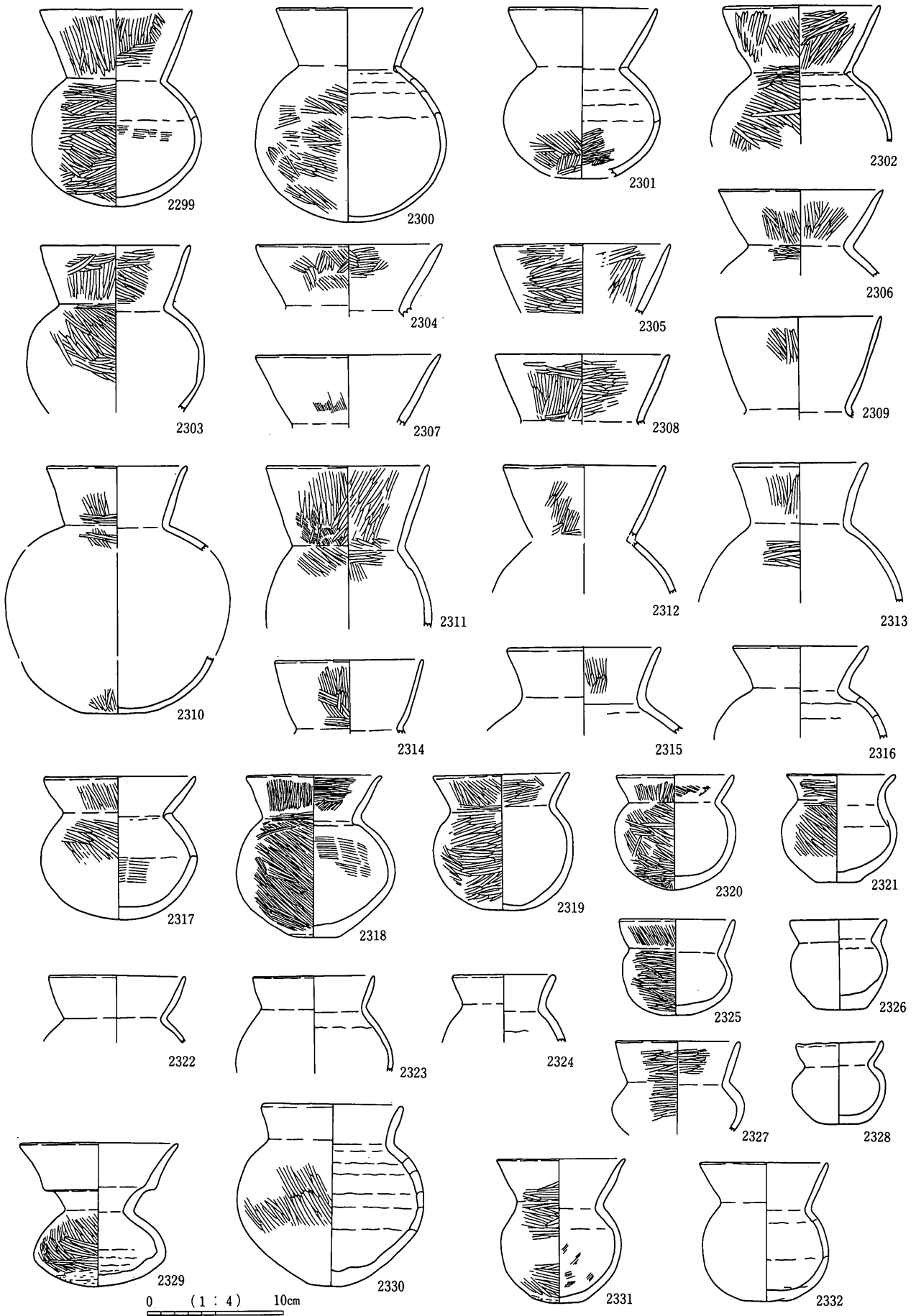


第311图 S D 1016出土土器11<2263~2278>

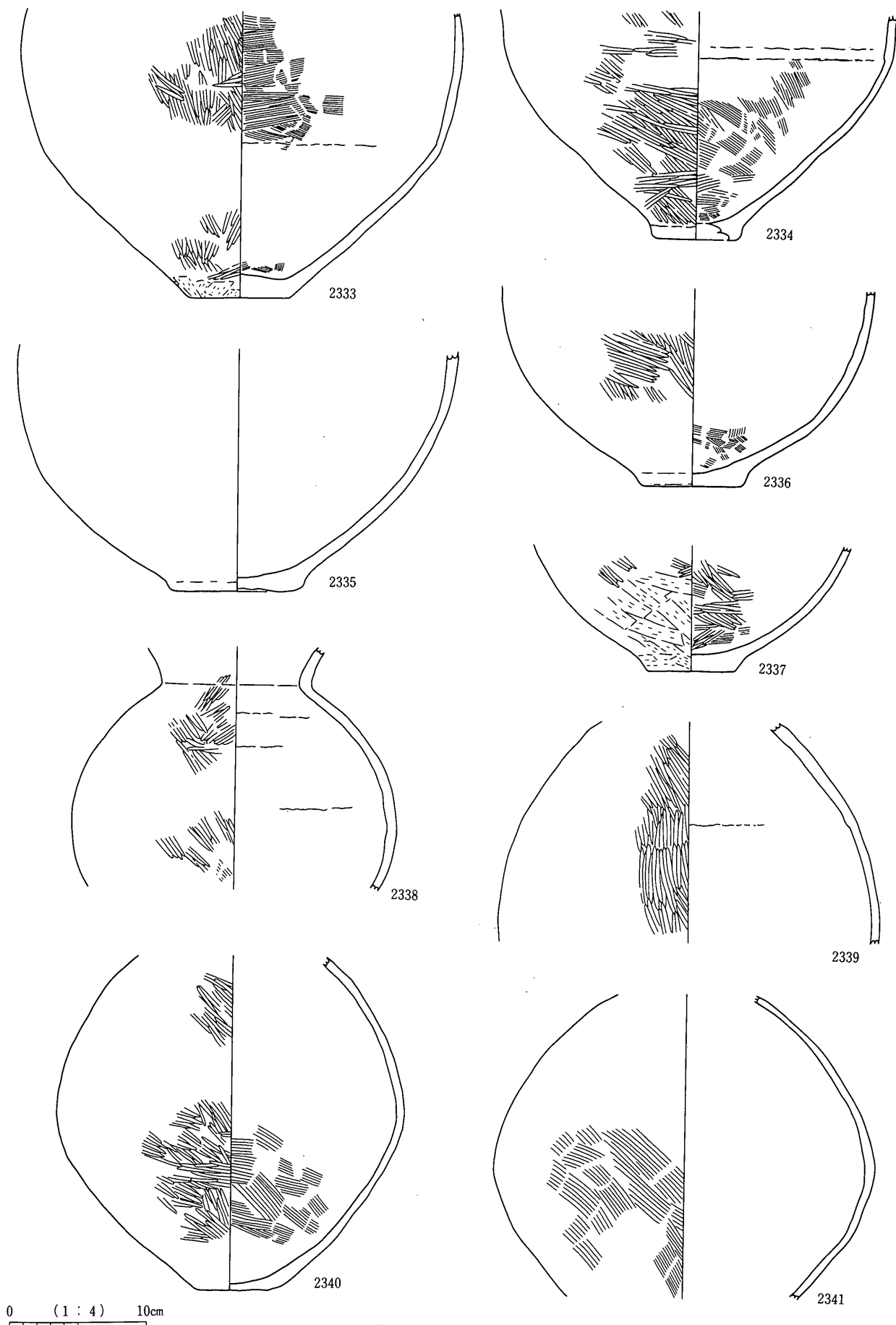


0 (1 : 4) 10cm

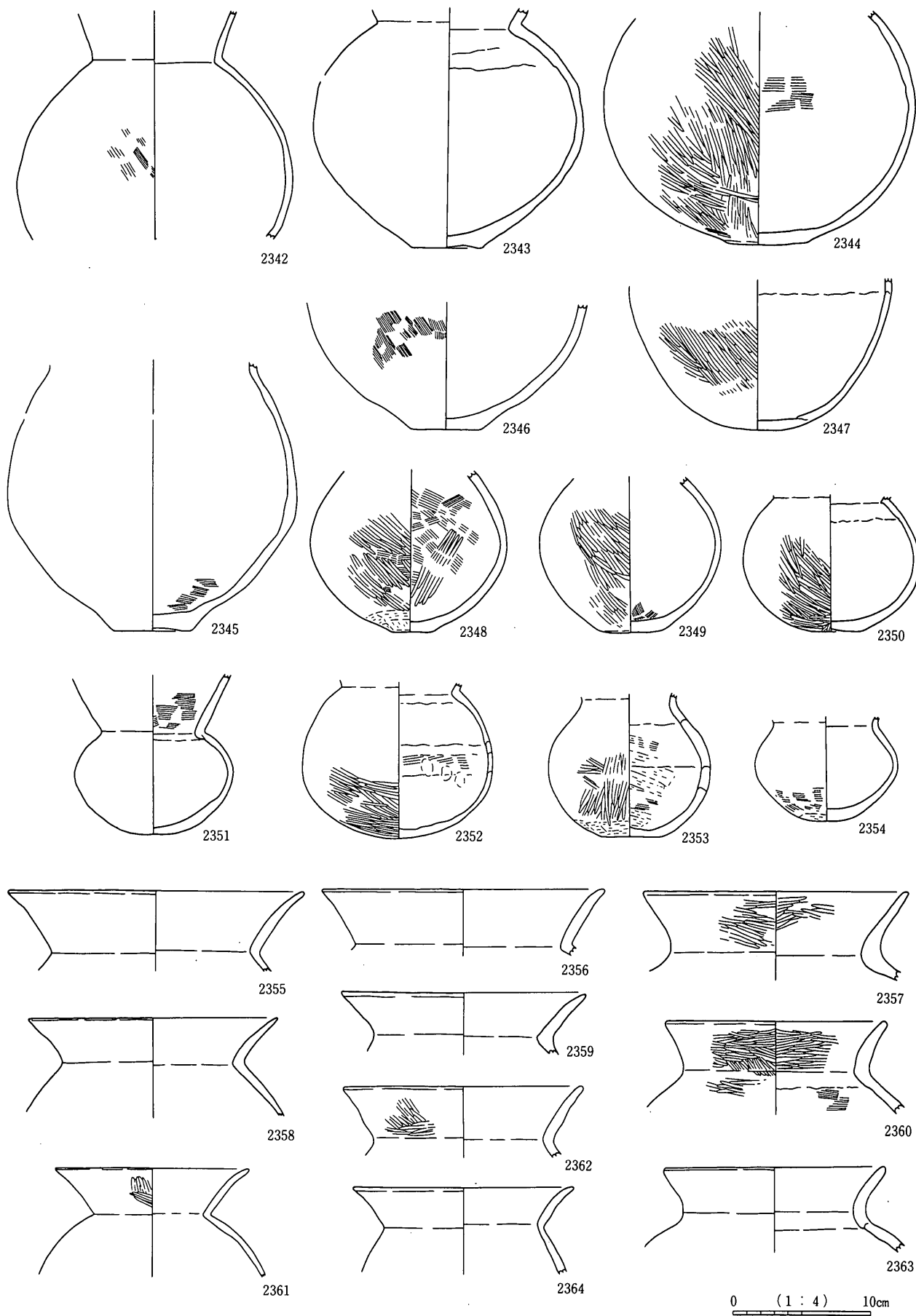
第312图 S D1016出土土器12<2279~2298>



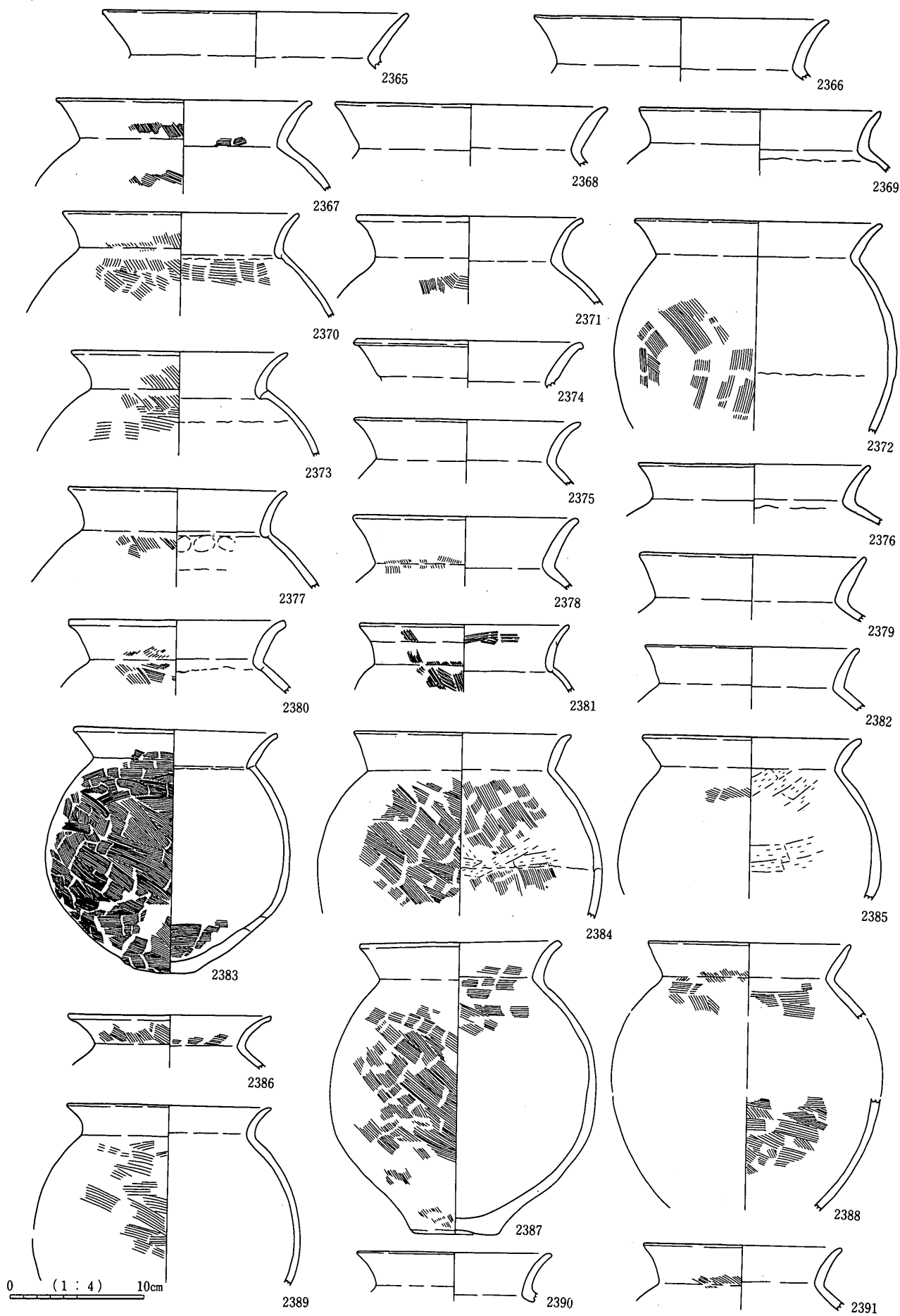
第313图 S D 1016出土土器13<2299~2332>



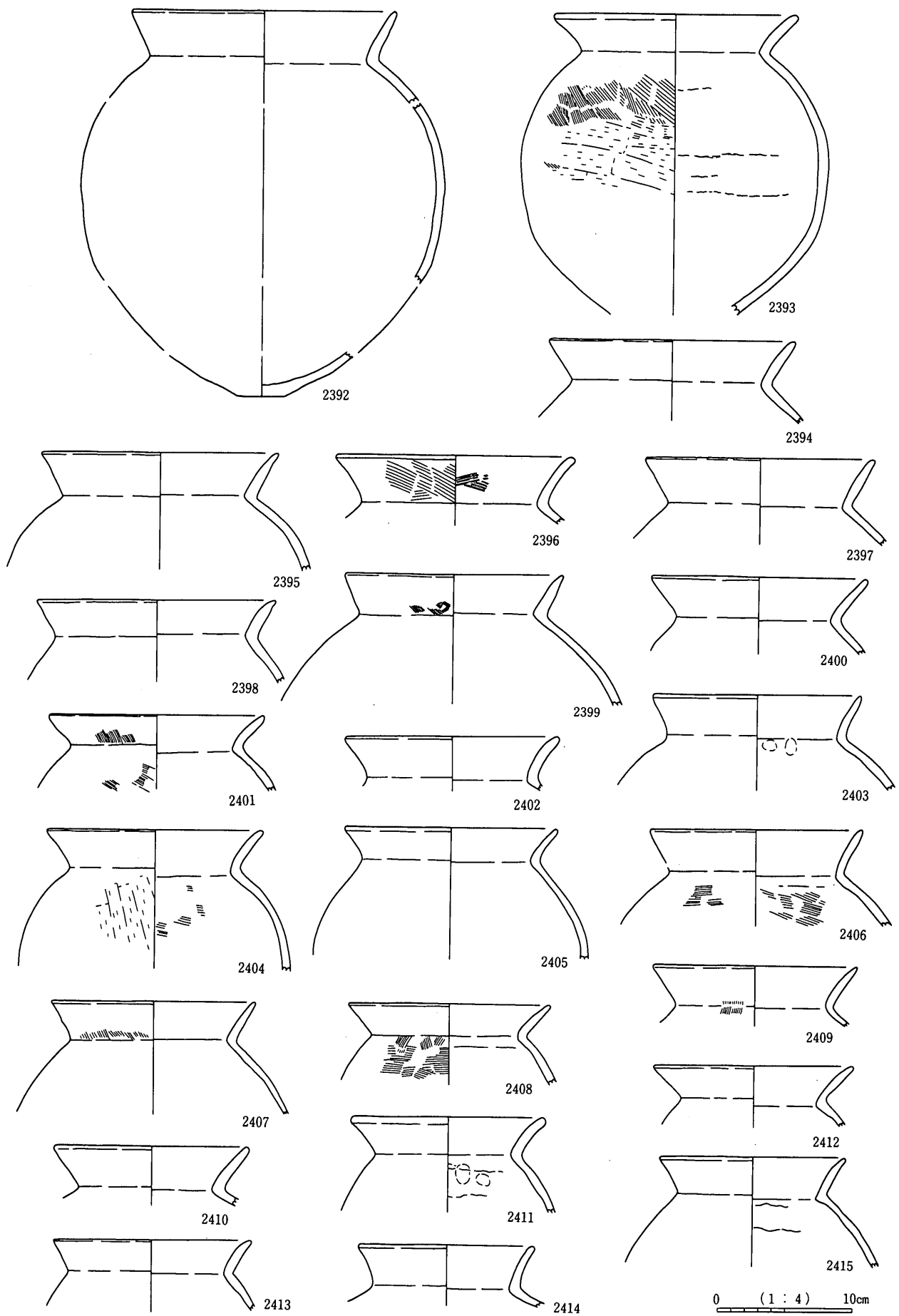
第314图 S D1016出土土器14<2333~2341>



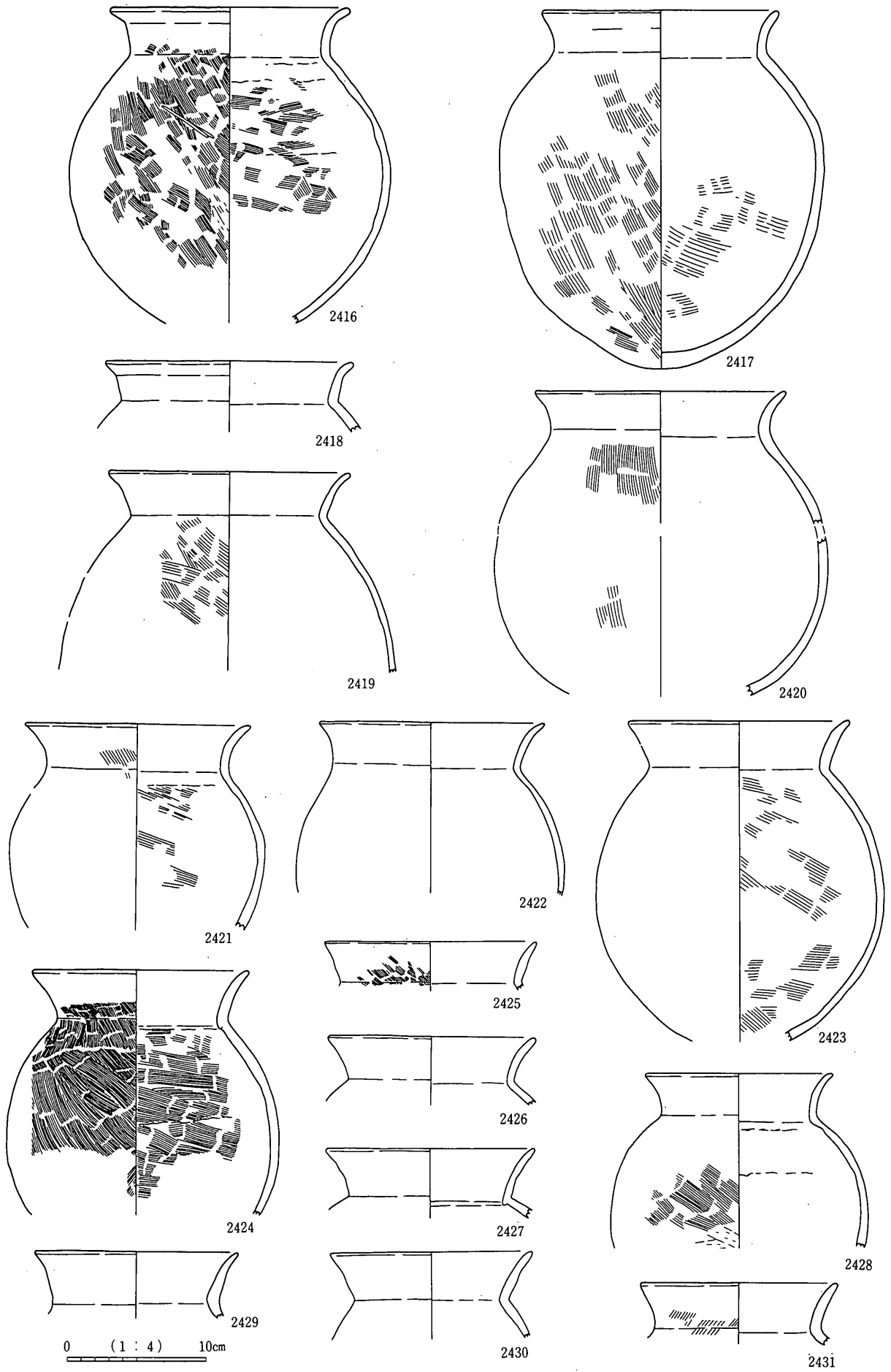
第315图 S D 1016出土土器15<2342~2364>



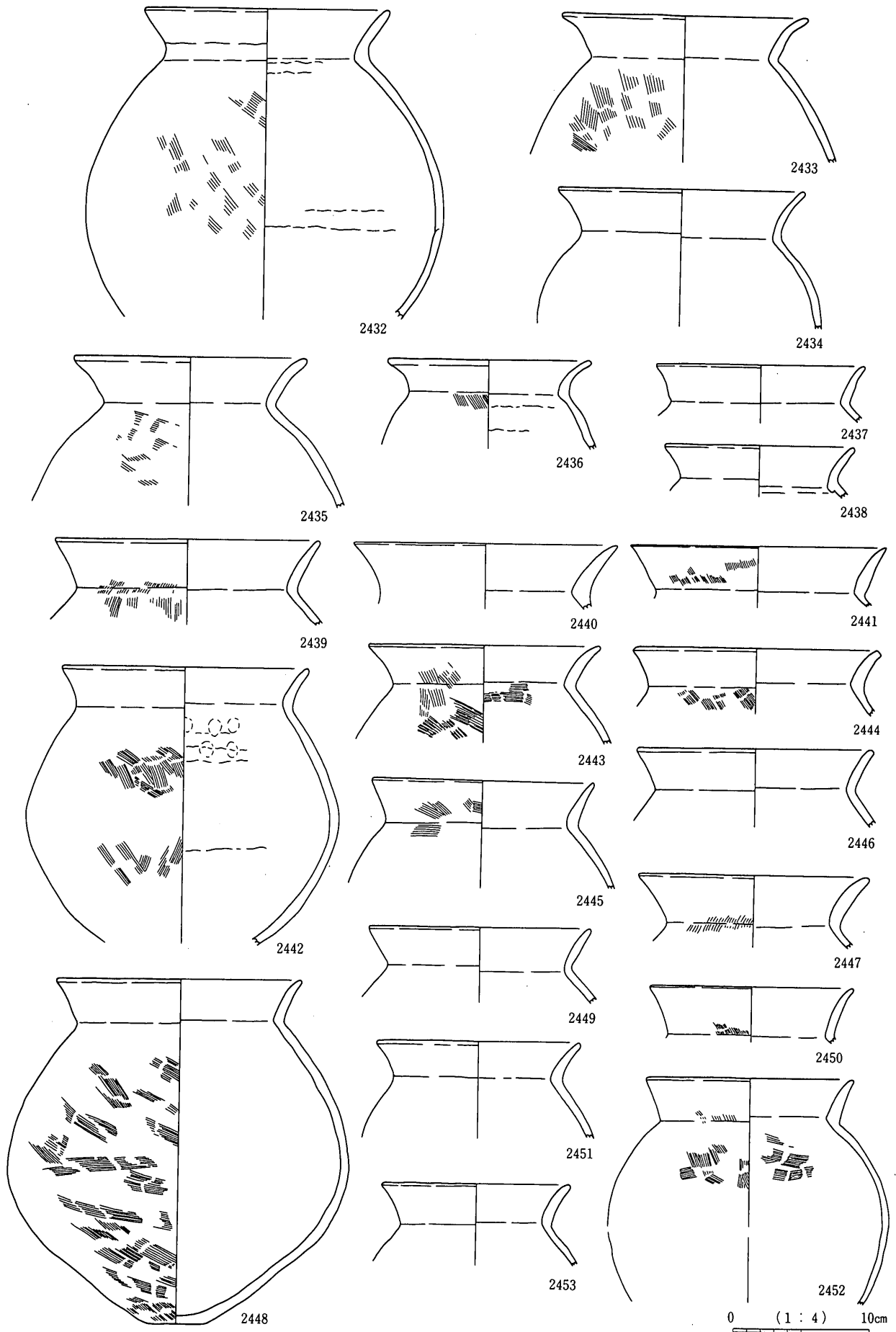
第316图 S D1016出土土器16<2365~2391>



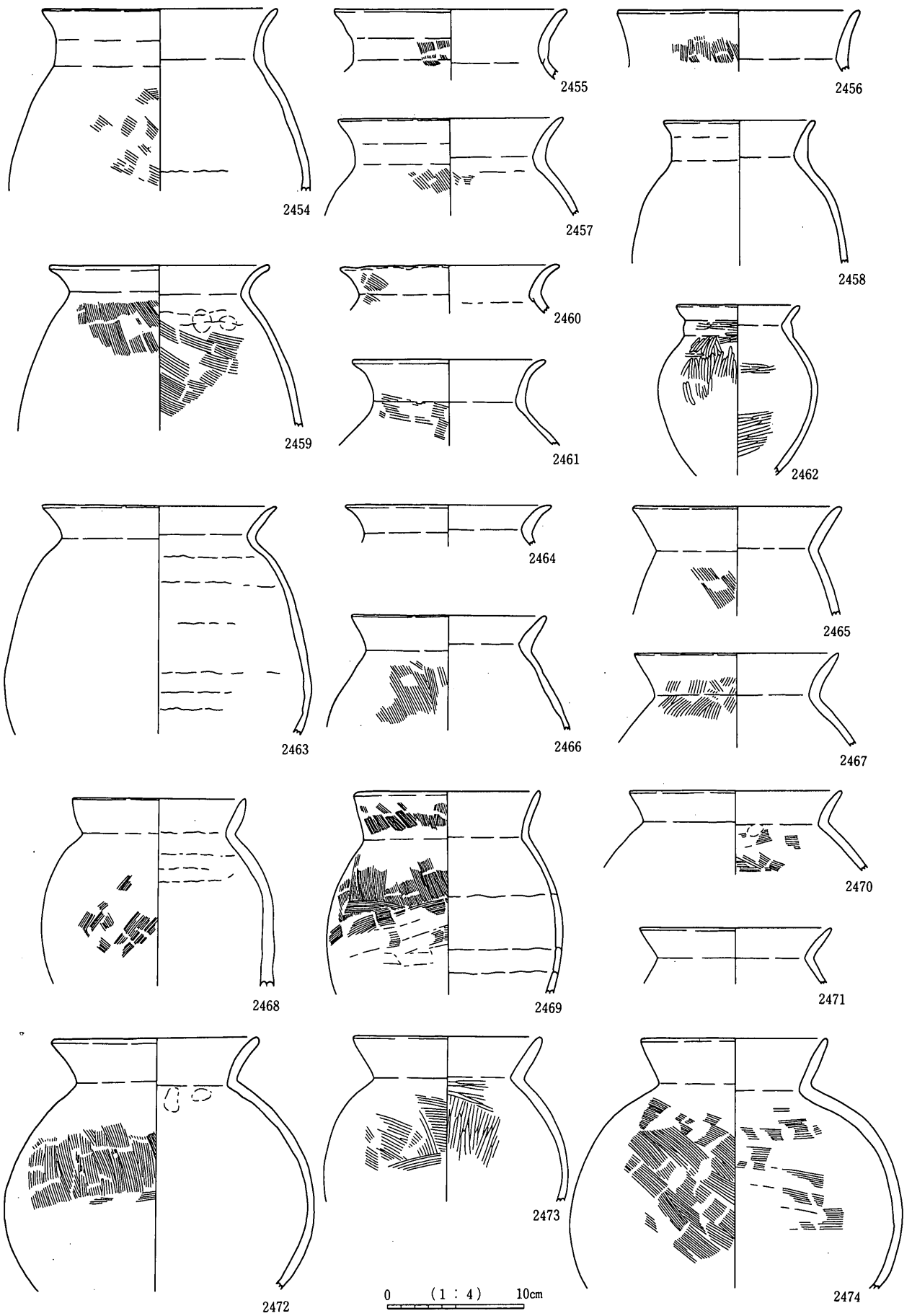
第317图 S D1016出土土器17<2392~2415>



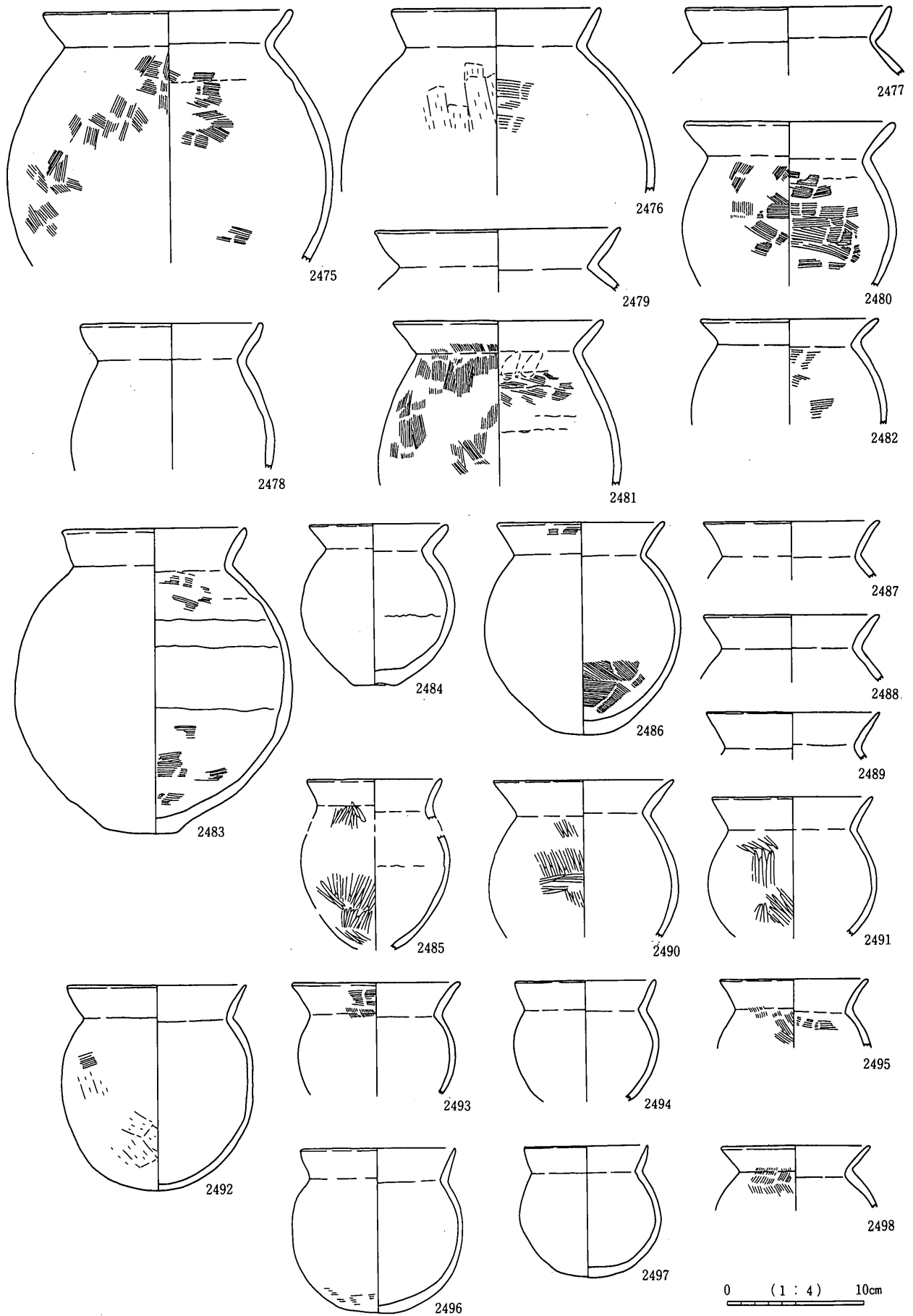
第318图 S D1016出土土器18<2416~2431>



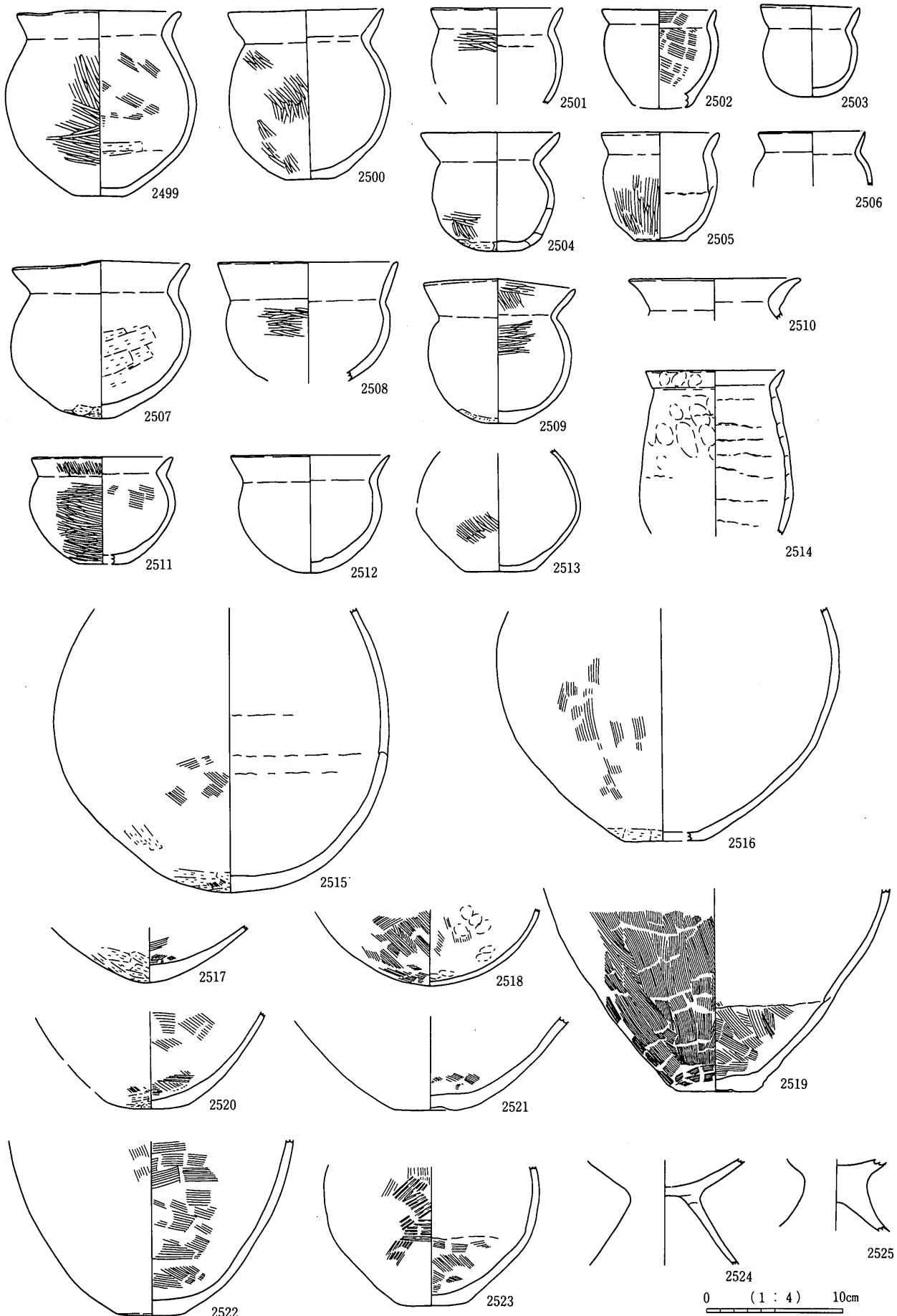
第319图 S D1016出土土器19<2432~2453>



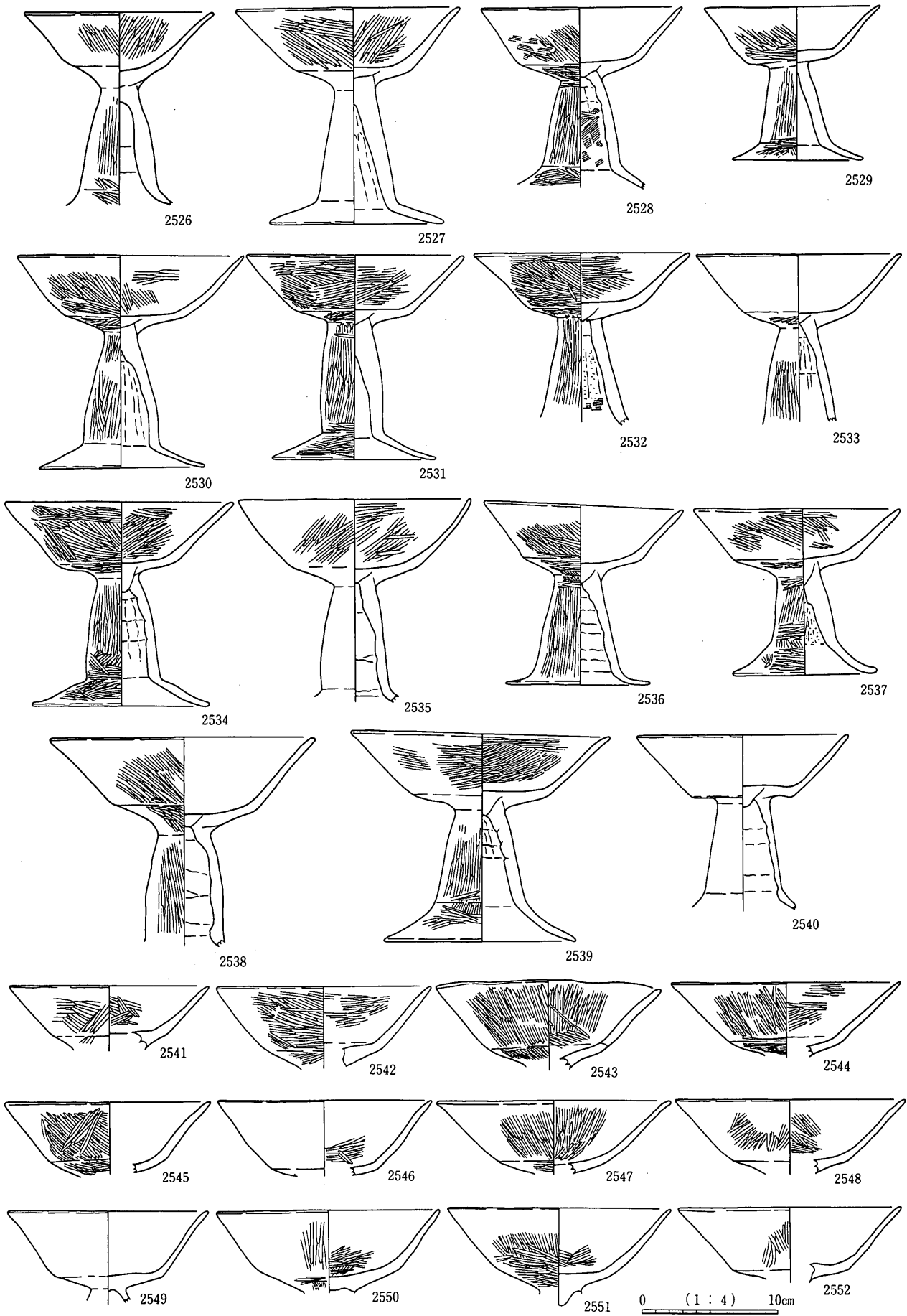
第320图 S D 1016出土土器20<2454~2474>



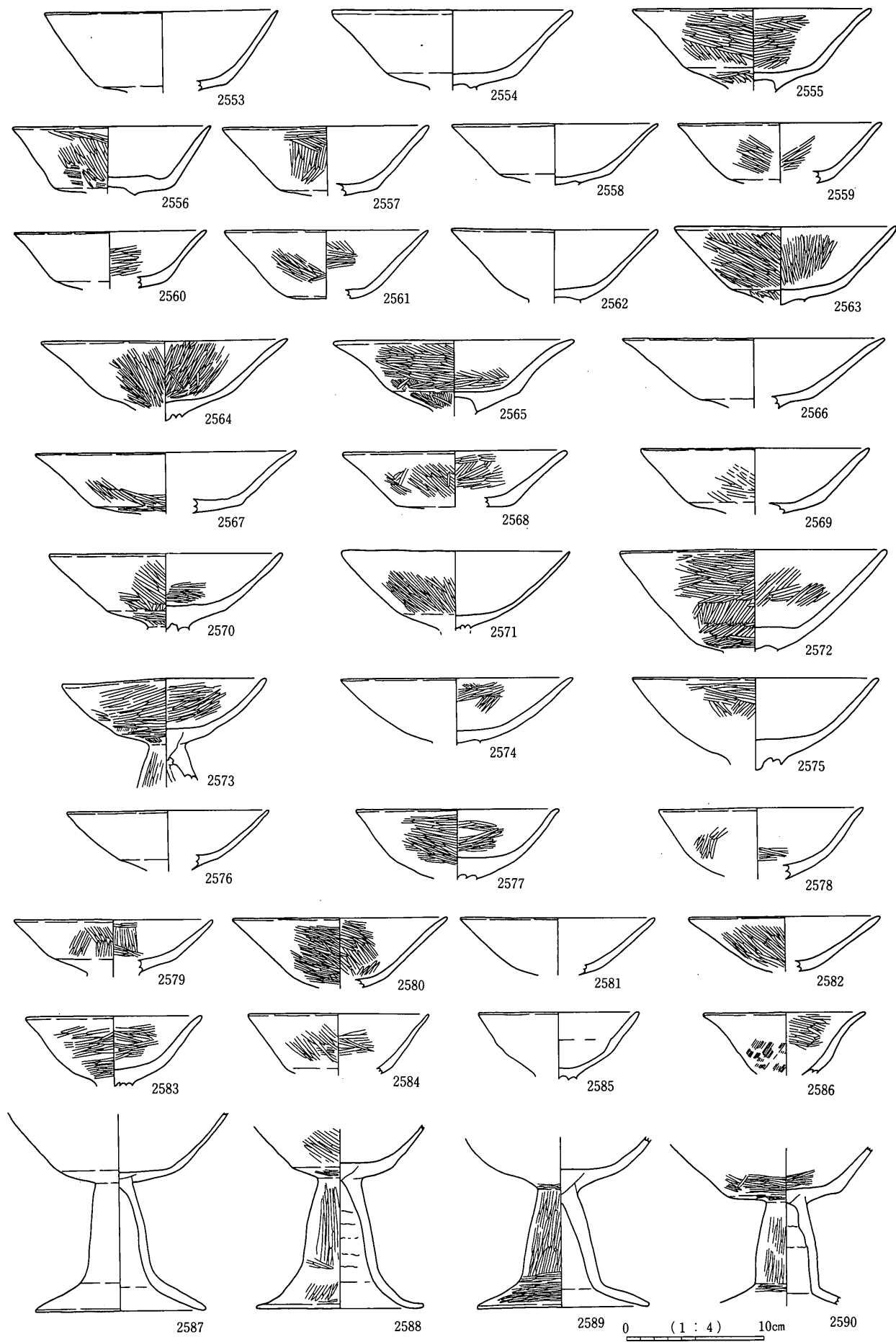
第321图 S D 1016出土土器21<2475~2498>



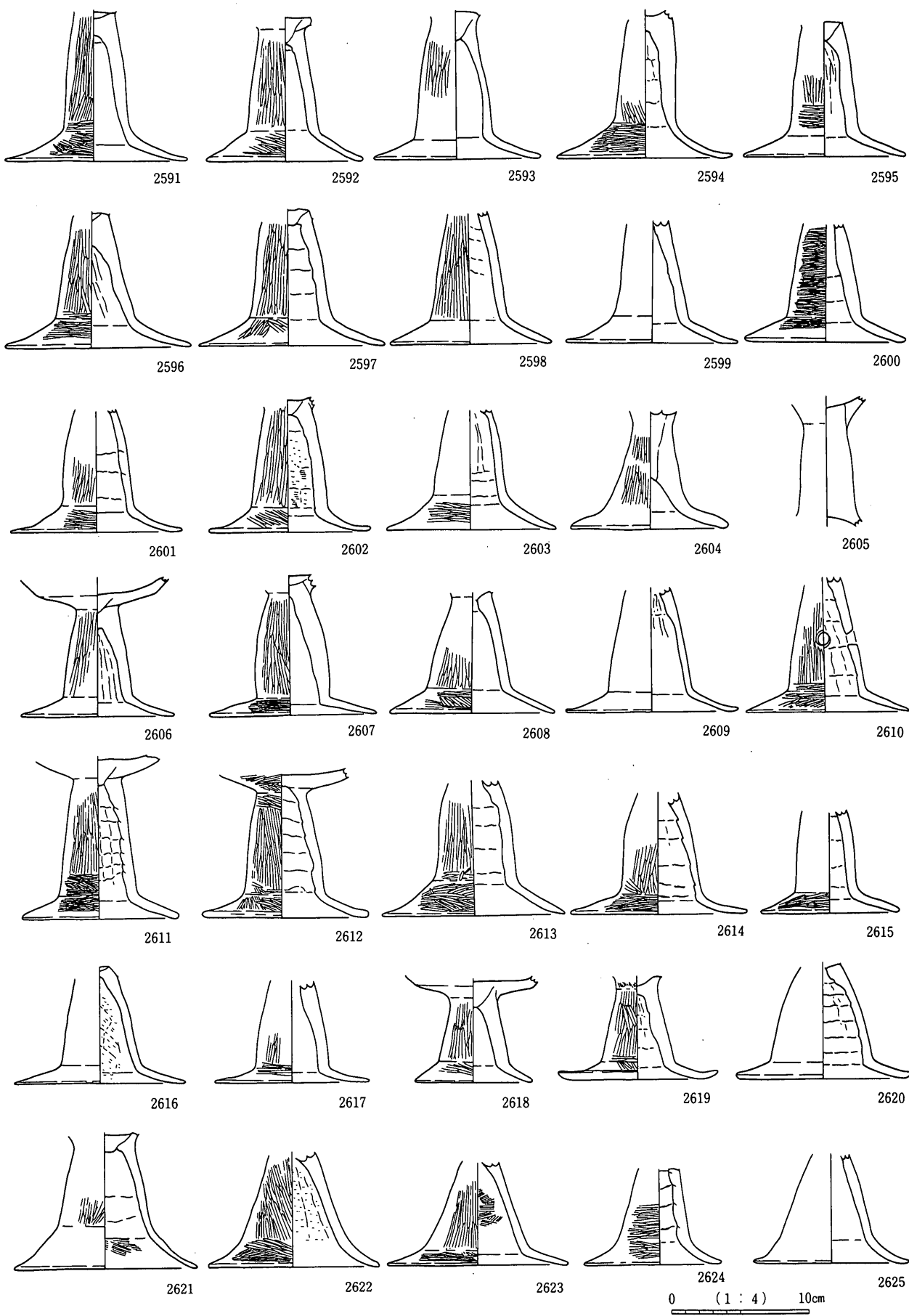
第322图 S D 1016出土土器22<2499~2525>



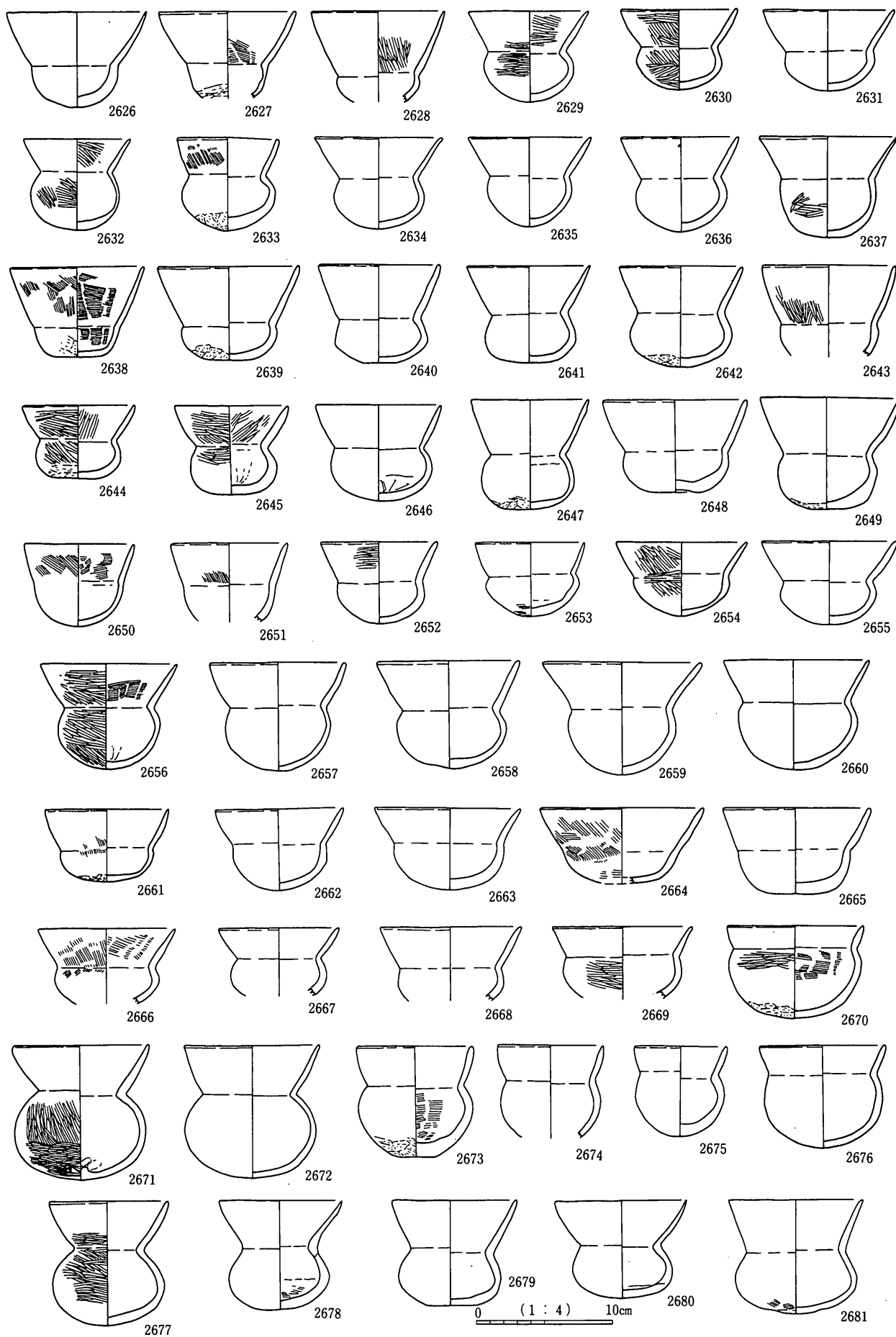
第323图 S D1016出土土器23<2526~2552>



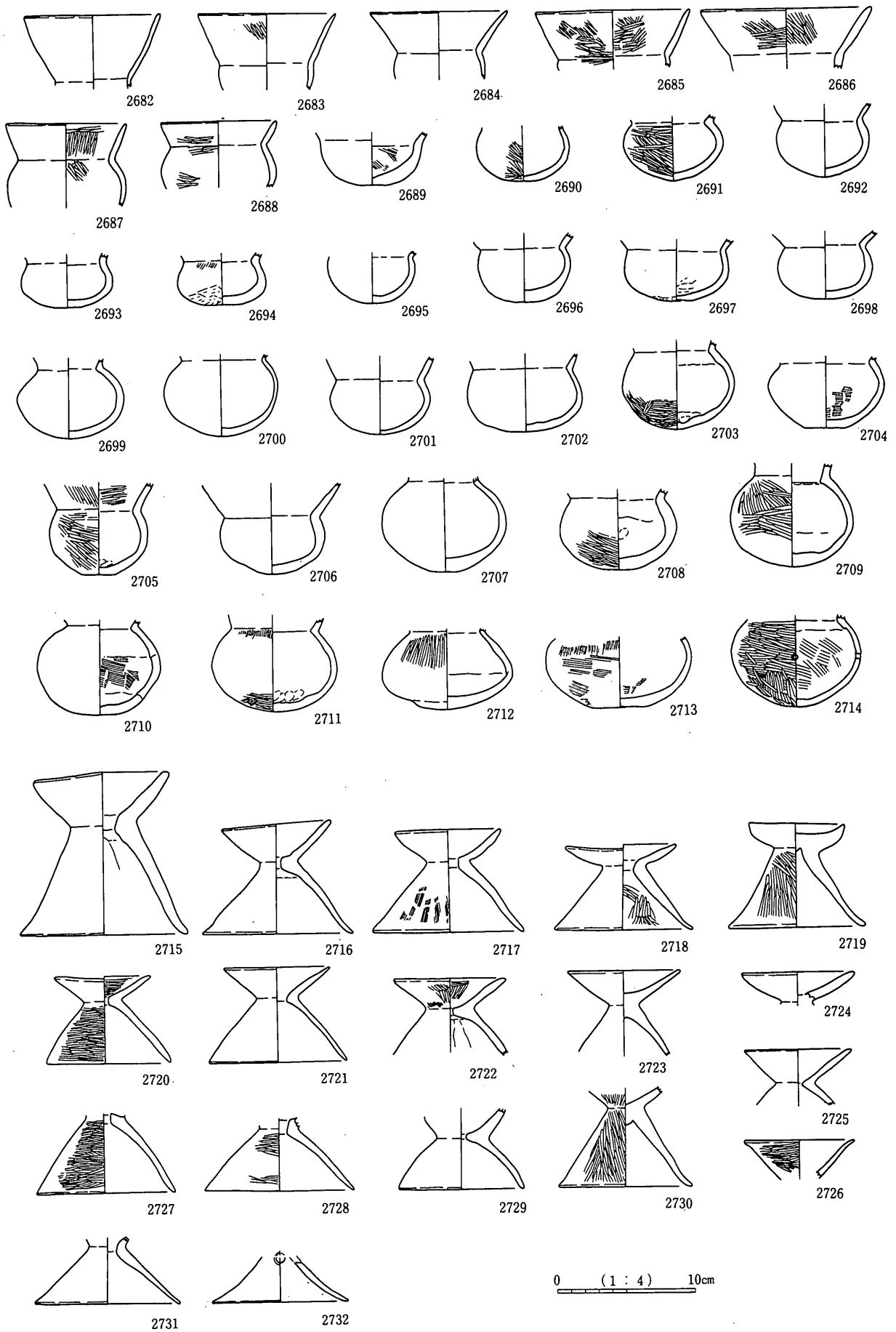
第324图 S D1016出土土器24<2553~2590>



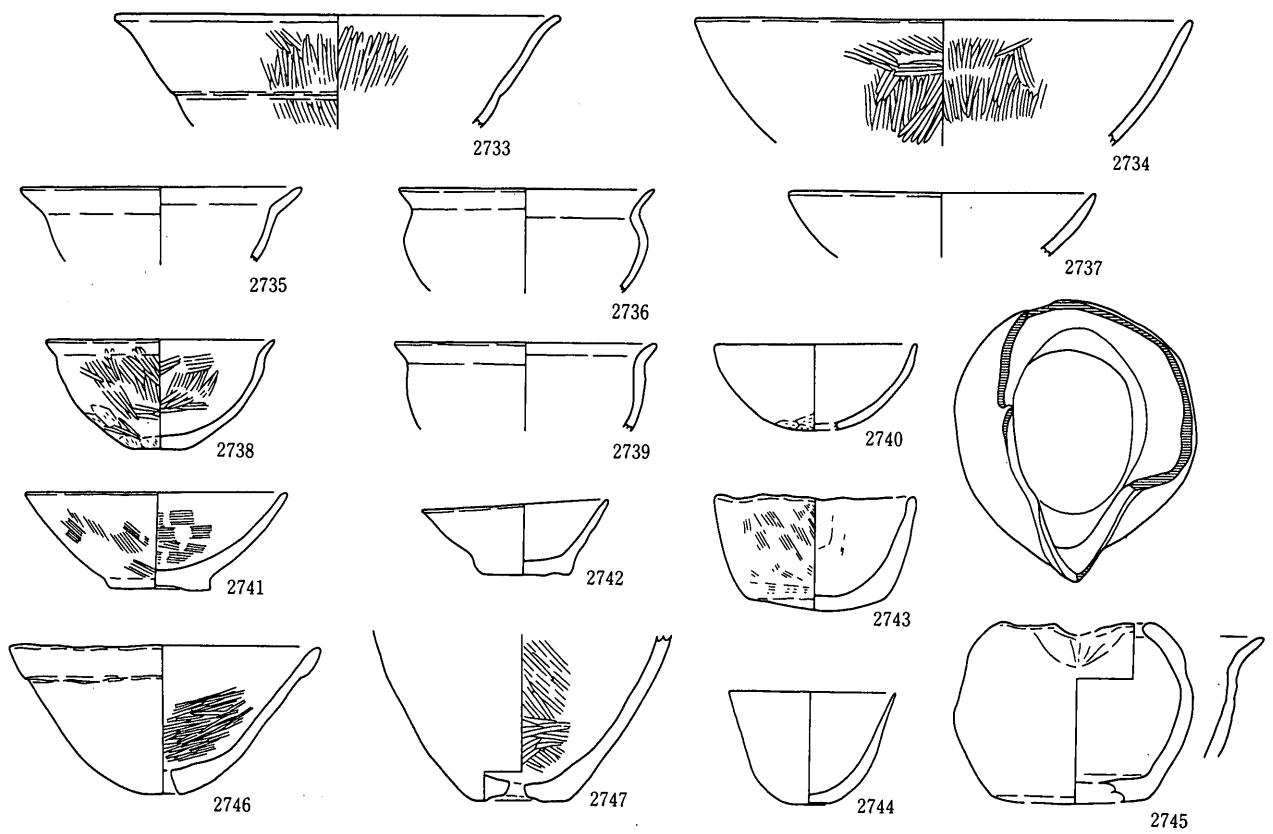
第325图 S D 1016出土土器25<2591~2625>



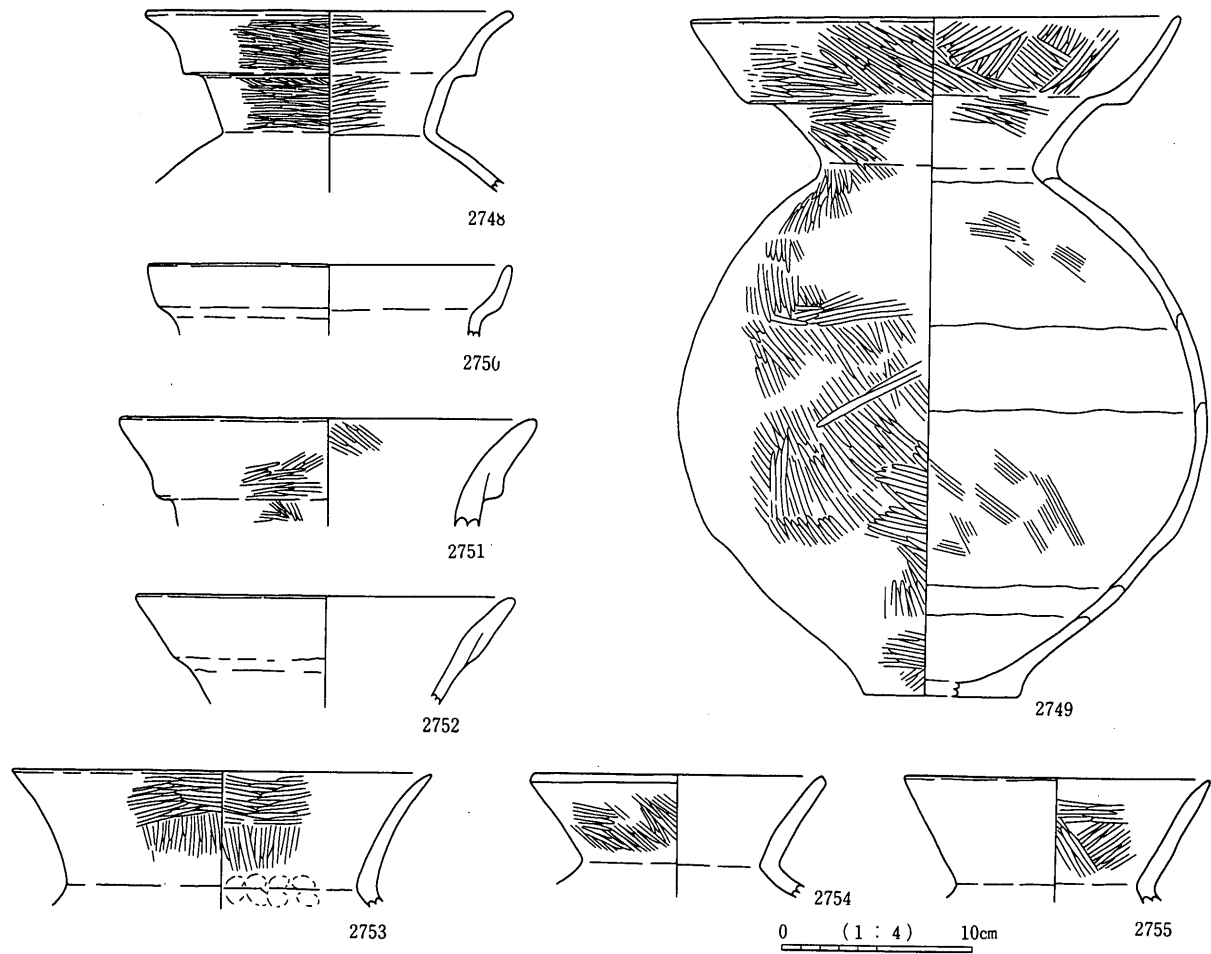
第326图 S D 1016出土土器26<2626~2681>



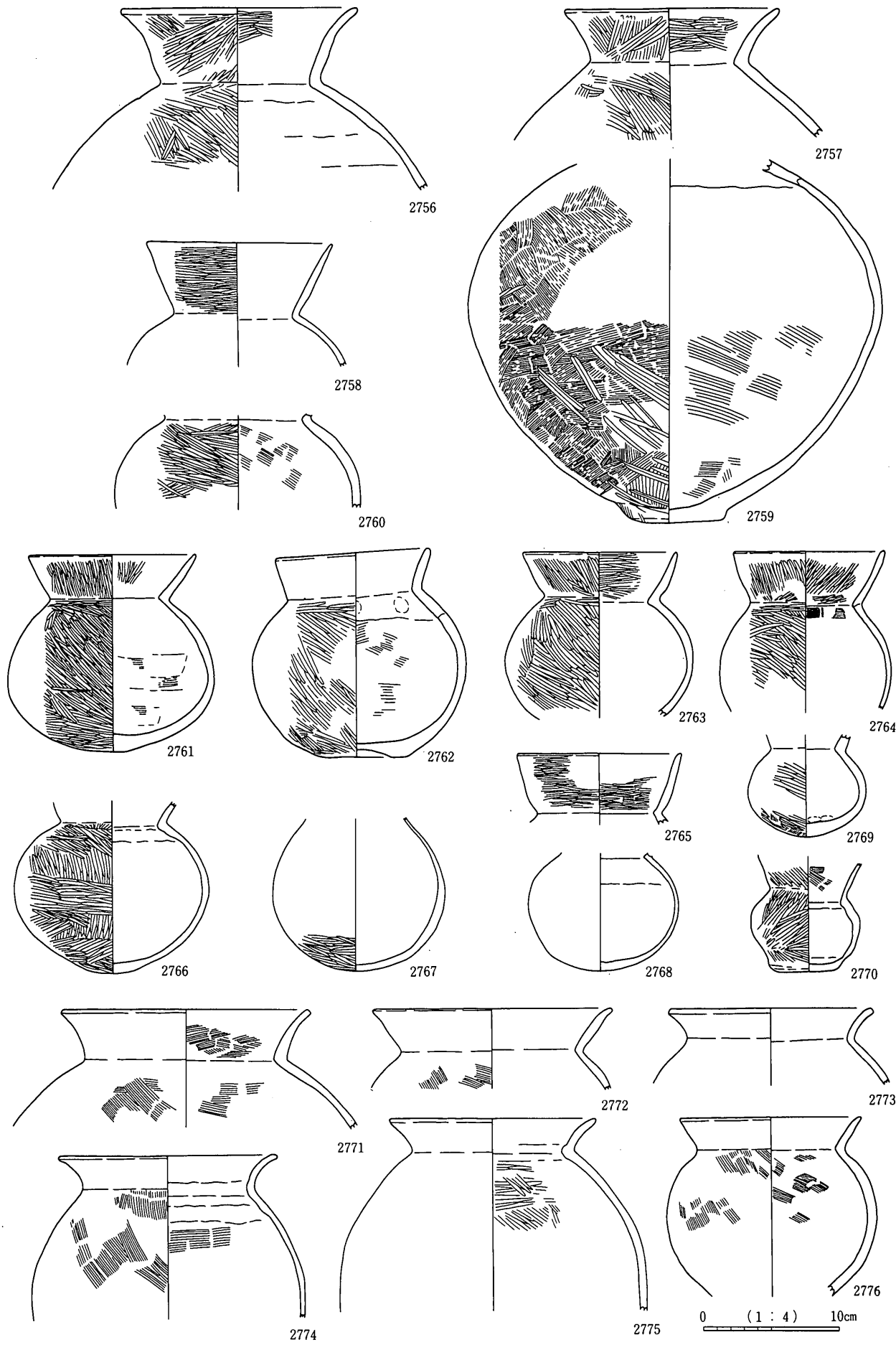
第327图 S D 1016出土土器27<2682~2732>



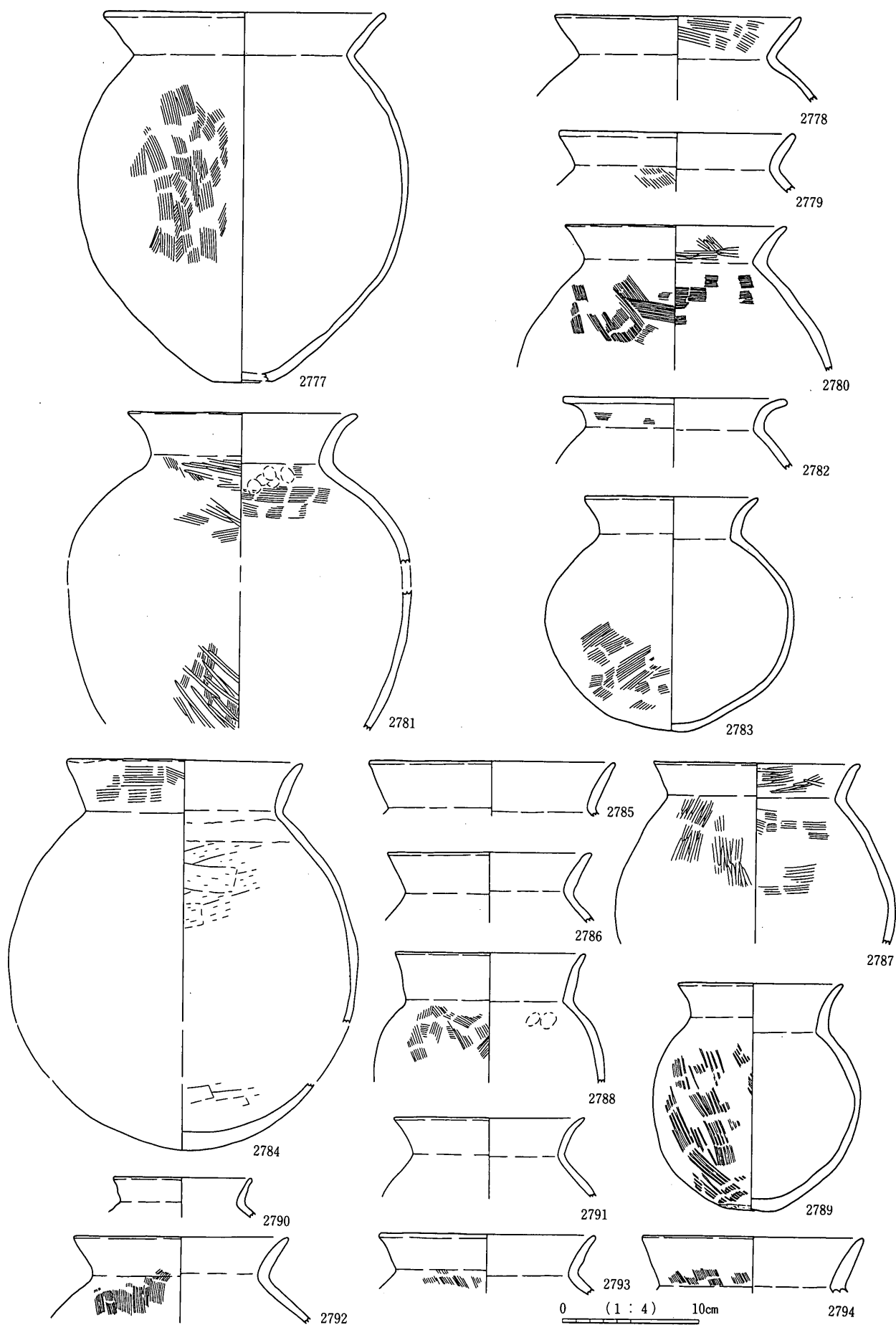
①-1区



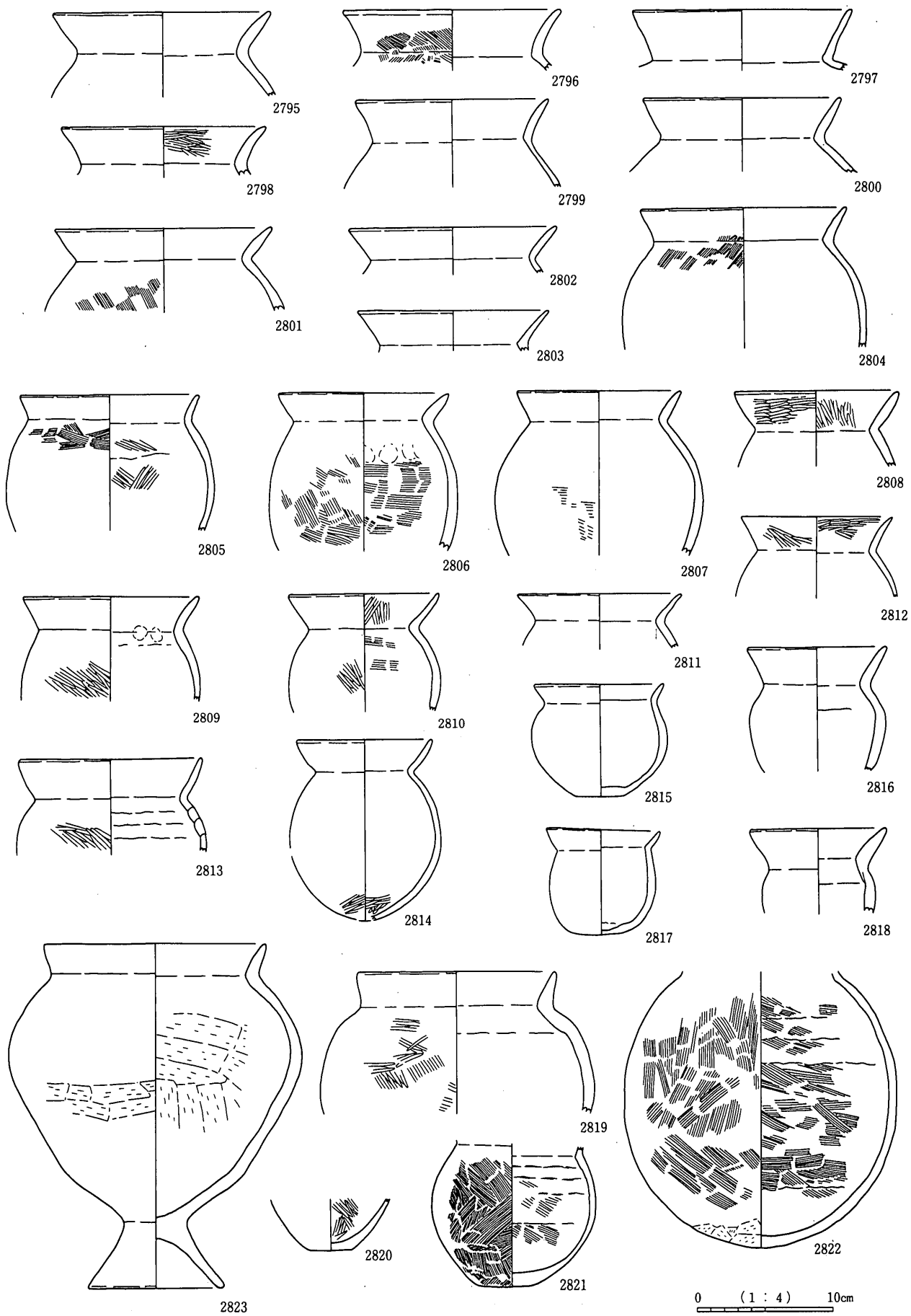
第328图 S D1016出土土器28<2733~2755>



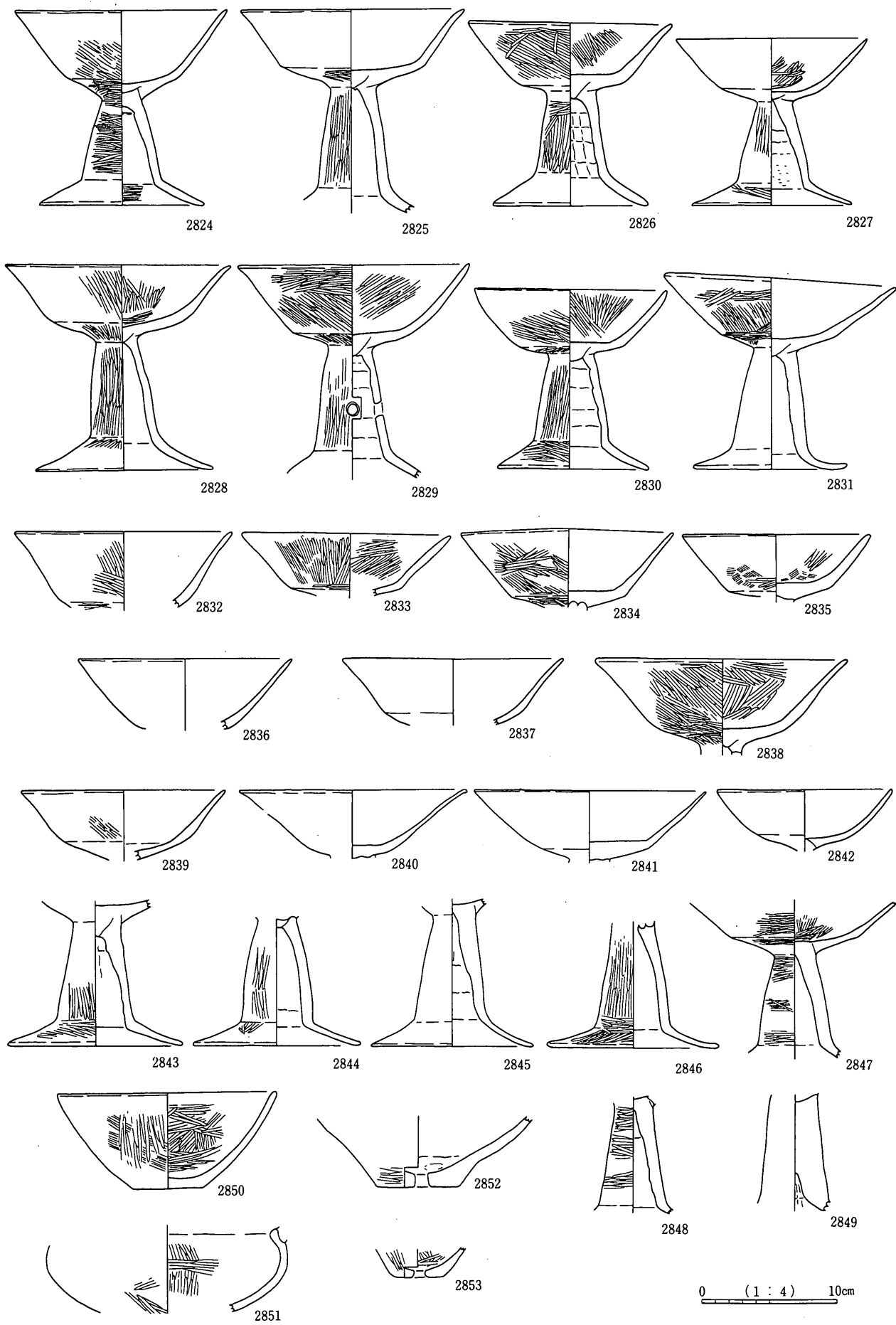
第329图 S D 1016出土土器29<2756~2776>



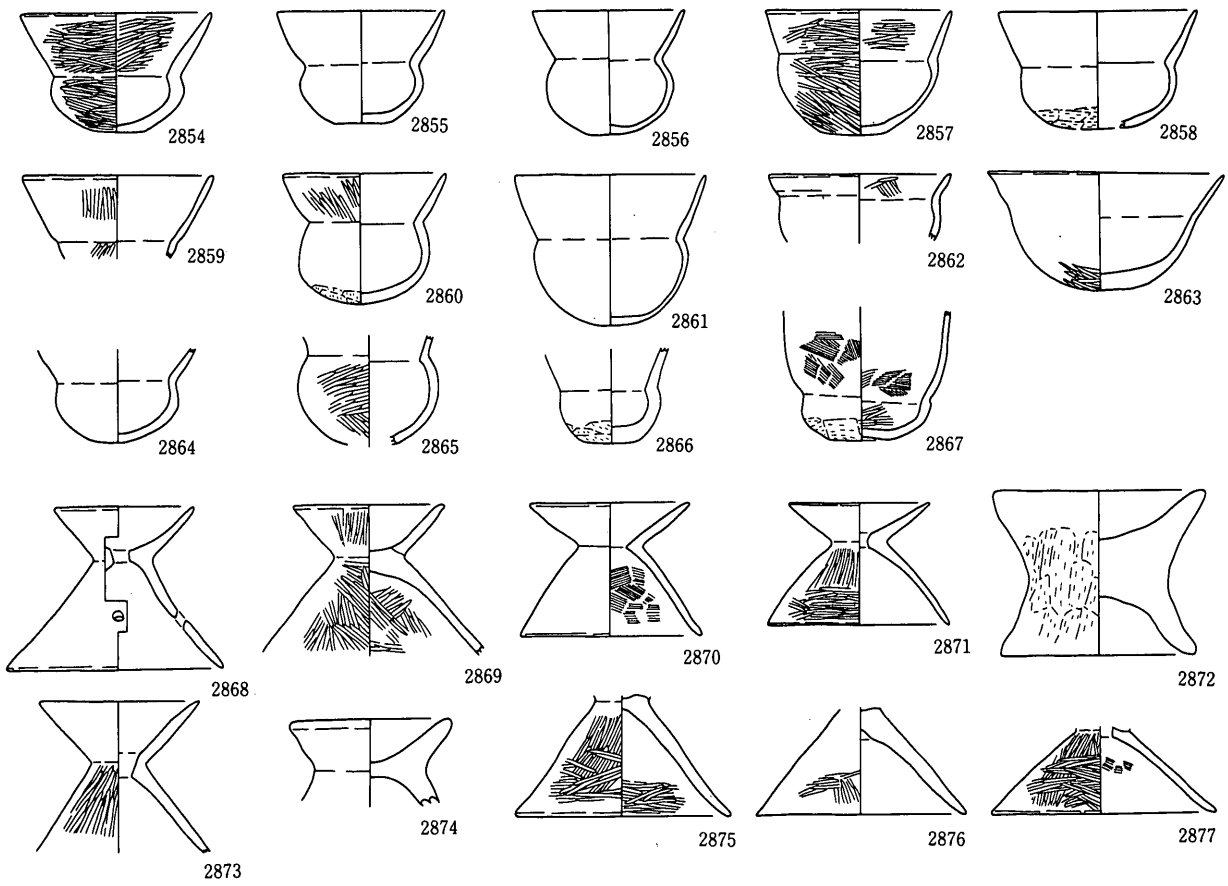
第330图 S D 1016出土土器30<2777~2794>



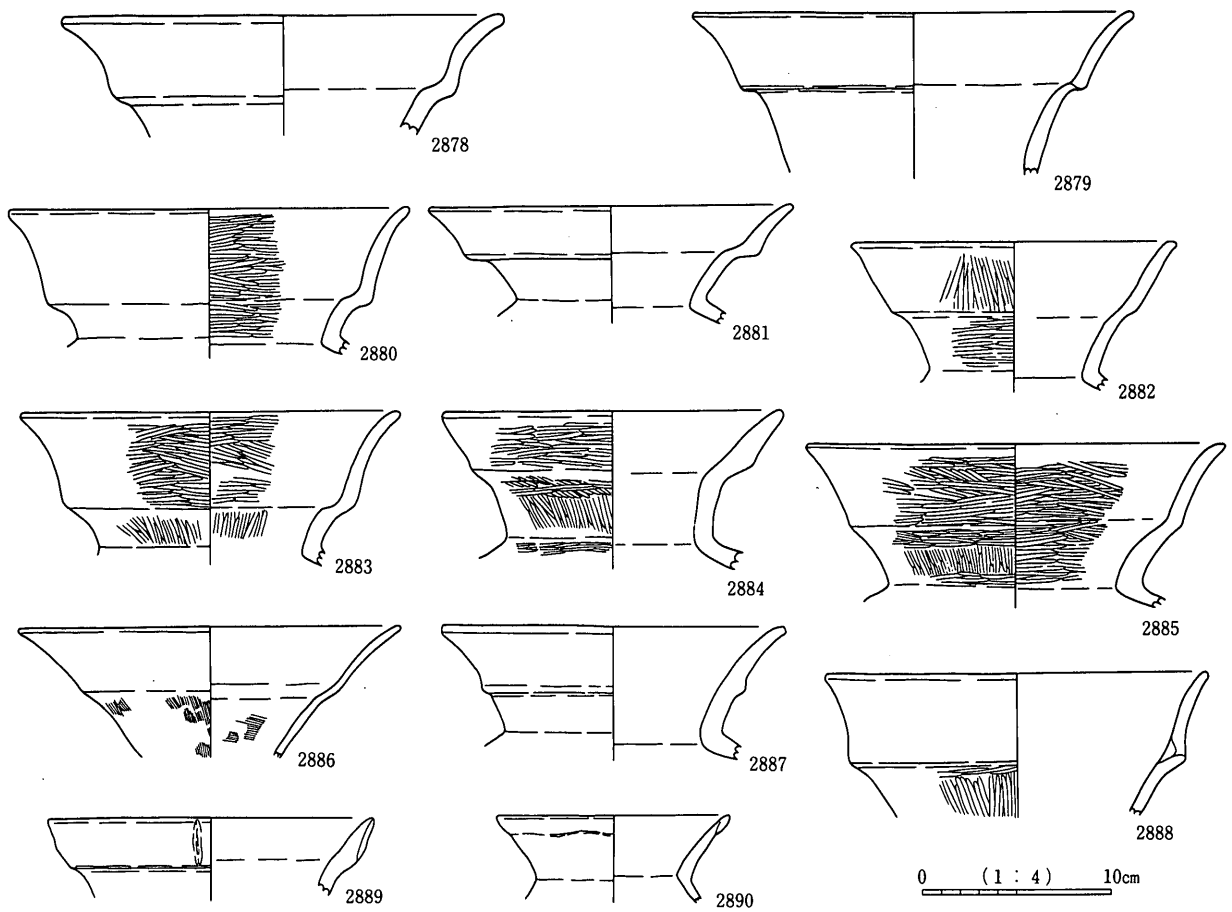
第331图 S D1016出土土器31<2795~2823>



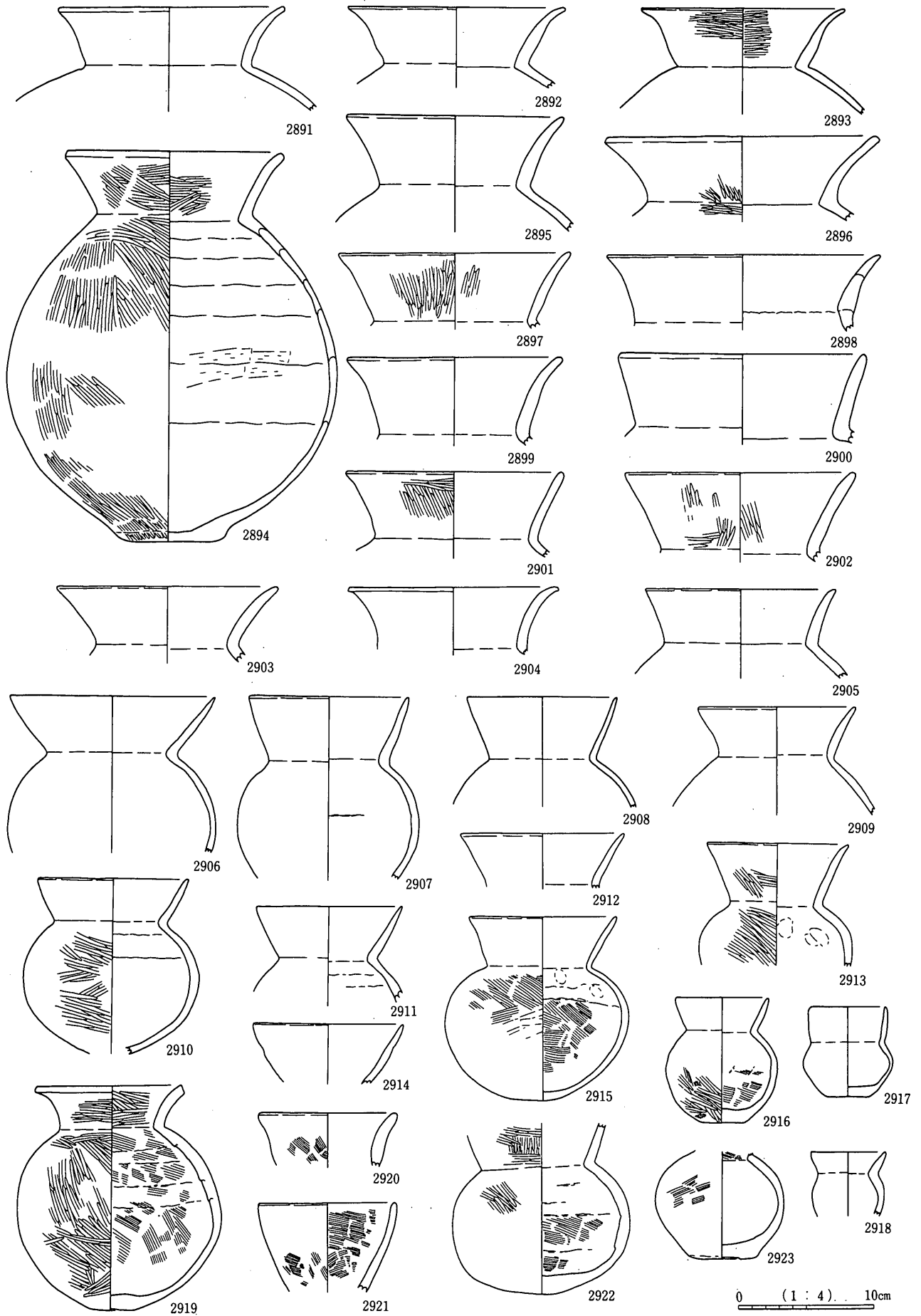
第332图 S D 1016出土土器32<2824~2853>



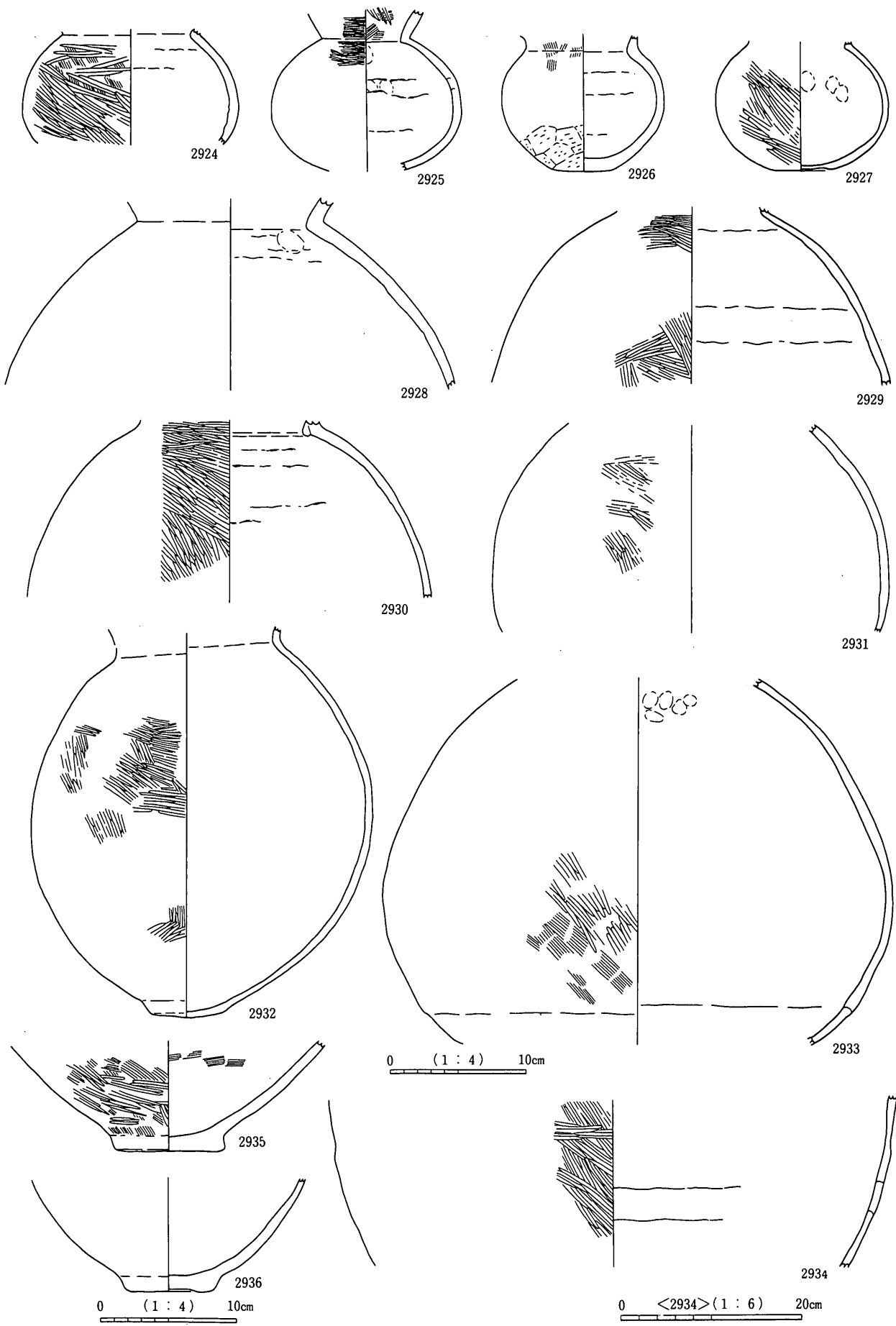
①区



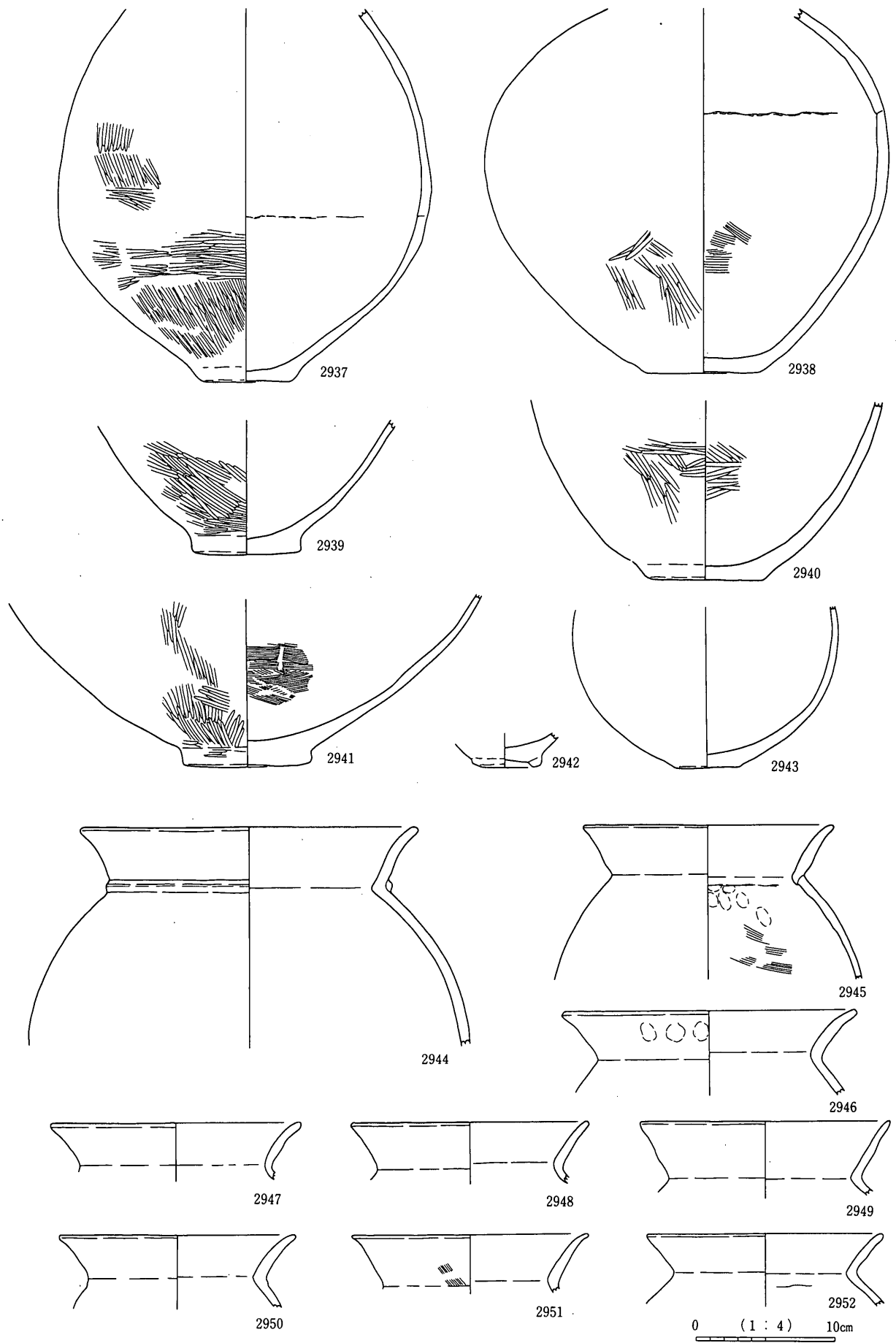
第333图 S D 1016出土土器33<2854~2890>



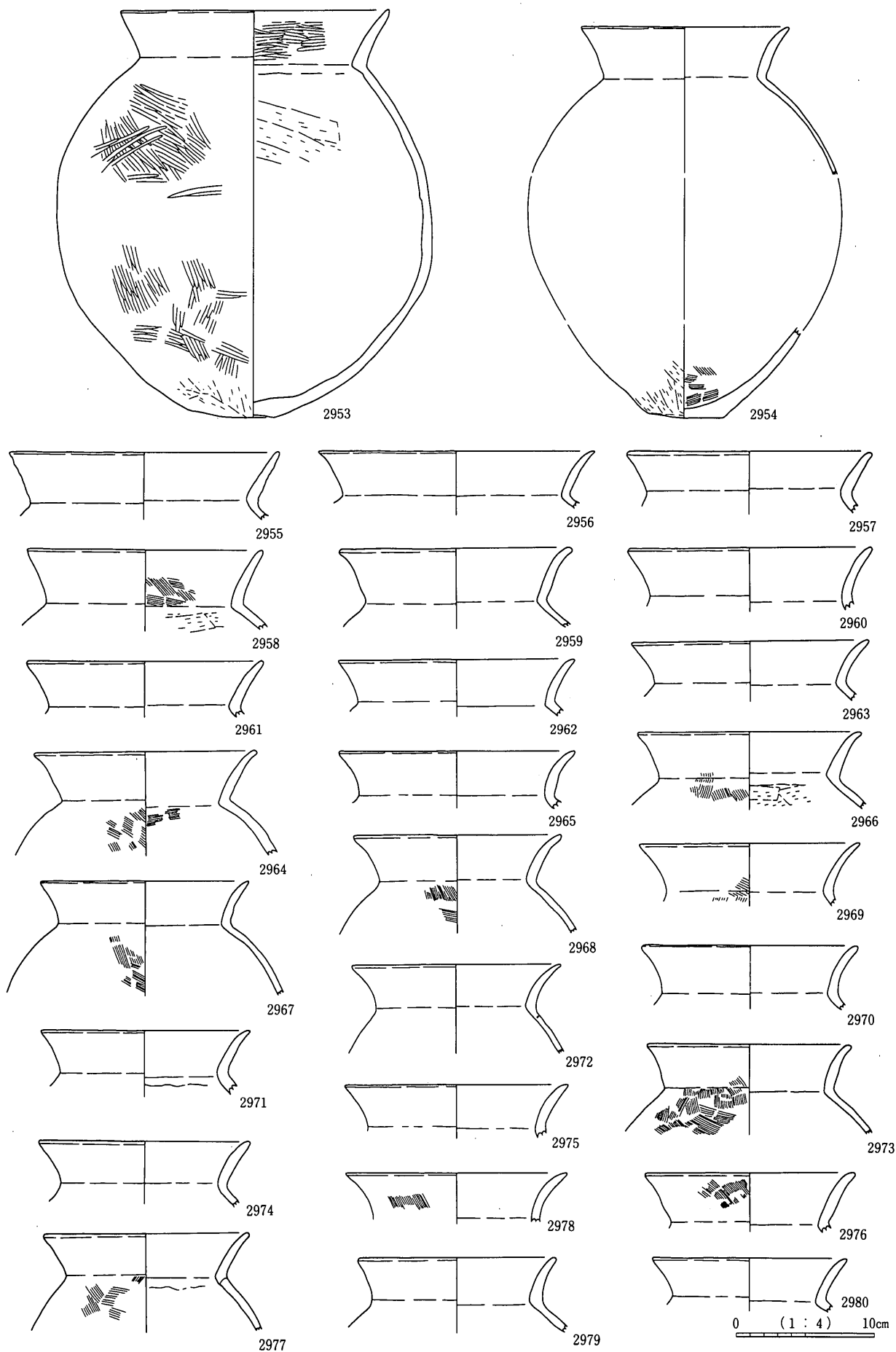
第334图 S D1016出土土器34<2891~2923>



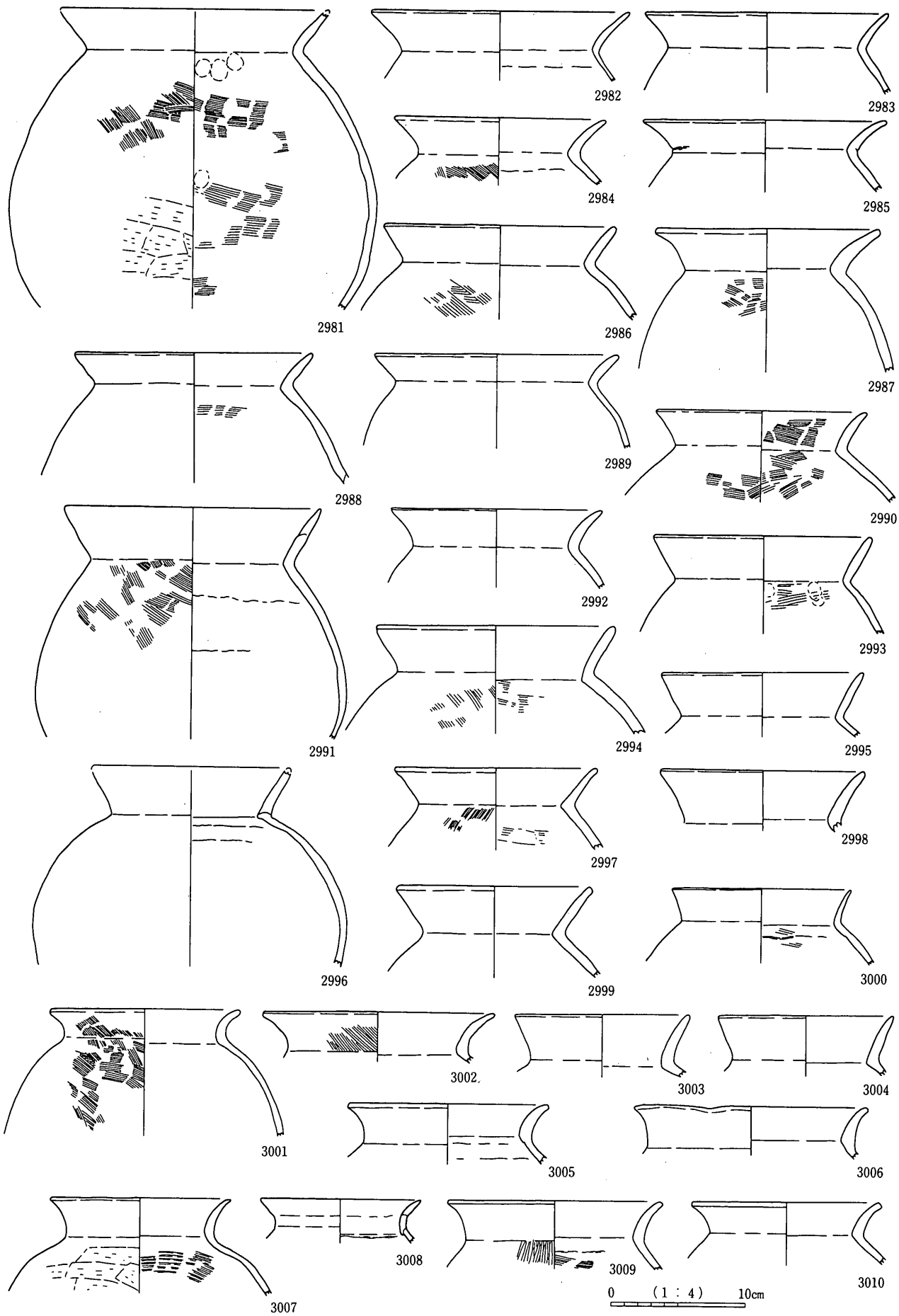
第335图 S D 1016出土土器35<2924~2936>



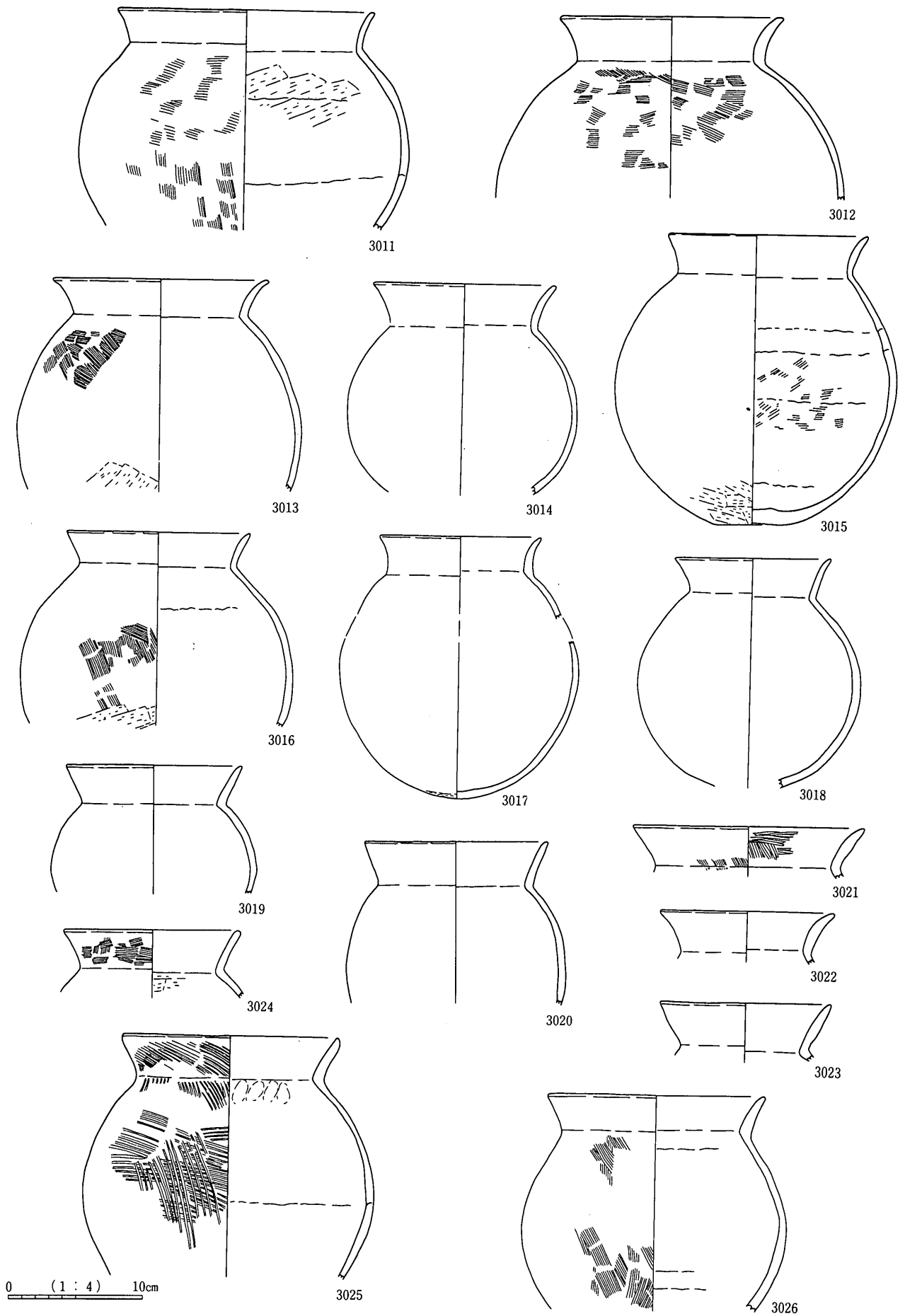
第336图 S D 1016出土土器36<2937~2952>



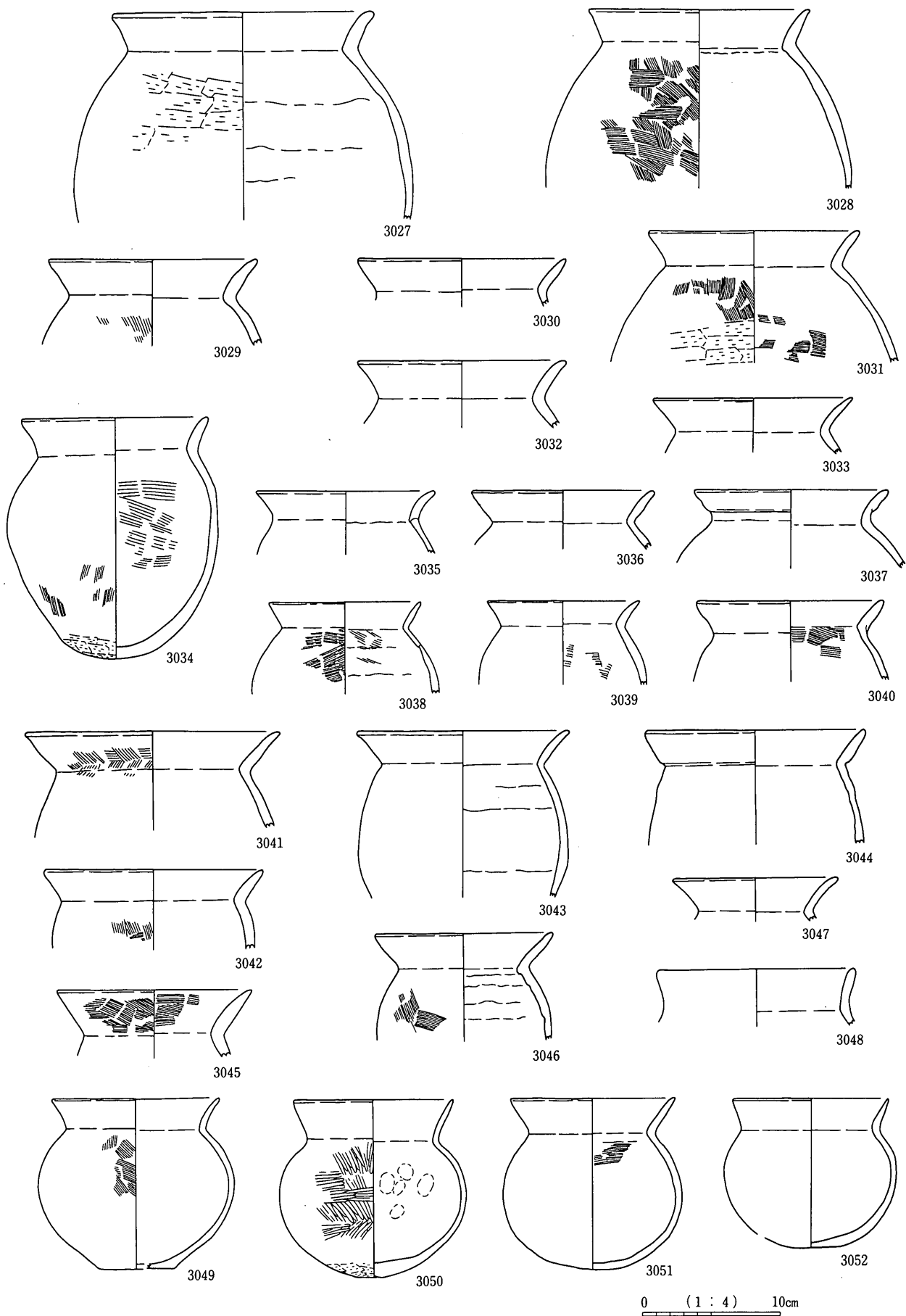
第337图 S D1016出土土器37<2953~2980>



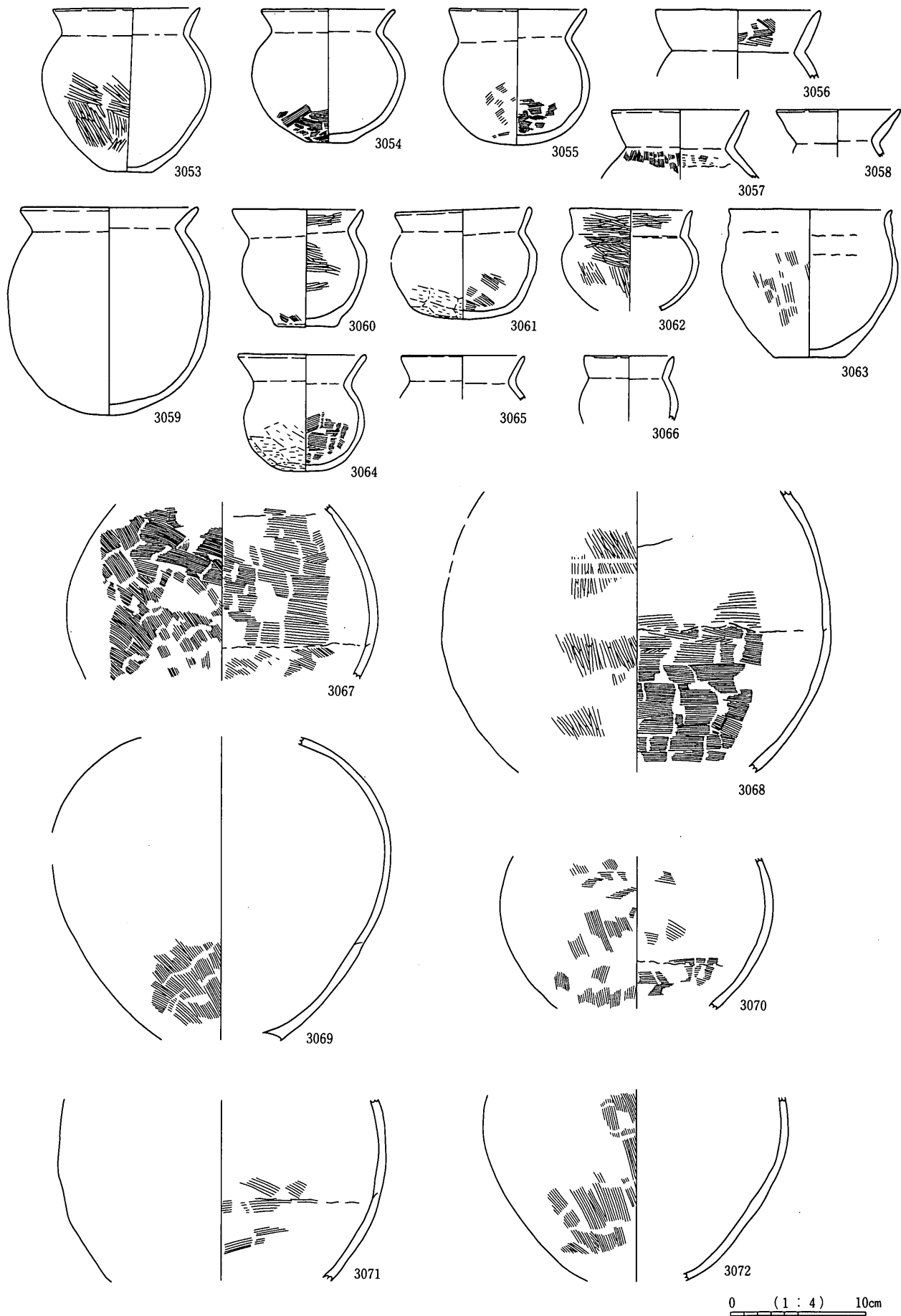
第338图 S D 1016出土土器38<2981~3010>



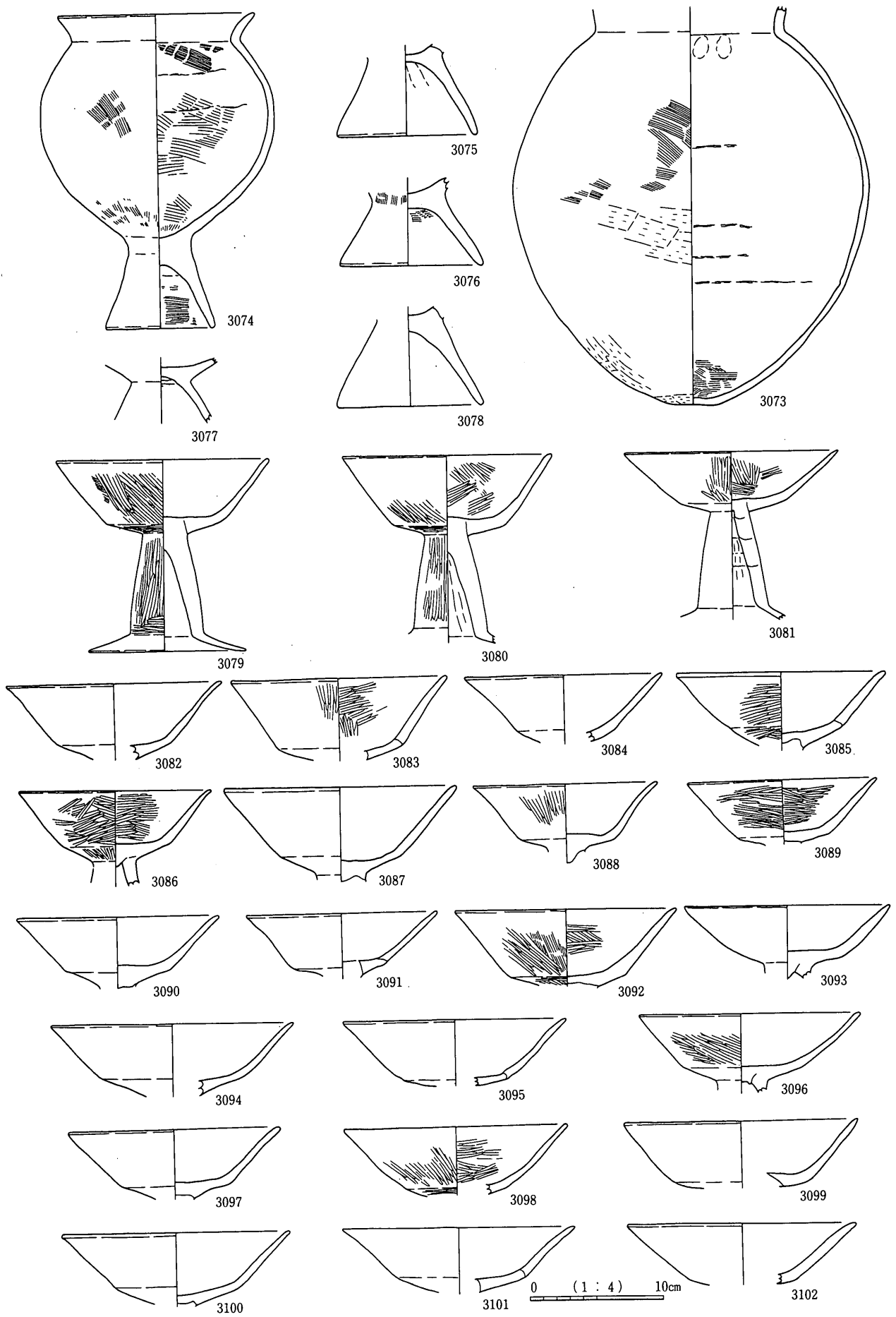
第339图 S D1016出土土器39<3011~3026>



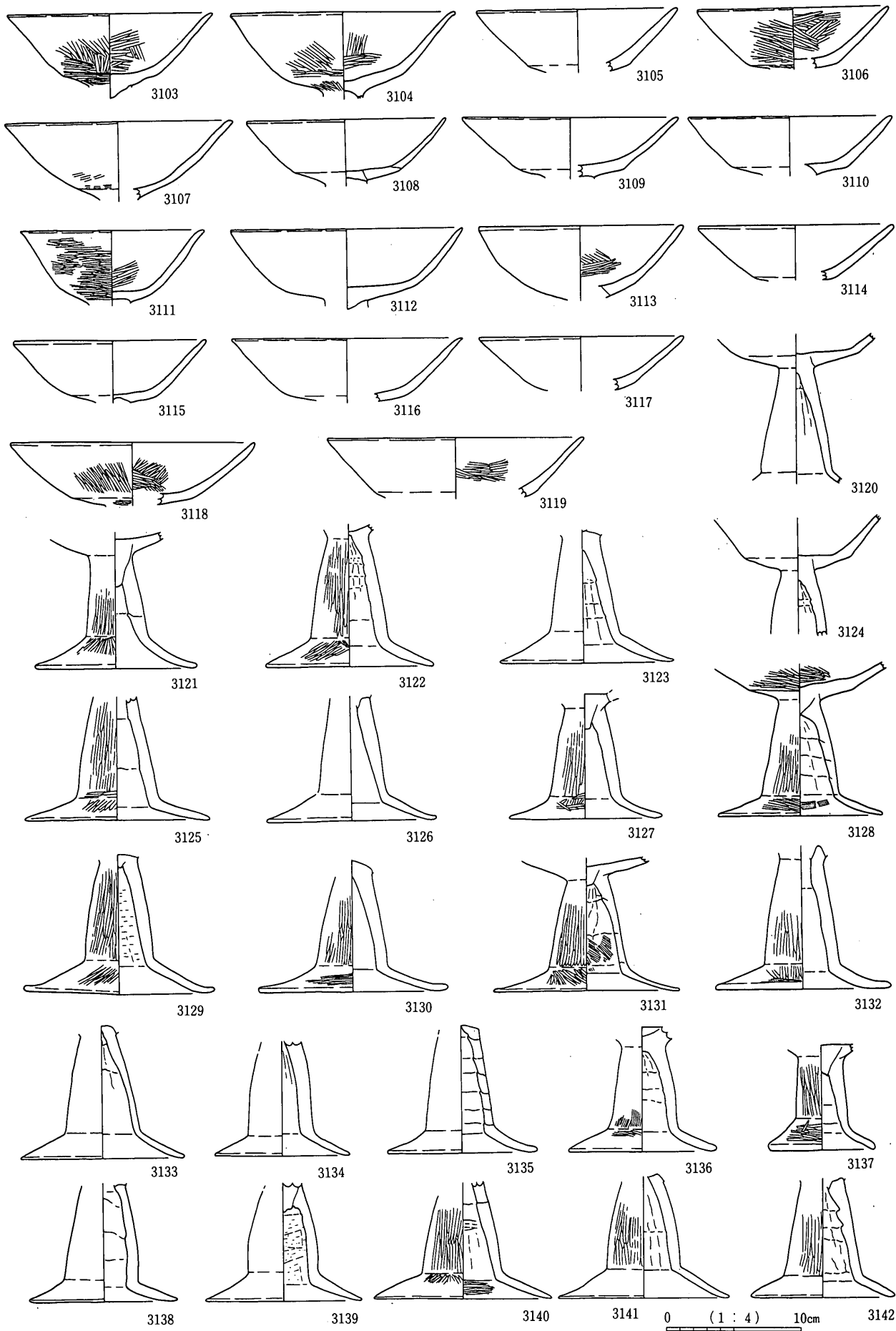
第340图 S D 1016出土土器40<3027~3052>



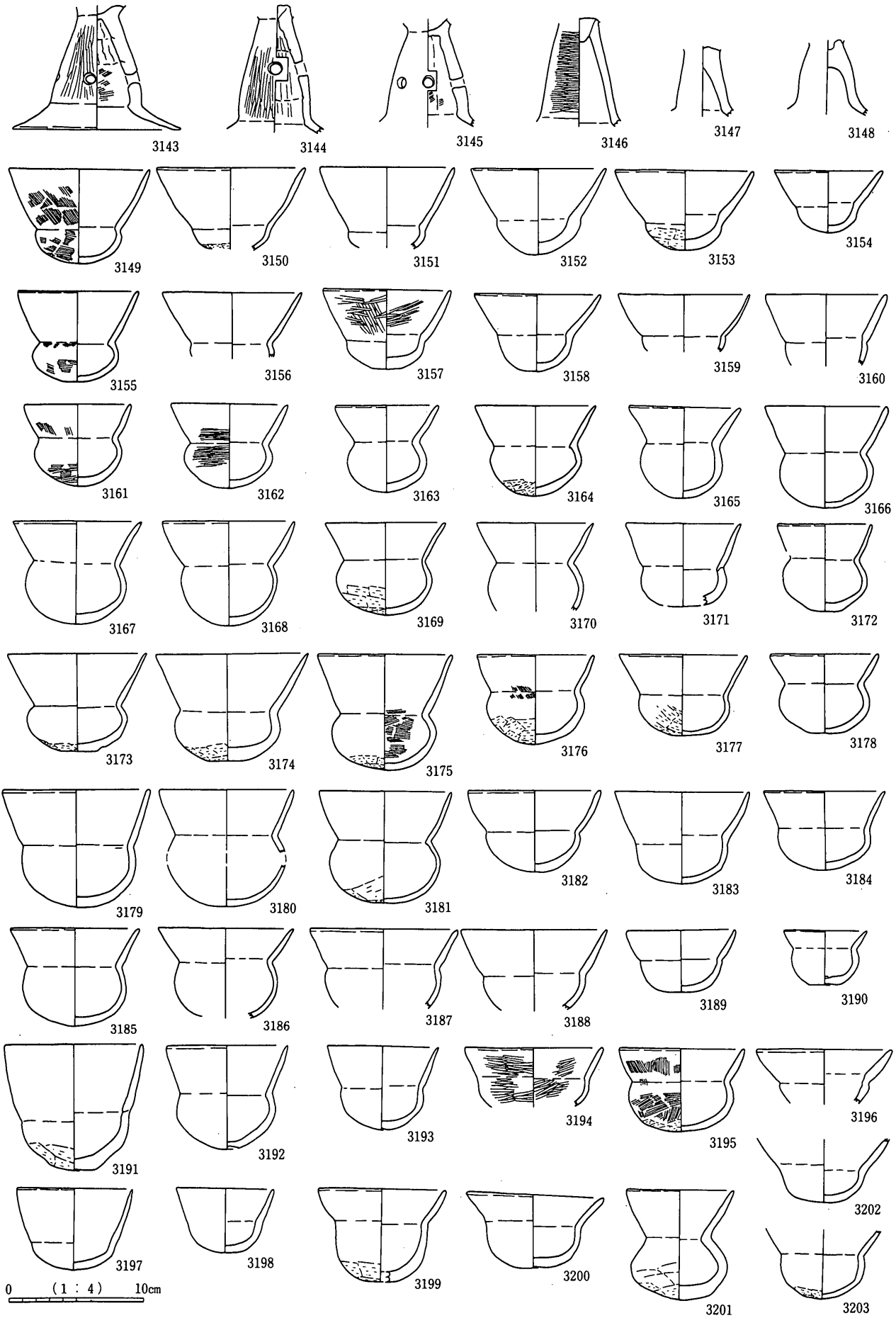
第341图 S D 1016出土土器41<3053~3072>



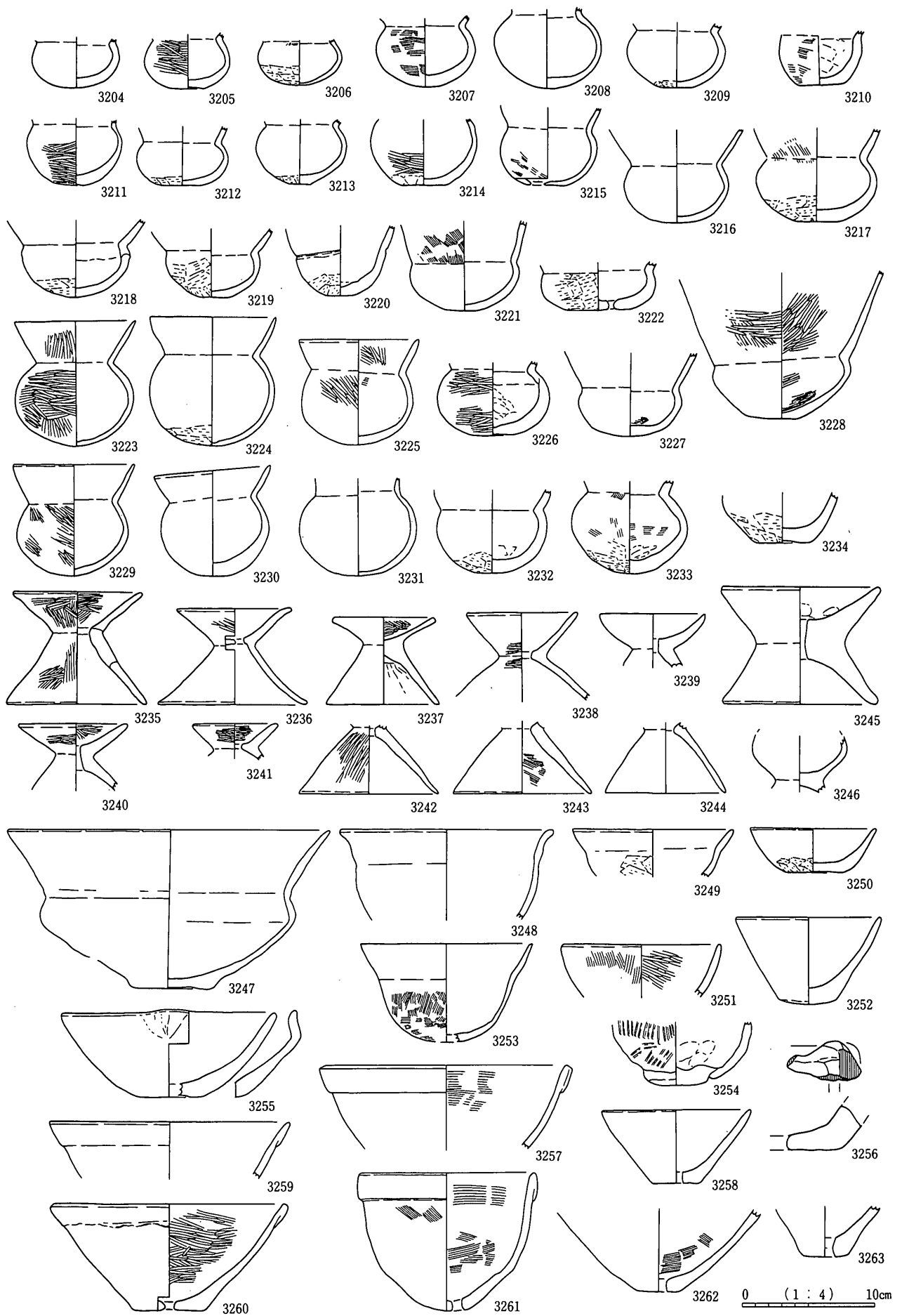
第342图 S D1016出土土器42<3073~3102>



第343图 S D1016出土土器43<3103~3142>

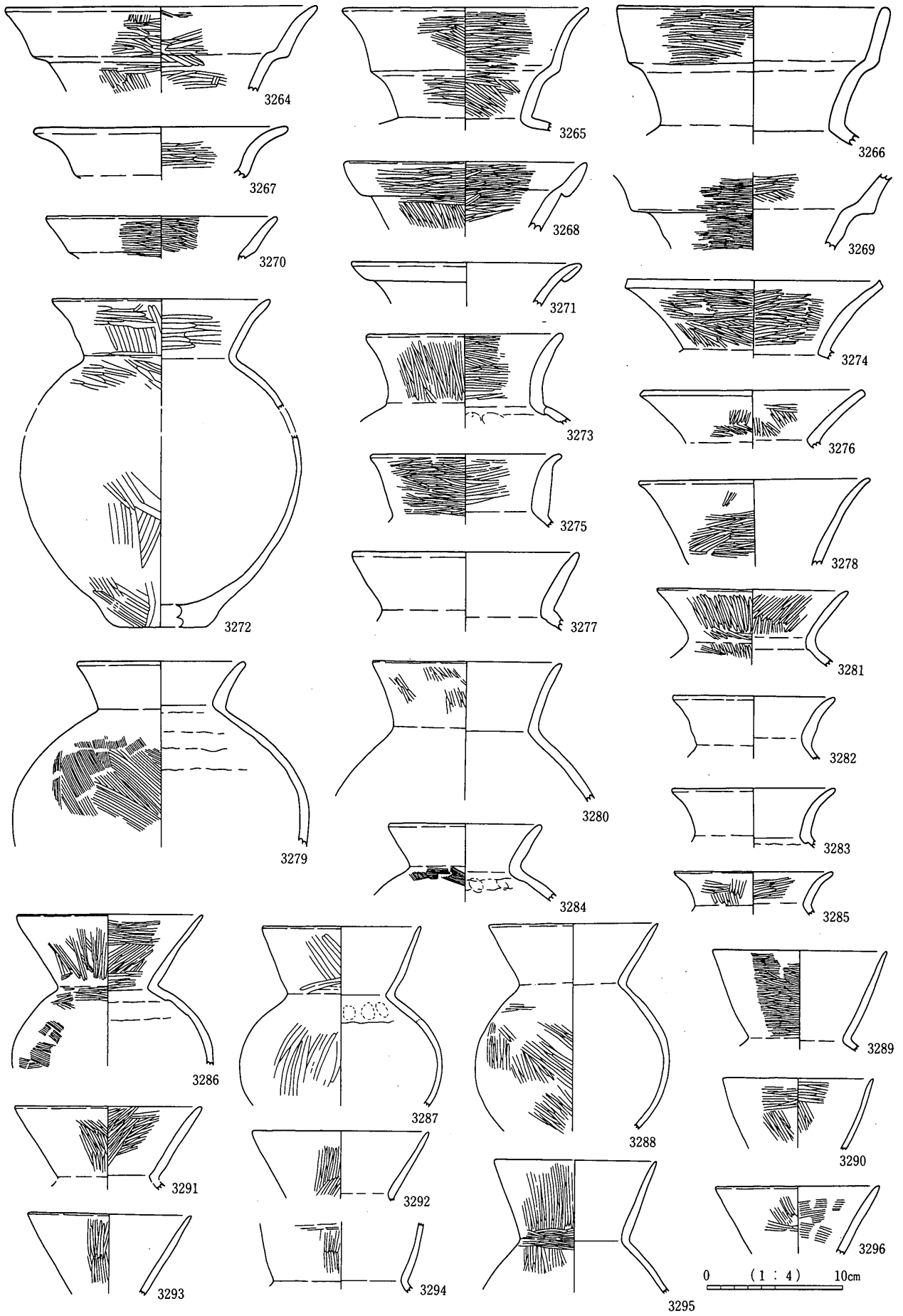


第344图 S D1016出土土器44<3143~3203>

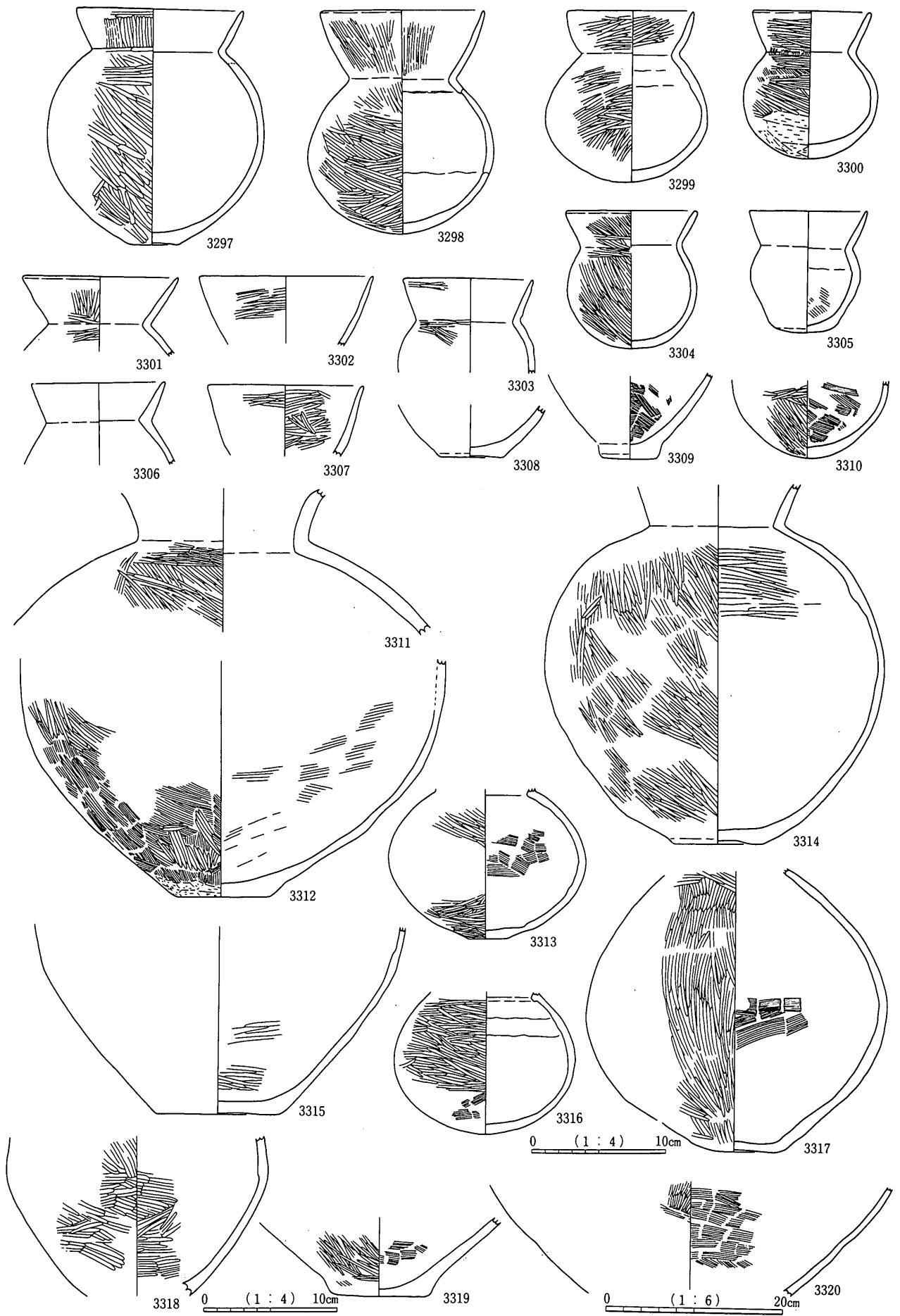


第345图 S D1016出土土器45<3204~3263>

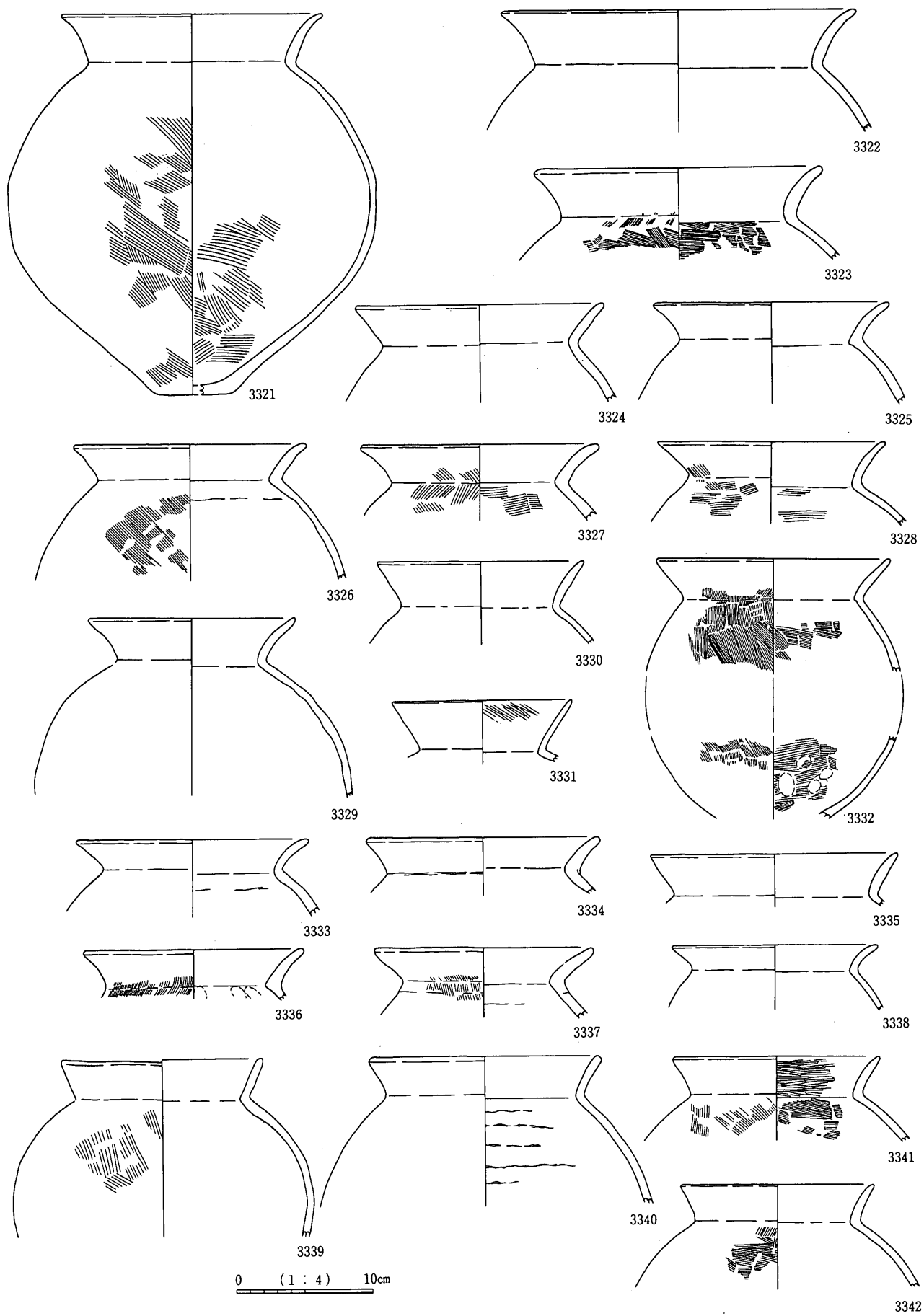
⑤-1区



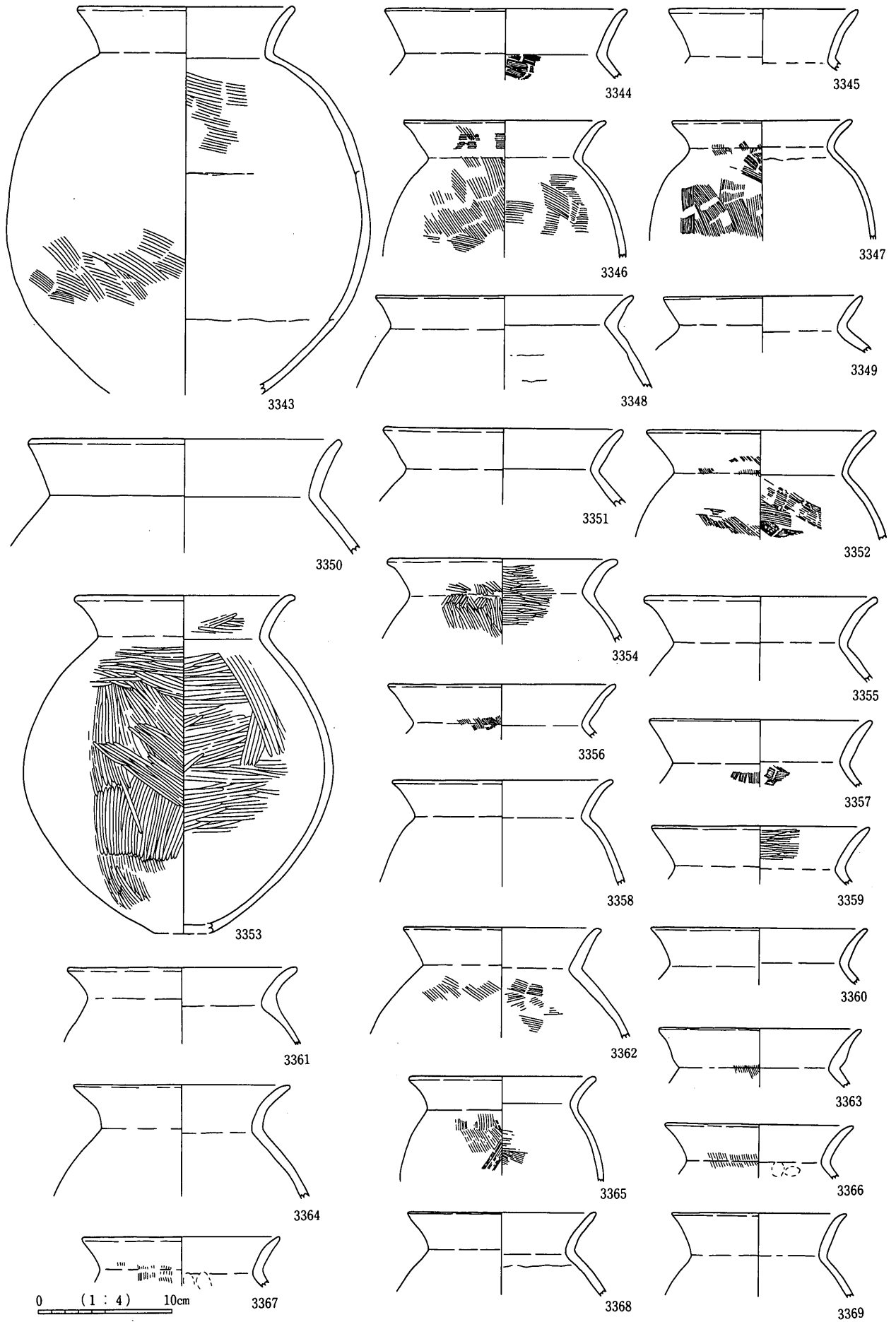
第346图 S D1016出土土器46<3264~3296>



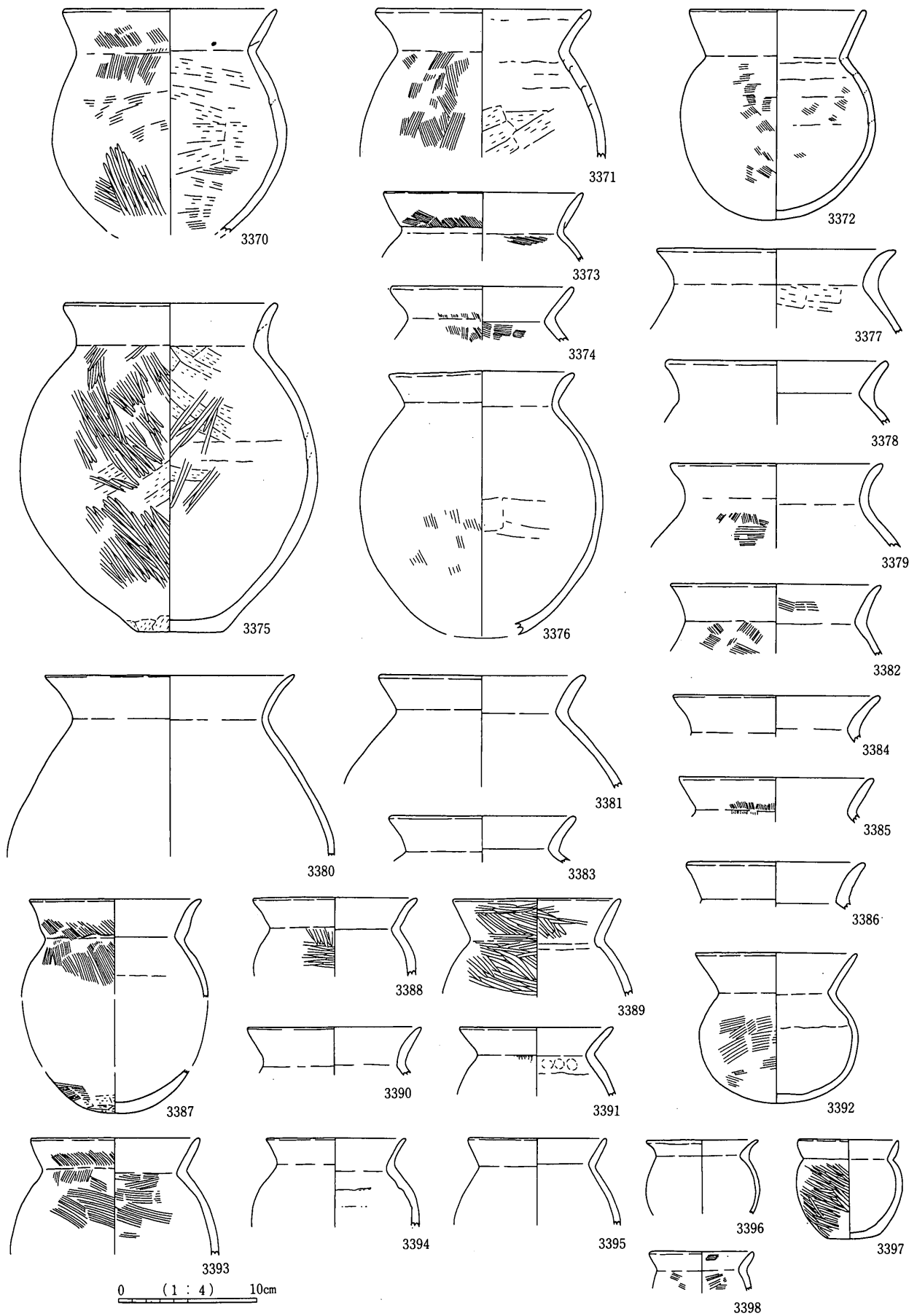
第347图 S D1016出土土器47<3297~3320>



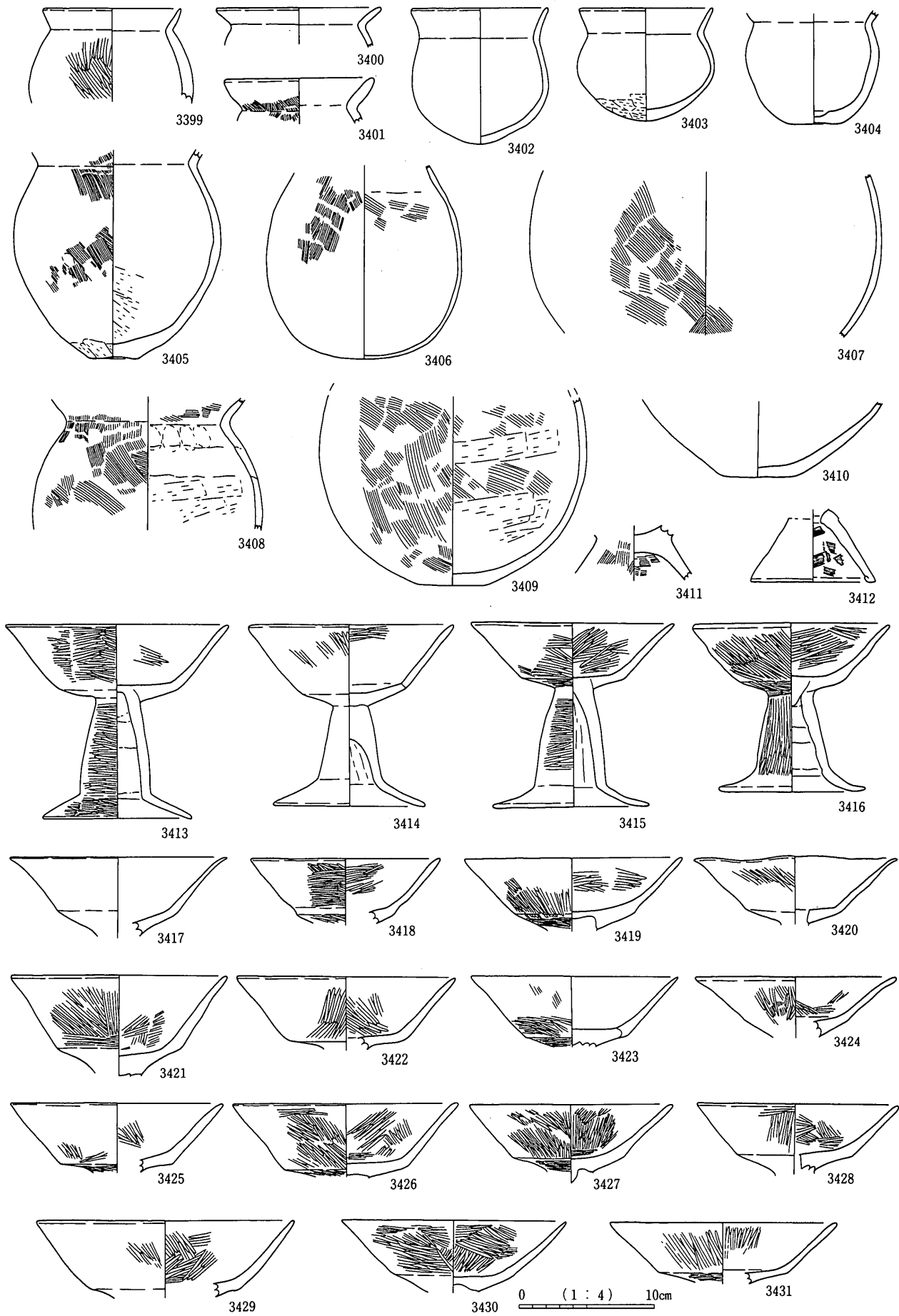
第348图 SD1016出土土器48<3321~3342>



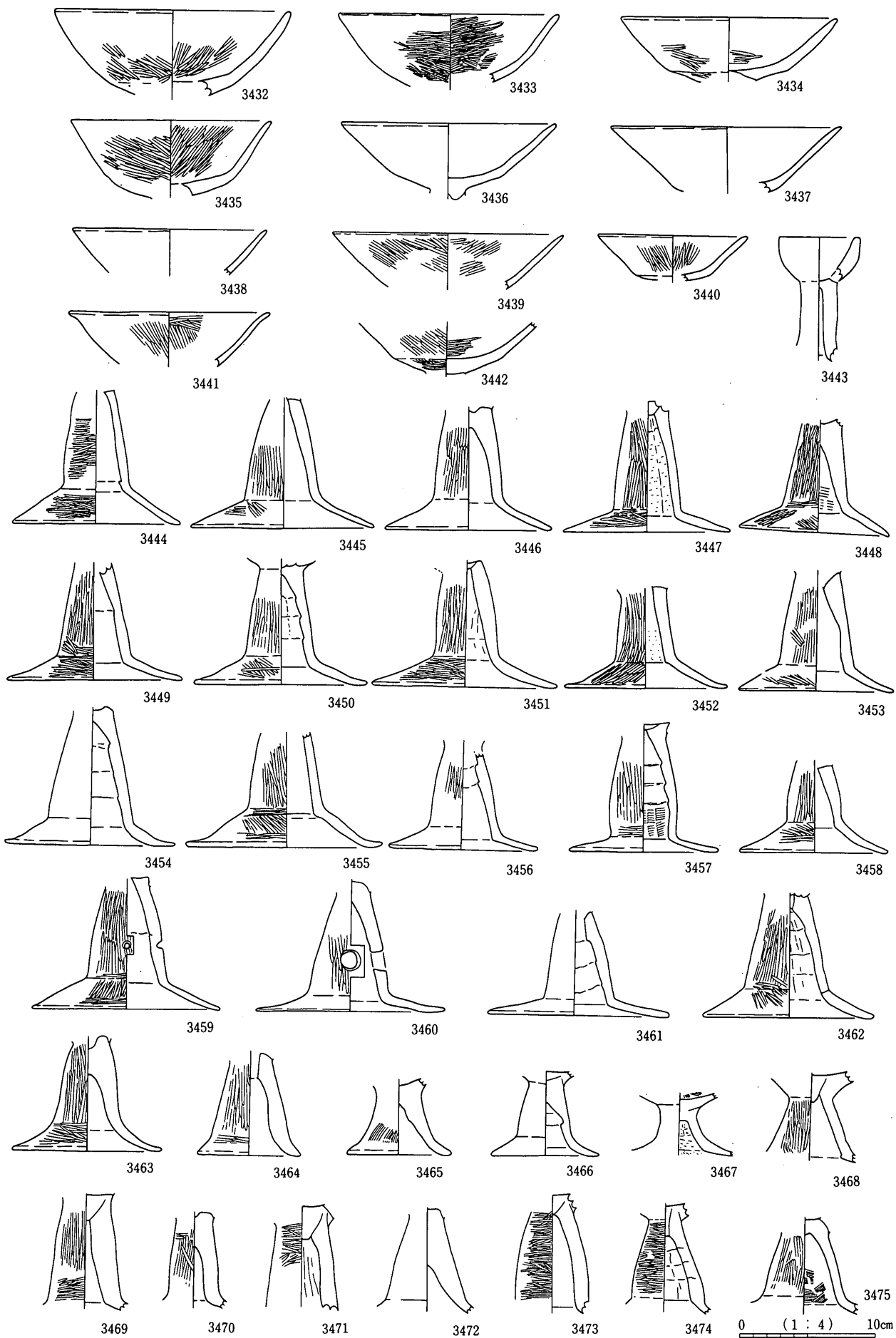
第349图 S D1016出土土器49<3343~3369>



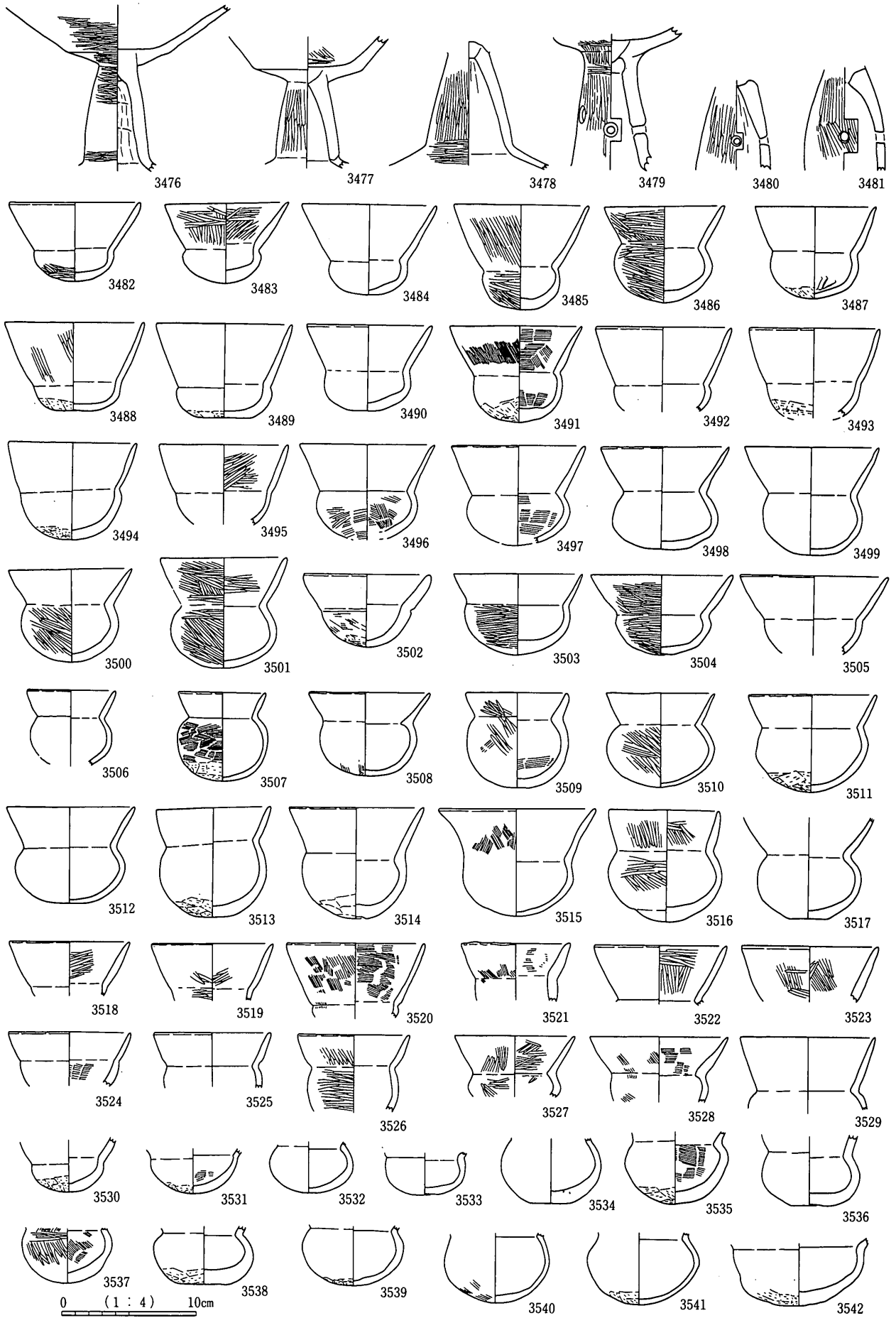
第350图 · S D 1016出土土器50<3370~3398>



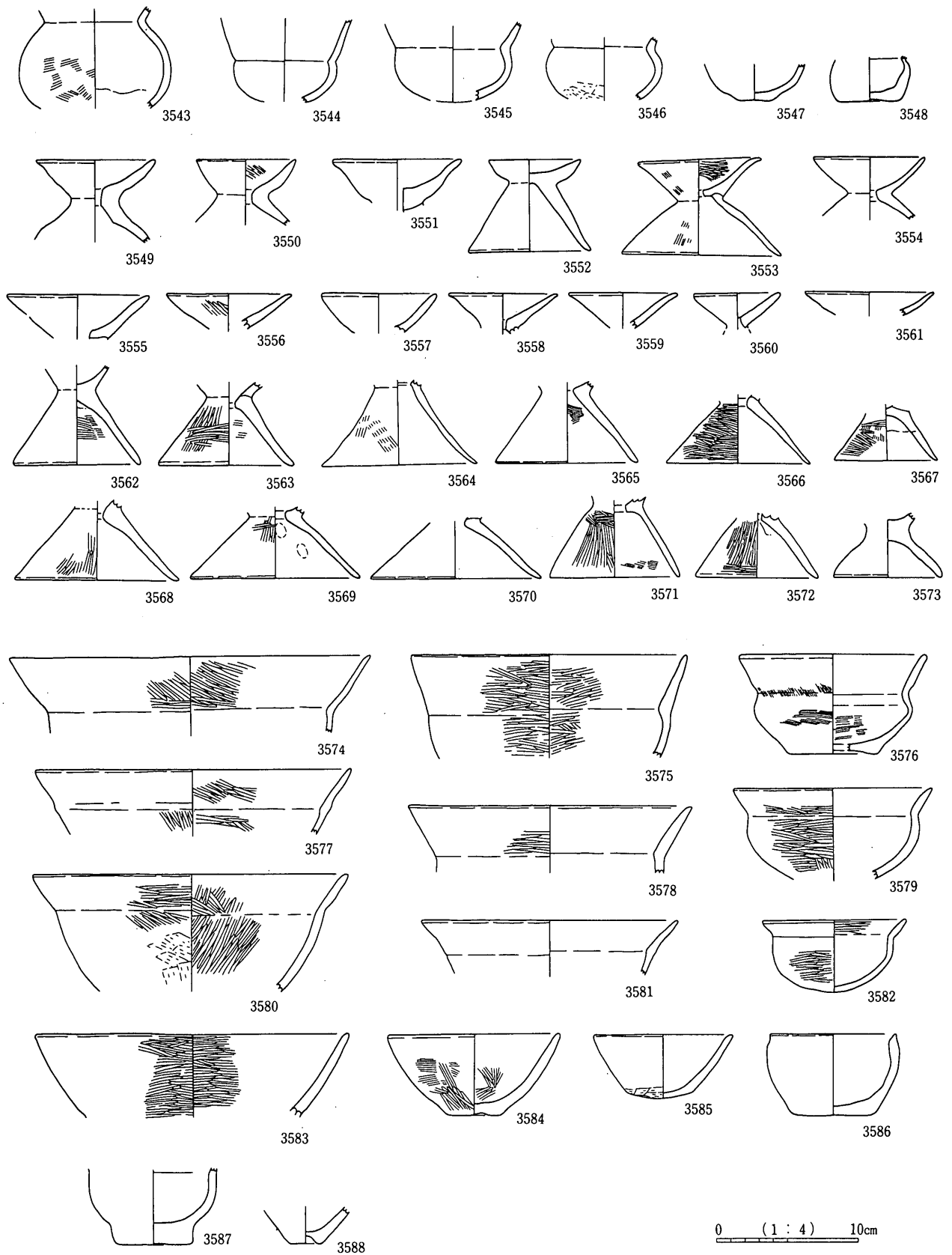
第351图 S D 1016出土土器51<3399~3431>



第352图 S D 1016出土土器52<3432~3475>

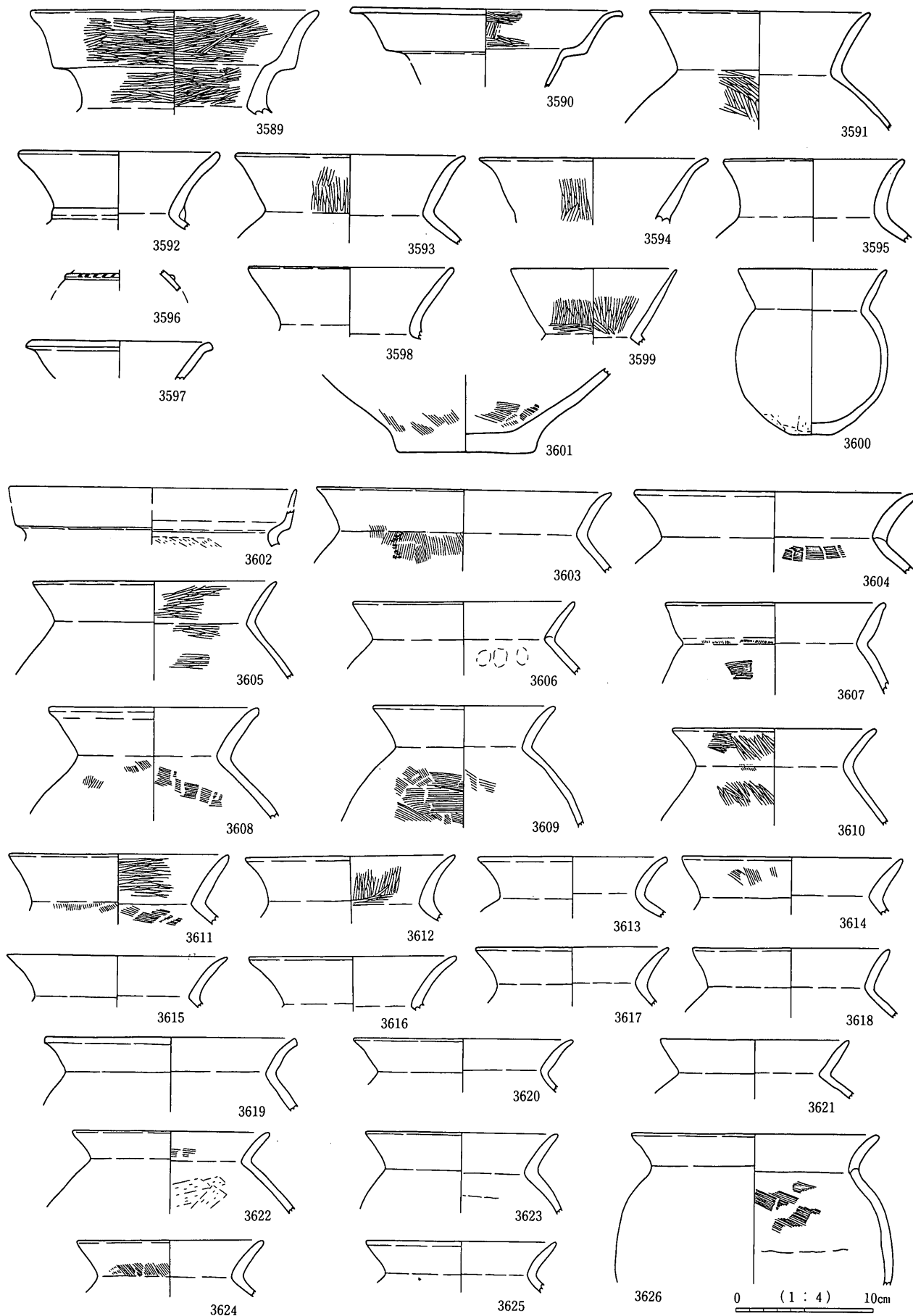


第353图 S D1016出土土器53<3476~3542>

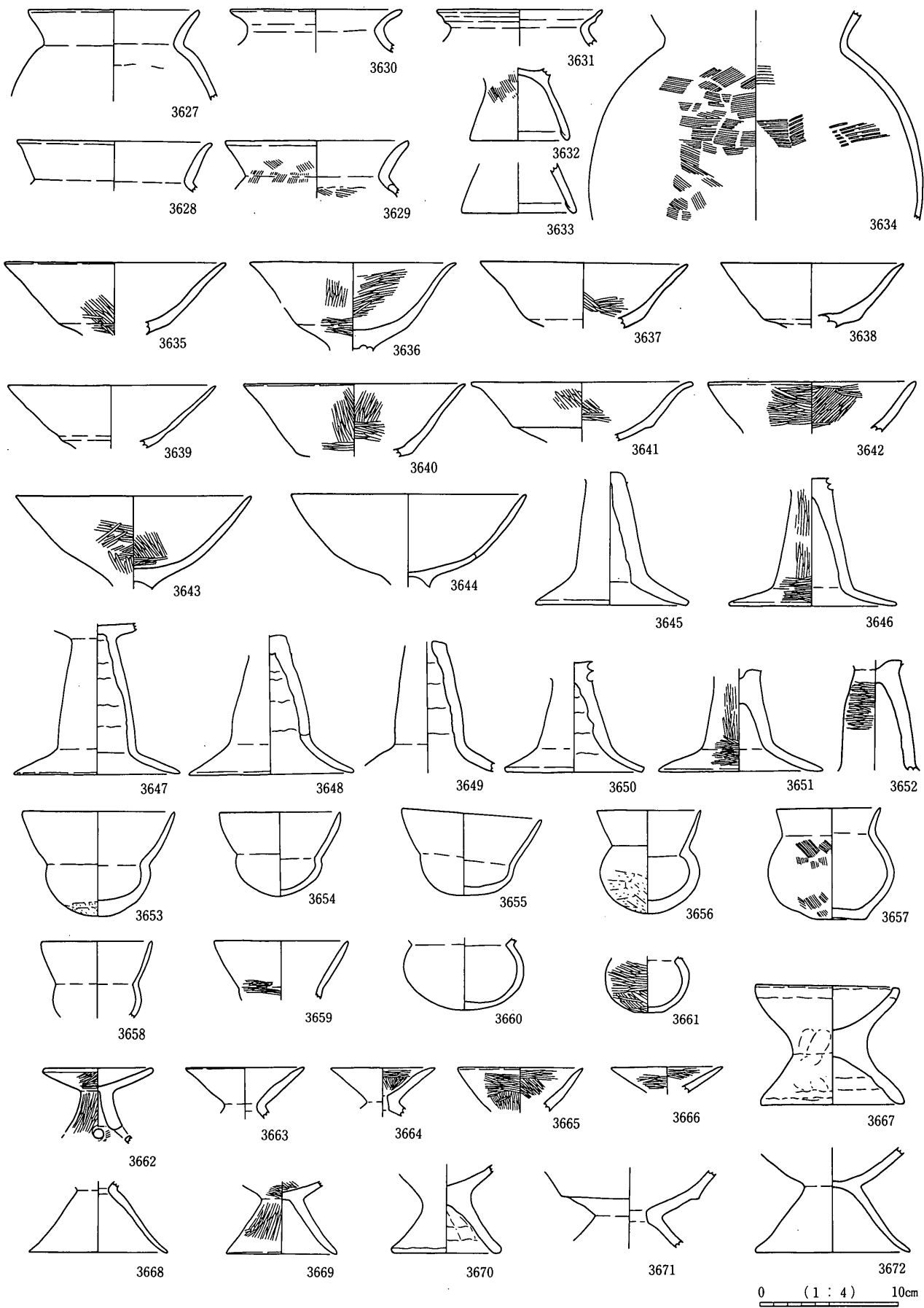


第354图 S D 1016出土土器54<3543~3588>

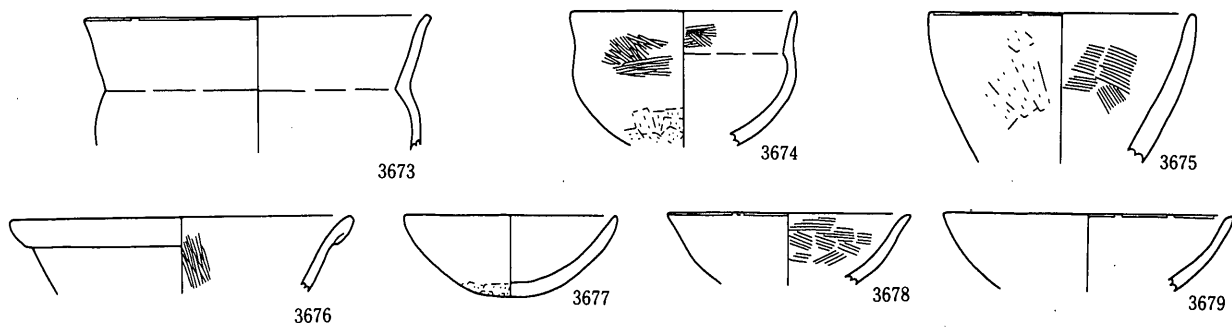
SD1007



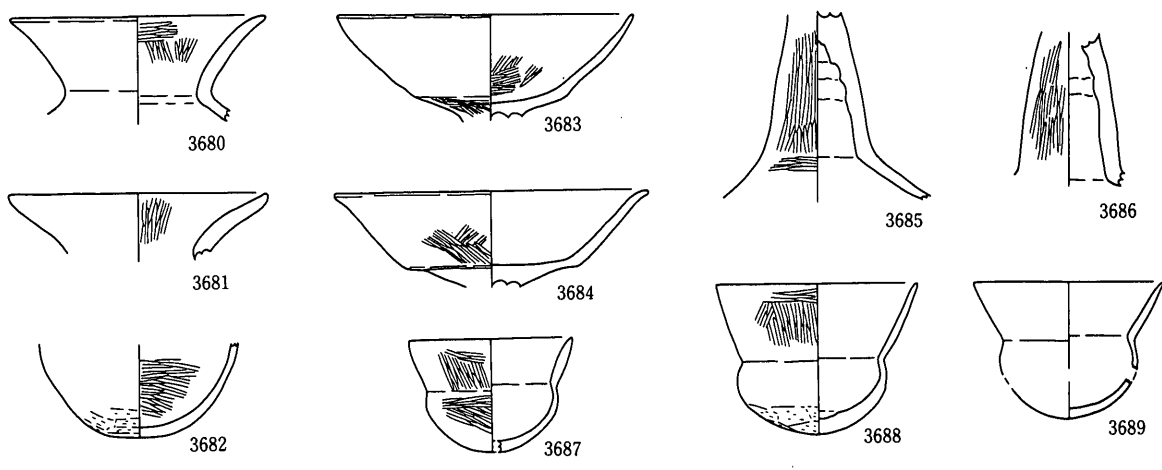
第355图 SD1007出土土器55<3589~3626>



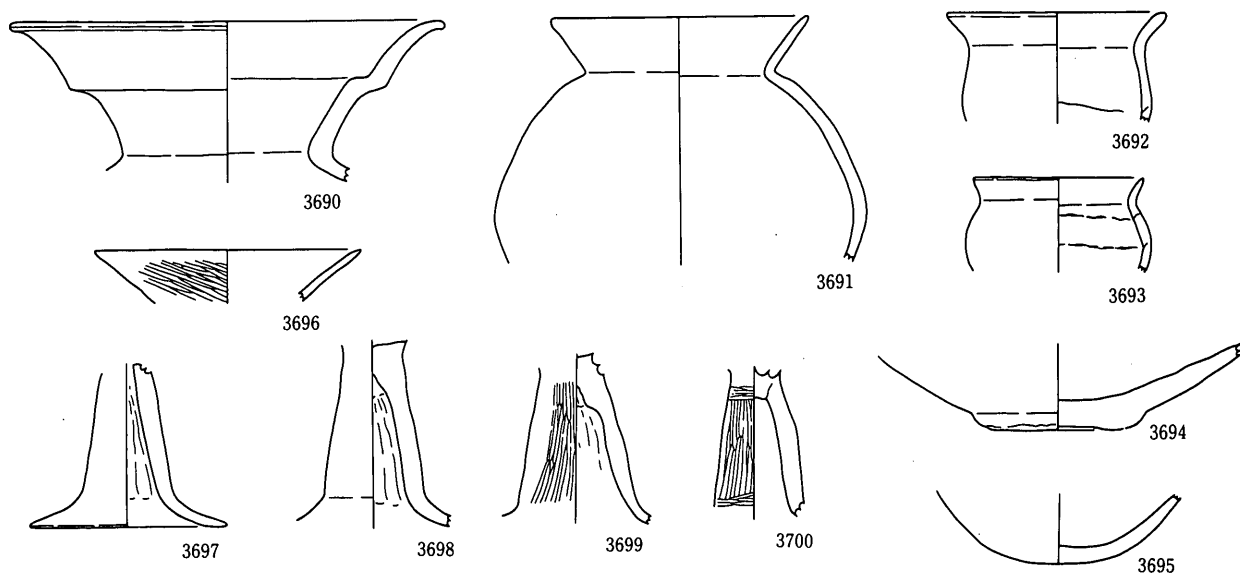
第356图 S D1007出土土器56<3627~3672>



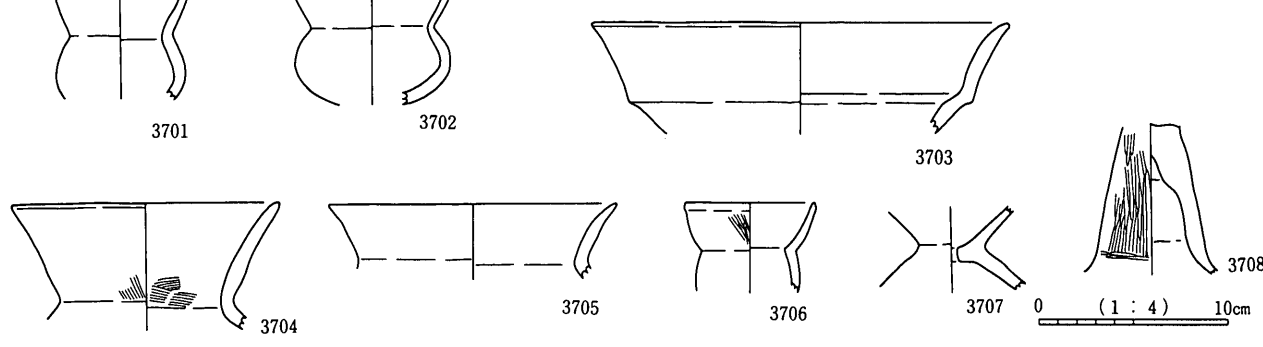
SD2014



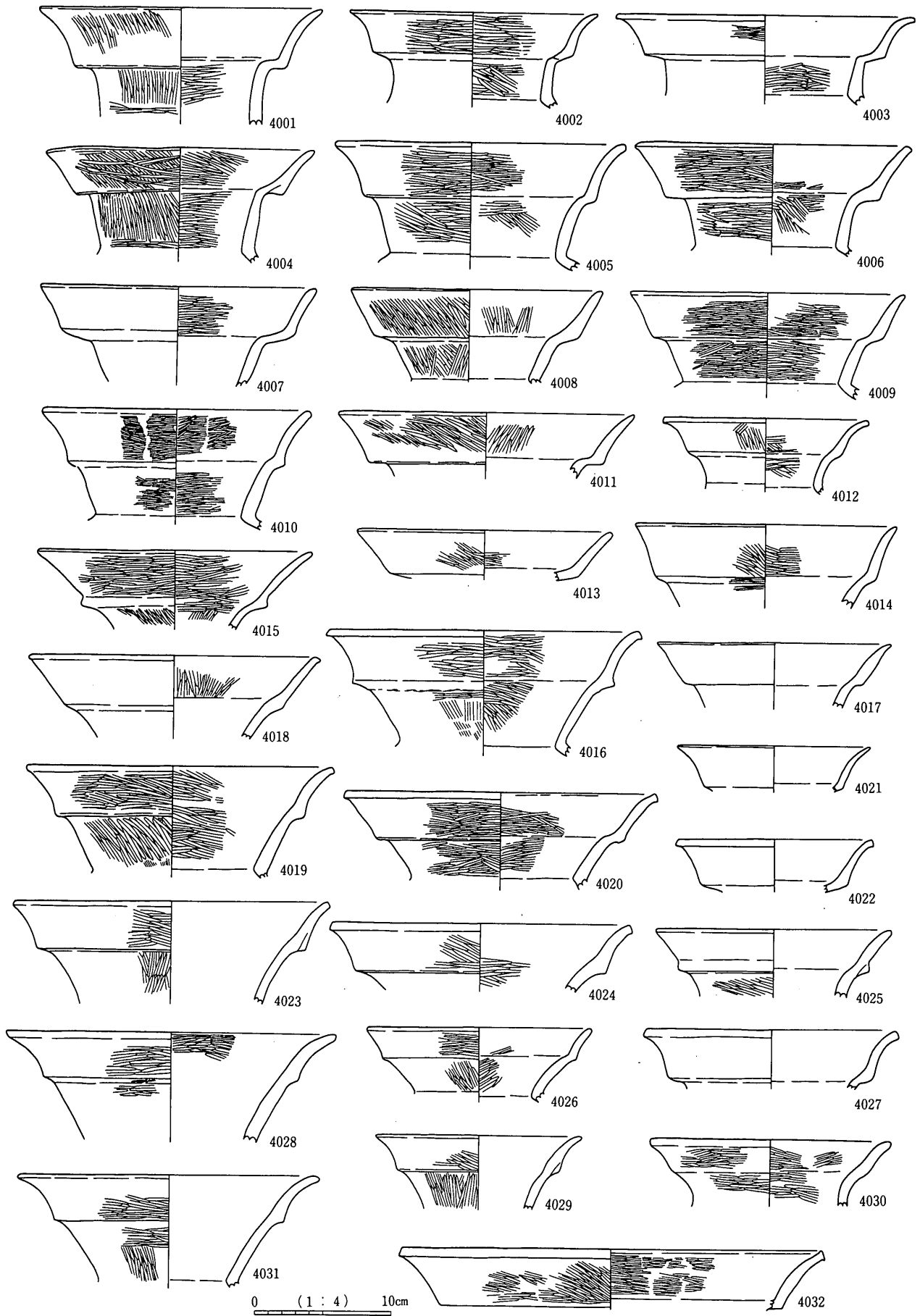
SD1020



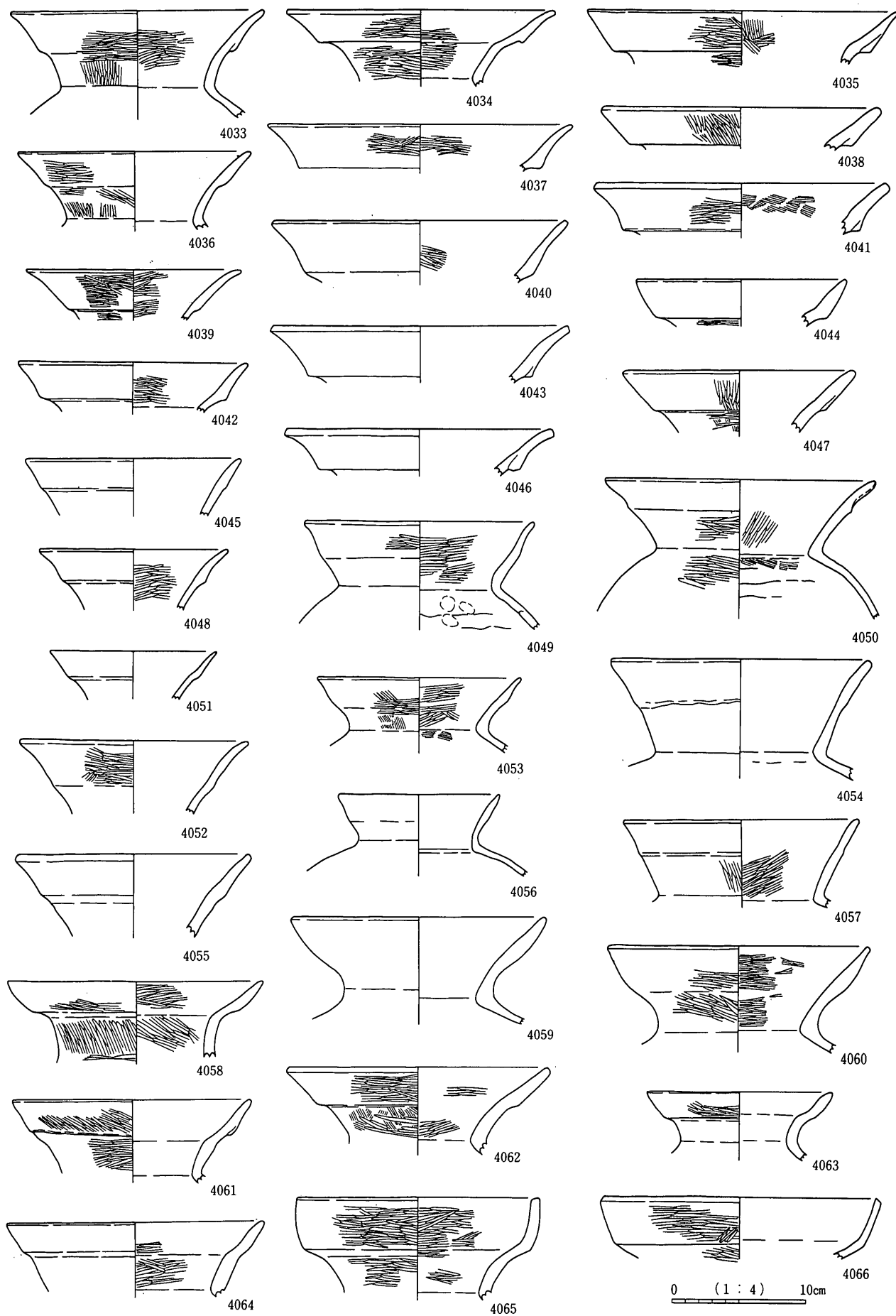
SD1058



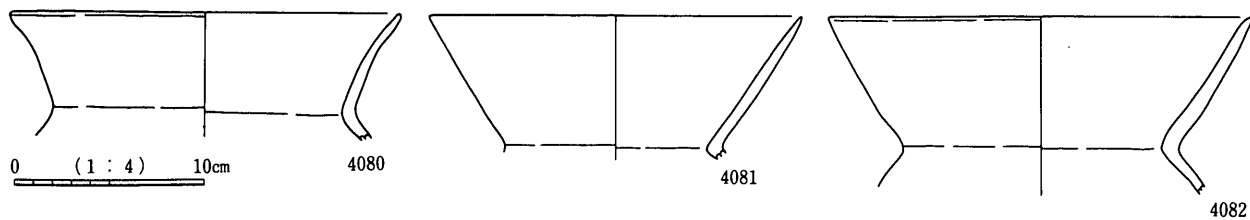
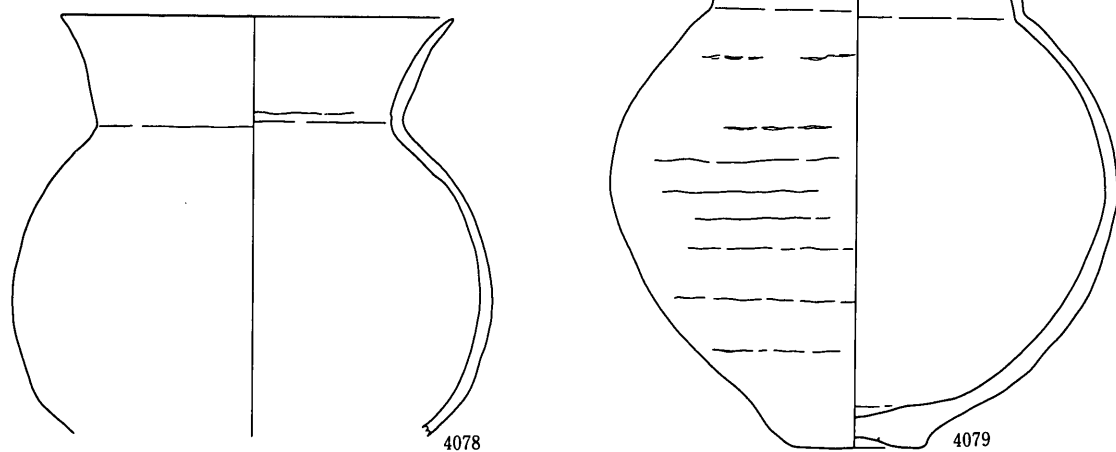
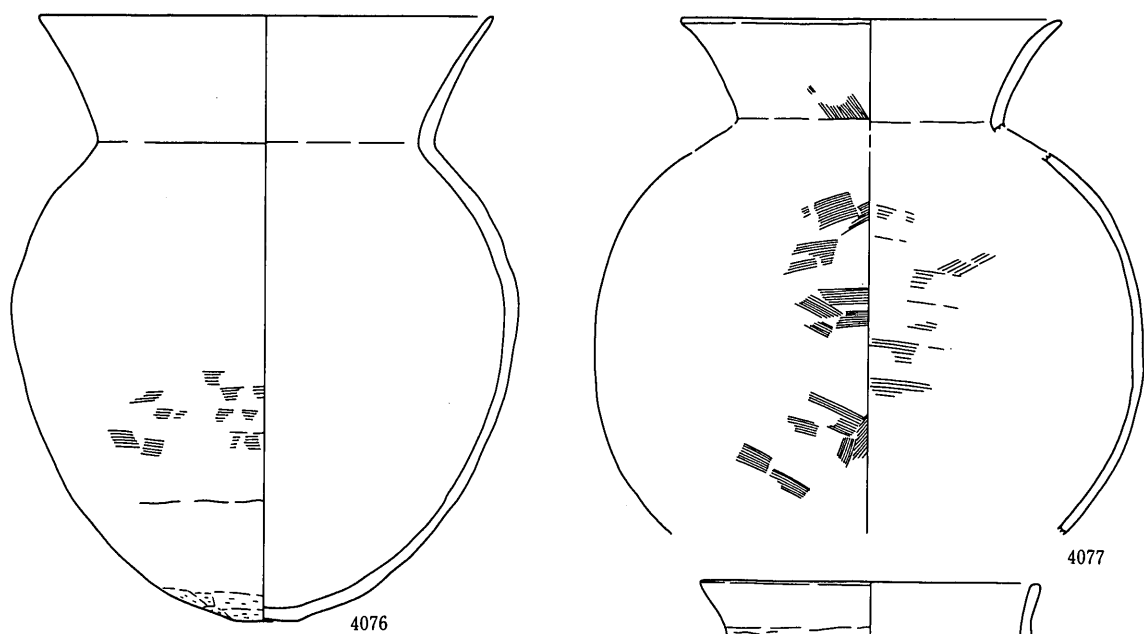
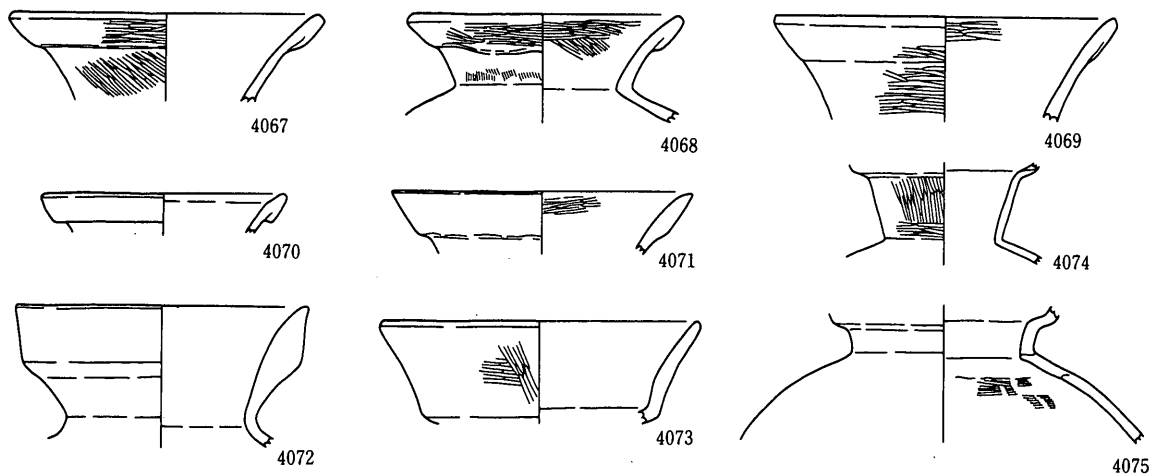
第357图 SD1007·1020·1058·2014出土土器57<3673~3708>



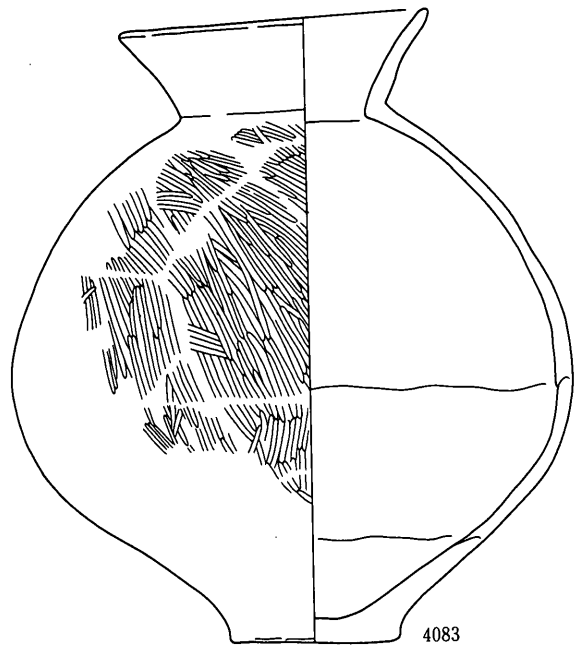
第358图 S Q 2016出土土器 1 <4001~4032>



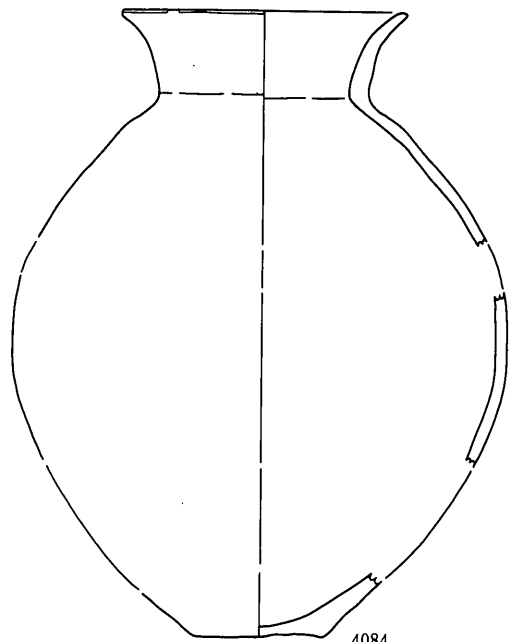
第359图 S Q 2016出土土器 2 <4033~4066>



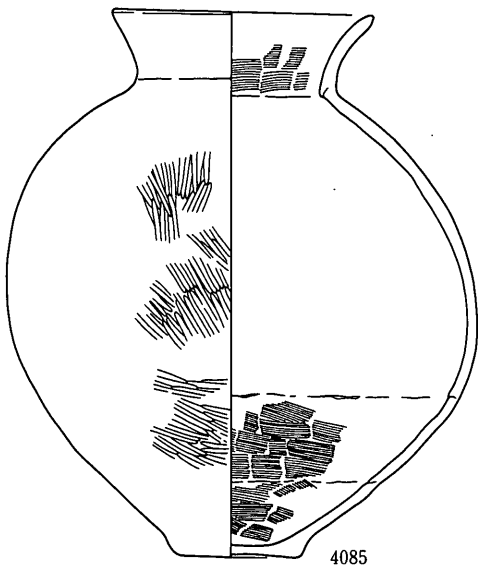
第360图 S Q 2016出土土器 3 <4067~4082>



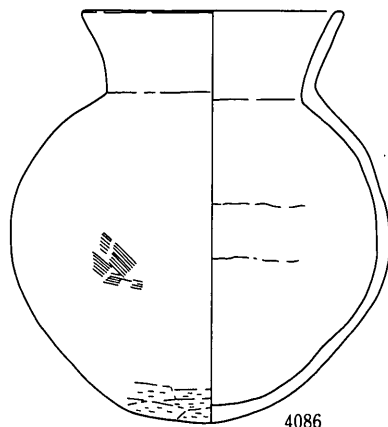
4083



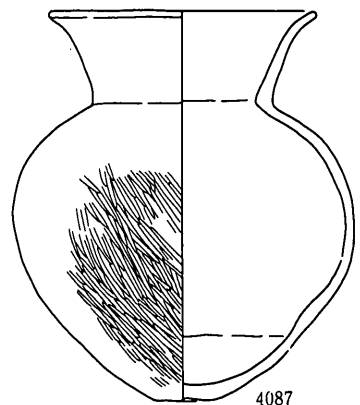
4084



4085

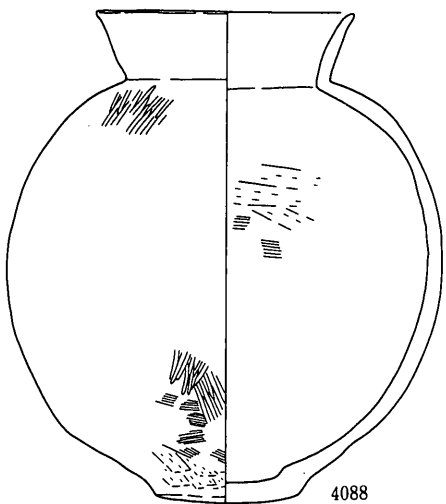


4086



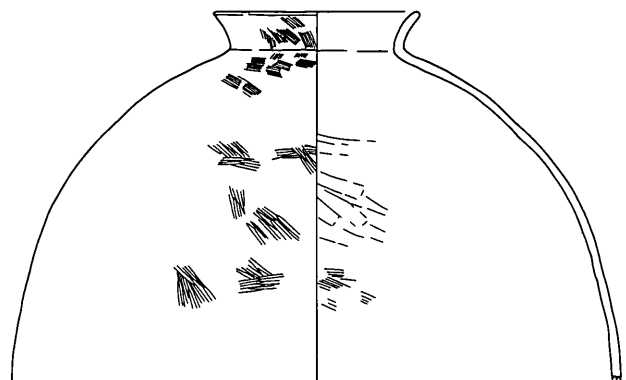
4087

0 (1 : 4) 10cm



4088

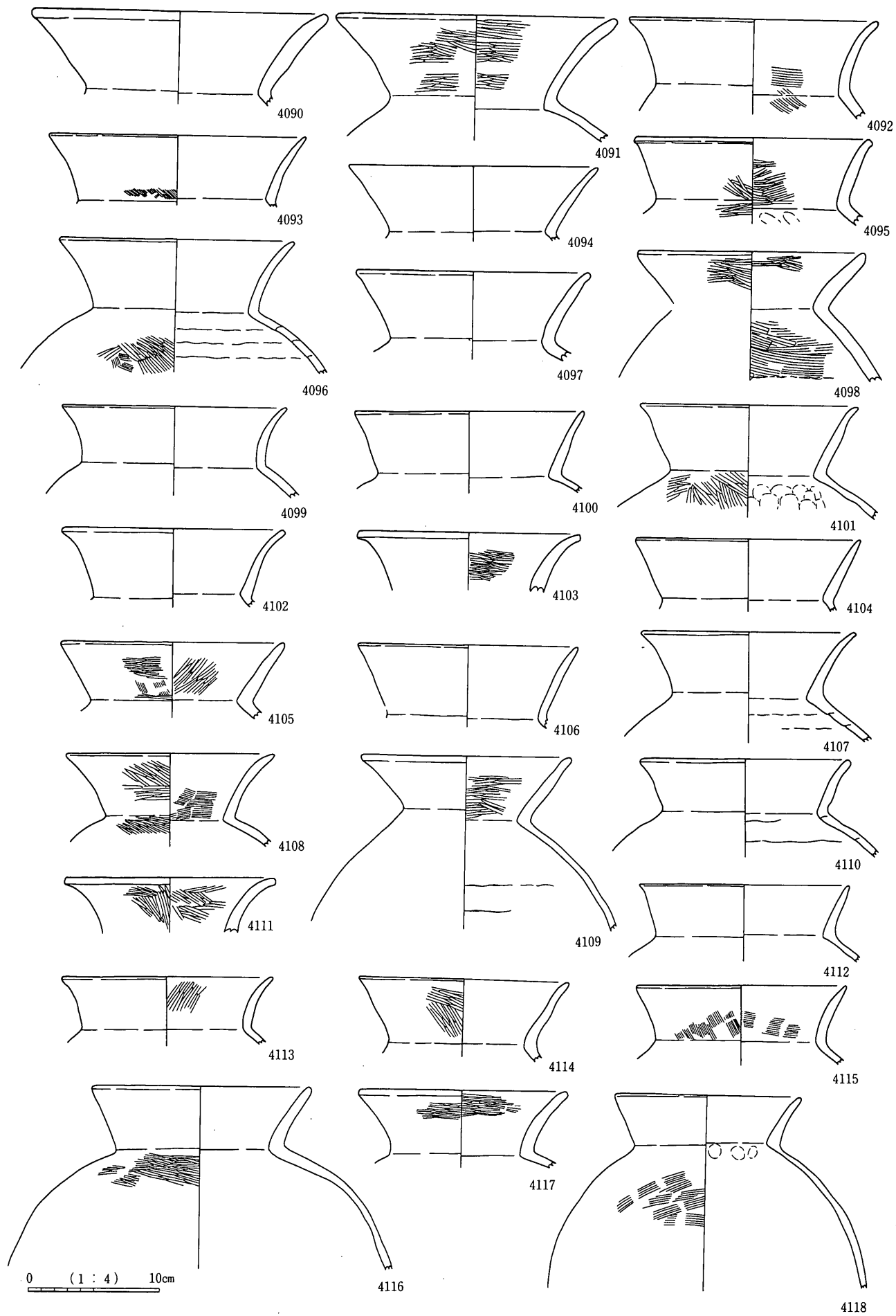
0 (1 : 4) 10cm



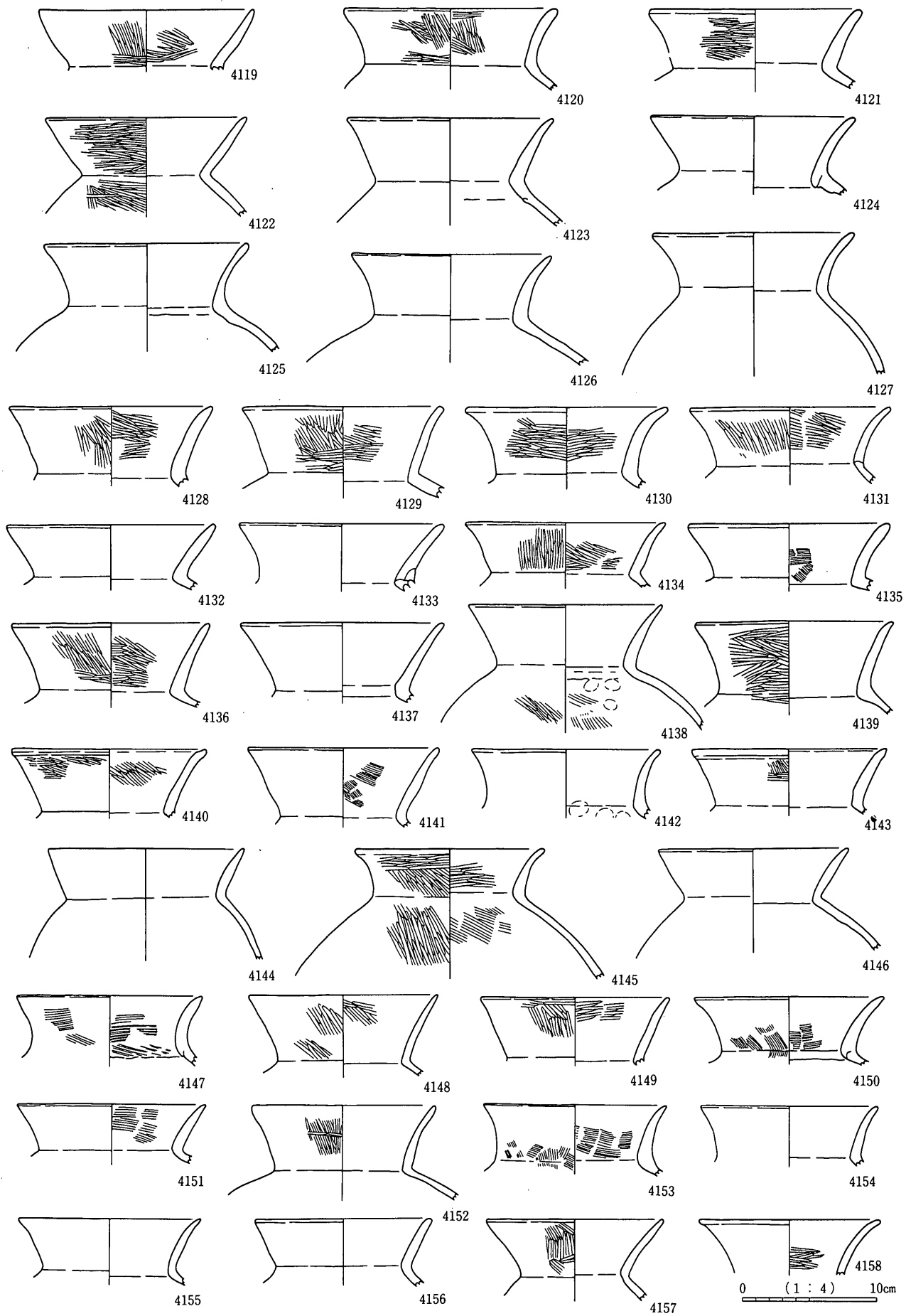
4089

0 (1 : 6) 20cm

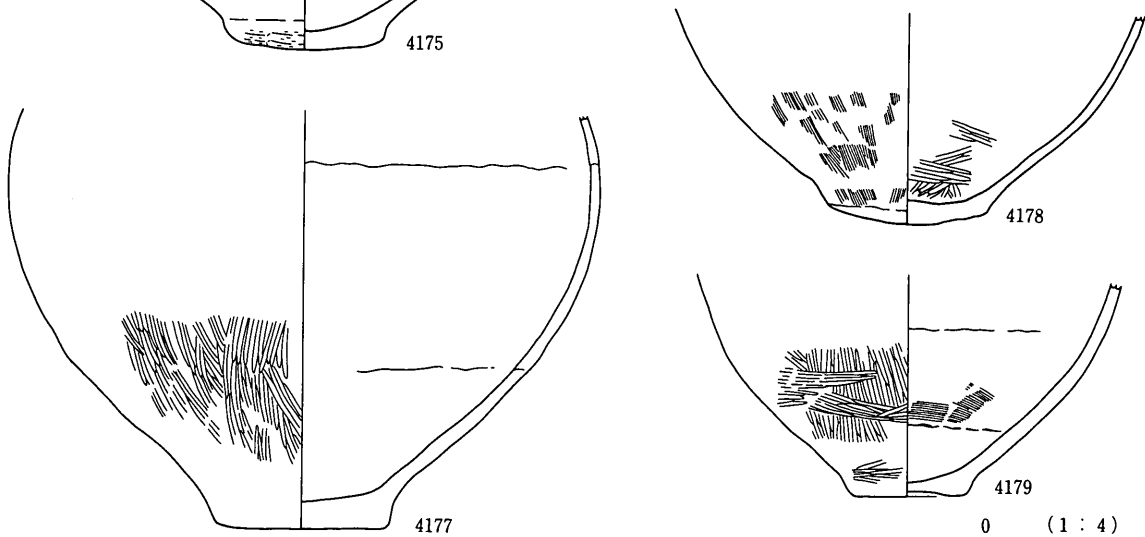
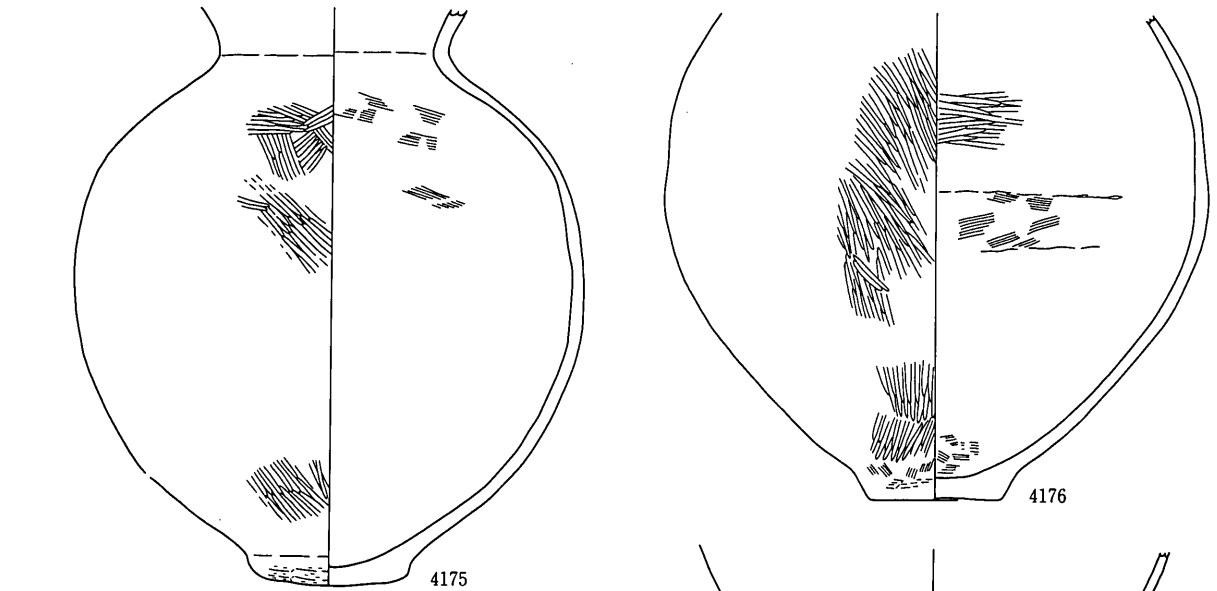
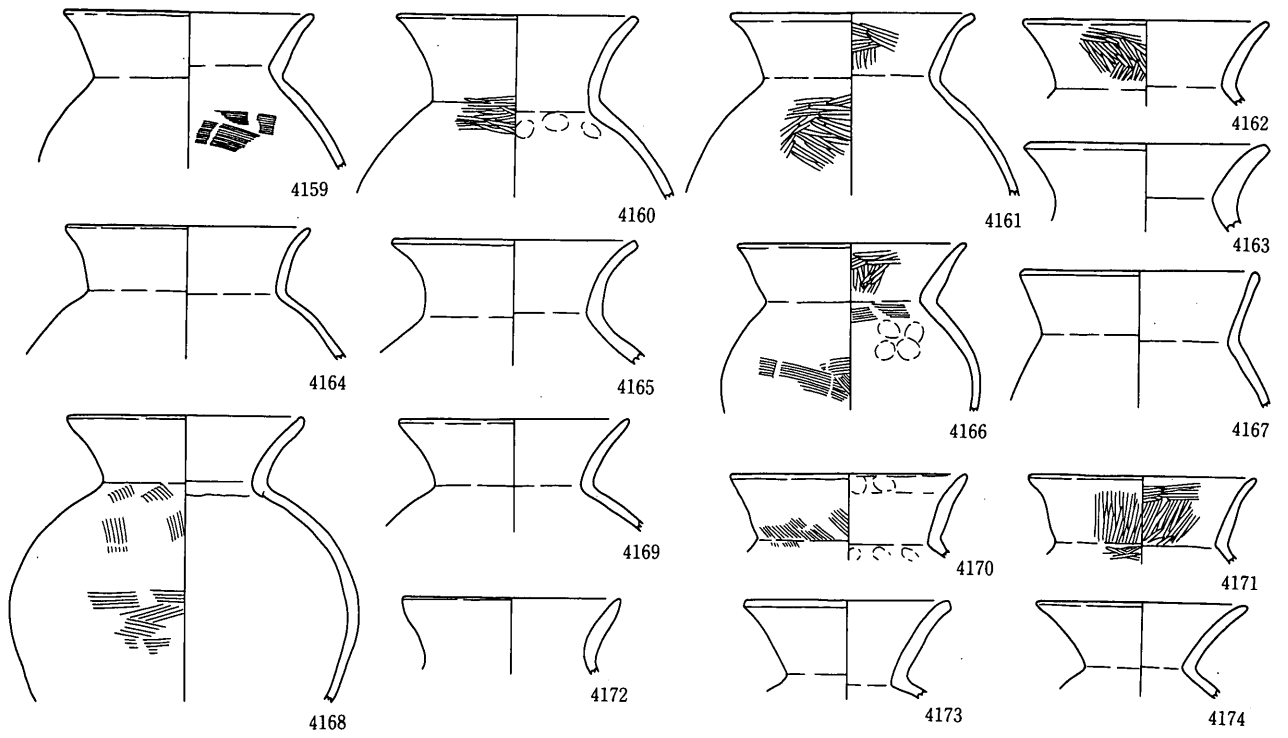
第361图 S Q 2016出土土器 4 <4083~4089>



第362图 S Q 2016出土土器 5 <4090~4118>

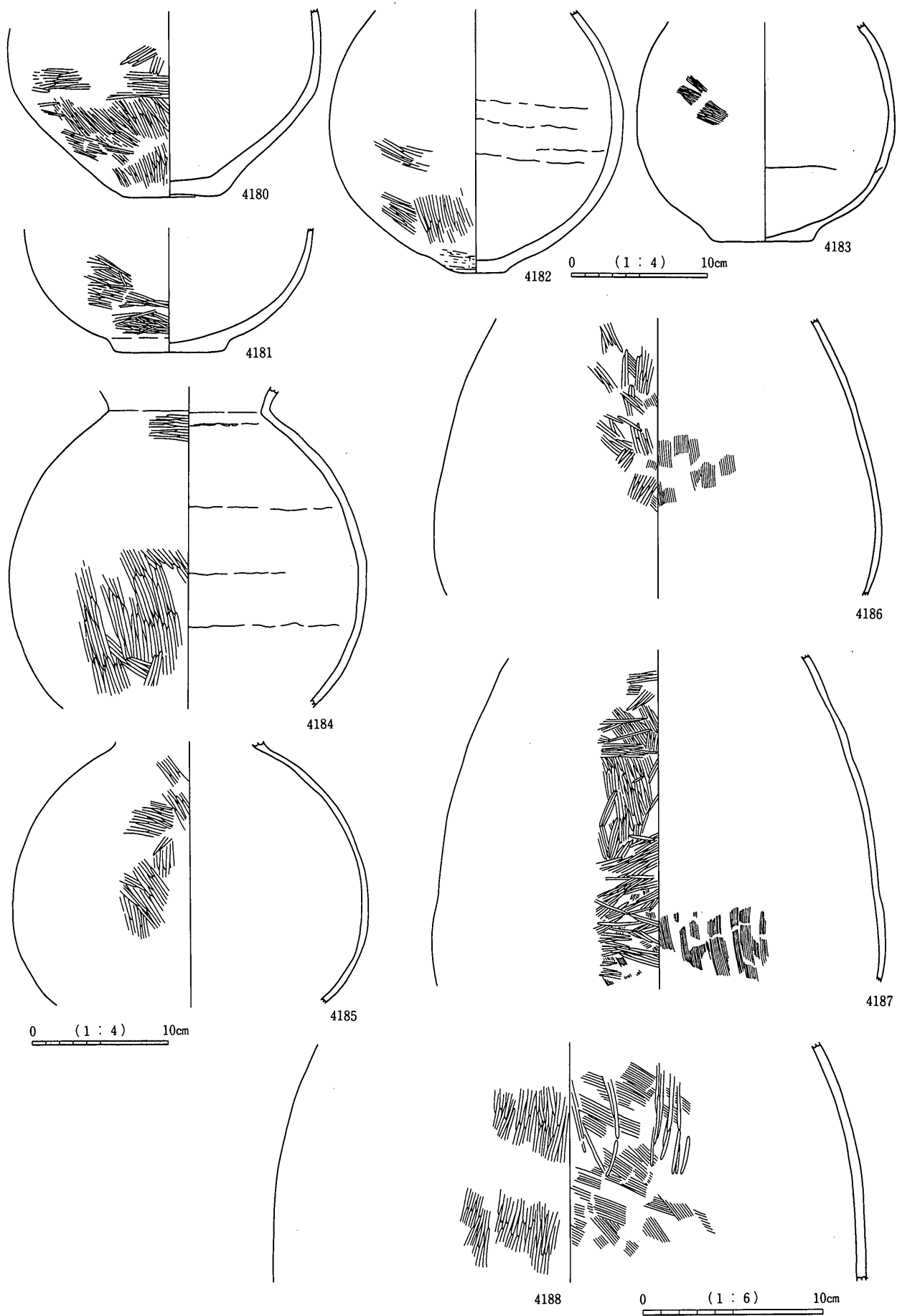


第363图 S Q 2016出土土器 6 <4119~4158>

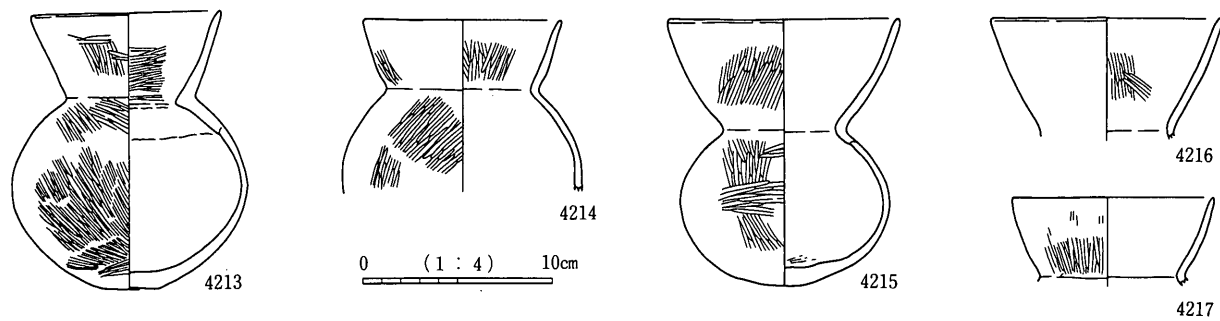
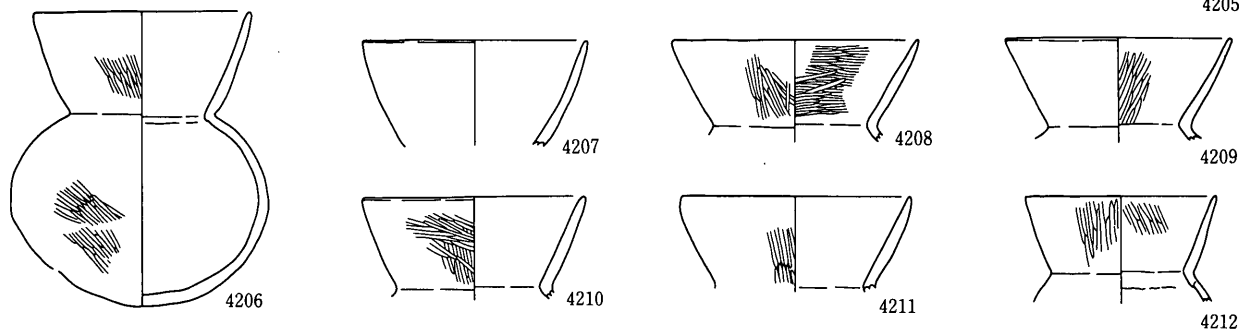
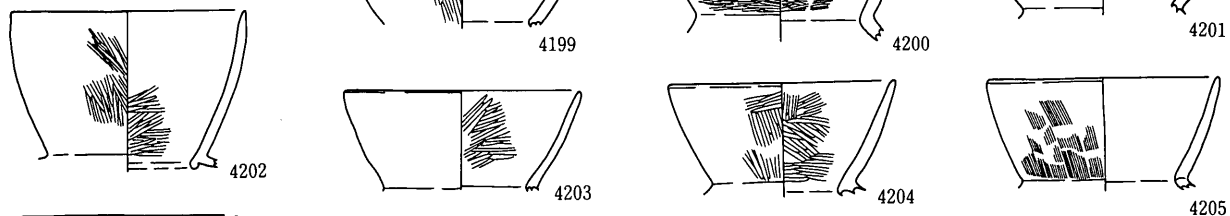
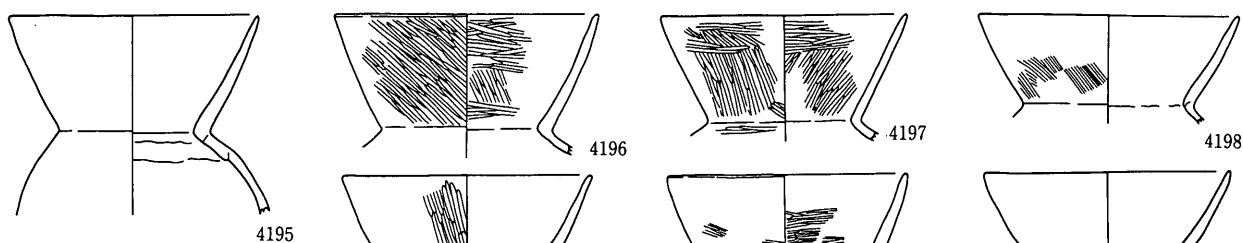
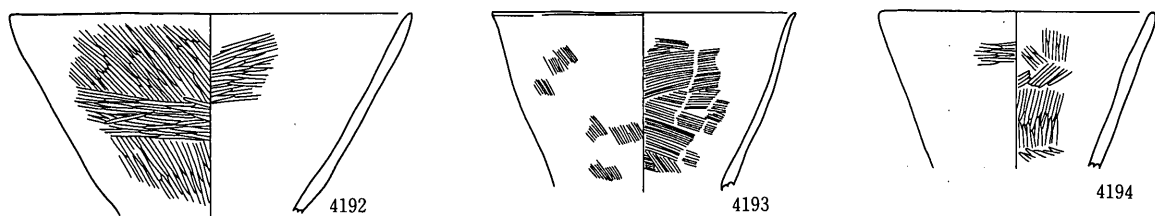
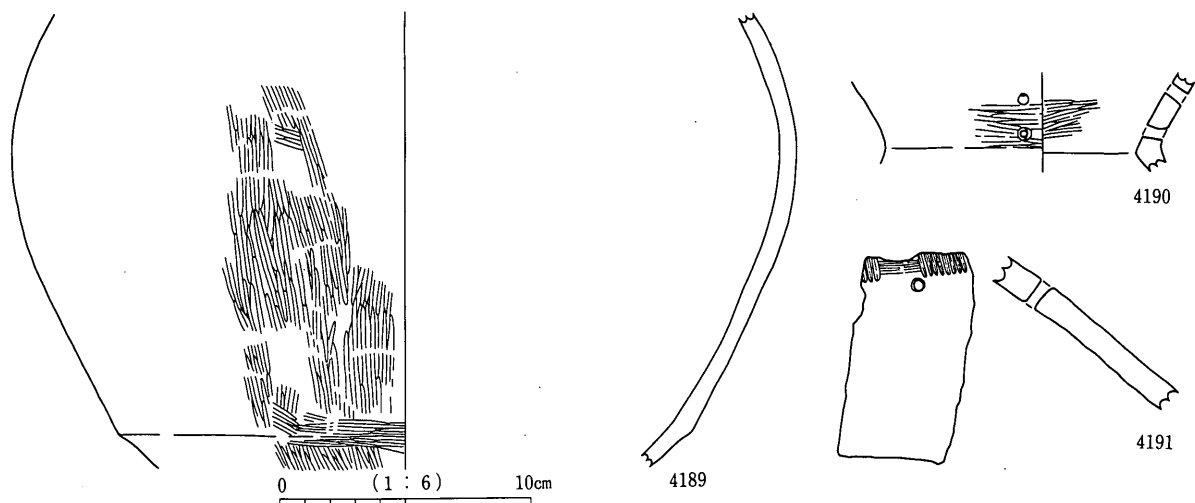


0 (1 : 4) 10cm

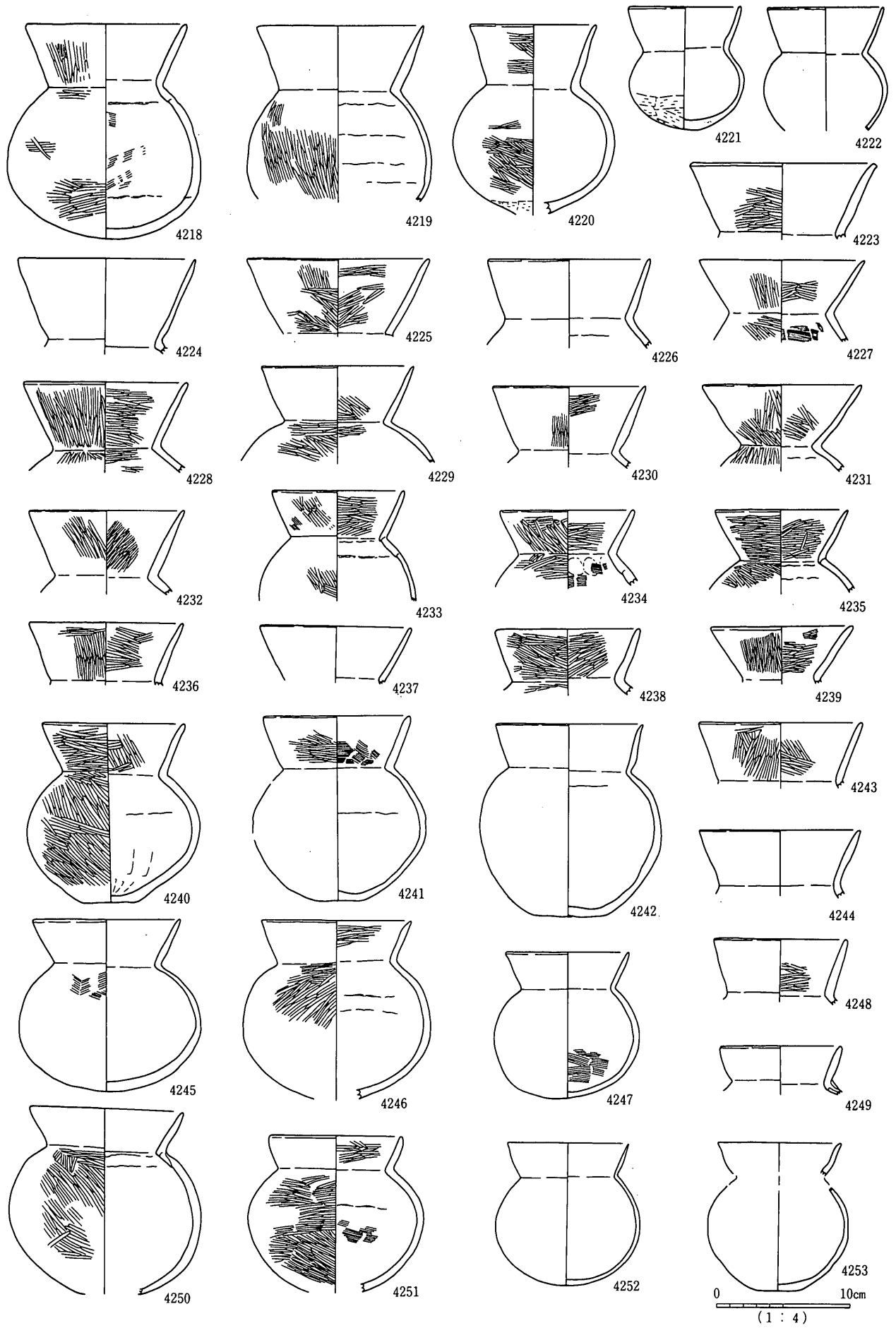
第364图 S Q 2016出土土器 7 <4159~4179>



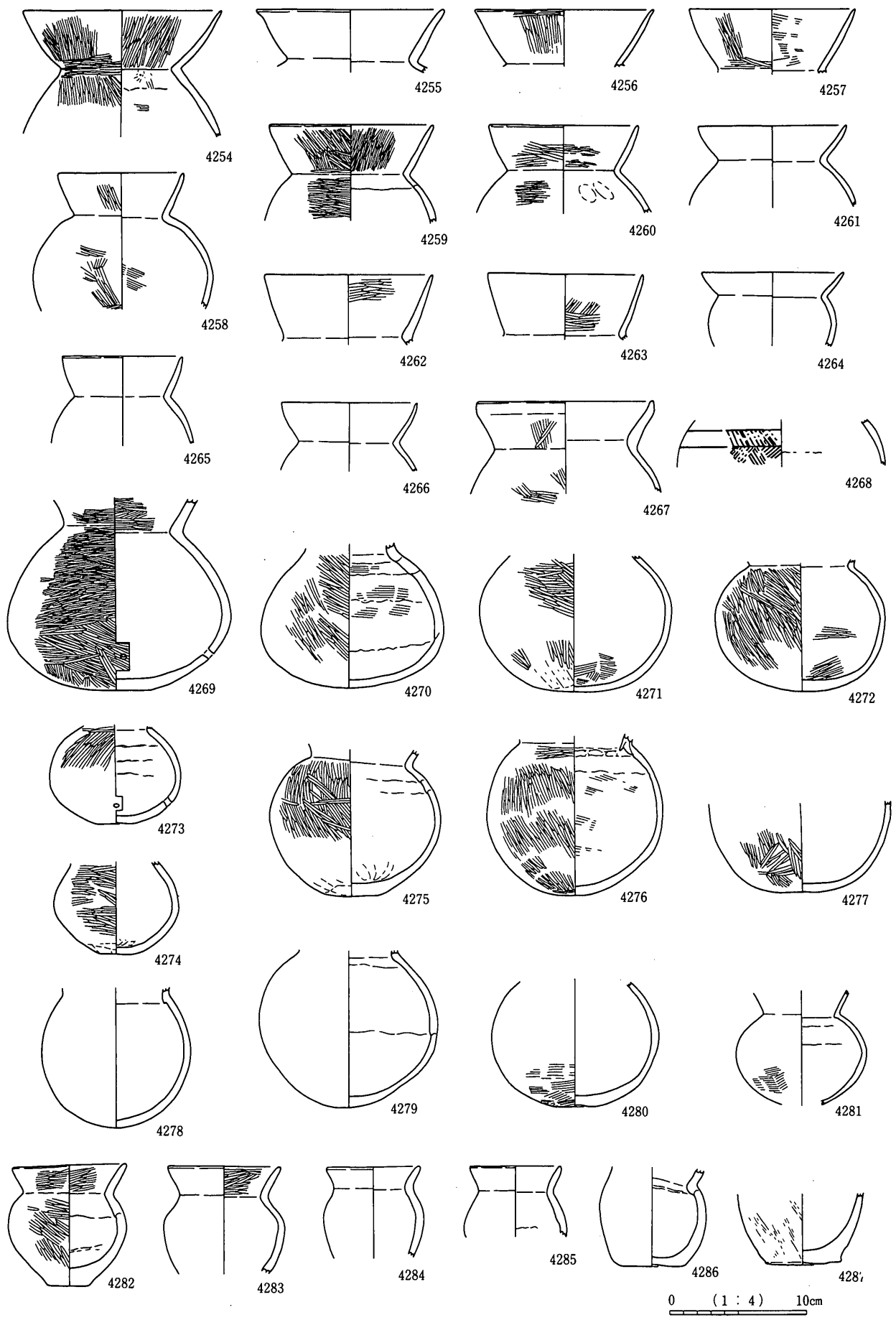
第365图 S Q 2016出土土器 8 <4180~4188>



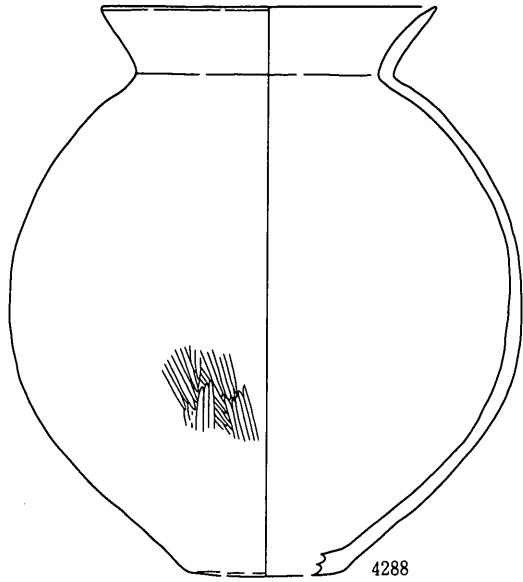
第366图 S Q 2016出土土器 9 <4189~4217>



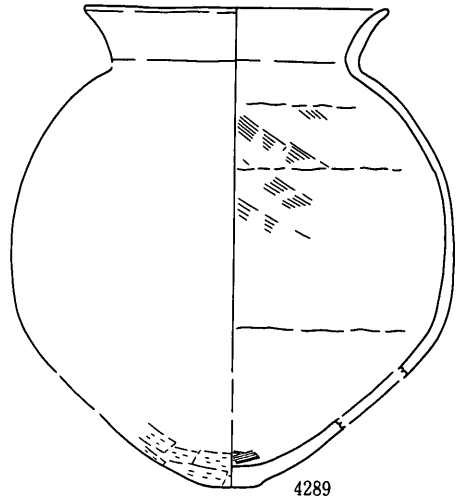
第367图 S Q 2016出土土器10<4218~4253>



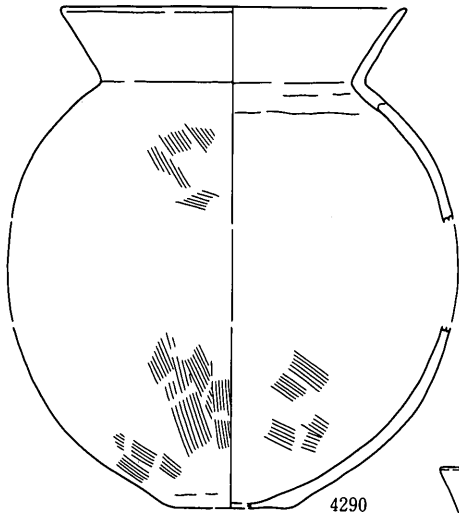
第368图 S Q 2016出土土器11<4254~4287>



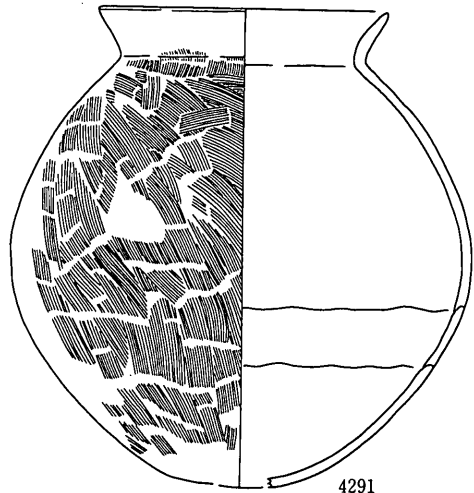
4288



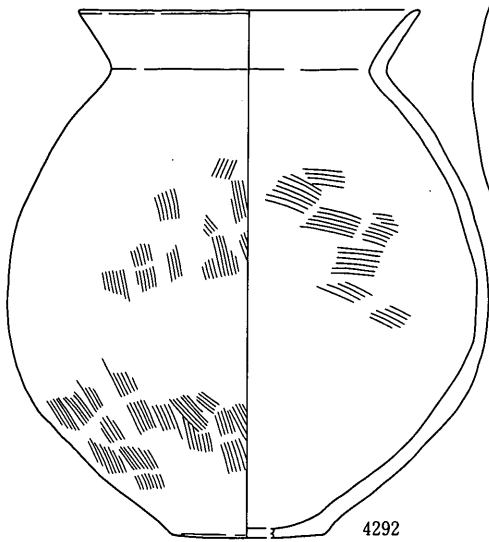
4289



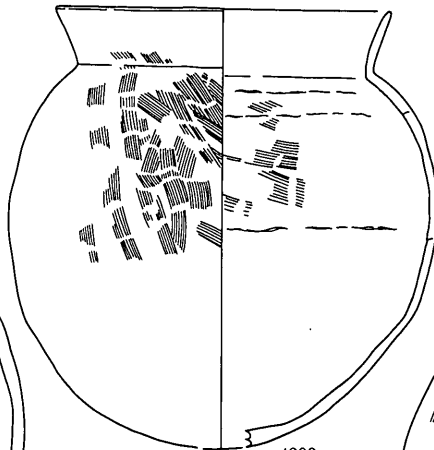
4290



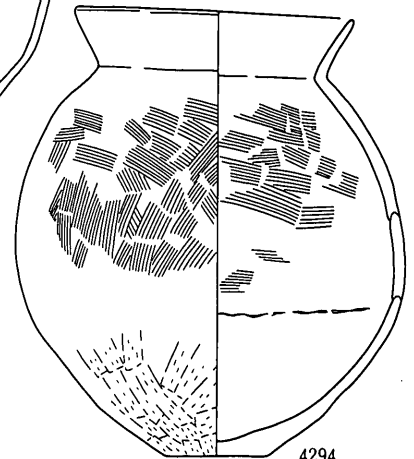
4291



4292



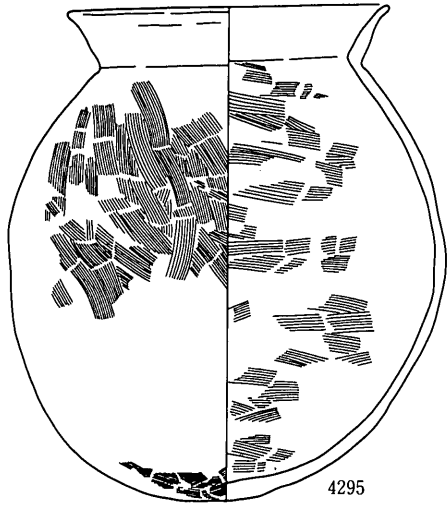
4293



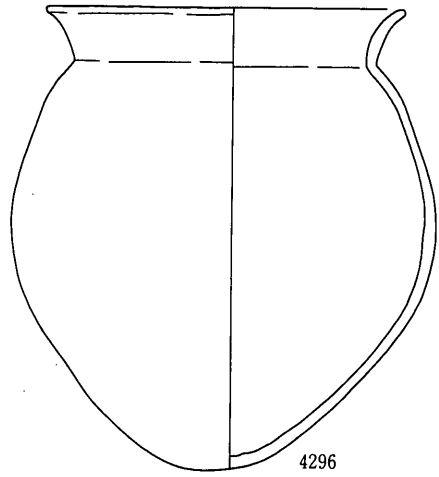
4294

0 (1:4) 10cm

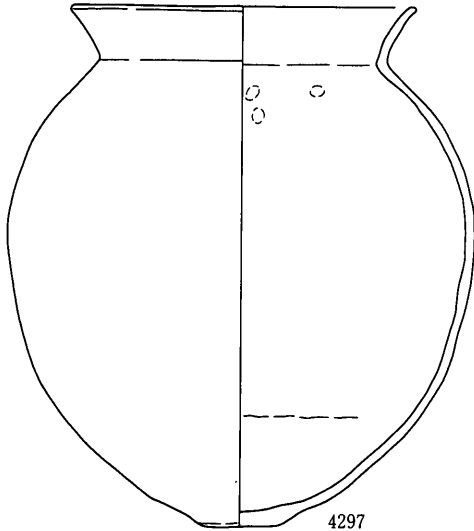
第369图 S Q 2016出土土器12<4288~4294>



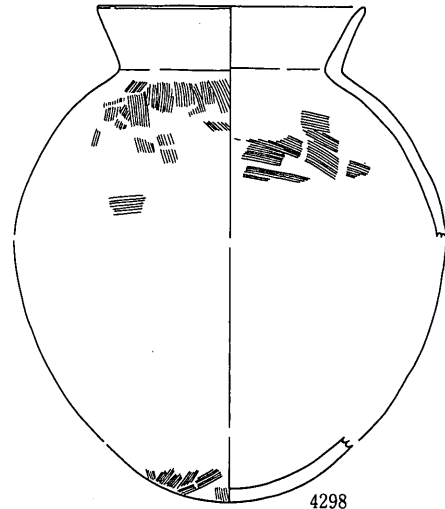
4295



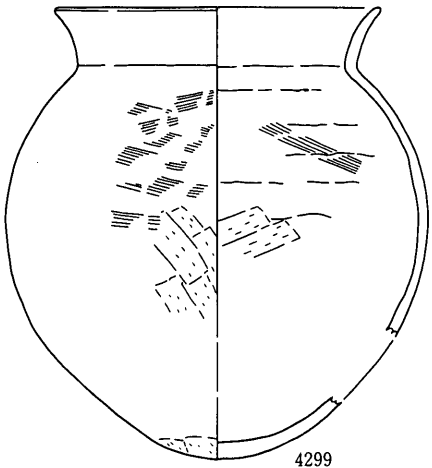
4296



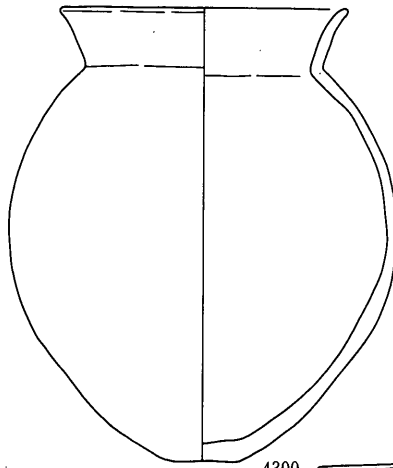
4297



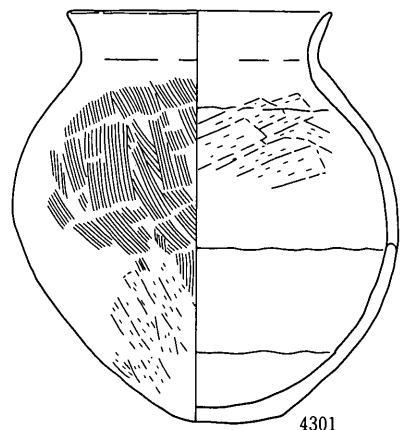
4298



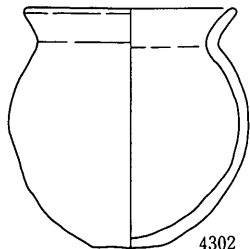
4299



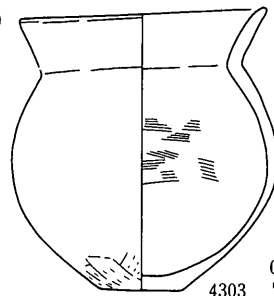
4300



4301



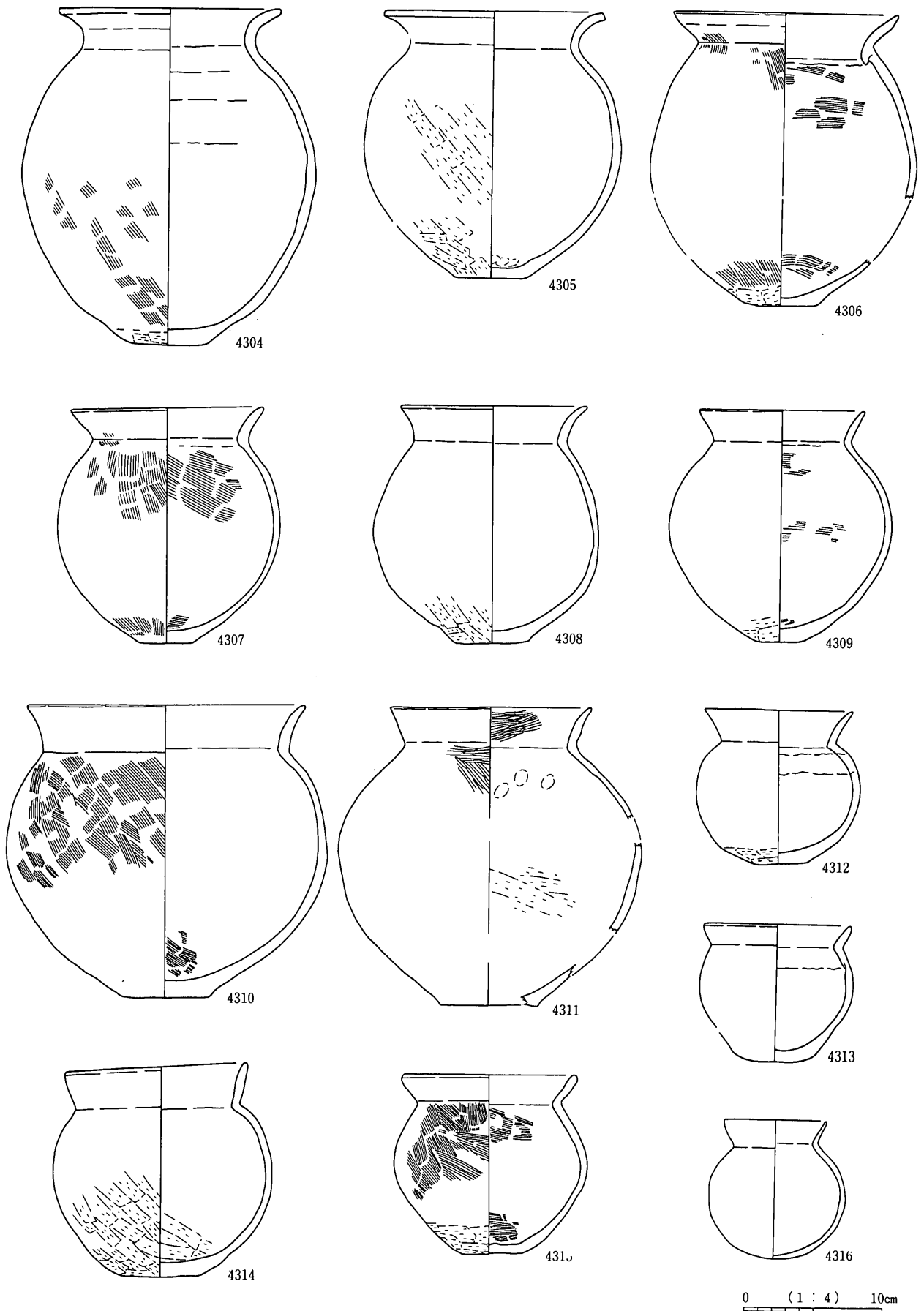
4302



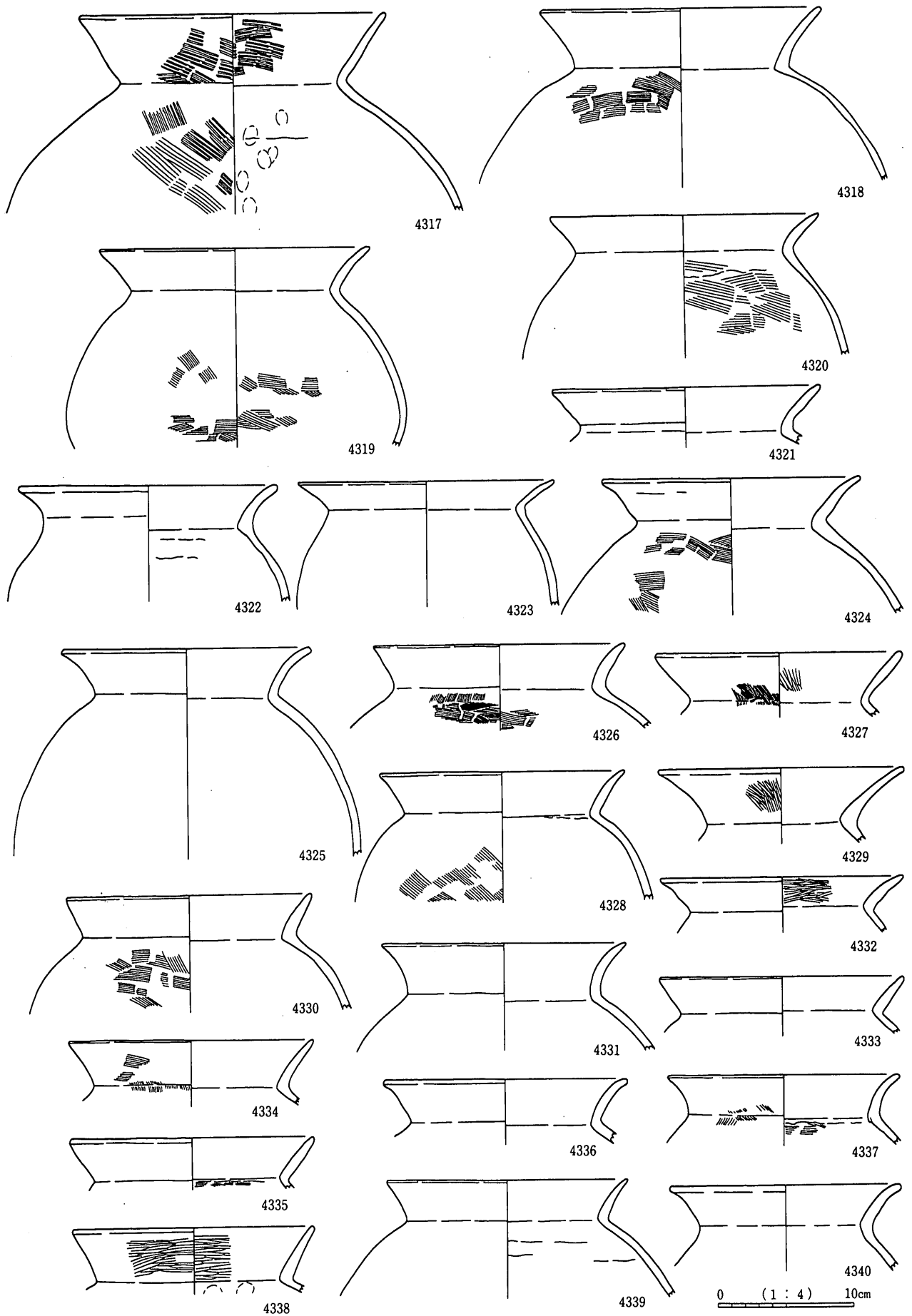
4303

0 (1 : 4) 10cm

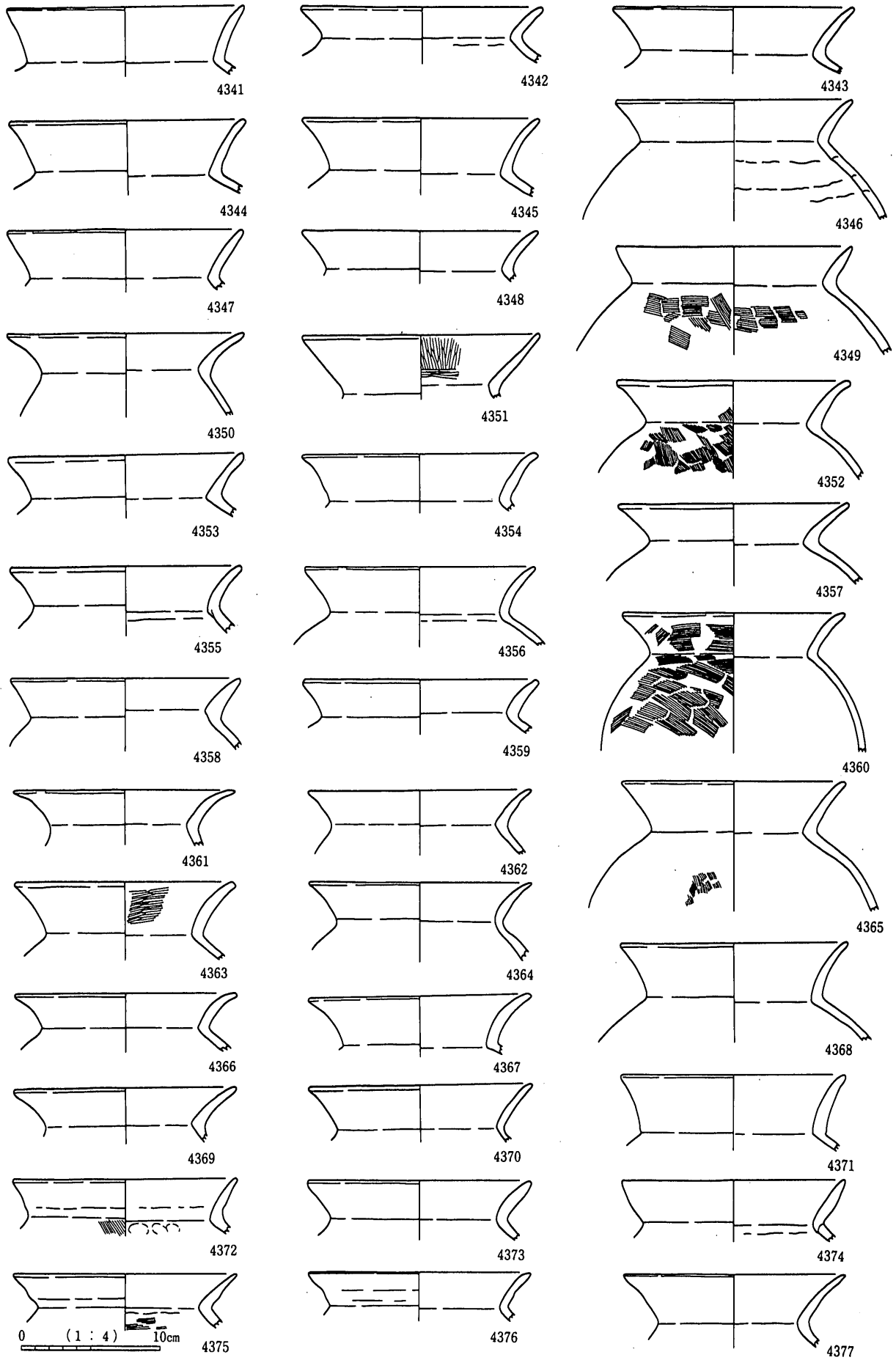
第370图 S Q 2016出土土器13<4295~4303>



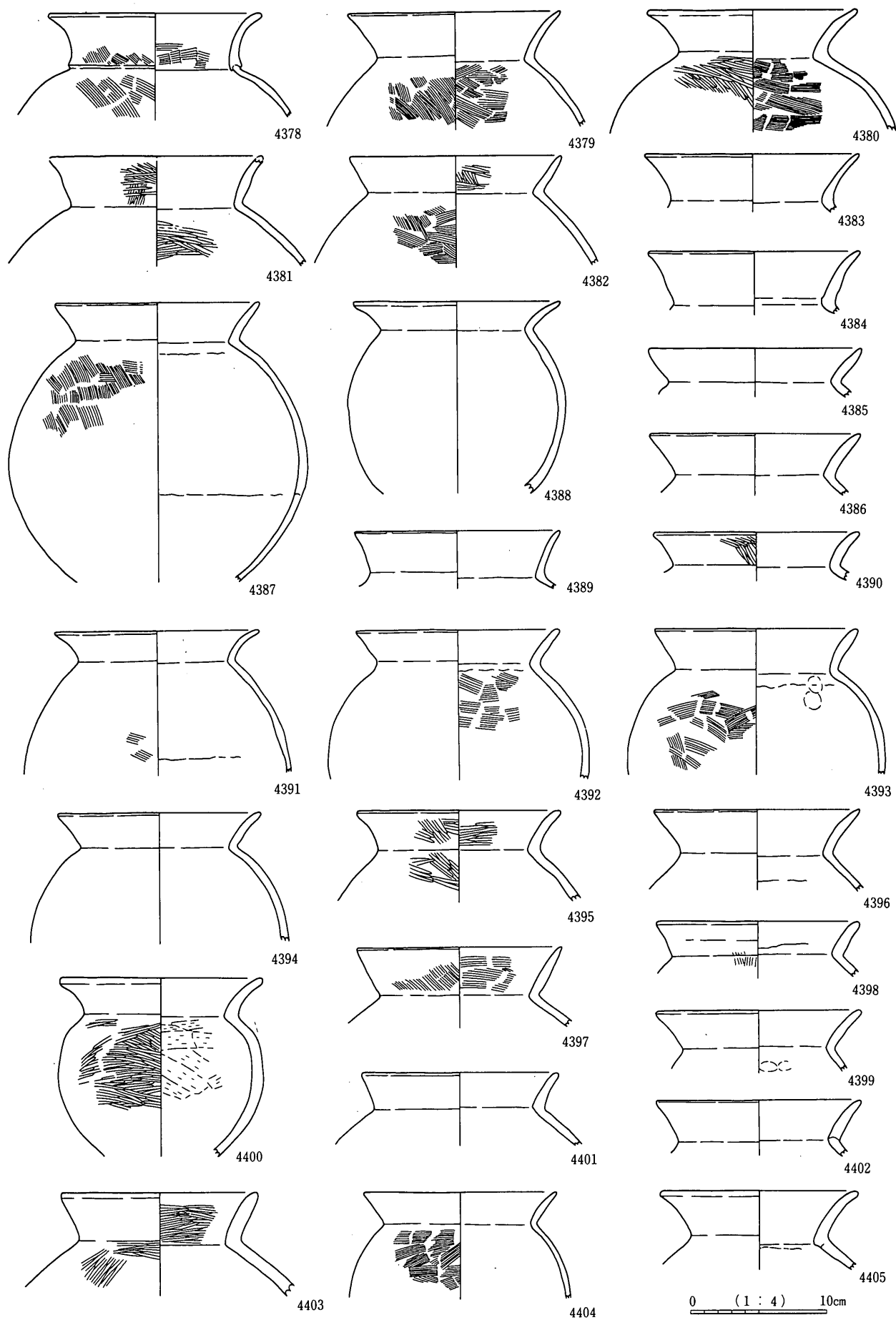
第371图 S Q 2016出土土器14<4304~4316>



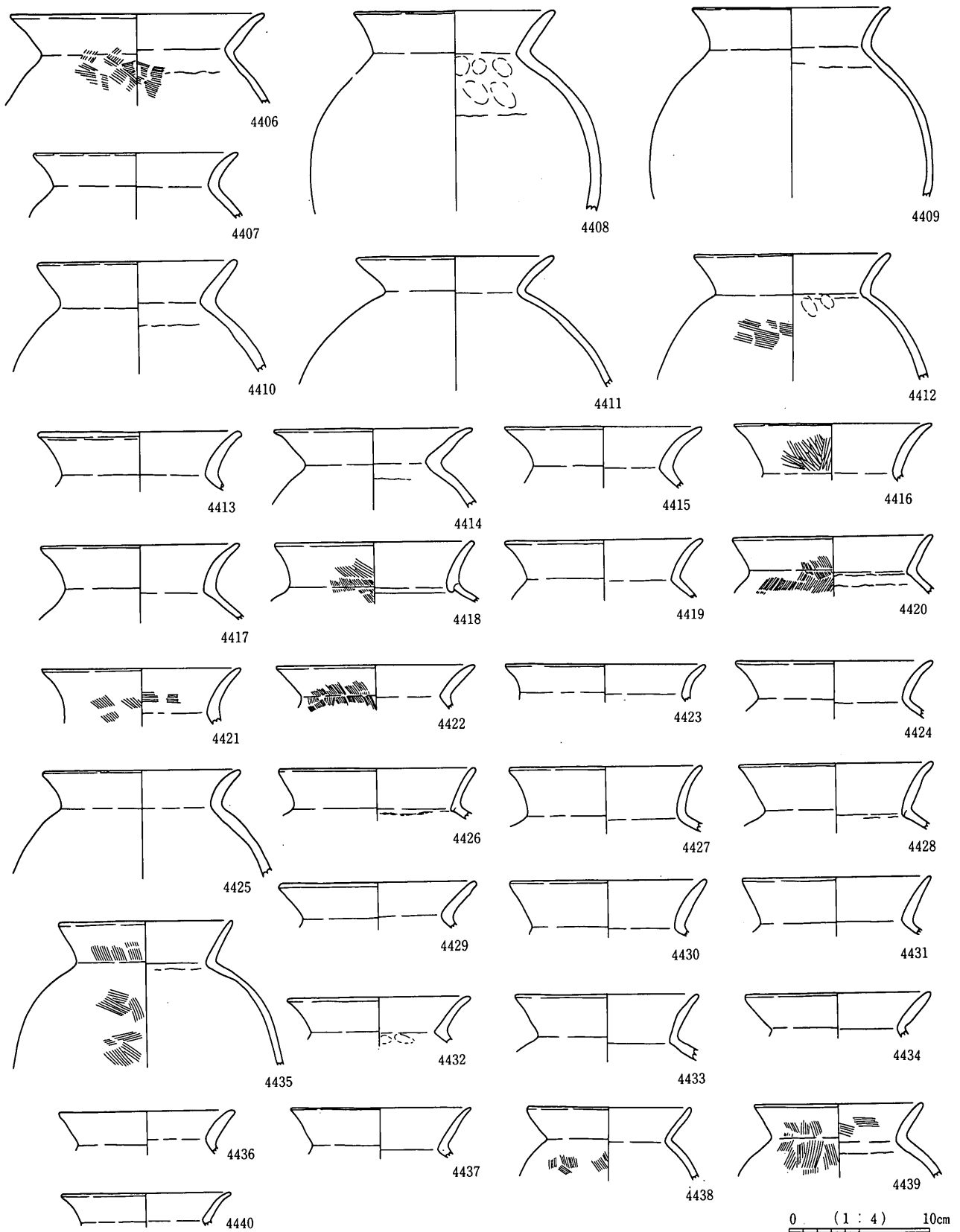
第372图 S Q 2016出土土器15<4317~4340>



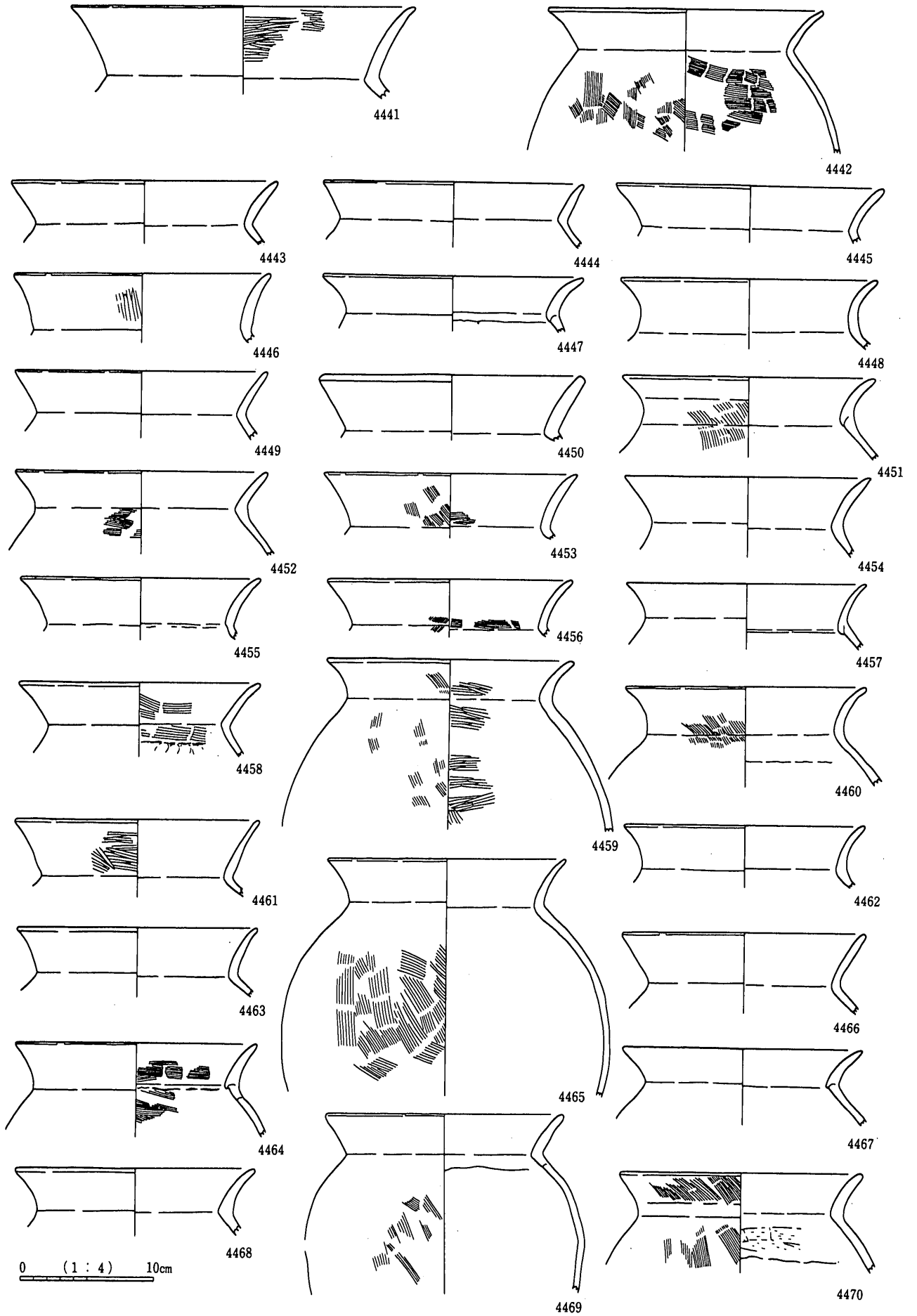
第373图 S Q 2016出土土器16<4341~4377>



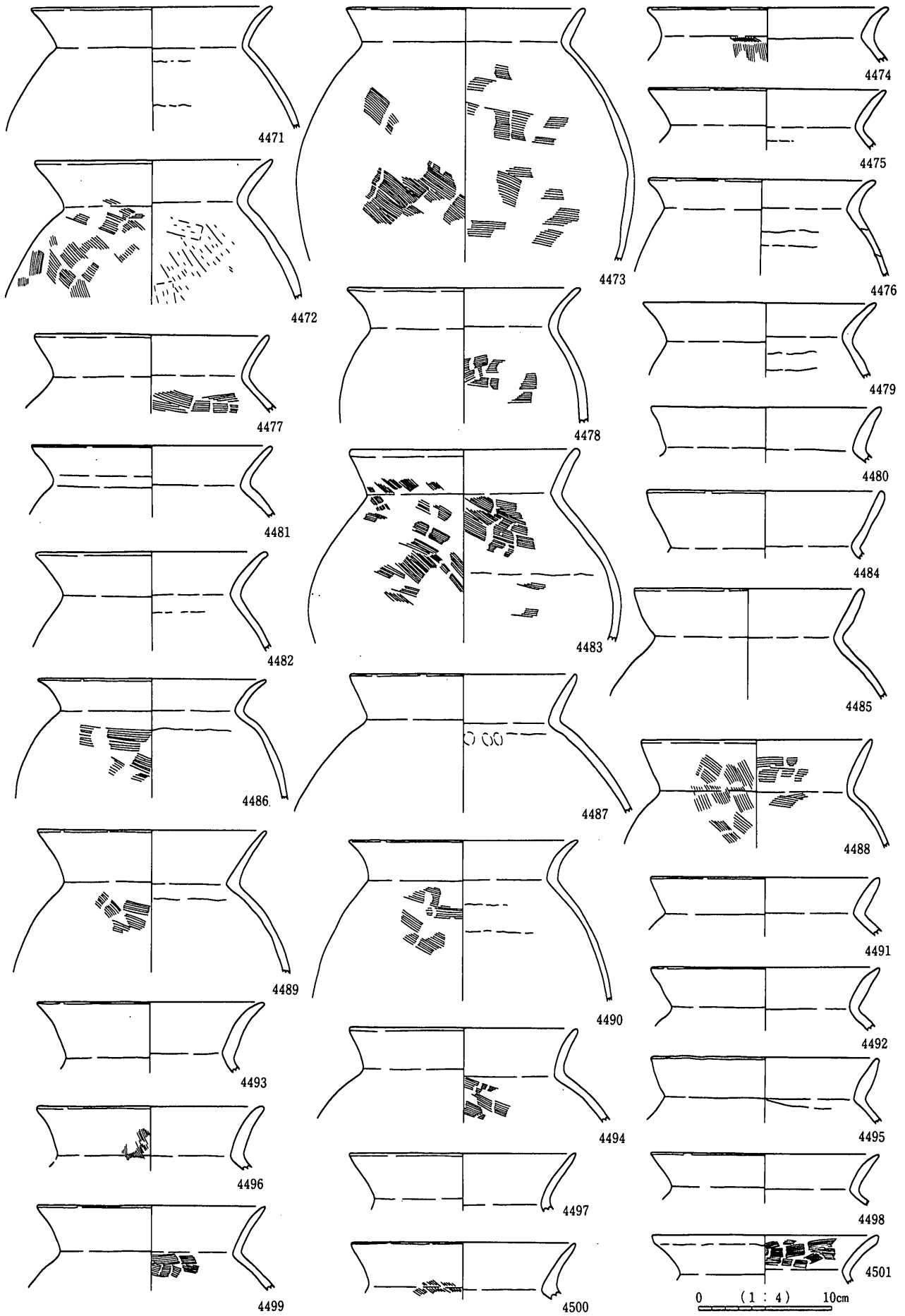
第374图 S Q 2016出土土器17<4378~4405>



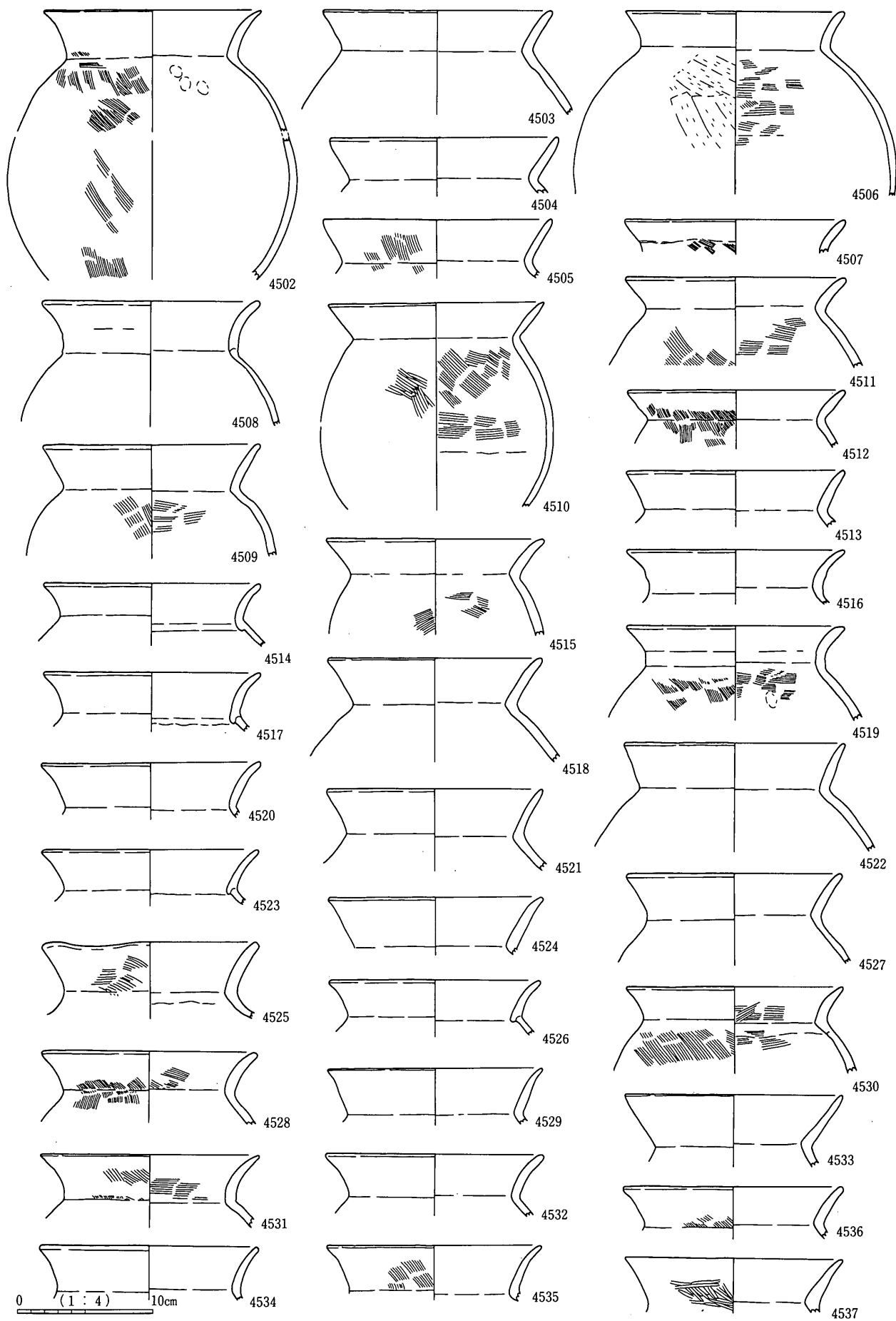
第375图 S Q 2016出土土器18<4406~4440>



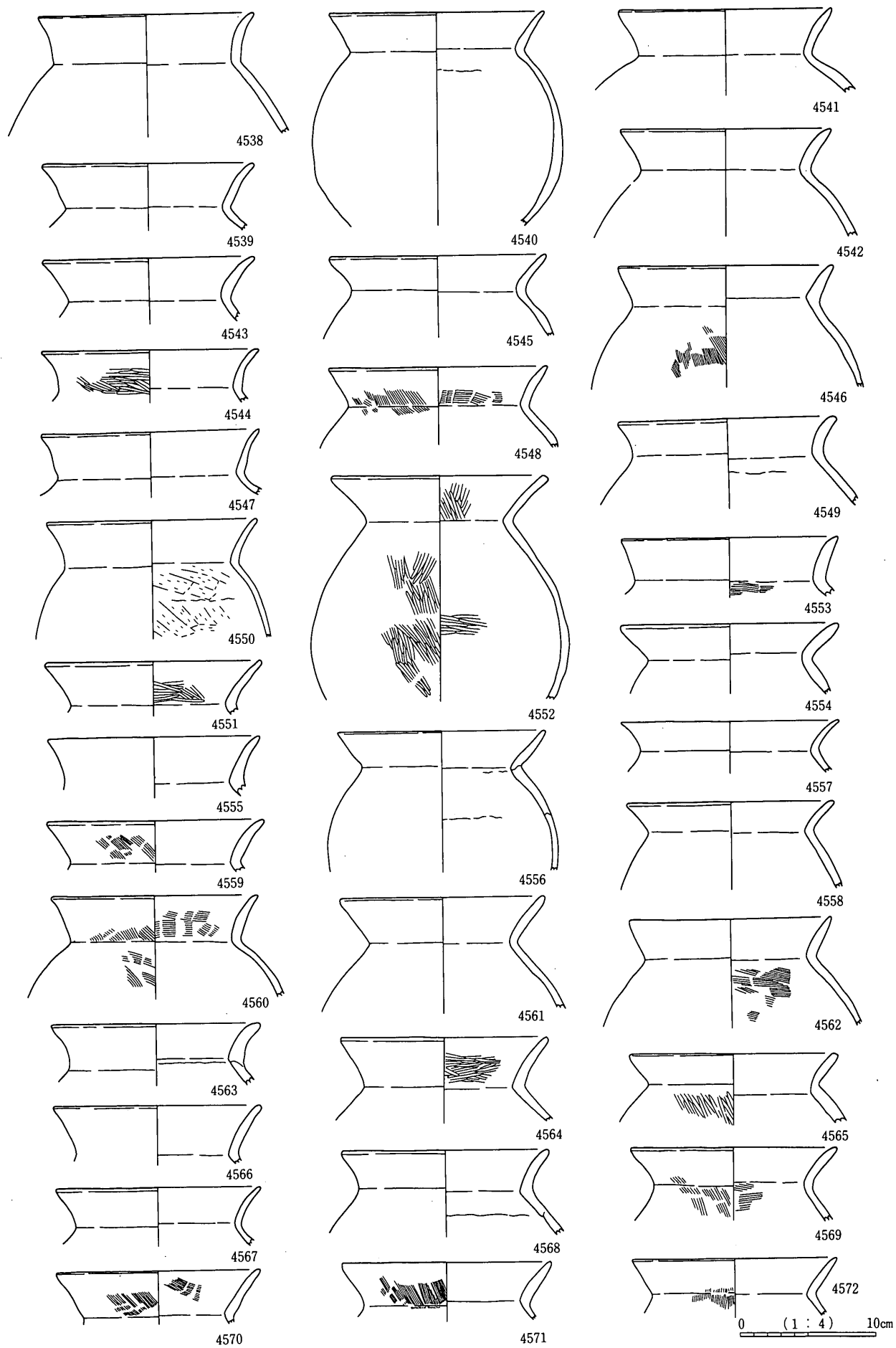
第376图 S Q 2016出土土器19<4441~4470>



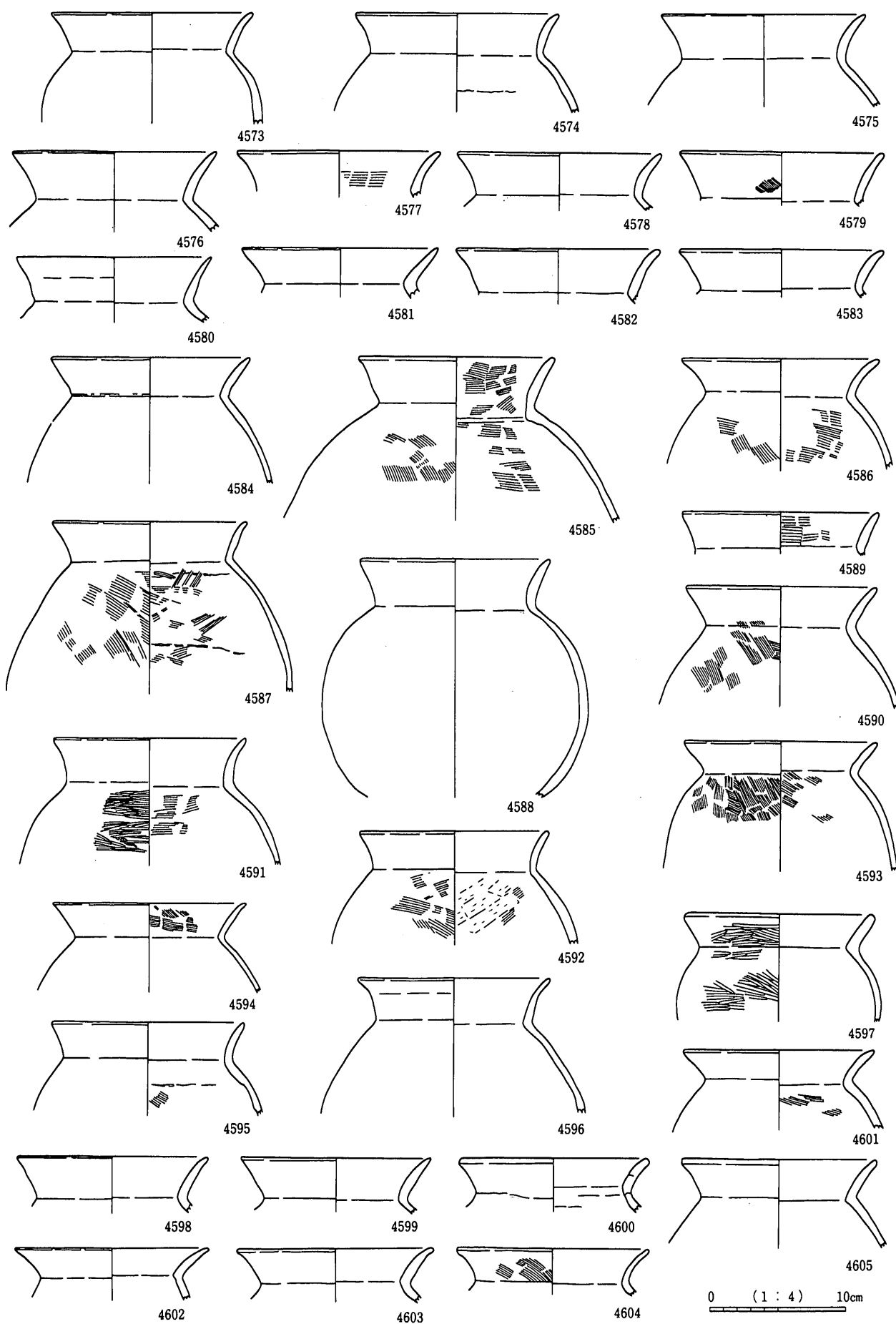
第377图 SQ2016出土土器20<4471~4501>



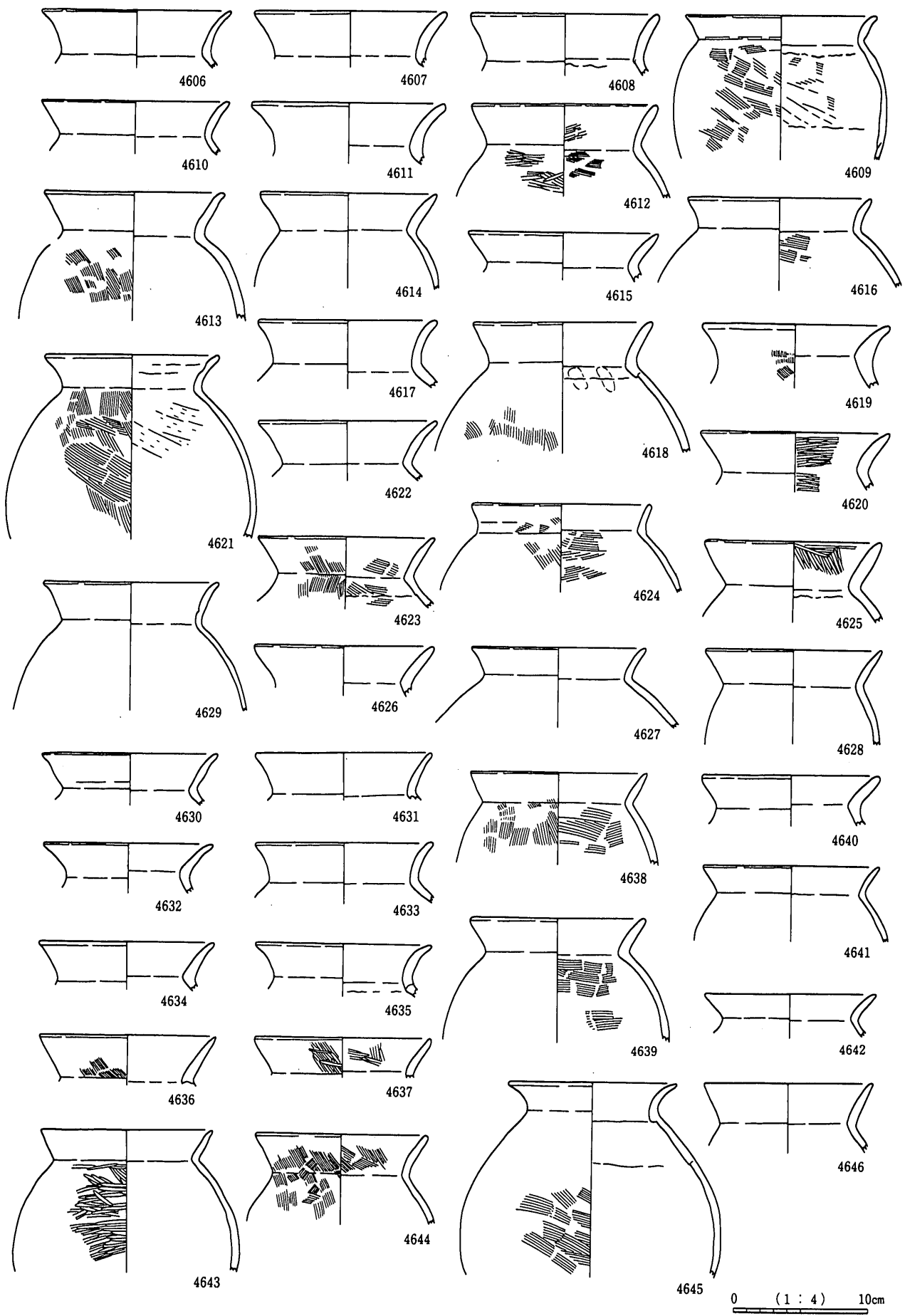
第378图 S Q 2016出土土器21<4502~4537>



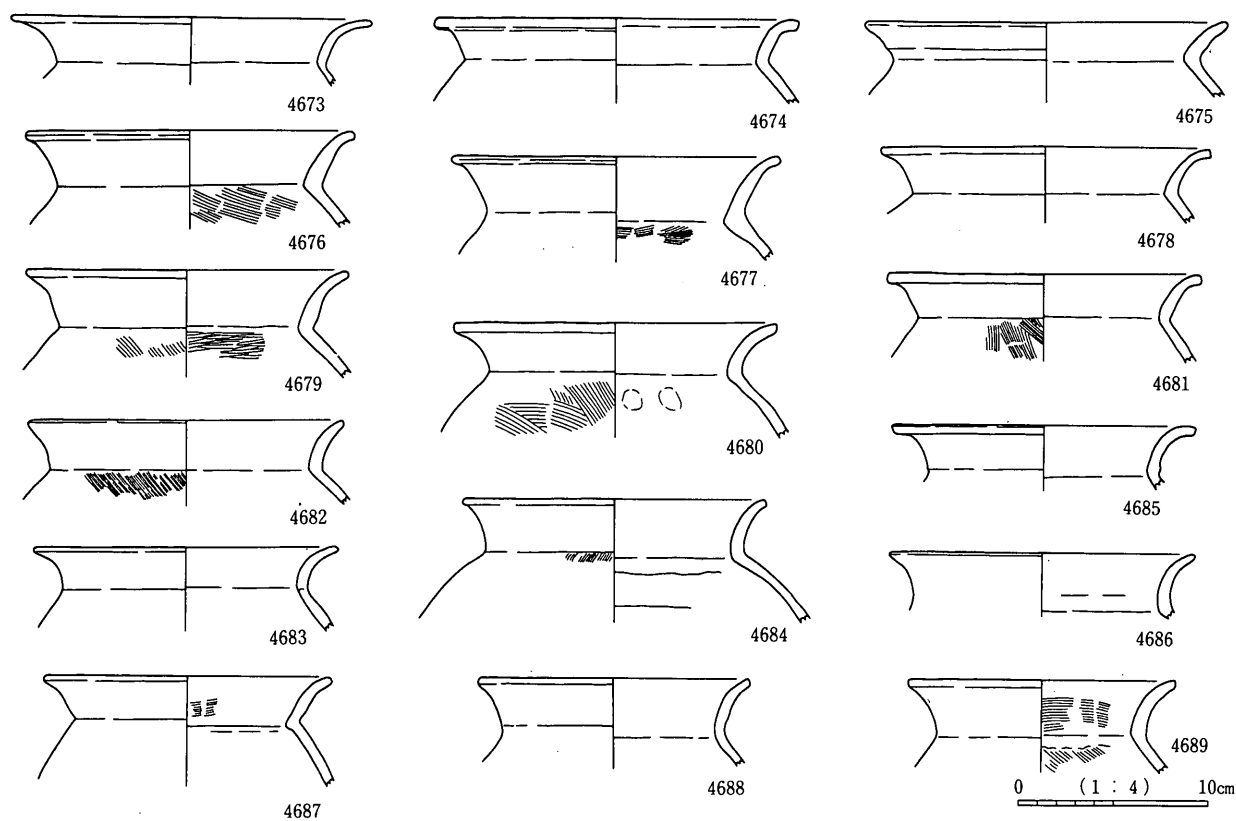
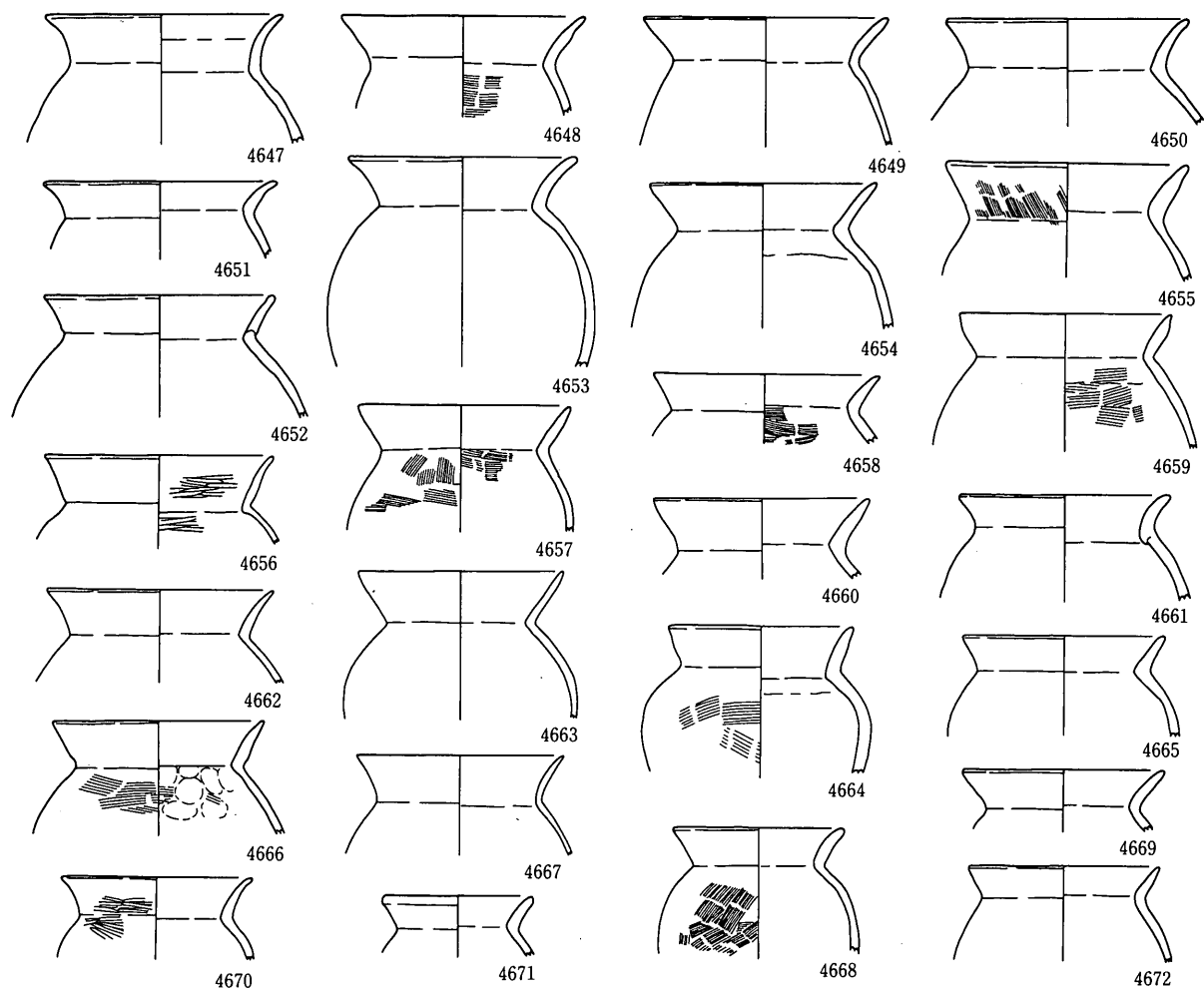
第379图 S Q 2016出土土器22<4538~4572>



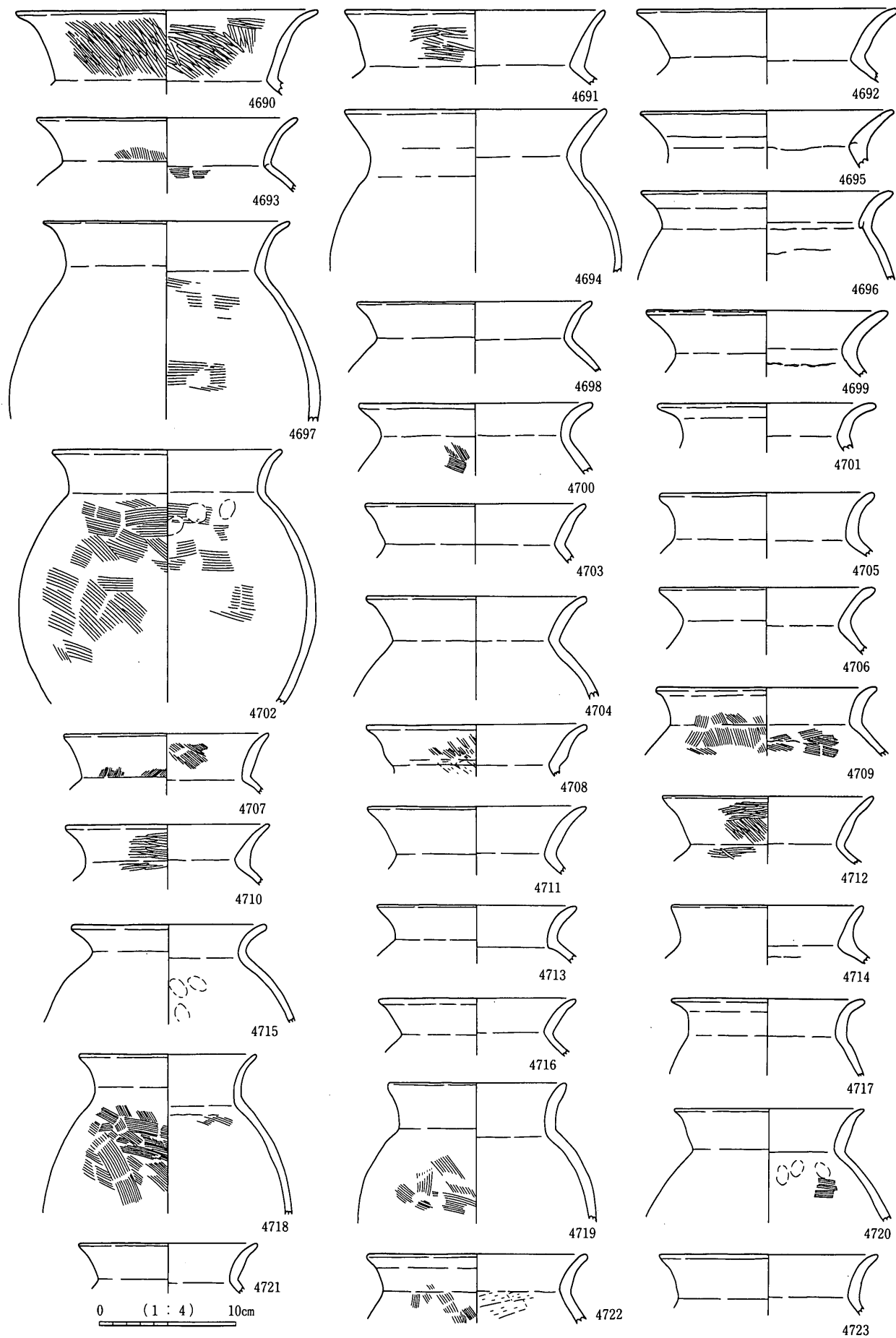
第380图 S Q 2016出土土器23<4573~4605>



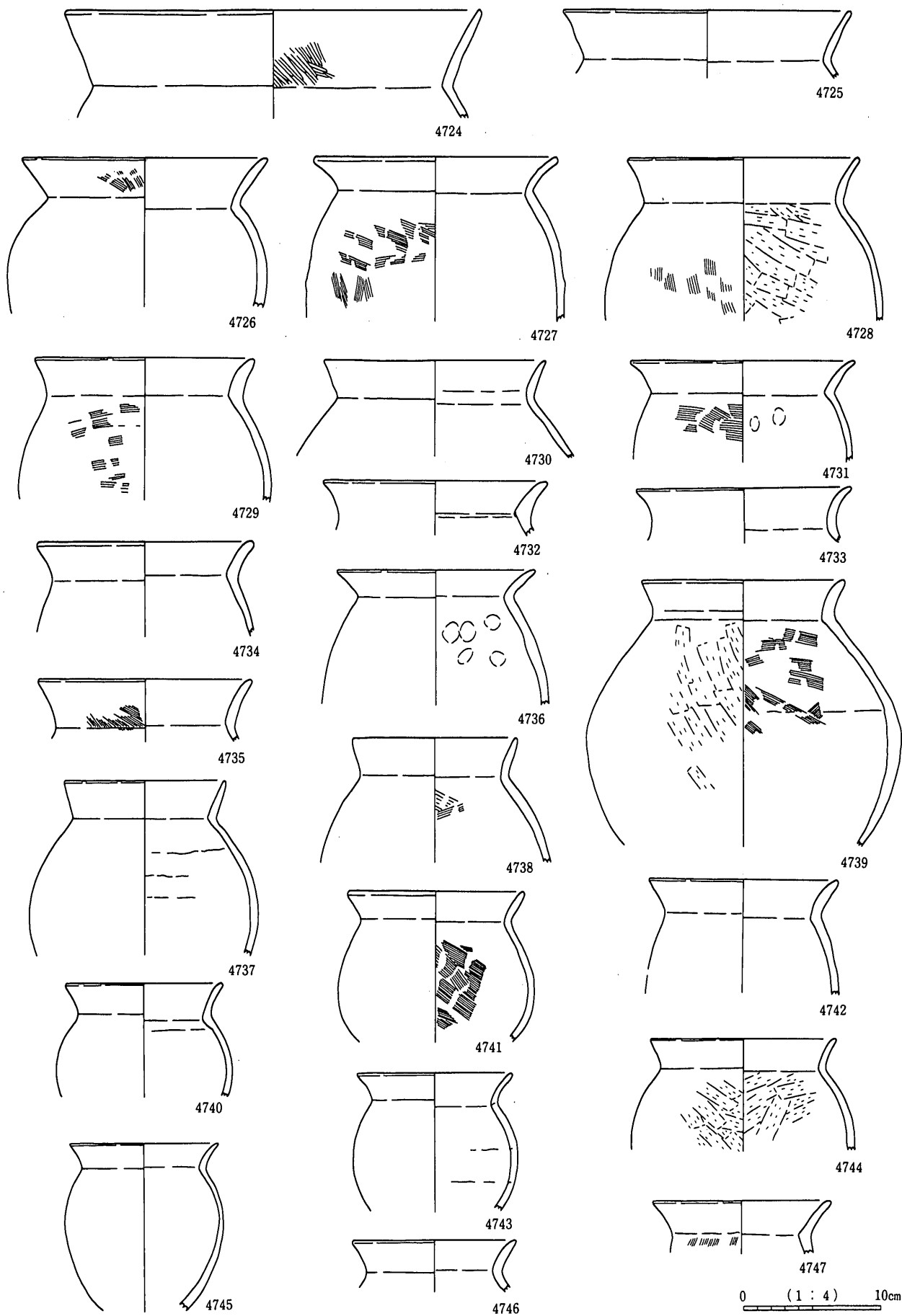
第381图 S Q 2016出土土器24<4606~4646>



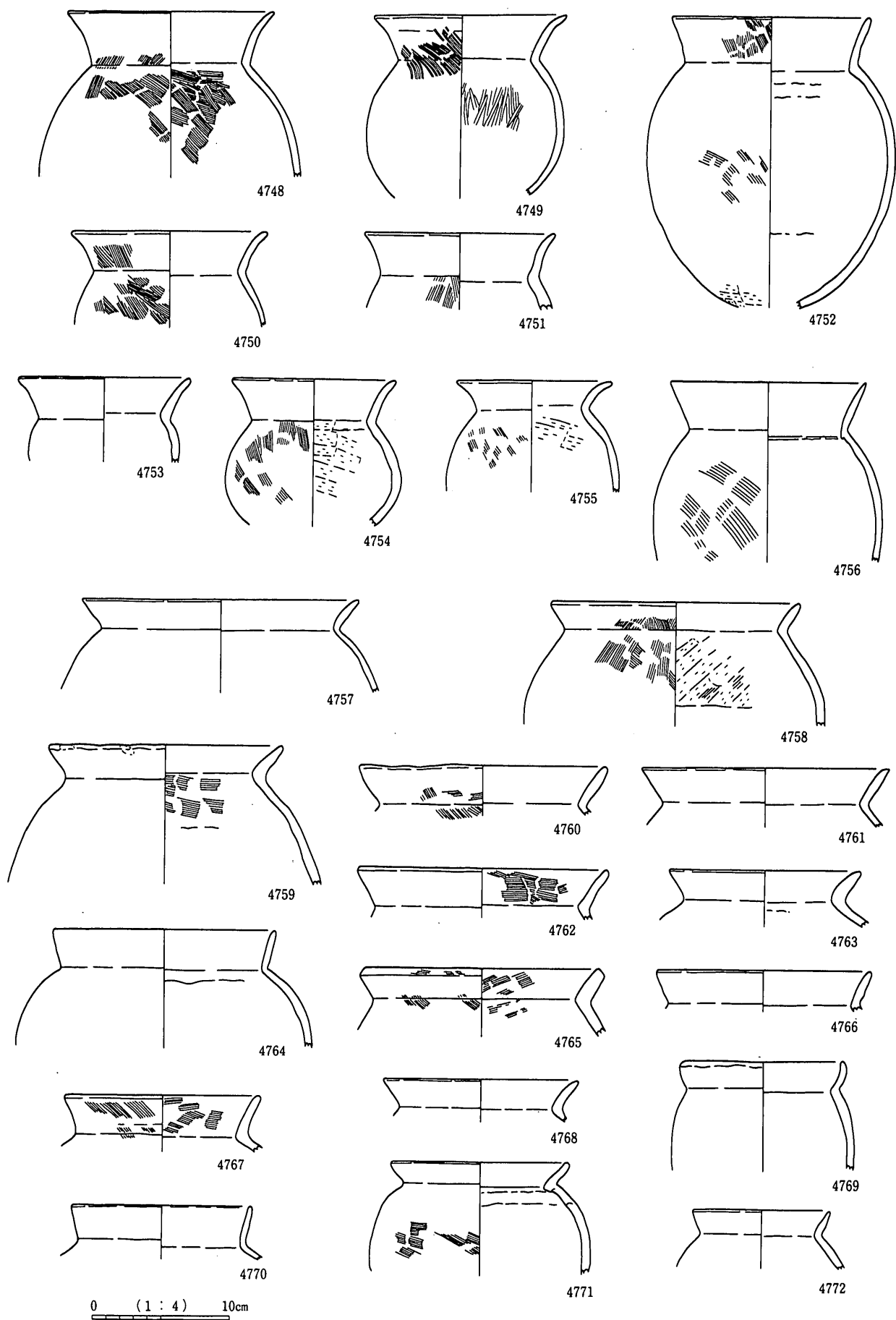
第382图 S Q 2016出土土器25<4647~4689>



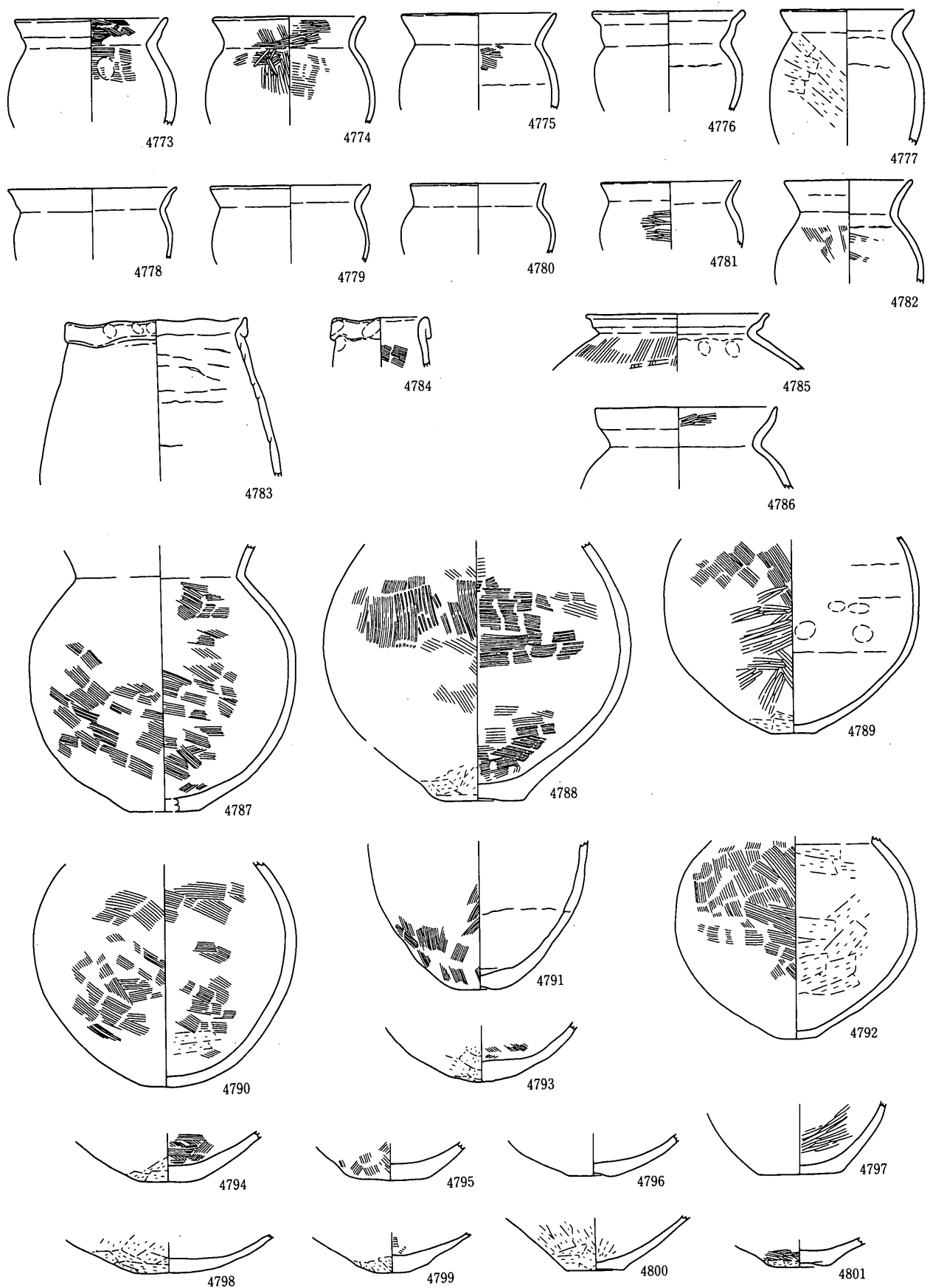
第383图 S Q 2016出土土器26<4690~4723>



第384图 S Q 2016出土土器27<4724~4747>

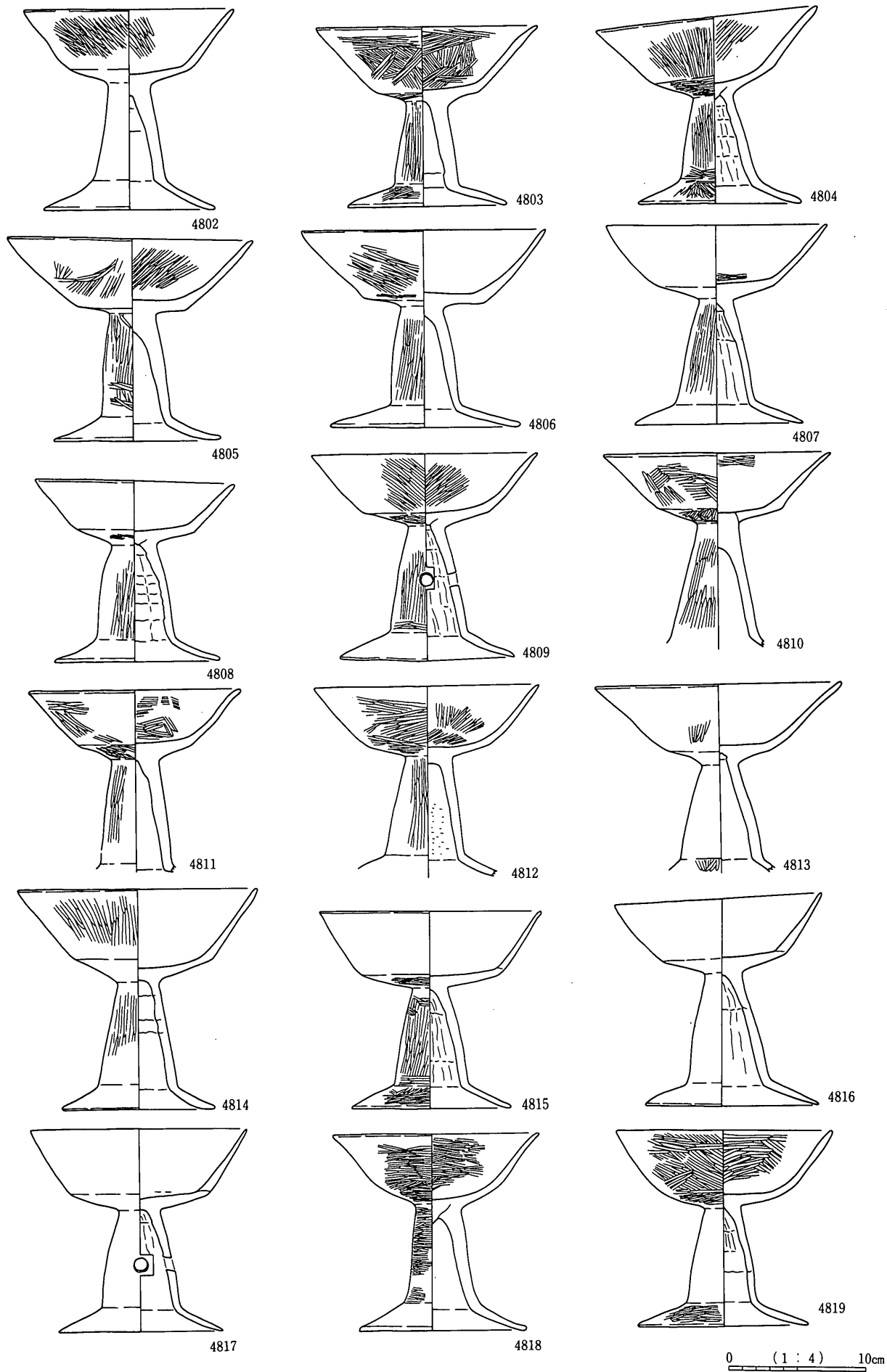


第385图 S Q 2016出土土器28<4748~4772>

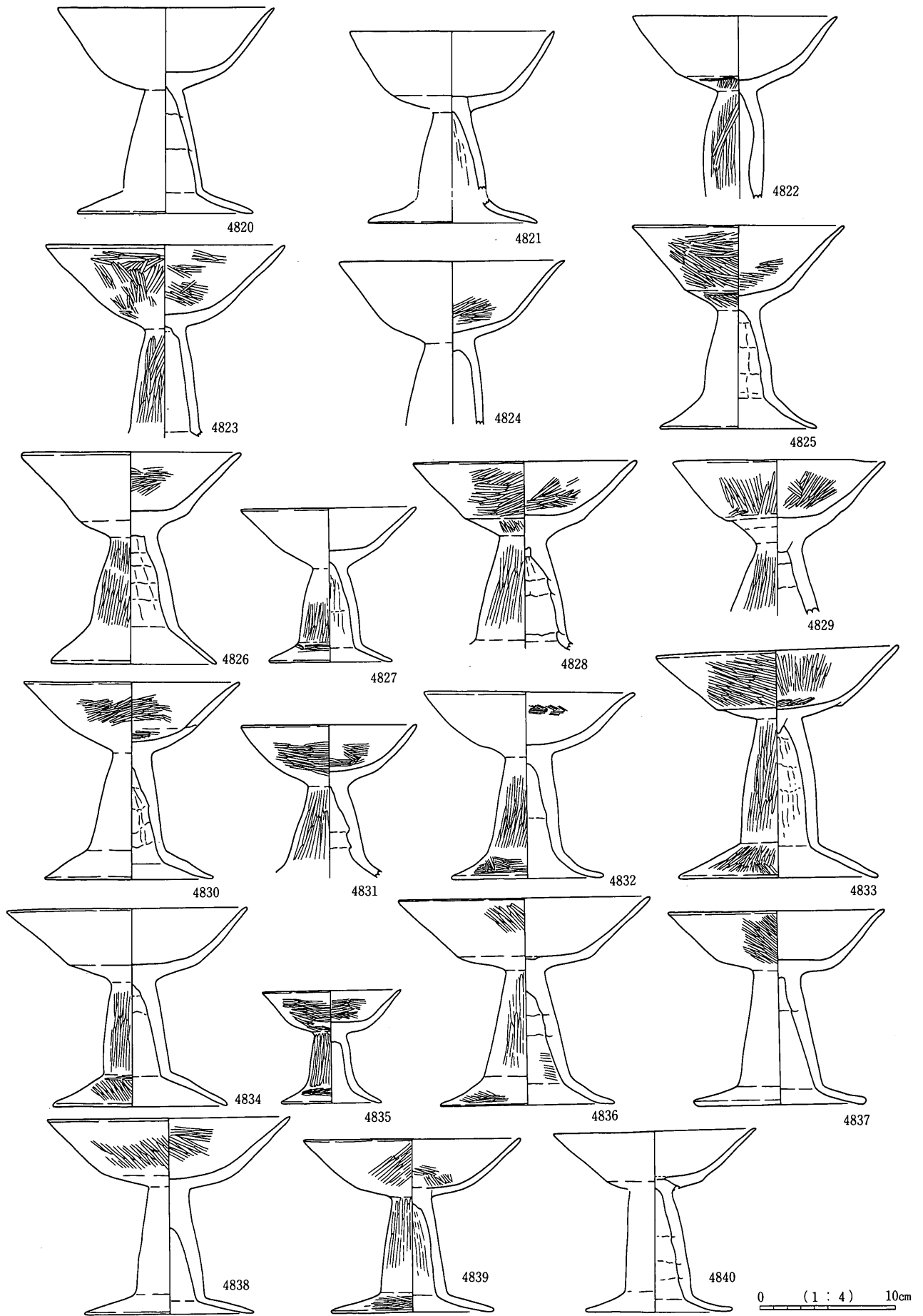


0 (1 : 4) 10cm

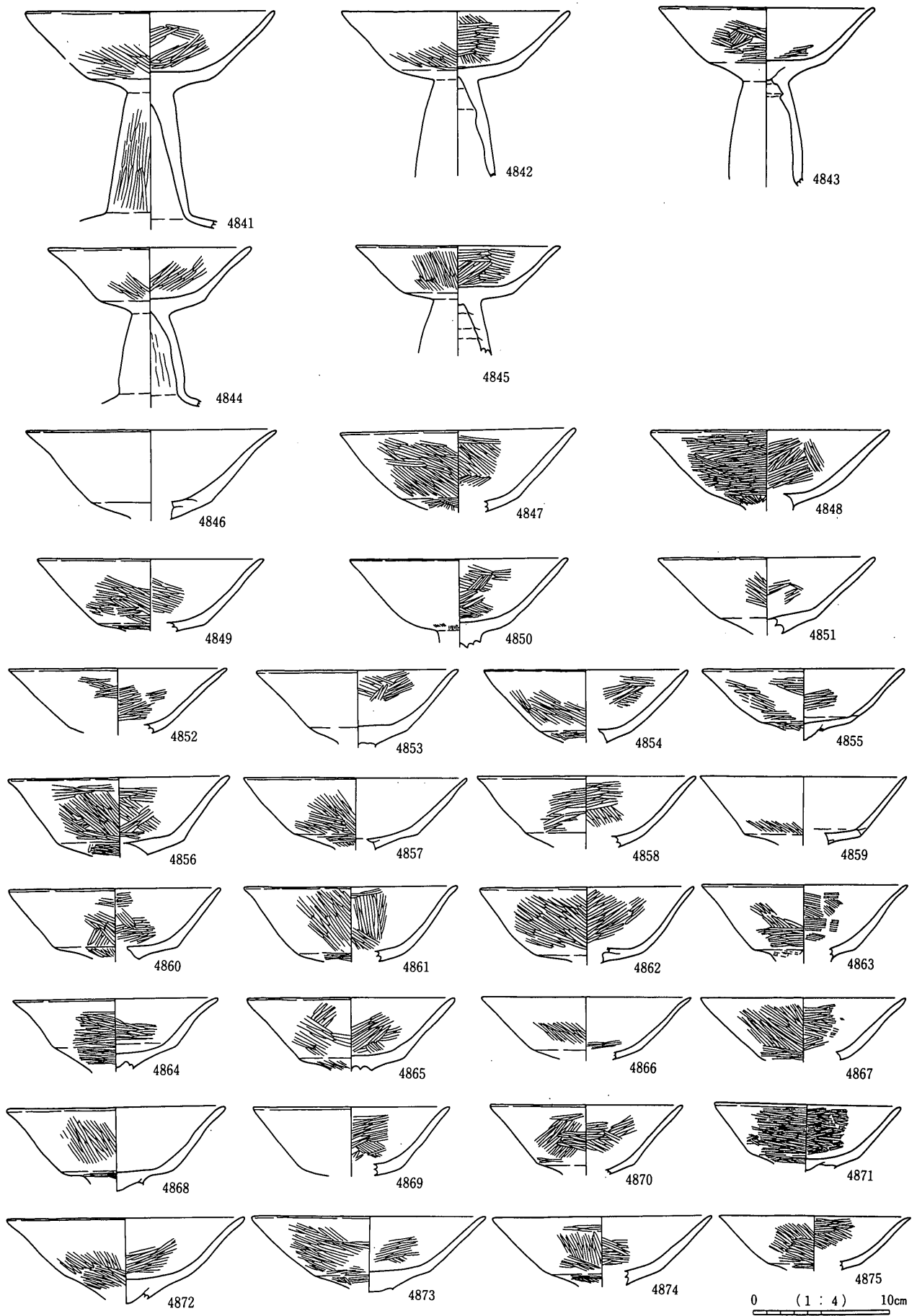
第386图 S Q 2016出土土器29<4773~4801>



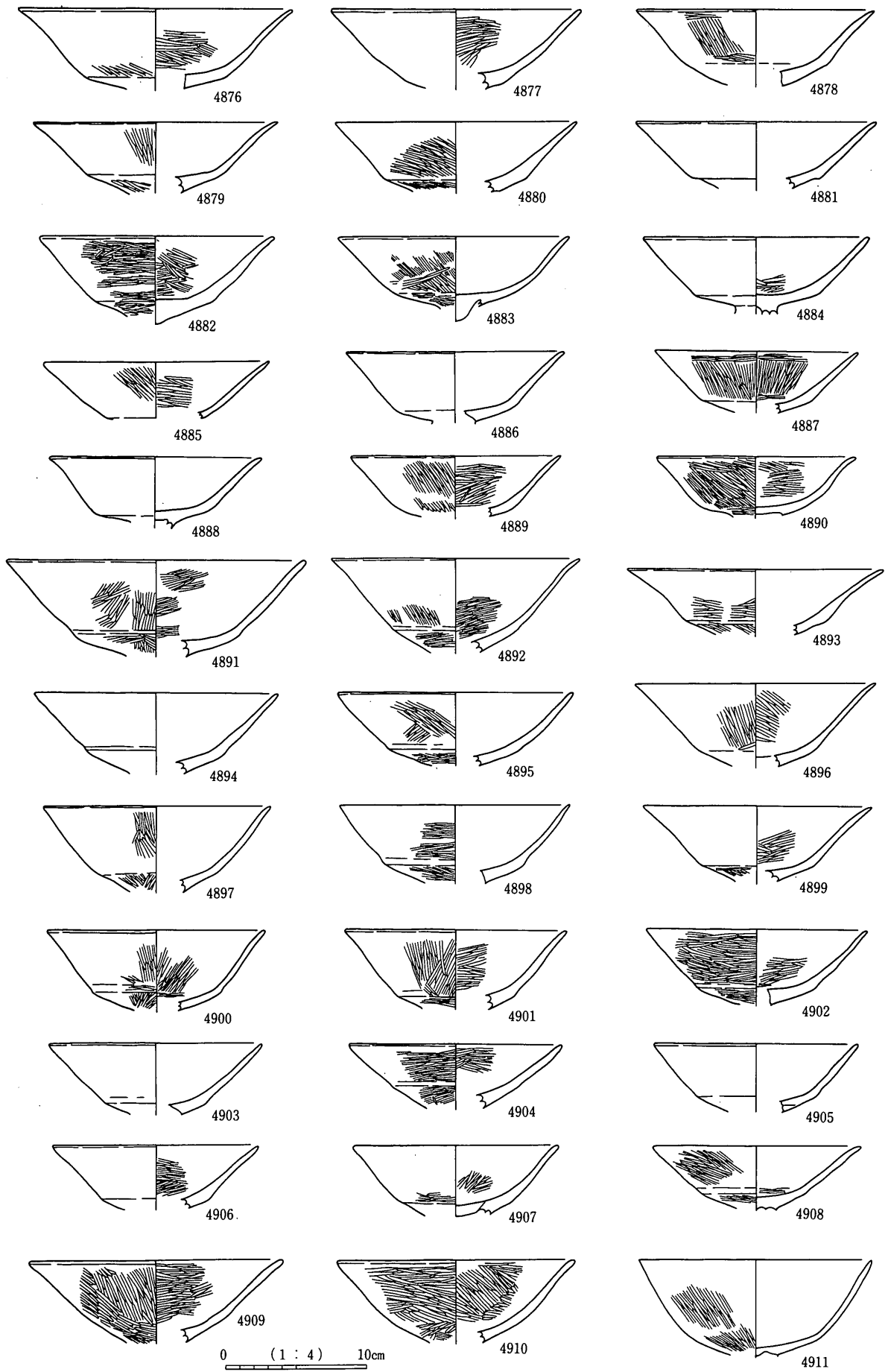
第387图 S Q 2016出土土器30<4802~4819>



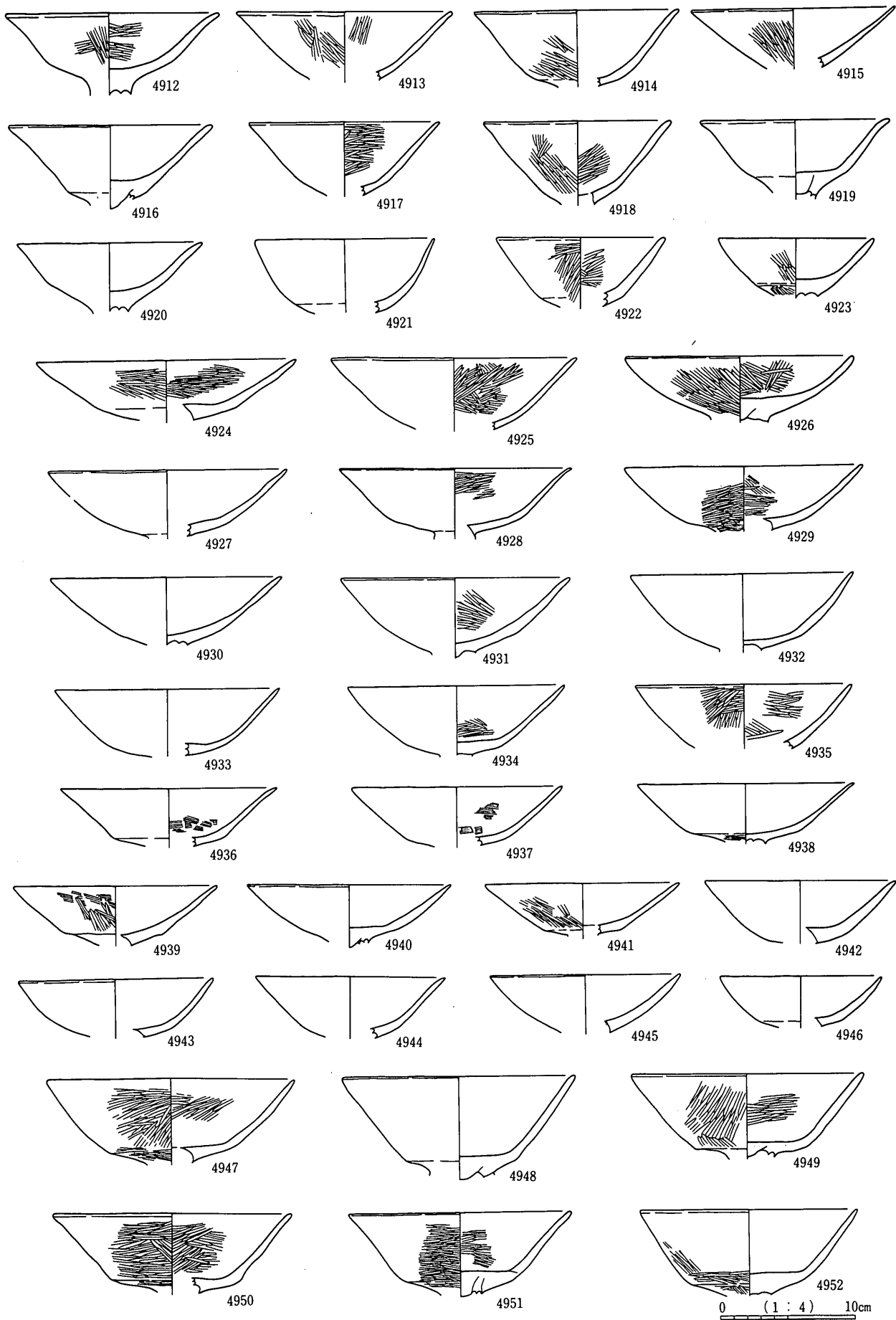
第388图 S Q 2016出土土器31<4820~4840>



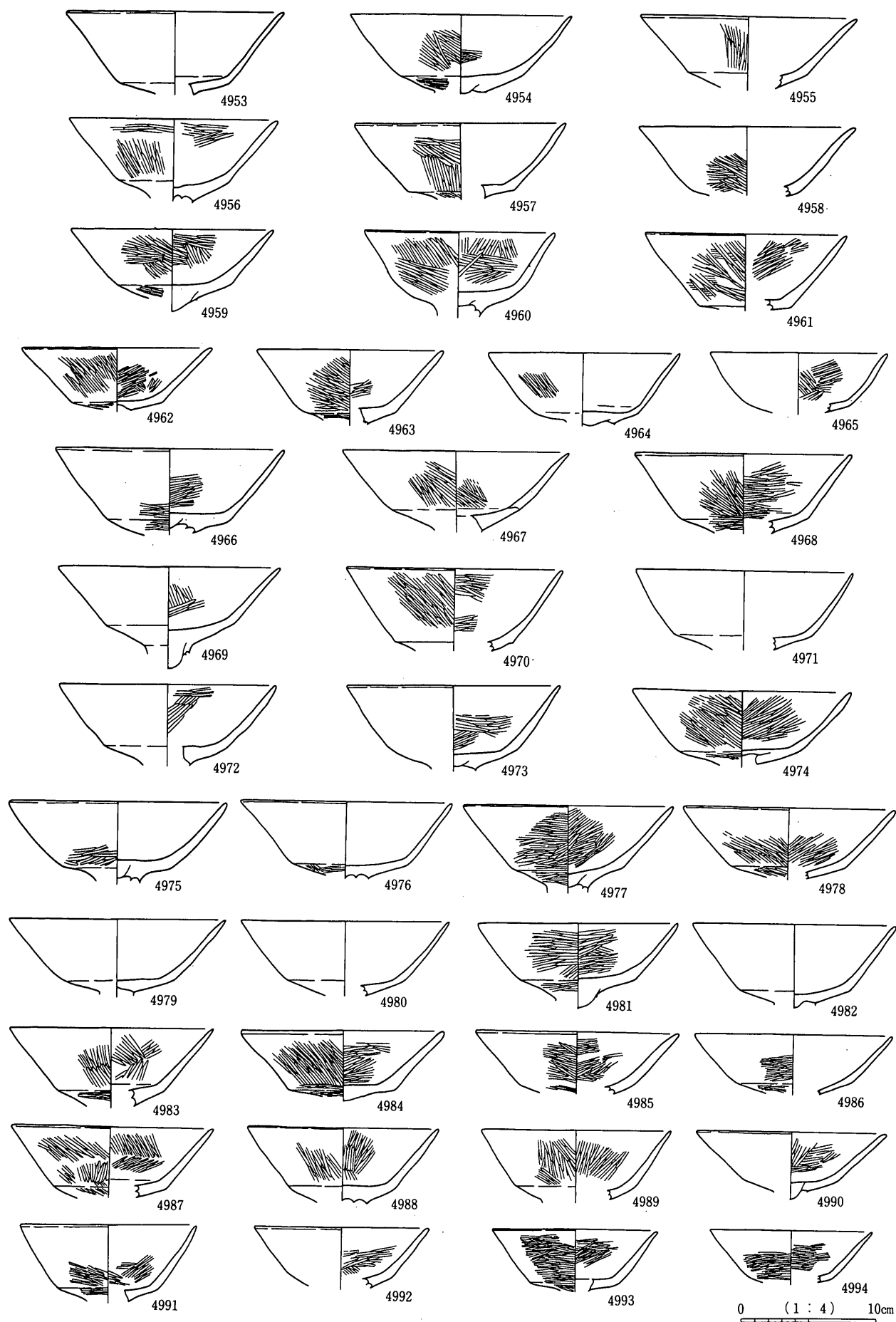
第389图 S Q 2016出土土器32<4841~4875>



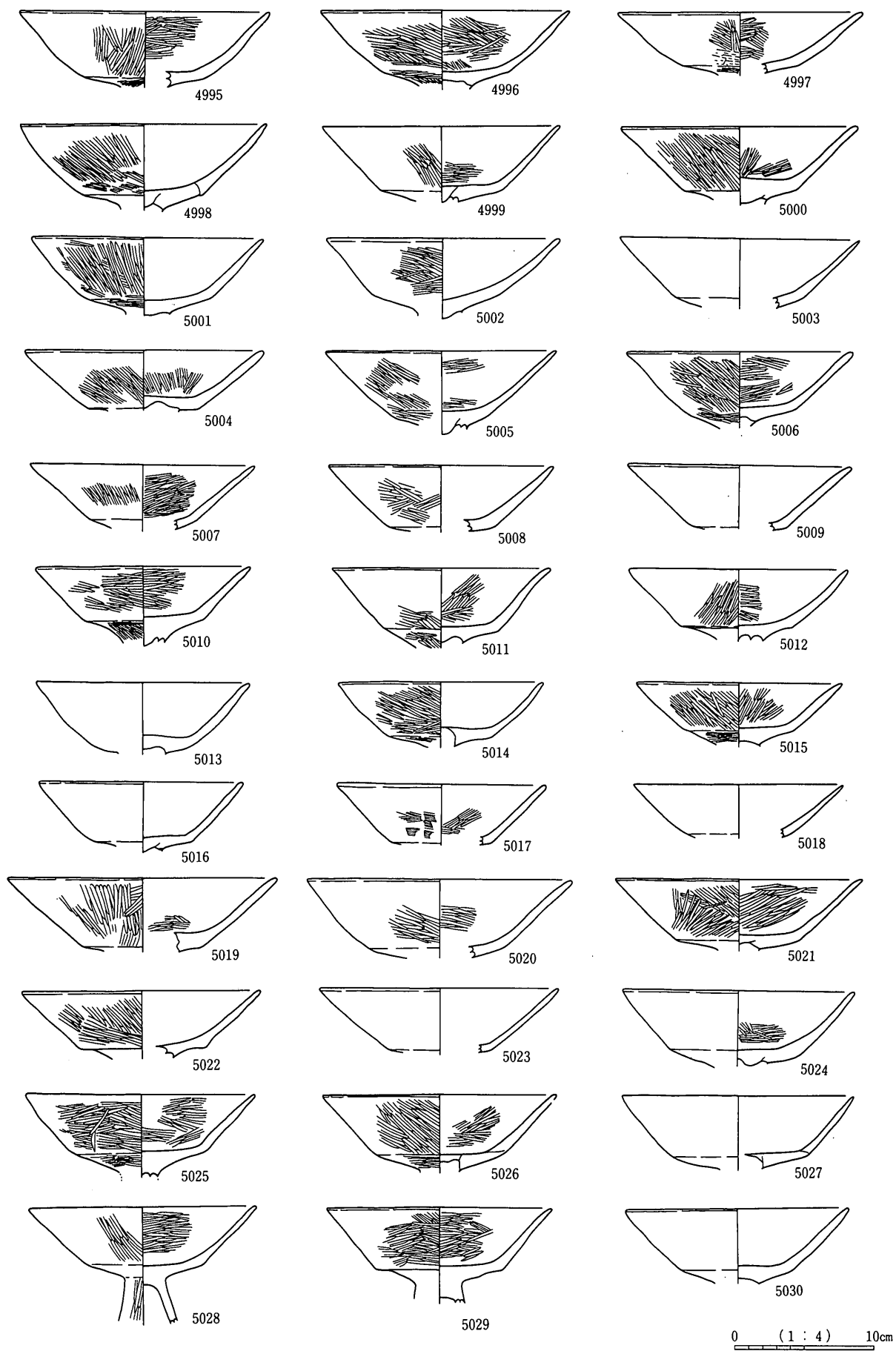
第390图 S Q 2016出土土器33<4876~4911>



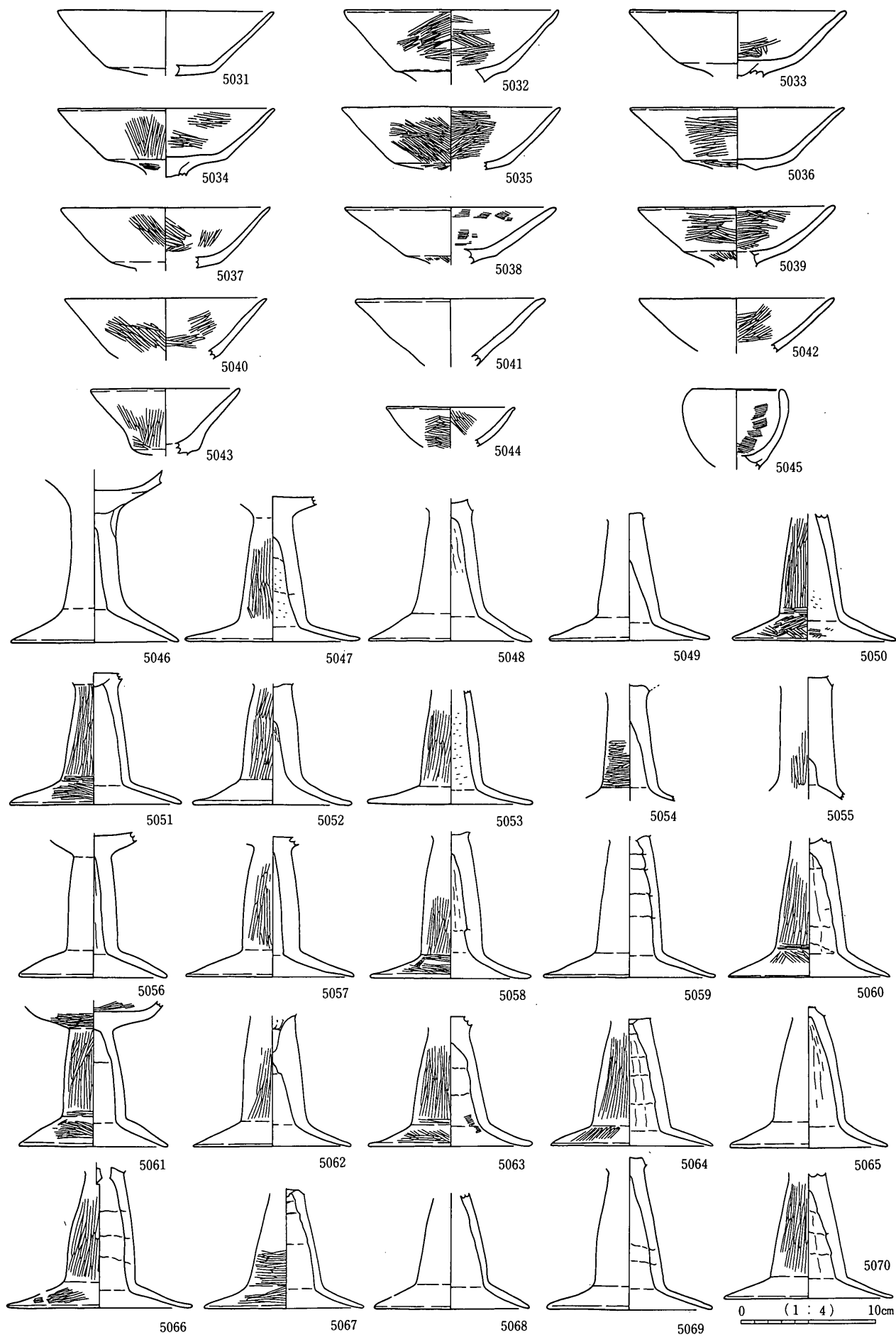
第391图 S Q 2016出土土器34<4912~4952>



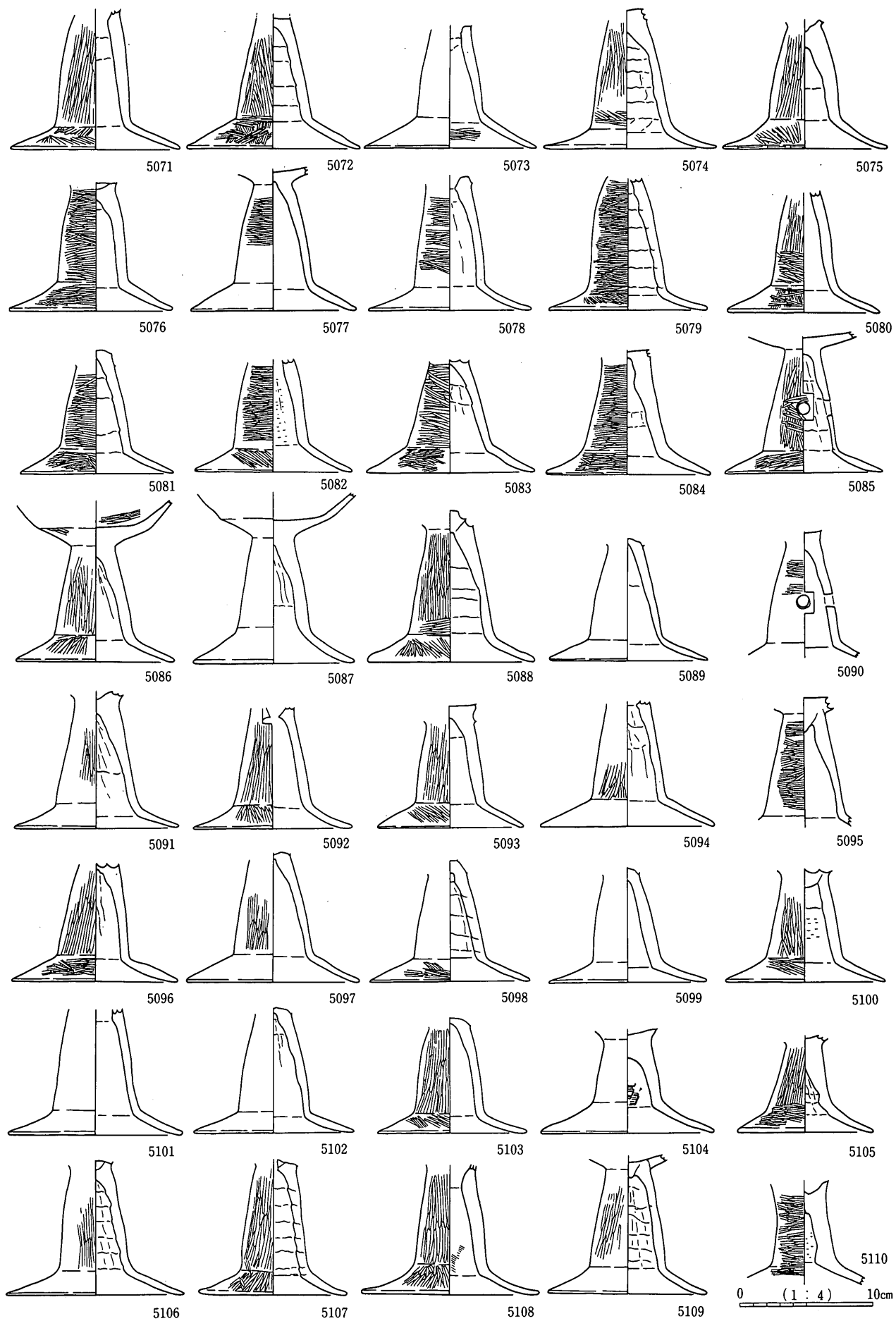
第392图 S Q 2016出土土器35<4953~4994>



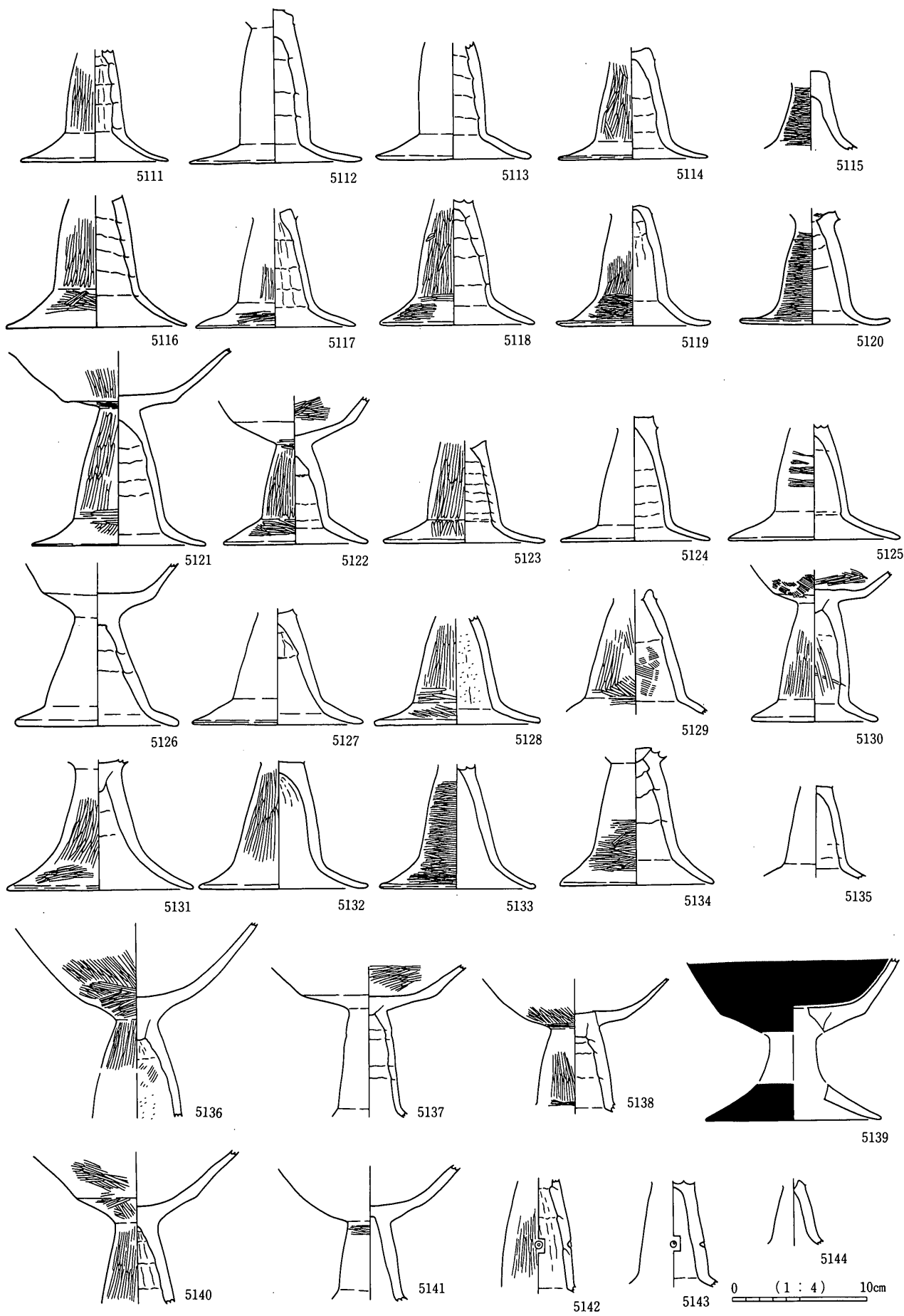
第393图 S Q 2016出土土器36<4995~5030>



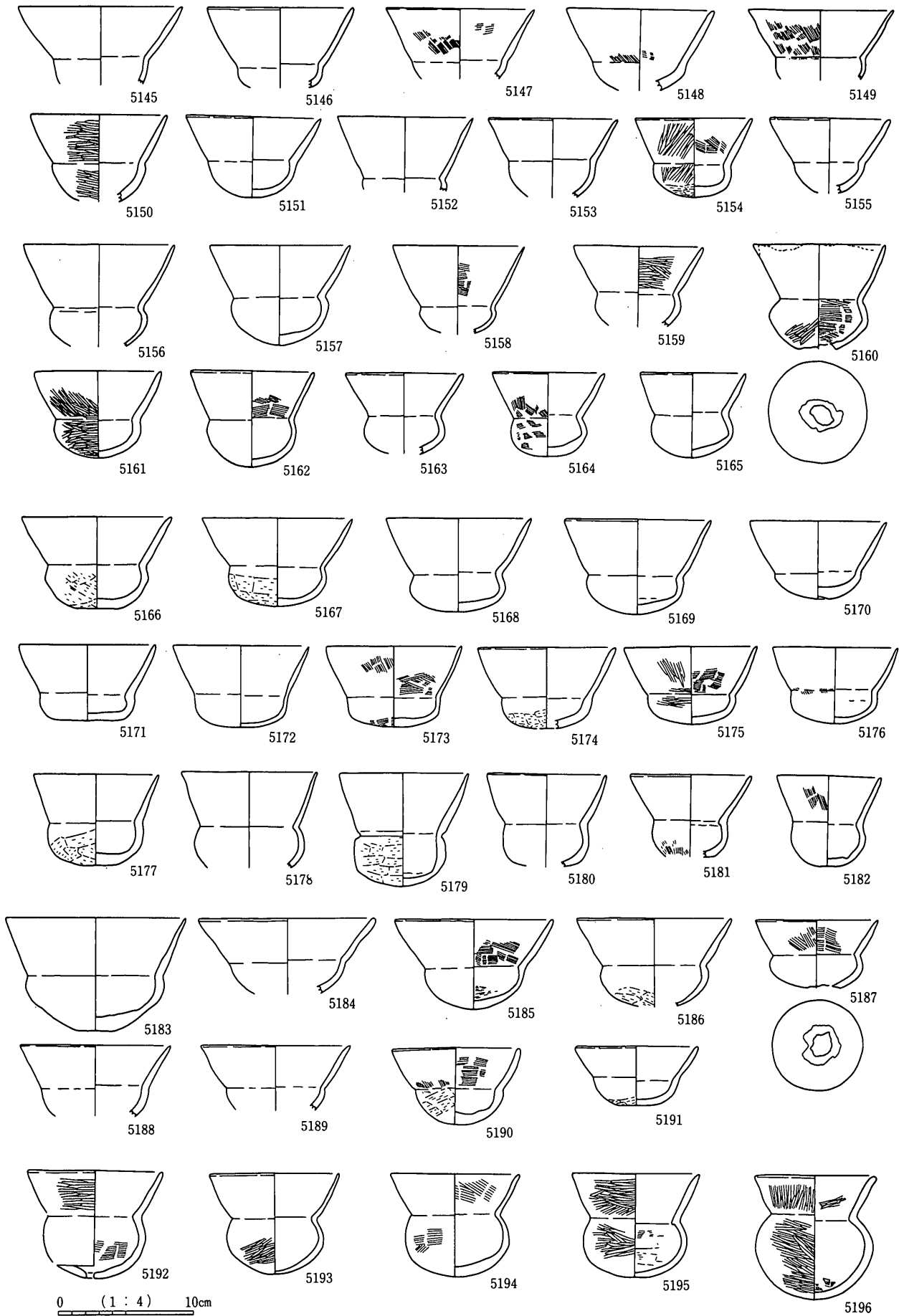
第394图 S Q 2016出土土器37<5031~5070>



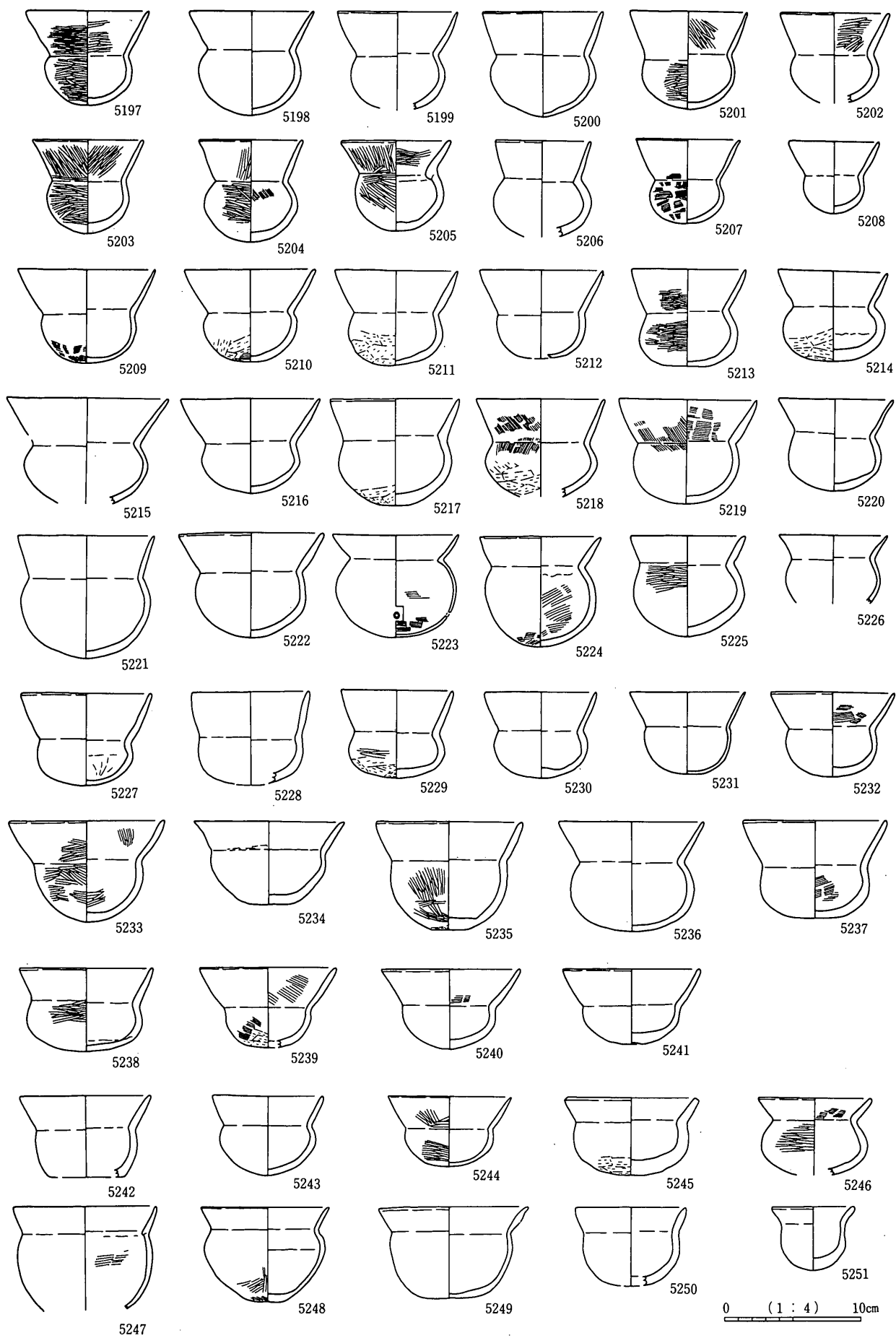
第395图 S Q 2016出土土器38<5071~5110>



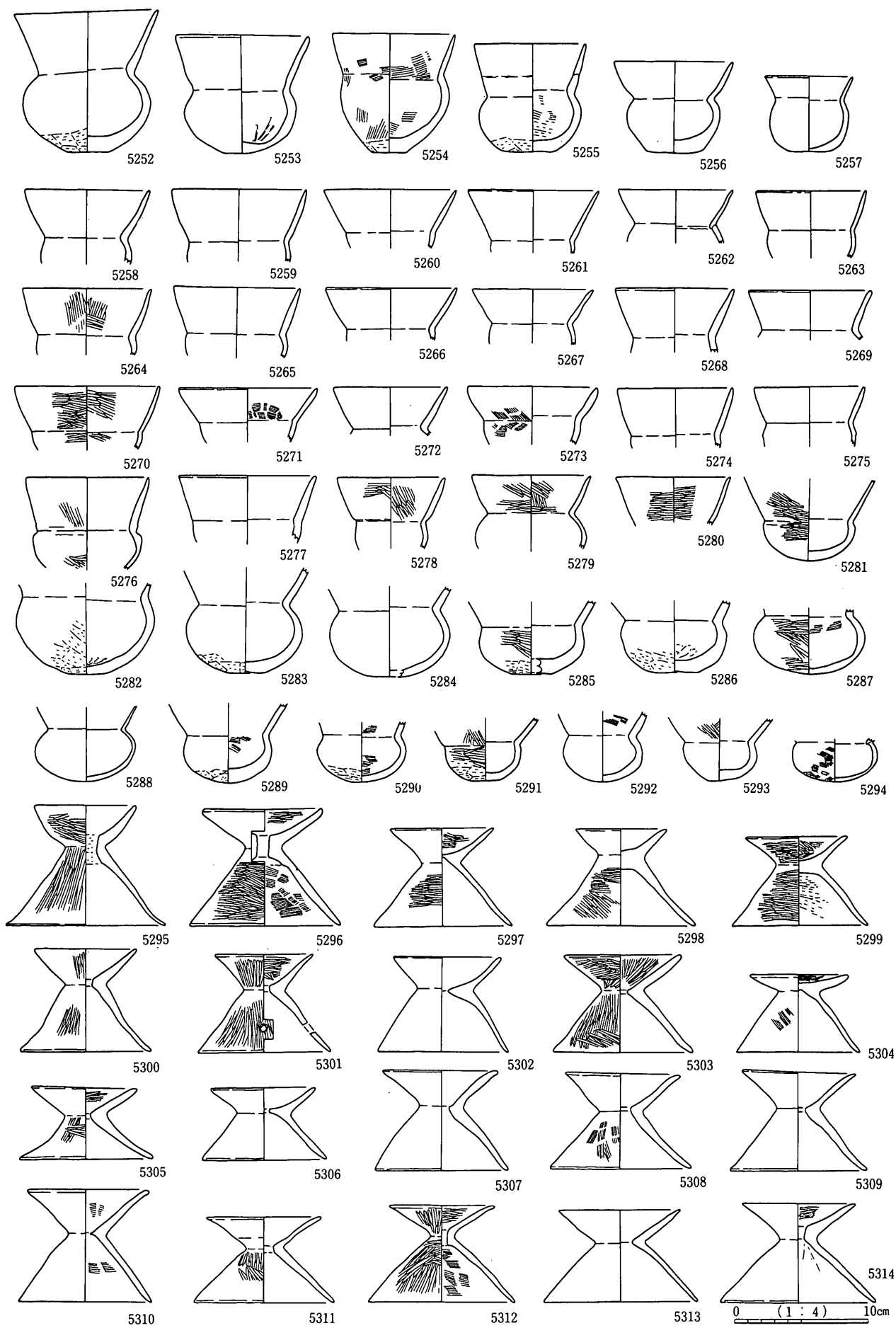
第396图 S Q 2016出土土器39<5111~5144>



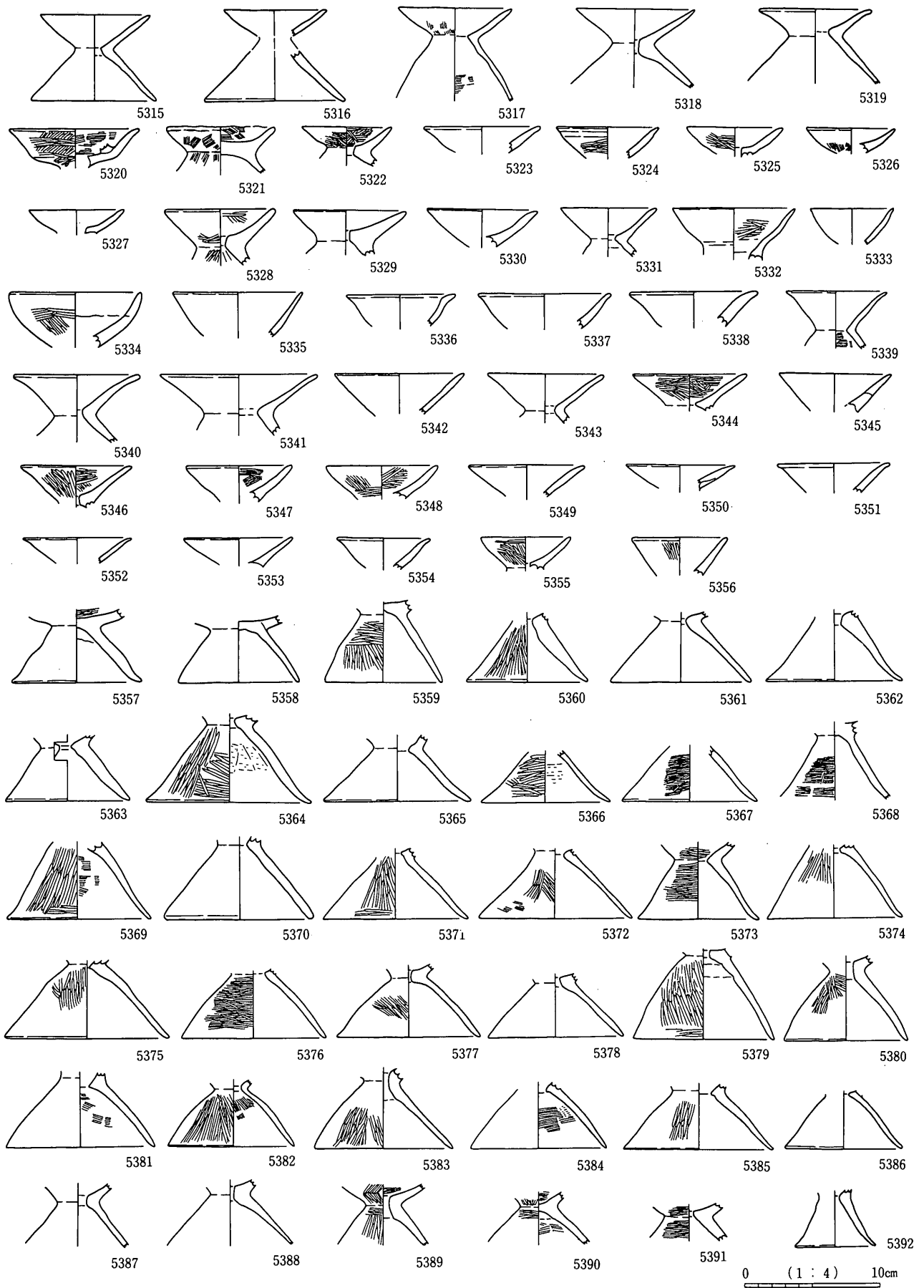
第397图 S Q 2016出土土器40<5145~5196>



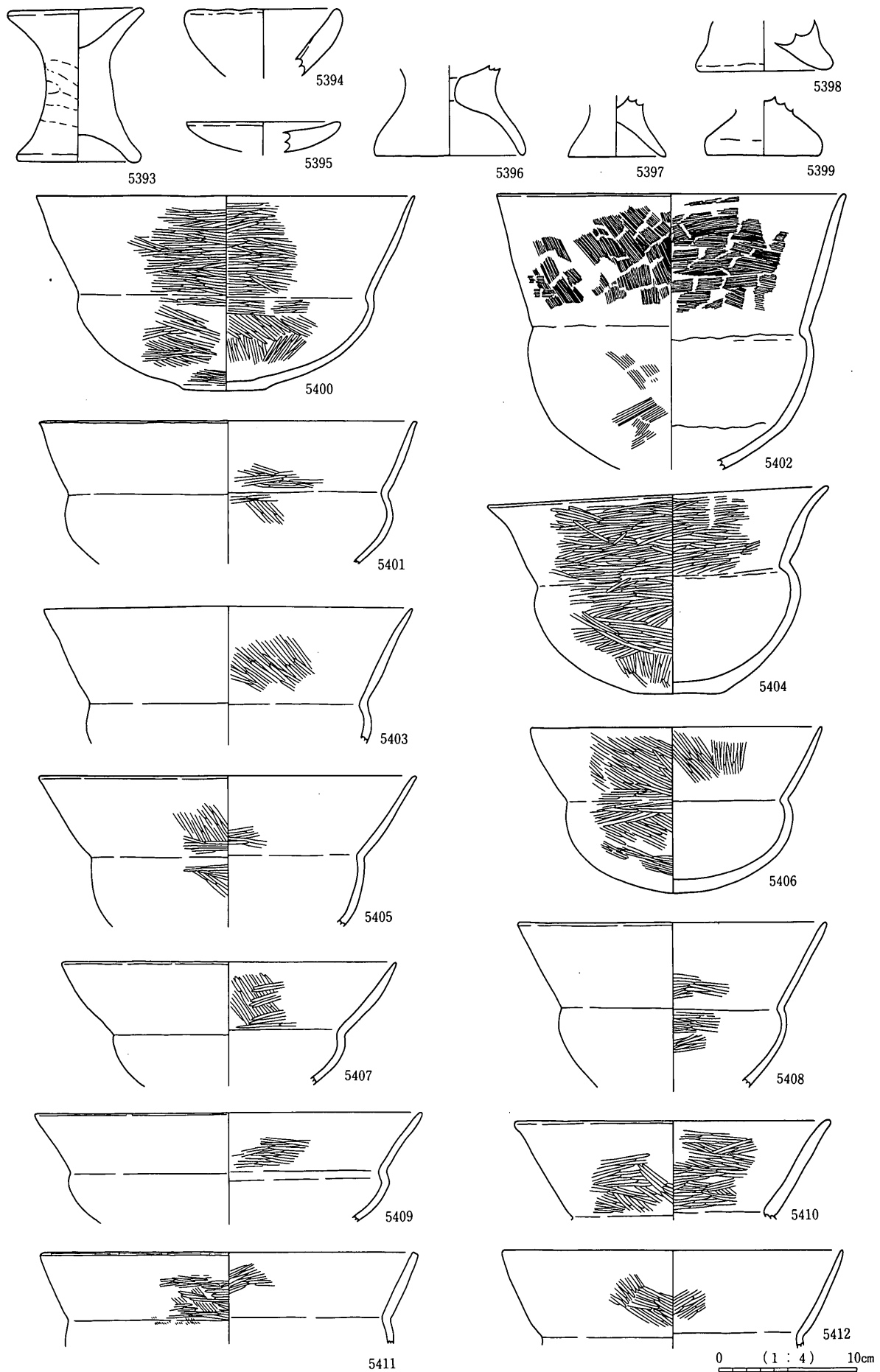
第398图 S Q 2016出土土器41<5197~5251>



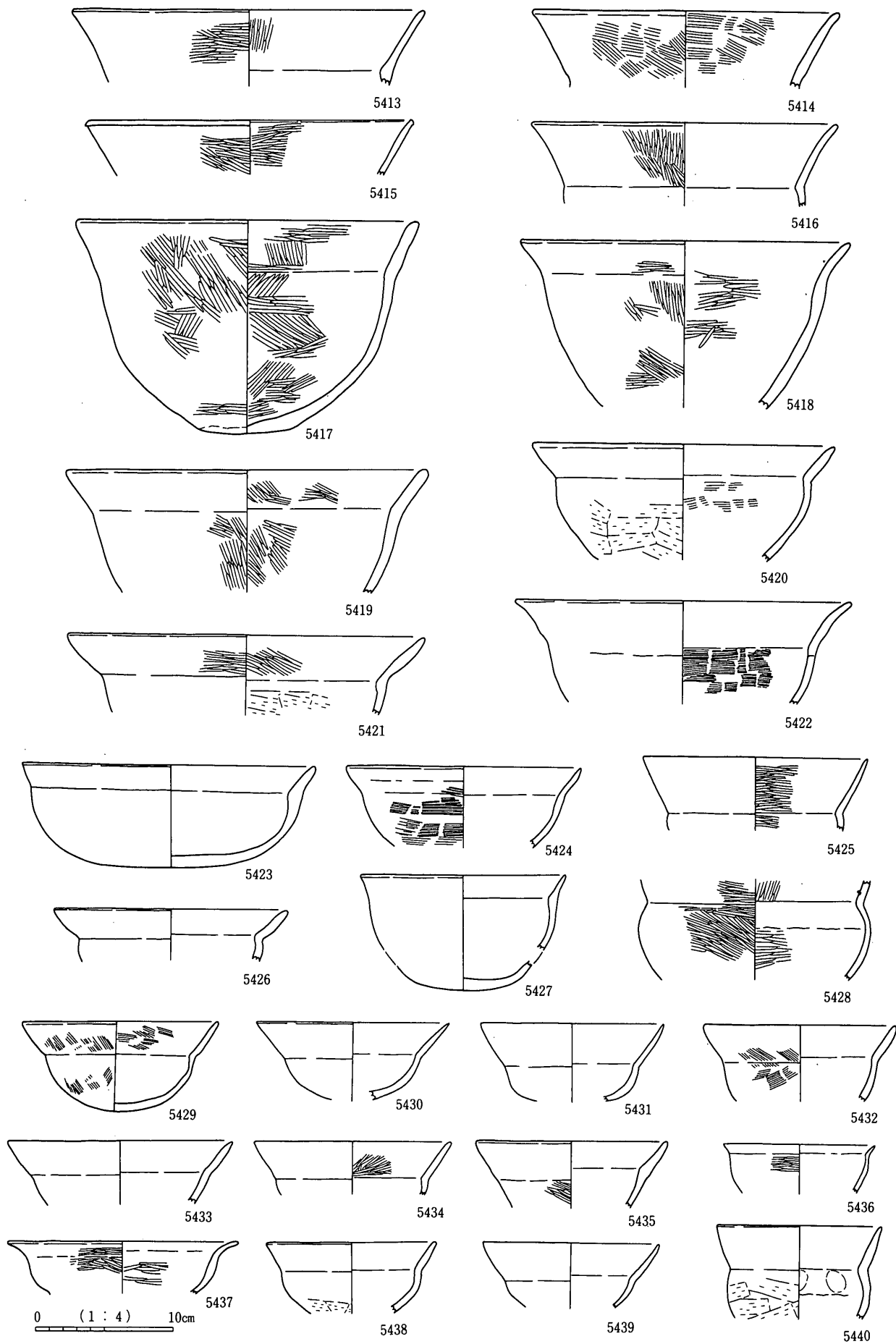
第399图 S Q 2016出土土器42<5252~5314>



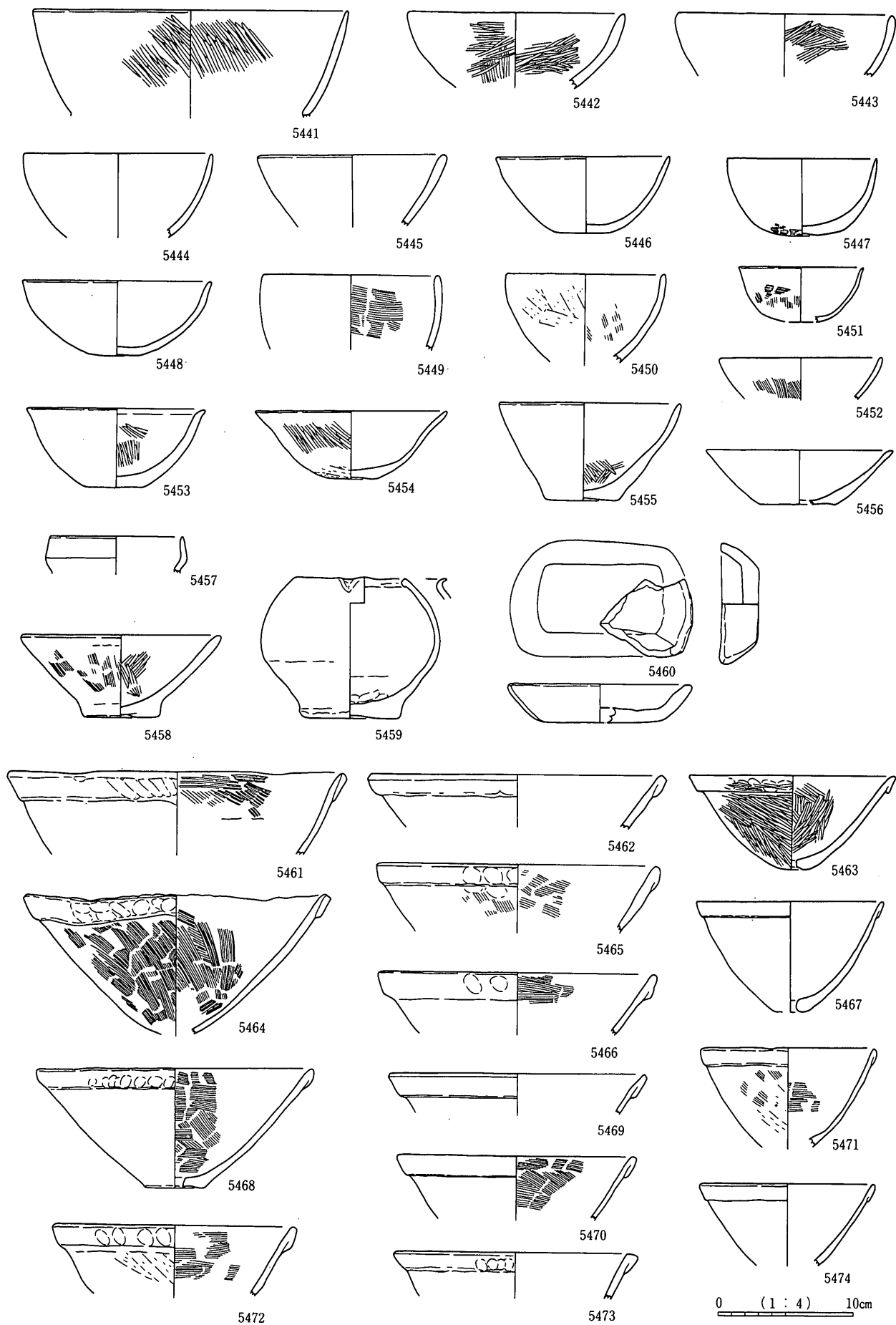
第400图 S Q 2016出土土器43<5315~5392>



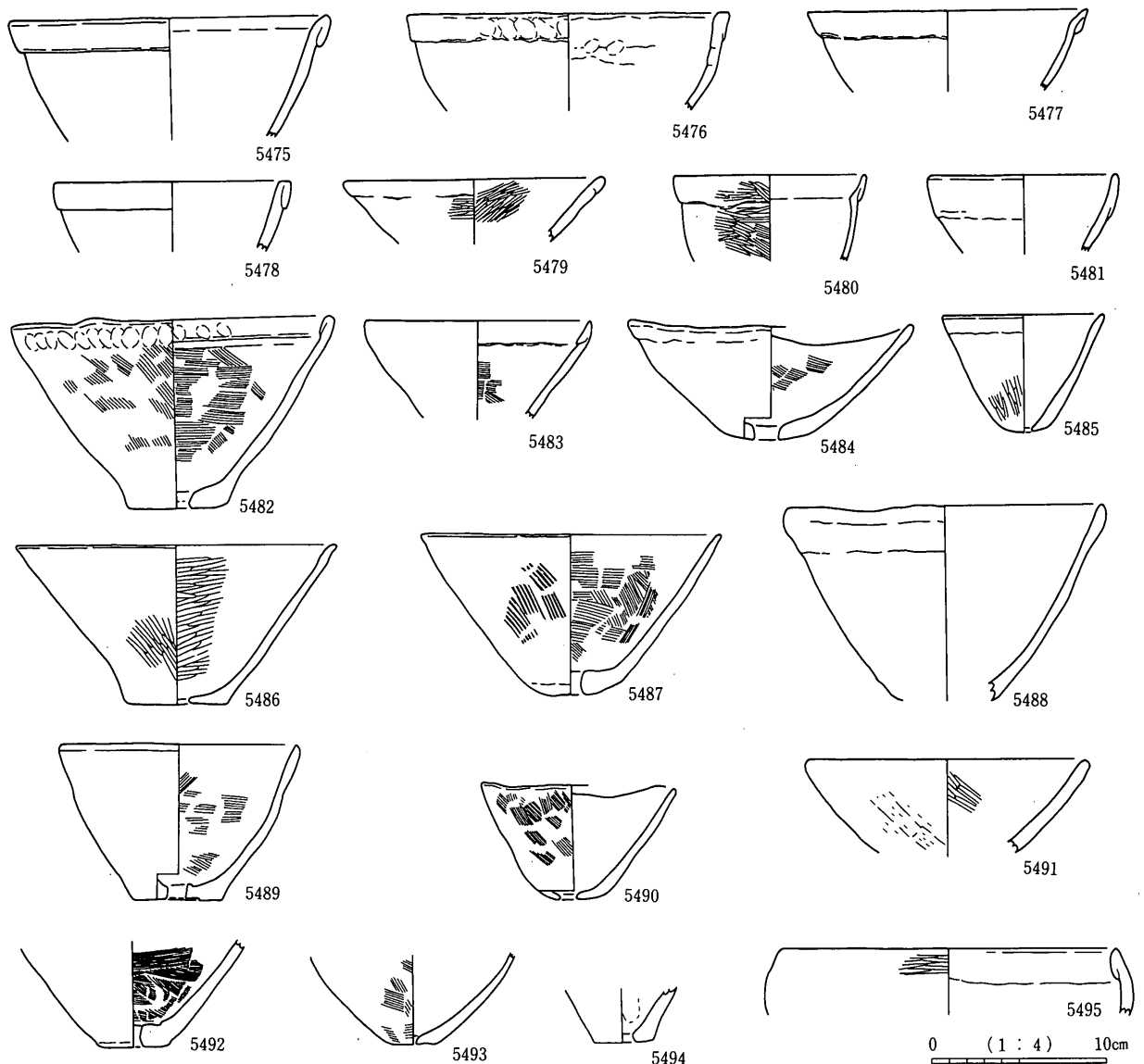
第401图 S Q 2016出土土器44<5393~5412>



第402图 S Q 2016出土土器45<5413~5440>

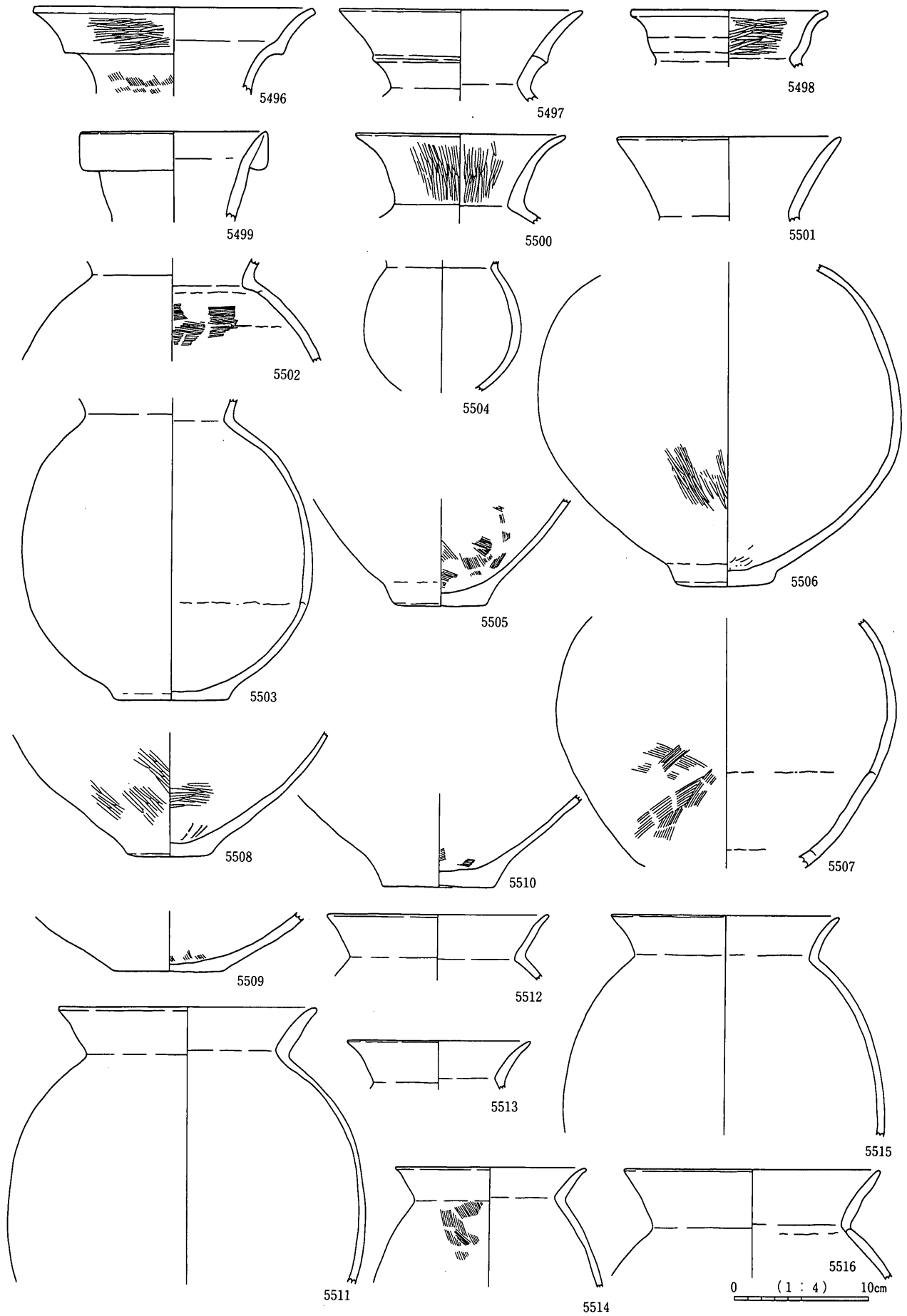


第403图 S Q 2016出土土器46<5441~5474>

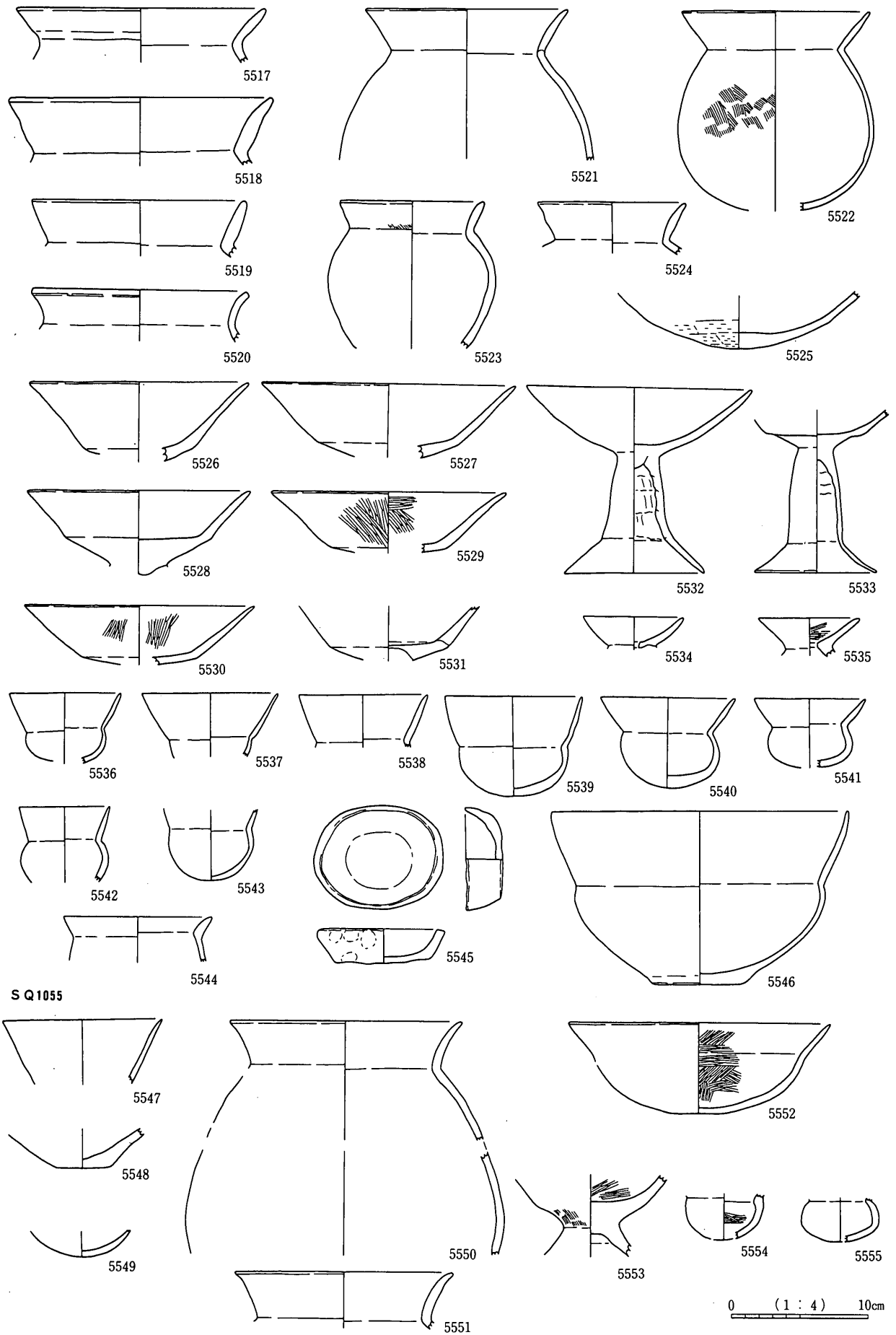


第404图 S Q 2016出土土器47<5475~5495>

S Q 1004

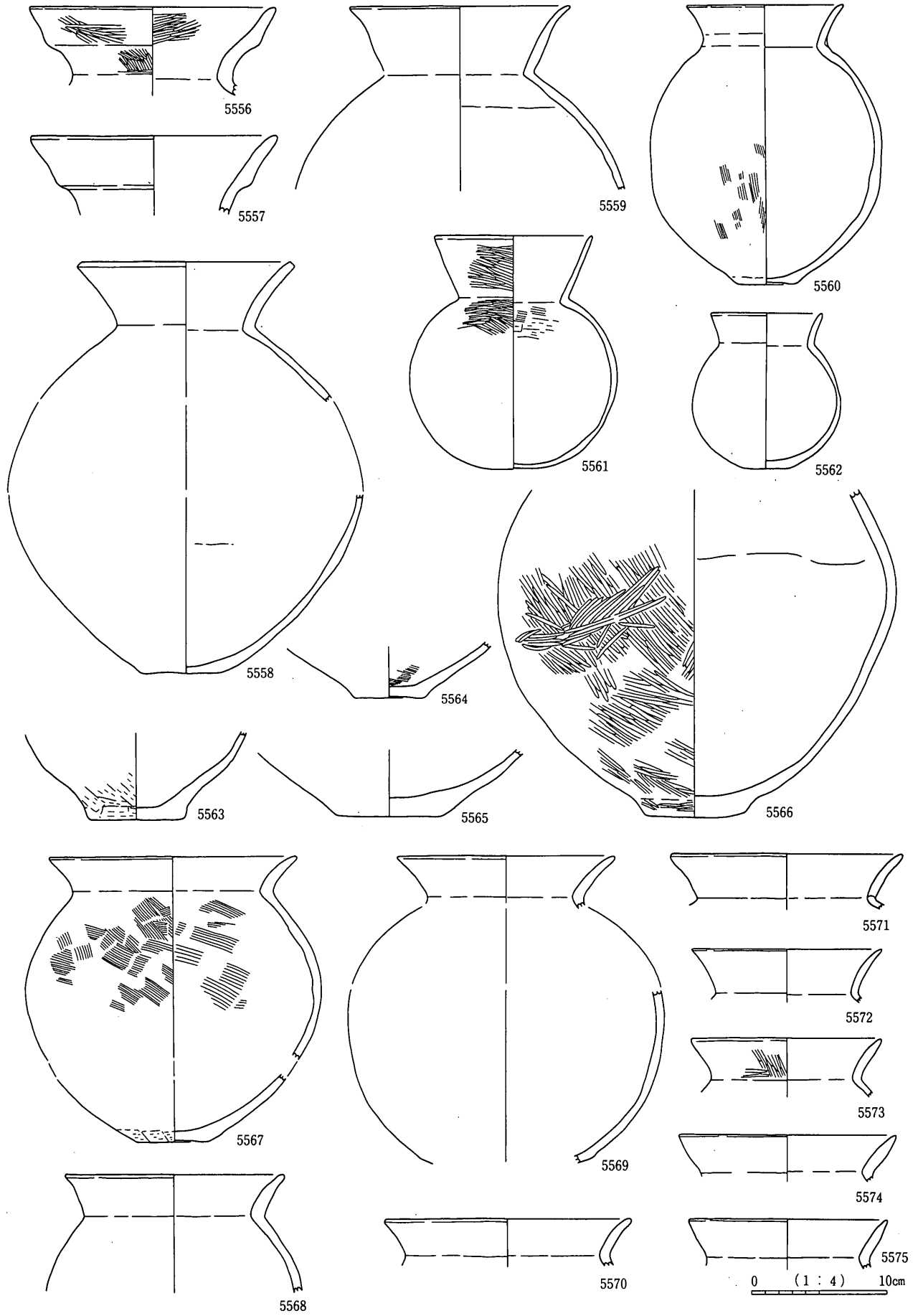


第405图 S Q 1004出土土器48 (5496~5516)

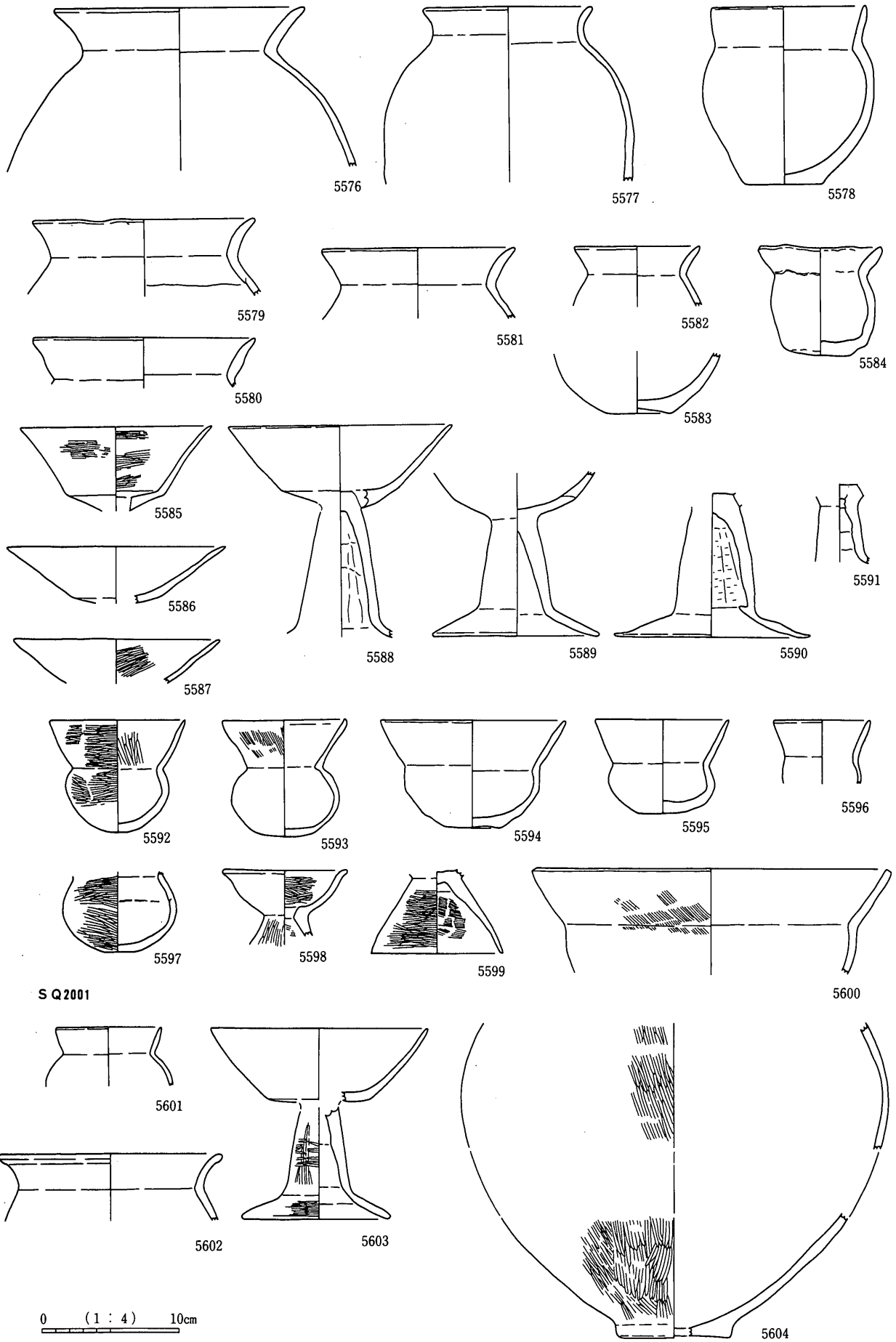


第406图 S Q1004·1055出土土器49<5517~5555>

SQ1005

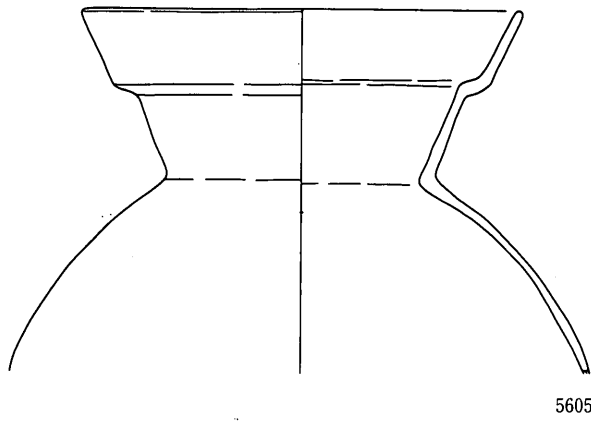


第407图 SQ1005出土土器50<5556~5575>

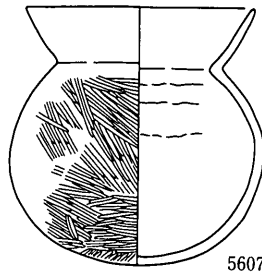


第408图 S Q 1005 · 2001出土土器51<5576~5604>

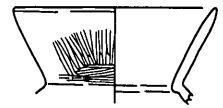
S Q 2002



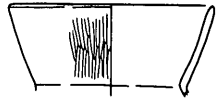
5605



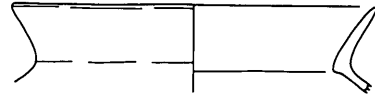
5607



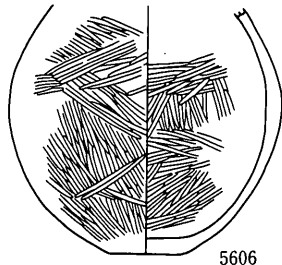
5608



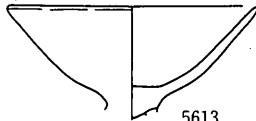
5609



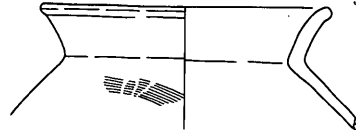
5610



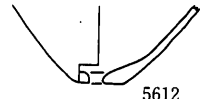
5606



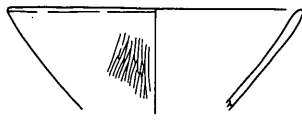
5613



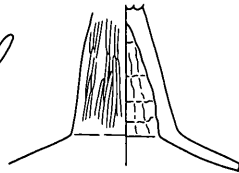
5611



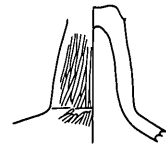
5612



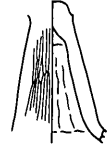
5614



5615

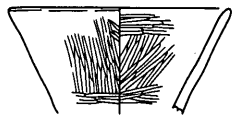


5616

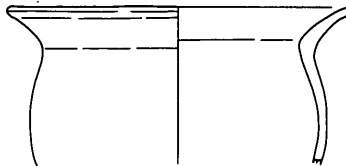


5617

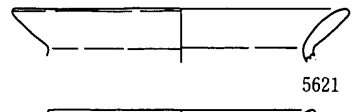
S Q 2003



5618



5620



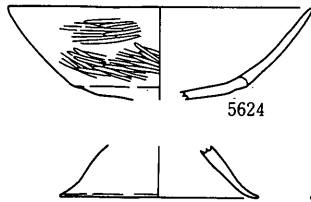
5621



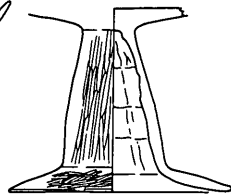
5619



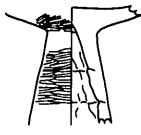
5622



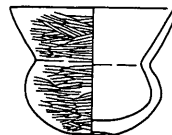
5624



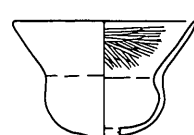
5625



5626



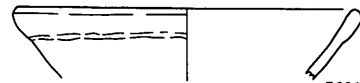
5628



5629



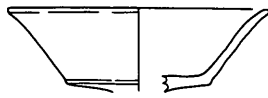
5630



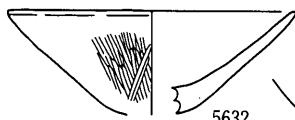
5623

5627

S Q 2004



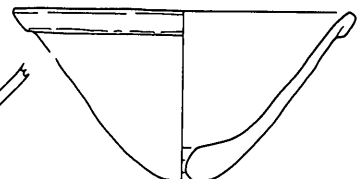
5631



5632

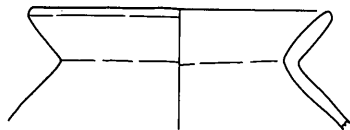


5633

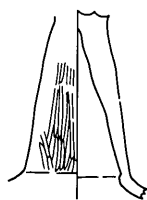


5634

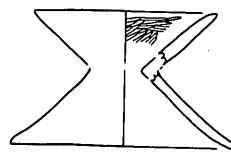
S Q 2007



5635



5636

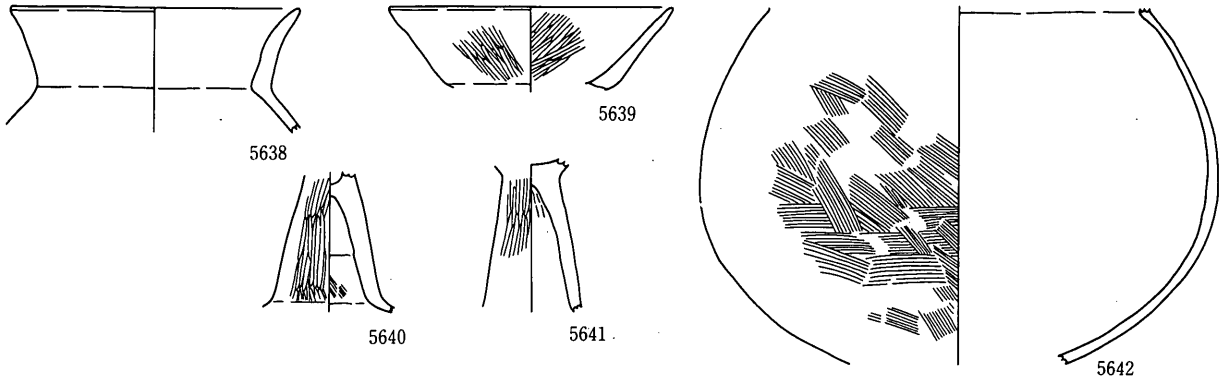


5637

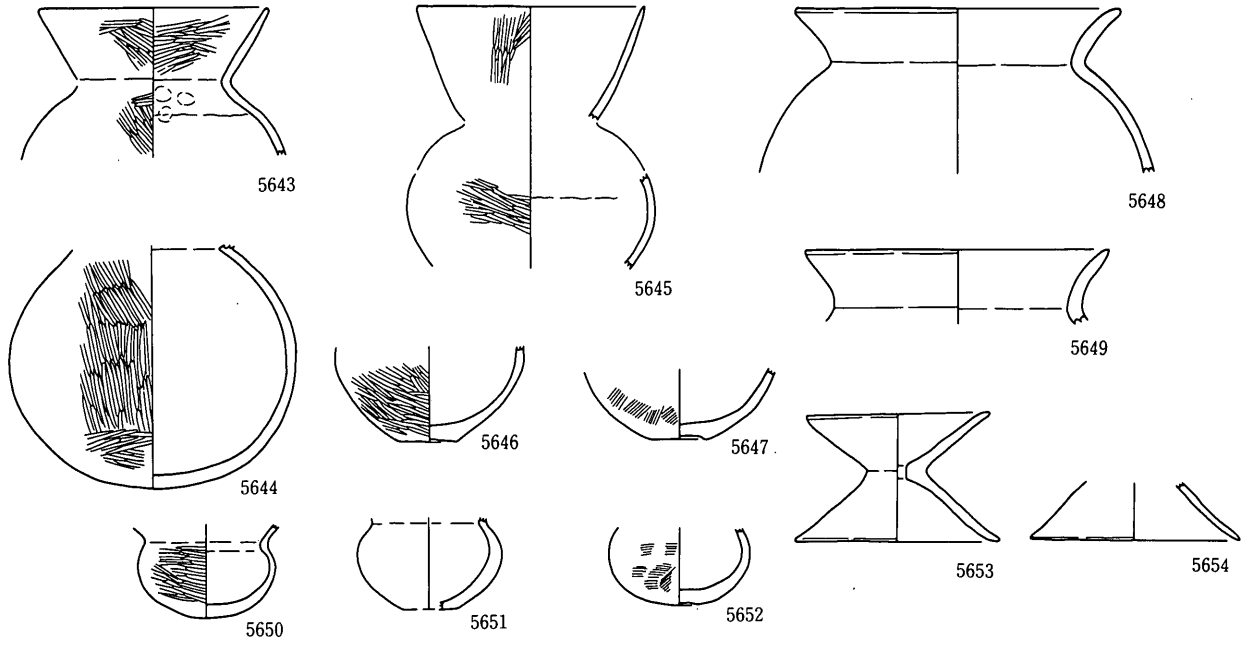
0 (1:4) 10cm

第409图 S Q 2002 · 2003 · 2004 · 2007出土土器52<5605~5637>

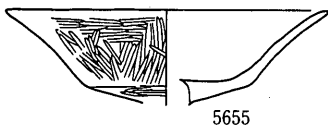
S Q 2005



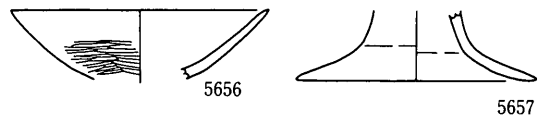
S Q 2006



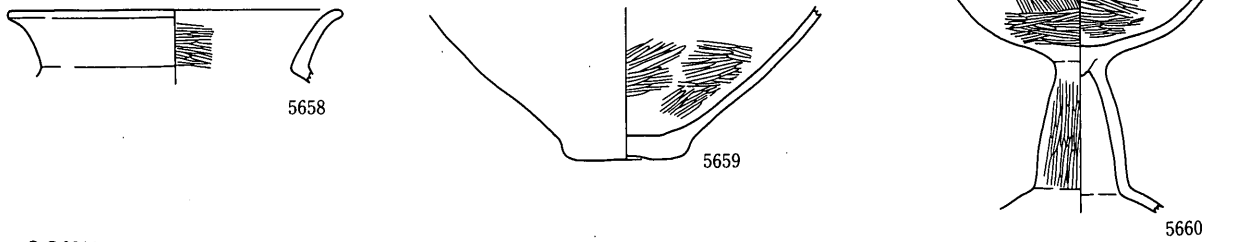
S Q 2008



S Q 2010



S Q 2009



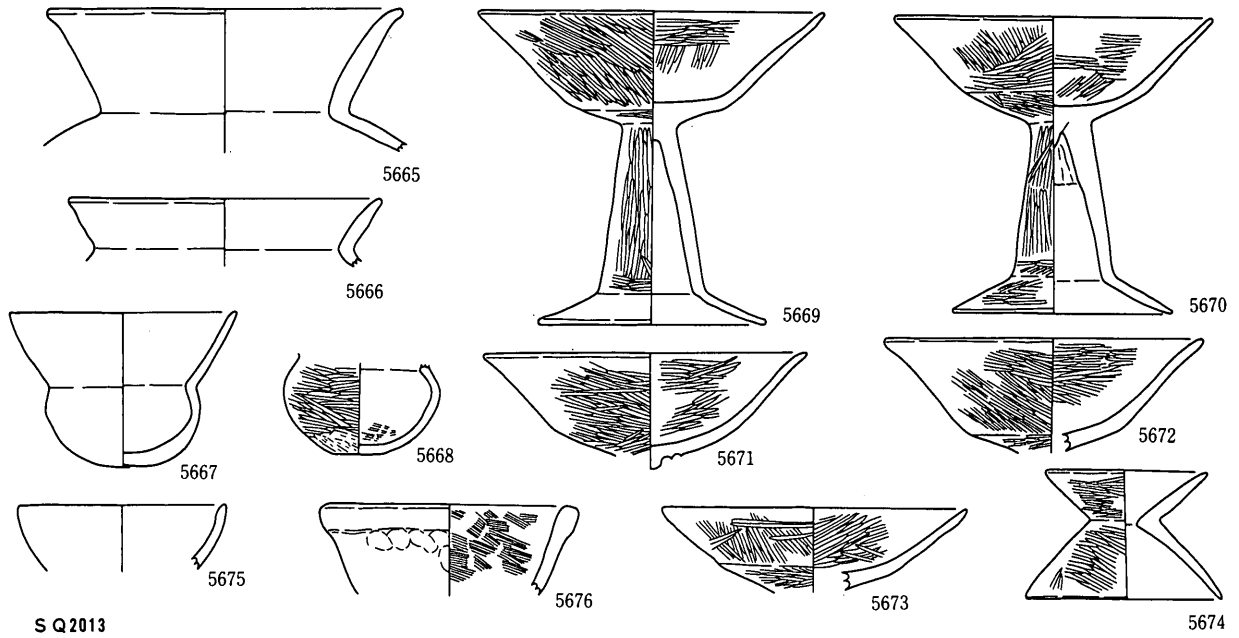
S Q 2011



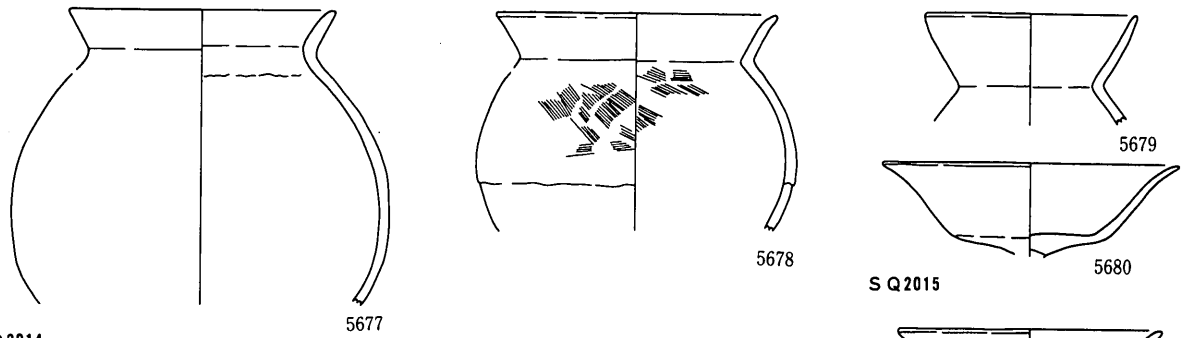
0 (1 : 4) 10cm

第410图 S Q 2005 · 2006 · 2008 · 2009 · 2010 · 2011出土土器53<5638~5664>

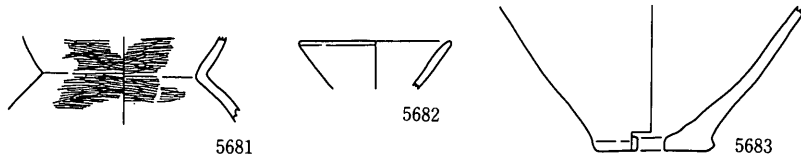
S Q 2012



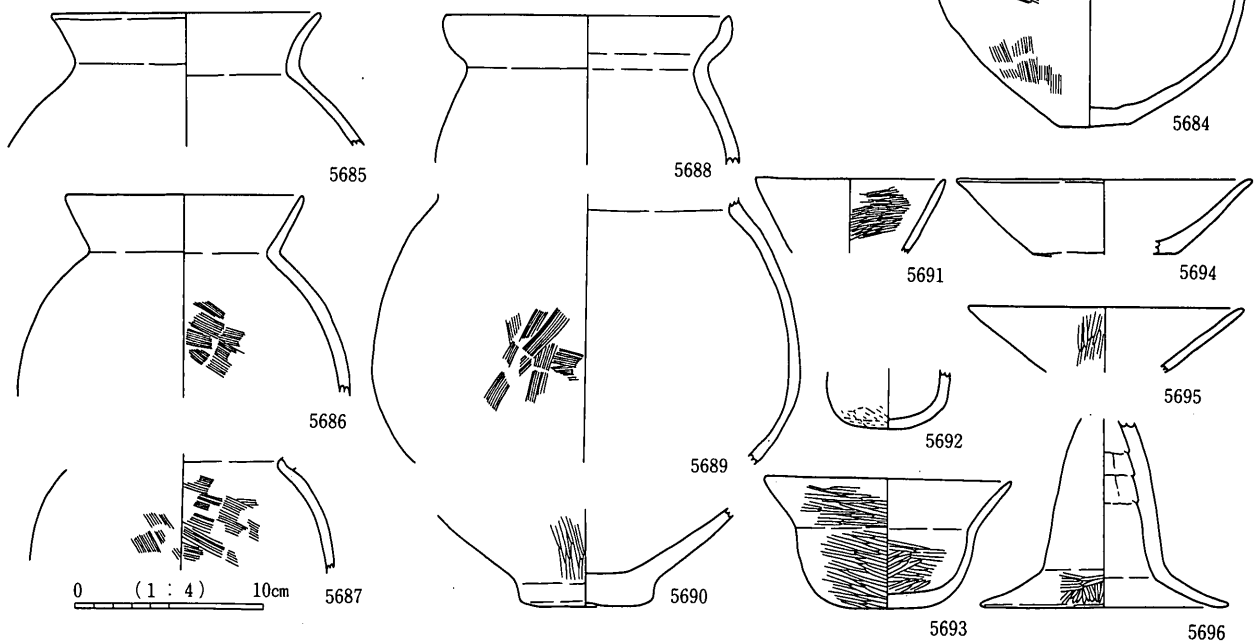
S Q 2013



S Q 2014

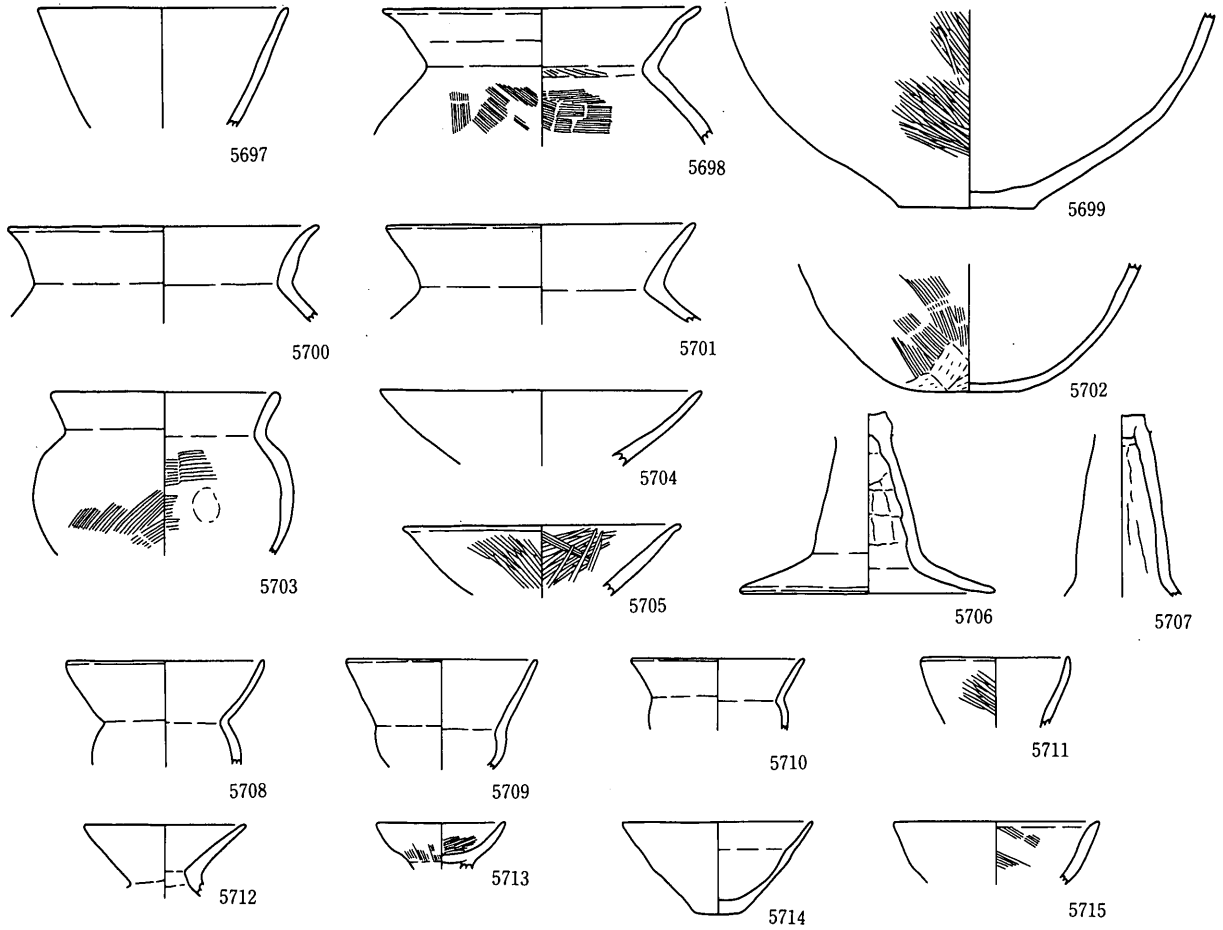


S Q 2017

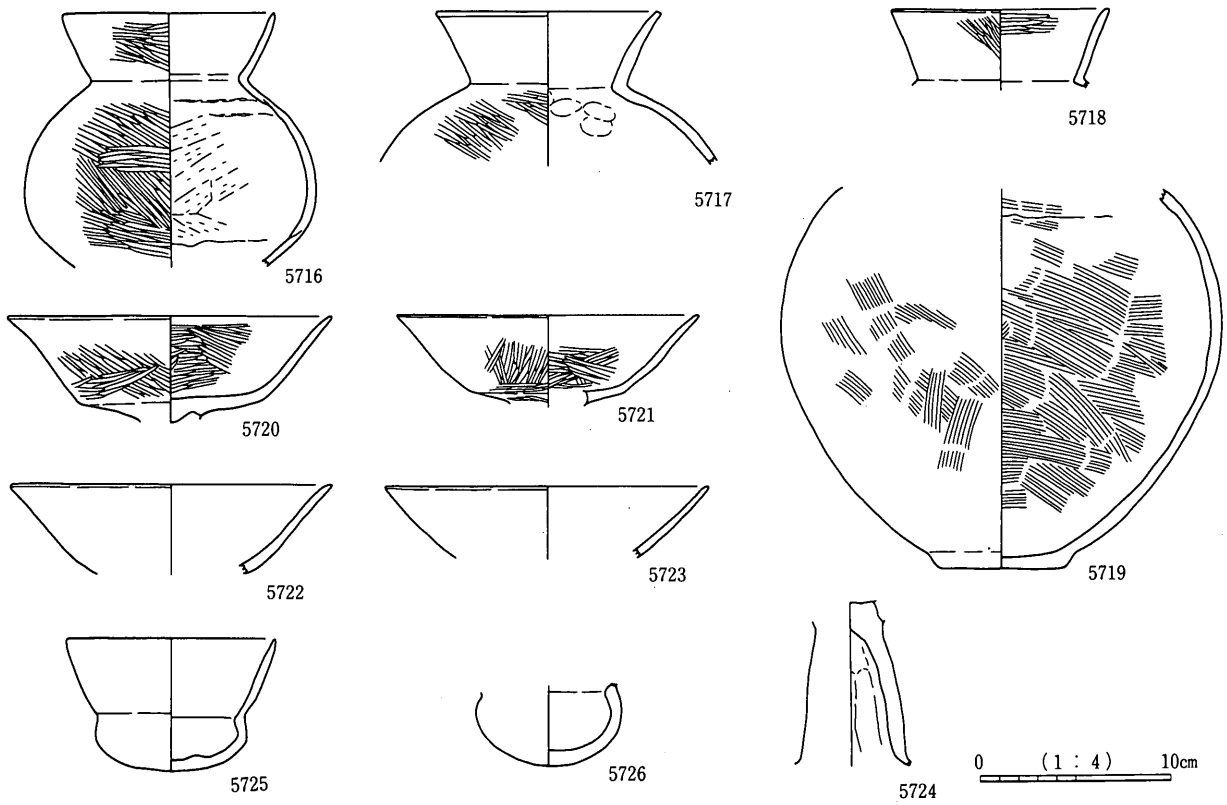


第411图 S Q 2012 · 2013 · 2014 · 2015 · 2017出土土器54 <5665 ~ 5696>

S X 1001

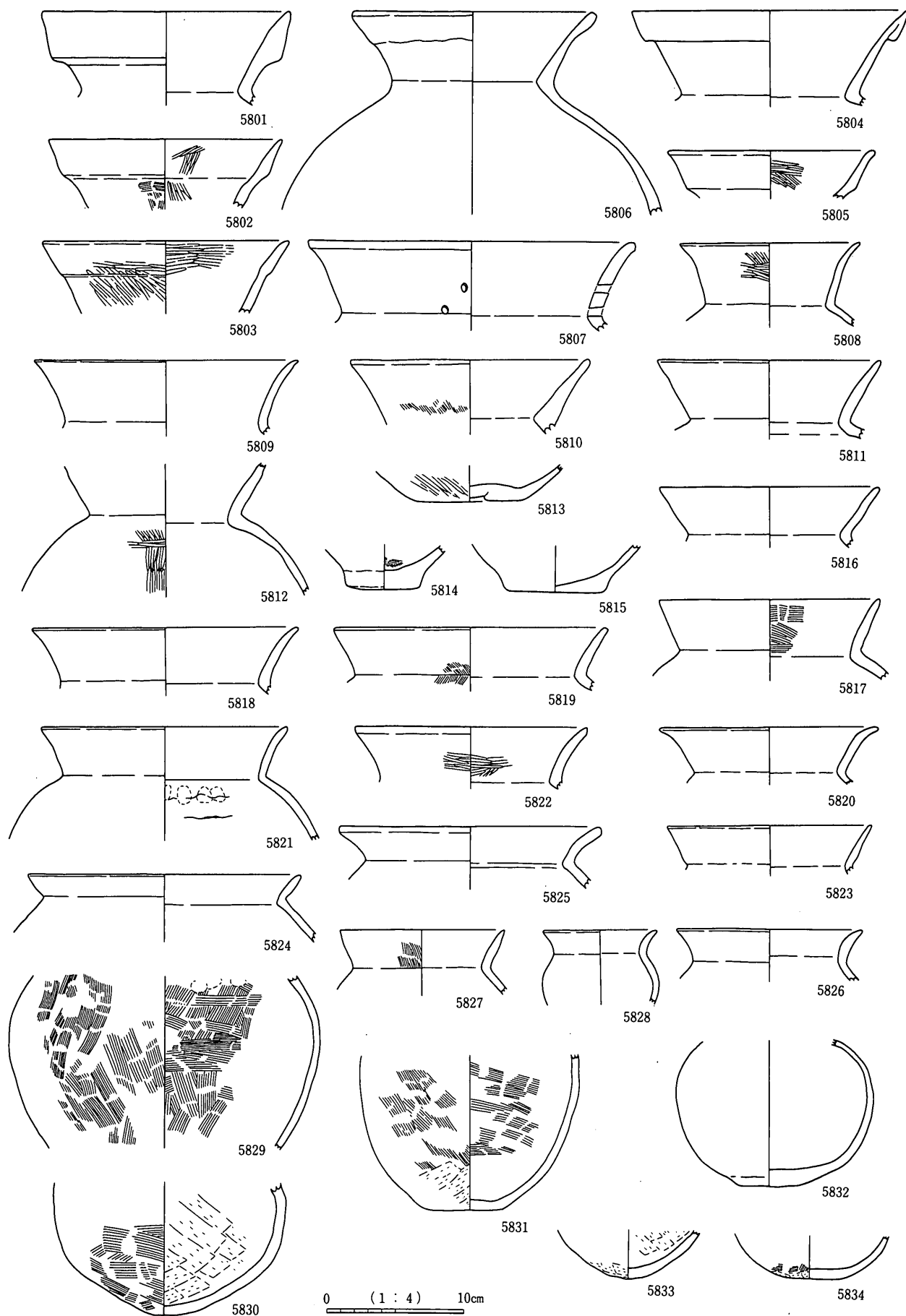


S X 2002

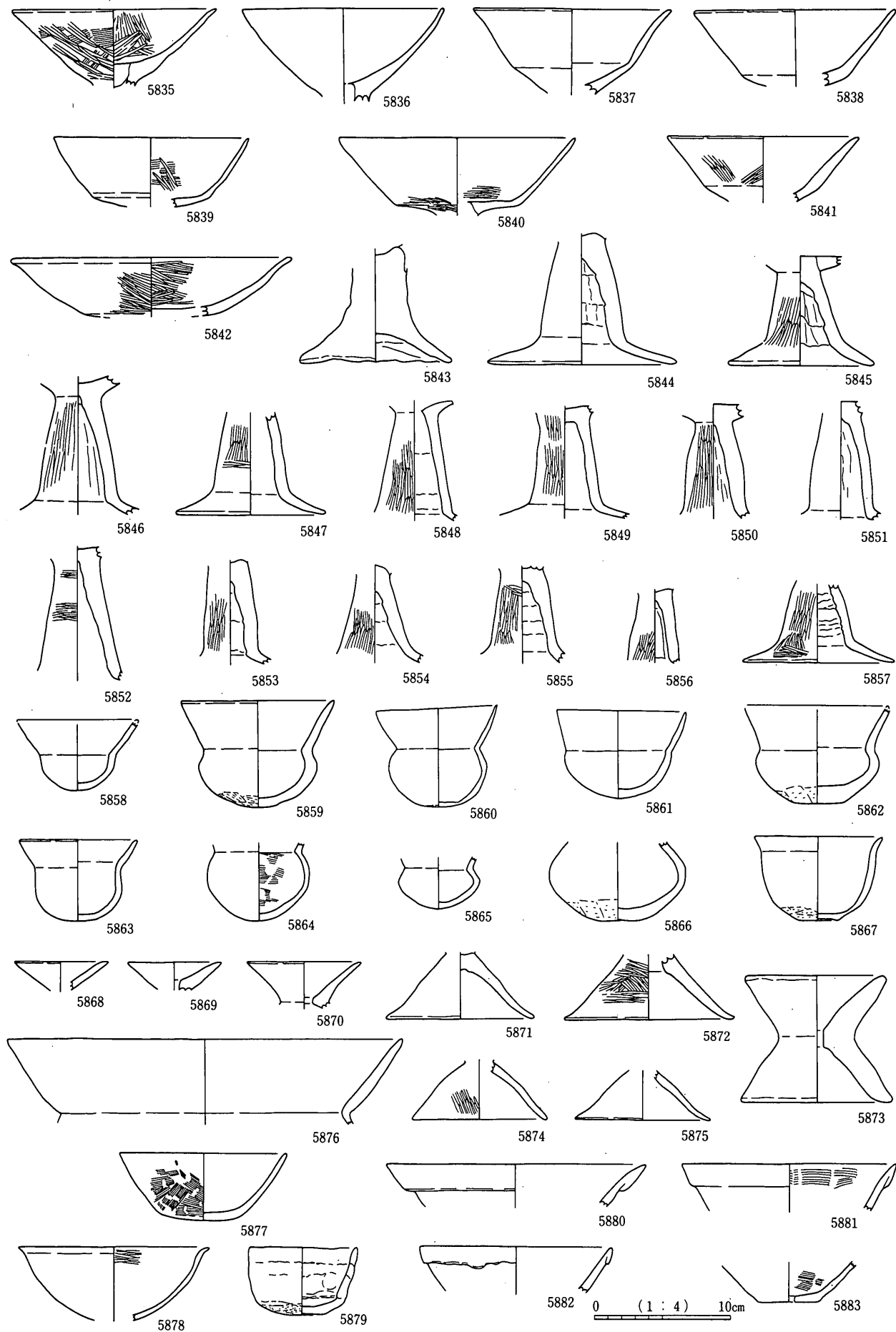


第412图 S X 1001 · 2002出土土器 1 <5697~5726>

⑤-2 区遺構外

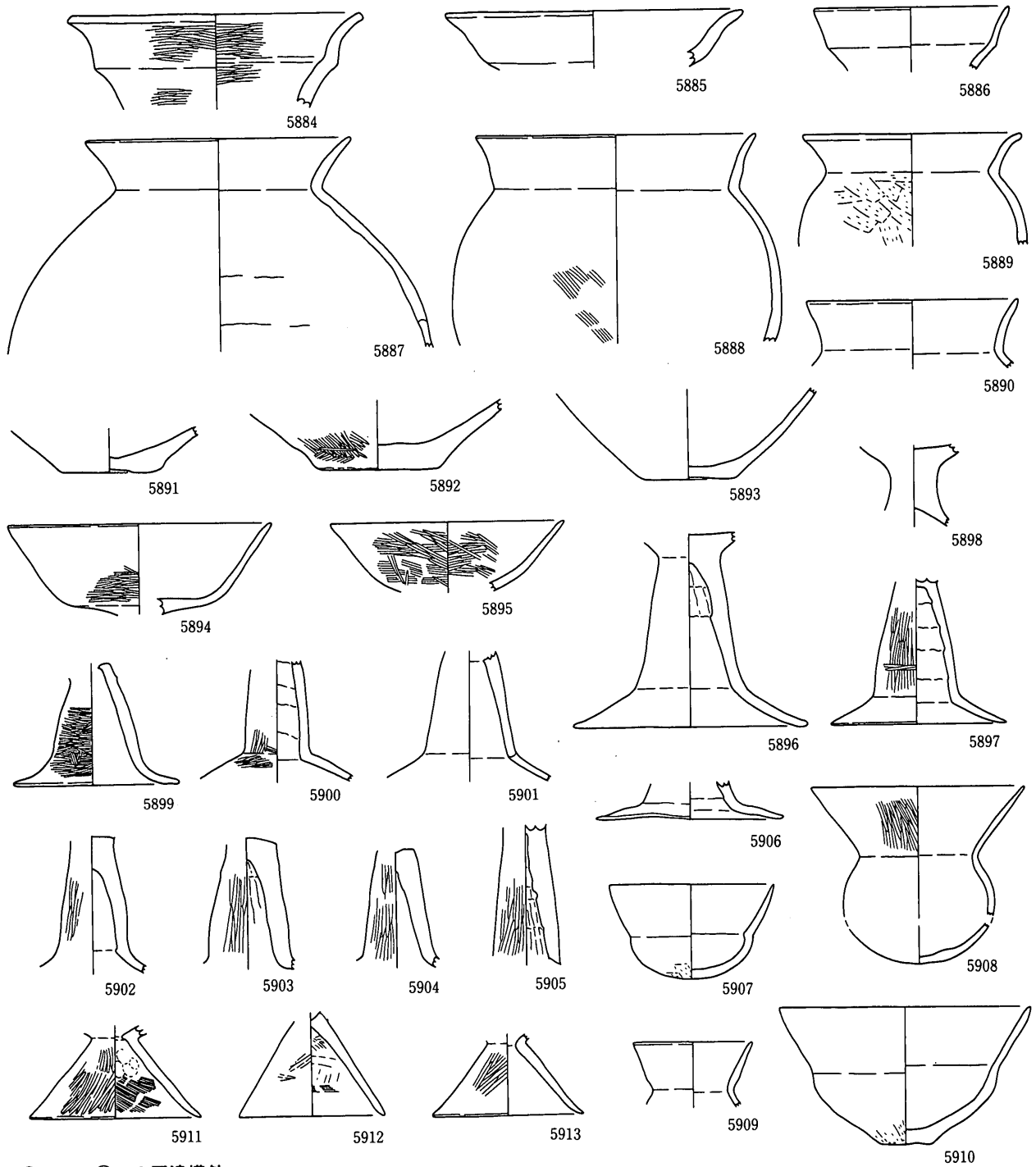


第413図 遺構外出土土器1 <5801~5834>

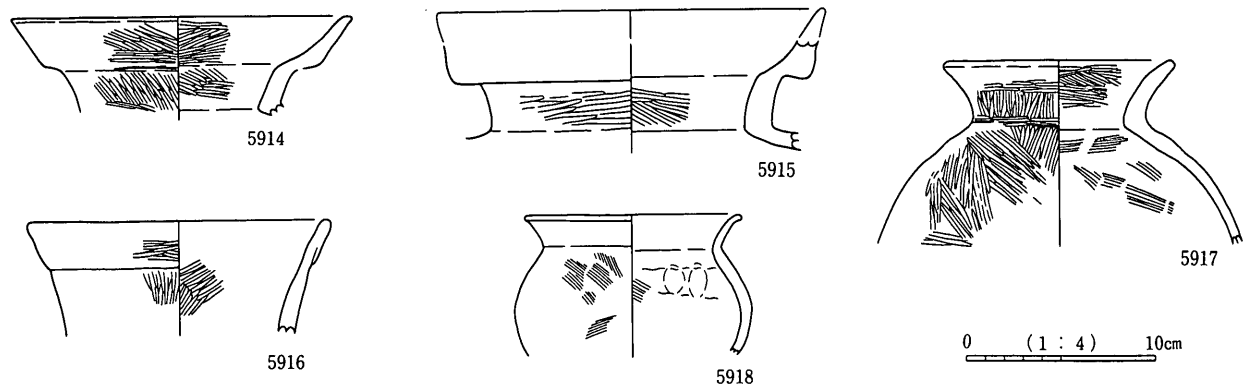


第414图 遺構外出土土器 2 <5835~5883>

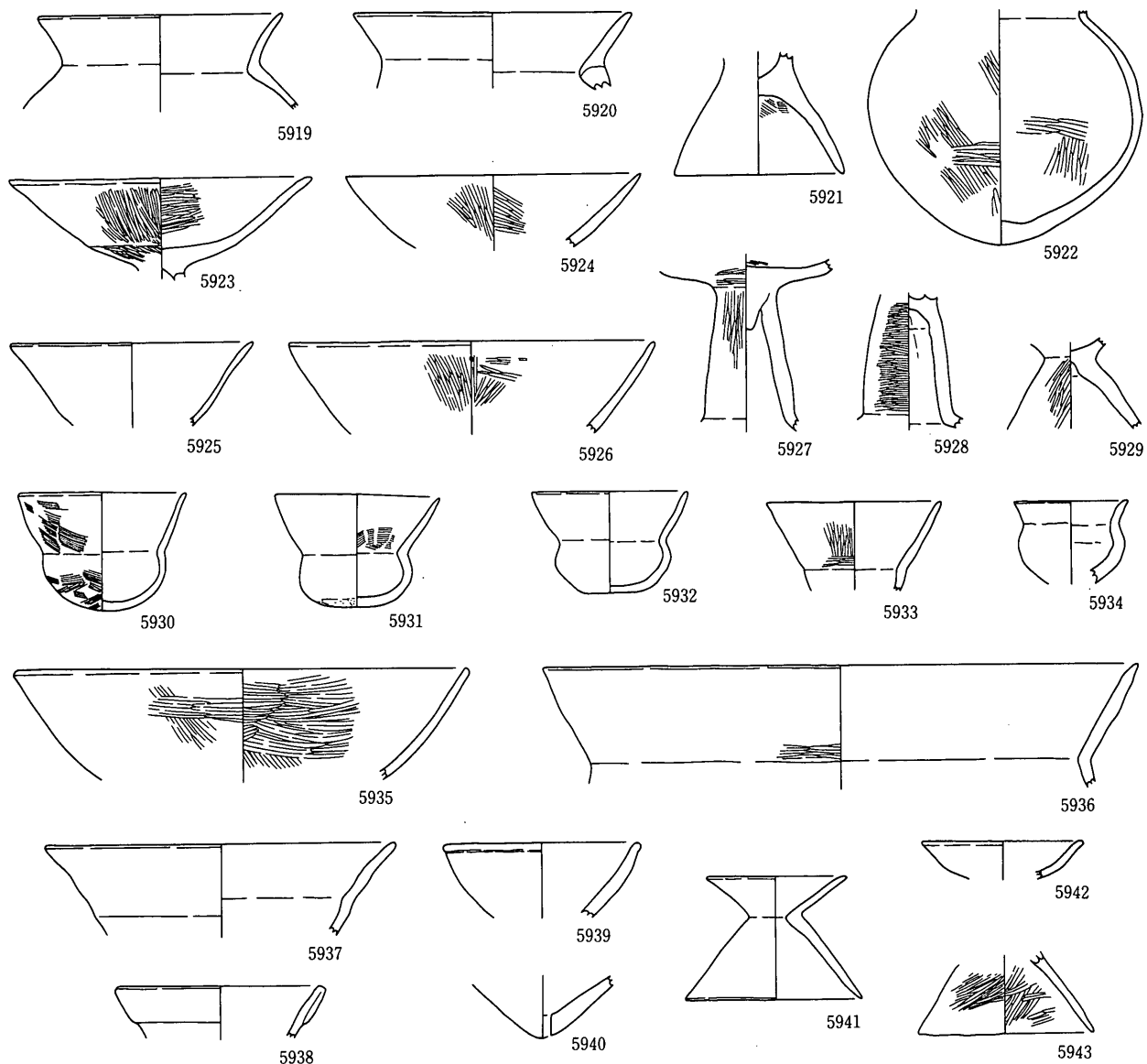
⑩区遺構外



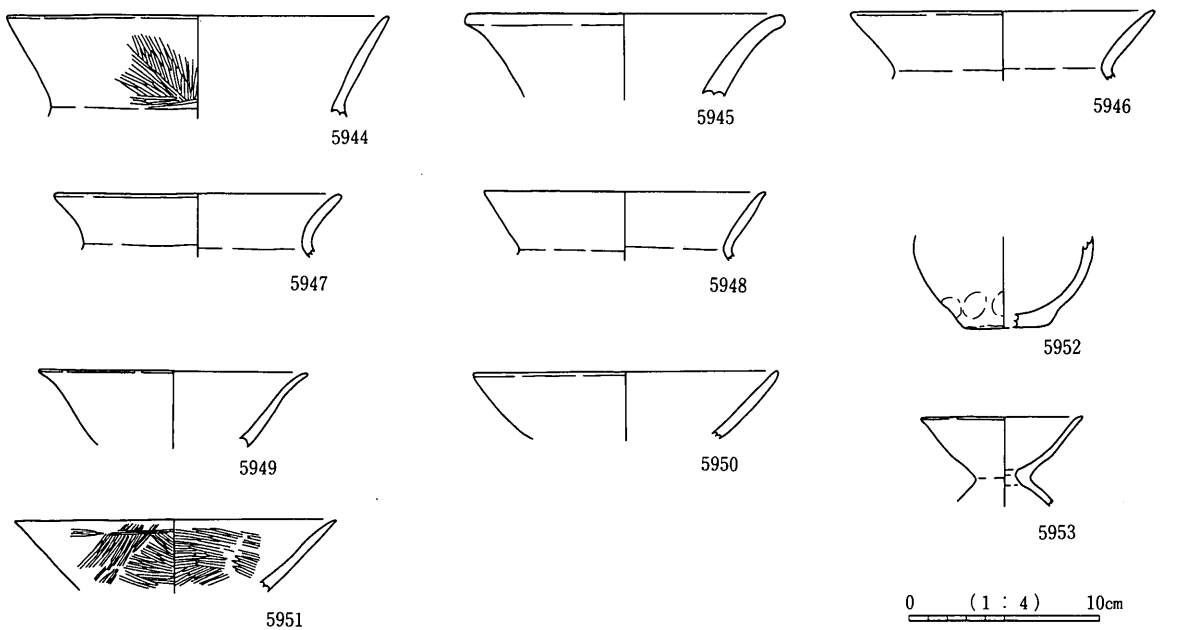
⑧-1・⑧-2区遺構外



第415図 遺構外出土土器 3 <5884~5918>

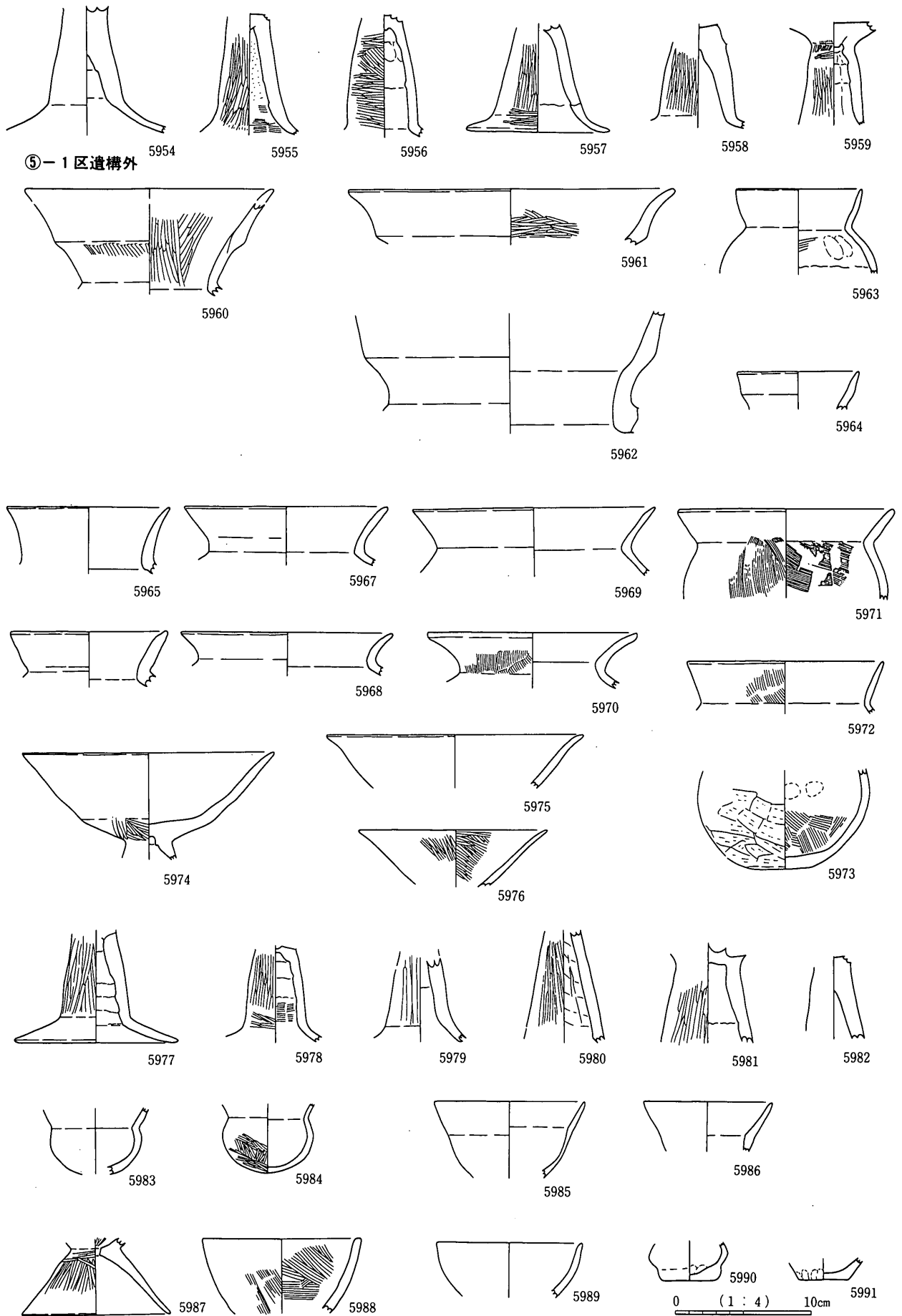


①区遺構外



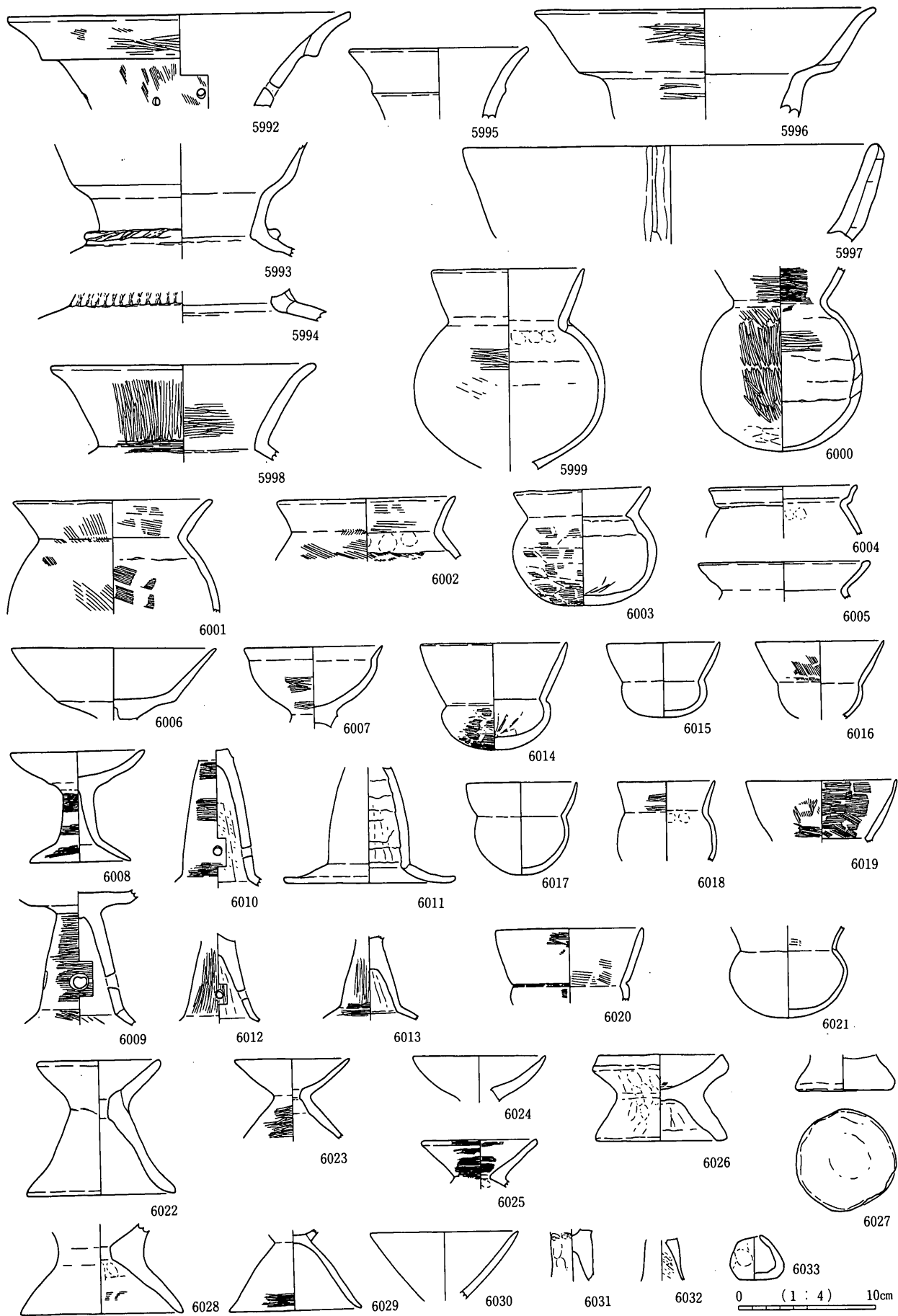
0 (1:4) 10cm

第416図 遺構外出土土器4 <5919~5953>



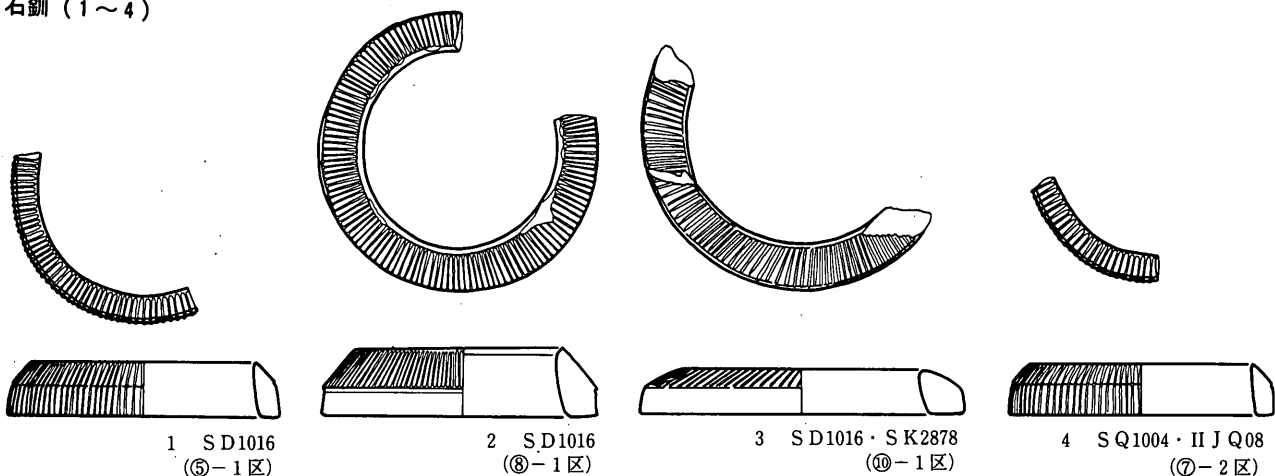
第417图 遺構外出土土器 5 <5954~5991>

検出面



第418図 遺構外出土土器 6 <5992~6033>

石釧 (1~4)



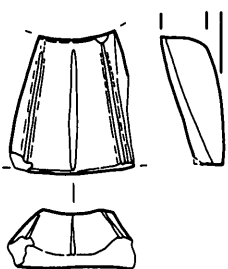
1 SD1016
(⑤-1区)

2 SD1016
(⑧-1区)

3 SD1016 · SK2878
(⑩-1区)

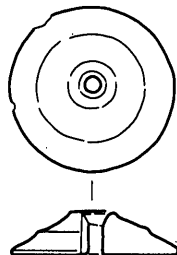
4 SQ1004 · II J Q08
(⑦-2区)

車輪石 (5)



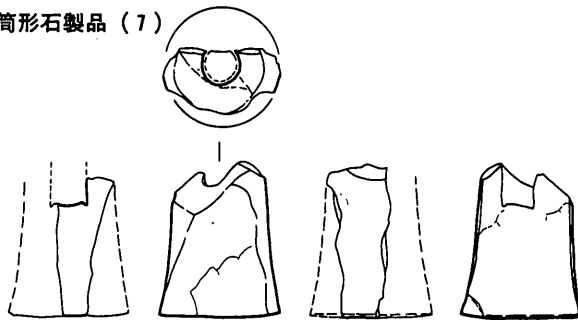
5 SD1016
(⑩-1区)

紡錘車形石製品 (6)



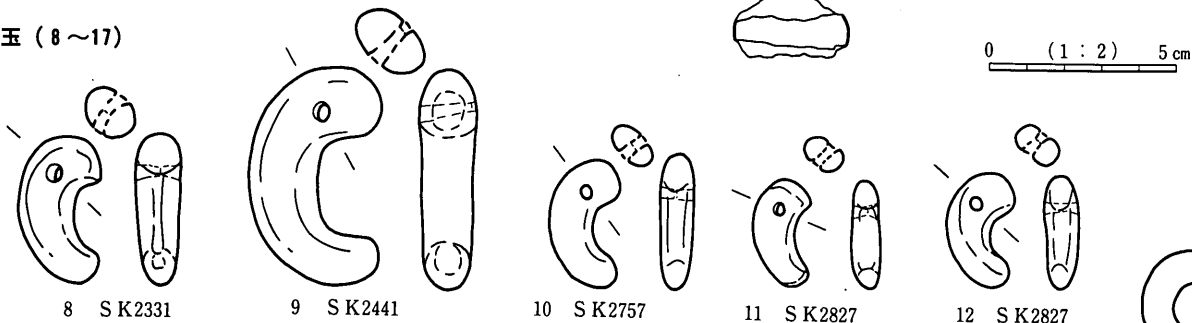
6 SK1046

筒形石製品 (7)



7 SQ2016

勾玉 (8~17)



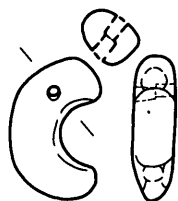
8 SK2331

9 SK2441

10 SK2757

11 SK2827

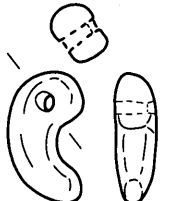
12 SK2827



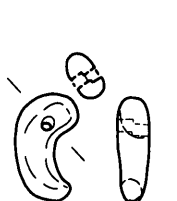
13 SD1016



14 SD1016



15 SD1016

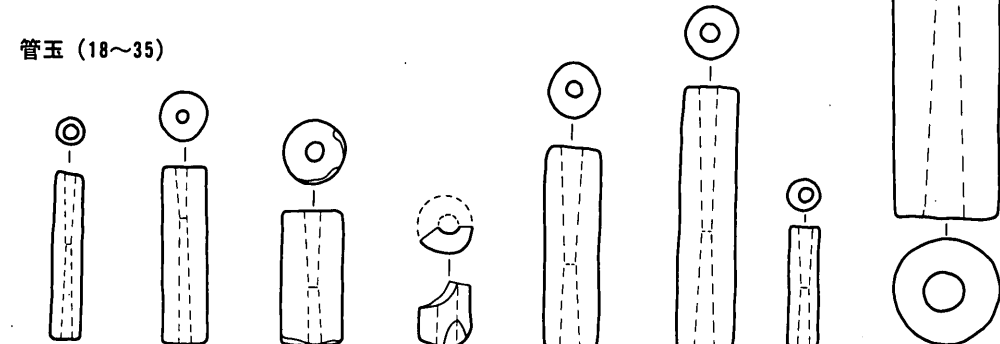


16 SD1016



17 検出面

管玉 (18~35)



18 SK2027

19 SK2063-B

20 SK2189

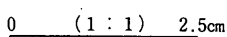
21 SK2751

22 SK2759

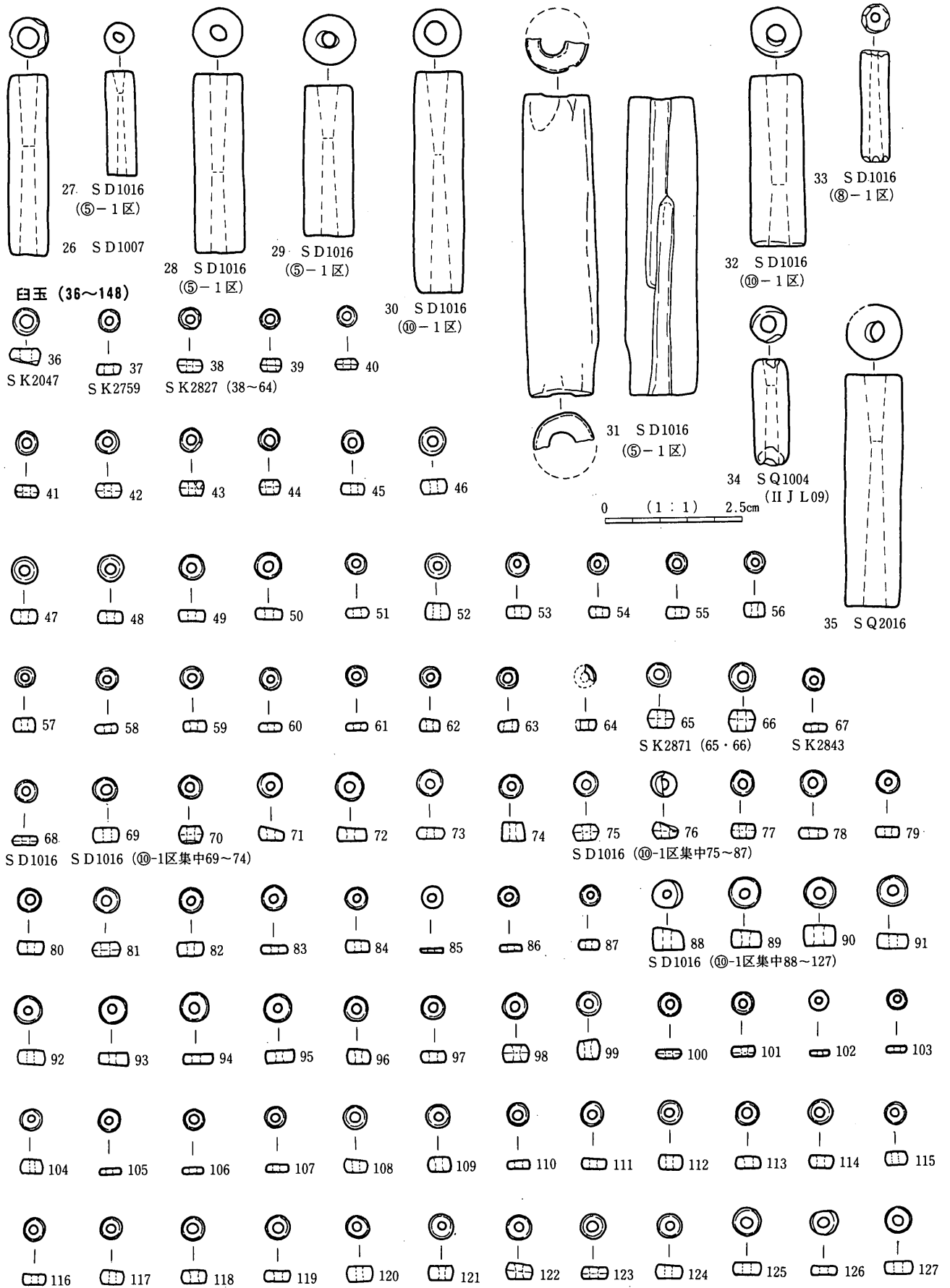
23 SK2759

24 SK2865

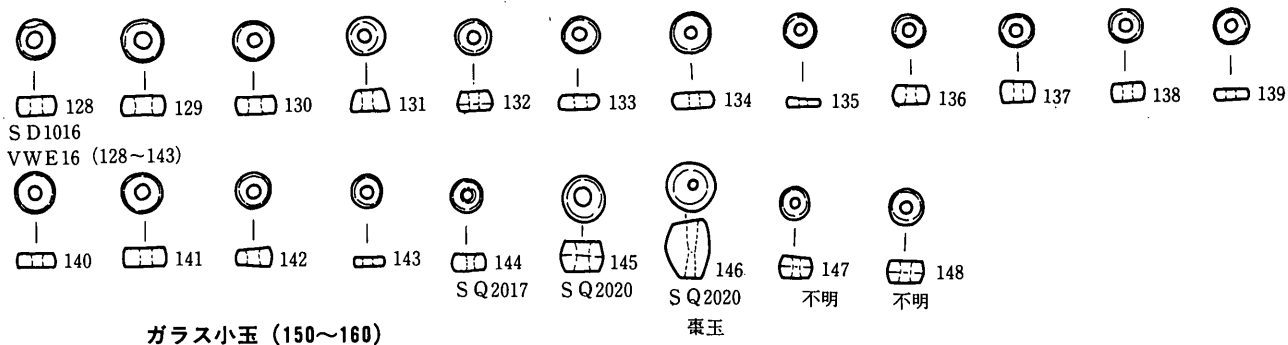
25 SK2828



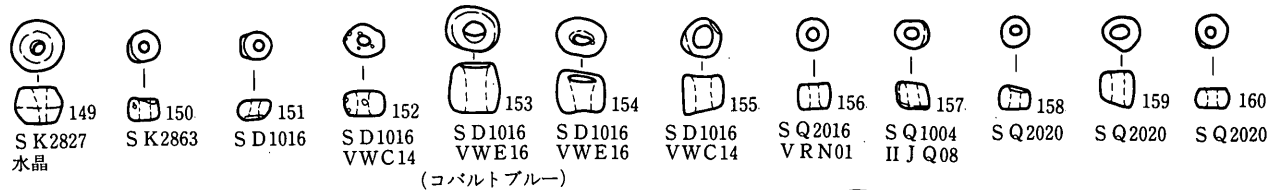
第419図 玉類 1



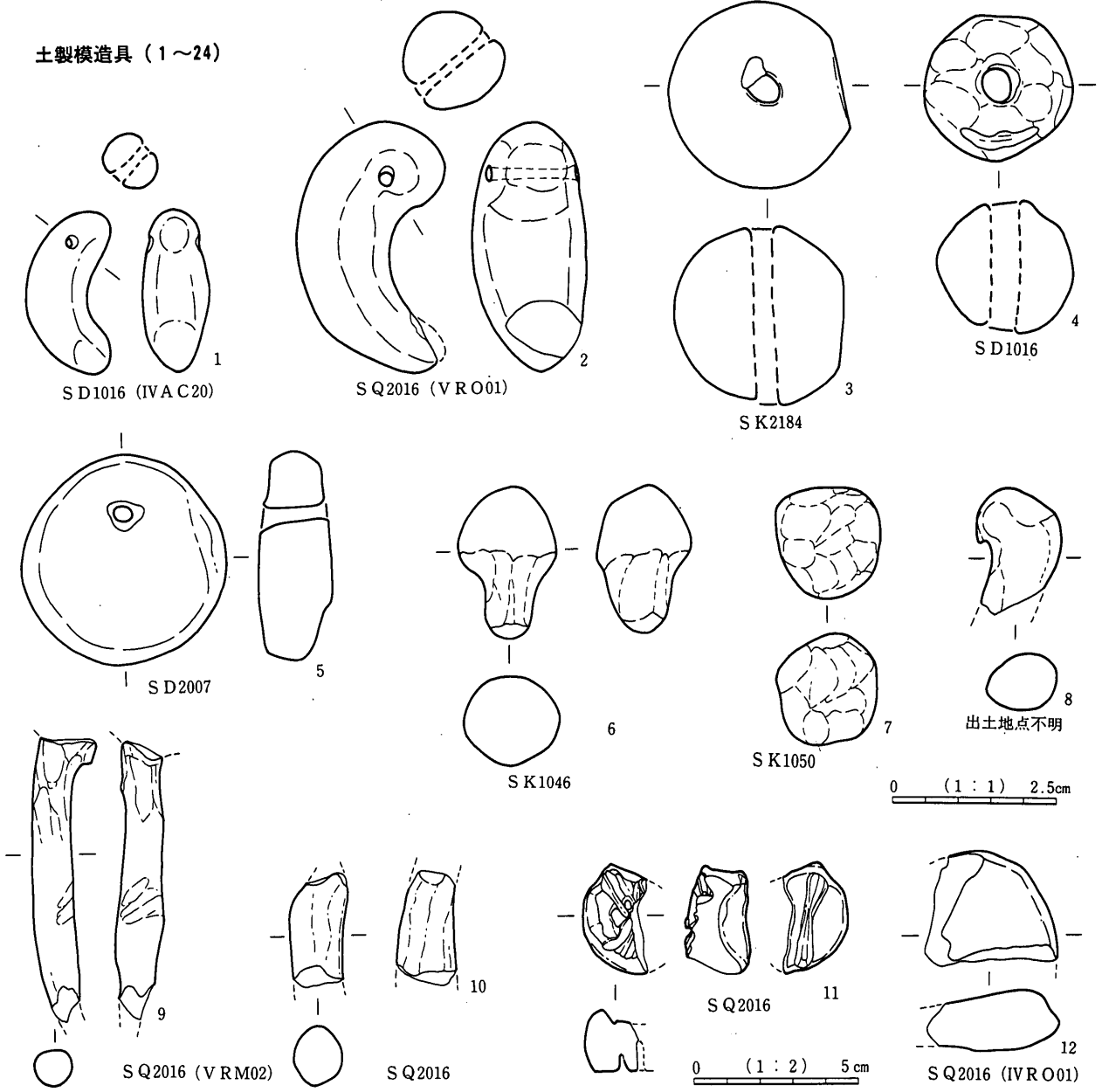
第420图 玉類 2



ガラス小玉 (150~160)



土製模造具 (1~24)



第421図 玉類3・土製模造具1